THE CENTRAL REVIEW

中央公論

2-1928

二月號

43

第四十三年 第二號 第四百八十一號



平俗なる形態　高邁なる精神

岩波講座

内容說明書進呈

宣言

時代の凡ゆる騒擾と喧囂との間にあつて、到る處に開かれ、絶えまなく高まりつつあるは、大なる民衆の學藝解放への叫びである。これ今や最も偉大なるものに對して自己を準備せんとする者の情熱と本能との表現である。我等は此情熱と本能とのうちに明かなる眞理を感ずる。蓋し眞理は職業的學究者のみのものでなく、却て一切の人間の素直なる心に屬する。我等は此確信の上に立つて、岩波講座の刊行を企て、その著手事業として「世界思潮」の計畫を茲に發表する。本講座は世界に於て歴史を創造し變革したが如き、又現在斯の如き任務を遂げつつある思想の潮流を與へることを目的とする。そは努めて平明なる敍述を旨とするも卑俗に陥らず、嚴正なる知識を目差すも學究に泥まず、高邁なる識見を求むるも高踏にはしらず、單に專門的學問の見地から興味を惹くものよりも、萬人を動かし得る生ける眞理を傳へんとする。岩波講座の此目的は可能である。なぜなら、眞理はそれ自身何人も理解し檢證し得べき性質を有する。そして筆者は、その學問に於て大觀し得るだけに深く、その見識に於て達觀し得るだけに高きが故である。徒に偏狹にして煩瑣なる從來の諸講座に拔んづる本講座の此特色のうちに、それが現代に對して有する比びなき意義は存する。此意義の爲に、その實力に於て眞に畏るべき學徒と共熱意に於て實に烈しき出版者とは、力強く結ばれた。岩波講座は岩波文庫と竝んで、一は他の準備となり、他は一の補助となり、進展してやむことなき現代文化の戦線に於て、最も重大なる歴史的使命を果すであらう。我等は本講座がかの岩波文庫の如く、萬人の熱誠なる歡迎を受け、友情ある協同を得ることを期待する。

第一次講座　世界思潮

會員募集

マルクス全集

附エンゲルス全集

彼の偉大なる全體系成る。見よ!! 此完璧せる巨姿を!!

全十七册　一册　特製 一圓　並製 八十錢
全拂　特製 十六圓五十錢　並製 十三圓五拾錢
（資本論豫約者にして本全集を繼續するものは資本論の拂込金を控除す。）

現存する人々は現代思想の根幹であり、全社會運動の基調をなすマルキシズムの眞理を全解する必要に迫られている。澎湃たる現下の經濟恐慌、勞資闘爭の底流に何が奥深く潜んでゐる？彼が說いた巨道は現段階に如何に偉大なる役割を遂げつゝあるか？本全集は本社が苦心慘憺して斯界の全權威に囑して彼の全體系を集大成せし萬古に輝く聖典で、雨後の筍の如く簇出する此種全集界に獨り高く、巨人の姿と光りとを放つ。加ふるに彼の畏友であり全生涯の協力者であつたエンゲルスの全勞作を加ふ。本全集の意義と社會に迫ぼす影響に就いては今更呶々の辯を絕つ。正確、流暢、本社は強き確信を持つ。　飜譯

豫約募集

〔收容書目〕**マルクスの部**、資本論。博士論文。猶佛年誌。ヘーゲル法律哲學批判。神聖家族。ドイッチエ・イデオロギー。哲學の貧困。共產黨宣言。賃勞働と資本。フランスに於ける階級鬪爭。ブルウメイル十八日。革命及反革命。ケルン共產黨事件の眞相。イギリス通信。支那印度論。露土戰爭。經濟學批判。フオクト氏。價値價格及利潤。ゴータ綱領。剩餘價値學說史。書簡集。外數十項。**エンゲルスの部**。イギリス勞働階級の狀態。共產主義原則。ドイツ農民戰爭。住居問題。反デユーリング論。家族・私有財產・國家の起原。フオイエルバツハ論。經濟學批判大綱。新ライン評論。書簡集。外十數項。

豫約略規

（體裁）四六判八ポイント五十六字二十三行。各册約五〇〇頁
（刊行）昭和三年四月より每月一册づゝ刊行、全十七册を以て完結す
（申込）申込金特製一圓並製八十錢（最後會費に充つ）
（會費）每月拂特製一圓並製八十錢
（送料）特製十四錢並製十二錢（東京市內六錢）
（〆切）昭和三年二月二十九日限り。

内容見本進呈

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

ムッソリーニ傳

澤田謙氏著

ムッソリニ曰く……「俺の親父は鍛冶屋だつた。その息子の俺は、これから伊太利國民の心を鍛直すんだ。」と、**何たる痛快の一語ぞ！**

貧乏鍛冶の息子から、遂にイタリーの獨裁王となつた彼の波瀾極まりなき經歴こそ……

眞に小説よりも奇しき物語である。或は小學教員から左官へ、或は浮浪兒として牢獄へ、或は社會鬪士として權勢と戰ひ、一度世界大戰起るや、勇敢なる一軍曹として塹壕の砂を浴み、後三十萬の黑シヤツ隊を率ゐて羅馬の都に討ち入り、靑春わづか三十九にして伊太利の國運を双肩に擔へるムツソリニの勇姿！

壯烈痛快！　英雄兒の大面目！

見よ、英傑の意氣！英雄兒の痛快味　來れ何人も急ぎ見よ！

四六判函入・口繪數葉
定價壹圓貳拾錢
—（送料拾錢）—

東京本郷駒込坂下町一
大日本雄辯會講談社
（振替東京三九〇三番）

血管の硬化！

早老及老衰の豫防に

獨逸オスナブルク臓器治療藥會社製

アニマザ

幼若動物の血管内膜及中膜の成分



早老及老衰の原因は血管の硬化にあり、身體の各部に榮養を配給する血管の疲廢は直に血液の巡行を不圓滑ならしめ種々の病的障害を誘起し、活動能力を阻止する結果として老衰を急ぎ短命に導く、而してアニマザが血管硬化に對し原因的効果を奏することは左記の批判によりて明かなり。

「**高血壓を伴ふ諸症**に對し**アニマザ**は最も推奬し得べく、生理的早老現象を防止し、既に動脈硬化存する場合には病狀を輕減し、自他覺的に迅速且つ顯著に良好となり血壓昂進し動脈硬化の初期には豫防的に用ゐて血壓を下降す」

シユタインバツハ氏

『**血管硬化の初期に**あるもの〻と深く進行せるものとを問はず**アニマザ**は最良の治療劑にして血液中に存する毒素に抵抗し、生活上の愉悦を恢復し老年期の健康生活を保證し或る場合には生命の延長をすら可能ならしむるが如し』

ミゲオド氏

「**原因的効力を有し**アニマザ内服の結果として先づ認めらる〻は活動力の恢復にして、他の藥劑又は食餌療法を以て無効なりし呼吸促迫、頭痛、眩暈、頂筋痛、强怖觀念頭部灼熱感、思考力缺乏、倦怠、性的無力等が次第に且つ顯著に輕快に赴くことなり』……………コツノ氏

三〇錠…………二圓四十錢
一〇〇錠…………六圓八十錢
粉末…二五瓦入注射液…六管入
各地著名藥店にあり

説明小册子送呈

總代理店 東京日本橋區本町
株式會社 田邊元三郎商店



春社　　小川芋錢筆

婦人

公論

二月號

- 映畫女優のマダム振り……丹野一青
- 同じ趣味から生れた結婚……佐野二郎
- （世界ニウス）婦人のおまはりさん……永井萬助
- （現代の音樂と音樂家）ヴァンサン・ダンテイの音樂……小松耕輔
- （經濟講座）外國貿易と國際貸借……石橋湛山

- 土に癒ゆる……德田秋聲
- 系圖……宇野千代
- 第七の天……牧逸馬
- 憂鬱な愛人……松岡譲

- （コドモページ）風船玉ノユメ……奥平群一
- 四歳で十四貫の怪童を訪ふ……一記者
- 子供に與へて喜ばれた玩具……二十三夫人
- 女學生間に流行する隱語
- 花占ひの頁……河井醉茗
- 女流音樂の夕……德岡公二
- 新家庭を持ちて……池谷信三郎　田中純
- 流行批判◇◇絞り銘仙の變化・結城の民衆化した銀座袖……婦人記者
- 斷髮風の束髮……早見・山野・牛山
- 襟を取去る簡單な化粧法……北原十三男
- ビーズの花瓶敷の作り方……安藤佐久子
- 家庭向の温い晩餐の獻立……中敷英之助
- おいしいお汁粉の作り方……森半次郎
- ムーヴィーセクション◇深夜の薔薇……ユ社 ◇明けゆく魂……フオックス ◇戀愛ごつこ……フオックス
- 小話—笑ふ話—編輯室から—
- 科學知識
- 原稿募集
- 表紙カット……村上公次郎
- 男が泣いた話……片岡鐵兵、小島政二郎　辻潤

定價七十錢 郵税二錢
中央公論社

河上肇著

社會問題研究

（第八十四冊發賣）定價二十錢 送料二錢

特輯

反動學派の陣營における窮餘の一戰術としての事實の虚構

——拙譯資本論に對する福田博士の非難について——

博識はつひに虚僞の惡しき飾りであつても眞理の良き標しではなかつた。筆端火を發して天下の博識として許される福田博士に肉迫する著者の眞摯なる態度を見よ。

岩波文庫版

□マルクス 資本論（第一卷 第一分冊 第二分冊） 河上肇 宮川實 譯 定價各分冊廿錢 送料各分冊二錢

□マルクス 賃勞働と資本 河上肇譯 定價金二十錢 送料二錢

東京神田 神保町 岩波書店 電話九段(33) 三一〇八番 三一〇九番 振替東京二六二四〇番

無産政黨の協調

——(卷頭言)——

歳が明けると共に、各無産政黨の陣營内に俄に協調共同の氣運の漂うて來たのはよろこばしい。讀者も知らるゝ如く、無産黨合同問題に對して本誌は從來餘り同情ある態度を示さなかつた。是れ合同共事を快とせざるに非ず、合同すべき眞の基礎が熟せずして輕々之に急ぐは却て他日の紛糾を大ならしむるに過ぎざるを怖れたからである。

蓋し一方に於て所謂理論鬪爭が不當に誇張され他方に在て指導者達の間に異常の感情阻隔が横つて居る以上、今日の無産政黨間に提携協調を可能ならしむべき情實は一つもないと謂はなければならぬ。故に偶々共同戰線の急を叫ぶものがあつても、人はその眞意如何を探るの遑なくして直に之を詐術欺瞞と排し去るの外はなかつた。

理論的確信に忠なる者は、一點一劃の差にも神經を尖らして斷乎異説の存在を許さうとしない。之を小兒病と譏るは譏る者の勝手にまかして、主義に忠なる者の態度としては是亦已むを得ないのである。然れども我國の實際に就て冷靜なる觀測を逞うするとき、理論を楯として彼此相排斥するに至れるは寧ろ其素因は感情の阻隔に存つのではなかつたか。然らざればその爭はモ少し公明正大であり得る筈だと考へる。要するに自分の考へる通りに考へぬ者は墮落だ裏切りものだと罵り合ふ間は、到底提携協動の端の開け樣がない。

理論鬪爭の尖鋭と個人的反感の熾烈と、この二つは慥に無産政黨の當然なる發達を礙ぐる二大原因であつた。而して我徒は二者の中寧ろ後者を以て根本的なものと爲すの實際的見地を取て居たが故に、いつか其點に反省するの時が來らば必ずや主義の鬪爭にも自ら寛容の精神の湧き來るべきを希望して居つた。今や則ち無産諸政黨間に漸く協調の機運が動き始めたと云ふ。是れ豈喜ぶべき形勢の前徴ではなからうか。

無産諸政黨が何に動されて急に其態度を新にしたか。之に對する答解は今後の彼等の行動が最も雄辯に物語るであらう。目前の些末な利益に動いたのでないとすれば、提携は一時の妥協に終ることはあるまい。よし夫れだとしても心掛けの仕樣に依ては、訓練の一機會として價値は尠少でない。爭ふべきは飽くまで之を爭て可、而も猶そこに寛容の精神が活躍するとせば、それは確に理論以上の一段と高い境地に共通の誠實を認め合つた結果でなくてはならぬ。之を意識するとせざるとは問題でない。只斯うした結果としてのみ始めて理解さるべき提携協調の曙光がひらめき始めたとすれば、夫れこそ眞に無産階級の政治的躍進の上に多大の勢援を與ふるものに非ずして何ぞ。之を祝福せずして可ならんやである。

無産階級の人々よ。誠意の裡に喜び勇んで温き握手を交換せよ。之で始めて既成政黨の築いて居る古い政治社會の大伽藍も搖がすことが出來るのだ。

中央公論



科學と政治

（京都帝國大學學友會主催の講演會に於ける講演の趣旨による）

第四十三年第二號
二月號
四百八十一號

大山郁夫

一

學生諸君！

私は今、多數玆に來會された諸君に向つて、『科學と政治』の題下に、私の所見の一端を諸君の批判の前におく機會を得たことを欣ぶ。私が學界を去つてから久々で、再び學生諸君を聽衆に持つことが出來たのは、少くとも私に無限の懷かし

みを感ぜしめる。

學生諸君！　諸君のすべてが既に充分に知つて居られるであらう通りに、私の早稲田大學の一教授としての生活の最後の數個年は、――特にかの所謂軍事研究團事件と司法官憲の研究蹂躪事件とが前後相接續して起つた大正十二年の初夏以來の數個年は、――社會科學の研究の自由のための戰ひを以て一貫された。そして私は、その戰ひを通じて、全國幾千の――もしくは幾萬の――學生たちと接觸を保ち、多くの場合に於て行動を共にした。で、それら幾千もしくは幾萬の學生たちは、私に直接の面識のあるものも、ないものも、皆一樣に戰友としての親しみを以て、私の胸のうちに或る重要なる場席を占めてゐるのである。にも拘はらず、私が早稲田を去り勞働農民黨に專屬するやうになつてからは、特に學生大衆から成る聽衆に呼びかける愉快は、殆んど私から失はれて行くやうになつた。もとより私は、一勞働農民黨員として私自身の全行動を律してゐる今日でも、いかなる瞬間にも學生たちの社會科學の研究の自由に對する關心を喪失したことがないどころでなく、益々熱烈にそのための戰意を固めてゐる。諸君は知つてゐる、私が屬してゐる勞働農民黨が、その當面の中心的鬪爭目標としてゐる政治的自由獲得への不斷の努力の上に於て、いかに研究の自由の確立の問題を重要視してゐるかを。そして、勞働農民黨のこの態度は、當然その一黨員としての私の態度を規定する。しかも、私の場合にあつては、それが或る特別の意味を以て鋭く私に迫つて來るやうに感じられるのは、或ひは私の思ひすごしからでもあらうか？

それはとにかく、實際私は、最近幾箇月にも亘つて學生大衆の前に立つことを妨げられて來た。そしてこの一事は、私に始終或る空虛感を與へたものであつた。それ故に、本大學の學友會の幹事諸君から、河上博士を通じて、今日の會合に來て一場の講演をするやうに相談をもちかけられたとき、私は、この頃の私の身邊の多忙の故を以てそれを拒む氣にはなれなかつた。それは私には、さほども強い誘惑であつたのだ。しかも私は、それに釣りこまれて、萬障を排してこの演壇の上に辿りついたことを、毫も悔いないものである。否、衷心からそれを喜んでさへゐるものである。

諸君！　私はここに諸君の前に現はれるに先だつて、この會の主催者及び學校の當事者から、私の講演を名實共に『學術講演』たらしめるやうにせよとの注意を受けて、聊か面食つたことを告白する。『學術講演』といふ言葉は、その意味が曖昧であつたり、少くともその限界が不明確であつたりするとの故に、屢々問題を惹き起したり、或ひは各方面から樣々に利用されたり、時としては惡用されたりしてゐる、といふやうな、比較的よく知られてゐる事實については、私は玆で何もいふまい。だが、初めから學術講演をする積りでやつて來た私が、態々さうした注意を受けねばならなかつたことは、私に一種異樣の感じを起させないではなかつた。それは或ひは、私が今では學界を離れた一政黨員であるからかも知れない。いかにも、普通に政黨員がする政談演説なるものは、非學術的だといふのが通り相場になつてゐることは事實だ。だが、さういふことは、少くとも私の知つてゐる範圍内では、自分たちの背後の金力とか權力を恃んでゐるところの、たとへば既成ブルジョア諸政黨關係の人々について、最も適切に言ひ得られることである。彼等は概ね、彼等が民衆に呼びかけるときには、何よりも先づ、民衆を欺瞞することを努める。それは如何なる問題についてもさうだが、殊に私は、彼等が無産政黨の問題について語るときに、それが最も露骨に表面に現はれることを知つてゐる。しかも彼等が、さういふことをしないで居られないのは、一つには彼等の地位なり勢力なりが、今日では最早民衆を欺瞞することなくしては維持できなくなつたためでもあらうが、しかしまた一つには、彼等がいつまでも民衆の政治意識の成長を正當に評價することが出來ないでゐることからも來たものであらねばならぬ。

　ところが、背後から我々を支持する金力や權力やは絕對になく、よしあつてもそれらに依賴することを肯んじないどころか、それらに向つて正面から敢然抗爭してゐる我々にとつては、恃むところは唯、我々の行動の最後の審判者である民衆の政治意識の成長のみである。しかも民衆の政治意識の促進は、彼等に虛僞を語ることによつて成し遂げ得られるものでなく、たゞ彼等に眞實を語ることによつてのみ期待し得られるものである。『眞實であるもののみが教育的であり得

る』といふのが、我々の動かすべからざる確信であるのだ。ところで、我々が民衆に眞實を語らうとする場合には、我々は學術の——特に社會科學の——立場を守らない譯にはゆかない。學術こそ眞理への鍵だ。でない學術は、その名に値ひしないものだといはねばならぬ。我々は、だから、日常の政談演說をする場合にも、出來るだけ學術的態度から離れることのないやうに努力する。そればかりではない。我々は我々の全運動に於ける行動をも、學術的認識の上に基礎づけることを心掛ける。と同時に、我々の行動はまた、學術的認識を進める結果を產みもする。我々にとつては、鬪爭の理論なくては鬪爭の實踐があり得ないし、またその逆も眞だ。理論と實踐とは、かくして、我々の全運動に於て、相聯關し歸一するのである。

約めていへば、我々の場合にあつては、政談演說と學術講演との間には、さほど際立つた限界がないのだ。だが、もし强ひてその間に或る差異を求めるならば、それは大體技術上の點に於てのみ認められるとでもいはうか。とにかく私は、私に要求された『學術講演』といふ言葉の意味に關しても、さうした解釋を取つて進まうと思ふ。だから私は、私が今日この席上での演題として撰んだ『科學と政治』について論ずる場合にも、私自身の實踐を、——少くとも早稻田の一學徒として社會科學研究の自由のために戰つた經驗、並に勞働農民黨の一黨員として政治的自由獲得のために戰つた經驗を、——私の議論の出發點とも歸着點ともして、立言する自由を豫め要請しておきたい。けだし、實踐こそ客觀的眞理の最後のテストである。この點に關して私は、次のマルクスの意味深き言葉こそ、我々が充分に味讀していゝものだと思ふ。

『人間の思惟に客觀的眞理が到達するか否かの問題は、決して理論の問題ではなくて、一の實踐上の問題だ。實踐に於て人間は眞理を、すなはち彼れの思惟の現實性と力とを、その現世性を、證明しなければならぬ。實踐からそれ自體を分離する一の思惟の現實性もしくは非現實性に關する論爭は、一の純然たる思辨派的問題である。』（『フォイエルバッハに關するデーゼ』から）

だが、私がこの演壇の上に立つ前に、特に『名實ともに學術講演をするやうに』と要求されたのは、たゞ單に私が一政黨員であるためだらうか？　私が聞いたところでは、從來、既成諸政黨の人々や、その他の實際運動家たちが、同じく學友會に招聘されて、この演壇に立つたことが屢々あつたやうである。ところで彼等のすべては、その都度、學校當局から『學術的に發言するやうに』との注意を受けたであらうか？　それに關して私が得てゐる印象は、むしろその反對である。だとすると、私の場合に限つて特にさういふ注意が與へられたのは、たゞ單に私が一政黨員であるといふ理由だけからではなく、私が世間的に無產諸政黨中の最左翼にあるものと認定されてゐる勞働農民黨の一黨員であるといふ理由からではなかつたらうか？　私がさうだと推定しても、諸君は恐らく、そのために私の妄斷を責めないであらう。それにすると、私は層一層、今日こゝで諸君の批判の前に立つて私の所見を少しでも述べる機會を與へられたことを感謝する氣持に誘ひこまれるものである。

いづれにしても、私は私に持ち込まれた要求に從つて、あくまで學術的態度に即して、私の論述を進めて行くであらう。といふのは無論、私が私の講演の內容項目を型通りの講義風に整理して押し出さうとしてゐるといふことを意味するのではない。さういふ行き方には、今の私は緣なき衆生の一人である。ではなくても、さういふことは、『講壇的叡知』を以て學生たちを眩惑せしめるために多額の俸給を國庫から受けて充分の推敲の餘暇を保證されてゐる偉大なる（！）プロフェッサーたちのみに許された特權である。私たちのやうに、實際の政治戰線の中から一寸の間を見て駈拔けて來て諸君に呼びかけ、それがすむとまた直ぐ元の場面に引返して行かなければならないやうな地位におかれてゐるものには、自ら別個の行き方がある。で、私は今、理論と實踐の聯關統一を主張する私たちの立場から理解される意味に於ける學術講演を試みようとしてゐるのだ。もとより、私のこの意圖がよく實現されるであらうか否かは、私自身の口から言へることではない。私は寧ろ、後にそれを諸君の批判によつて知らうとしてゐるものである。

二

『科學と政治』。——それは我々にとつては、當面の一の活ける問題だ。

かういへば、諸君はおそらく、私が科學と政治との衝突について語らうとしてゐることを、敏速に豫感されるであらう。さうだ！　それは明かに、私の意圖の中にある。無論私は、私の論點を、唯その問題だけに限らうとしてゐるものではない。私は科學と政治との交渉に關しては、それ以外の多くの諸點にも觸れるであらう。だが私は『科學』と『政治』といふ二つの言葉を對關的にならべると、私の思惟は、何よりもまづ第一に、兩者の間の衝突に突き當る。それは疑ひもなく、前に一言した通りの、私自身の最近數個年間に於ける生活經驗から來たものでなければならぬ。現に私がこの演壇に現はれる前に、學校當局から『名實ともに學術講演をするやうに』といふ注意を受けた瞬間にも、そのことが電光の如くに、私の頭を掠めて過ぎた。

諸君もまた、諸君の學窗生活に於て、科學が全然政治の影響の外におかれてゐるものでないことを、充分に知つてゐられる筈である。殊に諸君が最大の關心を寄せてゐられる社會科學が、今日いかに帝國主義政治家たちによつて、嚴重なる監視の眼の下に——否、容赦なき壓迫の手の下にさへも——おかれてゐるかは、餘り遠からぬ過去に於て諸君の間から捲き起された所謂京大學生事件を通して、諸君自身の眼で餘りにもまざまざと見て來られたことであり、諸君自身の心の上に餘りにも痛ましき記憶となつて殘つてゐることであらねばならぬ。

この問題に關しては、私は少し後に、より多く言及するであらう。だが、今若し我々が單純に科學といふよりも幾分か範圍を擴大して、學術思想を主題に取つていふならば、それと政治との衝突を示す實例は、一層無限に增大するであらう。實際、古來の東西の筆禍舌禍の歷史に觸れはじめると、我々は際限もなき長物語に入り込まなければならないことになる

であらう。それはしかし、私が茲で試み得る限りのことではない。けれども、我々の生々しき記憶の完全に到達する最近の僅々十個年ばかりのことだけを回想してみても、所謂森戸事件とか野村事件とかいつたものに類似する事件は、可なり少からざる數に上り、更らにもつと最近の五個年の間には、諸學校に於ける學生の社會科學研究團體に對する當局の干渉が時と共に益々露骨になり、益々高壓的になつて行つたやうなこともあつて、遂に諸君の面前に一場の波瀾をまき起した京大學生事件を迫出した時に至つて、その絶頂に登りつめたかの觀を呈したのである。實際、私たちのやうに、この期間に亘つて引續き評論の筆陣を張つてゐたものは、寺内内閣以來、この分野に於て、絶えず政府への抗爭に終始して來たものである。

我々の時代に於て、學術思想が直接に最も多く爲政者の忌諱に觸れる場合を持つのは、主として社會科學の領分に交渉のあるものだけのやうに見える。だが我々は、一たび學術發達の永き歴史を顧みるとき、自然科學の方面に於てもまた、眞理と權力との鬪爭が、過去の幾世紀にも亘つて執拗に繰り返されて來た經路を跡づけることが出來るのである。かの一般に比較的に廣く知られてゐるホワイトやドレーパーやの科學と宗教との衝突の歴史に關する著作によつても、我々は、自然科學が今日見せてゐるだけの發達を遂げるためには、それが如何に多くの貴き犠牲者の血によつて培養されなければならなかつたかを知ることが出來るのである。

我々が今日の日本に於て、社會科學の學徒が堪へがたき彈壓にさらされてゐて、時として苛酷なる刑罰の笞を加へられさへする運命の下におかれてゐるのを見るとき、我々は不可抗的に、中世紀の西洋に於て、ローマ法皇の教權の下に、幾多の自然科學の先覺者たちが、到底筆舌につくせないやうな慘虐を加へられてゐた事蹟を思ひ浮べないで居られない。中世紀を通じて、歴代のローマ法皇たちは概ね皆、愛と寛容を説いたキリスト教の名に於て、單に異教徒に對してのみならず、同じキリスト教界の内部に於ける新説の主唱者らに對してもまた、屢々顔向けのならないやうな極刑を課したこと

は、學術史上周知の事實である。

何故に、かうしたことがなされたか？　いふまでもなく、ローマ法皇の教權は、それ自身の肯定の基礎をバイブルの權威の上に求めてゐたのだ。それ故に、そのバイブルの權威を幾分でも疑はしめるやうな新說が打ち樹てられた時には、その主唱者は直に、異端邪說を以て世人を惑はすものとの判決の下に、或ひは異端邪說者として、或ひは巫術者もしくは魔術者として、或ひは惡魔の共謀者として、等々の烙印をつけられ、屢々身の毛の竦つやうな嚴刑を以て罰せられたものである。かうした原因が手傳つて、中世紀の――特に第五世紀ごろから第十二三世紀へかけてのヨーロッパは、學術史上、一の長期の暗黑時代を現出したのであつた。

この時代の一般學術の退歩狀態に關して、『科學と人生』の著者カーティスは、次の通りの說明を與へてゐる。（さして有名でもない書物を引用することになるが、當該部分が內容的に大した誤謬を含んでゐない限りは、それは多忙な實際運動にかゝはつてゐる我々には、特に許されるべきものだと思ふ。少くとも、私はさう希望する。）――彼はまづ、初期のキリスト教時代の科學的精神の衰頽が、必ずしも神學者たちの禁遏に基づいてゐたのでなくて、寧ろ地中海諸地方民の心的態度の一變、および北方から西方へかけての野蠻諸地方民の知識のおくれてゐたことに基づいてゐたものであることを敍述して後に、一轉してかういつてゐる。――

『時代の經過につれて、聖書は人間への神の直接の言葉であり、すべての點に於て文字通りに眞であるものとして解釋されるべきものであるといふドクマが、「バブイルの記述に悖るものはすべて罪惡であるといふ教理に導き、更らに、かゝる誤謬の傳播は刑罰に附せられるべきものであるといふ教理に導いた。「如何なるものも聖書の權威に基づいての外は承認されるべきでない。けだし、その權威は、人間の心意の凡べての力よりも、より偉大なものだからだ」と言つたセント・オーガスタスの、かの有名な言葉は、「信仰の基礎とされるに至つた。かくて、かうした盲信の雰圍氣內に於て、無

知が支配したのは、決して異しむに足りないのだ。神の意志こそ凡べての因果關係の本源だといふ觀念が、神慮の現はれ方は人間には不可測だといふ教理によつて涵養され、他方に於て、何時でもそして何處にも、神學的解釋のために好都合な風に諸事實を編み込む一の傾向があつた。要するに、自然といふ書物でなく、聖書が、諸々の自然現象を理解するための權威となつたと同時に、超自然的諸現象の壓倒的重要性が、當然のことゝして受け容られてゐた。』(Curtis Winterton C., *Science and Human Affairs*, New York, 1922, p.47.)

かうした記述によつても、我々は、ローマ法皇の治下に於て、如何なる種類のイデオロギーがその絶對主義的教權の肯定の具として用ひられてゐたかを知ることが出來る。それは根本に於て神學的世界觀の上に打ち建られたところの、そして現代人の理知の到底認容することの出來ないところのイデオロギーである。さうした教理の下に、當時漸く發達の曙光を見はじめた自然科學の分野に於ける幾多の偉大なる開拓者たちが、研究發表の自由を奪はれ、屢々生命をさへ斷たなければならなかつたことを考へると、我々は殆んど發作的に、『何といふ無謀な經濟だ!』と叫ばざるを得ないやうに感じる。しかも我々は不幸にも、現代に棲息しつゝも尚ほ、それを別世界のことゝして現識することは出來ないのである。いかにも今日では、自然科學こそは、その頃とはまるで比較にならない程度に進歩した狀態に達してゐる。そして自然科學者は最早、中世紀的慘虐を以て罰せられる虞れを持たくなつて來てゐることは、明白な事實である。だが、現代に於ても、その究極の本質に於てブルジョアジーの支配の肯定の具に外ならない各種各樣のイデオロギーが、單に社會的諸現象の科學的認識を妨げるためにだけでなく、その方面に於け眞理の熱愛者たちを容赦なく追跡するためにも、支配階級によつて如何に無制限に用ひられてゐるかは、我々が諸君と共に、日夕眼前に見てゐることである。それらのイデオロギーは、屢々科學的外觀を以て裝はれ、『社會科學』の名の下に、大學の講壇から諸君の耳に吹き込まれてさへゐる。だが、さうしたイデオロギーは、その根を洗つて見れば、依然として神學的ドクマの轉形したものにすぎない唯心論的觀念論的立

場の上から、『世界を様々に解釋』してゐるものにすぎないのだ。ヨセフ・ディーツゲンが、近代の大學の教授連を『僧侶團の官許の從僕ども』(diplomierte Lakaien des Pfaffentums)と罵倒してゐるのも、一般論として見れば、うまく的にあたつてゐる。無論それには、多少の例外はある。今諸君の面前に座席を占めて居られる河上博士——最近廣い意味での同僚である土方博士や福田博士やの或る所論のうちに忍ばせられてある詭計を完膚なきまでに痛快に暴露された（『社會問題研究』第八十四冊所載『反動學派の陣營内に於る窮餘の一戰術としての事實の虚構』の一文参照）河上博士——の如きは、さうした例外中の最も顯著なものとして見られるべきものだと言つても、おそらくそのために累を博士に及ぼすやうな虞れはないであらう。

時としては、現代ブルジョアジーの支配の肯定の具となつてゐる各種のイデオロギーの中にも、皮相的に一見すれば、必ずしも唯心論的立場の上におかれてゐるものではないやうに見えるものもある。また時としては、その主張者が必ずしも意識的に、唯心論的立場からブルジョアジーに迎合してゐるものとは見えないやうな場合もある。だが、さういふことによつても、根本の理路は少しも渝らないのだ。エンゲルスがいつたやうに、すべての哲學もしくはすべての世界觀は、その外觀の色や形の如何に拘らず、究極に於て唯心論と唯物論との二大陣營に分かたれる。そして、近代科學的精神によつて養はれた現代人の頭腦によつて當然視されても居り、また我々の實踐——我々の生活——によつて疑はれてもゐない辯證法的唯物論の基礎の上に打ち建てられた社會科學の否定のために用ひられ得る觀念形態に屬するところの一切の社會理論は、みな結局は唯心論の範疇に組み入れられることが出來るのである。この點に於て我々は、レニンの名著の一つである『唯物論と經驗批判論』によつて啓發されるところが甚だ多い。それは、唯心論および唯物論を超越した經驗批判的立場に立つものと自稱し、縱横無盡に近代科學の最後の斷案（Letztes Wort）を取り入れることをさへもしてゐるマッハおよびその學徒の哲學を明快的確に解剖批判し、それが畢竟變裝せる唯心論に外ならざることを誤りなく指摘してゐる

ものであるが、我々は階級的諸イデオロギーの間の闘爭の漸く盛になりかけた今日の日本に於て、特にこの書物から學びとるべき多くのものを持つのである。

三

クロポトキンはその未完成の遺著『倫理學』の中で、かう述べてゐる。――

『……何の程度まで教會が倫理學、及び凡ゆる自然科學の自由なる發達に干渉したかを十分に理解するには、第十九世紀までに至る宗教裁判所の規則を一瞥すれば十分である。スペインでは、それは、三百二十年の間に三十四萬人の人間をその審判に、また殆ど必ずその拷問に附した後、一八〇八年に軍隊によつて破壞されたが、それらの人々のうち三萬二千人は「その身體」を、一萬七千六百五十九人は「その人像」を焚刑に處せられ、二十九萬一千四百五十人は種々なる拷問にかけられた。フランスでは、宗教裁判所は一七七二年に廢止された。その權力は極めて偉大で、ビュッフォンのやうな穩健な著者にまで、彼が地球の動物棲息に關するその名高い記錄を收めた第一卷に書いた地質層の古代狀態に關する地質學的結論を公けに否定させたほどであつた。イタリーでは、宗教裁判所は第十八世紀末葉に地方的に廢止されたが、間もなく中央イタリーに再設されて、第十九世紀中葉に至るまで存してゐた。ローマ教の行はれてゐるローマでは、その名殘は秘密法廳の形態で今日尙ほ存在してゐるが、スペイン、ベルジューム、およびドイツ等のジエスイツト教徒の或集團は、今日も尙ほその再設を主張してゐる。』（同書が手許にないので、內山賢次譯『倫理學・その起源と發達』アルス發行、二〇四――二〇五ページ註によつた）。

かくの如く、中世紀のローマ法皇廳に於て開始された宗教裁判制度は、殆んど西ヨーロッパ全土に採用されて、比較的近代に至るまで執拗に維持され、意想外に多數の犧牲者を出したのである。さうしたことに依つても、我々は、自然科學

といへども、その發達の或る時期に於ては、牢獄と流血との暗澹たる挿話に事を缺かなかつたことを知ることができるのだ。今日の日本に於て、社會科學の學徒が戰ひなくしては自己の學術的良心を滿足させることすら出來ないやうな狀態におかれてゐることは、決してその前例が過去に求められないものではない。たゞ今日では、その受難の場面が、自然科學の分野から社會科學の分野へ移されてゐるのが違ふだけだが、しかもそのいづれもが、根本に於て科學と政治との衝突を反映してゐるものに外ならない點に於ては一つだといへるのである。

かつてローマ法皇廳の敎權の下に絕對專制政治の血祭りとされた幾多の犧牲者の群れのうちに、近代自然科學の歷史の上に不滅の光を放つ數々の巨星の名が見られたことは、我々の記憶から拭ひ去ることが出來ない事實である。近代天文學の始祖と仰がれるコペルニクースは、生前その業績を公にすることが出來ず、或る友人の懇切なる勸請によつて書かれた著作は、やつと彼が死の床に息を引き取らうとした間際に出來上がつてきたと傳へられてゐる。また彼れの所說を繼承して地動說を展開せしめたガリレオは、二度目に彼れの學說を取り消さしめようとした法皇の命令に從ふことを肯じなかつたがために、その衰弱し切つた老軀を陰慘なる牢獄の鐵鎖に任かせねばならなかつた。ドレーパーは、その間の經緯を、次の言葉を以て敍述してゐる。

『……一六三二年にガリレオは、コペルニクース說の證明を目的とする「世界の體系」と題した彼れの著書の刊行を敢てした。彼は地球が太陽のぐるりを廻ぐると唱道したとの罪名の下に、再びローマに於ける宗敎裁判廷に呼び出された。彼は異端の刑に該當するとの宣告を受けた。彼は、跪いたまゝバイブルの上に手を載せて地動說を呪ひすてることを强ひられた。何といふ光景だ！　その時代に於て最も輝けるこの老翁が、死の脅威の下に、彼れの審判官が彼れと共にその眞なることを知つてゐる諸事實を否定せよと迫られてゐようとは！　やがて彼は牢獄に送られて、彼れの生活の殘りの十年間を通じて、假借なき嚴罰を以て遇せられ、死後その遺骸を淨められた地域に埋葬されることを拒まれた。

Draper, John William, *History of Conflicts between Religion and Science*, London, 1923, pp.172-3.）

更らにまた、天文學上同じくコペルニクースの學說を祖述した哲學者ブルーノーの最後は、それにもまして悲慘でもあり、壯烈でもあつた。彼れもまた彼れの學說のために、流浪先きのロンドンにまで追跡され、彼れが辯明のため自ら法身廳に赴いたところを、捕へられて、宗教裁判に附せられた。同じドレーパーの叙述に從へば、——

『二個年の監禁の後、彼れ「ブルーノー」は彼れの審判官たちの前に引き立てられ、彼れに向つて言ひ立てられた諸々の行動のために有罪と宣告され、破門され、そして彼れが氣高くも變說の命令を拒んだとき、彼れは「出來るだけ無慈悲に、しかも血を流すことなく」罰せられるために、俗界政務官に引き渡された。それは囚人を柱に縛して焚殺することを意味するところの、聞くも恐ろしい公式である。彼れは、彼れへの拷問は縱し彼れの身を破壞するとも、彼れの思想は尙ほ後世に生きるであらうことを知つて、彼れの審判官たちに向つて、「多分宣告を受ける自分よりは、宣告を發する諸君の方が、より大なる恐れを懷いてゐるであらう」と言つた。宣告は執行され、彼れは一六〇〇年二月十六日といふに、ローマで焚殺された。』（前掲書一八〇ページ。）

尙ほドレーパーは、審判廷での光景について、より多くの言葉を費してゐるが、その中で次のやうなことをも述べてゐる。——

『彼れ「ブルーノー」は唯、彼れが人間の住む世界以外にも幾つもの世界があることを說いたがために、異端の強き嫌疑を掛けられてゐることを告げられた。彼れは、彼れの謬說を取り消し呪ひすてるであらうかを訊かれた。彼れは自ら眞であることを知つてゐることを否定することができなかつたし、またさうすることを欲しなかつた。そしておそらく——彼れがそれより以前に屢々慣行した通りに——彼れの審判官たちに向つて、彼等審判官たちもまた心の中では彼れと同じことを信じてゐるのだと言ひ放つたであらう。……』（同上一八一ページ。）

私が玆でそれらの引用を試みたのは、それが我々に與へる歷史的興味のためであるよりは、寧ろ或る別個の目的のためである。諸君！ 今日の日本に於て社會科學の學徒が支配階級によつて手痛く彈壓されてゐるのは、その社會科學が供給する知識が誤謬に充ちてゐるためであらうか？ 京大學生事件を裁いた裁判官たちが、果して被告學生たちの學問上の見解を十分に理解することが出來たか否かは別問題だが、とにかくそれらの裁判官たちの一人が、被告學生たちの頭腦のすぐれてゐることを保證したやうなことを言つたことは、當時の新聞紙によつて傳へられた事實ではないか！ しかし、それについては、玆ではこれ以上言はないことにしても、今日支配階級が一般の學生たちの社會科學の研究を極力抑壓してゐるのは、その社會科學の誤謬のためであるよりは、寧ろその正しさのためではないか？ 若しくはそれは少くとも、それが支配階級所屬の學者たち——ディーツゲンの所謂『僧侶團の官許の從僕ども』——が學生たちに與へ得る社會理論よりも優れたものであることを、支配階級が意識しだしたためではないか？ 私は私の長き評論生活の經驗から知つてゐる、かつて幾年か前には、ブルジョア代議士たちの中にさへも、屢々『思想は思想を以て戰ひ、學術は學術を以て戰へ』と、主張してゐたものが可なり多くあつたことを。ところが、支配階級所屬の學者たちが學生たちに與へる社會理論が、學生たちが自發的に研究する社會科學の敵でないことが餘りにも充分に證明されて來た今日に於ては、彼等は學術の研究および發表の自由に對する權力の理不盡なる行使に對しても、最早石の如き沈默を守つて、毫も抗議の聲を擧げないやうになつて來た。かういふ點から考へて、今日我々の社會科學が當局から猛烈なる壓迫の手を向けられてゐるのは、やがて來るべきそれの勝利への必然の進程だといへないであらうか？ 自然科學は權力との永き鬪爭の後に、今や赫々たる勝利者となつて現はれて來てゐる。それと同じ運命が我々の社會科學の上に臨む日が永久に到來しないであらうとは、誰れが確信を以て言ひ得るか？

四

だが諸君！　若し我々が科學と政治との交渉を、より徹底的に考察しやうと欲するならば、我々は我々の視野を、たゞ兩者の衝突の場合だけに限つてはならない。それだけでは、我々の用意がまだ不充分だといはなければならぬ。我々は尙ほその上に、兩者の相互依存もしくは相互聯關の場合をも、相當程度に注視しなければならぬ。

ローマ法典の敎權とキリスト敎の神學的ドグマとの交渉については、少くともその全豹の一斑に當るほどのことは、既に述べたところによつて、充分に示唆されてゐると思ふ。同樣に、何れの時代に於ても、また何れの場處に於ても、或る一定の政治的支配形態の存してゐるところには、必ずそれに對應した社會的、政治的、道德的等々のイデオロギーが、その政治的支配形態と相互的に因となり果となつて發生し、相互的に支持し扶助しあひつつ、並行的に存立し流布するのが見られるのである。しかもかういふ諸現象は、究極に於てその政治的支配形態の最も根本的な基礎となるところの物質生活の生産上の諸關係に聯關して、唯物史觀の問題として取扱はれるべきもので、玆でそれに關はり合つてゐては、餘りにも岐路に入り込みすぎることになる虞れがないでもないから、今はそれの詳論をさし控へることにする。

だが、さうしたイデオロギーの最も體系づけられた表象としての科學と、ある一定の政治的支配形態に屬する政治機關の運用――特に政治技術――との關係について、玆に短い說明をなりと附け加へておくことは、少くとも全然意義のないことではないであらう。

いかなる時代に於ても、或る一定の政治的支配形態が行はれてゐるところでは、必ずそれに對應した政治技術があり更らにまた、その政治技術に關する各種の知識及び理論の集積があつて、そしてそれらは、或ひは口傳へにより、或ひは文書によつて、世代から世代へと繼承されて行く。

さうした政治技術上の知識もしくは理論は、或る場合には極めて原始的な粗雜な形態を示してゐるにすぎない場合もあれば、また或る場合には高度に發達した體系に集大成されてゐる場合もあるが、最も多くの場合に於ては、それらの兩極

端の間のそれぞれの地位を占めつゝ、發達の過程の上に於て把握されるのを事とする。

我々が政治思想の發達の歴史を検討するとき、我々は既に相當にかけ離れた古代に於てさへ、たとへば昔のギリシアに於けるアリストテレスの政治學の如き、その種の理論の、非常に高い水準に達してゐたものゝあつたのを見るのである。また、近世紀初頭のイタリーが産んだ一奇才であつたマキアヴェリの『君主論』の如きも、同じ分野に於ける最も著名なるものゝ一つであつて、屡々『帝王學』といつたやうな名で知られてゐる種類の凡ゆる文獻の中に於て、おそらく最高位を占めてゐるものとして許されるべきものであるであらう。トライチュケの如きは、アリストテレスとマキアヴェリとの二人を近代政治學の鼻祖として讃へてゐる。

近代國家――特に第十九世紀からの――の下に於ては、政治技術上の知識もしくは理論は益々秩序的に體系づけられ、いはゆる『學』としての體面を益々完全に具へるやうになり、それが更らに幾多の諸部門に分化するやうにもなつた。かくて現代國家の支配下にあつては、廣義に於ける政治技術の學としては、政治學とか國家學とか國法學とかのやうに、主として國家機構および政治機關の運用に關する『學』の外に、行政學、統計學、經濟學、財政學、等々の諸學術が、それぞれに專門の『學』としての地位を獲得し來たばかりでなく、それらはまたそれぞれに、更らに一層複雜に樣々の諸部門に細分されて行く傾向がある。だが、廣義に於ける政治技術の學が斯の如く際限もなく幾多の專門の部門に分化する傾向が生じてゆくだけつゝ、反對にまた、それらの諸部門を綜合的に若しくは統一的に大觀する必要も增して來たところから、特に形式的な體系づけを尊重するドイツ流の學風に於ては、それらの學の一切を――若しくは最も重要なる一群を――總稱して『國家諸科學』(Staatswissenschaften)と呼び習はす傾向もまた馴致されて來た。

『國家諸科學』といふ術語の用ひ方は、廣狹二種に分かたれてゐるが、こゝではこの問題に立ち入ることが出來ないから、次にこの方面に於ける一方の權威と見られてゐるゲオルグ・マイアーの說明を引用しておくだけに止める。(引用文

中〔　〕内の文句は引用者が挿入したもの、また傍點はすべて原文による。）

『……事實上「國家諸科學」の下に二つの全然異つた學問の複合體が諒解されてゐるから、二重の解釋が必要になつて來る。人はまづ、――これは今日行はれてゐるといふよりは寧ろ以前に流布されてゐた解釋だが、――國家に關する知識を取扱ふ諸部門の總體といふ意味で國家諸科學といふ言葉を用ひる。それは狹い、言葉通りの意味に於ける國家諸科學だ。しかし人はまた、社會諸科學上の諸部門に關する全然別個の解釋〔著者のそれとは全然別個の解釋〕に從つて、國家諸科學といふ言葉を用ひもする。この用ひ方によれば、國家に關する知識がそのうちで最重要地位を與へられてゐるのではなく、上の第五節に示されてゐる通りの〔社會諸科學の〕三重分類（（1）一般社會諸科學、（2）特殊社會諸科學、（3）歴史〕のうちの一般社會諸科學的知識が、特に經濟生活に關する知識が、それに代つて最重要地位を與へられてゐるのである。それが近代の國家諸科學であり、今日の「國家諸科學の教授關連」の國家諸科學であり、從つてまた、言葉通りのそれでなく、より狹き、傳統的な意味に於ける國家諸科學である。』(Mayr, Georg, *Begriff und Gliederung der Staatswissenschaften*, Tübingen,1906,p.16)

以上の引用は、たゞ『國家諸科學』といふ術語に關するドイツ流の複雜な用法についての極めて一般的な概念を與へようといふだけの目的の下になされたものであつて、それ以上に説明を進めてゆくことは、玆では全然不必要だと思ふから、それは省略することにする。

五

近代國家の支配下に於ける政治技術に直接間接に交渉のある『學』の諸部門が、國家諸科學の、もしくは社會諸科學の總稱の下におかれるやうになつて來てゐること、――さうした國家諸科學と社會諸科學とは、特に意識的に明確に規定されな

いで居た間は、同一視もしくは混同されてゐたこと、――少くとも兩者の重要部分が同じ領域の上に重なり合つて擴がつたまゝで持ち越されて來たこと、――かうした様々の事柄は、少くとも次の二つのことを我々に考へさせる。すなはち、

（一）近代國家内の支配階級の側に於ても、理論と實踐との相互聯關性と統一性とが、明示的もしくは暗默的に承認され追隨されてゐたこと。（近代國家内の支配階級の側から社會諸科學の名に於て與へられる諸般の知識もしくは理論（法制・經濟・政治・等々に關する知識もしくは理論）は、社會諸科學の自然發生的な別名とも見られる『國家諸科學』といふ言葉によつて示唆される通りに、究極に於て支配階級の統治もしくは政治技術に合流するものであること。

改めていふまでもなく、自然法學の隆盛時代以來、國家と社會とは、屢々同一物と目做されて來た。少くとも、國家は社會の最も完全なる生活形態だ、といふやうな考へが非常に廣く行はれて來た。さうした考へは、人間の群棲的本能から自然發生的に出來て來たものが社會で、その社會が意識的に創設された法制的秩序の上に置かれるやうになつたものが國家だ、といふやうな根本見解の上に立つてゐるものである。前記のゲオルグ・マイアーが、『國家と社會とは對立物でなくて、私の考へでは社會は集團生活のすべての種類を網羅する普遍的概念で、その點に於て、何よりも殊に權力を以て裝はれ、形式上最もよく組織され、最もよく編制されてゐるところの、國家に於ける人間の集團生活といふものをも包含してゐるものである』（前掲書四ページ）といふ説明は、外觀上小うるさく『學的』にはなつてゐるが、しかし根本に於ては、同じ考への糸を辿つてゐるものである。

何故にかゝる觀念が支配階級側に於て固執されて居るかといへば、それは國家の階級性を隱蔽するに最も好都合に出來てゐるものだからである。

國家の階級性は、我々のやうに無產階級運動に從事してゐるものゝ日夕の實踐に於て、あまりにも痛切に體驗されてゐる。それは、我々のその實踐以外の如何なる證明を要しないほど、我々に取つては自明のことなのだ。だが、人類の歴史

——もしくは人類の經驗——を、時間的に空間的に、全體として觀察しても、結論は同一だ。エンゲルスはそれ故に、その著『家族・私有財産・および國家の起源』に於て、その歴史的分析を綜合していふ。——

『國家はそれ故に決して社會の外部から社會の上に强制された權力ではない。また國家は、ヘーゲルが主張したやうな「道德觀念の權化」でも「理性の映像および權化」でもない。それは寧ろ、一定の發達段階に達した社會の産物だ。それ〔國家〕は、その社會が一の解決不可能の自己矛盾に陷沒したことの〔すなはちその社會の〕自力では救ふことのできない協調不可能の諸對立物に分裂したことの、表白である。しかし、これらの諸對立物が〔すなはち〕相異る諸利害關係を持つ諸階級が、お互同士と全社會とを無結果の鬪爭に於て滅亡させるやうなことのないために、一見あだかも社會の上に超立するが如く見える權力が、すなはちさうした衝突を緩和してそれを「秩序」の限界内に維持する役割を果たす權力が、必要になる。そしてこの、社會の中から起き上つて來たところの、だが社會の上にそれ自身を標置し、社會から段々とそれ自身を隔離するところの權力こそ國家である。』

すなはち、國家は一社會内の諸階級間の協調の媒介物ではなく、諸階級間の協調が不可能になつたために現はれたところの、支配階級權力の組織されたものだといふことは、今日の無産階級の實踐によつて證明されてゐる一の明白なる事實である。だが、かゝる國家の階級性は、各時代の支配階級によつて極力隱蔽されて來た。それ故にこそ、近代國家の支配階級の側に立つ社會理論に於ては、或ひは國家と社會とが同一視されたり、或ひは國家は社會の完全なる生活形態だとされたり、或ひは高々、國家は社會の諸階級間の協調の媒介物だとされたりなどして、とにかく國家の階級性が抹消されるのが普通になつて來てゐるのだ。

以上述べたことだけによつても、近代國家の支配階級の側から供給される社會諸科學と國家諸科學との合致もしくは少くともそれぞれの重要部分の合致——が説明されることが出來、また特にドイツ流の學風に於てはそのことが術語の用法

の上にまで反映されてゐることが首肯されることも出來ると思ふ。そして、かういふことは、結局は、さうした社會諸科學と、支配階級の政治技術との交渉から出て來てゐるものである。そこにも、支配階級に於ける理論と實踐との關係に於ける相互聯關性および統一性の跡が現はれる。

六

我々は屢々科學の階級性について語る。それは今日に於ては、少くとも社會諸科學の領域に於て眞である。殊に支配階級側から與へられる所謂社會諸科學は、それらと支配階級の實踐であるところの政治技術との交渉に關する範圍内に於て、階級性を附與されてゐる。『科學は眞理の示現であり、そして眞理には階級性がない』といふやうな抽象的概括論は、屢々科學の階級性を否定するために持ち出されるものであるが、しかしそれは、現實の具體的事實には合致しない。いかにも、支配階級側の社會諸科學の本來の階級性は極めて巧妙に隱蔽されるのが普通になつてゐるが、それは支配階級の政治的實踐に於て國家の階級性が常に極めて巧妙に隱蔽されてゐることと、共通の基礎の上に立つてゐるものである。

支配階級側から供給される社會諸科學の階級性の標識は、少くとも二つの點に於て最も著るしく認められる。その第一は、それらの社會諸科學に殆んど共通してゐるやうに見られる基礎的觀念に於ては、明示的もしくは暗默的に、社會進化の將來の過程に於ける根本的變革が否定されてゐる。一トロにいへば、それは反革命的である。それは、支配階級の政治的實踐に於ける現狀維持主義と相互的に氣息を通じてゐるものである。マルクスが或る箇所で、ブルジョア經濟學は歴史の過去から現在までの進行を認める場合でも、その現在から將來への進行を拒否する、といふ趣意を述べてゐるのは、この點に聯關して味ふべき説明である。

第二に、ブルジョア社會諸科學は、大體上に於て數量的觀測の上に築きあげられてゐる場合に於てすらも、究極に

於て必然的に到達すべき唯物論的立場を回避して、どこかで唯心論的もしくは主觀主義的立場——もしくは主觀主義の更らに極端に尖鋭化した形を取つたものにすぎない唯我的もしくは個人主義的立場——に結びつけられてあるのを常とする。さうでない場合にも、高々エンゲルスの所謂『恥しさうな顔付きをした唯物論』(Shame-faced materialism)にすぎないところの不可知論（agnosticism）にまでしか進出して來ないのが通り相場だ。

かうした關係から、ブルジョア社會諸科學は、辯證法的唯物論に立脚せしめられたる我々の所謂社會科學に向つて、正面から對立する。そして、それらのブルジョア社會科學の擁護者たちは、あらゆる間隙を狙つて、辯證法的唯物論に立脚せしめられたるその社會科學を攻擊する材料を供給することに腐心してゐる。しかも彼等の殆んどすべてが異口同音に述べてゐることは、何よりも先に社會現象は人間の意識を通じて起るものであるが故に、辯證法的唯物論は如何に自然現象の研究に聯關して役立つにしても、社會現象の科學的觀察のためには何の足しにもならないといふやうな論旨である。そして彼等は何ほ、さういふことを述べる際には、我々が社會現象に於ける人間の意識の働きを無視してゐるかの如き口吻を弄するのを常とする。だが、かういふことは、明かに虛構の言だ。エンゲルスは既に『フォイエルバッハ論』に於て、社會生活上の一切の事象は人間の意識を通じて起るものであることを、明快に言つてゐる。我々はもとよりそれを否定することが出來ないものである。それどころでなく、だからこそ、我々は一層、その人間の意識が如何に決定されるかの問題に關心を寄せるのである。この問題こそ、眞の社會科學の基礎に橫はつてゐるものだ。そして我々が、それに關聯して『人間の意識が存在を決定するのでなく、逆に彼れの社會的存在が彼れの意識を決定するのだ』といふ唯物史觀の立場を取るのは、たゞ『存在』と『思惟』との關係について、前者の先位（prius）を認めるといふ意味からだけであつて、決して人間の意識の働き——もしくは精神生活——を無視するからではないのだ。

自然科學が本能的に唯物論に立脚する不可避性のあるものであることは、レニンがその名著『唯物論と經驗批判論』に

於て最も決定的に論證してゐる通りである。我々は社會を最も高度に發達したる自然と見る立場を取るが故に、辯證法的唯物論を通して、自然科學と社會科學との相互聯關性と統一性とを見るものである。この點に於て、我々の意味に於ける社會科學もまた、それ自身の方から出掛けて、その根本に於て唯心論的立場を全然離脱することの出來ないところのブルジョア社會諸科學と正面衝突をしてゐるのだ。かくて、兩者は同じく社會現象を對象としてゐながら、今日現に鋭き對立をなしてゐるのだ、曾てローマ法皇の敎權の支配下に於て、バイブルを典據とした神學的自然解釋と、『自然といふ書物』から直接に學びとられた科學的自然解釋とが鋭き對立をなしてゐたやうに。

七

ブルジョア社會諸科學——最後に發達した實證主義的社會學までを含めて——も、屢々自然科學の影響の下に、社會現象について普遍的妥當性のある客觀的眞理の探求を目標として出發することを高唱してゐるものがあることは事實である。このことは、殊に第十九世紀の中ごろ、若しくはその少し前から集大成されはじめた實證主義的社會學について、最も適切にいひ得られるのである。だが、それにも拘はらず、實證主義の社會學も、客觀的眞理への進行の中途で、遂にその歩みを止めざるを得なかつた。それは畢竟、實證主義的社會學もまた、その根本に於ては、支配階級の政治的實踐への補佐的任務の意識の下に興つたものだからである。この點は、コントの學說やスペンサーのそれの上にも、極めて顯著に現はれてゐて、そして彼等の亞流の端々に至るまで、皆その顰みに倣ふことを忘れなかつたし、また忘れてもゐない。スペンサーの大著の『社會學』は、初めは『政治學』の名を與へられるべく企圖されたものであるとは、彼れ自身が語つてゐるところだが、それはこの點から見て、幾分かの興味のあることだ。

かういふ譯だから、實證主義社會學もまた、支配階級の御用學としての無數の標識を示してゐるが、それらの標識のう

ちの最も顯著なものを擧げると、まづ第一に、それば明示的もしくは暗默的に、ブルジョア社會の永續性を前提としてゐる反革命的のものである。實證主義的社會學が、自然科學特に生物學の方面に於ける進化論の影響の下に、社會進化の究明にさしかゝつたのは、たしかに或る程度の新機軸を出したものだが、しかしそれは遂に、あらゆる點に於て中途半端のものとなり終り、就中社會進化の問題に關しても、根本に於てブルジョア社會の永續性の少くとも默認の上に立ち、結局その點に於て、歷史の過去から現代までの進行を認めても、その現在から將來への進行を拒否すると同じ結果に歸着した。殊にコント流の實證主義的社會學が如何にその核心に於て保守的本質を有するものであるかは、現に我々が知つてゐるその追隨者たちの中に多數の反動思想家たちの群が見出されるといふ一事によつても知られるのである。

かういう論點を展開してゐると際限がないから、茲でもまたそれを程々に切り上げることにしなければならないが、最後に唯一つ、次のことは是非とも附け加へておかなければならぬ。すなはち、實證主義的社會學もまた要するに支配階級側の御用學の範疇を出てゐないものであるから、このことの當然の歸結として、それは窮極に於ては唯心論的もしくは主觀主義的世界觀に結び附けられてゐるのが普通であつて、その最も前方に進出してゐるものでさへも尙ほ、不可知論的立場の羈絆を脫脚してゐることは稀である。かのスペンサーは、コントの社會學說が愛國主義的偏執に陷つてゐるとを論難してゐるが、その辯スペンサーその人は、彼れの時代に於て支配階級の中堅を構成してゐた自由主義ブルジョアジーの信條であつた個人主義的思想に骨の髓まで浸染されてゐて、彼れの社會理論もまた、それによつて際立つて色彩づけられてゐたのだ。

社會科學がマルクスによつて辯證法的唯物論の基礎の上に持ち來たされるやうになつてから、それは始めて、自然科學との完全なる聯關性および統一性を保つ點にまで引き上げられた。かくして、自然現象を對象とする自然科學に於て客觀的眞理への到達が、可能とされてゐるのと同樣に、それは始めて、社會現象に關して客觀的眞理への到達を可能とされるに至

つた。一口にいへば、社會科學はそれ以來始めて科學としての成立を可能とされるに至つた。マルクス以前に、果して眞にその名に値ひする社會科學があつたか？

少くともかういふことが的確にいひ得られる。即ち、マルクスが社會科學を辯證法的唯物論の基礎の上においてから、社會はその全體性に於て、その各部の內的聯關に於て、その自己運動の過程に於て把握され理解されることが可能とされるに至つた。特に我々の關心の焦點をなすブルジョア社會は、それの發生および發達の過程に於て、およびそれの必然の沒落への進行に於て、更らにまた、より高き社會形態への轉換の見通しに於て、證明に看取され得るに至り、そのあるがまゝの現實が、その合法則性に於て、我々の究明の對象とされ得るに至つた。殊にかゝる基礎の上に打ち建てられた社會科學の、人類の實踐——生活——への最も偉大なる貢獻とすべきものは、ブルジョア社會の前途への——より高き社會形態への——發展轉化の途上に於て最も大なる歷史的役割を果たすことによつて未來社會の建設・經營の擔當者であるべき運命を負うてゐるところの現實の當事者を、現實社會の內部の一の現實階級——一つの新興階級——プロレタリアートに於て發見した點にあるのだ。かくてこの科學は、もしくはマルキシズムは、最も深き意味に於て、一の新らしき實踐の理論であり、理論と實踐との、實踐と理論との統一である。

即ちそれは、まづ第一段に、戰鬪的プロレタリアートの實踐の理論であり、そしてこの意味に於て、支配階級の政治的實踐の理論であるところの社會諸科學もしくは國家諸科學に對立する一の新らしき科學である。戰鬪の理論なくしては、戰鬪の實踐はない。『實踐に於て人間は彼れの思惟の眞理を……證明しなければならぬ。』（マルクス。）『哲學者たちは世界をたゞ樣々に解釋した。だが、要點はそれを變へることにある。』（同上。）かくの如く、マルキシズムは、實踐の理論であるべき使命の意識を以て出發してゐる。

『社會的世界の說明の理論は、「社會有機體の」生成の、その機能の、および、より高度の形態への過渡の、すなはち他

種の社會有機體への轉化の、それぞれに特殊な諸法則の發見といふこととの上に存する。『理論――いふまでもなく一の正しき、客觀的に眞なる――なくしては、決して計畫的なる、意識的なる、歷史的かつ社會的なる行動はない。かゝる理論は、歷史的過程への意識的なる働き掛けのための必須なる前提條件である。だが上揭の諸法則の發見といふことは、縱しそれ自身としては偉大なる行爲であるにもせよ、單なる發見といふことだけでは不充分だ。すなはち、それ以外に尙ほ、これらの啓示された諸法則の上に依據して、社會有機體の改造の諸方法を示し、且つその改造、およびその社會有機體の、他種(の社會有機體)への轉化を遂行することが必要だ。人は驚くべき精妙な理論に通曉しながら、しかも尙ほ現實に對して哲學者的傍觀態度を取り得るものだ。現實を轉形するためには、理論そのものが現實となることが、理論が能働的創生力であることが、一言にしていへば、理論が實踐になることが、必要だ。……マルキシズムは、理論と實踐との分離を知らない。理論と實踐との辯證法的統一は、理論が實踐的であり、そして實踐が理論を通じて說明され、且つそれ自身理論に轉化することを要求する。』(アー・デボリン『戰鬪的唯物論者レニン』ドイツ版五―六ページ。)

七

『理論――いふまでもなく一の正しき、客觀的に眞なる――なくては、決して計畫的なる意識的なる、歷史的かつ社會的なる行動はない。』さうだ! それ故にこそ、プロレタリアートは、その社會理論に於て、普遍的に妥當なる眞理を要求するのだ。プロレタリアートは、社會的眞理の隱蔽によつて利することが出來る階級ではない。それは社會的眞理を暴露することによつて行動することが出來る階級だ。それはまた、人類の一部少數者が大多數者を抑壓することを許すやうな社會狀態に堪へることが出來る階級ではない。それは、それ自身を揚棄することによつて全人類を解放し得る階級だ。かゝる階級の實踐に於て、普遍的に妥當なる社會的眞理を表示する社會科學が偉大なる役割を演ずることは事實だ。だが、かゝる

社會科學は、プロレタリアートの實踐に役立つが故に普遍的に妥當たるのではなくて、普遍的に妥當たる眞理たるが故に、プロレタリアートの實踐に役立つのだ。

かゝる社會科學が、我々にとつて正しき社會科學だ。そして、かゝる社會科學が如何に無産階級の政治行動の進路を照明する光となつてゐるかは、我々が我々の政治的實踐に於て刻々に證明してゐることだ。職業的に若しくは非職業的に支配階級の提灯をもつ御用學者としての役割を果たしてゐる人々は、我々の社會科學の方法論的および内容的誤謬を指摘となつて算へ立てる——異端邪說を折伏するやうな顏附きで——ことを、有利な商賣の一つと心得てゐるやうに見える。だが我々はさうした事實のうちにこそ、却て我々の社會科學が勝利への道にのぼりつゝあることを豫感するのだ。いづれにせよ、支配階級側所屬の學者たちから供給される社會科學は、そのまゝで何一つ積極的に我々の政治的實踐に貢獻したか！　もし我々がそれらの社會諸科學の敎導をたよりにしてゐたならば、たゞ永久の屈從のみが我々に振りあてられた運命であつたらう！　重ねていふ、實踐こそ客觀的眞理の最後のテストだ、と。

自然科學は、自然現象に關して客觀的眞理を表示するが故にこそ、人類の實踐——生活に——役立つのだ。だがそれは曾て、人類の一部少數者にすぎなかつた支配階級の政治的利益に背反したとき、慘虐極まる彈壓の下に持ち來たされた。幸にも、それはしかし、今は昔の事實となつた。

ところが、諸君！　今日の日本に於ては、諸君と我々とが日々眼前に見て居る通りに、——否、日々直接に體驗してゐる通りに、社會現象に關して客觀的眞理を表示する社會科學が、自然科學のその嘗つての運命を引取らなければならなくなつて來てゐるのだ。何故か？　それは、その客觀的眞理が、プロレタリアートの政治的實踐に於て、現實に——然り、現實に！——證明されてゐるからだ。だからこそ、我々は、社會科學が彈壓を受けてゐること自身が、それの勝利への第一步を指し示すものであることを信ずることが出來るのだ。

だが諸君！　イデオロギーの鬪爭は、階級鬪爭の——從つて政治鬪爭の——一面である。それは、私が上來永々と解說して來た科學と政治との關係によつて、略ぼ明かになつたことと思ふ。だとすると、社會科學の研究の自由も、プロレタリアートの政治的自由獲得鬪爭によつて克ちとられなければならないものである。

諸君も知つてゐられる通り、私がその一員として屬してゐる勞働農民黨は、その全無產階級的政治鬪爭に於て、當面、帝國主義ブルジョアジーの專制的支配に對抗して、全被壓迫大衆の先頭に立つて、政治的自由獲得のために、血みどろの鬪爭をしてゐる。そして、いふまでもなく、わが黨の政治的自由獲得鬪爭は、學術研究の自由の上にも及ぼされてゐるのである。殊に我々は、社會科學の研究の自由を熱烈に叫んで居る。更らにそれに關聯して我々は、學校生活に於ける學生の自治權の確立、大學行政への學生の參加權の獲得、教授學生の政黨加入の自由、等々の諸要求をも戰ひとるべく努力してゐる。それ故に我々は、諸君に——社會科學研究の自由を熱烈に叫んでゐる諸君に——我々の温かき手をさしのべる。私は希望する、諸君が我々の要求の——わが勞働農民黨の——政治的自由獲得鬪爭と同一線上に立つて、社會科學の研究、發表、およびそのための組織、宣傳、等々の要求のための諸君の戰ひを最後の勝利にまで戰ひ拔かれるであらうことを。（完。）

附記。——この一篇は、私が昨年の十二月十五日に、京都帝國大學内の學友會の招きに應じて試みた一場の講演の骨子を基礎として書き改めたものだが、内容には多少の增減を施した。私は、極度に多忙な政治的活動の暇々を見て執筆したものだから、不備の諸點を一々訂正してゐる餘裕が持てなかつたことを遺憾とし、この點に關して讀者諸君の諒解を求める。

道理と正義の敵 ムツソリニ論

上杉愼吉

一九二二年の晩夏、ムツソリニ暴はかに蹶起して、伊太利政府を簒取するの報到るや、人或は之を痛快なりとし、予に向て會心の感あらんなどと云ふ者少くなかつた、然れども、予は初めよりかゝる常軌を逸せる革命的政變を非難したのである。予は不肖ながら一介の學徒として、合理的なる政治の建設を目標とし、その目標の爲めに聊か努力奔走する所もあつた、殊に憲法を專攻する者として、法の支配の下に、國民の自由と正義との伸暢せられんことを希望し、これが爲めに、我が國現下の腐敗墮落上下交々私利を征するの朋黨政治を攻擊し來つたのである。殊に予は我が國體の精華に對して明確なる信念を懷き、日本國家の前途に赫々たる光明を認むるが故に、ムツソリニの暴擧ありてより以來、我が所謂る國粹主義者が、動もすれば之を賞讃謳歌せんとするを輕卒なりとし、彼を知らざるのみならず、我を知らず、我が國體に對する信念の甚だ薄弱なるを嘆き、深く之を戒めた、ムツソリニの蹶起せる、伊太利にをいては、或は已むを得ざるの勢と爲すべからんも、之を我れに學び、和製フアシスト團を結合し、和製ムツソリニを自信する者あるが如きは、思はざるの甚だしきものと云はなければならぬ、嘗てムツソリニの教書を受けて喜びたる者あるを見て、予は日本人の爲めに自ら恥づべしと爲した、我が國粹を表象すべき贈物を爲し、恰も東西相響應すと云はんが如き者ありしとき、予は頗る之を苦々しと思つた、近來ムツソリニ一流の俳優的宣傳の手段たる彼が一代記の活動寫眞の贈與を得て、我が日東大帝國の首相頗る得色ありと仄聞す、愚もまた甚だし、ムツソリニは一個市井の無賴、フアシスト政治なるものは道理と法律とを無視せる凶暴政治のみ、——予の嘗て此の言を爲すや、

我が舊式及び、新式なる國粹主義者の間に頗る物議ありと云ふ、ムッソリニを罵りて、氣の毒なる伊太利をどうしようと云ふのは我が志にあらざること云ふまでも無い、予は日本國民の爲めに、帝國政治の方針の常に進むべき所を考へんと欲するのみである。

ファシスト政治は、明かに反動政治である、ボルセヴヰストの凶暴に對し、凶暴を以て之に當れるものである。暴を以て暴に易ふ、その非を知らずと云ふが、之れ實に西洋流であることは、その歷史の示す所であつて、我が仁義を本とするの蕩々たる王道ではない、我が國に於ける非國家主義者は勢實に微、將來到底擡頭することは出來まい、我が國體國情に背反し、國民の同情を博する能はざるのみならず、日既に三竿なるに漸く起きて出で來たれるが如き感なき能はず、世界の大勢は既に一步否數步先きに行つてしまつて居る、唯だ、この微力なる者と雖も頗る凶暴の言行を逞うして居るが、予は彼等が如何に凶暴ならんとも、反動的凶暴を以てこれに當るべきものではないと信ずる、國權の威力毫も衰へざる限り、道理と正義の光失はれざる限り、我が國に於て、必らずこれを消散せしめ得るの確信を我が國民は持たなければならぬ、我が國には斷じて反動あることを許さぬ、否その必要が無い。

世界的無政府時代

ファシスト政治は歐洲大戰後の、不安の動搖の荒れ海に現はれ出てたる怪物である。吾人をして云はしむれば、最近西洋人のすることは一向了解出來ぬことばかりである、予、戰後歐洲に遊び、某歷史家より、大戰爭に對する感想如何と聽かれたる時、予は唯だ歐洲に五億の馬鹿あるを知れるのみと云た、大戰爭破裂以來、講和條約より今に至るまで、國際聯盟軍備縮少等等全體彼等は何を爲しつゝあるのか、予は今これを論ずることを略するが、國內政治に於ても全く歸着する所を知らず、知慧も枯渇し果てたる有樣と見ゆる。議會政治の權威の失墜は、大戰爭を以て初まれることに非ざるも、戰後思想の大混亂、經濟の大疲弊に當つて、議會あり、政黨あるが爲めに、却つて國民の輿論は統一せらるることを得ず、如何なる內閣も數月又は數日をしか支うることを得ず、國策は毫も確立せず、人皆賴る所を失つて、自暴自棄、手を拱きて茫然たるばかりである、正に之れ世界的無政府時代、人の漸く國家その者に對して疑惑を起し來たれるも當然である、英吉利と雖も、勞働黨內閣時代にはどうなることかと思はれた、前途暗黯たる裡に、風荒れ波高き海上を當ても無く行くのである、これ獨裁政治出現の好機會、露西

亞にも伊太利にも西班牙にも、希臘にも土耳古にも或は質通にも、或は佛蘭西にも態度と形式と性質こそ異れ、怪物獨裁政治起り、跋扈張梁を極むるに至つたのである。政治の狀態健全にして、其の進行の坦々なる處に、突如として、かゝる變態政治の起り來る道理が無い、殊にその甚だしきを露西亞と伊太利とする、レニンとムツソリニとは、共に此の暗夜に出現せる魑魅魍魎である。

凶暴の沃土

物先づ腐れて、蟲これに生ずと云ふが、歐羅巴に於て、十九世紀以來國政の最も擧らず、風儀の最も頽落し、人心の最も荒廢せるは、露西亞と伊太利であつた。露西亞に入れば、陰森の氣人を襲ひ、伊太利に遊べば、燥狂の風市に充つるを覺ゆる、共に血を見るを恐れず、歐洲中最も殺人多き國である、露西亞の事は今云はざるも、かの恐怖すべき革命を行ひ、レニン死して今尚ほ定まる所を知らず、民は塗炭に苦しんで居るのである、共產黨獨裁し、大多數の國民は、眞に國家を構成するの國民では無い、かくの如く人は露西亞國家は最早や無いのである、マルクスの所謂ゆる、國家の漸く自然に死滅しつゝあるのではなく、共產黨の暴力の下に國家は潰裂したのである。伊太利は從來より迷信と乞食と人殺の國と云はれた、南米、南歐羅巴にたゞ一人普通教育最も普及せず、人多く犯罪性を帶び、群衆的感動性盛んにして、頗る凶險である。殊に伊太利なる國は、羅馬帝國沒落以來、その名はあつても地理的の名稱に過ぎず、統一せる國家を成しては居なかつたのである、ガヴウルの事業もこれを未だ精神的に統一することは出來なかつた、國民の愛國心なるものも、屢々その歸着する所に惑ふと云ふが如き有樣である。この事は大戰爭勃發當初から、參戰の決定に至るまで、戰爭中及び戰後の講話條約に至るまで、遺憾なく事毎に暴露せられた。これらの事情は伊太利をして、凶暴なる獨裁政治の萠生する沃土たらしめたと云ひ得る、國民性の酵母の裡にファシストが發生したのである。これ人の一九二二年の革命を論ずる者、多くはその大なる原因を、伊太利人の動亂を喜び、血を流すを輕視し、燥暴にして變化を好むの性質に歸する所以である。

ヒユウメの滑稽劇

一九一九年九月、詩人ダヌンチオが、一隊の兵士を率ゐて、ヒユウメを占領したことは、我が國に於て、屢々殉國の壯擧とせられた、しかし、浮華にして氣取屋なる詩人に、芝居がかりで、かゝる事を輕々しくやられては、國家はたまつたものでは

無い、愛國心には、相當の思慮を必要とする、常人は壯快を感ずるかも知れぬが、國家は非常なる窮地に陷るのである、幸にしてダヌンチオはヒユウメに於て人氣を失ひ、これを撤退したがさもなくて、聯合軍と砲火を交へて擊退せられたらば、伊太利人は之を國辱として、歐洲全體を相手として戰はざるべからざるに至つたかも知れぬ、ヒユウメにして占領し得べくんば、政府自からこれを斷行すべきのみ、政府のこれを敢てせざるは、これ明かに聯合國に對する宣戰の布告であるからである。然るを、一詩人の煽動に依り、國家の軍隊が勝手に遠征し、政府の立ち場を危からしむ眞に無謀の極、その情は憐れむべきも、これを決して愛國的の行動と云ふことは出來ぬ。其の結果は國内を、大混亂に陷れしめ、革命的氣分沸騰するに至つたのである、かくてヒユウメ占領の滑稽劇はムツソリニ登場の序幕となつたのである、これ果して我が愛國者の學ぶべきこととなる歟。

亂麻の三年間

怜悧なれども怯懦なるニツチは、ダンヌンチオ暴擧の報導に接して、殆んど失神し、如何にすべきかを知らなかつた、彼は内外に對して進退兩難に陷り、これを國民の輿論に問ふた、十一月の總選擧に於て國民は百五十人の共産黨員を議會に送つてこれに答へた。これを伊太利ボルセヴヰク化の第一着と見るべし、一政府の無能軟弱これを來したのである、爾來三年間、伊太利、亂麻の如く、殆んど無政府の狀態となつた、吾人は此の間に於て幾多の政治上の教訓に接するのであるが、殊に妥協の連續は、却て遂に極端凶暴なる衝突の素地を作り出すものなることを知つたのである、ニツチよりヂヨリツチ、ボノミ、フアクタ皆この亂麻の伊太利を率ゆるの力なく、妥協を事として、遂に國家をして、收拾すべからざる混亂に陷れしめた、ボルゼヴヰクは勢に乘じて伊太利を席捲したのである。戰爭の結果に對する失望は、國家に對する怨嗟の念を全國に漲らしめた、食ふこと能はざる者に對して、共産主義は天國の聲の如くに聞こえ、政府の無能不信を痛感して、目前なる露西亞革命の例に倣ふは一切を即坐に解決することを思はしめた、勞働者は續々直接行動に出て、遂にかの工場占領となつた。虐殺も掠奪も行はれた、世界は最早伊太利は露西亞となるものと思つた、而して、政府はこれに對して何事をも爲し得ぬのである、法律の權威も失はれ、綱紀は弛廢し、有産者も遂に政府を信賴せざるに至つた。國を擧げて自暴自棄、國民は最早や堪ゆること能はずと苦悶するのみ、かくの如きもの三年、一九二二年に至つたのである。凶暴にして野心ある簒奪者の起るべき素地は完全に出來上つた。

無賴漢

一國の首相を目して無賴漢と云ふは憚るべきであらう、彼も今は立派な政治家であらう、然れども、我が國人をして、彼の如き者が、大政燮理の大任に當ると云ふが如きことの、我が國に於て到底許すべからざる所なることを知らしめんが爲めに、彼を表象するに最も適當なる言葉であらうと思ふのである。今は伊太利國王の「從兄弟」たるムツソリニは十年前には何を爲せるかを知らざるべからず、一九一二年の三月、一石工國王を射殺せんとして、彈丸國王に中らず、國王辛ふじて危きを免れたるとき、社會黨の一閥が、國王に對して祝意を表せるを聞きて激怒し、演說して石工は我が黨の幾多の先例に從へるのみ、かゝる場合に於て勞働團體は決して國旗を掲揚すべからす、國王が殺されんとするの災難なるは、石工の上に橋の落ちたるの災難なると同じきのみ、我等若し涙を灑ぐべくんば、石工の爲に灑ぐべきのみ、國王に祝意を表するが如き輕業師の宙返へりの如しと大聲疾呼したる、その同一なるムツソリニか、今は國王の「從兄弟」と呼ばれて居るのである。

宜なるかな、ムツソリニのファシストを率ゐて、一九二二年十月の所謂る「羅馬への進軍」を企圖するや、國王は報を聞きて、急遽烏莊より羅馬に歸り、青ざめし且つ恐怖し、「王は臣民をんよりも、寧ろ妻子と共に去らんのみ」と叫べるや、彼の時若し直ちに戒嚴令を布き、軍隊の力を以て、ファシストに當らば、烏合の一揆は立ち所に粉碎せられたらんのみ、然るに、サルベミニ教授が、「凡ゆる時代凡ゆる國を通して最大の白痴」と評せる首相ファクタは、優柔にして斷ずる能はず、將軍等皆不忠にして國王に背き、國王の從兄弟アオスタ公の陰に天位を覬覦するにあり、國王は涙を飲み、殆んど面縛して無賴漢を迎へたのである。ボルセヴヰクに對するクウデタなりと號したる「羅馬への進軍」は事實國王と國會とに對するクウデタであつたのである。此の時より以後伊太利に國王無し、存する者は唯だ國王の尊稱を有する「戰爭の囚人」のみ。

ムツソリニは本來過激なる革命的社會主義者であつたのである、予はその過つて改めたことを嘉賞せんと思ふが、その性根は未だに直つて居らぬ、加之、その變說の經路は頗る醜怪であるを厭ふべしと爲す、一九一四年大戰爭の勃發せるとき、伊太利には參戰非參戰の論は囂々として起つたのであるが、ムツソリニは社會黨の機關紙たる「アバンチ」の主筆として、盛んに非參戰論を絕叫し、勞働者は決してブルジョア戰爭に捲き込まるべからずと警告し、戰爭が資本家社會の危機を惹起すると

き、直ちに社會革命に着手するの用意を爲すべしと云ふの、レニンの口吻そのままを高調したのである、然るに、この如きもの二ケ月、僅かに二ケ月にして、十月に至り、彼は突如參戰論者と化した、その時彼は懷中一厘をも有せずして日刊新聞「イル、ポポロ、デタリア」を發行したのであるが、爾來幾度となく、新聞紙上に又法廷に於て、その仲間よりも、彼が當時佛蘭西政府より巨額の金錢を受領せることを公表せられて居る、その金額も、これを手交した人名も正確に分つて居る、彼はかうして遽かに愛國者となつた。

予は今彼の人物性行を解剖する暇を有せざるも、その出處進退の跡を見、諸種の傳說人物評などを通覽すると、彼は本來凶險にして亂を好み、目的の爲めに手段を擇ばず、殺伐にして詭詐なる性質を有せるものと思つてゐる、剽悍にして向ふ見ずに突進し、機會を捉へて直ちに實行するに極めて敏速に、無鐵砲で鐵面皮で、他人の苦痛や思惑は何とも思はぬ男であるが如くである、彼の成功は專らこの性格に由るものであらう、セフラチ女史のムツソリニ傳は、ムツソリニ自ら序文を書き、公認せられた傳記とせられて居るものであるが、その內に彼の幼時の事を敍して居る一節に、小學校に於て同級中の最も美しき一少女を强迫し、不意に接吻し、馬乘りになりなどしたことを書いて居る、幼にして既にこの不良性を具へて居たのである、彼の自記には、他人のかけて置いた罠にかゝつた鳥を盜んだことなどを得意氣に書いて居る。

彼の父たる鍛冶屋は既に革命的社會主義者であつた、彼の名ベニトは、メキシコのマキシミリアン皇帝に反旗を飜がへせる者の名をそのまゝ取つたと云ふに至つては、彼が生來の謀叛人たるを知るべしである、彼が毆られたる子供に對し、石塊を磨つて刄の如くし、これを以て三たびその肩間を打つたと云ふ話は、彼の今も自慢にする所であつたさうであるが、國定忠次を思ひ出さずには居られぬ。セフラチの本に、彼が惡童仲間と林檎泥棒に行き、所有者に見つかつて、皆逃げてしまつたのに、樹から落ちた一人の子供を引き背負つて歸つたといふ話に註を加へて、これムツソリニの生涯に於けるファシスト的行爲の最初のものであらうと云て居る。泥棒をして勇敢なるを、ファシズムとは驚き入つたものである。この本にムツソリニが少時三度び結婚して、三人の夫とも變死したと云ふ妖婦に愛され、その感化に依て、前兆とか緣喜とか魔術とか云ふものを深く信ずるやうになり、今でもそう云ふことに依て行動すると書いてあるが、その無賴にして大人の資に非ざること思ひやられるではないか。その瑞西に流浪したとき、路傍に紳士に錢を乞ひて

至まるるや、これを掠奪するは貧しき者の權利では無いかとつぶやいたと云ふが如き凶險不逞の性があらはれてゐる、この露西亞の淫婦と同棲し、何かと云へば決鬪し、監獄を恐れざる、その頃の生活は無賴漢として徹底して居るのである。彼は一度び法廷に於て裁判官に向て、吾等を放免せよ、それは罪を犯したことが無いからと云ふのではない、もう一度やるからといふのである、これでは際限が無いではないか、放免せよと、云つたと云ふことである。この暴言をはける者、即ちファシストの「親方(ドゥチェ)」である。

ムツソリニは、ボリセヴヰキ撲滅を標榜して羅馬に進軍したのであるが、工場占領の第一着手を爲したる、一九一九年三月のダルミンの工場占領は、實にムツソリニの煽動したるものである、一九一九年の六月から七月にかけて、全伊太利を騷がせる食料一揆もまた同一人が煽動したものである。亂麻の如き混亂は、ムツソリニ及びその黨與の畫策によるもの多きを見れば、姦雄としてえらいものであると云はなければならぬ。

羅馬への進軍

羅馬に進軍したる者二十萬とはファシストの揚言する所である、二十萬人が一時に羅馬に入ることは鐵道の能力上全然不可能である、實數は僅々八千人なりしと云ふことである。大袈裟なる虛僞の宣傳をすることはムツソリニの自ら得意とする所であつて、彼は自分の成功の原因の一は、自分が新聞記者であつたことであると云つて、それを誇つて居るさうであるが、今日露西亞と伊太利の政府ほど宣傳に腐心して居る者はあるまい、彼が狙撃せられた時には、いつも平然として顏色も變へずに居たとか、莞爾として笑つたとか云ふ電報が見えるが、それも宣傳であると云ふことである、甚だしきは、人を使つて自分を暗殺するの企を僞計せしめ、これを宣傳に用ゐんとしたと云ふことさへもあるのである、一人で四五大臣の椅子を兼ね、しかも精力尚ほ餘りありと傲語して居るのも、裡面に仕掛けがありはせぬか、一九二三年十一月二十五日のデイリイ、クロニクルに、「親方」が一省から一省にと動き回はつて、國家の重大問題を即時に解決し、大使を引見し、ファシストを檢閲し、朝は早くより乘馬を試み、夜はミランまで自動車を驅ると云ふやうな話は皆稱の如き宣傳であると書いてあつたと或る書に引用してある、彼は宣傳を以て、首相たるの最も主要なる仕事として居るが如くである。

羅馬に進軍せる所謂る二十萬人のファシストは種々雜多の分子より成つて居り、決して純粹なる愛國的熱狂者とのみ見る

ことは出來ぬ、ファシストの內容を成す者には、資本家地主の自ら擁護せんとする者もある、俸給生活者の勞働階級に對する優越感よりする反感に本づく者もある、唯だ騷擾性を滿足せしめんとする者もある、されば今までボルセヴヰクだつた者も無數に加はつて居る、その一團を見るとき、青年學生在鄕軍人の間に、野卑なる顏付きをして、わざと粗服を纏ひながら、ダイアモンドの指環をはめて居る戰時成金を見るのは奇怪なる現象である、銘々種々の利益や感情から寄り集まつたものである。これを單純に純潔なる愛國者の群と見ることは出來ぬ、本より中には多數の熱烈にして無垢なる愛國者も居るのである、然れども、彼等は欺かれてムツソリニの野心の道具となれる氣の毒なる人々である、――予がこれを云ふのは、ファシストの眞相を發いて自ら快なりとせんが爲めではない、日本の愛國運動者に警告する所あらんと欲するが故である。

羅馬への進軍の行はれたる一九二二年の秋には、もうボルセヴヰキ運動は餘程下火となつてしまつて居たのである、伊太利は露西亞とは違ひ、ボルセヴヰキ革命は行はれ難き事情にあつた、社會黨はこれを誤算して居つた、その一時盛んなりしは戰爭後の不平の鬱積せる爲めであつて、これに加はつた大多數は社會主義の何たるかをも知らぬ人であつたのである、從つてその運動たる散漫にして統一なく、領袖は言論に雄なるも、實行の能力なく、幾たびか來れる好機を逸し、人漸くこれに飽き、一時天を燒くかに見えたるボルセヴヰクは、全然その勢を失ひ、危險は確實に去つてしまつて居たのである、此の時に於て羅馬への進軍行はる、此は必然の勢たる救國の運動と云はんよりも、野心の爲にせる人爲的謀反であると明かである、されば、ムツソリニはボルセヴヰクを撲滅せずして、國王と國會を打倒した、暴力を以て道理と正義とを蹂躪し、凶暴なる獨裁政治を樹立したのである。

國立暴力團

ファシストは一定の主義も政綱も無くして政府を取つたのである、革命主義なるが如く、社會主義なるが如く、サンヂカリズムなるが如く、國民主義なるが如く、ファシスト自ら之を知らぬのである、その政權の地位に立てるの初め、何を爲さんとするかは、ムツソリニ自身之に答ふることが出來なかつた、然れどもファシズムは決して理論ではない、これに向つて主義を尋ぬるは愚である、若しその特色を求むれば、一に暴力にある、その起れる、その勢を得たるも、皆暴力に依つたのである、實に傍若無人に、全伊太利に亘つて、暴力を振つたのである、眼中法律も國

家も無く、暴力に依て遂に國家を奪つたのである。政權を取るに至るまで、暴力を以て唯一の手段とせるファシストは、國柄を握るも矢張り暴力を以て國家を統治して居るのである、こゝに至ては、如何にするもムツソリニを寛假することを得ぬ、彼は道理と正義との敵である、予の如き國家を以て最高の道徳と爲すもの、斷々乎として、國家の名に於て彼を責めなければならぬこと、露西亞のボルセヴキク獨裁政治と異る所は無い、今や伊太利は國權を以て組織せられ、國民の租税を以て養はれ、國法を無視することを官許せられたる國立暴力團の支配する所となつて居るのである、而して、その暴力團の「親方」が即ち首相である。

一九二二年以後頻々として起れるファシストの暴力施行は、殆んど新聞紙上毎日の電報に見ることであつて、人は最早やこれに慣れ、その事實を叙するを煩ろうるさしとするであらう、棍棒を以て人を撃ち殺し、住家を掠奪してこれを焼き拂ひ、無辜と否とを問はぬ、婦人も子供も皆その犠牲となるのである、實に人類ありて以來の凶暴無道が演ぜられて居るのである、ヒマシ油を口から注ぎ込んで、これを「教訓」と云ふが如き、これを何と評すべきかを知らぬ。而して、ムツソリニは屢々外國に宣傳して、ファシストは最早や暴力を用ゆるものでは無いが、黨中尚ほ不逞兇暴の徒ありて、時々暴行の行はるゝは遺憾なりなどと云つて居るが、事實幾多の暴行は、内閣に於て彼の部下に居る高等の官吏と共に立案せられ命令せられて居ることは澤山の證據も上つて居る、公然の秘密である、ムツソリニの「生命を困難ならしめよ」とか、「生命をイムポツシブルならしめよ」とか云ふ自署の文書も發表せられて居る、奸譎にして不逞なる憎みても尚ほ餘りあるではないか。ムツソリニ及びその黑シャツ黨は屢々「新文明」を建設するのだと云て居るが、これが彼等の所謂る「新文明」である。

伊太利にはムツソリニの下に三十八萬の國民兵が居る、これ國費を以て養はれて居る暴力團であつて、「國民安寧の爲めの義勇民兵」と稱して居たのだ、實は國民の安寧を破壊することをその任務として居るものである、殺人、毆打、放火をその仕事とし、一朝にして變じて「スクアド」となる。「スクアド」とはファシスト最高幹部の指揮の下に、暴力を振ふの一團であつて、脅嚇暴行殺人を以て目的とし、その本部は政府の建物の中に在る。その會議には警視總監義勇兵司令官も列席することがあるのである、かゝる暴政が二十世紀の今日、歐羅巴のまん中で行はれて居るのである。

ムツソリニの暴力政治の非道なるを暴露して、漸く民心を失

ひ、有力なる人物をして公然反對を聲明するに至らしめたるは、かのマテオチ暗殺事件である、一九二四年の總選擧は全然暴力に依つて、フアシストの勝に歸したものである、ヒマシ油と棍棒と、拳銃と放火とに依つて得られたる投票であつた、マテオチなる議員あり、敢然として、議會に於て政府を攻擊したのである、マテオチの論は本より正論であり、その爲すままにして置けば、どうしてもフアシストの巨魁を罰せねばならぬことになり、ムツソリニも運の盡きであると見られた、そこでムツソリニ及びその周圍の惡漢等はこれを亡きものにせんと企て、遂にフアシストの巨頭の手を以て、マテオチを街衢に暗殺したのである、そのムツソリニの指揮に出てたることはその後幾多の事實に依て明白になつた、ムツソリニの新聞局の長として最高幹部に居り、此の暗殺に關係したロツシと云ふ者が、種々の事情から覺書を發表し、奇怪なる醜態は全世界を驚かしたのである、その經緯を書くと面白いけれども、長くなるから略するが、ロツシはその悉くムツソリニの直接の命令に本づくことを白狀して居る、ロツシの文書には他の多數の事件に於ても、暴行のムツソリニの意圖に出てたる證據が、提出せられて居るのである、ムツソリニは窮して遂に議會に於て、「予は道德上政治上及び歷史上の全責任を負はん」と云つたが、肝心の刑法上の責任は遂に負はぬのである。

フアシストの暴行を行ふや、常に官憲の了解を得て居るか、然らざるも警察官は見て見ぬ振りを爲し、また多くの場合には之を援助して居る、その證據も上つて居る、事件が社會の問題になつても取調べの結果は何時もきまつて居る、「下手人は不明」と云ふのである、已むを得ず犯人を捕縛することがあつても、裁判官もまた自らフアシストであるか、又はその脅迫が恐ろしいから、無罪を宣告する、能く〱の場合には有罪を宣告するけれども、いつも、間もなく赦免せらるるのである、而して、彼等は憚る所なく暴行を繰り返へす、かくの如くにして伊太利を無法の國家と化してしまつた。

憲法蹂躪

マテオチ暗殺事件に對する非難囂々として起り、國民の反感も高まり、議會に於ける攻擊の猛烈を極むるや、ムツソリニは演說して、憲法に議會は大臣を彈劾するの權利ありと規定してあつても、全國はフアシストを以て充ちて居り、議會に於ても、フアシスト大多數である、フアシスト自らフアシストを彈劾すると云ふことがあるものか、一切を決するものは力であると、殆んど正氣の沙汰とは思はれぬ暴言を吐いて反對黨を脅やかし遂に

反對黨議員百二十四名を除名すると云ふの、憲法史上未前の暴擧を斷行した、心ある國民は此の憲政の危機に際して、國王が何等かの行動に出て、立憲國王の任務を果たさんことを望んだが、「戰爭の囚人」たる國王は、最早や、事實上軍隊の統帥者に非ず、ムツソリニは彼の大臣では無くして、事實上の大元帥である、國王もまた屛息して手も足も出ず、唯だムツソリニの鼻息を窺ふのみ、立憲君主國たる伊太利は既に亡びた。

一九二四年四月の總選擧なるものが、極端なる非立憲的のものである。暴力の威嚇に依て前議會を解散し、選擧法を改正して、ファシストが半數以上の投票を得たるときは議員の三分の二を、ファシストより出たし、殘り三分の一を他の數多の黨派に分配するものとした、天下これ程馬鹿々々しき亂暴なる選擧法があらうか、而して、愈々選擧となれば、全伊太利にて、反對黨に對し、あらゆる壓迫を加へ、其の口を箝し、其の手足を縛し、演說もすること能はず、印刷物も配ること能はさらしめ、候補者の名前すらも發表することを禁じ、郵便電信も反對黨の使用を許るさず、反對候補者は脅迫せられ、毆打せられ、誘拐せられ、放逐せられ、殺された者もある、投票場はファシスト暴力の下に置かれ、投票の自由は全然干犯せられ、而してファシストの爲めの不正投票は無數に行はれた、かくして成れる議會を尙ほ國民代表の議會と云ひ得るか、ムツソリニ最初の豫定計畫の如く、伊太利には最早や國王も無く、議會も無くなつたのみか、否、伊太利國家も無くなつてしまひ、ファシスト國家が出現した、ファシストに非ざる伊太利人は國民たるの權利を奪はれて居る。憲法も法律もなく、ムツソリニの欲する所即ち憲法であり法律である、ムツソリニは我は國家それ自身なりと考へて居るのである。

ムツソリニの將來

人或は曰ふ伊太利はムツソリニに依て救はれたりと、何ぞ夫れ然らん、赤色ボルセヴヰキ去つて、白色ボルセヴヰキ來れるのみ、かの如き暴政の下に居る伊太利人を幸福なりと云ひ得る者は一人も無からん、伊太利人が早晩ファシストの迷夢より醒むるとき、ムツソリニの運命は玆に盡きるであらう、伊太利人は頗る感激性に富み、變亂を好み、戰後の神經衰弱の餘病として、燥狂なる誇大妄想に陷れるもの、ムツソリニ出現の一大原因であるが、時を經て平靜に歸するに至ればムツソリニの如き無賴の徒いかでか長く國民の信望を繫ぐことを得べき、その倒るゝや期すべきのみ、既にその氣勢はあらはれて居る。かくの如き亂暴狼藉なる一九二四年の總選擧に於てすら、總投票數七百萬中、實に二百五十萬は政府反對の投票であつたのである、これ眞に命懸けの投票である、公平に投票せしめたならば、どちらが多數であつたか分らぬと云はれて居る、暴力を恐れず敢然

反對を表明したる者三分の一强あるを知らば最早やムツソリニは末路近づけりと覺悟しなければならぬ、これ彼の益々凶暴手段を弄し、宣傳に死に物狂いとなれる所以である。

元來個人の獨裁政治なるものは、極めて脆弱なるものである、その何等プリンシプルの上に立たざるとき益々基礎の危ふきは云ふを待たぬ、ナボレオンと雖も永續することを得なかつた、ムツソリニは衒氣滿々、我はナボレオン以上と云て居るそうであるが、笑ふに堪えたり、國民は何時までも恐に壓迫し得るものではない、道理と正義とは何時までも眠つて居るものではない、ムツソリニの前途や風前の燈火の如くである、而かも、獨裁政治は常に幕下より破綻を生ずるのである、伊太利の政論家にして既にその形情の崩せることを云ふ者も少くない、伊太利の學者フエレロは今やムツソリニは部下數匹の狼の耳を捉らへて居るが、ちよつとでもその手をゆるめたらんには、狼は直ぐに彼に飛びかゝり彼を寸斷するならんと云て居る、これ歷史の先例を逐ふものであつて、獨裁者の甘んじて受くべき刑罰である。

國會政治の信用地に墮ちて、大戰後の混亂動搖の裡に、暫らく獨裁政治の起れるを見たるも、その哲理的には國家の本質に反し、歷史的には時勢の進運に戾るものなること、云ふを待たざることである、獨裁主義が將來永續すると考ふる者は、世界を擧げて一人もあるまい、國民全體の力を集結して、これを極度に發揮し、國民全體の均等なる利益を圖り、その相關連續相共に生存發達するを期するは、正に人類の國家を成す所以、文明進步の方針である、人類はこれが爲に國家の創造に努力しつつあるとき、呪ふべきは獨裁政治である、そのプロレタリアたるとブルヂヨアたるとを問はぬ、悉くこれを排斥せねばならぬ、況んや一個野心家の獨裁政治をや。

○

予は信ずる、我が國體の精華は、天皇在ますに依て、國民一心、人皆揃つてその人格を完成しその本性を充實し、永遠に國家を創造し文明を發展し、道德の理想に到るを得るに在ることを。日本人は此の信念を基礎とし、確實にこの上に立脚して、以て政治の方針を定めなければならぬ、右なるも、左なるも、軌道を離るゝは斷じてこれを非なりとしなければならぬ、人類自ら人類を信ずること能はず、國家を破壞せんとする者の極力排斥すべきは云ふを待たざるも、一時の變態に乘じ、愛國の名に於て野心を逞くせんとするもまた許すことを得ぬ、これひとり道理の容れざる所なるのみならず、此の國體を有する我が國に於ては如何なる種類の獨裁政治も之を行ふの必要もなく又その發生すべき餘地も無いのである。

美保關事件の責任と水城大佐の自殺

水野廣德

最近新聞で評判の良き事件が二つある。一は松方巖氏の辭爵問題で、他は水城大佐の自殺問題である。十五銀行の破綻に對し、時の頭取たりし松方氏の法律上の責任論は別とし、同氏が自己の過失怠慢若くは不明により多くの人々に多大の損失を與へたることに對して道德上の責任は免れない。松方氏が深く其の責任を感じ、私財全部を提供して裸一貫となり、華族の體面を維持し得ざるの理由を以て爵を辭したるは、社會人として當然の事とは云へ、其の心事に對しては大に同情せざるを得ない。

水城大佐は軍艦神通の艦長として、昨秋行はれたる海軍大演習の際、美保關沖に於て驅逐艦蕨を衝沈し、艦長以下百名の乘員を殉難せしめたる當の責任者である。美保關事件は平時に於ける海軍稀有の悲慘事であつて、當時世間の一部では海軍人事行政に對する非難の聲さへ起り、暗に當事者の力倆を疑ふ者も無きにしもあらずであつた。然るに水城大佐が「全責任を負ふ」との一語を軍法會議の法廷に殘し、判決を待たずして自殺するや、世間は忽ち大佐を以て武士の典型とか軍人の龜鑑とかに祭り上げ、事件に關する一切合切を水に流して仕舞つた。死は萬事を解決するとか言ふが、水城大佐の死に依つて美保關事件は「永久未解決」と云ふことに解決した。

水城大佐は妻子同僚に對する一通の遺書狀もなく、事件に對する一節の感想文もなく、判決豫定日の前日自宅に於て不斷着のまゝ突如として自殺したのである。從つて自殺の原因が事件に對する責任感に依るものか、自己の將來を悲觀したるに依るものか、或は又神經衰弱の發作に出づるものか全く不明である。併しながら乃木大將の自刄は殉死其事にあらずして將軍平生の人格に依つて意義づけられて居る。有島武郎氏や芥川龍之介氏やの自殺は其抱ける平生の人生觀に依つて意義がある。水

城大佐の死も亦其の眞の機因が何であらうとも、大佐の平生に依つて種々の意義を持つことになるであらう。

水城大佐の人物に對する友人同僚の評に依れば、大佐は乃木將軍型の極めて眞面目なる精神家であつたと云ふことである。此評より推して、大佐の自殺が決して將來に對する悲觀や神經衰弱の發作の爲めでなく、必ずや軍人氣質の強い責任感に出でたるものであることを信じたい。

海軍々人として専門的見地よりすれば、美保關事件に對し水城大佐に責任がありしや否やは、事件が不可抗力なりしや否やに依つて決する問題である。然るに新聞に表はれたる軍法會議審問の斷片のみにては、該衝沈が果して不可抗力なりしや否やを斷定することが甚だ困難である。元來海上衝突の不可抗力とは天候若くは機械故障等の爲め艦船の操縦自由を失したるか、或は相手艦船の行動が不當にして衝突を避くるの暇なかりしかの場合に限るのである。神通の場合に於ては天候にも機關にも故障は無かつたのであるから第一の場合は適用せられない。第二の場合としては相手艦たる蕨が沈沒し、艦長以下責任者の全部が殉難したる爲め其の行動の眞相が判らない。

併しながら多くの専門家より成れる査問會が愼重綿密に調査の結果、事件を軍法會議に移したる點より考ふれば、其の不可抗力にあらざりしことを疑ふに充分の餘地がある。殊に軍法會議に於ける審問中、艦長と航海長との言に一致せざる點ある如きは、其の眞僞何れにあるにせよ、時の狀況判斷を誤りたるの疑をして益深からしむるものがある。左れば査問會が事件を軍法會議の審判に附し、檢察官が刑法第百十九條及第二百十一條に照らし罰金六百圓を求刑したるは、夫々の職責として當然の行爲であつて、決して水城大佐に對する不法の壓迫でも、失當の處置でもない。

併し右は艦船の保安を以て唯一の目的とせる平時の場合を律する純理論であつて、戰時並に演習等の如く艦船の保安以外に他の大なる目的を有する場合に於ては大に事情を異にするものが無くてはならぬ。美保關事件は演習中の出來事である。演習は戰爭の稽古である。戰爭の第一目的は戰に勝つことであつて艦船の保安ではない。敵を敗ぶる爲めには味方の損害を厭はぬものである。而して敵を敗ぶるの法は彼我軍隊の殺し合ひである。彼我軍隊の殺し合ひである。そこに人命並に艦船に對する大なる冒險がある。戰爭に危險は附物で、危險を冒さずして勝利を求むることは、恰も足を濡さずして水を渡ると同樣の不可能事である。しかも多くの場合に於ては危險が大なれば大なる程、依つて得らるべき勝利も亦大である。

日本海々戰に於ける我海軍の奇蹟的大勝は我艦の丁字頭に於ける我艦隊の敵前同頭に依つて導かれたのである。此の敵前同頭こそは古今の海戰史に比類なき大冒險で、一歩を誤まれば我艦隊は全滅したのである。東郷長官の旗艦三笠が敵艦隊の集射を受けて水煙に包まれたる時、若し一發の彈丸が三笠の要部に命中したならば、我艦隊は恰も前年八月黄海の海戰に於て、敵の旗艦ツェザレウヰチに命中したる我一發の彈丸の爲めに潰亂に陷つた露國艦隊の轍を踏んだであらう。あの時に於ける一發の敵彈こそは世界の名將東郷をして古今の愚將たらしむるの力を持つて居たのである。當時敵の彈丸は三笠に達しなかつたのではなく、唯偶然に中らなかつたまでゝある。從つて東郷長官の冒險は理性的成算の下に行はれたと云ふよりも、寧ろ運命の偶然に依つて成功したるものと言ひ得るのである。

戰爭は時に臨み機に應じては、斯くの如き乾坤一擲の大冒險をも決行せねばならぬのである。其戰爭の稽古をするのが演習である。素より不必要なる冒險や不注意なる行動は演習のみならず戰時と雖も堅く禁ずべきであるけれども、あまり危險を恐れて大事を取り安全第一主義に墮しては演習の實績は舉らない。殊に最も危險なる暗夜に於て最も大膽なる行動を必要とする驅逐艦の如きに至りては、多少の犧牲を拂ふことを、乘員も國民が演習を嫌忌するのであつたならば、實戰に役立つ軍隊は出來るものではない。獨り我國のみならず年々行はれる各國海軍の演習に於ても多少の犧牲の生ぜぬことは殆んど稀である。既に軍備の必要を認める以上、演習の必要も認めねばなるまい。演習の必要を認める以上、之に依つて生ずる犧牲も亦覺悟せねばなるまい。人命や艦船の貴重なるは言ふ迄もないけれども、演習中に發生したる事件に對し、國民があまりに神經過敏に騷ぐことは軍備の本質を忘れたるものである。

水城艦長の軍法會議に於ける陳述に依れば「敵軍の探照燈の爲め目が眩んで仕まつた」とある。軍艦に備ふる強力なる探照燈の爲めに眼が眩んで物の見えなくなることは人間生理上の不可抗力である。即ち當時の水城艦長は視力に關する意識喪失者であつたのである。刑法に依れば意識喪失者は親を殺しても其罪を問はれない。しかも其が飲み過ぎの爲めの意識喪失でも構はないのである。水城艦長は職務の爲めに一時的視力喪失を據なくされたものである。故に其れに依つて生じたる行爲に對しては罪を論ぜらるべきでない。ドロンケンが親を殺した罪が酒にあるならば、水城大佐が艦を乘り沈めた罪は探照燈にある。演習中艦長が視力を喪失したのが悪いのでなく、艦長をして必然的に視力を喪失せしむる如き探照燈を使用するのが悪いのであ

る。若し探照燈を使用するにあらざれば演習が出來ぬと云ふならば、責は演習其のものに在りと云はねばならぬ。故に蕨衝沈の直接の原因が、水城艦長の視力喪失に在りたりとするならば、同艦長は其責を問はるべきでない。若し自分が水城大佐の辯護人であつたなら、此理由に依つて無罪を主張し、軍法會議の判士長であつたなら無罪を宣告するであらう。

聞く處に依れば、水城大佐を軍法會議に付することに對し、軍令方面に於ては演習中の出來事をば刑法を以て擬するは、軍の士氣を損するとの理由を以て之に反對し、軍政方面に於ては士氣の理由を以て國法を曲ぐべからずとして之を主張したと云ふことである。海軍としては誠に痛し痒しの問題で、恰かも宮崎縣知事の選擧違反事件に對し、政府部内に於て政友會の士氣論と國法論とで起訴不起訴の意見一致せざると全然同一である。なればにや水城大佐が軍法會議の判決を待たずして自殺するや、世間の一部では早くも海軍が士氣も損せず、法も曲げざる兩得の手段として大佐に詰腹を切らしたなどとの馬鹿氣た邪推を抱く者さへ生じたのである。併し我等は海軍當局の公明正大を信じて疑はない。

水城大佐自殺の是非に就いては玆に論ずることを避けたい。併しながら若し自殺が是認せらるゝならば、その決行に三つの時機があつた。即ち一は事件の直後、二は軍法會議判決前、三は同判決後である。而して大佐が二の時機を擇びたるは恐らく其の宜しきを得たるものであらう。大佐の自殺に就いて我等の言はんと欲するところは自殺其事に對してゞなく、自殺に對する世間並に海軍當局者の態度に關してである。

縱令形式的とは云へ、水城大佐は海軍々法會議に於ける刑法上の被告人であつた。其被告人が一たび自殺するや、世間は之を弔ふに軍人の龜鑑を以てした。水城大佐が責任感の爲めに自殺したことが軍人の龜鑑であるならば、將來或は再び斯る事件の發生したる場合、責を負ふて自殺せぬ者は軍人精神を有せぬことを意味するものである。如何に軍人だとて命の惜しくないものはあるまい。衝突事件の發生したる場合、常に死を以て天下に謝さねばならぬことゝなれば、多くの軍人は今後の演習に臨んで、障はらぬ神に祟りなし安全第一の事無かれ主義を取るに至るかも知れない。然る時演習は何等の緊張味もなく、何等の眞劍味もなく、唯軍艦の鬼ごつこに過ぎぬことゝなるであらう。是れ海軍として最も憂ふべき事でなければならぬ。水城大佐の自殺は大佐自身の心の滿足と安靜とを求むる點に於て強いて責むべきでないかも知れぬ。併し世間が無反省に無條件に之を賞揚することは聊か考へ物である。殊に海軍當局者までが恰

かも我子が手柄でもしたかの如く無闇に褒め立てゝることは思はざるの甚だしきものである。大佐の自殺を賞揚して軍人の自重を警に祭り上げるよりも、大佐の自殺を遺憾として軍人の自重を警しむる方が、海軍々人の士氣を鼓舞する上に於て遙かに有力であらう。同情と稱讃とは意義が違ふ。大佐の死は誠に同情すべきであるけれども、果して稱讃賞揚すべきであらうか。

日露戰爭中、軍艦春日が暗夜濃霧の爲め僚艦吉野を衝沈し多くの殉難者を出したることは美保關事件に酷似して居る。戰時のことゝて査問會も軍法會議も開かれざりしとは云へ、春日艦長は自殺することなく引續き軍國の爲めに盡したのである。軍人が國家に奉ずる點に於て戰時と平時との差別はない。我國民は水城大佐と春日艦長と孰れを正しとするであらうか。封建道德の遺風として我國民は今尙ほ死を讃美する習性がある。元來死は人間の最も難しとするところであると共に屢弱者の避難所として撰ばれる。

松方巖氏は銀行破綻の當時責を負ふて自殺したなら、私財提供も公爵辭退も恐らくせずに濟んだであらうと思はれる。夫が或は家名を辱しめざる東洋流の孝道かも知れぬ。然るに死に依つて責任を免れるの道を取らず、裸一貫の平民となつて生きて居るところに我等は松方氏の眞の責任感の强きを見出すもので

米佛不戰條約問題

米田實

一

昭和三年新春の劈頭に、我等の興味を喚び起したものは、米佛不戰條約草案全文の發表であつた。それが「兩國互ひに國民の名に於てあらゆる戰爭手段を拒否し戰爭を以てその國策實行の一手段となすを排斥す可き旨嚴かに誓ふ」と共に「兩國間に生ずる紛爭はその性質及び原因の如何に拘らず之が解決に當つては、平和的手段の外、途を選ばざることを誓約する」と聲明したのは、確かに國際平和主義の氣勢を高むるものであらねばならない。而して米國は獨りフランスと此條約を造るばかりではなく、イギリス、日本、イタリー、ドイツなどとも不戰條約を企圖して居り、對佛交渉はその第一歩だと考へてゐるのだから、之は亦た列强外交の一重要問題であらねばならない。

依つて予は、如何なる經路で此問題が現はれたか、此案の實行方法として如何なることが考へられてゐるか、將た米國提案たる可しと思はるゝものの長短並びに日本の立場などにつき、玆に少しく所見を述べ度いと思ふ。

二

然らば此問題を提起したのは、誰か。米國側かと言ふに、ソウでは無い。例の國内でも協和的遣り方で諸政黨、政治家を操縱し、十回も首相となり得、外國に對しても調和的であり、四百年間の仇敵ドイツとさへロカルノ安全保障條約を造つたフランス國外相ブリアン氏が其人である。それは昨年四月六日のことであつた。昨年四月六日は米國が大正六年世界大戰に參加した日から丁度十年目の記念祭に當るので、ブリアン氏は之を慶賀すると共に、米國々民を相手に、公開的に米佛不戰條約を提唱したのであつた。勿論之は「普通の外交的手續」で無かつ

た。しかしそれはフランスの國柄に照し、內閣會議の同意無くして、行はれ得る所では無かつた。ブ氏は唯だ米國の如き民主的な國家に向つては、「公開的宣明」の方が有効だと位考へたものであらう。蓋しブリアン氏は一年半以前（一九二五年十月）不戰主義のロカルノ協約をドイツ以下諸國と造り得て、得意滿面であつたので、米佛仲裁條約の期限滿了切迫せる折柄、米國とも不戰條約を造つたら善いと思惟したのである。米佛仲裁條約の滿期は本年（一九二八年）二月二十七日だ。それまでの十箇月間交渉を終ゆれば好都合でもあつたのである。殊に米佛間には戰爭の危險こそ少いけれども、未解決のまゝに殘つて居る戰時債務問題（一九二六年四月調印せられた還債協定は批准されずに居る。）があり、又關稅問題がある。兩國不戰條約は平和保障以外にも双方の親善融和を齎らす外交的副産物があるに於て、所謂不和を欲求する彼の良心は、一層刺戟を受けたであらう。

だが、此提案に接した米國は「渡りに舟」であつたのである。歷史的に國際平和の首唱者であり、人道論の鼓吹者である自らも斯く任じてゐた同國は、近年運命の「廻り合せ」から、他の孰れの國よりも最も此本領から遠かつて居た。ソコデ此本領回復の機會をほのめかしたフランスこそは、米國にとりて「福の神」で無くとも少くとも「救ひの神」であつたのである。顧みると、十八世紀末葉から十九世紀にかけてイギリスとの間に結んだ例の「ジェイ」條約で仲裁主義を國際政治に入れたのは、米國であつた。此下に於てこそアラバマ請求權訴訟は行はれ得たのであつた。十九世紀（一八九九年）の第一海牙會議二十世紀初年（一九〇七年）の第二海牙會議でドイツ等を說得し兎も角も仲裁々判制の成立を見せしめたのも、米國の盡力が最も重きに居つたのである。又た一九〇七年に中米平和裁判條約を成立せしめ、翌（一九〇八年及翌々年）世界諸國と十九の仲裁條約を造り、一九一三年及一九一四年に約三十國とブライアン平和委員條約を造つたのも米國であつた。併し世界大戰後になると、ウイルソン大統領等が苦心した國際聯盟規約が上院共和黨の黨略から出た反對などで、批准を拒否せられたのを機會に、米國のみ世界五十餘國の平和聯盟の外に立つと言ふ變態を見たのである。だが共和黨とて國際紛爭の平和解決に無關心なのでは無い。故に前大統領ハーデング氏は、一九二三年二月「米國の國際司法裁判所」參加提案を議會に寄せ、その逝去後、新大統領クーリッヂ氏も亦た此主張を繼承し、一昨一九二六年一月に至り、米國上院は條件附で國際司法裁判所參加を決議したのであつたが、國際聯盟參加諸國は無修正で米國主張の條件を受諾し得ぬので、一昨秋クーリッヂ大統領は「絕望」を聲明し、頗

後教書等で「國際司法裁判所」を語らなくなつてゐたのである。

けれども、此「平和策の行詰り」が米人殊にその平和主義者にとりて、頗る苦境であつたのは言ふ迄も無いところであつた。故に昨年四月ブリアン氏の提案が米人間に歡迎せられたのは、怪むに足ら無かつた。即ちブリアン氏の提唱があると三週間を經ざるに、コロムビヤ大學總長バツトラー博士は之が急速實現の要を呼號した。その後、例の「アメリカン、ファウンデーシヨン」は四月二十九日エール大學總長エンゼル博士、コロムビヤ大學總長バツトラー博士、陸軍少將ブリス以下諸名流の贊成を得たる「不戰條約草案」を公表し、五月三十一日コロムビア大學のショートウェル及びチェンバレーン兩教授の起草に成る別案も發表せられたのである。又た昨年十月チャップマン夫人は婦人團體を中心とし、平和主張を高めた。而して昨年十二月六日クーリッヂ大統領は議會に送れる教書に於て「不戰條約に對する希望」を暗示し、翌七日下院外務委員フイッシュ氏（ニュヨルク州選出議員）は議會に於てフランス、イギリス、日本等との不戰條約締結の要を說き、且つ「ブリアン氏提唱の公文を議會に廻付せんことを求むる」決議案を提出したのであつた。要するに米國はブリアン氏の提議に於て、自己の平和策にとりての局面打開の絶好の機會を發見したと言つても過言では無いと思ふ。

三

以上に述べた所は、所謂不戰條約問題の來歴である。かくて我等は米國がフランス其他と結ばんとする「不戰條約」其ものの內容に進まねばならぬ。

然らば同條約はドンなものか。若しくはドンなものたらしむ可く米國は考へてゐるか。各種の點に米國の立場を考慮し、自己一流の見解を持つ米國は「不戰條約」てふ漠たる點こそフランスの言を聽くだらうが、條約の內容になると必らず自己の主張を實現せんと試みるだらう。殊にフランスのみで無く、日本、イギリス、ドイツ等とも同一のものを締結せんとするに於て、必らず益々然る可きを思はねばならぬ。と言つてフランスの條約案も米國の條約案も未だ具體的に發表せられて居る譯では無いから、今日の處、之迄に現はれてゐる諸資材に照して、かくもある可きかと推定を試むる外は無いのである。

先づ米國提唱の不戰條約案は、第一、ロカルノ條約に見ゆるものに似たる「不戰」規定を含むのではあるまいと思はれる。蓋しフランス側、米國側に行はるる所說に照すに、今度の新らしい「不戰規定」は一九二五年十月十六日ロカルノ條約に刺戟せられ或程度迄之に範を取ることと思はるるからである。ロカ

ルノ諸協約中、ドイツ、フランス、ベルギー、イギリス、イタリー五國間條約第二條に、

「ドイツ國及びベルギー國並びにドイツ國及フランス國は何れの一方よりも攻撃又は侵入をなさず且つ如何なる場合に於ても戰爭に訴へざることを約す」

と規定し、唯だ右規定を適用し得ざる例外の場合として（一）正當防衛の權利を行使する場合、（二）國際聯盟規約十六條に依りて他國（規約を無視して戰爭行爲に出でた國）に制裁を行ふ場合、（三）國際聯盟の總會、理事會の決議に依る場合を擧げてゐる。米國は右の内の根本規定を採用し、「米佛互ひに戰ひに訴へざることを定むるだらう。而して「例外」の點になると、自己が聯盟國でないので、自らロカルノ條約と規定を異にした案を考へてゐるだらう。否な之のみでなく、根本規定でも「攻撃、侵略の戰爭を禁止するに止めずして一切の戰爭を禁止する」側に立つのであるまいかと思はれる。

だが、米佛兩國間若くは米國と他の孰れかの國との間に戰爭をせぬと約束する丈けでは駄目だ。戰爭の原因となり易き國際紛議を平和に解決し得る方法が講ぜられるので無ければ、戰爭せぬと言つても戰爭は來るのである。故に所謂仲裁組織に依る平和解決方法の完成が不戰條約の最要點たらねばならぬのは言[illegible]と諸外國との仲裁々判條約の改訂に、丁度コウ言ふことが行はるる好機會である。此度に仲裁制度を完成して不戰條約としようと言ふのが、恐らくは米國の心事であらう。

然らば現行の米國及他國間の仲裁々判條約はドウかと言ふと、之は滿二十年以前（一九〇八年、明治四十一年）に米國が諸外國と締結したものだ。一九〇八年二月第一番にフランスと締結し、第二番にスヰスと締結し、同三月メキシコ及びイタリーと、同四月イギリス、ノルウエイ、ポルトガル、スペインと締結し、五月に入りてオランダ及我日本と締結し、次でデンマルク、スウエデン、支那、ペリユ、サルワドルと締結し、其他は後れて翌一九〇九年に締結したのである。即ちフランスが最も早く出來、イギリスとの條約が第五番目に出來、我日本との分が第十番目に出來たことを記憶すれば善い。而して此仲裁々判條約は滿期となる毎に、新たに繼續を約束せられて、今日に至つたものである。日米仲裁々判條約の如き、五年の期間なので、三回有効期限延長せられて、最後には大正十二年八月二十四日より五年間延長せられたのだから、丁度本年八月二十四日に滿期となる譯である。ところが此條約さへ完全なものたらば、今更ら「不戰條約」と騷ぐにも當らないが、現行のものは、

不完全で話にならぬ。何となれば同條約は外交手段で處理出來ぬ紛議を海牙仲裁々判に附したのは善いけれども、それは（一）法律問題又は兩國間に存在する條約の解釋の問題に限り、それ以外の性質の紛爭には及ばなかつたのであつた。之丈けならばまだ善いが、更らに「兩締約國の緊切なる利益、獨立若くは名譽に關し又は第三國の利益に關係ある場合は此限りにあらず」を規定したので、全く骨拔きとなつたのである。「緊切なる利益」の問題、「名譽の問題」こそ戰爭を起し易いものであるのに、之を除外しては、何の戰爭防止があらうぞ。此缺點や恐らくは我等の喋々を俟つまでもあるまい。

ソコで米國政府は一九一一年に英國と「すべての問題を仲裁に附する」と言ふ總括的仲裁々判條約を造つたが、上院の批准拒否で失敗に歸した。次で一九一三年及一九一四年ブライアン平和委員條約を造つて上記諸仲裁條約の拔け穴を埋めんとしたけれども、之は「戰爭一ケ年延期條約」と言ふ可きもので、委員は調査してもその報告は拘束力ある決定ではなかつたのである。（歐米三十國は米國と此條約を造つたが、日本、ドイツ、オーストリは之に加つて居らぬ）、即ち二十年以前の缺點は今猶依然たる有樣である。

然らば米國が此仲裁々判條約を不戰條約化せんと考へたら、此際ドウすれば善いかと言ふと、右の「緊切なる利益」「獨立」「名譽」の除外例を止めて、すべての國際紛爭を仲裁々判に附することとせねばならぬ。又た法律的で無い問題で仲裁々判を不適當とするやうなものは何かの調停機關で解決するやうにして、穴を塞がねばなるまいと思ふ。

此點で吾人に參考資料を與ふるものは、エール大學總長エンゼル博士、コロムビヤ大學總長バットラー博士陸軍少將ブリス、宗教家ブレント監督等を含む所謂「アメリカン、ファウンデーション」案である。右は昨年四月二十九日發表せられたものだが、之に依ると、

「國際的性質の紛爭で、外交的手續により解決出來ず或は現在の仲裁條約の範圍にも入らぬものある場合、兩締約國は之を（一）調停（二）仲裁々判（三）司法的決定に附することを約する。調停は双方より二名づつの調停委員を選み、右四名で一名の委員長を選み、之で事に當る。此調停が成功せぬときは、紛爭案件を更らに仲裁々判（海牙仲裁々判所若くは常設仲裁々判）に附し若くは司法的決定（常設國際司法裁判所）に附し解決を圖ることにする。

而して右の間自衛の爲めの外、兩國共に宣戰し、侵略し、軍隊を集中する如きことをせぬ」と言ふのである。之に依ると、緊切なる利益、名譽等の除外例も無く、法律問題てふ制限も消え、「國際的性質」である限り、如何なる紛爭も平和に處理せら

た、且つ戰爭をせぬと言ふことゝなる[illegible]のである。此外に[illegible]三十一日發表ショトウエル案がある。之は大體に於て現行仲裁裁判條約も、ブライアン平和委員條約もそのまゝにし、仲裁々判につきては「緊切なる利益、名譽等の除外例をも維持しつゝ、然かも仲裁々判に附せられざるものを調停に附するの途を講じたことゝ、互に戰爭せぬ約束（或る條約違反並びにモンロー主義に關する場合につき除外例あり）をしたことを特徴とする。兩案共、複雜だから、短文の中で十分紹介することは困難である、だが米國政府の考へつゝある不戰案は、大體右兩案を斟酌したものであるまいかと思はるゝのである。

四

然らば米人の頭に描かれてゐる案を米國政府が行ふものとして、それが不戰條約となるかと言ふと、猶ほ戰爭の機會が絶無となるのでは無い。矢張幾分かゞ殘つてゐる。しかし大體から見て「不戰條約」として推賞を値ひするに違ひ無い。

とは言へ、米國側の考案がフランスにも、日本にも、他の諸國にも面倒なく受け容れられるだらうかと言ふと、予は茲に二つの問題が起り來ることを思ふのである。

その一は國際聯盟に關係する點だ。フランスも、イギリスも他の五十餘國も國際聯盟の一員として國際聯盟が命ずる「違反國に對す[illegible]に對する武力制裁（同十七條）の義務を負ふてゐる。だから問題の成行き如何によりては自國に關係なき問題から起るにしても、米國に制裁を加へねばならぬことも生じやう、尤もロカルノの條約でドイツは巧みに制裁義務問題を處分することを許されたが、米國の案はあまり廣く各强國に及ぶものである以上、簡單には片附られまい。此聯盟關係をどうするかゞ、聯盟支持諸國にとりて又た米國にとりて問題たるだらう。フランスが一切の戰爭をせぬと言ふ米國の提案に二の足を踏むのも此點からだらう。その二は、米國が仲裁より　モンロー主義及び移民問題に關するものを除外しつゝある政策である。之は一九一一年及び一九一二年に英米總括的仲裁々判條約批准を上院が拒否した原因となり、一九一九年國際聯盟規約の二十一條及十五條八項の除外例となつたものであるが、モンロー主義だの、移民問題だのを除外する我田引水的な我儘千萬た遣り口は、今日許さる可きであらうか、問題だ。就中「國內問題」だと移民問題を見る米國の主張は正當なものだらうか。日本などは最も異論を唱へねばならぬ。だがそれだと云つて之を仲裁に含めることにすると、そうした條約を今日の米國上院は批准するだらうか、之れ洵に米國の所謂「不戰條約」の難問だらう。予は米國外交機關が如何に此難問に處するかを注視したいと思ふ。

經濟時評

我國昨年の國際收支

牧野輝智

我國の經濟問題として最も重大なるものは國際貸借の關係がどういふ風に推移しつゝあるかといふことである。近年國民一般が此の問題に注目するやうになつたことは、頗る慶幸とす可きことであるが、私は玆に昨年の國際收支の狀況を檢討し、我國の國際貸借が如何に推移しつゝあるかを研究して見度い。

◇　◇

昨年の我貿易には何人も目につく二つの顯著な事實がある。一は貿易の總額が近年になく不振であるといふこと、他の一つは入超が著しく減じたといふことである。昨年の貿易總額は四十一億六千萬圓で、之は大正十二年以後の最小記錄である。又入超額は一億八千萬圓で之は大正八年以來の減少のレコードである。即ち左の通りである。（單位千圓）

年度	輸出入貿易總額	輸入超過額
大正十二年	三、四二九、九八一	五三四、四八〇
大正十三年	四、二六〇、四三七	六四六、三六七
大正十四年	四、八七七、三〇八	二六六、六八六
昭和元年	四、四一九、五九六	三三一、〇三九
昭和二年	四、一六九、四一一	一八五、二三九

大正九年以來我國の輸入超過額は多い年には六億圓を超へ國民の心膽を寒からしめたが、少い年でも二億五千萬圓を下らなかつた。それが昨年にありては珍しく減少して一億圓臺（一億八千萬圓）の入超となつたから是は喜ぶ可き現象に相違ない。三土藏相などが昨年秋來頻りに國際貸借の狀勢が改善され

たと較べてゐる論者は主として此の點から出發してゐるやうである。が此の入超減は何に原因してゐるかといふと、それは輸出の増加ではなく、輸入が減少したからである。是をその前年と比較して見ると、輸出も五千萬圓ばかり減つてゐるが、輸入の方が約二億圓減少してゐるため、入超が一億八千萬圓程度に減少した次第である。對外貿易の理想からいへば、貿易總額が増加し、輸出入關係の均衡を保つことが望ましい次第であるが、昨年の我貿易は輸入は勿論、輸出額も減少してゐる。是は國際貿易上欣幸とす可き現象ではない。たゞ昨年の貿易に就ては一概に貿易の金額のみから臧否を判斷しかねる事情も存してゐる。此の點を少しく陳べると、昨年の棉花輸入額は七億圓で前年よりか、一億圓ばかり減少してゐるけれども、數量からいふと昨年は一昨年よりか却つて多量に輸入してゐる。それにも拘らず支拂金額が少かつたのは、一昨年の米國棉花の豐作のため市價が著しく低落したからで、此點は我國に採りては大に慶幸とす可きことであつた。然るに輸出關係に於て是と正反對の事情が即ち不利益が存してゐる。といふのは生糸市價の崩落である。昨年の我生糸輸出高は近年にない多額であつたに拘らず、市價崩落のため手取金額は一昨年に比し僅に八百萬圓の增加に過ぎなかつた。詰り國民經濟の全體からいへば棉花貿易上の利益は生糸貿易上の不利と差引かれてとん／＼になつてゐるやうなものである。

◇　　◇

是から進んで輸出入品の重要品目に就て少しく考察を試みて見る。先づ輸出の方からいふと昨年の輸出貿易品中年額二千五百萬圓以上のものは左の九種である。

我國の重要輸出品（△印は減少）

	千圓	千圓
一、生糸	七四三、四二四	八、二七二
二、綿織物	三八三、八三八	△三二、四三二
三、絹織物	一三九、六〇八	六、五四八
四、綿糸	三八、七九四	△三一、九二三
五、陶磁器	三〇、四九八	△二、七〇一
六、メリヤス製品	二九、〇五二	△三、〇四八
七、精糖	二八、八四〇	△五、一八七
八、石炭	二五、五〇七	△五、六一六
九、水産物	二二、一一八	△二、一九八

右の主要輸出品中でも特に重大なるものは、絹製品（生糸及絹織物）と綿製品（綿織物、綿糸及メリヤス類）である。此の

兩出者の輸出額は十三億三千萬圓で、昨年の輸出總額十九億九千萬圓の七割を占めてゐる。生糸絹織物及綿製品の我輸出貿易上の地位は斯の如く重要なもので我が輸出貿易の運命は一に懸つて此の兩者に存すといふも過言ではない。現に昨年の我輸出貿易が前年のそれよりも減少したのは、支那の動亂の影響を受けて、綿製品の輸出が六千七百萬圓ばかり減少したからである。絹綿關係以外のものゝ振否は大局からいえば寧ろ微々たるものである。此の點から考えて我國の産業立國策として纖維工業の改善振興が如何に重要なものであるかは察するに難くないと思ふ。

次に我國の輸入品中五千萬圓以上の額に達するものは左の九品である。

我國の重要輸入品（△は減少）

	昨年輸入額（千圓）	前年との比較（千圓）
一、棉花	六二四、五六四	△一〇一、三七一
二、鐵	一二六、二五一	△六、二五三
三、木材	一〇三、三七二	△六〇六
四、羊毛	九八、八五一	一二、七八九
五、油精	九八、四〇三	△二五、五三九
六、米及籾	七八、七五三	二八、〇九八
七、砂糖	七五、七九九	△七、八七三
八、小麥	五三、九二〇	△三四、四二九
九、豆類	五二、七四〇	△八、六四一

右の中にても最も重要なるものは棉花で、昨年は市價安の爲め前年に比し一億圓以上の支拂減になつてゐるといつても、尚ほ且つ六億二千萬圓の棉花を輸入し此の一品だけで總輸入金額の三割を占めてゐる。是れに次ぐ重要輸入品は、鐵、木材、羊毛油精の四品である。が、昨年に於ける棉花及右四品の輸入額は、十億四千萬圓で、總輸入金額の半額に達してゐる。是等の品目の性質を考ふるに我國の重要輸入品は工業原料又は生活必需品であつて、是等の輸入を阻止すれば輸出貿易にも日常生活にも障碍を與ふることとなる。現に棉花の如きは六億二千萬圓も輸入してゐるけれど、是にて國民の衣類を供給してゐる外に、外國に對して綿製品として四億五千萬圓も輸出してゐる。是を別言すれば棉花六億二千萬圓の中、四億五千萬圓は綿製品の輸出にて決濟し、國際貸借の上では國民の綿衣代は僅に一億七千萬圓だけに輕減されてゐる譯であるから、我國の紡績工業の國民經濟上に於ける重要性は十分諒察することが出來る。それは兎も角として我國の輸入品は上記の如く原料品又は生活必

需品であるから、妄りに是に關税を重課することは國民經濟上重大なる惡影響を及ぼすことを免れない。目下問題となつてゐる銑鐵關税及び木材關税の引上の如きは此の根本問題から見ても十分愼重に考慮する必要があると思ふ。

◇　◇

我國の商品貿易は近年にない入超減で一億八千萬圓も減少したが、尙ほ詳細に考察すると、我國の年々の輸出貿易の價格は大藏省の調査よりも四分乃至五分は多いものと見るべき理由がある。此の誤算を四分とすれば、昨年の輸出貿易額は、更に八千萬圓ばかり增加し、二十億七千萬圓となる計算であるから、入超額は一億圓程度に減少される譯であるけれども、此の外に朝鮮及び臺灣の入超額が一億圓ばかりあるから、嚴格にいふと內地殖民地を通じて約二億圓の入超卽ち支拂超過になる次第である。

◇　◇

此の二億圓の入超に對して昨年中に於ける貿易外の受取勘定及び支拂勘定はどういふ狀態であるかといふと、信據す可き筋の推算では大體次のやうなものであるといふ。

貿易外の受取勘定

	千圓
一、本邦人海外事業收益	一〇〇、〇〇〇
二、本邦人海外投資收益	一〇、〇〇〇
三、海運關係純收入	一一〇、〇〇〇
四、海外出稼人仕送金及持歸金	三五、〇〇〇
五、外國人の內地消費	四〇、〇〇〇
六、外債關係受取額（東京市債、日本電力會社社債、信越電力會社々債）	七二、〇〇〇
七、正貨現送	三七、〇〇〇
八、昨年中の在外正貨減少額	六〇、〇〇〇
合計	四六四、〇〇〇

▽貿易外の支拂勘定

	千圓
一、外債利子及償還基金繰入	一三四、〇〇〇
二、本邦人の海外消費額	三五、〇〇〇
三、外國人の本邦事業收益及投資收益	二四、〇〇〇
四、邦人の海外新投資及外債逆輸入額	七〇、〇〇〇
五、日本興業銀行外債償還	四六、〇〇〇
合計	三六九、〇〇〇
差引受取超過	九五、〇〇〇

（備考）保險料勘定は收支略ぼ同樣であると見て計上せず

内地及朝鮮臺灣を通計せる貿易上の支拂超過が二億圓であるに對し、貿易外の受取超過は九千五百圓であるから、昨年の我國對外收支は約一億圓の支拂超過（負債）といふことになる計算である。更に右の貿易外の收支の內容に立入りて考察すると、受取勘定中（一）乃至（五）は經常的收支とも云ふ可きもので堅實なる收入であるけれども、（六）乃至（八）の受取勘定は實質に於ては寧ろ支出に屬するもので外債關係の七千二百萬圓は昨年度にありてこそ受取勘定であるが、今後は國際貸借上負債の部に轉換されるもので、今年の國際收支の上にも少くとも其利子だけは支拂增となつて現はれるものである。（七）と（八）の合計額九千七百萬圓はそれだけ我正貨が減少した譯であるから是も亦堅實なる意味の取勘定でないこと明かである。

之に反し支拂勘定にありて（四）と（五）は昨年度にありては支出であるが、それだけ我國の對外債務が減少された譯である。即ち（四）は主として外債の逆輸入額であるが、之は昨年の金融恐慌による資金偏在、變態的金融緩漫の結果、遊資の利用手段として利廻のよい外債を逆輸入するものが續出したためである。それが一時爲替低落の原因ともなつたこともあるが、此の種の資金流出は國際貸借の基調を改善するものである。（五）の外債償還は一時的には出勘定であるが之は負債の減少で、金額は少いけれども理論上國際貸借の基調を改善する一つの事實たること勿論である。斯く考察して結局昨年の貿易外收支勘定の實績はどうかといふと、正貨は九千七百萬圓ばかり減少したけれど外債は五千萬圓以上減少した譯である（逆輸入の分も考慮して）。是等の臨時的支收を別として經濟的の收支のみに就ていふと僅に四千萬圓程度の受取超過に過ぎない。輸入超過は何としても免れ難い我國の經濟事情に在りて、貿易外の受取超過が斯く小額であることは我々の樂觀を許さゞることである。

◇　◇

以上陳べた貿易勘定と貿易外勘定とを通計して考ふると、昨年の我國の國際收支の總決算は（一）支拂超過が約一億圓、（二）昨年中の正貨減が約一億圓、（三）外債減が約五千萬圓といふことになる。國際貸借の狀勢が著しく改善されたと欣ぶ者が少くないけれども、それは逆調の程度が減少したといふだけで、積極的に我國の地位を有利にしたといふのではない。此の點は我々の十分考慮す可きことである。——昭和三・一・一日——

社會時評

吉野作造

本年一月はじめの東京日日新聞に「政界三巨頭の普選座談會」といふ記事が載つて居る。無遠慮に云へば、私は之に依て何等敎へらるる所なかつたことを遺憾に思ふが、併しまた高橋是清・犬養毅・尾崎行雄など云ふ當代一流の大先輩が現今の政界をどう觀て居り又之に對して如何の覺悟を有つて居るかを測知することを得て、相當の興味を覺へぬでもない。以下讀後感の二三を述べて見ようと思ふ。

普選實施に際しての第一の關心事

第一に注目をひいたのは尾崎行雄氏の去秋の府縣會議員選擧に關する一觀察だ。氏曰く、都會と田舍と比べると都會ほど棄權率が多く、而も棄權率の少い處は却て買收等が盛に行はれ、その成績頗るわるいと。この事實は列席の諸氏みな之を認め、而して斯くなる所以に付ては色々の說を立てて居られるが、併し本誌の讀者には斯の如きを以て別に之を異とせられぬだらう。何となればこの點は去年十一月號の本欄に於ても私の既に詳しく說明した所だから。

府縣會議員選擧の結果につきあの當時世人は棄權率の多少と云ふ事を餘りに重大視し過ぎた。之に對して私は次の樣なことを述べたのであつた。曰く、『今度の選擧で我々の最も關心すべきは、實は棄權率の多少ではなくて選擧權行使者の態度であつたのだ。棄權率の多いのは選擧民の曚昧を證明する事實には相違ない。その限りに於て是も亦慥に我々の一關心事たるを失はないが、之は疾うの昔に諦められて居るべき筈なのである。之を今更氣に掛けたとて仕樣がない。それよりも一番氣になるものは、折角選擧權を行使した人達が、從來の選擧民がよくやつては我々を泣かした樣に、候補者や運動員の惡辣醜汚なる誘惑に迷はされ良心の自由を賣つてその頤使に盲從したのではなかつたかと云ふ點である。新選擧權者も舊有權者と同じく、滔々

として皆小利權に眩惑して良心の操守を棄てて顧みざる底の連中であつたとしたら、彼等が權利の行使に冷淡でなかつたと云ふ事は一體何の役に立つ云々』と。即ち棄權率の多いのも困る問題だが、差當り最も警戒すべきは新有權者の態度であると云ふのが私の說の主眼であつた。尤も私が右の意見を發表した趣旨は、棄權率の多いことを以て政治家側の怠慢に歸し、進んで無產各派に向つて激勵の言葉を送らんとするに在つたので、棄權率の少かつた各地に於ける權利行使の實狀如何の點までは說き及ばさなかつた。それは一つには其邊のことが十分まだ分つて居なかつた爲めでもある。然るに今日それは尾崎氏等の口を通して明白に語られたのだ。東京日日の西村君は戶別訪問の禁を以て棄權率の多い一原因に數へて居るが、高橋老は一步を進めて政治的知識の低い處に最も棄權率が少いことを言明して居られる。以て棄權率の多少が如何に買收等の腐敗手段と深く關連して居るかを想ふべきであらう。斯うなると棄權率の少いのが喜ぶべき事なのではない、棄權率の多いと云ふのが寧ろ純潔の未だ穢されざる證據として喜ばるべき事になる。

故に曰ふ、普選に際して最も我々の心を惱ますものは棄權率の多少ではない、選擧人が如何なる態度を以て與へられたる權利の行使に臨むかの點であると。

青年間の傾向は良い

第二に注目をひいたのは主人側の古島一雄氏の談だ。氏曰く、或る政黨の領袖株で其鄕里の縣の實權を握つて居る人が、縣下の町村長連は全部自分の味方だと安心して居たのに、選擧の結果は全然豫想に反して彼の劃策は見事に外づれた。是れ青年の間には最早町村長など云ふ連中の威力の及ばざるを示すものなると共に、又古いやり方では今後とても成功するものでないことを語るものであると。氏又曰く、縣會議長とか縣會議員とか云ふ一團の勢力を利用して成功して來た是れまでの惰勢をのみ恃んだ者が、之に對抗して起つた新しい無名の者に散々蹴散らされたと云ふ例も尠くはない。是亦青年の著しく覺醒して來た證據ではあるまいかと。

新に選擧權を獲た青年は大體に於て如何にその權利を行使すべきかを間違はない、少くとも斯うした喜ぶべき現象は今日最早稀有の例外ではないと云ふが、古島氏の觀察であるらしい。之には私も略ぼ同意し得る。然るに他の一方に於ては今なほ買收等の醜聞は到る處に絕えないと云ふではないか。加之棄權率の少いところ程腐敗はひどいと云ふ。是れ取も直さず新有權者の概して誘惑に負けたことを語る事實ではないか。之等の事實

と前記の所謂青年の覺醒とは如何して両立し得るか。

之に對する私の答解は斯うだ。曰く、青年は段々覺醒し始めて居る。故にその爲すが儘に放任しておけば大體彼等はその進退をあやまらない。彼等が動もすればその去就をあやまるのは、畢竟平素先輩として尊敬する政治家とか有志家とかの誘惑に攻められるからだ。青年は漸次目ざめて來たとは云へ、凡ゆる誘惑に對抗して毅然たる態度を持し得る程には未だ自覺の度を深うしては居ない。從つて折角覺醒し掛けて來た青年のその良心の芽生ひを培ひ之を順當に發達せしむるは先覺者の任であり、而して憲政の發達の爲にこれ程大事な仕事はない。それだけ若し自家の利を樹つるに急いで青年の良心を踏みにじり名利の誘惑を以て彼等の去就を左右するが如きものあらば、吾人は皷を鳴らしてその不徳不義を糺彈せずには居れないわけである。

繰り返していふ、青年間の最近の傾向は頗る良い、たゞ之を誘惑する者があるので困る。青年の志操を更に向上せしむるも固より必要だが、それにも増して外界の悪影響を防遏するの方法を講ずるが實に焦眉の急務でなければならぬ。

來るべき總選擧に對しての焦眉の急

古島氏も云はれた樣に、一度良心の[illegible]つかぬ、選擧罪惡は酒色の放蕩と同樣、一度が二度と段々深間へ人を引張つて行く所に怖しい特質がある。之には單に勞せずして多少の金を得たと云ふことの外、政界の特別な事情に關連して俗人の動もすれば不義の誘に陷り易い素因が伏在し、いろいろ細かく立入つて考へて見れば論究を要する幾多の問題に打つ突かるのであるが、煩しいから今は略しておく。只始めが大切だ、一度誘惑に墮ちたら取り返しがつかぬ、それだけ普選實施第一回の來るべき總選擧が我々に取て格別大事だと云ふことを呑み込んで貰へばいゝ。

そこで尾崎行雄氏の提案を見るのは當然の順序である。氏曰く、來るべき總選擧を十分善いものにする樣に皆で調子を合せて極力指導すると云ふ相談は出來ないものかと。氏は其昔し普選の爲に働いた位の働きをもう一度やつて見ようとの意氣込みである。具體的方案としてははツきり示されたものはないが、一つには政府並に朝野兩大政黨をして厳に不當の干渉誘惑を愼ましめ、又一つには中立の新聞其他の言論機關をして此點に十二分に力を入れしむる樣、お互の地位と勢力とを利用して盡力しようではないかと云ふに在るらしい。孰れにしても今日此際斯の如き提案に接するは頗る時宜に適したもので、眞に憲政の

前途を憂ふるものは挺身奮躍進んで其衝に當らねばならぬ筈の仕事であらう。殊に高橋・犬養・尾崎三氏の如き政界の先達が眞劍に此事に當らるるの決心なら、その効果には蓋し測るべからざるものがあらうと考へる。

この尾崎氏の提案に對して高橋犬養二老の答辯頗る曖昧なるは遺憾の至りであるが、二老が現に政友會の長老たるの地位を思へば理義明白の態度を執り難きも已むを得ぬのであらう。憲政の正しい發達の爲に盡すことと政友會員であることとは、今の所到底兩立しない。高橋老はともかく、一時民間青年の渇仰措く能はざりし犬養老が、今日政友會の長老としてその非違を默視し恬として恥ぢざるの態度に至ては、天下萬民の怪訝に堪へざる所である。この事に就ては去年十二月號の本欄でも一寸論じて置いた。兎莫、尾崎氏の提案に對して明快の答辯を政友會に籍を置く人達に求むるのは無理だ。我々は政友會の人達に答辯の出來ない丈け、尾崎氏の立場に多分の眞理あることを認めたい。

併し一應は犬養、高橋二老の意見をも調べておかう。

犬養氏は曰ふ、今度の總選擧には少くとも十四五人の無産黨議員は出るだらう。數は少いが之は將來の有力な大團體を豫想さするものとして中々鋭い刺戟を既成政黨に與へることと思はれる。然らば之に動かされてやがて既成政黨も亦段々よくなるに相違ないと。氏は無産政黨の發達に多大の同情と期待とを寄せて居るものの如くに自己を粉飾しつゝ、差當り急いで既成政黨の改革呼ばはりをするまでもなからうと巧に尾崎氏の鋒鋩を避けた積りで居られる。氏また曰く、一體今日の政黨はどれもこれも主張が明でない、皆漠然と同じ様なことばかり云つて居る。加之一向民衆に接して居ないから、一般選擧民から云へば、誰れに投票していゝのやら何の黨に味方していゝのやら分らない、故に菓子折の一つも持つて來た方にツイふら〳〵と投票する氣になるのも無理はないではないか。之を民衆の腐敗と罵るのは酷だ。一時の小さい過失だから、一般社會教育の普及と共に遠からず改善も出來ようと。之も變な觀察だ。氏が既成政黨をひとしなみに罵倒したからて、公平な人と信じていゝかどうかは分らず、菓子折と良心とを取引する我々の仲間を寛恕すると云はれては、寧ろその阿諛を蔑しみたくなる。それ等は先づどうでもいゝとする。問題は實は選擧民が菓子折一つに心を動かすか否やの點に在るのではない。之を社會教育に依て引き上げるか否かは末の問題だ。尾崎氏の提案の要旨は、積極的に誘惑干涉の罪惡を犯すものをどうかしようと云ふのである。貰ふ者よりも與ふる者を始末せねば政界の廓清は期せられぬと云

ふ點に出發しての話なのに、貰ふ分も段々良くなるだらうと嘯くのでは、顧みて他を言ふものと譏られても辯解は出來まい。

それから社會教育や公民教育のことにつき、主人側の岡實氏と犬養氏との間に二三の問答が交換され又高橋老に地方自治論の説があるが、之が評論は別項に讓つておく。

責任を國民に歸するは非

今日の青年はその爲すが儘に放任して置けば却て其去就に惑はない、政府や政黨が惡辣陰險なる誘惑を試みるので弊害が生ずる。この點に就ては列席の諸氏に異存がない様だのに、やがて議論を進めて居るうち、何時の間にやら責任の全部が國民にある様な考が前提されてしまう。普選の實施に拔ゆる程民度が進んで居ないの、地方自治で大衆を十分に訓練することが先きだつたの、今日の公民教育はなつて居ないのと、兎角話は横道へ外れる。國民の訓練乃至教育と云ふことは、其れ自身重大な問題であり、又廣い一般的見地からすれば成る程凡ゆる事柄の根本に横はる問題に相違ないので、話題がこゝに飛んでも一見横道に外れた觀はない様だが、併し今政界の弊風をどうして刷新するかを論じて居る場合、殊に第一着に鋒先に擧げらるべきものの先輩政治家であることの指摘された場合、餘程頭の惡い

者でなければ、公民教育など云ふ問題を押しつけられて平然として居れるわけにはないと思ふ。流石に尾崎氏だけは時々他の人々の話の機先を折つては、高橋犬養二氏の手で政友會を何とか出來ないかの、はては黨費公開論まで持ち出して、頻りに議論の焦點を正當の目標に引き戻さんと努めて居る。斯く云へばとて私は特に尾崎氏を賞め上げやうとするのではない。二大政黨の何れにも屬せざる氏に思ふ存分の事を云ひ得る自由あるは怪むに足らぬとして、他の一面に於て犬養高橋二氏の苦しい立場を諒とすべき理由はあると考へるが、さるにても政界の第一上層に屹立する二大長老が肝腎な問題になると忽ち顧みて他をいふのは、怯に非んば陋、どつちであつても我々後進の斷じて服從し能はざる所である。

公民教育の眞義

この場合公民教育を云々するのは肯綮に中らないとは申すものの、併し此事はそれ自身重大の問題なるが故に序を以て一寸之にも言及しておく。

今日の公民教育に對しては二つの非難が擧げられて居る。岡實氏は所謂公民教育が小學校の上級補習教育乃至中等學校に未だ適當の程度に織り込まれて居ないことを遺憾とせられて居

る。氏は何れかと云へば之を形式的に解して居らるるらしい。選擧とか地方團體の組織とか國家機關の事とかを今少しよく教へたら弊害も餘程救はれようと云ふのである。之に反して犬養氏は、今日の學校が依然として舊式の倫理德道を教へ、新しい時代に必要な德性の涵養を無視して居ると歎ぜられて居る。岡氏の見解の形式的なるに對して之は專ら實質的方面に着眼してゐるものの樣である。只何を以て舊式道德として何を以て新時代に必要な德性とするかは示して居ないが、時代の相違と之に應ずる「道德」觀念の根本的變革に着目したのは卓見である。この點に相當の注意を拂はなければ、岡氏の提說の樣に色々新規の課目を教へたとて、實效の擧るものでないのは勿論、時として却て混亂を來すに過ぎぬこともあるからである。

公民教育の眞諦は何であるか。この問題はいづれ別の機會にゆつくり論じたいと思ふが、簡單に私一己の所見を列叙するなら次の樣なものになる。

(一)如何なる社會にもその構成員の生活を統制する中心權威と云ふものが要る。その權威の何であるべきかは學問上一個重要の研究問題であるが、その論結の如何に拘らず、實際の問題としては一定の社會には自ら一定の中心權威の確立するを常とするは疑ない。

(二)既に中心權威の確立した以上、その統制力が阻碍さるる所なく行はるる樣常に國民を訓練して置かなければならぬ。是れ即ち公民教育の一大眼目である。

(三)明治直前の德川封建の世に在ては、累次的階級組織が社會統制の根軸であつた。丁度今日の天主教會に見るが如く、所謂ヒーラルキーの網に依て國民を縛るのである。子は親に從ひ妻は夫に從ひ店子は家主に從ひ村民は庄屋に從ひ百姓町人は一括して士族の支配を受ける。士族の間にも上下數層の階級あるは勿論だ。而して親に背き主に背くを天下の大罪とする思想の如きも一つには此處から來る。斯うした時代の訓練を受けた人が現に今日に殘存し、且亦斯うした訓育思想が之を必要とした制度の崩壞後にも殘つて多くの無意識的讃美者を仍ほ今日にも有するは、亦看逃してはならぬ事實である。

(四)王政維新は制度としての封建組織を一擲した。封建制度を棄てたと云ふことは何を意味するか。その本當の意味は當初或は十分に意識して居なかつたかも知れない。けれども累次的階級組織の崩れた結果、所謂中心權威が別の何處に新らしき確立を見るべきやは自ら歸着する所がなければならぬ。然らばそれは何かと云ふに、人格的能力の外にはあり得ない。即ち階級門地の如何に拘らず有德有能を拔擢して之に從ふといふのであ

ある。

(五) 從來は大名だからその命に從ふと云ふ樣なわけであつた。今や大名だつた我々と同格だとすれば、我々は新に何に隨つて社會生活を統制して行くか。優れたる人格を戴く天下に求めて其能力に信賴し此處に我々の生活を托するの外はないではないか。さて斯ふ云ふ時代になると、在來の如き教育方針の全然用を爲さぬは勿論である。形式上上長の地位にある人に盲從するのでは駄目だ。我々は先づ自ら何人を上長の地位に据るべきかを決定せねばならぬ。一旦決定した以上其人を助けて事功の擧る樣進んで彼れに協力せねばならぬ。一言にしていへば、國民は從來の受動的地位を脫して能働的立場に置かれるのである。公民教育の方針が封建道德と動もすれば正反對の觀を呈する所以は實にこゝに在る。

(六) 以上の見地から觀て、今日の教育が犬養氏の歎ずるが如く全然新時代の要求に應じて居ないことは論ずるまでもない。併し之には理由がある。公議輿論を楯として幕府を倒した維新當時の元勳は、やがて所謂公議輿論の精神を無視して國民に盲從を強ゆるを便としたからである。彼等は世間の手前人並みに憲政を布いた。併しその當然の運用は好まなかつたのである。謂はば人並みに自動車は買つたがガソリンを買はぬと云つた姿

である。

(七) さうした先輩政治家の私意と誤つて新しい時代を作り時代に應しい道具立を要求して想まぬのは何と云つても勢の力である。勢の要求と執拗なる反動との間から種々の破綻があらはれ、その救濟策として種々の姑息な方案を提唱するものもあるのだが、結局する所、自主的人格の鼓舞作興の外に疏通の途のありよう道理はない。今更小學校や中學校に法制の課目を增さうなどいふは迂愚の極、ガソリンをあてがつて運轉をさして見る氣にならぬ以上、自動車の構造やエンチンの作用などを事細かに敎へたとて何になる。公民教育の眞義を穿き違へてはいけない。

(八) 所謂公民教育を我々の政治生活に特有なものと思ふのが間違ひである。公民教育の眞諦を「誰が最もよく我々の共同の事を託するに足る人かを省慮し、その選擇をあやまらずして一旦其人を擧げた以上、十分之に信賴し之に協力すべきであり、又その選に當つた人は、その委託に負かず誠心誠意その任務を果すべきである」と云ふ趣旨の訓練に在るとすれば、之はひとり政治生活の領域に限つたことではない。現代に在ては我々の生活の全範圍は殆んど、としてこの樣式で運はれて居ぬものはない。子供が五六人遊ぶときもこの心掛が必要であり、學生が

運動をするのでも、商人が取引をするのでも皆然りである。即ち現代人としてその生活を誠實に運んで行かうとする者に取ては、一様に皆必要として求めらるる訓練である。故に極端に云へば、公民教育など云ふ特別なものがあるのではない、一市民として相當の訓練をうくれば、それに依て養はれた識見は自ら萬事に互つて其方向をあやまらしめぬ筈なのである。今日の日本國民が政事に限つて格別著しい過誤を重ねるのは、根本の市民的修養が出來てゐないからではないか。

（九）この點に於て私は犬養氏の修身教育の根本改革の說に贊成する。只改革さるべきものの何であり又之を如何に改革すべきかの具體的說明の示されないのは遺憾だが、時代に相應した訓育方針の存すべきを說いて、今なほ舊式道德に拘泥するの妄を難ぜられたのは敬服に値すると思ふ。岡氏一流の公民教育論は、從來も俗人の間から屢々叫ばれたが、その實際を離れた迂愚の說たるは私も之れまで繰り返し〳〵說いた所である。

此稿を書いて居る今日、東京日日紙の連載はまだ終つて居ない。終りまで讀んだら猶ほ論評すべき多くの題目に逢着することと思ふが、締切りも迫つたので之で打ち切つておく。或は次號で補遺を書くことにするかも知れない。

（昭和三年一月十一日）

解散を前にして新有權者に與ふ

(一) 選擧の權利と同時に義務を自覺せよ

社會民衆黨 安部磯雄

普通選擧の將來に關しては誰しも多少の危惧を抱いてゐる。確かに舊有權者の從來の態度を見ると投票が正しく行はれてゐるとは云はれなかつた。併し新有權者が將來如何なる態度をとるかは今俄かに豫則することは出來ぬが、今迄と同樣の態度をとるとは考へられぬ。何故ならば選擧權を所有することは、有權者がそれに依つて政治的に敎育されることであつて、選擧權が擴張された當初は多少有權者の間に不心得な者を生ずるかも知れぬが、それが結局は有權者に對する敎育となつて好結果を得るに至るであらうことが想像されるからである。私は選擧權を擴張すればする程國民全體の政治敎育を促進すると考へるので、現在の選擧權に對して慊らず、婦人にもそれを與へると同時に、其年齡も男女共滿二十歲位迄引下げることが必要であると思つて居る。これは將來に對する希望であるが、現在の有權者に就いて云へば投票に對する態度は大體三つに分れて居るやうである。第一は政治に對して無見識の人々で、勸誘や依賴に應じて深く考へる所もなく投票を行ふ種類のものであり、第二は所謂政黨員として投票をするものであり、第三は自分の自由意志と判斷に依つてそれをするものである。投票の理想的態度は勿論第三の場合であつて、第一が最惡の態度である。來るべき普通選擧に於いて最も懸念されることは、第一の種類に屬す

る有權者が多く現れはしないかといふことである。他人の依賴勸誘に應じ、甚しきは金錢を取つて投票するが如きは政治の何たるかを理解せぬ人間であり、選擧權の行使に對して無知な人間である。選擧權は自己の有する權利とは考へるが同時にそれが義務であることを知らぬ者である。權利と義務とは並行するものであることは勿論であるが、有權者は權利のみを考へてそれに伴ふ義務を考へる者は稀である。例へば自己の有する一票に對しても、恰も活動寫眞の切符か音樂會の入場劵位にしか考へてゐない者が多い。活動寫眞の切符や音樂會の入場劵は自分に必要のない時には友人にやつても差支ないが、投票をそれと同一視されて取扱はれては堪らないのである。投票は公權であつて、私の爲にすべきものではなく、義務觀念の强い有權者は投票に對しては愼重の態度をとるべきである。義務と云つても種々の意味があるが、棄權も亦義務の觀念に反するものである。國家から與へられた投票權を棄てる事が既に義務の觀念に乏しい證據である。更に義務の觀念の缺乏から來る最も重要なる例は、投票に對する無責任なる態度が如何に今日の政治を墮落せしめて居るかを多くの有權者が考へて居ないことである。有權者が正しければ政治の腐敗は生じない。今日の政治の腐敗は政治家にも責任は勿論あるが、其根本的原因に至つては有權者が大部分其責任を引受けねばならぬ。それは義務觀念に對する有權者の無自覺から來る現象である。如何にして不注意の投票が今日の政治を墮落せしめたか。其原因は勸誘である。それは有權者の意志の不安定に乘じて行はれる。勸誘次第で動くが故に其處に有權者の奪ひ合ひが行はれ、際限なき買收が行はれる。選擧費用に四萬、五萬の金を使ふのは普通であり、中には二十萬圓を費消したといふ者さへある。候補者が非常な財産家であれば其位の費用は問題にはしないかも知れぬが、さうでない場合には何かの序に其金を取返さねばならないので、代議士になると利權を漁るやうになる。政黨も亦選擧費用の準備をする。政府の調査に依ると一回の選擧に二千萬の金が費されるが、政黨の本部でも何百萬かを用意する。其出處は富豪の寄附に依るのであるが、選擧後には何時かは謝禮の意味で彼等に利權を與へることになる。茲から政治の腐敗が生じることは當然であつて、之を要するに其根本的原因は有權者の無自覺に在る。自由意志に依る投票を爲さず、勸誘を待つて投票し、或は買收されて投票を行ふが如きは有權者の劣悪なる種類に屬する者である。金錢に依つて投票するが如き者は幾年か投票權を奪ひ、再びそれを犯す者は一生それを奪つて了ふのが至當であると考へる。私共の理想は斯くの如き有權者を皆無ならしめるこ

とでなければならない。

第二の種類に屬する有權者は前に云へる如く政黨員である。其投票は自黨の候補者に對して爲されることは明かで、第一の種類の有權者に比較すれば進步的である。政黨に加入する迄には勸誘もあつたであらうが、少くとも其際には一應其政黨の主義政策に對する判斷はあつた譯である。故に政黨員が買收されるといふことは稀であつて、例へば民政黨員が政友會の候補者に投票するすることはあり得ない。斯く考へると有權者が政黨員となることは、それが必しも理想的とはいへないが、此方法に依つて當分或程度迄有効に政治の腐敗を救ふことが出來るとも云へる。併し此方法も後には弊害を生ずるに至る。何故ならば政黨員にはやがて黨人氣質を生ずることとスポーツの場合に於けるが如く、徒に反對派を憎む性情を有するに至るが、一方に於て政黨の統制下に於ては常に自由意志を束縛されて居るので、自黨の幹部が明かに不正を行つてゐる場合でもそれを默認するより仕方がないといふ事情が生するのであつて、之等の事情が、殊に二大政黨對立して國民全體が二つの黨派に分れて相爭ふやうな場合には一層弊害を大ならしめる。若し此場合一方の政黨が過半數を占めて居るならば少數黨は常に多數黨を倒すことが不可能であつて、政黨は固定して大政黨の横暴が現出されるであらう。此の場合政黨に屬さない者が國民中の三四割もあれば、公平の立場から或時は甲黨に投票し、或時は乙黨に投票することになつて其處に政黨の横暴を防ぐことが出來る。

玆に於て私は自ら第三の種類の有權者に考へ到るのである。理想的に云へば政黨に屬しない、公平な正しい立場に在る有權者が居ることは政治の運用上必要である。彼等は正當の判斷を有するものであるから必しも政黨に籍を置く理由を有たない。英國に於ては斯くの如き中立の有權者が有力であると考へられて居る。保守黨の遣り方が惡ければ投票は勞働黨若くは自由黨に行くことになり、第三者がキャスティングボートを握る形勢となる。公平に考へて現在の社會に於いては、政黨政治は比較的存在の意義を有つが、若し假りに玆に社會主義社會が出來たとすれば、さういふ理想社會に於ては無産階級も有産階級も存在せず、それらの階級を代表する政黨もなく、保守と進步の區別もなくなり、少くとも現在の意味のやうな政黨の存在は全然必要でないといふ時が來るかも知れぬ。さういふ時代に於ては、議會に於ても小問題では意見の相違もあるかも知れぬが、大問題では國民全體の投票に依つて決することになるであらう。斯く考へれば今日のやうな政黨を基礎とした投票は理想的とは云はれないのであつて、現在に於いてはそれは止むを得ないとい

ふ程度のものに過ぎない。

最後に普選法の缺點に就いて一寸簡單に述べて置きたい。普選法に於いては戸別訪問を禁止したことは最も善い事であるが、而も今日の選擧法には猶不備の點が多々あり、例へば無産者と有産者とが競爭する場合には無産者は常に大なるハンディキャップをつけられるといふことがある。印刷物を配布するにしても、實際に於いて第一回分は遞信省が無料で配布してくれることになつて居るが、二回目からは二錢の切手を要するのであるから廿萬以上の印刷物の配布には一回で二千圓以上の費用を要し、無産者にとつて大なる負擔となる。印刷物に制限をつけられるやうになつては選擧のフェアープレイは行はれぬ。私は寧ろ印刷物の配布も一切廢止して、選擧は演説のみに制限するやうになることが必要であると考へる。論戰一點張で行くことになれば無産者も有産者も同一條件に立つことになつて公平である。而も猶之れにも弊害が伴ふのであつて、一ヶ月の期間に總選擧を行ふことになると、演説は少くとも百五十回から或場合には三百回位やらないと有効ではないので、それは有産者にとつては問題ではないが、無産者には費用の點からかなり苦痛を與へることになる。故に演説會の回數も制限することが必要である。更に演説會も候補者のみが出て意見を述べれば足りるのであるから應援辯士も廢止すべきである。選擧の演説會に應援を依頼することが既におかしな話であつて、選擧は一騎打ちの眞劍勝負であり、云はゞ候補者同志の決戰に應援が現れることは、本人丈がやる決鬪に介添人が飛び出すやうなものである。原則としては總ての黨派の立會演説が行はれるやうになる習慣をつくることが最も理想的である。獨逸に於いては立會演説といふのではないが、孰れかの黨派の候補者が演説する場合に、反對者が出て來て反對演説をする。またさうして貰ふやうに賴む。斯くの如く自黨の候補者と應援辯士と丈けで演説會場を占領することなく、各候補者が同一場處に立つて政見を各自發表することになれば會場も一個處で濟むことになる。其處に費用の節約が行はれ、金錢の多少に依つて優劣が生じない選擧の公平が期せられる。要するに理想としては選擧に於いて印刷物は全然廢止し、言論のみに制限し、而も應援辯士も禁止して候補者に一騎打の決戰をさせるやうにならなければ選擧のフェアープレイは行はれないのであるが、斯くの如き制度の改革も、根本的には有權者の自覺といふことが第一義であつて、それ自身は第二の問題である。新有權者が日本の政治を活かすか殺すかは、かゝつて自己の一票に存することを自覺することが當面の問題でなければならない。

（二）佛の姿をした惡魔に惑はされ給ふな

實業同志會　武藤山治

私は本誌を通じて近く來らんとする總選擧に於て、參政權を行使せらるゝ新有權者諸君に訴へる機會を與へられたることを感謝する。總選擧は實に立憲治下に於ける一大法廷のやうなもので、國民が裁判官となつて各政黨を被告の地位に立たしめ、平素の行動を吟味し裁判を下すものである。我國民の中には、總選擧の仕事は代議士を選擧するに過ぎないものと誤解するものが尠なくない。從つて各選擧區に於て立つ處の候補者の人物を見て投票さへすれば良いものと簡單に解するものが多い。甚しきは、自分の前に立つ候補者がつまらぬ人物のみであると思へば、棄權しても差支へないものと誤り考へるものすらあるが、總選擧なるものは決してさういふ狹い意味のものでない。總選擧に於て、吾々が各選擧區で代議士を選ぶのは、學校の試驗のやうに代議士其人の人物を試驗するのでなく、代議士を通じて誰れに政治を委任するかを決定するのである。之を明らかに示せば、我國の政治は政友會の田中大將に委すか、立憲民政黨の濱口君に委すか、實業同志會の小生に委すか、又は無產政黨の代表者諸君に委すか、之を決定するのである。かう考へると、總選擧の時に政友會の候補者に投票することは其總裁田中大將に、民政黨の候補者に投票することは其總裁濱口君に、實業同志會の候補者に投票することは其會長たる小生に、各種の無產政黨の候補者に投票することは是等無產政黨の首領に投票することであつて、國民として重大なる利害關係のある取引をするやうなものである。

私の新有權者に望むところは、總選擧の結果として將來現はるゝ政治と自分との關係に就て、充分理解されんことである。

誰れでも、帽子一つ買ふにしても、代價相當のものなるや否やを綿密に吟味して買ふのに、政府に對し吾々國民が拂ふ代價に對し、代價相當のものを渡されて居るや否やを調べるものは尠ない。

私は新有權者諸君に伺ひたい。若し諸君が茲に大正六、七年

の好景氣時代の相場よりも法外の高い品物を販賣する店があつたら、そんな店で物を御買ひになるや、否、恐らく諸君はそんな店へ足踏みもせらるまい。若し又そんな店が繁盛して居つたら不思議に思はるゝでせう。然るに我國政界にはこれと同じやうな不可解なことが存在して居る。諸君は、大正六、七年頃と今日と、我政府より何か良いものを得られたかとお尋ねしたら、何にもないと仰せらるゝであらう。ところが、諸君が我政府に拂つて居らるゝ代價は、大正六、七年頃の好景氣時代よりも八割乃至拾割方高い代價を仕拂つて居られます。即ち大正六、七年頃の國費の總額よりも、今日は壹倍近くになつて居る。これは明らかに、大正六、七年頃の値段の八割も拾割も高い値段で品物を買はされて居ると同一である。かういふ不都合なことをする既成政黨の政治を、諸君が若し是認せらるゝならば、方外な暴利を貪る店から相變らず物を買ひ、さういふ店が依然として繁盛して居るのと同一ではありますまいか。此事さへ新有權者諸君が明らかに了解せらるれば、既成政黨の候補者には投票されぬ筈である。然るに、かう言へば新有權者諸君の中には必らず吾吾は君と全然同感であるが、既成政黨以外に實行力のある政黨が無いから、止むなく既成政黨の中で選擇する外ないと言はれるであらうが、之に向つて私は答へたい。さう言ふ考へは立憲政治の今日、古い昔の事大思想から起る一種の錯覺であつて、立憲政治の下では、如何なる政黨でもそれ自身實行力を有するものは一つもない。何れの政黨が多數であつても、それは國民の與へたものに過ぎない。國民は何時にても是と思ふ政黨に實行力を與へ得るのである。故に、既成政黨のみが多數黨で、實行力を固有して居るやうに思ふのは大なる誤解である。かう言ふと新有權者諸君の中には、それは理論としては如何にも君の言ふ通りであるが、事實は急にさう言ふ變化を起すことが出來ないから、如何んともすることが出來ぬと言はるゝであらうが、これは制限選擧の下に於ける有權者の言はるゝことで、新有權者諸君の御言葉とも存じませぬが、世の中は理屈通りに行かぬものであるから、私は之に對しては爭はずに從ひませう。然しながら、私が玆に新有權者諸君に望むところは、立憲政治の下でも少數黨は國家に貢獻することが出來るものであることを認められんことである。殊に今日のやうな單に權力を目的として相爭ひ、國民の利益幸福を顧みざる二大政黨が其勢力を逞しうする場合に於ては、特に第三黨の存在が最も必要である。今日我財界は、恰かも二疋の猛虎が肉を爭ふやうなもので、國民は其何れよりも犧牲にされる立場にある。此場合に一疋の番犬があつて、國民が此二疋の猛虎より蒙る害惡に對して、多少

共防禦の地位に立つことは、國民にとり大なる役立ちをするものである。之と均しく、實業同志會は國民に代つて院の内外に於て惡事をする既成政黨に對し、目付役たる役目を爲すものである故に、新有權者諸君が吾々實業同志會に一人でも多くの代議士を與へらるゝことは、實業同志會が直接實行力がない少數黨たるに止まつても、間接に實業同志會をして國家に貢獻せしむる實行力を與へらるゝこととなるは理の見易きところである。

實業同志會は始めより既成政黨の腐敗墮落を慨して立ちたるもの故、第三黨として最も公平嚴正なる態度を持する事は、過去三年間院の内外に於ける吾々の言論態度にて御了解下さることゝ信じます。然して實業同志會の主張は、一言にして之を説明すれば、政府の間口を狹めやうと言ふにある。即ち今日の十一省を五省に減じ根本的大整理を加へれば、現在の國費拾八億圓の中參億八千萬圓は容易に節減し得ると主張するものである。其詳細は長時日に渉れる調査に基き、一冊の書物に收め、之を實業政治と題し、廣く發表して居るから之に就て御覧を願ひたい。尤も特に希望せらるゝ方々には、或る部數を限り、次のやうな條件にて無料御貸與する。其條件は、成るべく早く讀んで次の方へ、同じやうに讀み終つたら又次の方へ、順次幾人にても多く通[illegible]讀せしむることを希望することゝなさる。更らに吾々は我政府預金が八億圓以上に達し、英佛政府の政府預金の少額なるに比し多額であることは、民間の資金を政府の手にて死藏するもので、我經濟界の發達に妨害を與へて居るものとして其改正を唱へて居る。又英國では、郵便貯金は内國公債以外に投資することの出來ぬやうに法律で禁ぜられて居るのに、我國では大藏大臣の採配に任せてあるため、それが黨勢擴張に濫費され、現に郵便貯金拾五億圓の中貳億一千三百四十萬圓は既成政黨の縁故ある銀行會社に貸出され全損となつて居る。是等詳細の事實を、財界振興即効案と、大藏省伏魔殿預金部内容と題せる二冊のパムフレットとして發行して居る。御入用の方は大阪市南區鰻谷、實業同志會關西本部へ照會せられたい。

古き宗教の教への中に、惡魔は常に佛の姿で現はれるから多くの人々が惑されるのであると戒めてある。今や、既成政黨は新有權者諸君の前に佛のやうな姿で現はれ、色々の手段方法で諸君の歡心を買はんとして居るが、彼等は永い政治生活の間に種種なる惡因縁に捉はれて、到底本心に立返へれぬものであるから、新有權者諸君は充分に政治の内容を研究せられ、惡性の動脈硬化に陥れる我政界に新生命を吹き込まれんことを望む。英國の名士サー、アルフレッド、モンドは其著「産業と政治」の中

で「舊時代の政府は、不幸にして其統治する國家の富を開拓する能力なきものに依つて組織されて居る。新時代の政府は、産業の實際に通じ、如何にせば國家に富を生み全國の勞働者に充分なる利益を與へ得るかを實際に諒解し、其能力を有するものを以て組織して始めて眞の國益となり、他に先んじて國家を隆盛に導き社會的不安を除去し得るのである。」と述べて居るが、新有權者諸君が、吾々は今日如何なる種類の政治家に依り統治せられて居るかを考へらるれば、思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。昔アフリカの砂漠中を進軍する一隊の兵士があつた。進路に迷つて食物絶へ、飢渇が共に迫つて來た。折りしも空の彼方に滿々たる湖水の姿が現はれた。これは名高い蜃氣樓であつた。兵士は夢中になつて其方面に進まうとするのを、此軍隊が雇入れた土地の事情に通じた黑奴が、其眞實の湖水にあらざることを說き聞かせて之を止めたが、兵士等は之を聞かず、遂に黑奴を殺して空しき蜃氣樓の方へと進む間に湖水の姿は消へ失せ、全軍は砂漠の眞中で全滅したと言ふ實話がある。能力なき指導者の下に政治が行はるゝ國家、眞理の聲に聽かざる國民は、まさにこのアフリカ遠征軍の如き運命に逢着する外ない。

(三) 兄弟よ、血と涙の犧牲を空しくするな

日本勞農黨　麻生　久

一

ブルジョアの手に獨占せられて來つた帝國議會も、愈々第五十四議會を以て幕を閉ぢんとしてゐる。議會の風雲は急を告げて、解散は必至の勢であるけれ共、醜惡なる私情に終始する既成政黨の事であるからして、此必至の勢ひも亦何處に雲散霧消するか、必しも保障の限りではない。

併しながら、解散の有無に拘らず、總選擧は既に目睫の間に迫つてゐる。其遲速は一二ケ月の差に過ぎない。

從來帝國議會に對する合法的運動から除外せられ、政治的權

利を蹂躙せられ來つた無産大衆は、茲に始めて議會に對する發言權を獲得して、我國最初の普選總選擧に臨まんとしてゐるのである。今や、各無産政黨は、一齊に陣容を整へて、ブルジョア階級を代辨する既成政黨の牙城に向つて肉迫戰を開始せんとしてゐる。

既成政黨、無産政黨を通じて、來るべき總選擧戰は、結局する處、新有權一千萬人の爭奪戰に終始するは明かである。舊有權者三百萬人は夫れ自體ブルジョア階級を代表する者であつて、既に既成政黨間の分野が定まつてゐると同時に、無産政黨にとつては、極少數の例外を除いては、所詮緣なき衆生である。無産政黨の獲得すべき得票が、無産階級を代表する一千萬新有權者にあるは勿論であるが、併し乍ら既成政黨の目標とする處も亦、此一千萬新有權者の獲得に存するのである。

二

然らば無産、既成のあらゆる政黨を通じて爭奪の對照とされる一千萬新有權者とは果して何者であらうか。之れを一言にして盡せば無産階級夫れ自體である。今日まで選擧權を與へられずして政治の圏外に除外せられた所以は、此一千萬人が無産階級なるがためであつた。然るが故に、之れを單簡に云へば、新有權者一千萬人は必然に無産政黨の内に包含せらるべき本質を有する者である。若しも此單簡なる論理が事實として實現せらるゝならば、來るべき總選擧に於て、無産政黨は一擧して絕對多數を帝國議會に占むるを得る筈である。

併しながら、事實は必しも論理と伴はない。過ぐる府縣會議員の總選擧戰が明かに示す如く、無産政黨は、必死の努力を以てして、尙ほ、一千萬新有權者、即ち無産階級夫れ自身の得票を獲得するに非常なる困難を來した。而も既成政黨は、易々として、眞に易々として、自己と反對の立場にある無産階級の票數の大部分を奪取し得たのである。

あらゆる言論機關は、あらゆる意味に於て既成政黨の無能と醜惡とを暴露した。而して既成政黨夫れ自體、事實を以て遺憾なく自己の醜態を民衆の前に暴露した。之れを表面から見るならば、既成政黨は民衆の前に彈劾し盡されてゐたのである。

然るにも拘らず、既成政黨の陣營は尙ほ泰平として拔くべからざるものあり、無産政黨の力は未だ顧みるにも足りない。

此論理と事實との矛盾は何處から生れるのであらうか。

此質問に對する回答は極めて簡單であつて大體二つの原因に盡きる。即ち、第一は無産大衆の大多數が尙ほ、自己自身の無産階級的立場、換言すれば階級意識に覺醒し得ないから一

る。第二は政治夫れ自體の本質が何ものであるかと云ふ事に對する智識を缺如せるがためである。

三

今日の社會は事實が示す如く階級對立の社會である。有産階級と無産階級の對立的狀態あらゆる意味に於ける搾取と被搾取との對立は疑ひもなき社會の現實的狀態である。直接經濟的には工場主と勞働者、地主と小作人、之れを政治的に見れば、其租税に於て、金融の狀態に於て、一つとして有産無産、搾取被搾取の對立ならざるはない。而も自覺せると自覺せざるとに拘らず、此對立搾取の關係は、必然に階級闘爭をあらゆる場面に展開してゐるのである。無産大衆の生活苦の叫びは社會のあらゆる場面にあらはれてゐる。

併しながら、悲しいかな今日の無産階級の大部分は、此階級的對立より來る搾取のために貧苦の中にあへぎながら、尙ほ自己の階級的立場を自覺するところがない。而して此階級的自覺の上に立つて勇敢に政治的既成勢力と闘爭する事に依つてのみ、自己の苦しき生活より解放せらるゝ事の原則を自覺し得ないのである。

而して又、階級的無自覺と相伴ふて、日本の政治を既成ブルジョアの天下たらしめつゝある原因は、無産大衆の政治的無知識である。

由來既成政黨は政治を行ふ上に於て、民衆は倚らしむべし知らしむべからずの原則を立てゝ來た。而して民衆の無自覺に乘じて、所謂空虚なる天下國家を論じ、民衆を烟に卷いて政治の眞諦に觸れしめなかつた。

併しながら、政治とは何ぞ、其答へは、一言にして盡きる。政治は經濟なり。

無産大衆は、其日の糧に飢えて貧苦の叫びを擧げながら、そのよつて來る原因に就ては無知である。工場主の工場や、地主の田畑が、勞働者や小作人を搾取する力は何處より來るか。無産階級の背に負はされつゝある過大なる租税は何處より來るか。民衆は是等の一切がブルヂョアの手に獨占されたる政治的權力の中より來るを知らずして、更に自己の足に重き鎖をつなぐために、自己の投票を既成政黨に投ずるのである。

四

既成政黨の無産大衆に對する獲得は、其權力と金力とに依る威嚇と誘惑とに依つてなされる。闘爭に覺醒せざる民衆は其の威嚇に恐れる。政治に無知なる民衆は其の目前の誘惑に眩惑す

る。情實と因緣とが共間に跋扈する。而して無産民衆が贏ち得るものは、永遠の搾取の下に押しひしがれた生活難の叫びである。

今や、普選に依る第一回の總選擧が目睫の間に迫つて來た。一千萬新有權者の掌中に握らるゝ一票は、無意味に、而も亦何の犧牲なしに、其掌中に落下し來つたものではない。それこそは數限りなき先覺せる無産大衆の血と涙の慘澹たる鬪爭に依つてブルヂョア階級より奪ひとつたものである。其一票の中には、眞に先驅せる無産大衆の尊き犧牲がこもつてゐる。

兄弟よ、俺等の血と涙の犧牲を空しくするな。俺等の血と涙の犧牲に依つて獲得した其一票を以て、俺等無産階級の生活を打開して解放に驀進せよ。俺等を搾取して饑に泣かしむる一切の根源、ブルヂョアの政治的權力と勇敢に鬪爭せよ。

一千萬新有權者の掌中には斯くの如き聲が高らかに叫ばれてゐる。

一千萬新有權者よ、階級的立場に覺醒せよ！政治の本質に目ざめよ！先驅者の尊き犧牲を空しくする勿れ！無産階級の城たる無産政黨の旗下に團結せよ！

（四）民政黨は國家主義大衆黨

民政黨　永井柳太郎

現今の世界には多數の政黨があるけれ共、大體に於て三種に大別する事が出來る。第一は保守黨である。貴族、富豪の勢力を背景とし、權力並に金力を以て有産階級の優越權を維持せんとする政黨である。此種の政黨は、其必然の傾向として、資本主義擁護黨である。

第二は社會革命黨である。此種の政黨は資本主義を否認し、代ふるに共産主義乃至社會主義を以てせんとするも、議會政治によらず、無産階級の獨裁政治によつて、其の目的を貫徹せんとするものである。而して議會に代議士を選出するは、議會政治を認むるがためにあらず、議會を利用して其の革命思想を宣傳せんが爲である。共産黨並びに其の思想の系統に屬する無産黨がそれである。

第三は民衆黨又は自由黨である。政治上に於ける一切の特權を排撃して、人民の權利自由を確保すると共に、產業上に於ける資本專制主義を打破して、無產大衆を其の生活不安より解放し、革命手段によることなく、合法手段によつて、民衆共存を目標とする政治組織並びに產業組織を樹立せんとする政黨である。故に共產黨並に其の思想の系統に屬する無產黨を革命主義大衆黨と稱すべくんば、此れは國家主義大衆黨だと云ふことが出來るかも知れぬ。我が民政黨は、其の設立當時の綱領にも明かなる如く、思想上に於ては、第三種の系統に屬するのである。

吾等は、國家存立の本義に顧み、民衆共存を目標とする社會は、速に次の四種の權利を確保することの急務なるを認むる。

第一は生存權である。こゝに所謂生存權とは、單に法律上に於て各個人の生命を保護するのみならず、また經濟上に於ても生存を維持し得べき保障を與ふる意味である。假令法律上において如何に嚴重なる規定をもつて人命を保護するも、日常の生計に窮し、食ふに食なく、病んで醫藥を求むる能はずんば、餓死か、病死か、孰れかのために其の生命を失はざるを得ない。從つて經濟上に於ける生存の保障を有せざる者は、常に死の脅威を感ぜざるを得ないのであるから、到底自由に天賦の個性を發達せしめ、其の生存の眞意義に徹底する事は出來ない。

第二は勞働權の確保である。既に各個人の生存權を認めたる以上は、又其の生存を維持するに必要なる生活費を得るがために勞働する機會が與へられなくてはならぬ。現に英國勞働權法第三條は明白にこの關係を說明して「勞働者が失業者となれる事を登錄したる時は、法律に規定したる方法により速かにその者に職業を與ふる事は、地方官の義務なり。……若し適當の職業を與へ能はざるにおいては、職業を得るまでその勞働者及びその勞働者に扶養せらるゝ家族の生活費を給與すべし。」といふてゐる。蓋し人間は獨立自由を欲して止まぬ。假ひ國家がその生存を保障するも、獨立自由なる人格を有するものとしてゞなく、社會の厄介者として、救貧院とか授產院とか云ふ所へ閉ぢ込めて、囚人同樣に、扶養するのでは、人間本然の要求に悖るのみならず、其の向上を促す事が出來ぬ。これ生存權の確保と共に、勞働權を確保せざる能はざる所以である。

第三は機會均等權である。ダアウインは有機體の進化は自然淘汰に基くのであつて、而して自然淘汰を促すは各有機體の間に行はるゝ生存競爭である。生存競爭の結果『適者』即ち優者が殘存し『不適者』即ち劣者が亡ぶといふた。然し今日の如き社會組織の下に於ける生存競爭は、決して眞の優者の勝利にな

らぬ。現在の社會には各個人間の自由且つ公平なる生存競爭を妨ぐべき幾多の障害がある。或る者は生れながら貴族にして特權を有し、自己の利益を增進する法律を作り、自己の利益に反する法律の成立を妨ぐる事が出來る。或者は生れながら莫大な財產を世襲し、勞せずして富豪となる。資本を有せざる者は、如何に人物が優れてゐても、大資本を有する者に敵し難く、貧民の子弟は、生れ付き如何に強くとも、しば〳〵榮養不良のために夭折する。故に今日の社會に於ける生存競爭の勝敗は、必ずしも其の競爭に從事する各個人の優劣によつて決するのでなく、主として各個人の周圍における人間以外の力によつて決するのである。此の政治的並びに經濟的環境を一新し、所有の衝動よりも創造の衝動を尊重する社會を建設して、各個人に平等に其の個性を完成すべき機會を得せしめる事が、即ち又偉大なる文化を起す所以であると思ふ。』

第四は生產並びに分配に對する勞資對等權である。勞力と資本とは生產の二大要素であるに拘らず、其の生產物の分配權が獨り資本家のみに存したるは、資本主義經濟組織に伴ふ一大缺陷である。勞資間の衝突は、屢々此の不合理に發するのである。勞資間及び地主小作人間に其の生產物の分配を決定すべき對等權を認むることは、即ち一方に於て不勞利得を抑制すると共に、他方に於て勤勞を尊重し、民衆共存共榮を促進する所以である。

吾等は此等の權利を確保することが、新時代の痛切なる要求だと信ずる。此等の要求を體現したる新社會を建設して、其の社會に屬する各個人に、其の天賦の資質性、獨創性、偉大性を自由に發揮し得るの機會と環境とを與ふることが、即ち國家更生の大道である。然し吾等は此等の權利を確保し、新社會を建設するに、決して革命手段によるの必要を認めない。政治上並びに立法上の合法手段によつて其の目標に勇往邁進することが、即ち我黨の本領である。

(五) 政治の改革は諸君の決心次第である

革新黨　清瀨一郎

第五十四議會は必ず解散せらるべきものと思ひます。少數黨の内閣は其存在の認否を國民に問ふべきであるといふ傳統的の憲政論の外に、此議會がもはや解散せられなければならぬ特別の理由があります。日本國民は過去九年來、普選の實行を要望して居つた。而して、此國民的要望を法律に顯はした普選法は、既に第五十一議會（大正十四年三月）に成立したのであります。既に法律が成立して而も其實施を見ざること二年に及んで居ります。其間昭和二年秋には府縣會議員は普選の原則を以て改選せられました。國民は今日制限選擧に依り成立したる議會を信認せざるやうに成りました。「此舊議會を解散して見たら」といふ空氣は全國に充ち滿ちて居ります。現議會は自ら解散を上奏しても、國民の爲め普選實行の期を早やめるのが當然であります。

普通選擧實行に當りて全國の選擧區に種々な候補者が現はれる事と思ひます。此時、新有權者は如何なる標準を以て之を選擇すべきでありませうか。凡そ、人の意見は十人、十色であります。有權者各自と全然同一の意見を有つて居る候補者などがあらう筈はないのであります。それ故有權者は、ある一定の標準に叶ふ候補者に對し投票せねばならぬのであります。私どもは此標準として、

（一）既成政黨の打破を主張する者、
（二）民衆生活の安定を念とする者、

の二要件を擧げんとするのであります。

既成政黨といふ言葉も近來では、色々異つた意思に使はれるやうになつて來ました。無産黨の人々は、之を資本主義政黨といふやうな意味に使はれるやうであります。しかし、今日の政、民兩黨に資本主義などいふ主義を意識的に抱持して居るかどうかは疑問であります。彼等の特徴は資本主義の擁護に熱心であるといふ點ではありませぬ。彼等の特質は目的と手段を顚倒して居るといふ一點であります。元來政黨を作るのも、政黨の擴張を圖るのも、又、内閣を組織するのも、皆、これ、國家民人のため、一定の政治的理想を行ふためである。政治理想の實現が目的であつて、政黨の組織も、擴張も、内閣組織も、皆、是れ手段であるべき筈であります。しかるに既成政黨は、政治理想の實現といふことを目的として居らぬ。彼等も時々「政策」といふものを揭げることがあります。或は地租委讓といひ、或は義務教育費の國庫負擔といふが如き是であります。しかし、彼等の政策を揭げるのは實は黨勢擴張の一手段であります。内閣乘取りの一手段であります。黨本來の理想より發露したものでもなければ、これ自身が彼等の理想でも目的でもあ

りませぬ。彼等の目的は富源擴張、內閣乘取りの外はありませぬ。世間では彼等を資本主義政黨と見るのは、畢竟、彼等が資本家の提灯を持つ方が政權獲得に便宜であると思つて、之と結託するからであります。彼等は資本主義を理想、乃至目的とするといふよりは資本家との結託を以て手段の一部とするのであります。彼等の目的は、選擧にも議會にも、政權の獲得、利權の爭奪にあるのであります。普選の威力に依り第一に成し遂げなければならぬことは此既成政黨の打破であります。何となれば、彼等の此目的と手段の倒置よりして國民は年々歲々非常なる損害と害毒を蒙つて居るからであります。既成政黨の野心のため、國民が如何なる迷惑を蒙りつゝあるかを擧示することは此小文に於ては省略します。

たゞ、既成政黨を破つて、第一に實行すべきことは、國民生活費の低下を來すべき政策の實行であります。今日のやうに、生活に經費がかかつては、如何なる文化も我國には發生しませぬ。世界中の鹽の相場は百斤につき一圓二十錢見當と思ひます。日本では鹽は百斤につき三圓六十錢であります。これは鹽專賣組織の爲めであります。砂糖一斤は今日二十八錢位の相場でありませうが、此內八錢三厘五毛は消費税であり、三錢九厘五毛は關税の爲めの値上であります。國民は二十八錢の砂糖の內十二錢三厘の税金を負擔しつゝあるのであります。清酒の値段の內五割八分は是亦專賣局の益金、即ち、税金であります。酒一升に四十錢の税金のかゝりつゝある事は人の知る所であります。こんなことで日用品は甚だ高い。國民の大部分は生活に追はれて居る。獨り生活に追はれて居るのみならず、生產費が高くつけば自然勞銀も高らさゞるを得ぬ。勞銀が高ければ生產品の値段も高い。生產品の値段が高ければ、外國への輸出も振はなくなる。輸出不振の結果は不景氣となる。不景氣はまた、國民生活を脅迫するは勿論である。既成政黨は直接税の徵收を遠慮して、間接税、消費税の引き上げに努力したのであります。其の眞意は說明せずして明であります。消費税は無產者の負擔である。直接税は有產者の負擔であります。既成政黨は有產者に阿るのを以て自黨の勢力を張り、內閣を乘取るに便宜ありと考へたのであります。多數國民は彼等の政權獲得の犧牲に供せられつゝあるのであります。即ち既成政黨の打破と民衆生活の安定策とは聯絡した仕事であります。

既成政黨の打破といふと多くの人は、それは、仲々出來るものでないといつたやうな觀念を抱かれるやうであります。しかし、人間が一念を發起すれば、大ていの事は皆出來る。私は半生の經驗上、固く之を信じて居る。東洋でも、古くから、精神

一到、何事か成らざらんと言ひ來たつて居る。基督も「求めよ、然らば與へられん」と言つた。決心さへすれば大ていの事は皆出來る。多數人が團結して決心さへすれば政治上の改革の如きは必ず出來るものである。新有權者諸君、政治の改革は諸君の決心次第で必ず出來るものであることを銘記し、既成政黨の打破と、民衆的生活の安定策の遂行に向て戰線を統一して、驀進せられよ。

（六）新有權者の有つ一票の意義

日本農民黨　高橋龜吉

一

新有權者の一票は、舊有權者の一票とは丸でその實質を異にするものである。先づ、此の點を、新有權者諸君は自覺せられたい。そも〳〵普通選擧は何故に實施せられざるを得なかつたか？　無論、既成政黨が、官僚政治打破の抗爭に於て、大衆の支援を求むべく、止むなく普選法實施の目標を擧げたと云ふことはその一斷面である。だが、それは既成政黨の側から見た普選法實施の經緯であつて、之を國民大多數の側から云へば、國民が普選法の實施を要望した理由は他に在つた。

顧るに、歐洲戰後の日本は、政治に經濟に行詰り甚しく、之を如何にして打開するかゞ焦眉の急であつた。これ迄、國民の生活程度を向上せしめて來た舊來の政治、舊來の經濟は、玆に一轉して、國民の生活を壓迫し、その程度を低下せしめる桎梏と變つた。既成政黨の政策、既成政黨の努力は、國民大多數の幸福を增進さす代りに、之を壓迫して一部少數の資本家を露骨に肥大せしめ出した。

これでは駄目だ！最早既成政黨には、日本今日の行詰を打開し得る能力無く、その資格に缺けてゐる。この難局を乘切つて、新に我が社會の發展を約束せしむためには、我が政治に新勢力を注入せねばならぬ。則ち、普通選擧實施に對する國民の要望は、右の如くにして洪水の如くに全國を風靡したのであ

二

然らば、何故に、既成政黨の政治は、我國今日の行詰――此の生活難、此の就職難、此の不景氣等々――を打開し得る資格に欠けて居るか？要するに、彼等の政治は資本本位、財產本位のそれであつて、一國の盛衰に最も肝心な生產者それ自體を本位にしたものでないからである。

一體、資本主義の初期に於ては、資本の所有者と生產の從事者とは兩者一體のものであつて、分離したものではなかつた。此の時代に於ては、資本本位乃至財產本位の政治が行はれても、同時に又、それは生產者本位のそれを意味したから、未だ云ふに足る弊害は生れなかつたのである。しかし、その後、資本主義制度が進展して、資本と生產者とが分離して了ふと、――例へば株主と賃銀勞働者との間の如く、地主と小作人との間の如く、金融資本家と事業經營者との間の如く――資本本位の政治は徒手遊食者本位の政治と同意語のものと化し來つたのである。

何時、如何なる世の中に於ても、政治の基本は、その社會に最有効な働きをなしつゝある階級、即ち生產者を本位としたものでなくてはならない。若し、これに反した政治が行はれた時は、必ずや其の社會は衰亡する。例へば幕末の衰亡政治を見よ。遊食階級たる武士階級の利害のために、農商工階級の利益が犧牲に供せられる政治が布かれたるが故に、斯くの如き衰亡を來たしたのではなかつたか。しかも、その武士階級は、初め兵農一致より進展せるものにて、その當初に於ては、武士本位は同時に農民本位（當時唯一の生產階級たる）であつたのであつたが、その後の發展に由つて、武士の内容が變化したるにも拘らず、依然、武士本位の政治を續けたと云ふことが、當時の社會衰亡の由來である。此の點、今日の資本家本位の政治が、初めは生產階級の利害を本位として出發しながら、中途、資本家の内容が變化したるにも拘らず依然資本家本位の政治を續けて、遊食徒手階級の利害のために、肝心な生產階級の利益を犧牲にするに至り、かくして、社會一般の衰亡を招來することゝなつたと全く軌を一にしてゐる。

三

以上の如く、遊食徒手の資本家本位の政治にまで墮落せる我が政治を、新に、生產者本位の――即ち自ら額に汗して働いてゐる最も肝要な階級を本位とした――政治にまで改造せん

とする努力の現はれが、即ち、普通選擧の實施に外ならないのである。であるから、新有權者諸君の一票は、此の目的に添ふやうに行使せられなくはならないわけである。

いかにも、これ迄諸君新有權者の利害は著しく蹂躙せられて來た。だから、新有權者の利害と公平な取扱を受けるために、今度、普通選擧が實施せられたのだ、と云ふ風に考へる人がないではないであらう。だが、斯樣な意味に於て、普通選擧が實施せられたのは、未だ資本主義が發展期に在つて、資本主義的仕組（すべては資本家本位に政治する）に由り大衆が生活を向上せしめ得た時代のことである。これは、要するに、先進國に於て行はれた普通選擧の意味に過ぎず、我國に於て最近實施せられたそれの意味ではない。

斯で、生産者本位の政治とはそも／＼如何なる政治であるか。如何にせば斯樣な政治を實現することが出來るか。こゝに、大きな問題があるわけだ。蓋し、生産者本位の政治を新に布くと云ふことは、從來の政治や經濟の仕組のまゝで、之を實現し得るものでなく、それを實現するためには、新にそれ相當な組織や制度の變革を必要とするからである。之を宛かも、幕末に於て、生産者本位の政治を布くためには、從來の封建制度を廢棄して、新に、資本主義制度を樹立する必要のあつたと同じわけだ。

斯樣なわけで、いま、新有權者諸君が、その一票を、生産者本位の政治を布くために行使しやうと云ふには、必然に、從來の資本主義制度の存立維持を基礎とした政黨に之を投じたのでは駄目であつて、それ以上更に一歩進んだ政治を約束する政黨にその一票を投ぜなくてはならない。而して、玆に、從來の資本主義制度を肯定する政黨とは即ち既成政黨のことであり、それ以上更に一歩進んだ政治を約束する政黨とは即ち無産政黨である。

なる程、幕末に於てもその封建政治を改善することに由つて、從來よりも幾分ヨリ良き政治を布くことが出來たであつたらう。然し、それでは、當時の我が社會の行詰を打開することにはならない。それと同じく、今日に於ても、既成政黨の政治を改善することに由つて、多少、今日の我が政治經濟の行詰は緩和せられるかも知れぬ。だが、要するに、それ等は、一時の應急策であつて、根本的打開策ではない。今日の政治・經濟が斯くの如く資本本位のものに墮落したと云ふ事由は、その制度本來の性質に固有する疾患に基因するものであつて、その運用の巧拙に原因する點は比較的に輕微であるからだ。

擁護して云ふ。新有權者諸君は、先づ、我國に[illegible]施せられたかを三思せられたい。而して、諸君に與へられたる一票が、如何に重大なる新使命を帶びるものなるかを自覺して戴きたい。諸君の一票は實に諸君個人の利害を擁護するための[illegible]伸張する唯一の手段である。而して、斯く生産者階級の利益が[illegible]伸張されてのみ、我國現在の政治、經濟の行詰は、こゝに始めて打開せられ、我が社會の繁榮は始めて約束せられるのである。

(七) 朝野その地位を換ふるも可なり

政友會 牧野良三

×

第五十四議會の解散は最早や疑ふ餘地がない。今、新たな選擧を前にして先づ念頭に浮ぶことは演說と選擧との面白い關係である。

演說が術として、內容を超越して一つの立派な地步を占みて來たと同じ樣に、選擧が候補者の人物をはなれて運動といふことが重要な地位を占めるやうになつて來た。即ち、演說では如何にして聽衆を呀つといはせようかのために自然、その內容が煽動的になり、之を政治上に用ゐられる場合には、害があるとも徐なきものとなると同じやうに、選擧に於ても矢張り、運動員に都合のいゝ候補者が擧げられ、運動員に都合のいゝ宣言綱領のみが發表される、從つて正しい政治を正しく努力しようとするより、選擧區に對し都合のいゝ言行のみを專とする。こゝに從來の政治に對する國民の呪咀が萠し、不滿が起るのである。

又これを他面より考へれば、內容よりも形式の絢爛にのみ引入れられる時代は必ず浮華輕佻の時代であり、反對に質實にして時代の主潮が着實なる方向に向つてゐる時代は、形式よりも內容に重きを置き、選擧の如きもその運動のはでさよりもその候補者の人物の如何を考慮してかゝるといふやうになる、從つてその時代の演說なり選擧なりの實際を見て、その時代を察知することが出來ると思ふ。

×

然らば今日はどうか。兎に角、一般國民は在來の政治に飽き、何ものか新なものを要求するの念、言換へれば政治に對して痛切な利害を感ずるの念が頗る多くなつて來たと觀察したい。併しこれは比較的のことで、忌憚なく評するなら、國民が眞に政治の現狀に目覺めてゐるのでなくして、單にその批評に興味を感じてゐるに過ぎないのである。

併し今日までの我國の政治がとかく資本家本位であり、資本家擁護の傾向が多かつたことは事實である。從つて政治の實質に對し痛切の利害を感ずるものは主として限られた有資家階級のみで、政治が資本家的臭味を帶び、選擧權が又有資家階級に限られたのも言ふまでもない。然るに今や選擧權は一般國民に解放された。この機に於て充分政治に對し切實に利害を感じて欲しい。利害を感ずることが强ければ强い程、形式外形からの誘惑を避け得られ、一部煽動政治家の玩具にならずに濟むのである。

こゝに始めて政界の革新が得られ、向上が期されるのである。即ち演說の內容に從つて術が施され、この內容を正しく理解させるためにはどういふ辭句と行爲とを有つてしたらいゝかと考へると同樣、この人物を眞に國政の上に活躍せしめるためにはどういふ方法をとつたらいゝかと考へるやうになる。そこで始めて內容が形を整へしめ、人物が運動を支配する事になるのである。

新有權者諸君、この意味に於て私は、言ひ古るされた言葉だが、今日の政治の內容實質に對し痛切な利害を感じて欲しい。この利害を痛切にする所に冷靜な批判が生まれ眞の政治の更新が望まれるのである。而して今度の選擧に際しては政黨本位よりも人物本位で行つて貰ひたい。政黨に身をおく私としては政黨に對し申譯ない言分だが、日本の現狀としては人物本位で行くことが最も必要のことである。それには先づ誘惑物たる演說文章の形式と運動の巧拙又ははでな遣方じみな行方等に超越してその內容と人物とに就て充分冷靜な批判的態度を以て臨んで貰ひたい。

×

次に今日の政黨に對する世人の誤れる批評に對し政黨人として一言したい。

今日政黨を論ずる人々は好んでその短所缺點のみを云々するきらひがある。新聞雜誌の記事は政黨及び政治家が惡事醜行に

[illegible]舞台のみを指摘し、政治家といへば[illegible]ふもの、政黨といへば醜惡の塊りの如く見て、これを向上發展せしめる事には一向力が及んでゐないやうに思はれる。又今日政治に一隻眼を有ち批評の出來る人は政黨の惡口を云ふことを以て特徴となすが如き狀況にあることは誠に遺憾なことである。これは今日の政黨及び政治家にも尤分の責任あるは勿論だが、一般國民も亦責の一半を負ふべきものではあるまいか。

第一、政黨及政治家に關する幾多醜怪なる事實の裏には必ず選擧區及び選擧費問題が潜んでゐることに國民は深き理解を有つて欲しい。即ち選擧が正しく行はれずして形式人氣のみで行はれるがために、こゝに選擧費に關する苦心と選擧區に關する苦心とが生ずるのである。而してこの二つが利權罪惡に關する誘惑となるのである。立派な選擧が行はれ健實なる選擧區より選ばれた代議士に醜穢な事實がなく、少くとも社會の問題になる事實が起る時はその選擧區が困難か、困難ならずとも莫大な費用を要することとは、特に深き理解を以て觀察しなければならぬ重大な點である。

第二に、今日の政黨に對し世人は、主義政策などない、政友會といひ、民政黨といひ、畢竟雨が降れば傘をさし、腹がすけば飯を食ふと定つた主義綱領の下に只感情的に闘つてゐるのだ[illegible]たすともむたす、腹がすいた時飯を食はずとも[illegible]などといふやうな主義政策を持ち得るものではない。當り前の事である點に國家の政黨の主義綱領たる眞生命があるのである。只如何にして如何なる食を採るか、如何にして如何なる雨具を用ゐるか、その手段方法が政策として現れて、こゝに始めて政黨の相異を來たすものと思ふ。即ち今日の朝野兩黨には明瞭な主義政策の相違がある。

×

然らばその相違は何所に立つかとなれば、野黨たる民政黨は國家國力の現狀を見て深くその將來を憂慮しその前途を悲觀して以て立つものであり、國家國力の現狀を見て深くその前途に期待を抱きその將來に樂觀の念を有つもの即ち政友會の政策となるのである。而して國家の前途を憂慮しその將來を悲觀するものの政策がひたすら整理緊縮となり消極的となるは當然であり、等しく國家國力の現狀を憂慮するもその將來に期待を抱いて樂觀するものの政策が勢ひ地方開發事業の助成となり積極的となることも亦當然の結果である。即ち現狀に滿足せざるも同一であり、滿足せざるが故に將來にはかる點も同一であるけれ

ども、如何にしてその期待を實現すべきかの點に於て、一は國狀を悲觀するが故に整理緊縮となり、一は國狀を樂觀するがために進取開發となるのである。今日の憂慮は一に放漫過大なりとなすもの甲黨の政策となり、今日の憂慮は國力の未開發にありとするものが乙黨の政策となるのである。こゝに重大な相違がある。

この相違は共に必ずしも絕體的のものではないが、併しながらそこに性質上差があつて甲乙兩黨となすに至ることは止むを得ない。

私は第五十四議會に提出されんとする現內閣の豫算案に對する世評を聞くに、主として都會の輿論機關と銀行業者とがこの豫算案を難じ、主として地方民と地方の輿論機關とがこれに期待を有たんとする所に、我國狀は都會と地方との間に重大な逕があることを切實に自覺せざるを得なかつた。民政黨が比較的都會地に勢力を有し、政友會の地盤が比較的地方に多いのも故なきではない。只この兩黨の政策が眞に國民の理解に上り、この眞の理解によつて實施せられることにならば、假令現在の朝野兩黨がその地位を換ふることありとするも、我國家國力の前途憂慮を用ゐるの必要を認めない。

(八) 議會及總選擧に對する勞働農民黨の態度

勞働農民黨 大山郁夫

一

わが勞働農民黨は、全被壓迫民衆の先頭に立ち、過去一個年に亘つて、政治的自由獲得を中心的鬪爭目標として、金融資本を背景とする反動的政府の强硬なる專制的支配と戰つて來た。

それはまづ第一に、大衆的共同戰線黨としてのわが黨の使命の意識から來たものである。第二には、當面の帝國主義ブルジョアジーの政治的經濟的社會的支配の本質およびその發動の方向に關するわが黨の認識から來たものである。

近來に於ける資本の攻勢の急速なる激化の傾向について

は、茲に列擧するまでもなく、周知の事實であるが、特に昨春の金融恐慌以來、その趨勢は更らに一段と飛躍的に昂進して、所謂産業合理化政策の下に、全國各地に於て、工場勞働者は日々幾萬となく街頭に投げ出され、農民はますゝ切實に生存の脅威に直面せしめられ、更らにかゝる狀勢と相呼應して、各方面の小市民層の生活もまた、層一層不安と危殆とを加へて行つた。と同時に、支配階級の政策および態度は、愈々出でて愈々狂暴を極め、それらの無產者や小市民の現實生活上の諸要求の出口を抑塞することに腐心し、一切の大衆運動には血の出るやうな彈壓を向けるやうになつた。かくて、都市に農村に、內地に植民地に、至るところ全被壓民衆の不平反抗は、燎原の火の如く擴がつて行つた。で、わが勞働農民黨は敏速にその契機をとらへ、さうした不平反抗を强力なる政治運動に組織し、それを政治的自由獲得のスローガンの下に統一し、猛烈にその政治鬪爭を展開せしめて來たのである。

二

昨秋の府縣議戰に於けるわが黨の戰績は、まづ第一に、わが黨の政治的自由獲得の鬪爭目標の正しさを我々に敎へた。第二に、大衆の支持がわが黨の上にあることを確實に證明した。そ

秋に更らに、わが黨の鬪爭意識を一段と高めると同時に、ますます黨をして鬪爭力の充實を感ぜしめた。

次いで府縣議戰以後に於ける支配階級の全線的攻勢の一層急激なる昂進は、ますゝ全被壓迫民衆の鬪爭意志を高めた結果を産んだ。こゝに於て、全國各地に於ける他の無產諸政黨の黨員大衆も、次第にわが黨の黨員大衆と提携して、政治的自由獲得のために共同鬪爭をまき起すに至つた。最近無產階級の陣營內に於ける重要問題の一つとなつてゐる勞農諸政黨合同の機運の如きも、實はかかる共同鬪爭の熱火の焔の中から燃えあがつたものであつて、それは實に、鬪爭のための戰線統一への要求の具體化に外ならないものである。

曾てわが黨のみが政治的自由の獲得のために鬪爭するだけであつて、他の無產諸政黨の指導者たちがそれに對して冷眼を向けてゐた間は、わが黨はそれらの他諸黨の指導精神を完膚なきまでに攻擊してゐた。だが、上に述べた通りに、他諸黨の指導者たちが、次第に高まりゆく各自黨の黨員大衆の不可抗的要求に押されて、漸く勞農諸政黨の合同の問題を考慮するやうになつてからは、わが黨は最早いつまでも彼等を追擊しつゞけてゆく必要がなくなつたので、直ちに百尺竿頭一歩を進めて、彼等との腹藏なき協調の下に、無產大衆の鬪爭要求に副ふために、

當面の合同問題に向つて、全力を擧げて突進しつゝあるのだ。それも要するに、わが黨から見れば、わが黨の從來の政治的自由獲得鬪爭の發展の一形態に外ならないものである。

三

かゝる事態の下に於て、わが勞働農民黨は、他方に於てはまた、第五十四議會及びそれに續く總選擧に對する態度・方針を決定する必要に迫られたのだ。

いふまでもなく、わが黨は、勞農諸政黨合同問題に對してと同樣に、第五十四議會および總選擧に對してもまた、わが黨の從來の政治的自由獲得鬪爭の延長として、一切の對策を講じて來た。

もとより、わが黨の過去一個年間に亙る火の出るやうな鬪爭は、異常にわが黨の經驗の成熟を促進し、わが黨の政治的自由獲得鬪爭の內容を深かめ、さらにその戰野を擴大した。殊にわが黨は、それと全被壓民衆の各層の現實生活上の諸要求との聯繫を一層突き進んで見究はめることによつて一切の戰術を精化し、特に當面の議會および總選擧對策に關聯しては、それを『立法機關の徹底的民主化』の要求に表現して、今や猛烈にわが黨の鬪爭を進めつゝあるのだ。

そこで、第五十四議會に對しては、わが黨はまづ、その即時解散の要求を熱烈に絕叫することから出發した。

いかにも既成諸政黨の方面にも、第五十四議會の解散を叫んでゐるものがある。殊に民政黨は、それらの先頭に立つて、田中內閣に不信任案をつきつけようとしてゐる。だが、それは形式上に於てこそ、同樣に議會解散要求であつても、その實質上に於ては、我々のそれとは根本的にちがつてゐる。この點は特に充分に注意されなければならぬ。彼等は議會解散の氣勢を煽ることによつて、この次の總選擧に於ける自黨の立場を有利に展開しようとしてゐるのだ。殊に彼等は、泡よくば、次期の議會內の多數を制して、自黨の手で內閣を作らうとしてゐるのだ。

だが、民政黨が內閣を取つたところで、政友會の內閣が續いたところで、民衆の利益もしくは損害の上に於て何等の增減のないことは、若槻內閣の政績と田中內閣とのそれとが、立派に證明してゐる。なるほど表面上に於ては、前者は消極政策を高唱してゐたし、後者は現に積極政策を看板にしてゐる。だがたとへば、尨大な豫算を組んで民衆の負擔を加重したり、巨億の血稅を民衆から絞つて大金融財閥に貢いだり、內地や植民地に於て堪へがたき彈壓政策を取つたりした點に於ては、兩者の間

に、どこに根本的差異が見られたか！

ただ一つのことは確かだ。それは即ち、既成諸政黨は、その内部に於てこそは相互に鋭く對立してゐるが、しかし全被壓迫民衆に對しては、共同的に一の緊密なブロックを構成してゐる、といふ一事である。民衆の立場から見れば、彼等はひとしく、一つ穴のむじなだ。帝國主義ブルジョアジーの手先だ。金融寡頭政治の當事者だ、彈壓法の制定者だ。欺瞞政策と搾取計畫との立案者・實行者だ。それ故に、彼等の支配のつゞく限り、民衆の生活は益々蹂躙され、民衆の自由は益々奪はれてゆき、國内の窮乏が一層増進するだけでなく、國際戰爭の危機も一層尖鋭化するであらう。

で、わが勞働農民黨は、全被壓迫民衆の現實生活要求を提げて彼等既成諸政黨の全部を否認し糾彈してわが黨の旗を進めようとの企圖の下に、わが黨の政治的自由獲得闘爭を次の如きスローガンに統一して、第五十四議會および總選擧戰に臨まふとしてゐるのだ。

勞働者に仕事と食を與へよ！

働く農民に土地を保證せよ！

すべての人民に自由を與へよ！

田中反動内閣を打ち倒せ！

海外近事

平和論の流行

近頃の歐米の新聞雜誌を通覽して、特に目につくことは軍備縮少論及び平和論が、非常に盛んになつて來たことである。

この直接の導火線はジュネーヴにおける三國の軍備縮少會議の失敗に續いて、その全權であつたセシル卿が英國閣員の榮職を辭し、公然同會議に對する英國政府の政策を攻撃したことに基因してゐる。セシル卿が英國政府の無誠意を素破抜くと、これに對し同じく全權であつた海軍大臣ブリッヂマン君が應戰する。そこへロイド・ジョージ君が出て『歐洲の軍備は戰前よりも餘程多い』と軍國的傾向を非難すると、外相のチェンバレーン君や陸相のウォーヂント・エヴァンス君も買つて出て『そんなことがあるもんか』とこれ又眞赤になつて辯解するといふ有様である。

このことは單に政黨間の爭ひだけではない。英國の元帥であつて、前參謀總長であるサー・ロバートソンは最近『英國の現在の國防は餘りに大規模に過ぎる。も少し規模を縮少すべきである』と述べ『戰爭の唾棄すべきは今や明らかである。それは戰勝者に對しても戰敗者に對してと同じ破滅を與へる。われ等はこれを避くるために從來成功しなかつたところの方法を採用すべきである』と述べ、軍人の口からは戰爭論しか聞けないものと思つてゐた英國の朝野を驚かした。

普通はかうした意見の報道には殆んどスペースを貸さなかつたデイリー・メール紙がこれを大書したのも注目すべき現象であるし、また同じく保守的な新聞王ロザモアー卿がイヴニング・ニューズにおいて『軍備縮少のために全力を盡すべきよう』聲明を發したのも奇觀たるを失なはない。

大事をとる外交官であるグレー卿ですらも默つて居らない。『國防といふものは勃發すべき事件のために備へるものであつて、それは常に變化するものである。われ等は世界全體に對して軍備を有してゐるのではない、ある一定の想定敵に對して備へてゐるものである。それは何人なのか。答へは明瞭である。米國これである』そしてかれは英國が米國と事を構へるの愚を述べてゐる。

國内においてかうした輿論が起つて來たので政府も默つてゐるわけにはゆかなくなつた。始め英國は一九二五年に決定した巡洋艦三隻を造る筈であつたのが、これを止して一隻にした。輿論が野火のやうに擴がる英國は羨やましい國柄である。

米國の戰爭排斥論

この英國の輿論に對して米國のそれも決して非平和的だとはいへない。新らしく巡洋艦を建造するの案もあるけれども、これは五・五・三の比率に對して著るしく低位にある補助艦勢力を增そうといふにあつて、それも新

聞電報で傳へられたほどな大袈裟な運動を議會が許しつこないことは、今から保證が出來る。

今開かれてゐる米國の議會に三つの戰爭廢止案が出てゐて、これが今や米國の有力な論題になつてゐる。第一は十二月の始めにオハイオ州選出バートン氏が議會に提出した案で、それは『米國は侵略的戰爭をなす如何なる國に對しても、武器彈藥を供給せず』かつ『これ等の國は豫め造つてある仲裁條約その他によつて、その紛爭を解決すべきものである』といふのがその目的である。

第二に上院の外交委員長ボラー氏も決議案を提出する筈で、その大要は『戰爭は如何なる狀態にあつても刑事的罪惡（クリミナル・オフエンス）であるとなし』そして『當事國がその爭議を解決するために獨立の國際的裁判所をつくり、また國際法を法典化する』こと等の條件がある。第三は、佛國外相ブリアン氏の提案にヒントを得たもので、各國の間に休戰條約を結ぼうとするものであらう。

これ等の案は無論實際問題として直接の效果があるものではない。誰も知るやうに米國は行政府と立法府とが相互に獨立して居つて、上院は外交問題に對しては有力なヴオイスを持つて居るけれども、それは政府から回附されて來たものに對し協贊乃至は拒否し得るに止まり、進んで政府を指揮し得るのではない。從つてこれ等の案も議會の意志を表示するに止まつて、直ぐ實現できるとは信ぜられないが、併し國民敎育に對しては絕大な效果がある。

一方米佛兩國間にはこの不戰條約について目下交涉が進行中だ。これは昨年の四月に外相ブリアンが不用意に發言したのが原因で、いはいふきから駒が出たもので、本年中に滿期になる米佛仲裁條約を更新するに當つて、是非『兩國は戰爭をしない』といふ條項を插入するか、乃至は別に基本條約を結ぼうとしてゐるのである。

かうして米國にも平和論が流行してゐるのに注目すべきことであつて、これ[illegible]潮流もあるが、將來この層は益々大きくなつて行くと思ふ。

ショーのデモクラシー觀

この前の號の本誌で、歐米においては今やデモクラッシーか獨裁政治かの論爭が激しいことを書き、これに關するバーナード・ショーやウエルス及びラッセル等の議論を紹介をしてをいた。特にショーのムッソリニ辯護論は時ならぬ波紋を思想界に投げかけた旨を書いてをいた。

そこでこれに一應の結末をつけるために、ショー氏のデモクラシー觀といふものを紹介する。これは昨年の暮にフエビアン協會におけるかれの最後の講演である。かれの說によるとデモクラシーは、人間が課せられたすべての義務を遂行し、適當な人に適當な投票をなし得るものとの假定の上に立つてゐる。この假定の上から普通選擧も、人民投票も、比例選擧も出發してゐる。そしてデモクラシー

の下では何事も國民全體の許諾がなければ出來ないことになつてゐる。

ところが人間には全體として一致し得るものはたゞ一つあるだけである。その一つといふのは專制主義に對する希望だけだ。多くの人間は物事を決定するには餘りに怠惰で、彼等は指導者が彼等を保護することを望み、かうしろといへば喜んでそれに從ふのが常である。然るに不思議なことには專制主義を好む彼等は、一面他から統治（ガバーン）されることを嫌ふのである。非常に正直な紳士が、租稅や關稅は誤魔化しても顧みないのがその一つの證據だ。

國民の意志を以て政府を運轉するといふやうなことは、もう不可能になつてゐる。殊に社會主義者と自由主義者との相違は、社會主義者が國家（ステート）を第一とするに對し、自由主義者は自由（リバーチー）を第一とする點にある。この點においてはイタリーのファッシストと同じである。『それでも第一に國民に關るだらう』と民主々義者はいふだらう。シドニー・ウエッブ君に聞いて見給へ、さうではないといふから、かりにわれ等が試驗に犬を使はうとする場合、犬にそれを好むかどうかを聞くものがあるか、少なくともわが輩の解するデモクラシーはさうではない。

……ショー君の議論は、一貫した論理として聞くよりも、警句百出のところが面白い。この議論もさうである。ショー君のムッソリニ辯護も一まづ幕が下りた。

米國勞働者の金持振り

資本主義がいゝか、社會主義がいゝかは學者の說くところに委せるが、たゞ世界一の資本主義國米國の繁榮振りだけは少しく羨やましい。勞働者なども他の國のそれと比較するとまるでお話しにならない豪勢だ。

最近の發表では合衆國の一ケ年の收入は九百億ドルで、これは英國の收入の五倍だといふからジョン・ブルも顏色無しだ。試みにこれを勞働者の收入で勘定してみる。米國のセラデルヒヤの一煉瓦工が一日八時間の仕事の終りに金貨でその給金を渡されたとする。パリーの同じ職工がこの金を得るためには八十時間近く働かなければならぬ。またベルリンの職工は四十時間を勞働せねばならぬ。ロンドンの職工はこの同じ金貨を得るためには二十八時間働かねばならぬ計算である。（The National Industrial Conference Board の統計）

併しこの事はこれ等の國の勞働者の實質的收入がそれほど違ふといふのではない。給料は少なくも物價が安ければ、差引同じなわけである。この點について國際聯盟の勞働局の統計によつてみると、米國の勞働者の實質的收入はポーランド國ワルソウのそれの四倍半であり、ローマ、ウインナ及びブラッセル（ベルジユム）の四倍であり、ベルリンの三倍であり、ロンドンの二倍だとのことである。

一九二六年における有職者一年の平均收入は二千ドルで、これは一九二一年に比し三分の一の增加だとのことだが、併しエール大學敎授のフイッシャー氏にいはせると、この富

の分配は富者に於て厚く、全人口一億千七百萬人の内九千三百萬人までは平均收入一人頭五百ドルしかないといふのである。即ち多數はたゞ食つて行くのみだといふのであるが、この書籍著者の說でも、一家を五人と見て貧民階級の收入が二千三百ドルづゝあるといふのだから、同じ貧乏でも日本邊とは少しけたが違ふ。

彼等は『米國の秘密』はその生產力にあるといふ。『金錢からとつて來たものでも、空想で生み出したものでもない。資本主義で生み出したものだ』とクラーク君などは論じてゐる。

本年度の各國の總選擧

日本の總選擧は直ぐ目の前に迫つてゐるが、今年は不思議に總選擧を行ふ國が多い。本年の十一月六日には米國の大統領、上院議員（三分の一）下院議員（全部）の選擧があり、もうその準備で仕事が手につかないぐらゐ米國では騷いでゐる。今のところ共和黨で[illegible]アー、[illegible]て[illegible]學だが、いづれも貧乏人の子供として育つて、馬鹿に人氣があるところが面白い。

英國の現議會は一九二四年十月二十九日に總選擧を行つたもので、英國議員の年期は最長五ヶ年だから必らずしも本年選擧を行はねばならぬ理由はないが、併し英國で最後までやり通した例は殆んどなく、大概その前に解散するのを常とするから、或は今年中に總選擧があるかも知れない。さうすれば現在の分野は如何なるであらうか。保守黨は今の絶對勢力を保持するのは至難で、その減少したものだけは勞働黨、自由黨に分たれることになる。自由黨のロイド・ジョージも、勞働黨のマクドナルドも健在で、陣容はよく整つてゐる。たゞ近時勞働黨內閣の大藏大臣スノーデンが人望を得つゝあるのは注目すべきで、エッチ・ヂー・ウエルスの如きはスノーデンの下に自由、勞働兩黨が聯立內閣を造れといつてゐる。

佛國の總選擧は既定の事實だ。五月頃行はれる筈で、今でこそポアンカレーが首相とし て[illegible]ゐるが、[illegible]に滿足するものではない。佛國は果して[illegible]左黨が勝ちを制するだらうか、それともポアンカレーの右黨に勝たれるであらうか。その結果は輕視出來ない。

この外ドイツにも選擧があるし、イタリーにもあらう。世界を通じて各國が左右兩翼いづれに偏してゐるかは大體この結果を以て知ることが出來るであらう。

巴里を去る（續）

柳澤健

○

巴里の街でのぶら〳〵歩きはいい氣持だつたが、かう言へば、一體巴里のやうなこの自動車の多い所で、どうしてぶら〳〵歩けると、尋ね返されるかも知れない。まつたく、近來自動車の多いことは、お話しの外だ。此間誰かも、その一例として、トリュテの寺院のまへからモガドールの通りまでこの足で歩けば車のへシ合ひ押し合ひの爲めに結局二三分で行けるところを、自動車に乘つたが最後十五分もかゝると書いてゐたのがあつた。今から二十年にはなるまい、例の踊子畫家のドガがコンコルド廣場を描いてゐるが、それを見ると、絹帽を冠つた老紳士が細君と犬とを連れて、呑氣さうにその廣場を歩いてゐる。ところが、今こんなことを遣つたら、忽ち左往右往する自動車に轢き殺されてしまふに違ひはあるまい。……まつたく、自動車のなかつた昔のことを持ち出されゝば、もはやぶら〳〵歩けるやうな場所は巴里の何處にも無くなつてしまつた譯である。

然し、自分等は幸ひに遠い東洋の町から來た。『日本もいいが、散歩する道のないのは苦しい』と言ふやうなことを既に十

何年もまへにターベル嬢が書いてゐられたやうに、[illegible]阪やに月日を過して來た自分等にとつては、巴里はその自動車にもかゝはらずまだ／＼ぶら／＼歩きのできるところでもあつた。たゞ慾を言へば、毎日毎日の生活の忙がしさにかまけてなか／＼散策なぞのする時がないといふことであつた。——

自分が三箇年餘の巴里生活を楽しんだ住居は、あのボア・ド・ブーローニュのひろい公園に續いてゐるオートイユの競馬場のトリビュンを樹の梢越しに眺めることのできるブールヴァール・ド・モンモランシイの通りにあつた。窓からは、もつと遠くも眺められた。丘に建つてゐるサン・クルーの町が、——夕方小さな眩ゆい燈影に充たされるふか／＼した樹木に幽まれたその町が、わけてその町の眞中に聳えてゐる高い寺院の尖塔が、窓ながらも眺められた。その町につゞくサンクルーの公園、それからセーヴルの町のある谷を越すと、すぐそこはムードンの森となる。夜になると、そこからも樹蔭の燈影が届いて來た。宵の明星が耀き出すのも、その森のうへであつた。……

この住居から、三年間自分は朝夕欠かさずエトワルの方にある勤め先へ通つたのであつたが、ボアの公園に添つたブールヴァール・ド・モンモランシー、更にそれに續くブールヴァール・ボー・セジュールの通りの往き通ひ位、樂しく心に沁みるものはなかつたと言つていい。散策も、知らぬ路々を辿るのも勿論おもしろい。殊に巴里のやうな、巴里に育つた人々でさへも皆知つてゐるとは言へない所謂古い『隈（コアン）』を歩き廻ることは、實に興趣の多いものである。然し、知らぬ道の散策は、ともすれば、心の注意が外へばかり向けられ勝ちとなる。そこへ行くと、馴染になつた通は——殊にこの閑靜で高雅なモンモランシイの通の往き來は、自分をして、新しい書齋のなかでゞも過してゐると同じやうな氣持さへ起させた。それが春先きででもあつたとする。そこの門、ここの門の側の、きのふの朝よりはまた一段と大きくふくらんで見えるオーベピンの樹の葉の茂みをふかい執着の眼で眺める。その眼を更に路の行く手に向けると、マロニエの樹の群れが、きのふまで眞黑かつたのが、夜來のやはらかな雨で、それとなく仄かな緑をぽつと煙らせてゐる。そう言へば空の耀きも、思ひなし

か、きのふ頃よりも增して來たやうな氣がする。時々大きなピカピカする形のいい自動車が、薄朱色にかゞやいた道の上を通り過ぎる。低聲で話しながら行く若い男女と、すれ違ふ。それから犬を連れた老婦人、新聞を讀みながら歩く老紳士——いつとなく顏馴染となつた人々とも入れ交ふ。然し、これ等はすこしも自分の邪魔にならない——所が、却つてこれ等の『動き』が、自分の心を益々靜かなものにする。自分は、たとへば、出掛けに三四頁讀んで來たラシイヌの淨い焰に充ちた言葉のことを、も一度頭のなかに繰り返しながら、——その辭、眼を横にやつたり上にやつたりして、書齋のなかを歩き廻るやうにして、ぶら／＼と歩いて行く。

十五分で盡きるこの通の日々の往き來は自分にとつては『日課』であつた。勤めのない日曜なぞでも、兎もすると故なく足がこちらに向いた位だつた……

この巴里の言はゞ『山の手』の馴染のふかい散策と對照されるのは、自分の住居からはずつと遠い、同時に一般漫遊外國人の視界からも離れてゐるラ・レピュブリックの廣場を中心とした邊りのそゞろ歩きであつた。そこは、ほんとうのフランス人の巴里とも言へよう稍々鄙びた賑やかさを持つた界隈であつた。一年のうちでも、偶にしかこの方面に遣つて來ることのない自分にとつて、巴里を去るまでこの界隈は常に一つの『不知』土地のみの持つある魅力を持つてゐた。自分は、勝手な空想を頭に描きながら、——王政時代から革命時代、帝政時代を通しての激しい變化を極めたいろいろな繪卷物の場面を親しく眼に映る建物や町角やさては行人の顏なぞの上に、描き出しながら、歩みを進める。それ許りではない。その邊にはヴェルレーヌの住んでゐた家もあるはづであり、ユーゴーの好んで往き來した場所もあるはづであり、ルッソーの、ヴォルテールの、さてはミュッセの思ひ出をとゞめた家といふのもあるはづである。自分の眼は、またそれ等の杳かに逝き過ぎてしまつた詩人の顏貌すらも、ほしいまゝに行人のなかに見出さうとする。自分はいつしか『現代』を忘れてあるいてゐる。

わけて自分は夏のはじめのある日曜日の午近く、あのフランス革命の紀念品を蒐めてゐるカルナヴァレの博物館を出てぶらぶらとひとりサン・ドニの古い石門の方へと歩いて行つた日のことを快よく思ひ出す。日曜日のことゝて、平素は自動車の往き來もすくなくはあるまいと思はれる通りまでが、まるでひつそりとしてゐた。自分の頭のなかは今しがた見て來た博物館のなかの古い品々から牽き起された感動がまだ激しく動いてゐた。自分は、のんきに車の通る道のうへを歩きながら、兩側の古びた建物を、そこやかしこやの薄暗い窓から顔を出してゐる男女の顔を、それからそれへと珍らしげに眺めて行つた。自分は大革命と巴里の生活とをこんなに親しくつゞけて考へたことはなかつた。そうだ、それ計りではなく自分はいま巴里の心臓の邊を歩いてゐるのだ！――そうした感じは、かうしてサン・ドニの門のまへで日曜ながら夥しい自動車の波濤に出逢ふまでは、續いたものであつた。

○

巴里の町のなかでは自動車を呪ふものも、巴里の郊外のことを考へ出すときには、その自動車が欲しくなつて來る。殊に町の街路樹あの眞黒な樹幹から寶石にでもありさうな鮮やかな緑りの嫩葉が芽ぐんで來てそこころ田園の麗はしい春が思ひ出さるゝ頃になると、誰しも自動車のことを考へぬものはないと言つていゝであらう。そう言ふ自分も、今度こそは持たうか知らと思ひながら幾度春を送り春を迎へたことであつたらう。（そう言へば、自動車ほど今の巴里人にとつて『現代的』な話題はほかにあるであらうか？　アンリ・ボルドーの小説のなかに、ある若い戀人同志が甘い戀の囁きを交はす代りに最初から最後まで自動車の機械の話計りしてゐる場面がある。毎年一度グラン・パレーのなかで開かれる自動車展覽會の盛況を見たものは、あの繪畫彫刻の秋のサロンや春のサロンも、うかうかすればその人氣の點では背後に蹴落されかねまじきを掛念するに違ひあるまい。……）

まつたく、晩春初夏の最も眺めの麗はしい季節に、大きなふかふかした——巴里人に言はせると『寶玉（ビジュー）』のやうな車で、シュヴルーズの谿なり、シャンチエ、コンピエニュの森なり、さてはブージヴァル邊からボアシイかけてのセエヌ河の流域なりを馳驅する氣持は、何とも言へない。途中で車から降りて勝手に靜かな樹蔭を、のどかな水邊を歩いて行くことのできるのも、汽車を以てしては出來得ないことだ。まして、途上不圖水邊にのぞめる瀟洒なレストランでも見出し、草上に點々と置かれた食卓の一つを圍んで新らしい川魚のフライをつゝきつゝ土地の白葡萄の美酒に渇を醫ほすその快よさに到つては、到底汽車遠足にては知り得ぬ境地であると言つていゝ。

……草上のレストランと言へば、自分が巴里を立つすこしまへにある劇場で見たルノルマンの『熱風（シムーン）』のなかで、アフリカの熱土に働いてゐるフランス人が三四人集まつて蓄音機を廻はしてゐる場面がある。歌劇『マーン』の一節が廻される。一人が不意に言ひ出す、——『あゝ、あの緑りの繁つたシュヴルーズの谿！　あそこのレストランで、おれは食事をしたことがあつたんだつけ。………』

自分は、何でもないやうなこの場面を、巴里を去つてから時に思ひ出すやうになつた。まつたく、巴里の郊外の——所謂優しいイル・ド・フランスの野から野へ丘から丘への自動車の快走、それから續いて樹蔭での水邊での食事は樂しさの極みだつた。それこそこの都を立ち去つたものにとつては、限りなき想ひに充ちたスーヴニールであると言つても間違ひはあるまい……

○

水邊草上の料亭の食卓が、如何に樂しからうとも、その美味をもつては、到底巴里に群がれる數多くの料亭の食卓に比し得ないことは言ふまでもあるまい。巴里は世界の美食の中心とも言はれてゐる。もとよりフランスの中心であるべき筈

であることは、言葉を要しまい。

しかし、自分の數多からざる經驗からしても、フランスの如何なる田舍でも、その料理が到底自分たちの口に合はなかつたと言ふが如きことには一度も逢著したことがなかつた。兎も角『喰べられる』のであつた。まして、人口數萬を有するが如き都市に於ける料亭の食卓に到つては、それこそ巴里の有名なる料亭の夫れと優にその技を競ふものがあると言つていい場合さへ鮮くなかつた。『詩を讀み繪を味ふといふことはある人間のみに與へられたる特殊の感覺である。と同じく、食物を味ふことも慣性ではなくて一の天禀である』とあるフランス人が言つてゐる。この意味で、フランス人が、味覺については、他の國々の人々にくらべて何といふ『天禀』を受け繼いでゐることか。ブリア・サヴァランのごとき他國に例を見ない美食家を出したといふことは、決して偶然ではあるまい。

たしか島崎藤村氏でなかつたか。フランスの田舍を旅して、敷居をはいるとすぐに眼につく大きな寢台におどろいてゐられる。そして、この國の生活は、そのまゝ寢台が中心ではないかと、言つてゐられる。併し、その意味では、食卓自身も、寢台とその中心を爭ふ權利を持つてゐやう。フランスの大部分はドイツ人やイギリス人やのやうに到底粗食に堪えて世を渡り得る民族ではない。

昨年の春ある懇意なフランス人に招かれて二三日を彼の海邊の大きな別墅に過したことがあつた。その頃フランスは連日爲替相場の慘落を見てゐた。この先どういふことになるか、を考へてどのフランス人も暗憺たる面持をしてゐる時であつた。自然食卓でもその話が出た。さかんな飲み手で、またさかんな話し手であつたアルベール・ロンドル（彼も亦自分とともに招かれてこの田舍へ新婚早々細君携帶で遣つて來てゐた。彼が日本・支那の旅から歸つて書いた『狂氣の支那』、それに最近南アメリカの旅から歸つて書いた『白人の裏切者』？はいづれも世に相當聽えてゐる。）は、自分に向つて日本の貨幣の相場は如何なのかと尋ねてから、今までの勢のいい話振りとは反對に『あゝ、フランス人は實際不幸だ！』と長嘆息

をふうと洩した。——が、瞬時であつた、手許のコップの味のいい古酒をぐつと咽喉に注ぎ込むや否や、彼はたちなち上機嫌を取り返して言つた。『然し、このうまい酒が飲める。うまい料理がたべれる、こんな國が外に何處にある！　まだまだフランス人は決して不幸ぢやないよ』

畢竟食卓は、繪畫彫刻文學乃至は政治經濟を通しても同じくフランスを理解するに肝腎な役割を持つ、否これらを以てしては判らない部分を判らせるやうにさへして呉れるのである。『旅にあつては、その地の女と食卓とに心をくばれ』と訓へた詩人の言葉は、フランスを見るうへでは最も役立つ。

○

贅澤な巴里料亭の一つキャフェ・ド・パリの主人で數年まへに亡くなつた男の逸話として傳へられるところに依ると、彼は葡萄酒を翫味して一々その酒の製造された村の名をその製造された年を言ひ當てることが容易だつたといふ。言ふまでもなく、ある一定の地方の名を取つてゐるソーテルヌなりサン・テミリオンなり稱ばれてゐる酒は、細かく見て行けば、またその醸造される場所が村なり何なりによつて自然いくらか違つて來る筈である。また、年々葡萄の收穫が一樣には行かぬ關係上同じレッテルが糊つてあり、また全然同じ場所の出來の酒でも僅か一年の相違でその味に（自然またその値段に）大分の開きがある筈である。例へば、大戰鳥渡前の一九一一年に出來た酒（この年の酒は近來のいい出來だと言はれてゐる）とその翌年の一二年に出來た酒とは、ほんの素人でも區別が付く位に相違がはげしいとせられてゐる。キャフェ・ド・パリの主人ならずとも、すぐれた飲み手の多いこの國のことであれば、この種の舌利きは他に續々とあるのかも知れんし、また日本邊でもこの種の人が案外多いかとも想像せられぬわけでもない。併し、舌の鈍い自分たちには、かゝる藝當は要するに驚きである。

か、これから自分が言ひ出さうとしてゐるものはフランスの女のことである。今酒を持ち出したのは、フランスの女を語るのは、キャフェ・ド・パリの主人の酒の風味よりも實はもつと難かしい鑑賞に値することを、——碌々酒の風味すらも出來かねる自分に如何して更に困難な女の風味ができようとの豫防線を張らうが爲めに外ならなかつた。

勿論フランスの女はドイツの女と違ひまたイギリスの女と違つてゐる。それは、一眼見ただけでも容易に判ることだ。然しこんな區別は教科書の編輯者を悦ばせる以外に何の役に立たう。フランスの葡萄酒がドイツのビールと異りまたイギリスのエールとも違ふことを知ることは、常識までにも達しまい。自分たちの知らうとしてゐることは、もつと適切なもつと現實なことの筈だ。それだけに、問題は如何なる慧眼の觀察者でも外國の旅行者の手には餘るほどに難かしい。まつたく外國人の身の上では、せいぜい街上を往き來する女の品定めじみた觀察か、それとも何かの機會に與へられた彼女等との僅かな交語からの經驗より、以上のことは容易に望み得まい。乃至はこの國の小説を繙き劇場の門をくぐることに依つて夫れとなく彼女等の秘密らしいものを覗ひ知るだけがせいぜいであらう。——

酒が各地で夫々違ふならば、女は——否人間は更に細かく各人各人で違ふわけである。殊に、いい意味にも惡い意味にも個人主義の徹底してゐるこの國では、個人と個人との境界が總體分類を許さぬほど實にはつきりしてゐる。それだけに、外國人の分際でフランスの女性觀をするなぞといふことは僭越とも言へる。またそれだけに所謂心理分析の極端に好きなこの國の作家にとつては、自國の女の觀察位興味のある、言はゞパッショナントなものはないといふことにもなるわけである。思へ、何處にフランスの作者ほど女の觀察に巧みなものがある。勿論フランスの作者同志の間には巧拙はあらう。然し一朝外國の作家と比較する段となれば、彼等は一樣に秀れたる女性描寫の達人ではないか。あの清僻のごときロマン・ロランでさへ、『ジャン・クリストフ』を讀んだ者の誰しも知るごとき女性の通人である。何處の國の作家がたとへばアンネットのごとき女を、たとへばサビーネのごとき女を、彼ほどにまざまざと描き出せるか。

思ひ來れば、自分の以下に書くものは、コダックの寫眞機におさめたぼやけた素人寫眞の類かも知れぬ。……

○

フランスの女の顏。

巴里を通つたことのある日本の旅客がよく口にする言葉は、『フランスの女は化粧で胡麻化してゐる。』といふのだ。そして、ほんとうの生地の美しさは、むしろイギリスの女やドイツの女やにあるといふやうなことを言ふのだ。

然しこの言葉は、すこし説明が足りない。なるほどフランスの女の厚化粧は有名ではある。が、それかと言つて、外側の化粧だけであれだけ引立つと見るのは、やゝ言葉が過ぎる。化粧は化粧かも知れないが、內側からの感情なり氣持なりの動かし方であゝ言ふ風な人眼を牽くやうにさせることができるのだ。——と自分は見てゐる。

自分は、この春鳥渡した用向を携へてスペーンに出掛けた。數年まへのこの南歐の國の旅でもそうあつたやうに、今度も相變らずスペーンの女の顏立の整つて美くしいことを感じながら、マドリットの町々を步いたものであつた。然し、その美くしさにもかゝはらず、彼等の面輪には、フランスで見るごとき一種仄かな優しいある『空氣』が無かつた。あるニュアンスがなかつた。あの神秘をたゝえてゐるらしい眼、あの端麗な顏の輪廓、あのセンシュアルな唇にもかゝはらず、そこにどうしても『何か』が欠けてゐた。

いままた自分の住んでゐるこの北歐の町のことを思つて見る。この町の女の叡やかな健やかな美くしさと言ふものは、他に鳥渡類があるまい。殊に人の眼を牽くのは、如何にも淨らかで善良な輝きを持つたその面輪だ、——その眼、その額、その鼻、その唇だ。觀る人の心にこれほどの親しみと信賴とを與へる面輪が、他に多くあらうとは考へられない。然しながら、この美くしさにもかゝはらず、それ等の面輪の觀者に與へる單調さは到底これを否定し得ない。素直だ、然し

それだけだ。――かうした感想を抱いたのは、自分だけであらうか？……

ここだ、フランスの女の持つてゐる美は。彼等は、その面立の端麗なことでは、イタリアやスペーンやの女に劣るかも知れない。その純潔な美しさの點では、イギリスなりドイツなりさてはスカンディナヴィア諸邦の女に劣るかも知れない。然しながら、日さしに依つて明暗の出來る風景のやうにその時々の感情なり氣持なりで『動く』美くしさといふものは彼等だけのものだ。到底眞似のできそうもない點だ。この意味では、フランスの女の顏位世にも面白い見せ物はないとも言へよう。まつたくそれは微妙な精巧な藝術品だとも言へよう。彼等の顏の造作が拙いか拙くないかは、その次の問題である。――

○

十九世紀末のフランスの劇作家アンリ・ベックが作品『群狼』は、日本にも翻譯があるから、讀んだ人は知つてゐよう、父親に死なれて後に殘された母親と娘三人とが世の荒波に放り出され、どゝのつまり高利貸とか惡代言人とかいふ『群狼』共に骨までも舐ぶられてしまふ、といふ悲慘な芝居である。

この芝居を、今は日本へ渡つて靜岡の高等學校に教鞭をとつてゐる詩人のノエル・ノエット君、それに西條八十君なぞを誘ひ合つて見物に行つたときのこと、幕合ひにノエット君は自分に言つたものだつた。――『この作品ができた當時ならば、この芝居はずゐ分悲劇でもあり深刻でもあつただらうが、今日では、これほどになるまへに三人の娘たちはタイピストになるなり事務員となるなりして、立派に世を渡つて行きますよ！　今日の觀衆から見れば、あゝして始終めそめそしてゐる娘たちは、意久地なしですね。……』

ノエット君の觀察は間違ひではあるまい。今日のフランスの娘は、所謂賢明な人々から見たら困りもの位に、『巷』へ

『巷』へと出たがつてゐるらしい。自分が巴里を立つ前、子供の女中を探して、若い娘から思ひ掛けないほどの澤山の手紙を貰つて驚ろいたことは前にも書いた。役所や會社なぞで一名のタイピストの募集でもすれば、立ちどころに數十名の應募者があるといふ。これを生活難の爲めと計り見るのは、當つてゐまい。

たしか二年計りまへに出版された小説家マルセル・プレヴォ（この人こそは正眞正銘女性描寫を本職としてゐる小説家である。）の『フランソワズへの手紙』と題された現代女性觀察記のなかで、著者は現代のフランスの若い女性が如何に讀書を好まなくなつたかを嘆じてゐる箇所がある。彼の語に依れば、この現象は、彼等がスポーツに耽るやうになつたが爲めだとある。そう言へば、こゝ一二年來めつきり眼に付く巴里の新現象の一つは、若い娘が若いマダムが巧みに自動車を操つてゐる姿ではないか。さては、ボア・ド・ブーローニュの公園さして二人連れで三人連れでいそいそと步を運び行くラケットをおさめたサック片手の健やかそうな若い女の姿ではないか。一寸した外へ出るのにも母親や女中やに附き添はれることを常としたといふこの國の家庭のしきたりは、今や他の多くの習慣・道徳と共に、『戰爭前（アヴァン・ゲール）』の古物の一つとなつたらしく見える。兎も角も、彼等は『動き』たがつてゐるのだ。巷へ出たがつてゐるのだ。薄暗い味も艷もないやうなオフィスでも、自分の家のサロンの窓側で溜息でもつきながらサマンやネルヴァルやの詩を讀んでゐる『不動』の生活よりも遙かに氣の利いた好もしいしつかりとした生活なのだ。勿論、あの青野原で陽と風との入り交るなかで馳け廻るテニスの好ましいことは言ふまでもあるまい。鳥渡でも舵が狂へばたちまち人を傷け自分をも傷けようとする危險ななかを機敏と沈着とを以て見事に飛り切らうとする自動車の操縱の世にも快きものであらうことは言ふまでもあるまい。彼女等は今や、飛行機にさへその熱い眼を向けてゐるといふではないか。ブールジェの飛行場の人々は、それが大西洋橫斷の飛行でありアフリカ橫斷の飛行でありさては日本への印度橫斷飛行であつても、その都度同乘を希望する夥しい手紙を若い女たちから受取るといふ。――

フランスの女は、銀座通の游泳をこれ能としてゐる日本のモダン・ガールよりはもつとモダーンなのかも知れない。

○

この動くことの好きになつた彼女たちは、政治といふものを如何見ようといふのか？婦人參政權運動といふのは、何處の國にもある。しかし、フランスは人も知る人權宣言の國だ、自由と平等との標語のまへにはあれほどの血を流した國だ、共和國だ、普通選擧の國だ、左左へと政治が動いてゐる國だ、その國が、今以て婦人に參政權を與へてゐなければ、また婦人側にそれを強く要求するやうな運動も起つてゐるらしくは見えぬ。それは何故なのか？彼女たちは、政治の問題に對しては、依然として『戰爭前（アヴァン・ゲール）』の舊思想で滿足してゐるのか？

自分が初めてフランスの議會なるものを覗いて見た時、感じたことの一つは、傍聽席に女が如何にも多いといふことであつた。(日本の議院と違つて、この國には婦人席なぞといふ特殊の席はない。)傍聽者の二分の一かうつかりすると三分の二位は女で埋まつてゐるといふ狀態であつた。爾來數十度自分はあの薄暗いパレー・ブールボンの門をくぐつたが、その都度女の傍聽者が席に溢れてゐるのを見た。

ある時自分はそのことを懇意なフランス人に語つたことがある。自分としては、この現象は取りも直さず、現代のフランス婦人の政治的覺醒といふやうなものを示してゐるものとしか思はれなかつたので。ところが對手の答は簡單明瞭――といふよりも素氣なさを極めたものであつた。

『そりや、君、女たちは暇が多いからさ！』

數ケ年の巴里滯在は、自分をして、結局この男の言葉が左して誇張ではあるまいと思はしむるに到つた。第一に、女に暇の多いことは事實だから。第二に、フランスの議會（主として下院）の見物はその面白さに於いてオペラや芝居の見物

にも遙かに勝るものがあるから。第三に、そのオペラや芝居にも、女の見物人は常に男よりも多い傾きがあるから。更に最後に、この議會の傍聽席を別としては他には婦人の政治運動じみたものを殆んど見受けなかつたから。

議會の傍聽席に女が多いやうに、日日の新聞の政治記事に一般の男が注意を拂つてゐる程度には、大概の女も注意して讀んでゐると言つてよからう。エリオ內閣が倒れたと言つては、ブリアン內閣が流產したと言つては、一般の世の男並みに女たちもその日の最も大きな話題にすることに變りはないのである。

さうなると、フランスの女は、政治に無關心には非ざるべきも、然かも夫れを目するにオペラ乃至芝居以上には見ず、その日の社交話題以上には評價せぬといふやうに受取れる。固より少數の女については例外とする。一般としては、實際にこの程度にしか政治を見てゐないらしい。これの善惡さては斯くなりし原因その結果等に付いては固より論ずる人が他にあらう。兎も角フランスの女の政治——殊に參政權獲得に冷淡なることは、事實と見なければなるまい。

自分が巴里で出逢つた人のなかにフランスの女を『娼婦型』に分類したある日本のマダムがある。娼婦といふ言葉は、隨分きついが、フランスの女にとつてこの世に美を保ち愛を獲ること以上に大切なものはないらしいその人生觀を割つて考へて見れば、このきつい言葉もある程度まで眞實を示したものとも言へよう。彼女等はその本能の感覺で、この女の力のみがたゞこれのみが眞に女を生かしきた男をも『征服』し得るものであることを悟つてゐるとしてゐるらしい。場所もあらうに議政壇上で顏あからめて男と議論を遣り合ふなぞといふことは、かく悟つてゐる彼女等の寸擧も翼ふところではない。彼女等は、それにはもつと適當な場所を、もつと適當な方法を知つてゐるのだ。………

世界婦人參政權大會といふものを初めて開いたのは巴里だつたといふ。婦人參政權の爲めに呼號した最初の女もフランスの女だつたといふ。それが今日では、世界婦人參政權史の上でフランスはすつかり『落伍』してしまつた形である。その肝腎の女が一向男の專橫に憤慨してゐる模樣もない。勿論この點でも、日本の女の方がずつと眞面目で進步的で、フ

ランス邊よりは早く參政權を獲得するであらうことはほゞ豫見されぬでもない。——

參政權運動のうへでは、フランスの女は萎靡沈滯を極めてゐる譯だが、これをほかにしてはなかなか多樣の世界で活動してゐるらしく見える。殊に藝術の世界では、假りにそこに活動してゐるフランスの女性といふものを除いたとする。隨分とさみしいに違ひない。

○

一昨々年の春か、倫敦から巴里に見えた大阪朝日新聞社の恩田和子さんが國立劇場のコメデイ・フランセーズでピエラ夫人の扮した『ヘッダ・ガブレル』を見物してすつかり感心してしまひ是非このすばらしい藝を持つた女優に逢つて行きたいとのことから、御一緒にこの人の家へ訪ねて行つたことがあつたが、それがきつかけで、そこは恩田さんの職業意識といふもの、この機會にフランスの『有名』な女を片つ端しから訪問して見たいといふ註文になつた。自分は、それなら詩人では例のノアイユ伯爵夫人をお訪ねなさい、と言つた。小説家ではコレット夫人（この人の作品は、そのうち巴里に長くゐて同夫人とも懇意だつた深尾須磨子さんの手ではじめて日本にも一二紹介せられるらしい。天下これほどの適譯者はあるまい。とこの機會に太皷をたたいて置く。）をお訪ねなさい、と言つた。それから、畫家ならばローランサン夫人を是非共と言つた。更に手をひろげるならば、例の化學者のキュリイ夫人を、さては、テニスで誰一人知らぬ人もあるまいスュザンス・ラングラン孃をお訪ねなさい、とも言つたものだつた。——

自分が恩田さんをまへに卒然と數へ立てたこれ等の名は、考へて見ると、實はフランスのみの名物ではなくて、實は夫夫立派に世界的とも言へる人達ではなかつたか？　自分は今更にフランスの土地の生み育てた秀れた女性の豐かさに氣が付いた思ひがしたものだつた。自分は獨語する。——『政治の最高の目的が、人生への眞の寄與を意味するものならば、

議院内に代議士を十人や百人送り出すよりも、これ等數人の秀れた女性の頭腦に依つて、どれほど政治の目的が達せらるることとなるか！』

然し、自分はここでまた婦人參政權の蒸しかへしをするつもりではなかつた。自分は、この機會に上にもその名を書き記したピエラ夫人のことを鳥渡語らうとしてゐるのだ。——

ピエラが今フランスの劇壇で大立物の一人であることは誰しも認める。然し、何を言つても今が働き盛りの最中とて、非難もあれば攻擊もあらう『定評』を獲得するまでにはまだまだ先であることは言ふまでもあるまい。然しながら、自分のみについて言へば、誰が何と言はふと、すばらしくいい役者だ。日本から哲學の硏究に來た某氏が、伯林でモイッシイの『生ける屍』を見て以來どんな役者もつまらなく見えたが、巴里へ來てピエラの『ヘッダ』を見てモイッシイにならぶ役者あるを知つた、『日本への土產が二つできました』と、いつぞや自分に語つたのは、ことごとく同感である。同じ『ヘッダ』を見て、是非共この女優に逢はねば巴里を離れない、と決心した恩田さんに、ことごとく同感である。

そのピエラに親しく逢つて一時間か一時間半を語り合つたといふことは、その內容は大したものではなかつたが、自分にとつては好箇の巴里滯在の記念の一つであつたと言へる。事實見聞の廣くない自分には、ピエラほどの女性に逢つたことは無かつたと言つてもよかつたから。——

舞臺へ立つても殆んど化粧らしい化粧を施してない彼女は、家にあつては、それこそ微塵の白粉ッ氣とてはなかつた。來客を對手にわざとらしい媚笑を一つだつて浮べるではなかつた 意味のないお世辭を一つだつて口にするではなかつた。卒直に聽き、卒直に語るほか何ものもなかつた。そして聽くときにも語るときにも、その眼が——何といふ眞直な、正面から貫いて來る眼であることとか！ ——心の眞實さを示してゐた。

それから彼女のはつきりした自信。それには同行の恩田さんが最初から最後まで感心し切つたものだつた。勿論自分た

ちが彼女のまへに持ち出した數々の質問は、さして難問といふほどのものでもなく、ある程度まで斯道に熟達した者でもが割合にすらすらと答辯できる底のものであつたかも知れない。これにしても、響きの物に應ずるがごとく、些かの澱みも躊躇もなく、その所見と所信とを朗らかに語る彼女のなかなかの強い自信には、ひどく感服させられたものであつた。そこには何等の曖昧さがなかつた。何等の逡巡がなかつた。要するに彼女は、自己を、自己の心臟を、自己のサンシビリテを、最高の地位にまで押し上げるのを憚らないのであつた。『原本（テキスト）と自分のサンシビリテと。一切はこれだけです！』——かう彼女は語つた。これほど強いものが、——美しいものが、世のなかに何があらう。

問『一つの作品を演出するのに、どの位の用意が要りますか』

答『例へば、『ヘツダ・カブレル』には、一年ほどかゝりました』

問『一年間ですか！　その間に參考書といふやうなものを、——例へばイプセンを批評した論文とか『ヘツダ』の註釋とか、さうしたものを充分にお讀みのわけですね』

答『この芝居の演出に參考となるやうな書物は、フランスには一冊もありますまい。よし假にあつたにしても、妾は、いつでも原文（テキスト）以外に餘計なものは讀まぬことにしてゐます。たゞ一つ、ラシーヌの『フェードル』をやつた時には、この芝居の源をなしてゐるギリシアのユーリピデスを讀みました……』

問『さうすると、貴女の演出の方法は、常に貴女に獨自なものですね』

答『さうです、自己（ソア）以外に、わが心臟（クール）以外に、教師はありません！』

……あの時のかうした問答を、もう一ケ年半も經つた今日、自分はまだはつきりと、あの聲あの眼とともに覺えてゐる。それにしても、これほど鮮やかなすがすがしい印象を與へて呉れた女性は、繰り返して言ふが、巴里の滯在中ほかには無かつた。この意味でピエラは、自分にとつてはフランスの女のなかの女であつた。——

……こんな風に巴里を語り、フランスを語り、酒を語り、女を語つてゐたら、何日果てるとも切りがつくまい。詩人ヴェルレエヌは、『冗舌をとらへてその頸を締めよ』と訓へてゐる。否、かゝるあらたかな箴言を持ち出さずとも、由來フランス人にとりて簡潔と機智とが相俟つて文章の鐵則とせられてゐることは人も知る通りである。娟々として盡くるなき冗舌を今まで續けて來た自分は、思へば、フランスを語り巴里を語るには、最も縁の遠い資格の持ち主であつたかも知れぬ。然し世界は廣い。この世界の旅を今の職業(メチエ)としてゐる自分にとつては、或ひはかゝる資格が却つて役に立つ日があるかも知れぬ。その定かならぬ日の到來を讀者に約しつゝこの筆を擱かう。

（北歐の水都にて、一九二七・一一）

○

朝刊八頁・講讀料壹圓

夕刊四頁・地方郵稅共　壹圓五拾錢

東京日日新聞

東京市麴町區有樂町一丁目

發行所　東京日日新聞社

電話丸ノ內（三三一）（三二一）以上代表番號



慶長前後の泥坊

鳶魚

スッパの系統

江戸の幕府は慶長に始まつて、慶應に終つた、德川氏の覇業は慶の字の附く年號で首尾したが、此の江戸は盜賊で終始して居る、それも貧の盜みに戀の歌といふ程度の泥坊でなく、大分型の變つた泥つくで、孰れも武門から出た盜賊なのだ、武士といふものも我が國の歷史の上で、隨分長いお馴染だつたが、それが八百八町を最後の舞臺として舞納めた、しかも盜賊になつて登場したのが面白いではないか、戰國武士のお名殘狂言が慶長の賊群であり、太平の武士の切狂言が慶應の御用盜であつたのは、彼等の因緣因果を打明けたやうにも見えて、誠に淺間敷ではないか。

江戸の泥坊は世の治亂に懸けて、其の苦しい斷末魔を見せたゞけではない、約三百年の間に各階級各方面から種々の事情に促されて出ても來た、時勢は暗遷默移する、泥坊も色々に變化する、泥坊の變化した跡に附いて世間を眺めたら何が見えるだらう、又た泥坊を向ふに廻した被害者の側から展望して、如何なる風致があつたらうか、無論その時〲で泥坊に對する世人の心持も動かずには居ない。

考へるともなく江戸時代の泥坊といふものに眼が着く、太田道灌の築城では武藏野の原中に都會を造り出すまでには往かなかつたから、盜賊が集つて來るほどな景氣ではない、徳川一世が關八州の領主になつて引越して來て、やがて徳川氏が天下取りの樣子に成り濟し、江戸城の規模を擴大した造營の後、即ち慶長十一年から大都會らしくなつた、古來物初記に『慶長十七年冬迄は京大坂堺を三ケ津と云、慶長十八年二月より江戸京大坂を三ケ津と號す』とあり、豐臣氏の滅亡は元和元年五月だが、それより三年前に江戸は三大都會の上首に算へられた、是は慶長十七年中に江戸の新市街の地割も濟んで、東國無二の大都會が出現したからだらう、新しい大都會、早速ながら盜賊が群集する、此の頃の郊外の新住宅地も、二軒三軒づつ新築されるまでは兎に角、隣り近く十戸二十戸と建て續ける時分には、晝間も天井を音高く鼠が暴れ廻る、必しも江戸城大造營、新市街創開を待つて盜賊が來襲したとのみも云へないにせよ、新住宅地の暴鼠を考慮せずには居られまい。

關八州の景氣は鎌倉以來、健兒の產地として知られ、武勇に誇つたのでもあるが、秀吉の偉大な壓力で一氣に押潰されて了つた、『小田原落城以後、上方ノ御代ト成、關東八國ノ大名小名、剛心ヲ失ヒ、大平ニ拔ヲ守リ、民百姓ニ至ル迄、悅バヌ者ハナカリケル』(新田老談記)、如何にも北條氏の滅亡の際、關東の城々の數を盡して降伏させた、八州の武士を悉く頭の擡らない樣にして了つたから、長い戰國の時代に倦んで居た處でもあり、旁々氣拔けになつて、鬪志を失ひもしたらう、此處で平生怪しからぬ物にして居る元正間記が、渠の大老堀田筑前守正俊の事を書いて、

貞享元年の秋、在所古河へ下向有て百日の逗留也、江戸より行程十六里、本名を下河邊の城といふ、本丸を賴政曲輪と云、樣子有て源三位の首を埋みたる塚有、是より新田足利へ近く、かねて國風を聞置るゝ處、關八州の內、上野下野ほど風儀正しきはなし、理りかな新田足利より引續たる在所は、脇屋大館里見烏山栗生篠塚江田徳川世良田也、中頃武田家斷絕しては甲州崩れの浪人、或は武州忍の城主成田の家中、悉く郷士と成て居住す、勿論新田足利の一族、民間に下りて百姓となる、依て百姓町人も他國よりは武を磨き、隣家へ行とも脇差放さず、農業を致するも藤柄の大脇差を帶し鎌鍬を荷ふ、平日の遊びにも的の出合、鞠の會、武藝の友吟味、侍の出會に替る事なし、去る間名高き者多し、田地二三千石持たる者多し、三百石四百石持たる者は數多なり、由緒を亂し見れば、各慥成系圖所持いたし、義貞尊氏の直胄、信玄の感狀、

重代の兜太刀所持せり、佐野栃木桐生迄、百姓の風俗、右の通にて昔を忘れずと云ふ、

といふのに嘘はなく、是だけは棄て難い氣がする、斯う落着いて了へば平穏な筈だけれども、間もなく此の地方に遊俠の氣が溢れるやうになり、長脇差の本場とも思はれる程に、名高い博徒を多く出した、同じものでも未だ落着かない頃、實は落着けない連中が、江戸の最初の泥坊にあつたのである、畢竟落着けないといふのも血の氣が多過ぎたのに他ならぬ。

石川五右衛門もどき

誰も讀んで居る三浦淨心の慶長見聞集に、關八州盜人狩の話がある、其の話は先づ跡にして、江戸の最初の巨盜向崎甚内のことから眺めて往かう、慶長見聞集には斯うある、

關東の盜人淺なくたやし給へば、世中靜なる所に、向崎甚内は盜人がりの大將給はりたるとて、いたづら者を多く扶持する、香餌のもとにけんぎよのあつまるごとくなれば、たゞ大名の爲體にて國々をめぐる、先年秀吉公の時代に、諸國の大名、京伏見に屋形作りし給ひ、日本國の人の集り也、石川五右衛門と云大盜人、伏見野のかたはらに、大きに屋敷をかまへ、屋形を作り、國大名にまなんで、晝は乘物にのり、鎗長刀弓鐵砲をかつがせ、海道を行廻り、をし取し、夜は京伏見へ亂入、ぬすみをして諸人をなやます、此事終にあらはれ、石川五右衛門は京三條河原にて、かまにておられたり、今又向崎甚内がふるまいも、是によく似たりと皆人云、所に爰かしこより、際限なく盜人をとらへ引て江戸へ來る、いかなる者ぞと問給へば、是は向崎が被官、かれは甚内がけんぞく也と云、御奉行衆聞召、とかくにきやつは大盜人、諸人のみせしめとて、向崎をとらへ、首につなさし、馬にのせ、はたをさゝせ、江戸町を引めぐり、淺草原にはりつけにかけ給ふ事、慶長十八丑年なり、

當時向崎甚内を石川五右衛門と同じ造り口だと云つたらしい、五右衛門は大泥坊の中の大泥坊で、甚内は江戸での巨盜だが、彼は日本での大泥坊だ、似て居るといふのが既に甚内を小とする口氣である、五右衛門も新しい伏見の繁昌を犯した處は、甚内が新江戸を荒したのと違はない、此の五右衛門については、武家盛衰記に蒲生氏鄕が釜煎の刑を好んだことに続けて、

文祿四年の頃、石川五右衛門といへる與州石川の者、大重科人にて、後京都へ登り、猶諸人を苦しむ、太閤、京都所司代諸國の守護に命じて搦にし、其母並に同類卅餘人迄搦捕り、三條河原に於て烹殺さる、

とあるが、海錄には『文祿二年癸巳、天下に隱れなき石川五右衞門と申、盜人大將相從ふ小盜人十一人、三條河原にて釜煎になる』として、受刑に二年の差がある、又た奧州者だといふのも、望海每談では、

石川五右衞門と云者、生國遠州濱松の侍なり、始は眞田八郎と云ふ、河內石川郡の山內古庵と云ふ醫者と所緣あるを以て、其家を賴み居り、石川五右衞門と改號し、終に强盜となる、文祿の末年捕られ釜炒の刑に行はれたり、時に三十七歲なり、一郎と云ふ幼き子も相共に煮らる、

石川や云々と辭世したり

濱松出生にしてある、彼が河內に居たといふのは、東海道名所記に『中比石革五右衞門とて、盜人の大將あり、河內と大和の兩國のさかひなる立田越の峠にありて、鬼神の裝束して、往來の人をおどし、荷物を追おとし、人をはぎとりけるほどに、立田山に鬼ありと申ならはしける』といふのと出逢ふ、孰れにも松本治太夫の正本にある石川五右衞門や、近松の傾城吉岡染に出て來るのとは、全く樣子が違ふ、まして並木宗輔の釜淵双級巴のやうに家庭的な氣味合ひのものではない、野武士らしい如何にも盜人の大將といふ言葉が相當して聞える、此の氣味合ひは向崎甚內にも十分認められる。

鎗彈正の一子

向崎を向坂とも幸坂とも書いて居る、向をムカフと讀んであるが、音に讀めば向も幸も同じに聞える、それに甚內は鎗彈正で知られた甲州武田家の老臣高坂彈正の子だと云ふから、向崎でも幸坂でもなく、高坂でなければならぬ、甚內は幼名を甚太郎といひ、父彈正の沒後、主家武田氏が亡びたので、祖父對馬は甚太郎を連れて甲斐を去り、攝津芥川に閑居して、孫の成人を待つた、其處へ武者修行に出て來た宮本武藏が行き暮れて一泊を賴んだ、對馬は宮本の人物を見込み、孫の甚太郎を托したので、宮本は甚太郎を從へて諸國を遍歷し、遂に江戶へ出た、其の時は、十一歲で宮本の弟子になつた甚太郎も二十一歲になり、多年の稽古の功に依つて一流の奧儀を究れ、あつぱれ宮本武藏の高弟と云はれるやうになつて居た、年の若い甚太郎は盛に辻切りに出掛け、往來の人を斬つて、已が手腕を試みて居る中に、或夜一刀兩斷した飛脚の懷中に在つた金子五十兩、是を持ち歸つてから、漸く酒色に荒み、惡行日々に增長し、師匠の宮本武藏に怒られ、破門して追拂はれた、それから甚太郎は名を甚內と改め、身を相州平塚宿に退け、盜賊の根本となり、箱根山に陰れて一類と掠剽を恣にしたといふ、此の傳說は極めて嬉し

くない、何とも信用し難い、疑はしい個所を斷定して見た處で、依據すべき向崎甚内の閱歷が知れる譯ではない、只だ彼は剛勇な野武士、主人から離れたのが浪人、未だ主取りをしないのが野武士、食祿のない主人持ちでないのは同樣でも、其の間に異つた氣味を持つ、浪人が野武士の群に投じることはあつても、野武士が浪人にはならぬ、野武士は自存獨立の氣象があるけれども、浪人は武士の失業者で、しかも就職難に惱む風情がある、浪人の窶つ〳〵しいのは寬永以後で、戰國時代から寬永までは武功次第で賣れ口、捌け口に困らないから數も尠く、意氣も衰へない、けれども槪して一度主取りした者は、二度三度となく主人を持つのを其の身の落着にした、家畜になつた禽獸は野飼に歸るのが却つて迷惑だ、野武士は野飼なのだ、時に依つて餌料に困ることもあるが、頭を下げる辭はない、浪人とは首の骨の樣子が違ふ、野武士の意氣は間が好ければ天下も取らう、大名にもならう、自惚れにもせよ其處だ、其の下廻りのお安い所にしても派出婦と下女との違ひはある、從つて自墮落な節制の缺けたものでもある、その代り標悍な豪放な所が多い、甚内は剛勇な野武士、戰國の名殘を留めた野武士であつたこと、新しい江戶幕府の命を受けて關東八州の群盜剿捕に從事したことは事實であらう、彼は捕盜のために、自分の手に雜多な人間を集めて、幕命に狹爭した、是を警察事務とは思はないで、對敵行爲と考へたが、戰爭氣分に引張られて、泥坊を捕へながら掠奪を遣つた、捕へる者も捕へられる者も泥坊をする、捕へる方は部下を多く持つて居るだけに大泥坊の譯だ、江戶を學るまで傳馬町牢屋預であつた石出帶刀なども、其の時分に幕命で囚人を預つたのだが、民政といふことに理解があつたから、兇暴な者共を處理して宜しきを得た、此の人も千葉氏の一族で、小田原沒落以來は遠州掛川に居たのが、時を得て江戶時代唯一の典獄官になつた、向崎甚内も江戶に治績を殘して、三百年の文化に貢獻すべき機會であつたのに、却つて新都會を虐げる大盜になつて了つた、しかし別段遺憾なこともない、成り行くやうにしか成らない世の中なのであるから。

甚内橋の由來

今日は無くなつたが江戶を跨いで、數年前までも、淺草の鳥越明神の前通りに架けた甚内橋は、慶長の大賊の名を留めて居た、幕府は彼を捕へやうとしたが、大力でもあり、劍道に達しても居るので、容易に手が下せない、偶々甚内が瘧を煩つて居るのを偵知して、急遽捕吏を差向けて召捕つた、甚内の居所を赤坂と書いたものもあるが、洞房語園には吉原町の總名主庄司

甚内が甚右衛門と改名したのは、慶長十一年の頃、横山町の公坂甚内と訴訟した時に、相手方と同名なので改名したとある、さうなら横山町に居たこともあるのだ。

甚内が刑場近く牽かれて來て此の橋を渡る時に、瘧を煩つて居たので、斯くも捕はれの身となつて、今日の拙ない最後を遂げる、我無き後に此の病に悩む者、我を祈らば忽に癒ゆべしと誓つたとやら、事蹟合考に従へば、徳川氏入國以前には本町四丁目に梟首場があつたといふ、其の後は本材木町五丁目と淺草元鳥越橋の際、甚内橋の東の河岸通り半町許りの處にあつた。鳥越の刑場は今戸橋の脇に移り、更に千住の小塚原へ轉じ、本材木町のは鈴が森へ變つた、甚内は此の鳥越の刑場で磔に掛つたといふ、文化度に書いた十方庵遊歴雑記に、

甚内の社は猿屋町の西側片町阿部伊織に隣りて、川端角小出兵庫（二千百石、兩御番）屋敷にあり、則ち表門の番人へ甚内の宮へ參詣する由を斷て門を入、右へ川に添て西の方へ一町半許、突あたりの隅にあり、此方に稲荷の宮あり、此處川より水を堰入れて池あり、此池の彼方の隅に本社を九尺二間の庫作にして、拜殿を是へ作りそえて、九尺二間半に建て、小社といへども美麗なり、神燈手水鉢をはじめ、神前の具は滿願の町家より心ごころに寄進せりと見ゆ、拜殿の机上には願書おびたゞしく、病者の男女の別と年と、いつ比よりの煩ひと書出し、此病氣平癒なさしめ給へと訴状の如くに認め、上書に幸坂様と書しあり、甚内様と認めしあり、己がさまざま男女の自筆にて、願書山の如し、又神燈と覺しき厨子の前には幣帛をたて、左右には矢を背負し兩大臣をすへ、もろもろの供物又おびたゞしく、額には永護靈神といへる四字の竪額をかけたり、いか様にも刑罪に死せし者、神の謚號も憚りあれば、永護靈神と祭りしは道理かや、されど甚内は仕合ものぞかし、目川度神さりし、諸侯大夫の墳墓さへ、願者なきに、ましてや悪黨の刑に死しながら小祠に祭られ、人の尊敬を請て靈神といはるゝ事、死後の面目といはんか、瘧病一道に願をかくるに、果して平癒し、又瘧にあらずとも一切の煩ひを瘧病ぞと願書にしたゝめ念ずるに、必しも治するとかや、願滿て後、鳥越橋より魚の干物と酒を河中へ投じ、禮參りする事とぞ、縁日は毎月十二日、例祭は八月十二日なり、是は幸坂甚内が刑に死せし命日とぞ、此日屋敷の中は萬度練ものゝ躍、今様の囃子狂言などありて祭禮と號し、夜はいよ〳〵賑はしく、近隣の人には見物を許せり、

とある、石川五右衛門に小祠もなければお祭もないのに、それに以て居ると云はれた甚内は賑にお祭りさへされた、大正十

二年に鳥越川が擴張されて暗渠になつた時、甚内橋は撤去されて、今は只だ石標が其の位置を敎へて居るだけであるが、其の小祠は稀有な大地震大火事の後にも、新しく建造されて昭和の今日に存在して居る、算えて見れば彼が刑死した慶長十八年からは、三百五年になる。

富澤町の古着市

當時に彼を併せて三甚内と云はれた、他の二人は吉原町を開いた庄司甚内と、富澤町の古着市を起した鳶澤甚内とであるが、庄司も鳶澤も共に小田原北條の家來だといふから、武士なのだ、富澤町は甚内の苗字に依つて、鳶澤町だつたのを後に今のやう書き替えたといふ、それには大道寺友山の落穗集が何時も引き出されて居る。

問云、御入國（天正十八年八月、家康江戸入城）の砌は町方へ盗賊共あまた入込、殊の外難儀仕候處に、御仕置を以て、件の盗賊共退散いたし候と有は、其通の儀に候や、

答云、其儀を我等若年の頃承及候は、其許御申の通、盗賊共諸方より入集り、以の外物騷に有之由、權現樣（家康のこと）の御聽に達し、何とも致し、盗人の張本たる者一人召捕へさせ候樣にと、奉行中へ被仰渡候處、其頃關東に名を得たる盗賊の大將鳶澤と申者を搦取、牢舍申付置候處、一旦申上候得ば、其盗人を召出し、御仕置に可被仰付候得共、一命をば御助けなされ候間、其方働を以て他邦の盗賊共の御當地へ入込不申樣に可仕旨申付候樣にと被仰出候に付、奉行中より其趣を被申渡候得ば、鳶澤承り、命を御助け被遊候段は難有奉存候得共、他方より入込候數多の盗賊共を、私一人の力を以て防ぎ候と有儀は、不罷成儀に候得ば、何方に於て成とも屋敷地を被下置候はゞ、私手下の者共を呼集差置、其者共へ申付、爲致吟味候樣仕度候、併私手下の者共も盗相止候へば、渡世の仕方無御座候間、御當地にて武家屋敷町家に不限、外の者共の古手を買候義御停止に被仰付、私義を古手買の元締役に被仰付被下候樣にと申に付、願之通とて遊女町の近所に於て一ケ所、四方の茨原を屋敷に被下候に付、夫より切りひらき、鳶澤町と名付、町屋に取立、手下の盗人共を古着買にいたし方々へ出し、其者共へ申付、吟味を致し候に付、程なく盗人共の御當地へ入込事はならぬやうに致すと也、去るによつて我等若年の頃（落穗集の著者大道寺友山は寛永十六年の出生で、本書は八十六歳の享保九年に起稿し、同十二年に書き畢つた）迄の古着買と申は、定りて二人つれ立、布にて作りたる長き袋をかたげ、一人の者は古着と呼べば、一人は

買うと申て、町屋の軒下を左右へ別れてあるき申す如く有之、其かたげたる袋の口をば二つ割、其はづれを麻繩にてまきたて、其下に蔦澤が印形有之と也、若盗人にて無之ても、古着買をいたし度思へば、蔦澤が手下を願ひ、件の袋を請取申す如く有之となり、次第に御代しづかなる故、盗賊の沙汰も無之に付、古着買之義も相止、蔦澤町の義も今程（享保度）は富澤町と文字をかへ、葭原町の義も何れの頃よりか吉原町と文字相改申候やと也、

我等は此の富澤町由來を讀む度毎に『若盗人にて無之ても、古着買をいたしたく思へば』といふ處になると屹度失笑する、如何にも古着買は泥坊の商賣なるを必然とするかのやうに書いてあるのが堪えられない、だが江戸の古い處では、泥坊上りの商賣は古着買と極つて居たらしい、さう思ひ込ませたゞけ蔦澤甚内の力量の凄しいのが知れる、今日、職業を問はれて、僧侶と答へて不審のないのは誰の仕附けなのか、百年前には到底聞けない返答でもあり、圓頂黑衣の人に職業を問ふものもなからう、其處が時世だ、時世は面白い、泥坊の大將を古着屋の大將に、後とも云はず轉化させた手際は、東照大權現と神樣に扱はれる筈だとも感服仕る、だが賊の馬を驅つて賊を追ふ、泥坊に泥坊を防がせる、功罪の差引勘定に依つて蔦澤甚内は、青天白日の下に太平を謳歌する良民にはなつたが、此の後も同じ往き方で目明し又た岡引が輩出して、幕府も惱み、八百八町も苦しんだ。

蔦澤の部下の古着買は偵察に依つて、新しい都合へ來襲する群盜を防歇し、向崎（文字は色々に書いたのがあるが、今は暫く慶長見聞集に從ふ）は一黨を率ゐて、匪徒を剿捕したのである

風摩が一類

蔦澤町由來に自分の部下に盗みを止めさせれば渡世の仕方がないから、古着の專賣をさせろと要求したとある、交換條件を極めて泥坊を廢業し、探偵をまで引受けた、して見ると從來泥坊をしたものも生きんが爲に他ならぬ、生きられさへすれば古着屋さんで濟して居るのなら、餘り困つたものでもあるまい、蔦澤にしても命あつての物だねだ、生きて居られさへすればといふ程、無造作な男でもなからうが、是から先きに戰爭のなくなるのや、亂國の段々靜つて往く形勢を眺め、且つは現在自身を捕へられて居る、此の上は野武士杯の手も足も出せないのを看破して、折れて挫けて古着屋さんに落着したのであらう、庄司は吉原町の總名主、君がてゝと呼ばれて、遊女屋の亭主に納まつた外、故主の仇と家康を狙撃した佐竹浪人車丹波さへ、非人頭

喜七の御先祖様になつて了つた、それより前に關八州盗人狩は行はれて居る、慶長見聞集は、

　見しは昔、關東に盗人多く有て諸國に横行し、人の財産をうばひとり、民をなやまし、旅人のいしやうをはぎとる、かれを在々所々にてとらへ、首をきり、はたもの火あぶりになし給へどつきず、然處に下總の國向崎といふ在所のかたはらに甚内といふ大盗人ありしが、訴人に出て申けるは、關東に頭をする大盗人、千人も二千人も候べし、是皆いにしへ名を得しいたづら者、風摩が一類らつばの子孫共也、此者共の有所殘りなく存知たり、案内申べし、盗人がりし給ふべしと云、江戸御奉行衆聞召、願ふに幸哉と仰有て、誅伐追討のため人數をもよほし、向崎甚内を先立、關東國中の盗人を狩給ふ、爰の村、かしこの里、野の末、山のおくに隠れ居りたりしを、せこを入て狩出し、あそこへ追つめ、かしこにせめよせ、ころし給ふ事、たとへばいにしへ賴朝公、富士のまきがりし、數のかせぎをころし給へるがごとし、

とある、此の盗人狩に依つて關東八州の大掃除が濟み、其の後に現れた巨盗が向崎甚内であつて、しかも江戸城の新主の手先になつて働きながら泥坊をして居た、我等は盗人狩の委細を傳へたものを知らないと共に、向崎の犯状を書いたものも未だ見掛けない、彼に似てると云はれた石川五右衛門には、古老茶話が、

　文禄四年、石川五右衛門其子并同類ともに十一人刑罪、五右衛門は父子釜煎なり、彼もの太閤薨中に、伏見等の群盗をうかゞひ紛入て、鉛刀に諸士の良刀をとりかへる、淺野左京太夫幸長是を考へて、玄關にて其刀を從者に渡しをきて、短刀ばかりにして參上す、是其時の便利として長く士風と成る、

と傳へた、五右衛門は度々桃山を犯したらしい、大名等は屢々摺り替えられたと見える、だが向崎は江戸城を稼いだとは見えぬ、家康の膝下は秀吉の殿中よりも物騒でなかつた、文祿と慶長、此の間は二十年に足らない、六十餘州を一握にした豐臣氏、僅に關東八州を領する德川氏、將た兩者の人物性行の差から來たとのみも云へまい、それも時世であらうじやないか、其の時世、天明の稲葉小僧、天保の鼠小僧は大名荒しを專門にした泥坊であつた、其の上に元文には蓮池の金藏へ泥坊が這入り、大坂の金藏でも泥坊沙汰があり、安政には芝居にもする四千兩小判梅葉の一件がある、斯ういふ處に泥坊研究の興味も出て來るのだ。

　大掃蕩以前の賊は慶長見聞集にいふ『風摩が一類、らつばの子孫』とは何か、北條五代記にらつばの概説がある。

見しは昔、關東諸國みだれ弓箭を取てやむ事なし、然は其比らつぱと云くせ者おほく有し、是らの者、盜人にて又盜人にもあらざる心かしこく、けなげにも横道なる者共なり、或文に亂波と記せり、但正字おぼつかなし、俗にはらつぱといふ、され共此者を國大名衆扶持し給ひぬ、是はいかなる子細ぞといへば、此亂波、我國にある盜人をよく穿鑿し、尋出して首を切、をのれは他國へ忍び入、山賊海賊夜討强盜して、物取事が上手なり、才智ありて謀計調略をめぐらす事、凡慮に及ばず、古語に僞ても賢をまなばんを賢とすといへり、智者と盜人の相おなじ事なり、舍利弗も智惠をもつてぬすみをよくせられけると古き文に見えたり、亂波と號す、道の品こそかはれ、武士の智謀計策をめぐらし、他國を切て取も又おなじ、扨又戚淵と云者盜人也、陸機と云者、舟に乘、長安に參る時、淵はかりごとをめぐらし、陸機が舟のうちを盜みとらんとす、陸がいはく汝が器用才覺にては、高位にもすゝむべき人なり、何とて盜みするやと云時、淵つるぎをなげすて盜の心をあらためける、帝聞めし志をひるがへす事切也とほうび有て、めしあげて將軍になし給ひぬ、是をおもふに誠に關東のらつぱが智惠にては、神佛とならんも安かるべし、大人にもならず、財寶をもたくはへず、盜人業をえたるこそをろかなれ、

昔から賣藥の功能は上手に述べてある、それだから藥は能書きほどは利かぬと云はれたが、亂波の能書きは今日の廣告文にも比類がない程に書いてある、關東のらつぱの智惠では神佛にもなれるなどは痛み入つた話だ、其の中に盜人であつて盜人でないといふ處は眼を開けて見て置きたい。

北條氏直は亂波二百人を扶持して居た、風摩は其の中の大將で、北條五代記は其の風采を傳へて居る。

風摩は二百人の中に有て、かくれなき男、長七尺二寸、手足筋骨あら〳〵しく、爰かしこにむらこぶ有て、眼はさかさまにさけ、黑髭にて口脇兩へ廣くさけ、きば四ツ外へ出たり、かしらは福祿壽に似て鼻たかし、聲を高く出せば五十町聞え、ひきくいだせばからびたる聲にて幽なり、

尋常な狀貌でない、一見して怪しげな人物なのが知れる、本來は風間といふ苗字なのを風摩と書いて、フウマと呼んだらしい、鎌倉公方九代記に、永享元年七月、管領上杉淸方が結城を攻める時に、岩松三河守が調略を以て、城將結城七郞氏朝の弟山内兵部大輔氏義を誘ふために、

某年頃、氏義に別心なく睦び候ひしが、今以て其交の情をば、忘るまじきにて候、忍びのもの一人を給はりて、謀り見

んと申されたり、管領大に喜び給ひて、其頃世に隠れなき忍びの上手、相模國足下郡に住み慣れし風間小太郎といふものをぞ遣されける、岩松陣屋に陥りて文書を認め、風間に心を入れて、城中にぞ遣しける、三日過ぎて後、氏義が返狀を取りて歸り參りぬ、

といふやうに、單身で敵中を自由に横行する者を遣つた、相模の風間の一族は斯る場合に著しい能力ある者として知られて居た、北條氏直が蓄へた二百人の亂波も、常に特別任務について、幾多の奇功を奏して居るであらうが、天正九年の秋、武田勝頼父子が浮島が原へ押出して、小田原勢と對陣した時、

此風摩が同類の中、四頭あり、山海の兩賊、强竊の二盗是なり、山海兩賊は山川に達し、强盗はかたき所を押破て入、竊盗はほゝる盗人と名付、忍び上手、此四盗ら夜討をもて第一とす、此二百人の徒黨、四手に分て、雨の降夜も風の吹よも吹ぬ夜も、黄瀬川の大河を物ともせず打渡て、勝頼の陣場へ夜々に忍び入て、人を生捕、つなぎ馬の綱を切、はたせにて乘、かたはらへ夜討して分捕亂捕し、あまつさへ爰かしこへ火をかけ、四方八方へ味方へまなんで紛れ入て、鬨音をあぐれば、惣陣さはぎふためきはしり出るといへ共、前後にまよひ、味方のむかふを敵ぞとおもひ、討つうたれつ、火をちらし敵をみだして、半死半生にたゝかひ、夜明て首を實檢すれば朋同士軍して、或は親か主をうち、子が親の首を取、あまりの面目なさに髻をきり、さまをかへ、高野の嶺にのぼる人こそおほかりけれ（北條五代記）

甲州勢は此の手に惱められて、一戰にも及ばずにて引揚げて了つた。亂波の奇功は敵に紛れて働き、人に隠れて動くにあるのだから、忍びの上手なほそる盗人を擅場とする。

ラッパ、スッパ

忍の上手な者、忍びの者といへば、意義明白であるのに、當時はラッパといひ、亂波と書いた、又たスッパとも云つた、ラッパ、スッパ（片島深淵子は出拔といふ文字を充てゝ居る）は何といふ意味の言葉なのだか知れぬ、此の忍びといふことから忍術と稱して何か不思議なことがあるやうにも云はれ、或は其の流義を傳へたともいふ、芝居でする石川五右衛門はスッパの大將なのだから當然忍術の撰手らしく脚色されて居る、仁木彈正も仙臺侯の家來の忍術家某をモデルにしたものだと聞いた、それよりも幕府には伊賀者といふのがあつて、忍術を以て德川氏に仕へた家筋だと云はれた、又た甲賀衆といふのも同様な傳へがある、是は微禄ではあつても幕府の直參で、御家人といつ

たものだ、風摩が輩、亂波が名は天正十八年迄で、其の後は關東に絶えたと、慶長見聞集に書いてある、天正十八年は其の年の八月一日に、家康が關八州の領主として江戸城に這入つた年で、其の前月に小田原の北條氏が滅亡した、同じものでも關東ではラッパといひ、關西ではスッパといつたらしい、それはスッパでもラッパでも宜しいとして、徳川氏のスッパは伊賀者甲賀衆といつて家來になつて居る、けれども最初から家の子郎黨として扱はれたらしくない、マア雇兵のやうのものだ、北條氏のラッパ二百人も扶持を與えてはあつても、家來並ではなく、旗下の士卒でもない、從つて小田原が滅亡して出入先きを失ひ、扶持が貰へないやうになつた處で、ラッパが消滅する筈もない、却つて彼等は得意場を失つた償ひに、大に其の本領を發揮しなければならぬ、江戸を荒した最初の泥坊は北條氏の養つて置いた亂波である、ほそる盗人でもあつたらうし、放火して其の紛れに掠奪を行ふ、彼等は慣手段の夜襲にも出たであらう、江戸時代に八丁堀の與力同心の外に、將軍の御先手の弓組鐵炮組から加役として、火附盜賊改が任命されて、特別な職務のやうになつて居たのは、後々迄も江戸に火附け泥坊が絶えなかつたばかりでなく、亂波の兇暴を取締ることから系統したらしく思はれる。

新しい領主が野武士に悩められることは、決して江戸だけでなく、秋田に移された佐竹義宣の如き領土安定に大骨を折り、水戸に封ぜられた武田信吉（家康の第五子）などは、土寇の爲めに殺されたといふ說さへある、ラッパ若しくはスッパは孰れも野武士なので、其の雇つて與れる人に附いて廻るよりも、土地に着いて居て雇ひに來るのを待つ者なのだ、當時の戰爭にはラッパやスッパは是非入用なものであつたから、大將といふ大將は皆彼等の華主であつた、此の頃見た軍書の中でスッパといふ言葉の一番多くあるのは甲陽軍鑑だ、先づ其の一例を擧げれば、

信濃の國よりかゝへ置き給ふすつぱ七十人の內より三十人、足手すくやかなる者えらび出し、妻子を人質にとり、甘利備前に十人、飯富兵部に十人、板垣信形に十人、右三十の人質を三處に預け、扨其すつぱを村上方へ十人、頼茂方へ十人、小笠原方へ十人指越し樣子を見候て、二人づつ罷歸り、此方より出むかひ候侍に申渡し、すつぱ共は又敵地へ罷越候へと晴信公すつぱ共に直に仰付られ指越給ふ、

是は天文十一年三月、諏訪頼茂、木曾義高、小笠原長時、村上義淸が信濃勢を聯合して來襲しようとした時、スッパに依つて敵狀を偵知し、邀撃した瀨澤合戰の記事である、又た『家康は味方が原合戰にまけて、其夜又夜合戰に出べき支度を専仕たるに、家老の酒井左衛門尉、石川伯耆兩人、すつばをいだしみ

せければ……』とあるので、徳川氏もスッパを蓄へて居たのが知れる、淺井物語にも淺井助政が永正十三年九月今濱城を乘取る處にスッパを遣つた、松隣夜話には天正四年越後方の河田豐前守が、信長方の長筑前守の動靜を探じて、『某すつぱを商人に仕立、當二月より加賀へ越し承候處に』と冒頭し、上杉謙信も『甘粕近江守に汝がすつぱを越前筋五里を限りにして入置候へ』と命令して居る、斯うした事例は澤山あり過ぎるから、此の上御退屈を掛けるのに忍びない、しかし無くては濟まぬ太閤記、すつぱの中から蜂須賀小六が出た、信長が美濃を討平する前に、敵地へ要害の一城を築かうとした、さうして其處へ籠める軍勢の評議があつた時に、秀吉は『當國は夜討强盜を營みとせし其中に能兵共多く候』と云つて、稻田大炊助、青山新七、同小助、蜂須賀小六、同又十郎、河口久助、長江半丞、加治田隼人兄弟、日比野六太夫、松原内匠助等を推擧したとある、永祿九年九月二十四日、岐阜城から輕々と敵兵が出て來て、新要害に對して戰ひを挑んだ、此の手の大將秀吉は敵の誘ひと知つて相手にたらぬ、岐阜勢は手持無沙汰で引揚げた、挑戰されても敵の計策と知つては、それに乘る譯には往かない、殘念ながら見送つて居るより外に仕方はなかつた、さあ其の跡で返報が計劃され、夜討强盜すつぱの本職を存分に見せた。

夜すつぱの功者共に談しけるは、今日の返報に今夜一てきは夜討をし、敵の機をおらでは不叶所也と云ければ、稻田大炊助、蜂須賀小六、加治田隼人正、尤なりと同じ、簇て略を遣し置ける、敵方の在所へ案内者を語ばやとて、かくと云やりければ斷を事とし利に耽る者共なれば、即使者と打つれ來りぬ、大炊助彼者共に向て、今夜何の里へなり共夜討し、分取高名せんと思ふは如何べきと問しかば、按内の者承り、井の口勢（齋藤龍興の居城、後の岐阜）、今日の働に困て見へし也、誠に能折節で社候へ、要害へ近き里々は終夜の用心甚以て嚴しく候、新山の北なる在々は用心を呼聲もなく、ゆるやかに有ける條、加樣の所能候はんやと也、大炊助いやいや先近きあたりへ打候べし、其子細は一度も二度も夜討入なば、後は用心きびしく致し候はんか、左樣の時遠き在々の思ひもよらぬ所へ討てこそ大利も有べけれ、又おくたのもしき事もあれ、近き在所たとひ用心す共、何程の事かあるべき、初はしのび入れやすかるべきと云ければ、秀吉も稻田が申所可』然と同心しにけり、『乍』去付入にあはさるやうに相圖を能卜て立出候へと、藤吉殿被申渡候處に、稻田申しけるは、敵若付入の行有共、例の掟に任せ、敵を二三人も立入候程に、門を御さし被』成よ、殿をば大炊助致候はんとてぞ打出

ける、秀吉も信長公右様の義を堅く制し給ひしに依て斯は云なり、少危き事をし侍らねば、大なるはかは行ぬ物也、我一人の命を嗇んで軍士を立出す事は有まじき程に、丈夫に思ひ夜討をつよくしてくれ候へと被申しかば、心剛に手ごわき者三十人、其道に心得たる下々五六人撰み出し、進退の大將は蜂須賀小六、賀治田集人佐、請手の勢百騎計、其勢五六百人、此内弓鐵炮半せり、此大將は大炊助也、肴車ひし手柄等、其役人を相定め、案内者三人の內、人質の爲にとやおぼしけん、一人は止り候へ、若敵つよくしたふ事あらば、其方を案内者にして助候はんと、藤吉殿被申しかば、何心もなう止りにけり、夜半の比、北に當て在家一二三間燒出たり、鐵炮の音もせず、又人聲もせざりければ、稲田申やう、今夜の仕合宜しく有べきと云し處に、事外物音さはがしく成出しかば、大炊助、青山小助、松明を以迎に五六町も出ければ、夜討の者共いきほひ猛にして首十三幷分捕餘多し來りたり、秀吉おどり上り悦つゝ、各苦勞の至、謝するに所なし、寔に死を輕じ、敵を擒にすべき士共なりと感弊尤夥し、

夜討とはいふが敵軍を襲撃するのではない、民家を犯して大掠奪を行つたのである、只だ敵地であるだけに盗賊といふ名を脱れた、けれども所在の民家は敵對行爲をしない、元來非戰闘員であるのに斯くの如き殘暴を受けても、其の罪を正すことが出來ない、是が即ち亂世亂國たる譯であらう、吉田一保の軍書一覽の凡例に、

戰國書部トハ日本諸國ノ將士、各々亂暴スル時代ノ書ノミヲアツムルナリ、

と書いてある、其の邊の事は昔の人も疾くに承知して居た。

更に稲田が夜討の場所の遠近を考へた言葉や、分取高名を高唱するのや、今夜は仕合宜しと云ふのを何と聞かう、それは紛れもない大泥坊の口氣である、スッパの巧者稲田蜂須賀は利に耽ける幾多のスッパを招來して其の働きを大きくする、戰國の大將は信長秀吉のみならず、正面からの戰爭の外にスッパを作用して、敵を脅し且つ資糧を奪ひ、其のお蔭を蒙つてスッパも商賣になる、上杉謙信にも北條氏直にも御用のスッパがあつて、戰國の世には軍用の泥坊を扶持することが一般情況であつた、それだから三浦淨心は北條五代記に、

御成敗式目に山賊海賊等の事を記せり、これらは人を殺す者たりと計有て、罪科の輕重たしかに注さず、又强竊二盗の沙汰あり、强盗は日中の盗人、威力をもて人の財寶をうばい取、せつたうは夜の盗人たり、是は威力なくひそかに人の物を盗故、名付てほそる共忍びともいふと記せり、竊盗の二字

を忍びとよみ、ひそかにぬすむともよみたり、さす所はおなじ名なれども、盗人といへば悪逆無道に聞え、ほそる忍びといへばやさしかりき、又花鳥風月によそへてぬすみのことばを詠ぜり、風、花の香をさそふは風賊也、露、月影をうつすは露賊なり、鳥は霞にかくれて立は鳥賊、いづれも和歌に詠ぜり、

斯う解釋して居る、時代の人の心持は格別なものではあるが、戰爭だけを考へて民衆の安危を忘れたら、ホソリ忍びは盗人でなく、悪逆無道でないのみか、風雅なものにも数寄なものにも思へるのであらう、此の無理無法な風雅が戰時を跨いで平時に持越し、江戸の始めにラッパの跳梁となり、徳川一世の泰平する所となり、其の剰り物が向崎甚内とあつたのだが、江戸の終りにも太閤記で見る美濃荒し、稻田蜂須賀其の儘の演技に八百八町を惱め、是は風雅として和歌の資材になるとは云はれなかつたが、勤王の名士として推奨された、其の人々は伊牟田尚平、益滿休之助、將た權田直亮等のスッパであつて、其の總大將は西郷吉之助といふ男だ、幕末維新の際に著名な薩州の御用盗、それだけではなく其の前にも江戸を惱めた樣な泥坊が居た、スッパ系統の泥坊は足利氏の末から戰國時代へかけての特産で、それが江戸へ持越しになつて、明治元年を最後とする、元來が戰場で發生したものだから、戰爭を離れては意味が抜けて、只だの泥坊になつて了ふ、しかしながら江戸の泥坊の先祖はスッパであつたゞけに、後來までも平時に湧出したのとは違ふやうに思はれる、血筋といふものは爭はれないのだと感心して了はずに、考へ直して見ると、佛教では十戒を五戒に攝める時に、例の偸盗戒を殺生戒に納める、是は生存に必要な資材を取除けるのは死に導く譯だからだと承つた、さう云へば殺すのと奪ふのとは階段一級の差だ、ほそりの窃盗でも刃物持たない人殺しである、まして兇器を持つた強盗なら戰爭狀態なのだ、馬鹿なことを考へた泥坊は何としても平和なものじやない、スッパの氣味が薄らいで往くのは、後來の泥坊の環境が違ふからで、自身から云へば平和になれやう筈のないものなのだ、スッパは扶持を與へる大將がなくなり、戰場といふ働き場を失つて、其の形骸を保てなくなつたが、其の心持は一般の泥坊へ繼續して居るのだらう。

辨慶の掠奪振

だが戰國といふ強い者勝ちの世の中が泥坊根性を産み出す理由もある、それは理窟だ、理窟よりも事實、別に探さずとも我等は爰で思ひ出す例證に困らぬ、スッパ以外にも當時の軍隊は

将卒共に泥坊の常習を持つて居た、スツパとは其の含量の多少を以て鑑別するに過ぎまい。

塵塚物語は天文廿一年に書いたもので、其の中に軍陣に於ける博奕の變遷を説いた處に斯う云つてある、

建武以後軍戰うちつゞき武士立身の最中なれど、此砌武藝の達人、天下にとぼしきいはれは、いかにと了簡するに、博奕ゆへとこそきこえ侍る、群卒帷幕の中のなぐさみは、大將より下つかた與力足輕の者共にいたるまで、彼博奕をこのみて、あるひは一たてに五貫十貫沙金五兩十兩をたてつゞけ侍る間、山をあざむくほどの金銀も何時のほどに負侍る者、後は博用のたからも懸て、あるひは武具馬具の品こと〲くとられて、おもはぬ辛勞しけるもありといひつたふ、畠山某が手のもの、ある戰場へむかひけるに、甲ばかり着て直肌の武者もあり、よろひ着ながら太刀甲拂底したるもあり、中下の士卒の出立は大かた不具にことやうなり、されどその時の高名おほくは彼不具の者にありといへり、是博奕にうち入て困窮至極の仕合なれば、此度一定必死とこゝろへ、此所をすゝがんとの一心によりてなるべし、中昔德政といふ、その起り、おほくは彼たはふれが本元なりといひ侍る、應仁文明の比の博奕には人もさかしくなりけるにや、武具馬具に不具はなし、はじめのほどは金銀をたてつれど、次第に一錢の所持もなくなり侍れば、京の町人のそれがしが土藏を、いま博奕のたて物にする人も有、寺僧神立の藏などを立たる物もありけると也、勝たる時は藏代いかほどとつもりて金銀をうけとり、又負たる時は、いつ〲の夜、彼藏〲のたからをうばひて遣すべしとさだめあひたるほどに、後は其座に錢といふものは一錢もなくて、唯ことの葉のみにて勝負をしけるといひつたへたり……

奪掠を豫定した博奕が行はれた、他人の犢鼻褌で相撲取るのだから、負けても身についた武具馬具を取られる心配もなく、戰場に事を欠く憂ひもない、氣樂に賽の目を興じて居られたらう。

博奕に負けて取られ盡した者が、クソヤケで強くなる、勝つた上に敵のものを分取らうといふ段別、それは例證までもない、戰記軍書に京都を守る方に負けが多く、攻める方が大概勝つ、是は奪掠といふ懸賞が附いて居た爲めだとも思はれる、御伽草紙の辨慶物語は江戸以前の掠奪氣分、率直にいへば泥坊根性が溢れて居る、室町時代の泥坊文學は如何にも江戸の白浪物とは異曲同工ではないが、只だ別段なものであつた文久度から明治元年までの浪人强盜とは趣向が善く似ても居る。

辨慶が三條の小鍛冶宗近、五條の吉内左衞門、七條堀河の四郎左衞門吉次に拵えさせた太刀物の具の代金を拂ふはうといふ處で、

さらば德人の許へゆき、たからを乞ひ、此三人の物共に作料を取らせばやとて、其頃渡邊玄蕃允とて、京田舍にならびなき分限の物と聞えければ、彼が許へ往かんとて、

とあつて、渡邊の城寨のやうな家居のさまや數十人の若黨が嚴重に警戒して居る景況を述べ。

されども辨慶、人を人とも思はねば、番衆警固の者にも目を掛けず、門の內へ案內にも及ばず、入るまゝに、庭の白洲をしづ〳〵と歩み、廣椽に近けば、亭主の行春、柴に朽葉の重ね、精好の大口に黃金作りの刀、前さがりにさしなし、腹卷に兜相添へ、小長刀を立置、色々の肴、大づつ大瓶子立て並べ、只今のみたるとおぼしくて、銚子盃取散し、家の子郎黨數十人、碁將棋双六などをさせ、誠に興ある所へ、辨慶大の聲にて、是は遠國より熊野參詣の修行者也、粮米に給び候へと云、行春之を聞き、大に腹を立て、こは如何に修行者道心あれなかれ、ころもを着、袈裟を掛けて、誠に饑へるを悲しむこそあれ、兵具を着し、鞍一つと乞ふこそ不思議なれ、いかさま夜討强盜の類と覺ゆるぞ、若黨共あれ召捕れといふ、辨慶聞て、得させん物をここ見れさらめ、盜賊の引かけこそは憎くけれ、いで〳〵、さらば物見せんといふまゝに、椽へ踊りあがる、是を見て行春は逃げんとする所を、つゝと寄りて、行春が上腰をみじと取り、何時の間にか拔きたりけん、四尺六寸の太刀にて、首を撫づるやうにして、罪造りに殺しはせじ、只今吐きたる口のためしをならはさんとて、太刀の切先より鍔本まで引宛て〳〵しけるほどに、行春は生き心地はなかりけり、數十人の若黨共差寄り、太刀刀を拔き驅けどもかひなし、其時辨慶中やう、矢の一筋も射んとせば、細首捻切りて、御邊共の腰の刀一々に踏折て捨てんずるぞて、大の眼に角を立て、延び上りたりければ、其たけ七八尺もあるかと見ゆる大の法師なり、如何なる鬼神天魔といふとも是に過ぎしとぞ覺えける、

貰ひに往くといつて此の有樣、藪から棒に物貰ひに往く、相手にされないのは知れたことだが、是は元來掠奪なのを文辭を圓滑にしたのだ、言葉だけを巧みにしても事柄が承知しない、敍述する間に隱すよりも顯はれる方が早い、此等の話は勿論史實に據つたものでなく、其の構想は全く時世の反映なのだ、御伽草紙は讀み物であつて當時の御愛嬌なのであるが、掠奪物語を斯くも軟に綴り、豐に滑稽をまで加へて書いた、斯うして無

法た物騒な泥坊話を娯樂的に扱ふといふことが、直に其の時世の人が剽掠强奪を何と思つて居たかの說明にならう。

さるほどに行春が女房走寄り、田舍德人の習ひ、人を見知り申さぬなり、今の亭主が悪口をば、平に童に免し給へと、手を合せて拜みければ、辨慶もとより斯うこそ有べしと免しけり、玄蕃允やう〳〵逃げ、戸口に顚ひ、夢心地して打うつむき居たりけるに、女房立寄りて手負ひ給ひたるかと問へば、此女房を迎へて、未だ三日なるに、不覺の色を見せぬるよと、恥しさに爰へ來りて候へばとて、逃げたるとは思ひ給ふな、敵と引組みて勝負を決せんと存つれども、今一度御目に掛るべしと思ひ、今迄ながらへ候なり、御坊の太刀の切先が後に當りつるか、切れたか、切れざるかと云はんとするが、餘り慌てゝ顚ひ〳〵云やう、御坊の太刀の切先が後に當りつるか、脊中は後になりたるか、よく見給へといふ、女房怺へかねて笑ひける、

爰で悠長に感賞しても居られないが、此の忙しい場面に貰ひたての花嫁さんを持出して、臆病な亭主と應對させて滑稽を育てた手際は褒めずに置けない、又た辨慶の强盜振も無骨な底に御愛嬌があつて、掠奪を悪虐だと思はせないやうに仕向けた。

辨慶は帳臺迄ずんと行く、双六盤に腰を掛け、目を開き逍ひけるが、又はら〳〵と睨みて、草摺打つて銚子を取り、今樣をこそ唄ひけれ、一度は斯うと思へども、此世は程もなきものを、榮華は春の夢、何と資を惜むらんと、迦陵頻の聲をもつて唄ひすましたりければ、女房此よし打聞て、吾等前世の宿緣にて、今生有德の身となりたれども、敎化する善知識の御在しまさぬに、如何樣是は佛の方便にて、無常轉變の浮世を知らせ給ふと覺ゆるなり、資は何をか召さるべき、うけ給はつて參らせんと云、

行春の女房とのセリフは別にして、双六盤に腰を掛けた辨慶の樣子から、此の後の土藏を開かせて財物を點檢する處は、河竹默阿彌のお馴染狂言、あの日本駄右衛門の濱松屋といふ處だ、古いもので新しいものもある、其處が世間だと思ふ、此の辨慶物語と略々同時の三人懺悔册子に『京の人とうけ給り候へば、定めて聞召しても候はん、それがしが名を、三條のあう五郎と申ものにて候、九つのとしより盗みをしそめて、十三の年、人を切りそめて、その上らう迄は三百八十餘人也、夜打がんだうを身の能と思ひ候也、然るに宿生因果の積りけるか、其年の十月の頃より、盗みをすれどもかなはず、山たちをするも取り得ず、是ぞと思ふ事、俄に違ふ事のみにて、ひろふせしほどに朝夕の烟も立たず、妻子の有樣もすさましく候』などといふの

は、世帶持ちらしい、爰に續けて泥坊の奧さんが子供を摑んで大に生活苦を口說立てゝ居るが、室町時代の泥坊が營業化して居た模樣が明白に描出してある、江戶にあつては享保度からでないと世帶持ち氣分の營業化した泥坊は出て來ない、泥坊商賣と云へば武士でない、スツパや其の系統や將た一般の軍卒等の泥坊は町人でない、同じ盜賊でも武士の畠と町人の畑と產地が替る、勿論總べての型式も違ふ、時世は恐しいもので、泥坊さへ武士の畠を離れて了ふ、吉原通ひに好んで町人風をするだけではない、イヤ此處では未だ其の話には早い、差し當つた辨慶物語を片付けなければならぬ。

辨慶聞て喜び、女房は男にも勝りたる善人ぞと思ひ、あら恥しやと思ひながら、申かけたることなれば、寳を見申て、分領を申べしといへば、藏をあけさせ、數々の寳を見せけるに、金銀米錢は山の如く、弓矢太刀刀其外衣物綾羅、何に殘る事はあらじ、御好み次第に參らせ候はんといふ、辨慶もとより欲心はなし、多くの望みなし、織物の小袖三十人して持つ程給るべしと云ひければ、女房是を聞、あら事々しう仰せられけるが、さほど安き御望みかや、寳と仰せ候へば、藏の一つも召さるべしと存じ候に、急ぎ調へ、人足どもに申付くる、辨慶是を請取り、かゝる御心ざしこそ申盡し難たけれ、いかさま此小袖皆になり候はば、又申入べきとて、京の方へぞ上りける、此人足共を十人づつ、かの細工三人が方へ送りける、

欲も望みもないとはいふが、三十人で持つ程の小袖は尠い筈もなく、其の上なくなつたら又た貰ひに來るなどは念が入つて居る、此の調子が職業泥坊と違ふ、被害者は仕方なしに觀念の眼を閉ち、若しくは餘儀なくお布施にして了ふ、室町時代たると戰國の世の中たると、江戶の初めたると維新の前後たるとを別けず、無警察狀態に陷つた時は今も昔もあつたものでない、防がれず救はれない災難を因緣づくだと締(あき)めるより外に何とあらう。

亂妨狼藉といふ時代語

戰國の諸將が神社佛閣に與へた制札は、今も澤山殘つて居る、其の中に大概『濫妨狼藉堅停止之』といふ箇條がある、此の濫妨といふ言葉は時代語で、今日の人には通じない、何故なればアバレルといふ意味だけでないからだ、應仁記に『兵粮ヲ押取リ、神物ト云ハズ亂妨ス』とある、それを詳しく云つたのが細川勝元記で、

今川ノ合戰ニ濫妨人、折ヲ得テ猶熊ナル一色ノ五郎ガ宅ニ火ヲ懸、又吉川ノ神主ガ宅ニ物取共、火ヲ付ケレバ、同時ニ火

ノ手引リ、九夏三伏ノ炎天ニ折節南風烈ク吹テ、敵味方ノ軍勢ハ人亂テ物ヲ取、

とある、里見代々記には、

武家ノ亂妨取ニ合ザル様ニ所々ニ番手ヲ居ヘラレケル、

取の字を添へて亂妨取と書いたのもあるが、此等に依つて亂妨が讀んで字の如くでないのが知れやう、さうすると、總見記の『諸手の亂妨人』といふのも直ぐに合點されやう、

從兵等思ヒ〳〵、我モ〳〵ト八方ヘ逃散リ、亂妨狼藉、數ヲ不知、

も說明が不用になる、藤葉榮衰記の、

捨テ置タル武具器財雜具ヲ濫妨セント爭奪合フ、

器財雜具女童部悉ク濫妨シ…

妻子ヲ濫妨ニ取ラレ…

等も同じ例證にならう、一般に軍兵雜卒が機會次第に盜心を暴露したことは、此の亂妨といふ語例に注意する間に際限なく見當りもする、蘆田記に、

十二月二十三日（天正三年）、七ケ月城（遠州二股）持詰罷在候、後は兵粮無之、濱松近所近城中より足輕を出し、夜討强盜亂捕、夜々に御座候、

といふのは籠城して居る武田方の蘆田常陸介信蕃が、敵地である德川方の領土に向つて掠奪を敢行したのである、部將の號令の下に兵丁が夜討强盜する例は餘り多過ぎる、同様な例證を繰返すのも智慧がない。

さうでなく兵卒自身の勝手にする犯行、彼等には殆ど常習であつて、時を嫌はず機會次第に泥坊になつた、加澤平次右衛門覺書には天正十二年正月、沼田衆が白井勢を誘出する計略に、夜盜の相談を取掛けて成功した話がある。

沼田ノ庭野ニハ有德ノ者多シ、夜討ニ入テ金錢ヲ奪ヒ取ラントテ、百二三十人申合、林吉野井上ヲ案內トシテ庭野ヘコソ忍入ル

遂に敵の計略に陷つて出掛けた者は悉く討たれて了つた、斯うした計略が成功するのも、彼等が陣中から泥坊に出る常習があつた證據だと思ふ、勿論部將の指揮の外だ、箇々で申合つて泥坊團が隨時に出來するのである、太閤記には天正五年十月晦日、山中鹿之助が三保の關に夜襲を試み、隱岐判官の宿營を屠つた處に、

地下人共得たり賢しと濫妨し、頓に德人と成て樂あへりぬ、

とある、決して軍兵だけでなく、民衆も盜心を恣にする以上に、既に其の行爲についての思慮分別を失ひ、只だ餘分な資財を喜ぶほどに荒んで居た、此の際の泥坊は極麁末に別けても、

スツパ、亂兵、或る長衆と三段になる、此の分け方は與太を忠右衞門、入交ぜ、切轉と二別する程度なものだ。

スツパも所屬のある御用のスツパなら、同じでありさうなものだが、前に述べた小田原北條氏の扶持を受けた者と、總見記に云ふ、

盜人共の勇アル者ヲ皆々撰ミ近ケテ、扶持方給分ノ儀ハ敵地ヲ切取次第に領セシムベキ由約束シ次第ニ集メ置キケル、

とは違ふ筈だ、是では泥坊を許可されたのと同樣である、彼等を使用する大將の方では敵地を倒惑させるために、そして入川發賞等の散財のない德川な譯、資本の入らない計策だが、憶に敵を符し、敵を疲れさせるといふ目的はある、だが斯ういふ約束で働くスツパの方は何を目的にするか、考へて見るまでもあるまい、此の輩の成功者として瀧川左近將監一益が出た。

此瀧川、本國甲賀山家の地侍、一ケ年身の者なりしが、若輩より鐵炮を打習ひ、上手の聞えありし程に、信長へ召出され、一騎合の侍なりしが、近年度々の高名ありて、大將の號を許され、一方の固めとなる、去る天正三年、伊賀國の地侍共、多分信長に隨はざりしを發向して退治す、此伊賀國は應仁の頃ほひ仁木伊賀守が守護の國なりしかども、其後代々衰へ、伊賀國には住したいといへども所領は僅の體なり、皆地侍共押領す、彼地侍と申すは、昔より服部黨是なり、彼一族に竹の谷宮田森田原なんどいふ、義理をも禮義をも知らざる不道の凡下の者共、日頃は百姓の[illegible]にて、時々の田仕などして、己が國にのみ住し、他國へは終に出でず、唯皆が一門傍輩の族、近國の山々谷々に一山賊盜賊を事として、狩漁をのみ事としける間に、日本今戰國となりて、伊賀衆と號して、小田原を初め國々に、五十人三十人召置きて、餘り代兵に用ひける、さればにや信長にも一圓隨はず、境の合戰より人衆を度々向けられしかど、却て皆伊賀衆に打取られ、誠に信長の無念類なし、誰にても伊賀衆甲賀衆を退治せん者に、望領を給はるべしとの儀なり、瀧川承り、我等は近江國に取をも伊賀隣郷の住人、多年案内を存じて候、御勢を下されば候へ、馳向つて退治仕るべしと申上げ、五百餘騎にて時向ひ、三方より押込み、伊賀一州の服部黨侍は申すに及ばず、土民百姓までも名ある者をば、一人も殘らず斬切にいたし、三歳四歳の女子供も皆刺殺し、不日に伊賀國を退治し、此時服部黨は皆亡び失せにけり、却瀧川、此由斯くと申上げ、又甲賀に陣を取り、重ねて使を立て、甲賀衆を此時に退治仕り申すべき由言上す、信長聞きて、此瀧川は日本に双なき武勇の士なりといへども、情も知らぬ田舍人なり、甲賀は已に本國生地なり、たとひ信長申付くといへども、己が在所退治の事、詫言いたすべき事なるに、是非退治仕るべしの申條、不道なる申事なりとて、其後は餘り御賞なかりしと聞えし（與本小田原記）

彼の柄行は是で善く分かる、此の時伊賀衆は瀧川に殘暴されて大概討滅されたかと思ふと、本能寺の變を聞いて家康と共に堺見物をして居た穴山梅雪は、急いで本國へ引返さうとした途中で殺された、その時に伊賀越をした家康は何程危險であつたらう、斯ういふ時に郷民に襲まれるといふのは、落武者を追剝がうとするのだ、小栗栖で明智光秀が遣られたのも、落武者を覘ふ追剝なのである、多いか尠いかといふだけで、別に伊賀に限つた泥坊でもなからう。

勝手づくに便利が好いやうにと、迂濶な分類をして變に片付けやうものなら、却つて分類や區別が引搦まつて始末に困らう、スッパだけでさへ容易に分類が出來ない、まして後々に色色と毛色の違つた泥ツクが出て來る、飛んでもない義盗といふ唱へ呼をさへ聞くやうにも成行くのだものを。

大阪役のフンドシ泥坊

戰場では泥坊が激しい、作業が作業だけに思慮分別が無くなるためでもあらうが、それにしても江戸の名物だつた湯屋の板間稼ぎのやうなのさへあつた。

大坂五月七日の合戰最中に、下帶も無き素裸の死骸を舁ぎ來る故、安藤右京之進聲かけ、誰の死骸なるやと尋ねしかば、安藤治右衞門の死骸也と云、討死して間もなきに、かく下帶まで剝取りしかといはれしと也、戰場へは野武士等來りて、討死の者の甲冑を剝取る事、古今珍らしからず、然れども大坂城下の戰ひに討死するや、いな直に下帶まで剝取る事、意外の事也（明良洪範）

如何にもフンドシまでとは念の入つた泥坊だ、自分の生命さへ當てにならない戰場で、去りとは慾張つた奴もあるもの、殘忍とか刻薄とかいふことの分らなくなるのは、場合が場合だから是非もあるまい、從つて戰死者を裸體にするのを何とも思はないのは、感覺の鈍くなつた證據だとも考へられやう。

それ以上に氏郷記の天正十九年七月、九戸落城の條に、

九戸ガ女房モ急ギ逃出タリシガ、未ダ士ヲモフマヌ者ナレバ、爰彼コニ立徘徊ヒケルヲ見付、トラヘラレテ金銀ヲサグリ取レテ、遂ニハ首ヲ刎レバ骸ハ路徑ニ横タヘリ、

敵ではあつても女性のこと、それを斯くすることが珍しくもなかつた、また九州紹運記に天正十五年四月、立花統虎から島津義久へ掛合つて、釋放された高橋統增が薩州よりの歸途、

海邊を通られ候處に、足弱を見、落人と心得、いかほどもかかり居候兵船とも亂妨にせんとて、てんまを下し、小船は碇を取、礒へ取上、狼藉せんとする……

迎へに往つた立花の家來十時攝津守が、薩州の船手の大將に談判して漸く事なきを得た、しかし何でも構はず弱者と見れば取掛らうとする、それどころではなく、大内義統の府内落の時などは、

日來ハ大樹ノ妻室淑女ナド云ヘル者、人ニ心ヲ奥深ク、窓ニモ外面ニ出ヌ身ノ今ハ顯ハニ只獨リ歩跣ナル風情ニテ、其處トモ知ラズ出行ケバ、或ハ敵ノ手ニカヽリ、或ハ年來使ヒタル被官ニ衣裳ヲ剝取ラレ、歎キ悲ム有樣ハ譬テ云ン方モナシ（豐薩軍記）

敵味方の辨別がない位でなく、年頃日頃親しかつた主從の見境ひがないのだ。斯うした記事も尠くないのだが、忘れやうも紛れやうもないものを此處まで持つて來て了ふ、何の彼のと寛宥して見ても、軍兵の泥坊やスツパの盜賊は、人間の情理を以て考へられるものではない、然るに此の怪しからぬ氣質が江戶の初頭の泥坊には附着して居たのである。

里見北條兩家の海賊

江戶以前の陸上の賊況は大略ながらも知れたが、海上は如何あらう、海戰は四國が本場らしい、東國には軍艦兵船はなかつたらうか、江戶としては本材木町と坂本町とへ架け渡した海賊橋、明治になつて海運橋と改稱した、只だ泥だけのことなのか、それにしても海賊とは穩な名でない、聞けば其處には幕府の御船手奉行向井將監の屋敷があつたからの名といふ、御船手奉行を海賊御奉行と書いたものもある、或は向井氏は海賊改を職掌としたといふのは、海賊御奉行などと書いたものゝあるのを見て附會したのだ、向井氏は決して水上警察の長官ではない、全く船手の武長なつたが

北條五代記には、戰船を海賊といひならはす事とあつて、見しは昔北條氏直と里見義弘、弓矢の節、相模安房兩國の間に入海有て舟の渡海近し、故に敵も味方も兵船おほく有て戰ひ、やん事なし、夜るになれば或時は小船一艘二艘にて、ぬすみに來て、濱邊の里をさはがし、或時は五十艘三十艘渡海し、浦里を放火し、女わらべを生捕、即刻夜中に歸海す、島崎などの在所の者は私に和睦し、敵方へ貢米を運送し、半手と號し、夜を心やすく居住す、故に生とりの男女をば是等の者、敵方へ内通して買返す、去程に夜にいたれば、敵も味方も海賊や渡海せんと、浦里の者ふれまはつて用心をなし、海賊の沙汰、日夜いひやむ事なし、今は諸國治り、天下泰平四海遠浪の上までも穩にして、靜なる御代なり、然共兵船おほく江戶川につなぎをき給ふ、ある人いくさ舟の侍衆を海賊の者と云ければ、其中に一人、此言葉をとがめていはく、むかしより山賊海賊といふ事、山に有て盜をなし、舟にてぬすみするを名付たり、文字よみもしかなり、侍たるものゝ盜をする者や有、海賊とは言語道斷、曲事かな、物をしらぬ木石たりといかる、此者聞て我文盲ゆへ文字よみもしらず、扨船手の侍の名をば何とか申べき教へ給へと云時、此侍は返答につまり無言す、

とある、如何にも兵船武者とか、戰船侍とか云ふ言葉もたく、

勿論今日のやうな水兵海兵等の語もない、云ひ慣れた海賊が惡いなら、何と云ふのが宜しいかと云はれゝば、返詞は出來ない、此の文段の頭初の記載の如くならば、里見北條兩家の水軍は海上で戰はぬでもないが、互に海邊の住民を称し、人を掠め物を奪ふのを常とした、誠に海賊だ、生捕の女童を買返させるなどは、其のまゝ支那の馬賊の往き方ではないか、里見代々記にも船戰の記事がないでもないが、元祿三年の話として、

洲崎瀧山明金三ケ處ニ番手ヲ居ヘ置、海上ニ軍船カ又ハ亂妨取ノ船ナド見來ラバ、相圖ノ太鼓ヲ打テ、百姓町人海人等ニ限ラズ、財貨妻子ヲ山野ニ隱置キ、近邊出合、追散シ打殺セト仰付ラル、カヽル節、手柄シタル者ドモニハ、田畑山林屋敷又ハ相應ノ諸役等分々ニ應ジ御褒美アリ、

と里見義弘が命令したことがある、海上の方は陸上とは違つて露骨に海賊と呼んで居たゞけに、戰爭に引掛けたり、對陣の際とかを機會とせずに、時を嫌はず泥坊を働いて居た、江戶以前に此の船手の與へた苦惱が、二百年後の外船渡來に先づ惡い感情を持たせるやうにした、クナシリ騷動の如き北海の果で外船異人が猖行する前から快い氣にはさせない、英船が薪水食料を強要して、長崎奉行を切腹させたよりも早く恐怖して居る、まして鎖國令以來、大船巨舶を見たことがない處だ、それだけでも仰天して居る處へ、聞き傳へた古い恐怖を外舶は相違なく現實するやうに動いた、だから外國船でなくても、大廻しの船乘りは恐ろしいものに見られて、妖怪譚が添加され、密貿易をする者を海賊として取扱ふ、と云ふのは、支那で八幡船を提怖するのが笑へない、昔の恐怖が久しく取除けられないのではあるまいか。

江戶になつて海賊の話はない、里見北條兩家の水師が絕へて、泥坊船の持越しは無かつた、しかし掠奪に來る船がないだけで、其の人間は亡びないのだから、房總方面は隨分騷がせられた、北條五代記や里見代々記で見ても、上陸して民家を犯すので、海面で泥坊を稼ぐのでない、海賊は山を稼ぎ場に定めた山賊とは違ふ、だから江戶の最初に海賊の影響がない、交涉がないとは云へぬ。

偖是から漸々太平の世の中になり、泥坊も文化の惠みを受ける、彼等の働きも寬永から際立つて急勾配に、綱吉將軍の初政までに變革して往く、さうして享保の末からは盜賊も見違へるやうな樣子になつた、武者繪と役者繪ほどの差違は慥に見へる、それを對照させたい爲めに、爰まで書いて來ました。

何だつて時世の產物だ、盜賊の變革した跡を尋ねると、彼等もチヤンと時世に嵌つた居る、時世〳〵に嵌らないやうな恰好はして居らぬ、新しいのはあつても古いのは尠い、特別な獨創型もあれば、流行型も出て來るなどは、御愛嬌なもの、約三百年來の江戶泥坊論は例に依つて、啞口開目のダンマリ模樣から始りさよう。

現代と犯罪

長谷川如是閑

（一）犯罪と社會組織

　犯罪的行動とは行動の性質ではなく、社會内の統制に於て約束された行動の範圍に反いた場合をいふのであるから、殺人も盗奪も、場合によつては犯罪的とされずに功名手柄とされるのである。『詐欺』の如きは、ある時代には外交官に必須の資格と考へられ、昔の官僚政治家は、それをある程度まで道徳と考へた。『窃盗』の如きも、スパルタのやうな所では、少年教育の一課とされた。

　されば犯罪は、一定の社會統制に於て定められた行動範圍を積極的に超へ、又は消極的に破つた場合の行動であつて、それが非行と考へられたのは、一定の社會的協同生活に於ては、各人の行動が嚴重に約束づけられたものであるといふ社會事實に基てゐるのである。而して、苟も一つ社會に生存する以上は、何人も全く無意識に、本能的にその約束に從順なのであつて、それを破る力を持ち合せてゐないのである。それは丁度、私達が人に出會つて御辭儀をしない譯に行かないやうなものである。

　それほど自然的に成立してゐる約束を破るといふことは全く非人間的である。丁度、人に出會つた時に必ずお辭儀する代りに先方の鼻面を毆るといふやうたものがあつたら、それは氣違ひであらうと推定せねばならぬのと同じく、社會統制を平氣で

破り得る人間は、――ある特別の場合即ちその統制が全體的に崩壞する革命期のやうな場合でない限り――一個の變質者であるに相違ない。

社會に於て、何うしてさういふ變質者が發生するかといふこと、換言すれば犯罪性に關する觀念には、いろ／＼の變遷があつた。最も始めには、犯罪的の行動は人間乃至社會にとつて全く外部的のある意志に依るものであると考へられた。それは一般に自然現象が、人間以外の或人格的の意志の現れであると信ぜられたのと關連してゐた。風も雨も、雷も地震も、さういふ外部的の――客觀的の――意志の結果として惹き起されたものであるといふ形而上學が成立してゐたのであつた。（この觀念は現代の形而上學にまでも一貫してゐるものであつて、意志が凡ゆる現象の本質的動因であるといふ形而上學的哲學はすべてこの系統のそれである。）これは、抽象的の『客觀的意志』といふやうな觀念に發達するまでは、やはり人間のやうな情意を備へた善意の又は惡意の人格的存在、乃至人間に敵對的の動物の意志であるとされた。即ち依憑主義であつた。

この原始的の犯罪的意志は、人間を超越し、人間の力の及ばない外部的動因であり、從つて犯罪に關する責任は人間以外のものに歸せられたものだが、やがて、人間主義の時代が起るに伴つて、犯罪の動因が犯罪者たる人間自體に求められるに至つた。これは一般道德觀念が、古代の惡神主義や依憑主義の信仰を離れ、人間主義となつたに伴つたもので、他方に於て自然現象の動因も、人格的乃至動物的の意志でなく、より觀念的の客觀的意志となり、その實在の性質が變化して、自然的よりは道德的性質を帶びるに至つたゝめ、人間の犯罪のみならず、自然現象の禍害も、人間の責任に歸するやうになつた。自然現象の禍害を人間の不道德的性質と結びつけたのである。惡魔、禍神等の信仰も衰へたが、たとへそれらはなほ働いても、その惡行までも悉く動因を人間の責任に歸する傾向となつた。然し、犯罪的行動が全然個人としての人間それ自體に歸着せしめられるに至つたのは、近代の科學の發達とそれに伴ふ個人主義的觀念の發達した結果で、それまでは、犯罪的行動及び意志はあらゆる古代觀念の殘物としての拜物教的傾向や依憑主義や惡神主義の影響をうけた道德論に支配されてゐた。尤も、古代の依憑主義と違つて、惡魔に憑かれる事が偶然ではなく、憑かれる人間の不道德的性質に基づくと考へられた。即ち近代的責任主義に近くなつてゐた。以前は個人に責任なく、客觀的の犯罪意志にとり憑かれたと考へられたのであつたが、後にはとり憑かるべき行動の責任が、犯罪者個人に在ると考へられるに至つたのであ

つた。

斯樣な個人的責任主義は、科學の發達すると共に、因果律が科學的となるに從ひ、犯罪の原因結果を全然一個人に求めることが困難となるに至つて難局に到達した。科學的因果律は、前世若しくは天上に於ける生活と、現世の生活との間の因果律といふやうなものを認めないで、個人の犯罪の原因結果をさういふ解釋に求めることは出來ないわけで、これを全然地上の現象に求めれば、自然、個人自體にだけそれを求めるとは出來なくなる。即ち犯罪行動の原因が宗教的因果律を離れて、科學的因果律に近づくに從つて、個人の犯罪行動の原因結果が社會的方面に求められるのは當然である。而してその認識の發達するに伴つて、犯罪が個人に偶發するものでないといふ事情が明かにされるに至つた。傳統的の道德觀念は、それでも人間的意志をどこ迄も科學的因果律から超越した動因に歸するために、——現在の理論哲學の多くはそれである——個人的責任主義が今でも固守されてゐるが、然し意志の超越的性質といふ事が段々と心理學的に否定されて、行動の純個人性といふものが認められなくなり、純粹自我的意志といふやうなもの〻空想であることが認められ、社會的關係が個人的行動現象を支配する事情が明かにされるに至つた。そこから犯罪の社會的責任の觀念が發達した。さうなると、ある意味で古代の外部的原因説が復活したともいへる。

この點は病氣に對する觀念の發達と似通つてゐる。凡ての病氣は古代に於ては、偶然に病魔にとり憑かれたと信じられたのであるが、中頃では純個人的原因に歸せられ、近代に至つて社會的に發生した黴菌の仕業と認められるに至つた。こゝでも古代の外的原因説が却つて勝利を得たわけである。病氣の發生はそれ故に社會的責任として處理される事が今日の觀念である。

犯罪はまだそこまでは『社會的』の意義が徹底してはいないが、然し次第にさういふ傾向に進んで、種々なる政策がそれに基て案出されつゝある。然し、犯罪の觀念が病氣のそれに近づいたといつても、その取扱法は必ずしも同一に進むわけではない。罪人を隔離する方法なども、惡魔主義以來、畢竟傳染病者を隔離するのと同じ觀念に出たのであるが、この意味の隔離は、必ずしも犯罪に對する適當な方法とは云はれない。方法的に罪人と病人とを同じく取扱ふと云ふ事は、むしろ傳統的の因習に基づいた制度である。古代の依憑主義は、罪人を隔離せずにそれから禍神を引き離す方法を採つた。或方式で罪人から惡魔を除き去つた後は、罪人は普通人と同じく取扱はれた。罪人の所有物を川に流して惡魔を除くといふやうな方法は、今日の財產刑の方法であつて、從つてその方法が財產刑の起源と考へ

られた。それは復報主義即ち目に對しては目、手に對しては手といふ觀念の進化ではなく、それとは別な起源を持つた制度であつた。復報主義は社會が稍々復雜な形に發達して、多くの氏族が統一された狀態の下に於て發生した氏族間の鬪爭を緩和する觀念的方法として發達したもので、所謂衡平主義の發生に作つたものであつた。

純粹に協働的な古代の社會群に於ては、復報主義は發達しないのであつて、犯罪といふものが社會的に不可能な狀態即ち個人はそれ自體に於ては、決して社會的約束に背き得ないといふ信仰の下に、犯罪的行動が處理されたのであつた。この信仰が破れたのは、異種族の集合に依つて、場合に依つては互の間に犯行が奬勵される社會狀態となつたからである。所謂「社會的統一」といふものは、右のやうな原始社會が內部的に膨脹したものではなく、異なる社會群が征服に依つて、一つに纏まつたのであるから、その異なる群は同一社會に構成されながら、互の間に常に鬪爭意識が潜在し、一方は他方を威壓しようとし、他方は一方に反抗しようとし、動もすれば相互の間に犯罪的行動が起る。殺人盜奪等は異なる社會群の間に於ては原則的の行動であつたので、それが征服に依つて一つに纏められた曉には、一つの社會內に殺人盜奪等が互に起り得る事は當然である。それは「斬り取り強盜武士の習ひ」といふ諺によつても疑はれない。故に斯樣な征服的社會群に於ては、殺人の練習——擊劍、槍術、弓術等——さへ行はれ、甚だしきに至つては前にいつたスパルタのやうに、少年に盜奪を練習せしむるものさへあつた。

犯罪行爲の不可能性即ち人間は犯罪行爲を行ふことは出來ぬ生物だといふ事に就いて人間が原始社會的の信念を失つたのは、即ち征服的社會群發生以來の事である。その以前は恰も今日一家族內に犯罪的行動が原則的に不可能と考へられてゐるのと同樣に、同一社會群に於ける犯罪行動は不可能と考へられ、偶々それが行はれた場合は、人間を超越する第三者の意志に依ると信ぜられた。

同一社會群に於て犯罪行爲の行はれる原因は、社會形態が對立係關にあるためであつて、昔はそれを種族的對立と考へたが、それは種の對立といふよりは生活利害の對立といふ方が具體的事實であつた。人間は決して種そのものに依つて對立するものでなく、生活利害の相違から對立するものであつて、異種も利害を同じうすれば協働的となり、同種も利害を異にすれば鬪爭的になる事は、人間のみならず一般動物界の現象である。發達した社會に於ける犯罪性の第一原因は、それ故にこの對立狀態に存する。

種族の對立といふ事は、抽象的觀念であつて、具體的事實としては、生產組織と生產物の所有とが群を異にするに從つて別別であつたといふ意味であつた。同種の間には生產組織が協働的であると同時に、生產物が共有であつた。異種の間はさういふ共通がないので、始めて戰鬪によつて奪ひ合が行はれ、後にはやゝ平和な交換が行はれた。同種の間では贈與はあつたが、交換はなかつた。だから異種の間に闘爭が行はれたのは、生產の協働に依らず又交換組織にも依らずして、生產物を融通せしめようとする方法であつた。此方法を異る社會群の間に於てゞなく、同一社會群中に應用したのが、犯罪の主たるものである殺人盜奪等であつた。即ちそれは原始人的融通法を今日の社會に行はうとするものである。そんなことから、犯罪者には原始人的性質が殘留してゐると考へる學說もある。犯罪者を人類學的に、原始人的性質の復活と考へるのである。一定の生產組織、一定の交換組織を無視し、又群の間の協働方法を無視して、原始人が異る社會群に對して行つた方法に依るのであるから、犯罪行動は原始人の生活の間歇遺傳と解釋される。

然し乍らさういふ原始的生活を復活せしむる動因は、即ち社會の構造が對立的闘爭狀態に基礎を置いてゐるからであると云はねばならない。即ち特殊の病的犯罪行爲を除けば、殆ど凡ゆる犯罪は、鬪爭的社會組織の賜物であると云ふ事が出來る。生產關係に於て、交換關係に於て、數千年來の社會制度は協働的社會群の性質を失つて、對立的社會群の性質を以てゐる。これ『石川や濱の眞砂はつきるとも、世に白浪の數』の盡きない所以である。

犯罪の根本的動因は、右に云つた如く社會的構造の變化である。これが犯罪に對して社會的統制を行ふ場合に、隔離の外に方法がないと考へた所以である。恰度それは敵軍を捕へた場合に、これを監禁するより外に方法がないと考へると同じ理由である。根本的社會的協働を拒む人間は敵軍である。それを無拘束の狀態に置く事の危險は云ふ迄もない。ところがこの敵軍ばかりが纏つてゐる社會群に於ては、極めて安全な狀態が保たれ、毫も監禁の必要はない。犯罪者も殺人盜奪等に依つて生活を爭ふ必要のない組織に於て集合生活をさせれば何等の爭も行はないわけである。故に社會自體が犯罪的動因を含まない組織のコロニーでも作れば、そこには決して犯罪人といふものを出さないに相違ないのである。（特殊の病的犯行者は遺傳的素因によるのだから、さういふ組織の下にも多少存在するだらうが、それでも機會に乏しいので減少はするであらう。）

この意味から犯罪政策の最も根本的な問題は、社會組織そのものにあると云ふ結論になる。而かも社會組織の進化は一朝一夕に持ち來たす事の出來ないものであるから、犯罪政策の根本義は、犯罪行動の動因を出來るだけ減少した組織を社會制度の各方面に發達せしめるに在るといふことになる。それは決して一時行はれた罪人植民地の樣なものを云ふのではなく、この複雜な文明社會自體に於て、犯罪發生の動機を出來るだけ減少した組織を造るのである。犯罪政策を、罪人を改悛させるといふ事よりは、社會自體に包含せる犯罪の社會的條件を減退せしむるにある。

而かも實際の社會を見れば、凡ての制度は悉く犯罪を誘發する組織を包含してゐる。根本の私有財産制度といふ樣な犯罪の大原因は如何ともする事が出來ないにしても、國家、自治團、會社、組合、其他一つの組織が造り上げられる場合に、必ず犯罪がそれに附隨して發生するやうな組織になつてゐる。恐らく今日社會に活躍してゐる人々で、それらの組織の犯罪的動因に全く誘惑を感じなかつたといふ人は一人もあるまい。それは今日の社會制度は犯罪的條件を含んでゐる。ほんの一時的の復興局といふ樣なものが出來ても、短時日の間に無數の犯罪者が摘發される。摘發されないものがどれほどあるか全く圖が知れない。人間が悪者であるといふよりは、組織そのものに犯罪の可能性を含んでゐると見るのが至當である。

交換制度の社會に於ては、生産のことによらずに、交換そのものに從事する人々は、必ず協同關係でなしに對立關係に置かれてゐる。だからそれによつて利益してゐる多くの人は、多少犯罪的性質を疑はれてゐる。『あきんど半泥棒』といふ諺はよくその事情を言ひ現はしてゐる。而かも社會的にさういふ性質が許されてゐるとも考へられるから、文明社會に於ける犯罪の防止といふことは非常に困難である。それは丁度軍國時代に於て暴力の防止の困難なのと同じで、昔を暴力犯の時代といへば、今日は財産的犯罪の時代といへる。

犯罪的行動が右のやうに全く社會的責任であるとすれば、それは黴菌の發生が病氣の社會的責任であると同じく、組織に包含する犯罪的性質に觸れる事が、社會問題としての犯罪政策の根本義である。新たな犯罪形式が、必ず新たな社會に伴つて發生する事情を研究すれば、古い犯罪形式は固有の組織に原因してゐる事が明かにされる。

されば犯罪の問題は、これを要するに組織の問題である。組織に觸れないで犯罪を減滅せしめようとする事は、黴菌に觸れないで、病氣を撲滅しようとする樣なものである。

(二) 犯罪とは何ぞや、刑罰とは何ぞや

尾佐竹猛

犯罪といへば個人としても社會としても重大なる出來事ではあるが、社會全體から見れば一少部分の出來事に過ぎない。社會の大部分は健全なる分子で、犯罪者は例外としてのみ發生するのであるのを、例外ばかりに氣を取られ、恰も例外を原則の如く心得、今にも國家が亡滅するかの如く慨嘆するものゝあるのは、その眞情は諒とするも、其の批判は公平とは云ひ得ないのである。なんでもかでも昔は善くて今は惡いといふ尙古思想は最早影を潜めた筈ではあるが、それでもどうかすると此の思想が頭の隅にこびりついて居る連中があつて、此の物差しで萬事を解決しようとするから溜らぬ。昔は人情純朴であつたが、今は澆季の世であるといふこと、都會の人間は狡るくて田舍者は正直だといふことゝは、どうかすると同一理法の誤謬に陥つて居るのである。そりや昔から見れば今は惡人の數も增したであらう、田舍よりは都會の方は確かに犯罪人は多いに相違ない。しかしその反面には昔よりも今は善人も多くなつて居り、田舍より都會には健全の分子が增加して居るのを閑却してはならない。罪惡の方面のみを擴大鏡で見て善良の方面を肉眼で見ては、それこそ人を見たらば泥棒と思への諺を不當に擴張することになり社會批評の正鵠を得たものとはいへない。そこで僕は常に、社會から觀た犯罪は研究すべきであるが、犯罪から見た社會といふやうなことは能く〳〵注意せねばならぬと考へて居るのである。といつて犯罪から見た社會の研究は無用といふのでは無い、勿論必要である。犯罪から見た社會ばかりに限らず、各方面から觀て夫れの研究を綜合して、爰に始めて完全なる社會觀は成立つのであるが、犯罪方面のみより觀察して、これ即ち社會觀なりといふ弊に陥らないやうに注意すべきである。破産が多いから世の中は不景氣なりといふ觀察は決して不當では無いが、寧ろ不景氣なるが故に破産が多いといふ研究が必要である。しかしかういふ風の研究には夫れ夫れ專門の大家があり僕の如きものが出しやばる譯では無いから敢て喙を容

るの要は無いのであるから、矢つ張り犯罪方面に立籠りて社會を觀察した方が無事である。

そこで雜駁な頭でサツト世間を見渡すと、抑も犯罪とは何ぞやと云ひ度くなる、がこれではまるで法律專門學校一年生の問題であるやうであるが、その實これが大問題である。といつて專門學者の六かしい說明を要求するのでも無く、また法律上の犯罪と道德上の犯罪とを云爲する積りでは無い。社會生活が複雜となればなる程善惡の標準が迂餘曲折して單純に判定されないと同じく、社會の實生活と犯罪とは紙一枚の差に過ぎないことがある。政略とか掛引とか融通とかいふものと、詐欺とか背任とかいふものとは、極めてデリケートな關係に立ち、どうかすると單純なる頭では區別がつかないことも多い。所詮處罰せらるるから犯罪で、起訴されないから普通生活だといふやうな不合理な解釋を採るか、或は結局他人に迷惑さへ掛けねば惡事では無いといふやうな不道德な主觀で辛うじて安神して居るといふ不都合な連中も絕無では無い、そこへ持つて來て生存競爭の渦が深刻に生活を脅威するとなると、單なる正義人道一點張りの講釋では生溫くて耳に入らないといふて、其本人は必ずしも本來の惡人で無いといふ場合も尠く無い。そこへ持つて來て此環境の同一な人間が取引關係に對立するとなると、事が一層面倒となり、一步を先んじたものが被告人となり、後れたものが被害者となるといふ場合も有り得る、斯うなつては被告人も被害者も主觀に於ては殆んど區別が無いことゝなる、さりとて善惡邪正の區別は儼然として、犯罪概念は些の動搖を來さないと來ると、愈事は厄介となる。

この社會生活の複雜と、生存競爭の激烈といふことは一面に於て人々の神經をいら〱せしめ、僕の所謂社會的神經衰弱、即ち社會全體が神經衰弱に罹つた狀態となる。爰に於てか僅かの刺戟でも、發作的に重大なる事件を發生せしむる。極めて慘虐な犯罪とか、或は史上空前の事件といふものも犯人を捕へて見れば割合に落つきの無い、つまらない人間であるのも此故である。または職責の責任感が薄弱となり、公金と私金との區別が無く、公文書と私文書とを同一視するといふ如き弊害も亦た此故である。犯罪學者の中では、遺傳の方面から或は骨相の方面などより熱心に研究し、殺人型とか詐欺型とかいへるものが有るとか無いとかいふ議論が盛んに鬪はされて居るが、これは極めて局限されて居る場合に適用され得べきもので、今日の社會相の研究としては最う少し範圍を廣めて欲しいと思ふのである。大政治家も一躓して被告人と爲る場合もあるが、彼の政治家は平素詐欺型があつたといふ如き論鋒は今少し、斯學の研

[illegible]が進步せなくては[illegible]一部の人士は世の中の行詰りといふ說を樹つるのであるが、これは僕の社會的神經衰弱論と觀察の方面が異るに過ぎないのである。その何れの論法から觀ても近時著しく增加した、親子心中とか、一家族を殺して自分も死するといふ事案は頗る研究に値する重大問題である。しかしこれについては先輩原胤昭氏が詳細なる研究があるから、これに讓るが、僕は家族制度の弊害、封建敎育の餘弊といふことも一原因に加ふべきでは無いかと考ふるのである。

それから少し方面を異にして觀察すべきは選擧違反である。殺人とか强盜罪とかいへば如何なる無智なる者でも犯罪なりと自覺するが、選擧違反は相當の知識階級でもこれを犯罪視しないのである。これは立憲國民としての素質の有無とかいふ如き論議は避くるが、選擧違反は何が故に罪惡なりやを自覺せず、罰せらるゝが故に犯罪なりといふに過ぎない、しかもその處罰せらるゝものに對しても不運なる犧牲者といふ位の感想があるに止るのである。そんな面倒な、まかり間違へば處罰せらるゝやうならば棄權するといふのが、善良なる分子とあつては、慨嘆するよりは寧ろ情無くなるのである。それに當局の遣り方にもあまり感心出來ない。今度の普選法でも、選擧人も候補者も頭から違反者扱ひにしたやうな規定が多い。普選法に關する疑義の研

[illegible]といふのに、選擧違反[illegible]根本的に普選の精神の涵養といふ方に力を致さぬのであるから、今更ら普選の精神でもあるまいといふならば、また何をかいはんやである。

それは兎に角、選擧違反は本人が犯罪視せないにも拘はらず、その檢擧數は多數で、少くとも數十名から、數百名に上り甚だしきは何千名といふ檢擧數があることがある。而して選擧が度々繰返される爲めに地方に於ける名望家、有力家が投獄せらるゝものも尠く無い。其結果本人がこれを痛感せざるのみならず、一般民衆のこれを見る何等社會的恥辱とせない。これ即ち刑罰威力の遞減で、由々しき問題である。本人が犯罪を自覺せざることは憲政國民としては悲むべきではあるが、刑罰威力の喪失に至つてはこれにも增して極めて重大なる問題である。犯罪とは何ぞやの疑問よりは刑罰とは何ぞやと疑はるゝに至つては單なる犯罪問題を超越して、重大なる社會問題である。この點に關しては從來あまり、注意したものは無かつたが、僕は輕々に看過すべからざる問題として、本稿を草するを機として社會に提言するのである。

(三) アメリカに於ける最近の犯罪

小酒井不木

一

話はソフイー・レーヴイといふ一女性からはじまる。彼女は前世紀の後半に活躍したアメリカの名高い女性犯罪者であるが、最近のアメリカの犯罪中、依然として優勢な地位を占めて居る恐喝取財 blackmailing を語るためには、是非とも、彼女を引つ張り出さねばならぬのである。

彼女は生粋のニユーヨーカーであつて、犯罪者を兩親として生れ、幼い時分から、盗賊や、詐欺師や、命知らずのならずものの間に育ち、掏摸やかつぱらひを教はりつつ生長したが、先天性犯罪者に不似合な美貌と機智を持つて居たゝめ、四十歳を越しても二十歳前後の年齡に見え、彼女に逢ふほどの人は彼女に魅せられて、警官達でさへ、彼女に向つては、強い言葉も出せないといふ有様であつた。

彼女の良人ネツド・リヨンスは、金庫盗賊としてまさに當時の第一人者であつた。二人の間に二人の女の子が出來たが、さすがに彼女は、娘たちに、自分等の暗い職業を知らしめたくなかつたと見え、ニユーヨークをはるかに離れたウインザーに住ひ、後に二人の娘はパリの僧院に預けられてしまつた。

さて、ソフイーは、最初は良人ネツドの手助けをして、銀行員たちをその美貌で操り、良人に自由に金庫破りをさせて居たが、後には彼女が主となつて、ブラツクメーリングを行つた。その方法は、旅行先のホテルか或は又列車の中で、金持ちとにらんだ男と近づきになり、だん〳〵親密になつて、いさといふときに、がらりとその態度を變へて一萬弗の金を要求するのであつた。若し拂はなければ世間に公にするといふのである。從つて彼女はいつも結婚者を槍玉に選んだ。さうして彼女は、その場で小切手を書かせ、彼女の女中と稱して連れて歩いたケートといふ女にその小切手を持たせて銀行へやり、現金にかへさしたのである。

彼女はこの方法によつて、實に一身代を拵らへた。相手が富豪 場へ怖い眼の男があらはれて金を强要するといふ、ありふれた

のことであるから、いつもそのまゝ泣き寢入りになつたが、でも、一二度失敗をしたことがあつた。セント・ルイスの旅館で引つかけた富豪は、小切手を書いた迄はよかつたが、ケートがそれを銀行へ現金にかへに行くと、その富豪の當座預金が一萬弗に達して居なかつたので、直ちに銀行が調査をはじめ、事情が世間に公にされた。それがためその富豪は世間の信用を失ひ、又家庭を失つた。然るにソフィーは、たゞ一萬弗を得そこなつたといふにとゞまつたのである。

二

このソフィー式のブラツクメーリングは、新聞にこそ掲載されぬが、現にアメリカでは、毎日幾件となく行はれつゝあるのである。アメリカばかりではなく、日本にも、公にされぬ恐喝取財の例は定めし多いことゝ思ふが、何といつてもアメリカは、この點に於ても世界一である。ことに、いはゞ職業的のブラツクメーラーが著しく跋扈しつゝあるのは注目に値する。ブラツクメーリングはいつも二人共謀で行はれ、一人が美貌の女、一人がその良人と稱する男である。甚だしいのになると、オフィスあたりで女が金を持つて居さうな人の頸にまきつくと、其の

この外にアメリカには大げさな恐喝取財を行ふ團體が存在する。そのうちでも、名高いのはかの黑手組 Black Hand と稱する一團である。この團體は主として、イタリア人及びシシリー人を槍玉にあげる。といふのは、イタリア人やシシリー人は警察へ届け出ることが少ないからだといふのである。黑手組のやり方は、槍玉にあげた人のところへ手紙を送つて、金何千圓をどこ／＼の石の下へ何月何日迄に入れて置け、若し命令に從はなければ、息子を誘拐するか或は邸宅を燒き拂ふといふのである。この種の方法は日本でも度々模倣されて讀者諸君のすでに御承知の筈である。

黑手組の外にはマフィア Maffia カモラ Camorra などの團體があつて、盛んに恐喝取財を行ひつゝあるが、何しろ彼等の要求を拒むときは、實際に家を燒かれ娘を殺されたりするので、手紙を受取つたものはふるへ上つて彼等の要求に從ふのである。日本での模倣者は、そのやうな思ひ切つたことはしないから、すぐ警察につかまつてしまふが、アメリカでは、恐喝の手紙を受取つたものは、めつたに届出でないから、この様な團體の犯罪の數が一ケ年どれくらゐに達するものかは少しもわかつて居らぬのである。

三

黒手組やマフィアやカモラが、主としてイタリア、シシリーの人々を恐喝することは前に述べたが、これ等の團體を組織する人間も、やはり、イタリア、シシリー人が多い。單に恐喝取財ばかりでなく、强盗殺人の如きものも、南歐の移住民によつて行はれる場合が極めて多いのである。現今、ニユーヨーク、シカゴ、ボストン、フイラデルフイアあたりの大都市にあつて、犯罪の中心地となつて居るものは、秘密の酒場であるといはれて居るが、秘密の酒場を經營して居るのは、イタリア人やユダヤ人がその大部分を占めて居る。アメリカが禁酒國となつたのは、禁酒して犯罪を少なくするといふことも、その條件の一つとなつたのであるが、禁酒以前にニユーヨークで約七千あつた酒場は禁酒後皮肉にも三千乃至四千を數へ、而も、酒の取引やその他の關係で行はれる殺人の數が激增したのである。

南歐諸國の住民が、一般に氣が短くて犯罪を行ひ易いことは、ロンブローゾーの研究以來動かすべからざるところであるが、それ等の住民のうちから、而も本國で持てあまされたものがアメリカに移住して來るのであるから、彼等がアメリカの犯罪數を增加せしめるのは當然のことである。然し乍ら、移住民が犯罪を行ふ理由は決してそれだけではない。イタリア人に限らず、その他の國々の移住民でもやはり罪を犯し易いのであつて、その理由として二箇條をあげることが出來るのである。

第一の理由は社會的經濟的の理由である。現今と雖も、アメリカへ移住を企てるほどのものは、先人たちが相當の富を得たことを知つて、自分たちも金持ちになることを夢想しつゝ船に乘る。ところが、いよ〳〵上陸して見ると、金の儲かりさうなところは一箇所もない。先の移住者たちは、後の移住者をふりかへつても見ない。その結果は、後の移住者を失望落膽の底に突き落し、罪を犯さしめるに至るのである。

第二の理由は生理的肉體的の理由である。移住民のうちに犯罪が多いといふ事實は、夙にアメリカの醫學者たちの注目するところであつたが、最近、内分泌と犯罪の關係が明かにされるに至つて、その理由が明かにされたのである。即ち、ニユーヨークの少年裁判所クリニツクの長官シユラツプ博士の研究によると本國に於て健全な子供を生んだ母親が、アメリカに移住して後に生んだ最初の子は、精神的に缺陷が多いといふことがわかつたのである。時として移住後の最初の子ばかりでなく、第二、第三の子もまた缺陷を持ち易い。而もその原因は、母親の內分泌腺の異常に外ならぬのである。

このことがわかつてから、シュラウプ博士は移住者の犯罪の内分泌腺障害を治療して觀察したところ、果して健全な子が生れることが經驗された。もとよりまだこの方面の研究は十分でないけれども、アメリカにとつては、たしかに福音といはなければならない。何となれば、移住者の醫學的處置によつて、移住民の犯罪を減少せしめることが出來たならば、アメリカの犯罪數を著しく減少せしめ得るからである。が、犯罪の原因は肉體的のものばかりでなく、一方に社會的のものがあるから、この問題はそれほど簡單には片づけ得られない譯である。

（四）探偵小説眼で見た現代の犯罪

甲賀三郎

探偵小説眼で見た現代の犯罪は未だ〳〵幼稚だ。寧ろ科學的探偵と言ふ方はあつても、科學的犯罪たどと云ふものは、殆どないと云つて好い。尤も犯罪が幼稚だと云ふ事は、發覺が容易だと云ふ事とは全然別問題で、犯罪の方法が幼稚な方が反つて發覺し惡いとさへ云はれてゐる。況や、探偵小説家の空想する、複雜怪奇な犯罪は、實際探偵家から云ふと、一顧の値だにないらしい。それだからこそ、探偵小説家は種々の新犯罪を、堂々と小説に書く事が出來るので、その一つ〳〵が實際に適用出來て、探偵家が首を捻るやうでは、忽ちその筋の忌諱に觸れるに違ひない。

犯罪が巧妙であると云ふ事は、理智が働いてゐる事で、それだけにより勝れた理智を以つてすれば、取つて押へる事が出來る譯である。犯罪は常に先で探偵は常に後であると云はれてゐるが、犯罪そのものは積極的でも、發覺を防ぐと云ふ事は常に消極的で防禦的である。探偵は攻勢的である。兵家には要塞は必ず陥落する、一般的に云へば防禦は必ず攻撃に敗退すると云ふ原則があるさうだ。それと同様に發覺を防ぐ方はいつかは必ず探偵家にしてやられると云ふ事が云へよう。殊に理づめの犯罪などは探偵家には反つて解き易い命題であらう。

昔話に樵夫が山で天狗に會つて、心のうちに何を考へても、

直ぐ悟られて終ふので、非常に恐れながら、枯枝を束ねてゐると、偶然手が滑つて、枯枝が弾ね、天狗の鼻に當つた。天狗はさて／＼人間と云ふものは氣の知れぬものよ、恐ろし／＼と云つて逃げ去つたと云ふ。天狗はよく人の氣を察したが、無意識的な偶發事には遂に敵する事が出來なかつた。之と同じく、いかに巧妙な犯罪家でも、偶發的な出來事で見現はされる事は逃れ難く、いかに明敏な探偵家でも、偶發的な犯罪には匙を投げる事が多い。

が、探偵小説では偶發事は多く用ひる事を許されない。之が犯罪を怪奇複雜にして、現代の犯罪との間に距離を生じ、實際探偵家に餘り問題にされない所以である。と、同時に現代の犯罪が直ちに以つて、探偵小説たり難い所である。

現代の犯罪で比較的計劃的に巧妙に行はれた一例は「鈴辨殺し」であらう。犯人の「山憲」は流石に帝大出だけあつて、可成綿密に事を處してゐる。「山憲」が「鈴辨」から金を借りてゐる事や、犯行當日「鈴辨」が「山憲」宅を訪れた事などは實に巧みに隠されてゐた。共犯者をして旅行せしめ、旅行地から「鈴辨」の名義で彼の留守宅に電報を打たしたのも巧妙である。(尤も探偵家に云はせればこんな事は愚の至りで、反つて發覺を早める事なのだ。)死體の隠匿も可成完全に行はれてゐる。

「山憲」の犯罪隠蔽に當つての第一の過失は、さうして悪運の盡きる所は、頭文字のついた容物に死體を入れた事だ。彼の念頭には恐らく死體が浮き上ると云ふ考へがなかつたのだらう。彼にして、エドガー・アラン・ポーの「マリ・ロジエ事件」を讀んでゐたなら、この點にもう少し留意した事だらう。

死體が浮上つてからの彼はもう逆上してゐる。之は理づめに拘泥し過ぎた人間の破綻を生じた時に必ず起る現象で、非科學的な人間は非科學的な事實に突當つても、さう狼狽はしないが、科學に拘泥してゐる人間は、見渡した非科學的な事實に面しても、見苦しい程狼狽して終ふ。「山憲」の場合も萬遺漏なしと確信してゐたのだから、信濃川に何者とも知れない行李詰の死體が浮上つたと云ふ、數行の地方通信を新聞紙上で見て、すつかり度を失つて終つた。

無論死體が浮上つた以上は、彼の犯罪は必ず發覺する。彼は船頭を雇つて、機密書類を沈めるのだと云つて、行李を河中に抛り込んだりしてゐるから、無論足がつくに極つてゐる。が、然し、彼が狼狽の餘り、自ら警視廳へ飛込んで行つたりしなかつたら、發覺は若干延びたに違ひない。

要するに犯罪は、それが緻密極まる巧妙な犯罪であつても、又放膽粗笨な犯罪であつても、必ず發覺する。之は探偵小説が

常にさうである如く、實際に於ても常にさうであらうと信ぜられる。

だから犯罪の最も巧妙なものは、發覺しても差支へないやうにして置く事、云ひ替へれば、不當利得を占めながらも、現行法律に觸れない事である。この種の犯罪は今後益々增えるだらう。但し、探偵小說家はこの犯罪を取り扱ふ事は恐らく許されないだらう。

が、一面に於て、犯罪が寧ろ放膽粗笨に傾きつゝある事實を見逃す事が出來ない。アメリカに於けるホールドアプの如きその一例で、我國にも近頃は時々白晝郵便局を襲ふ曲者の如きものが現はれる。但し、かくの如き明白な犯罪は犯人の性格或ひは心理描寫でもすれば格別、矢張り探偵小說にはならない。

之を要するに、探偵小說家の扱ふ犯罪は現代の犯罪とは可成距離のあるもので、[illegible]へる位のものであらう。と同樣に、現代の犯罪は探偵小說家に或種の暗示を與へる事があり、部分的には取つて材料とする事はあつても、そのまゝ修飾を加へる事なしに、取材すると云ふ事は難いであらう。近時、探偵小說家のうちには之を遺憾として、成べく自然に近い犯罪を取扱つて、現行の犯罪並に探偵に近づけようとする試みがある。然し、一面から云ふと、探偵小說が空想の所產で、現實と駆け離れた變幻怪奇的な事實を取扱ふ所に、その生命が存する意味もあるから、畢竟、探偵小說家は探偵家とは背中合せであるかも知れぬ。かと云つて、犯罪家と決して同じ面に立つてゐるのでない事は、呉々もお斷りして置く。(終り)

(五) 犯罪者の身體的特徵

金子準二

(一)

雨戸と硝子戸とに悉く釘をさす、勿論この程度では未だ病的犯罪恐怖症の範圍ではない、強盜と竊盜の豫防に至極よいとで

あるが、嘗つてある男は釘をさした上に雨戸と硝子戸に一々錠を施し、更に心張棒をかふ、廊下に墜し穴を造るだけでは安心して眠られないで、所々の襖、障子を開けると天井に釣した金盥の水が墜落したり、金盥に盛つた灰が撒布せられて目潰しになると同時にベルが鳴る工夫まで實行したのである。か丶る精神病的犯罪恐怖病者のあることは、既に現代人の心理に犯罪に對する恐怖が相當强い反影であると見做さねばならぬ一事である。實に「監獄と斷頭臺との豫算程確に支出されるものはない、少くとも犯罪は毎年の出産、死亡、結婚と同樣のある規律に從つて反復し、國家の歳出歳入より餘程精確である。」とケトレーが書いたは百年程以前で、それ以來幾多の刑事政策と社會政策とが實施せられたその甲斐も餘りなく、獨り監獄や絞首臺が不要にならないのみではない、益々犯罪者は增加して監獄は狹隘になるばかりで、何處もその擴張に巨費を投じつ丶ある現代に、政治家、社會學者、犯罪學者が犯罪問題に苦慮し、生命の安穩も財産の安固も保證され難い現代人の視聽がとかく犯罪者問題に集注するも無理からぬことであるが、犯罪問題が時代人の注意の焦點となつたは、當今に初まつた譯ではない、ギリシヤのピボクラテスが「犯罪は精神病者の所爲に外ならぬ。」と斷じ、プラトーが「犯罪は精神の疾患より惹起する。」と觀じたのも、古來犯罪者にある特徴を見出さうと努力した一證であつて、西紀一八七一年既にフランツ・フォン・ヘルチエンドルフが「犯罪問題の解決は人類學と心理學との將來の使命である。」と提唱した程、犯罪者の心理的特徴と身體的特徴とに就いての研究は續出し、前途に幾多の難關はあるが、犯罪問題の科學的解決は決して永久の絶望事ではあるまいと信ぜらる丶程進捗しては居るのである。

（二）

身體的特徴によつて犯罪またはその危險者を發見し、犯罪を豫防したいとは誰しも持つ希望である。この希望が土台となつて、「手が長いものは泥棒になる。」等の俚諺まで出來て居るのであるが、何處まで科學的根據があるであらうか。勿論手が個人の鑑別に利用せられたは、指紋の起源が既に古代にあるに徵しても判かるのであるが、この手に犯罪者の身體的特徵として何等かの異常がないかと着眼せられたは無論の事で、殊にその手相（キロマンシー）に就いては古來相當注意せられたのであるが、まだこれによつて犯罪の危險性を確實に診斷することは不能である。しかし人に對する犯罪者の手は短かく廣く、財産に對する犯罪者の手は長くて狹いことが屢々ある。犯罪者の手は概して常人より長い等との統計考察は略一致して動かぬ所であり、また常人では

中指は無名指より長いが、習慣的窃盗犯人では同長であることの主張者がある。ロッシーは犯罪者の六九%まで右中指が左中指より長い、ことに窃盗犯人に於いてこの差異が甚しいと發表して居るのであるが、何れも統計的研究であつて研究資料の出所によつても相異があり、日本に於いて研究した結果にも相當の距離があつて、これによつてある犯罪の嫌疑者が、眞犯人であるかどうかを確定する程には行かぬが、この手に關する犯罪人類學的研究は、ある個人のことに財産に關する犯罪の危險性を測定するに多少の參考資料となるが、何處までも決定的意義を持つ程有力の確徴ではないのである。

（三）

犯罪者の手ではまた左手利が就中問題である。統計によると略右手利が九十五%で、左手利は僅か五%である、かく何故右手利が高率であるかに就いては、解剖說と歷史說とが對峙して相讓らず、また兩說とも相當の根據がある。「右手は解剖的關係から血液の配給の都合のよい左腦から出る神經によつてその運動を支配せらるゝから、左手に比し強力で且精巧の運動も出來て、右手を利用するが能率が上るので、右手利が常則となつた。」と說明するのが解剖說で、之に反して歷史說は「現在セレベスのゴロンタロー地方の原住人では左手利が多くて、右手利は極めて稀である程、元來人類は左手利であつたが、時代の變遷によつて右手利に變じた。」と主張するのである。ウエーベル等は「心臟が胸廓內の左部に偏在する事實を利用し、人類の祖先は合戰に臨むで生命に最も危險のある心臟を保護すべく、左手に楯を持ち、右手に矛を握つて戰ふが最善の生命の安全であつた、從つて適者生存の原理に從つて右手の發達したものが勝利者として殘存した、この勝利者の遺傳を享けて現代人は大抵右手利で、左手利は稀少である。」と說明するのであるが、この左手利は犯罪者の問題に於いて相當の意義があると犯罪人類學の創始者ロムブローゾ等は見做し、イタリーでは左手利は通常男性では五、八%、女性では四、三%あるが、犯罪者では男性の一四、三%、女性の二二、七%にある、殊に詐欺犯人の三〇%、生來犯罪者の一九、〇%にあると報告する、またマルローの四八五人の犯罪者に就いての研究では、その一二、七%は左手利で、ことに放火犯人では一一、八五%、殺人犯人竊盜犯人、浮浪人では一七、〇%が左手利であつたと發表し、エー・スールが西紀一九〇九年獨逸の新兵二十六萬二百七十人に就いて研究した結果によると、三、八八%が左手利で、その左手利者の八八、〇%には屢々精神病者、犯罪者等にある身體的畸型が發見

せられたに對し、六千五百人の右手利の新兵には一七、〇%より身體的變質徴候は發見せられず、更に一年志願兵では左手利は一、五%より變質徴候がない、また獨逸の軍隊內の左手利者は略四、六%であるが、衛戍監獄の入獄者では一六、〇%あると發表し、犯罪と左手利とは關係があるとの所説に加擔して居り、また同性愛の性慾異常者では左手利は七、〇%あるとヒルシユフエルドは云ふ、スタイネルは眞性癲癇病者の一九、〇%は左手利であるとの統計を公表し、何れも概して左手利が犯罪者に夥しいとの意見を裏書してゐるのであるが、左手利が必ずしも犯罪者の確徴であるとは斷言出來ないのである。しかしある傷害事件で次の如き事實があつて、犯人が確定したことがある。それは相當飲酒後の三人間の出來事で、被害者の左頰に切創がある、兇器は現場にあつたナイフであり、創口の所見から前面から受けた傷と診定せられた、現場には三人より居なかつた、勿論他より犯人が侵入した疑は一切ないが、加害者も被疑者も犯行に就いての記憶が不確實であると主張して犯人は判明しないが、ナイフは右手利のエムの所持品であつたので、エムの犯行であらうとの嫌疑が深かつたのであるが、他のエフが左手利であることが判明したのを根據として、種々の鑑定を施した結果、エフの犯行と決定したことがあるから、ある犯罪人の身體的特徴はその應用によつては決定的價値を持つことがあるのである。

（四）

犯罪者の身體的確徴をつかみたいとの努力が、ことに發展して出來たのは、骨相學(フレノロジー)である。元來骨相によつて精神的特質の判定は可能であると考慮したは餘程以前のことで、何等科學的根據を持つたものでなかつたが、十九世紀の初頭フランツ・フオン・ガルが「本來人類の精神作業は二十七の基本的精神能力から組立てられて居り、そしてこの基本的精神能力はそれぞれ大腦の表面のある一定部位の區劃によつて纏まるべく分布せられて居るのである。」との定位説を發表し、續いて大腦の一定部位が發達して居るとその部位に所屬して居る基本的精神能力に基く、精神作業が旺盛であるのみでない、その部位に相當する頭蓋骨には隆起が出來る、またある精神作業の中樞に相當する大腦の部位內の發達が不完であると、その基本的精神能力に缺陷があり、またそれに相當した頭蓋骨は凹沒し或は削痩するので、頭蓋骨の骨相から、その精神的特徴が測定出來ると從來の骨相術を科學的に改造して、一時解剖學者の論議の焦點となつたのであるが、結局頭蓋骨と大腦表面との隆起、凹沒、削痩

とは常に合致すると保證出來ぬとの解剖的所見によつて、ガルガ耳孔の上部の頭蓋骨に隆起があるものは、殺害、絞殺の中樞の發達した注意人物である等と發表して犯罪豫防の無二の指針であると思はれたガルの所說は瓦解した。以後伊太利のロムブローゾが創始した、刑事人類學の學徒は犯罪者の身體的特徵を尺測と秤量とによつて發見すべく、獨り頭蓋骨に就いてのみではない、腦、內臟、等に就いても考究して居るのであるがまだ統計的事實の域を脫しないので、ある犯罪の嫌疑者をその身體的特徵によつて決定する程度には到達しないのである。

（五）

身體的特徵で犯罪人の搜索に屢々實用せらるゝものは人相であるが、本來主に顏面骨とそれに附着して居る筋肉、脂肪、皮膚等の軟部との狀態によつて、その所有者の精神的特質と道德的特質とを發見することが可能であるとの根據から、人相學（フウオグノミー）は存在するのである。しかし人相學の出發は決して科學的根底に培はれて發達したものではない、大概顏貌の類似する動物の精神的特徵を移して、直に問題の顏貌の所有者の精神的特質を判斷する程度で耳殼が長くて唇の厚いのは驢馬に似て居るので魯鈍である、勾鼻は鳥に似て居るので盜癖がある、狐に似た顏貌の持主は狡猾であるとの類で、到底人相學を利用して、ある嫌疑者の犯行の有無を解決する譯には行かないのであるが、常型から離れた顏貌はとかく周圍の注意を惹くの傾向があるので、一嫌疑がかゝつて、犯行の發覺することがあり、また犯行後周圍から犯罪の嫌疑をもつて注視せられる、捕縛は接近して居ると自身に解釋し、自首した人相のよくない男があるのであるが、とかく人相は實地搜査の參考資料となるので、とかく犯人に覆面する傾向が生ずるのである。

（六）

犯罪者の身體的特徵に就いては、まだ幾多の業績が發表せられて居るが、何れによつても、ある嫌疑者をその身體的所見のみによつて犯行の有無を決定するまでには、犯罪人類學は進步しないのであるが、身體に常型と離れた畸型が犯罪者、精神病者、浮浪者、乞食者、淫賣者等の頭蓋骨、顏面骨、耳殼、鼻、口唇、齒牙、顎骨、手指、足趾等にある、しかもそれが一人に幾つもあることを往々發見するに徵すると、決して身體的特徵は犯罪者問題に於いて顧慮する程の價値がないと斷言すべきではない、多數の畸型の所有者には犯罪をするか、精神病に罹かるかの危險が極めて高率であるとの一つの。警鐘であると解釋

すべきであると精神病學者の意見が一致する程であるから、注意人物として相互警戒するは、犯罪豫防上効果あることであり、また犯罪の搜査と嫌疑者の取調にあたつても愼重であらねばならぬ點である。

(六) 大震災を境としての我國の犯罪

恒岡恒

社會世相の變遷につれて、そこに根を下す犯罪も亦自らその種類方法に於て相違を來すと云ふことは當然であらねばならない。遠い時代は別として、之を我國最近の狀勢に照し合せてみても、震災を境として災前と災後は自らなる相違をみせてゐる。

概して震災前は常習的詐欺犯罪が少かつたと同時に、强力的犯罪——强盜殺人竊盜等——も割合に僅少であつた。一般的に、よしんばあつてもそれは澤山の人間が澤山の犯罪を犯すのではなくして、一人の犯人が多くの犯罪を犯すのであつた。從つて一犯人を捕へると云ふことは、同時に三十箇所乃至五十箇所の犯罪を解決することであつたのである。然るに震災後は全く之と正反對の現象で、即ち犯罪數の增加と共に犯罪者そのものも增加したのであつた。換言すれば、震災前の犯罪は前科者の再犯が多數だつたのに對して、震災後は初犯者が激增しまた激增しつゝあると云ふことが云へるのである。これこそあの大災災を境として、財を失ひ溫い肉親を離れ思ひがけない悲慘な生活に陷ちこんだ人々が如何に多數であつたかを物語るものであり、同時にその後のある明らかな社會相の反映として見逃すことの出來ない事實であらう。

このやうなことは犯罪のやり口そのものについてもみられる。一體に、震災前は犯罪の方法が極めて單純であつた。之は同一犯人に因る犯罪が多數だつたせいもあらうが、竊盜は竊盜らしく夜陰家人の寢靜まるのを待つて忍び込み、陰かに金品をかすめて逃げ去る。又空巣（空巣ねらひ）は空巣らしく家人が完全に留守である場合にのみ行はれた。震災前の社會狀態は彼等をしてそれで濟んでゐさせたのである。けれども震災後はさう簡單には行はれてゐない。竊盜の目的で入つたものが、强盜に變

[illegible]人に素人が多いと云ふことに原因してゐるのである。彼等はどこに金があるか又高價な品物が藏されてあるかを無經驗であるから一寸見當がつかない。探しまはるうち物音で家人に發見され逃げるには逃げられず轉じて居直り強盜となるのだ。かうした例は、犯人に玄人の多かつた震災前はごく稀れなことでしかなかつた。空巣にしてもこの頃は實に巧妙で、彼等は家人の在不在などには頓着せずやる。一例を擧げれば、「えゝ、奥さん、私は某と云ふ御主人の竹馬の友なんですが、今日會社の方へ伺ひますと今忙しいし、それにあまり久しぶりでもあるから、まあゆつくり宅の方へと仰るんで伺つたわけですが……」などと云つて上りこむ。程よい頃、「なかなかお歸りがございませんが、色々お忙しいのでせう。いづれまた、と云ふことにして一寸御近所に御電話でもございましたら……」つてな調子でやり出すと妻君は女のことで「いゝえ私がかけて參りませう。」ついでに何か註文でもしてと何心なく家をあける。その際に先程から見屆けておいたものを持つて逃げ去る。一寸馬鹿げたことのやうに思はれるがかうした例は最近實に少くないのである。之は震災後家屋建築が大部分バラックであるため、各戸で財產の保管に注意し、又用心深くして滅多に家をあけないと云ふやうなことゝの[illegible]の如きは、震災前のそれと比較して約一ヶ年に二倍以上の增加を示してゐる。犯人そのものについてみれば、震災前はその半以上八分通りは再犯者であるのに對し、震災後のそれは實に七分が初犯者であるのである。

かやうに犯罪者そのものゝ變化——從つて犯罪方法の變化と云ふことは、犯罪搜査の上にも及ぼし、從來よりは非常に困難を極めるやうになつた。元來探偵と云ふことは、犯罪そのものが豫想のつかない變化性に富んだものであるから、從つて搜査の方法等と云ふことも一言にするわけには行かない。たゞ如何なる場合でも凡そ名探偵と云はれる時に欠かしてはならない條件があるだけである。私は之を二つ擧げ得る。一は即ち犯罪搜査の場合に探偵は先づ何よりも被害者自身の心理と同化しなければならないと云ふことである。被害者の心に盛られた悲憤痛恨敵愾心復讐觀念等々を自分自身の心に盛らなければならない。そして被害者の心となつて燃えなければならないと云ふこと。第二は即ち探偵の技術で犯人の欠點を正確且つ完全に把握することである。

探偵は醫者である。醫師は先づ病名を發見することに苦心するであらう。病名が判明すればそれに從つて投藥するばかりで

あり投網すれば時期を俟つのみである。探偵も苦心する所は先づ犯人は如何なる種類の犯人であるか、そして何者であるかと云ふことである。この二つが完全に行はれれば最早半以上は成就したと云へるだらう。あとは時期を俟つのみである。そしてこの二つが完全に行はれるためには前に擧げた二要件が行はれねばならない。如何なる名探偵もこの二つが完備しない所には行はれない。ごく最近の例で、あの木田少將令孃殺しの一件でもさうである。あれは極めて突發的な事件でしかも犯蹟を殘さぬ實に巧妙なやり口であつた。我々はその欠點を摑むことに如何に苦心したであらうか。或は犯罪現場を中心として一般の風評を捕へ犯人の何者であるかを知らうとし又現場を遠く離れて犯人の欠點を摑まうと碎心した。その結果杉山憲太郎と云ふことが判明したのであるが、それまでの苦心は言語に盡せない。目は凹み身體は衰弱した。而かも係官一同の心を貫いて走るものは「必ず犯人は擧げてみせる。あの可哀想な令孃のために」と云ふ一念であつた。淳良な家庭に育つた健全にも朗らかな女性、――かゝる事件の當事者としてそれは極めて稀れな……被害者としての彼女の位置は當時何人の同情を惹くにも十分であつたらう。まして現場をみた我々係官のすべては期せずして容易に且つ完全に被害者の立場そのものになり得たのである。探偵の第一要件たる被害者の心理に同化することは、あの場合最も理想的に行はれた。

犯人に多數の親戚緣者のあつたこと、そしてそれ等がともすれば犯人を隱匿しやうとするのみならず遠くへ逃さう〱とつとめたこと等によつて、我々に第二の鬼熊事件を豫想させたあの事件が僅か十一日目にして解決出來たのは、この犯罪搜査上の二要件が最も理想的に行はれた結果に外ならない。「一體どうして捕まへましたか」と云ふ質問をよく素人から、稀れには玄人からさへうけるが、之は私たちにとつては奇妙な感じのする質問である。尚最後に一言したいのは、最近流行の探偵小說――あれに現はれる探偵、その心理、方法等と云ふものは、我我實際家からみると非常に滑稽な作りごとでしかないと云ふことである。

（七）精神的缺陷に基く犯罪

菊地甚一

○

犯罪といふ事は人間の社會にだけある一の現象である。故に或る意味に於ては犯罪を爲すことは人間の名譽にもなるといつてよいかも知れない。他の動物には犯罪はない、犯罪となるべき行爲はあるが罪とはならない、其處が人間の偉さである。行爲が犯罪となるといふ事の研究は勿論法律學の問題であつて、殊に刑法學のある所以である。故に近代刑法の研究はその行爲が違法性であるか、又は適法性であるかといふ事によつて犯罪となるや否やが決定されると學說は教へてあるさうである。吾人は一の行爲をなす場合に違法性(Unmössigkeit)がある事は決して人間社會の生活には許されない事である。處で犯罪に均しい行爲であつてもその行爲に違法性がなければ罪とはならない。例へば戰爭中人を殺すことは殺人罪にはならないし、死刑を執行することは又殺人罪を構成しない、行爲は同じであつても罪となるには必ず人間生活に違法である事が條件となるのである。違法性といふのは必ずしも法令に反き、法律に悖るの意味ではなく、人間同士の生活に必要なる約束條件に違背する事の意味になる、尤も法令なり、法律が完全な資格を具へて來たなら此區別は入らない。

處で人間であるが爲めに犯罪である此名譽もある場合には例外の事がある。それは行爲が明かに違法性であり、立派な犯罪であるといふ事は人間には又人間としての責任といふ事があるからであつて、即ち責任能力の如何によつて犯罪の評價が違ふ事になる、換言すれば他の動物と異つて人間には責任能力があるから犯罪といふ事が認めらるゝ事になる。

處で人間には如何なる場合にも同樣に責任を求めらるゝかといふに、さうではない、或る場合には責任を問はれない事があるのである、即ち次の場合である。一體人間に責任を求めるは完全な「人間」でなければならない、不完全な「人間」にはその程度によつて責任の全部かその幾分かを免じたければなら

ないことになるのであるから、玆に人間の評價をすることは責任能力を決定する一の條件となるのであつて、人間の評價は何によつてするかといふに判斷能力を有するや否やによつて行はるゝのである。

故に刑法にも明かに規定してゐる通り、第三十九條の「心神喪失」は罪を論ぜず、「心神耗弱」は罪を輕減する規定がある通りであるが、之等の規定の程度は何によつて標準となるかが何時も問題となる。しかして「心神喪失」「心神耗弱」なる語は法律上の事であつて、醫學的には用ゐられないが、之等に相當する評價をするものは實際醫學者であるから、二者何れに屬するか、健康者即ち二者以外の人間であるかを決定して法官の裁斷に供しなければならないのである。

玆に「心神」といふのはまづ精神の存在の意義に解してよいと思ふ、精神の存在が確かであつて何時も價値判斷が正確に行はれるならば、そは健康者の謂であるが、價値判斷が誤つてゐるか、全く出來ないならばそは明かに病者であると言ひ得る。又價値判斷の能力があつても薄弱である場合には勿論健康者ではなく、病者ではあるが程度の輕い狀態である事が肯かれる筈である、勿論これは成人者であつて年齢による刑事責任を免かるゝ所謂未成人者は問題外である。

然らば以上の如き場合が人間の如何なる狀態にある時に於て認めらるゝかといふに、

第一は後天的に精神の病氣に罹つた場合で、例へば早發生癡呆、麻痺性癡呆、老耄性癡呆、躁鬱病癲癇性精神病、ヒステリー性精神病などの病原はその主なるものである。

第二は先天的に精神發育の阻礙を受けた場合即ち白癡、癡愚、魯鈍等の所謂低能者、

第三は中毒であつて、身體内に外部から藥物其他の有毒物の浸入を受けるか又はある臓器の病氣によつて自己の體内に發生した有害物質の作用に因つて大腦が冒された場合即ち自家中毒であつて、前者は多くアルコール、モルヒネ、コカイン、炭酸瓦斯（酸化炭素も）、鉛毒などで後者は腎臓炎、腸疾患及び腸チブスの合併症に屢々見る。

第四は精神變質者或は中間者と稱する人々で、病人と健康人との中間帶にある移行的の階段にある人格異常者であつて、犯罪學上最も意義の深い關係を有してゐる。例へば腦膜炎、腦實質炎殊に嗜眠性腦炎などの後にその遺殘症となる性格變調、又は飲酒癖の親を持つ神經質小兒、其他遺傳的素質を受けたものであつて、之等變質者の學說及び分類なども學者によりて各違つてゐるが、世に不良少年と稱する一群には最も多い位置を占

めてゐることは注意すべきことで、惡化防止には勿論であるが、發生の原因については社會的意義のある所以である。

○

加藤一郎（假名）はまだ十六歳の少年である。彼の豫審終結決定書を見ると

第一、大正十〇年〇月〇日午前二時頃强盜の目的を以て薪割用鉞その他を携帶し、自宅（札幌市〇十九條〇十〇丁目〇〇番地）を出て同市〇十〇條〇七丁目〇〇〇番地饅頭屋〇井〇太郎方裏口より侵入し〇太郎夫婦に對し右鉞を突付け、金を出せ、出さぬと叩き殺すと脅迫したるも〇太郎が之に應ぜず、同家表店舖より戶外に逃げ出でんとするや被告人は右鉞を揮つて同人に斬り付け同人の後頭部其他數ケ所に重傷を負はしめたる上財物を得ずして其儘逃走したるが、〇太郎は右重傷の結果同年〇月六日死亡するに到りたるものなり。

第二、被告人は右犯行後間もなく札幌を逃走し〇月〇日上京したるが、所持金を使ひ果したる爲め强盜せんことを企て〇月〇日午前一時頃短刀一振信號用拳銃一挺を携帶し東京市淺草公園を徘徊したるものなり云々、とあつて、强盜傷人致死及び强盜豫備罪として公判に附せられたのである。被告の起訴に先だつて、札幌の被害者方では事件發生とゝもに、直に、犯罪捜査の結果、嫌疑者として一人の少年が檢擧された。檢事の起訴によりて豫審が開始された、結局右者に自白があつたゝめに法醫學者の鑑定の結果眞犯人と目されたが、偶然にも一方豫審終結決定所載第二の事實によりて加藤が眞犯人であることが判つたので、免訴になつた。一郎の公判廷に於ける申立ては全部豫審の供述を認めたが、裁判長は、辯護人の申請によつて精神狀態の鑑定を命ずることゝなつて、被告人の精神發育と現在及び犯罪當時の精神狀態を鑑定すべき旨を告げた。

『〇月〇日にはどういふ事をしたか』

「强盜をしました」

『何處でしたか』

「家の近所の饅頭屋に入りました、二三日前からその家に入らうと思つてゐたんです、」

『何故に入る氣になつたか』

「金が欲しいからです、お父さんが僕に小遣を呉れないからです、」

『どういふ風にして入つたか、云つてごらん』

「その晩七時頃に寢まして十二時頃に起きますと雨がすこし降つてゐましたので、丁度よいと思つて、窓から脫けて出ました。夏ですが、お父さんのトンビがありましたからそれを着

て、鳥打帽を被つて饅頭屋の裏から硝子戸をあけて中に入つて、奥に寢てゐる處に行つてオイ起ろ、金を出せ、出さないと叩き斬るぞつていひますとうちは老人ばかりだから辛つと食つてゐます、金なんかありませんつていひますから、グッグッいふな早く出せつていひますと、お爺さんが起きて店の方に行きますから金を出すんだナと思つて隨いて行きました、お爺さんは何でも戸外に出るやうにしますから、後から襟元を摑へて引張つたら僕の左の手を押へたから右の手に持つてゐた鉞で擲りつけましたら倒れたのでそのまゝ逃げて歸りました、家に歸りましたらお母さんと叔父さんが起きてゐて、何處に行つて來たといつたけれども默つてゐたら寢ろといひますから眠つてしまひました、」

『その翌日はどうしたか』

「十時頃に家を出て知つてゐる人から噓をついて金を十圓借りて、晩の六時十五分の汽車で東京に來ましたが、金が無くなつたから、又强盗に入らうと思つてゐた處を不審訊問されて捕つたんです、强盗は男らしいからやりました、」

一郎は小學校の一年のときには相當の成績であつたが、漸々にわるくなつて、辛うじて敎師の手加減で落第だけは免かれ、卒業後商業學校に入學したが多く學校には行かず、公園その他の場所で屢々タカリを働き、飮酒、映畫等に親んだ。被告の小遣錢を呉れないといつて父を疏んずるのもその爲めであつた。每日爲す事もなく暮してゐたが、父親が公用で上京中に犯罪をしたのである。一郎は八つのときに不明の熱を發して二週間ほど意識が不明になつた事があつた、醫師は腦膜炎だといつた、一ケ月位で治つたが、それ以來頭がわるくなつて、遊び事なども他の子供等とは違ひ、無口で、剛情で、腹立ちぽくなり、氣儘で、弟達に對しても時々暴行などもした。學校を退めてからは親のいふ事を聞かず、母が持つてゐる弟達の貯金通帳を持ち出して五十幾圓かを費つた事もあつた。

親鑑定の結果は腦實質炎後の遺殘症としての性格異常者であり、又智能の發達は一般に不良であるが、先天性發育阻止の狀態はない、道德的觀念はあるが、自己の行爲については道德的の反省が足らない、『世の中に出て何をするか』『働きます』『適當な仕事が無かつたならばどうするか』「又强盗をやります」といつて居る。そして父親に對しては最後まで融和せず、「嫌ひです、氣の毒とも何とも思ひません」と裁判長に答へた。そして少年犯罪である事と、鑑定の結果が心神耗弱者に相當するとの理由で、三年以上五年の不定期刑を言ひ渡された。

○

小島常次郎は大正十五年の夏、同居中の許嫁しづ江を刺し殺し、次いでその母親であるかつにも斬りつけて全治四十日の重

傷を負はせた。所轄警察に自首して出たが、その晩假豫審を開き、訊問中、「私は××の人殺しではありません」と口走つたことから當時××町に三回に亘つて起つた强盗殺人事件に結びつけられて取調べられたが、翌日になつて留置場内で、「何？斬り殺す？殺せ！」といつて非常に暴れた、そして其日のうちに刑務所に收容されて、その年の秋豫審が終結決定になつて、地方裁判所の公判に附せられたが、辯護人の申請に係る精神鑑定も却下され、結局殺人罪として徴役十五年の言渡しを受けた。翌年二月控訴審で精神鑑定が許可され、その結果被告は、大正十五年一月頃から早發性癡呆に罹り、自分は××町の殺人事件について犯人の嫌疑を受けて常に刑事に尾行されてゐるといふ追跡妄想を懐き、電車の中や通勤の途中待伏せをして自分に隨いて來るといひ、又或るときは隣の家（小料理屋）に刑事が飯を食ひに上つて自分の事を評議してゐるといつて實際に立つて耳を欹てたりした。(幻聽)

常次郎は最初かつの家に下宿して會社に通つてゐるうちに夫に死別れたかつと關係して共同出資をして雜貨店を開いた。そして店の方はかつに任せ、自分は會社に勤めて居た。かつの一人娘しづ江は某女學校の二年生であつたが、かつの意思で常次郎と夫婦にする約束になつてゐたが、常次郎は結婚せぬうちに二度程しづ江を冒した。そしてかつに早く夫婦にして呉れと迫つたが、學校もある事であり、まだ年も僅か十六であるからとかつは承諾を與へなかつた。六月九日の午後、常次郎が會社から歸ると、郷里の日光町から母親が妹の嫁入り先きに來たといふ通知をうけて出てゆき、夜十時過ぎに歸つた。途々考へて刑事には追けられるし、しづ江と夫婦にもなれないしするからしづ江を殺して自分も死らうと決心してその晩機會を窺つたが果さなかつた。

翌朝になつて母にも常次郎の樣子が變なので、近所に住むでゐるかつの弟に來て呉れる樣にとしづ江が迎ひに行つたが後に行くといふ事で歸つて來た。間もなく弟の娘が代りに來て客が來て今は行かれないから、それに商賣の事で自働車を持つてものを取りに來た云々といふ話をしてゐるのを常次郎が隣の部屋で聞いて自働車で母子が逃亡するものと考へて突然短刀でしづ江が學校の復習をしてゐる處を後から頭部を刺し殺した。

「警察で暴れたのは、巡査が相談をして私を斬り殺すといつてゐたので恐くなつて暴れました、これからラジオで、××の人殺しは彼奴だといふので、私ではありませんて怒鳴りました」(幻聽)といつてゐた。鑑定の結果は早發性癡呆に罹つてゐる爲めの犯罪であつて、價値判斷を全く缺くものでその程度は心神喪失に相當して、全く責任能力が無いものであるといふ事を認められ、無罪の言渡を受けた。

文樂物語

初代豊竹古靱太夫斬殺事その他

三宅周太郎

逝事篇（その二）

六、初代、二代目（當代）古靱太夫及び故清六の話

初代古靱太夫（文政十年生れ。本名木村彌七。）は、初め豆太夫と稱して、初代豊竹靱太夫の弟子であつた。性來非凡の才能を備へてゐて、短身弱肉の人でありながら、夙に同輩から拔んでてゐた。自然、人は彼を敬して遠ざけた。同時に彼も亦一種の名人氣質から身を持すに高くて、環境との融和疏通に缺くる憾みはあつたのである。

併し、無論、彼は師靱太夫の門下では第一の秀才であつた。師匠は彼を非常に認めはしてゐた。が、同門で彼の弟分の弟子に

豊竹富司太夫と云ふ人があつた。明治維新の大業の前後、豆太夫は江戸の新しい東京にゐた。その留守中、明治二年八月、御靈境内の小屋で右の富司太夫は豆太夫に無斷の相談なしで、その以前に沒してゐた師の名前靱太夫を襲名した。即ち、當時、紋下には竹本越太夫、前狂言が「木下蔭狹間合戰」で、切狂言の三勝半七の「酒屋」を語つて二代目豊竹靱太夫となつたのである。

豆太夫はやがて歸阪した。すると彼のゐない中に靱太夫が既に出來てしまつてゐる。順序技倆から云つて、その師の名は當然彼豆太夫が襲ふべきは、周圍も許し、彼も許してゐた事實であつた。それが世才に長けた人の手に渡つてしまつてゐたのである。豆太夫は持前の氣質でかつと怒つた。で、俺はそんな名は

入らない。いくら二代目の綱太夫が出來た所で、彼の方が古い綱太夫だぞと云つて、自ら初代豐竹古靱太夫と名のつた。時に明治三年。古靱太夫の名はこのやうに自ら出と入とに、反抗し、憤怒して名づけた名跡なのである。

彼がかう云ふ殆ど例のない行爲をしても、世は彼に逆らはなかつた。なぜと云つて、當時の越路太夫、後の攝津大掾の如き美音であつても、到底、彼の敵ではなかつた。それ所か當時の權威、明治淨瑠璃史上の太夫の第一人者と云ふべき、五代目春太夫をさへ時には見事に壓倒したからである。即ち、この古靱太夫が得意の「妹背の門松」の「質店」や「酒屋」を語ると、松島の小屋に出てゐたその春太夫の方が、必ず不入りになつた。云はば日の下開山の横綱を、彼が立派に投げ倒したわけである。

その癖、彼は文字の素養に乏しく、字が讀めなかつたとさへ、云はれてゐる。そして聲も小さくて、床に上ると太向の柱を目あてに、そこへ向つて聲を放つたと傳へられてゐる。小音だけに、普通では聲の通らぬ憂ひがあるので、さう云ふ特殊な方法でその缺點から逃れようとしたものらしい。語り物はその性格同然に、皮肉な物に妙を得てゐた。が、右の越路太夫が、美音で賣り物にしてゐた所の「十種香」のやうなものを語つて、十分この聲を壓した。それも見山で一寸變つてゐる。この初めの方の濡衣の言葉の「お前の忌日命日を、弔ふ人も情なや」あたりだけで、既に聽衆の涙を誘つたさうである。(今の古靱太夫の直話。)但し、考へて見ると、これは必ずしも傳説的誇張ではあるまい。兎に角、濡衣と云へば夫を勝頼の身代りにたてた可憐な女性である。さう考へるとこの言葉は若く美しい未亡人の眞情吐露である故に、當然、何よりも悲しかるべきであらう。が、派手な「十種香」中の、こんな些末の言詞で人の目を熱くさせるなど、結局、人間の哀愁苦惱をよく口に表出し得たからであらう。

彼はこの名人と、この氣質とで主として自分で一座を統率してゐた。そして一門だけで外の黨派の人々を加へなかつた。その孤軍でゐて立派に當代のすべてに對峙して遜色がなかつた。彼の一座は明治初期に御靈神社裏門土田の小屋にゐた。(これは後年の文樂の前身の小屋と見て差支ない。ある書物によるとこの土田の席を後の十七年に買收して今の文樂が出來たとの説があるからだ。)が、この頃、彼は屢々地方巡業に出た。その方が彼には收入が多かつたからと云はれてゐる。彼をさう云ふ物慾の烈しい人と見る者が尠からずあつた。その眞僞は別として、彼が旅興行によく出たのは事實であつた。で、土田の小屋の表方

や關係者は自然衣食に窮した。彼がその座の興行に出ない以上、生活の法を絕たれたも同樣であつたからである。その中、出方頭の某が休座の生計に困つた餘り、借金が嵩んで債鬼に攻められてゐた。その苦しさで、たうとうその出方頭は土田の小屋の梁に首をくくつて死んでしまつた。土田の席の內部の者にこれを、古靱太夫のためと云ひ觸らす人が出た。間接に古靱太夫がその者を死に至らしめたとの理由を、無理こじつけにする聲が出かけたのである。

この事件の後、明治十一年二月二十四日である。古靱太夫はこの土田の席で「蘆屋道滿大內鑑」の「葛の葉の子別れ」を語つてゐた。この廿四日は丁度その興行の千秋樂とかに當つてゐたと云ふ。彼は語り場をすませてから樂屋風呂へは入りに來た。と、その風呂の中に別に一人だけ入浴してゐたのが、前號に述べた所の、今の文樂での一番の古老、人形遣ひの七十三翁吉田冠四氏であつた。まだ若かつた冠四氏と古靱太夫は一寸談話をまぢへたりして先きに湯から上つた。そして自分の樂屋の部屋へ歸らうとして、風呂場の傍の二階へ通じる梯子段を上りかけた。と、不意に横手の薄暗い中から一人の男が飛び出した。きらりと何かが閃めいた。その刹那、冠四氏が自分の着物とふんどしとを入れてゐた風呂場のつゞらの中へ、どすんと大きな音がしたと思ふと、人間の片腕が一本落ちて來た。あつと思つて冠四氏がつゞらの中を風呂の中から見ると、片腕は丁度ふんどしの眞ん中へ落ちてゐた。見る見る白いさらしが眞つ赤になる。と、梯子の下に古靱太夫の身體が落ちてゐる。そして「かぢ德め!」と蟲の息で叫ぶのが冠四氏の耳には入つた。

土田の小屋は忽ち大騷ぎになつた。古靱太夫は片腕をもぎとられた上、銳利な刃物で殺されて、すぐと絕命した。年漸く五十二歲である。稀に見る鬼才の、缺點は多少名人氣質に偏したとは云へ、當時にあつてさへ、名人上手と許された人であつた。しかも、行年五十二歲とは、これからが眞の名人の境に入るべき、義太夫道にとつては正に成熟期の絕頂であつたのである。

よかれ惡しかれ、敵も多いが味方も多い古靱太夫の斬殺事である。それに一と言「かぢ德め!」と叫んだので加害者はかぢ德と見ていゝので事は更に人の興味を集めた。と云ふのはこの通稱かぢ德なる男は、矢張り土田の席の大道具方の一人であつた。さういふ職業の男だけに考へは單純だ。先きに出方頭がくびれて死んだのは、全く古靱太夫が面倒を見てやらぬからだと云ふ風に一圖に思ひ詰めた。そしてひどく古靱太夫を恨んだ。つまり、その出方頭の敵を討つ、とそんな氣持で、あたら天才同然の古靱太夫を殺してしまつたのである。この結果になつ

て見ると、大坂の斯界は勿論、土田の席一同もかぢ德の行爲を憎んだ。で、即夜から捜索に人は八方に走つた。が、どこにもかぢ德の姿は見えない。併し、三日目の廿六日になつて、當時普請中であつた御靈神社の床下に隱れてゐたのが分つた。それもこの思ひ切つた行ひをする男だけに、流石に覺悟は立派で、その床下から死骸となつて現はれた。かぢ德は自殺して果ててゐたのである。

この事實は、今も猶斯道の特異な話柄として殘つてゐる。噂好きの大坂だけに、この時分、かぢ德が梯子の途中で、古靱太夫を大工の使ふ大坂で云ふチョンナを以て切りかけてゐる繪が、恰も、今日の號外のやうに市中に賣れ渡つたさうである。今の文樂の奥役の某六十翁曰く「あの時はえらいことでしたぜ。私等の子供の時分でしたが、人が寄るとさはると「かぢ德」と云つてゐたのを覺えてゐます。」

最後に、この斬殺事實だけは、當時現場の目擊者吉田冠四氏の實話であるのをつけ加へておく。かう云ふ特異事は眞を誤り傳へられ易い。が、文樂としてこの事件の古い證人の人形遣ひを、今以て殘してゐるのは、世界が世界だけに何となく床しい氣がすると思ふ。

×　　×



文樂の長老吉田冠四氏。此人寫眞は昔寫したガラスの箱入りのものよりなし。仕方なく土佐太夫門下、昔市村座の床の鏡太夫にこれを寫して貰ふ。

今の古靱太夫は、この不幸な名人の名をついだその二代目である。二代目古靱太夫は、不思議に初代が刺されて死んだのと同じ年、明治十一年に東京市淺草馬道に生れた。即ち、義太夫の太夫には珍しく江戸つ兒である。江戸生粹の藝で同じく江戸つ兒と見える役者澤村源之助が、生れは大坂と云ふのと共に珍しい話である。源之助は例へ生れだけにしろ、大阪の産を多少苦にしてゐると聞く。大坂育ちでないと幅の利かぬ斯道で、江戸つ兒の今の古靱太夫と、いづれもその生ひ立ちを交換すれば、双方幸福の感がある。

扨、本題に返つて、古靱太夫の生家は商人だ。が、親が藝好きで彼を役者にしようとして、四才の時、先代片岡我童が淺草に住んでゐた關係上、養子同樣にしてその門に入つた。七才の時片岡銀杏の藝名で千歳座へ出勤した。出し物は「祇園祭禮信仰記」の「是濟住家の場」である。故團藏の是濟、右の我童の久吉、故家橘の新作で、彼は輝若丸を勤めた。今の羽左衛門などはこの舞台に、矢張り子役として出てゐたさうである。

が、子供ながら彼は役者を嫌つた。子供心に顏へ白粉をべたべたぬられるのが嫌ひでならなかつたと云ふ。それで我童の家から暇を貰つて歸つて來た。當時、淺草區役所裏に占ひ師でゐて、義太夫の師匠をしてゐた政子太夫の門に入つて義太夫を習つた。所が、この方がひどく好きだつたので、十二才の明治廿二年に大坂へ來て、先代津太夫の門に入つた。そしてつばめ太夫の名を貰つて文樂の大序の番附の末席にのつた。

四十二年四月、今の文樂が代々の經營者植村文樂軒の手を離れて、松竹合名會社に買收せられた時である。その最初の興行で、彼は二代目古靱太夫の名を襲つた。初代が前述の理由で死んだために、斯道では不吉な名前として名人の名とは知つてゐながら、誰も躊躇してそれ迄は取り合はなかつた。即ち、三十二年間空家の名跡を、彼は進んで襲名した。語り物は攝津大掾の「先代萩」の「御殿」で、彼はその前の斯道で云ふタテ端場の「竹の間」を語つて披露をした。無論、これは三十才を出たばかりの彼ながら、實に多士濟々であつた當時の文樂座で、既に有望視せられてゐたからである。

後、すぐと近頃の三味線の名手、故三代目鶴澤清六を、自分の三味線に得た。故清六はいい意味の名人氣質を完備した人であつたのは多く人の知る點である。藝の愛齊以外、浮世の望みに淡い人で、特に、後進に深切で、その上藝の監督指導に長じてゐた。で、若き古靱太夫には二人とたいよき師匠で年上の女房役であつた。二人は勿論意氣投合した。清六はさう云ふ人物だけに、所謂ヒキイを多く持つてゐた。が、性來の下戸で客に呼ばれる度に、古靱を瓢箪として携へて行つたと云ふのである。即ち、古靱は青年活氣の上に酒好きだつたので、清六が酒席などで盃を貰ふと、飲むと見せかけておいて、そつと古靱の脇におく。と、いつも二人並んで座るのが法だけに、古靱はそつと傍から盃をとつて口へ移しておく。清六は安んじていくらでも盃を貰ふ。古靱はそれを一々己が口へあけておく。座はしらけない。若き古靱が、清六愛用の酒を入れる器の瓢箪であつたのはこのわけからである。

かう云ふ關係で修業をしてゐる中、大正二年四月、攝津大掾

が引退をする記念興行の時、古靱太夫は初めて一段の出し物を許された。即ち、所謂ツケ物として切狂言に「常坂」を語つたのである。ここに至つて古靱太夫は文樂の立派な大きな太夫の位に上つた事になる。そして現在の古靱太夫は、彼自身今日あるのは、全く右の先代清六と、故名庭弦阿彌との恩惠だと云つてゐる。何しろ、この清六は、攝津大掾より不遇には終つたが、あらゆる實質が優るとも一切劣らぬ一方の近世の太夫の天才的快傑、先代大隅太夫の糸を勤めて決して讓らなかつた秀才だ。先代大隅太夫の三味線は明治三十一年その死に至るまで、斯道の「神」と呼ばれる名人團平であつたのだ。その沒後、明治三十七年五月、攝津大掾が、その前名越路太夫から改名して「大掾」號の披露を文樂で行つた。その晴れの披露興行に招かれて、彼大隅は一時文樂へ入座した。時にその大隅太夫の糸を勤めるのは、この清六、當時は未だ鶴澤叶と稱してゐた人より外になかつた位である。傲慢自尊で一生を貫いた太隅太夫の相手を若年で兎に角勤め了はせた人だ。しかも、その手腕を持ちつつ、奇特な研究家であつた。いつも古靱の語り物がきまると、清六は必ず新に印(しるし)のは入らない五行本の新本を求めた。そして兎に角先輩であり、紋下攝津大掾の三味線ひきと云ふ理由で、廣助(後に名庭弦阿彌。)の自宅を訪ねた。耳と手とにたこの出來てゐるものでも、その新しい白い本をひろげて、廣助に語つて聞かせて貰ふ。そしてよく覺えて歸つてから、一應古靱に語つて聞かせる。その後で清六は同じ語り物で、過去で自分がいろいろの太夫や、いろいろの口傳で印を入れてゐる本をありたけ持つて來る。その上で古靱と二人で相談する。ここにかういふ節がある。こんな型がある。口傳がある。と云つた風に何冊かに亙り、一方、廣助の教へを土台としてそれ等のすべてを調べるのだ。結局、全部のいい所を集めて愈々の台本にする。廣助にはその報告をして許可と訂正とを乞つておく。かうして清六は古靱太夫を文樂の床の上に上ぼしてゐたのである。

この清六は「鬼腕」と呼ばれたやうないい腕の持ち主であつた。が、常にこの丹念な研鑽を怠らなかつたのである。私など今迄、或は、現在でさへ、古靱太夫の語り物を聞いてゐると、所々、特殊な語り口があるのに氣をひかれてゐた。義太夫の上手下手より、それが私などにある勉強になつた。殊に、芝居の知識から考へると、難解な義太夫ではあるが、そこに大抵ある意見と解釋との妙を見出すのが愉快であつた。併し、親しく古靱太夫に會つて聞いて見ると、それは誠に道理至極であつた。時々、古靱のみしかやらない妙趣ある特異な演奏能力は、このやうに主として清六が、古靱の才能と相俟つて用意し、鞭撻し

てゐたからである。

一方、古靱太夫自身として、故淸六の糸になつてから語り口を殆ど一變しなくてはならぬ結果になつたと云つてゐる。彼が淸六を得る迄は、文樂系の太夫だけに、三味線は自然古い廣助系統であつた。この廣助は弦阿彌になつた廣助のも一つ前の廣助である。今日の三味線の傳統はこの古い廣助と、例の名人團平との二つの流れを汲んでゐると見る論が穩當である。が、勿論、その廣助は團平より劣つた。團平は近代藝術の根本義と共通してゐるやうな、人間の骨と肉とに分け入る「感情」と「力」とを理想として、二本の腕でそのすべてを演奏し得た。それから見ると廣助の方は、例へば、攝津大掾の淨瑠璃のやうに、派手で明るく晦澁を止めない現世的な流義であつた。その双方の相違として一例をあげて見る。「御所櫻」の「三段目」辨慶上使の一番聲を張る所だ。辨慶が「太郎夫婦のゐやらずばと泣くより泣かぬ苦しさは、ナコリヤ」と言葉でここ迄云つて來る。と、三味線がチチンとは入る。それから節になつて「鳴く蟬よりもなかなかに」の件になる。これを廣助系で行くと、辨慶の言葉で「――苦しさは、ナコリヤ」と切ると、三味線がオーッと大きくかけ聲を入れてくれる。それからチチンと糸がは入るので自然そこに右のかけ聲の間がある。で、太夫はお湯をのめる。そして云はば一息してから「鳴く蟬よりも」と出られる。これは比較的樂である。從つて、その節になつてからの鳴く蟬を奇麗に云へるわけだ。古靱としても、故淸六にかかる迄はかうして語つてゐたのであつた。

所が、團平の方はさうでない。右の辨慶の言葉があつて、ナコリヤと云ふと、成程、三味線はかけ聲は入れはする。が、それは廣助の方が「オーッ」と三つの音調で云ふのに對して、この方は「オッ」のみで短い。二つの音調、或は、もつと力がは入つてゐて「オ」の一音調しかない位だ。そして一瞬間のすきもなくすぐと撥は三味線の皮も破けよとばかり「チチン」とは入つてしまふ。で、全く一秒の休息もなしに、太夫はすぐと「鳴く蟬よりも」と出なければならぬ。勿論、この方だと湯などのむひまはない。即ち、ナコリヤ、オ、チチン「鳴く蟬」のみで、全く間髮を入れぬ緊張を以て貫く。一方のオーッ、湯をのむ、チチン、ゆつくりと「鳴く蟬」と出られるのと大變な相違である。

故淸六は既に云つたやうに、一時、團平亡き後の大隅をひいた人だけに、當然、團平流である。自然、この團平流で古靱を仕込んだ。古靱も初めはこのやり方では腹がねぢられると思つた位、苦しかつたさうだ。が、それで修業を通すと却つて渾身

の力が出て來て、湯を口にしなくても、我ながら十分に懸命の努力を果たした快感にひたれ出したさうである。——これを聽衆として我々が考へても、この二つの違つたやり方が、どんなに我々に感激の相違を來たすものか、説明する迄もないであらう。辨慶のこの一節の如き、婦女子の唄を唄ふ心境でない。一世の我慢の心が破れて子の愛に泣くのだ。オーツの奇麗なかけ聲とか、湯、そんなものが、この烈しい感動の前には、全くあり得ぬ筈だからである。

幸福にも、古靱太夫はその改名後、故清六のかうした指導で進んで來たのである。清六を得て後、全身の心血をそそぐ藝の上の陶醉境を初めて知り得たと自ら語つてゐる。餘事ながら、太夫が湯をのむのにも、いろいろ議論がある。が、古靱太夫も清六を得て後、右のやうな稽古でならされて、故越路太夫のやうに、一段の淨瑠璃の中、ほんの一二ヶ所湯を口にするとそれで通せるやうになつたと云つてゐる。併し、この名人の域には入つたよき人三代目清六は、大正十一年正月、未だ五十五才の藝の上で前途のある身で、ひよつくり死んでしまつた。

三世清六を失ひ、その翌々年弦阿彌に逝かれた古靱太夫の不幸は、それは獨り彼自身のみのものでない。文樂としても亦大きな不幸の筈である。今は四代目の若い清六を相手にしてゐる。が、彼が今の清六と文樂でやるものの下稽古を自宅でやる時など、よく清六を自分の持つてゐる蓄音器の前へつれて行く。古靱太夫は蓄音器屋の店にあるやうな、素張らしく大きい蓄音器を座敷に備へつけてゐるのだ。そして文樂で語る場合に、その語り物に、もし先代清六の糸で自分がレコードに入れてゐるものがあると、それを蓄音器にかける。そして今の若い清六と一緒に改めてぢつとそれを聞く。故清六の糸が、丸で金屬のやうな響きを出すのを聞いてゐる。そして清六に「あの通りに彈いてんか。」と云ふのがおきまりださうである、今の清六が、古靱のかう云ふ心持に對して奮ひ立つのであらうか、若いながら着々進境を見せてゐるのは世人の知る所である。

このやうに二代目古靱太夫は、名人でゐて早く倒れた古靱の名を襲つた。研究家の名手三代目清六の薫陶を受けた。故實家名庭弦阿彌の指導をも得た。そして今以て自家の蓄音器の前で、故清六の美妙な糸をなつかしんで低徊してゐる。この經歴の幸運、周圍の恵みで得た斯道の深い造詣、それに自らその人が持つてゐる斯道への愛着、これ等を打つて一丸として將來の大成を期すべきは、寧ろ、その身の當然な義務だと思ふ。殊に、寂寞そのものの文樂の現狀に對して、この人あたりの責任使命の重大は今更ら語る迄はないと思ふ。

七、お客奇人二

三四年前の御靈文樂時代に、長い間何年となく引續いてくる一人の客があつた。併し、當時はもう六十位の爺さんになつてゐた。その人は長年、いつの興行の時でも、太夫が出る床のすぐ下の高土間（大坂で云ふ出孫。）の一へ來る。そして一人でいつもぢつと聞いてゐる。所が、どうかすると、すぐ頭の上に出てゐる太夫が、眞つ赤になつて一心不亂に語つてゐる最中でも、くるりと後をむいてしまふ。併し、時によるとこの反對で、靜に瞑目端座して熱心に聞く。これをこの人は長い年月の間續けた。場所がいつもきまつてゐる。それに行動が、後をむくか、靜に諦聽するか、いづれかにきまつてゐるのである。

で、いつの間にかこれが樂屋中の問題になつた。早い時間に出る太夫などが、もしこの人の姿を見つけたら、樂屋へ入るなり、すぐに樂屋一同へ告げて歩く。「今日はいつものおつさんが來てますぜ。」と云ふやうなわけになる。千軍萬場の太夫さんへ、さうと知ると何となく安心出來ない。床へ上る。語りながらその人がどうするか氣になつてならない。引込んで來ると外の太夫が、どうだ今日は聞いてゐたか、後をむいたかと待つてゐて訊ねる騷ぎである。或は、床から下りて來る役すみの太夫は「今日はよく聞いてくれた。」と云つて喜ぶ。正直な太夫は「尻や。尻や。」と云つて頭をかいてゐる。即ち、その人が一方のやり方でくるりと後をむいてしまつたからであらう。

自然、文樂の樂屋では、この爺さんの無言の行を、自分達の技藝の成績の測量器にしてしまつた。興行毎に必ず一度はこの人の姿を見受ける。と、「今日はえらいこつちや。」などと云ふ迄に樂屋中では有名になつてゐた。これは少々大げさのやうに聞えるだらう。併し、義太夫の太夫は一體に無邪氣で何事にも罪のない凯合の人が多い。そのためであらう。これは今の文樂の一流の太夫の實話である。天下の紋下さへ、實際に、この一老爺のお尻を恐れてゐた。逆にその瞑目端座を見ると子供のやうに喜んだのであつた。

數年前、古靱太夫が、「菅原」の「道明寺」を語つた時である。一日、例の如くその爺さんがいつもの場所へ來てゐる。古靱もおやおやと思ひながら、口上がすんだので靜に本をあけようとして見台に手を出しかけた。と、すぐ目と鼻との床の下の場所から、いきなり爺さんが立ち上つた。そして「これだけを聞きに來たんやぜ、ええか惡いか聞いて見んと分らんが。」と、つぶやくやうに云ふのだ、それから坐り直して聽き入る姿勢をとつた。尤も、長年かう云ふ所へ出入りしてゐる人だけに、野良聲

でどなつて、場内の迷惑になるやうな調子ではなかつたが、さう低い聲でなく云ふので、床の上にゐる古靱と清六とはかなり面喰つたと云ふ。

但し、この「道明寺」で爺さんはお尻をむけなかつた。が、流石にこの爺さんで古靱の「道明寺」は近來の當りになつたのである。又この爺さんはも一つ癖があつた。文樂のあるいい太夫であるが、その人が床へ上ると、きまつて後をむいてしまふ。その太夫のみは好かれ惡しかれ聞かうとしなかつたらしい。甚しい時は場所がすいてゐると、ころりと横になつてしまつた。一流の太夫なのであるが、その人を妙に好まなかつたらしい。これも長年の事なので內部では有名になつてゐた。かう云ふ人であつたが、二三年前から、この爺さんの姿が見えぬと思つたら、死んでしまつてゐた。よく聞いて見るとざこばの魚德と云ふ肴屋のおやぢであつたさうである。

これも矢張りその年輩の爺さんであつた。この人の方は長年の興行每に二度きまつて來る。一度は初日にやつて來る。そして中日頃に又一度來るのだ。それで大抵そのいづれかの時に、表の勘定場に內部の相當な地位の人がゐると見ると、つかつかと傍へやつて來る。そして種々太夫や三味線の批評をするのだ。しかも、それが大抵は正鵠を射てゐる。どうあらうと一と見識持つてゐた。故越路太夫は立派な名人であつたが、さう云ふ人であつても、一つだけ「笑ひ」がまづい嫌ひがあつた。さう云ふ一寸分り難い人の氣のつかぬ急所を、見事に指摘した。越路を批評してさう云ふ機微を穿つた意見を吐いた。この人はさうして二度來る事によつて分るやうに、相當な身分の人であつた。それに批評家としてさう云ふ一風變つたやり方はするが自分の意見は持つてゐた。で、この方は樂屋中でいつの間にか「うるさい人」の方に數へ出した。その方面で、「うるさい人」とは、恐らく我々批評家を指して云ふのであらう。が、この人も正にそれに數へられてゐた。

で、初日にこの人が來ると、津太夫門下では津駒太夫、古靱太夫門下ではつばめ太夫、越路太夫門下では故越登太夫と云ふ風に、若い弟子で人仲で口のきける者をそれぞれの師匠が命じて、必ず挨拶に出したものである。さう云ふ客の中の一權威としてすべてが幾分の敬意を拂ふ迄になつてゐた。が、この爺さんも二三年前に死んださうだ。但し、この人は北濱の有名な料理屋魚岩の主人であつたと聞いてゐる。

八、一人一代

我が劇壇の俳優の名門では、代々その稼業を受けついでゐ

る。片岡家の十一代、尾上家の六代、市川家の十代などよく人の知る所である。併し、それ以外、血緣の子孫代々が何代と長く續いてゐる方が舊劇界では却つて普通である。

所が、淨瑠璃の太夫の方では、殆んどから云ふ例がない。(三味線の方は、尠いながら父子相傳は時に見當るが。)尤も、例外はある。例へば、當時、天下の美音と唄はれた初代豐竹駒太夫(享保二十年斯界に出、安永六年沒。)と、その實子生駒太夫の如きである。これは後に親の名をついで二代目駒太夫となつた。この初代二代目の親子の駒太夫は、共に美音で名手であつた。殊に、初代の方は淺田一鳥外四人合作の「祇園祭禮信仰記」の「金閣寺」をよく語り生かして、書卸しと同時に、三年越しの大入をとつた。竹本座に對抗して豐竹座三十年の盛運は、この太夫一人の力として今に歴史の上に輝いてゐる。二代目も亦親に劣らなかつた。併し、このやうな肉身で續いて義太夫の名手を出してゐる例は殆ど數は尠い。殊に、この享保以後の徳川時代の中期末期から明治へかかる程尠い。後は何代目と稱しても、多くそれは他人の弟子、或は、丸で緣のない他人の手によつて相續せられてゐるのみだ。即ち、門弟中の秀才か、他の名手かが、それ相應の力量によつて、それぞれよき名をついだ迄である。

それ以上、不思議なのは、義太夫のやうな專門的藝道でゐて、その太夫のみは大部分局外者の素人から出てゐる事實である。前述の名門で斯道に肉身の二代三代がないばかりでない。もつと根本的に、太夫は全く義太夫的因緣のない、義太夫的教養のない家庭からひよつくり出現してゐる事實である。

具體的に云ふと、初代古靱太夫の所で云つたやうに、明治初期の巨人、明治十年に沒した五代目竹本春太夫である。一寸註を加へると、この門から攝津大掾の越路と、先代大隅太夫の明治期の二偉人が出た。もしこの春太夫がなかつたら、斯道は明治に入る迄に亡んだと思へる位、この人は現在の斯道の中興の祖になつてゐる。故に、今の文樂ではこの五代目春太夫を一家の長として仰いでゐる。今の劇壇に於ける九代目團十郎に似た所の、太夫としての「理想」になつてゐる大家なのである。

その「理想」五代目春太夫すら、義太夫に何の緣故もない凡人の家から出た。全くのづぶの素人から出た。生れは泉州堺の人、瓦商大黑屋の伜である。性重厚、體重三十貫に近かつた。近親の者は力士になれと進めた。が、本人は性來の義太夫好きで、素人として稽古をしてゐたので、太夫にならうとした。勿論、體力相當大變な聲量があつた。が、親はそれを許さない。そこで若年の彼は當時、幕末時代とて某大名が參勤交代で江戸

へ赴く時、密かに荷物持に雇はれて江戸へ行つた。そして轉々として遂に四代目春太夫の門に入つて、その太夫の名を貰つて太夫となつた。

一說に、彼は一時風呂屋の三助をしてゐたと傳へられてゐる。三助をしたり、瓦屋の倅でゐて、遂に明治初期の第一人者となつたのである。彼が七十何才の長壽を全うして沒する迄の、名聲のある文樂の紋下の地位は、後年、門弟とは云へ、あかの他人の攝津大掾の越路に移つてゐる。かうして彼は突如として彗星のやうに斯界に素人から現はれて、しかも、奇麗に一代限りで消失してゐるのである。

攝津大掾も亦同じくづぶの素人である。大坂の生れ、大工の子。（一說には塗物師の子。）矢張り性來の義太夫好きで、稼業を嫌つて先づ三味線ひきにならうとした。最初三代目野澤吉兵衛に見込まれて、太夫に仕立てゝ斯道に出されたのである。そして一方、右の春太夫の門に入つて後年の名聲を馳せた。が、圓滿の君子攝津大掾さへ、生ひ立ちは斯道に緣もゆかりもない、素町人の一義太夫狂にすぎなかつたのである。

この攝津大掾と反對な不遇の巨人、私が少年時に數度聞いて異様な天才的化物の印象を與へられてゐる尊敬すべき先代大隅太夫も亦づぶの素人出である。大坂府池田の生れ、鍛冶屋の倅である。兄が稼業をやつてくれるのを幸、幼少から義太夫に狂つて、大坂に出て春太夫の門に入つた。そして春子太夫として斯道に出たのである。

近年の越路太夫も同じである。堺の生れ。家は餅商、幼時から稼業を嫌つて、義太夫を好んだ。三味線の名手豐澤團七に仕込まれて、十四才で攝津大掾の門に入つた。（註、以上の場合、素人出と云つたのは、素人淨瑠璃語りの意味ではない。家庭だけが素人と云ふ意味だ。そして恐く少年時より斯道に入つたので所謂中年者の素人出の意味ではない。）

現在の津太夫にしても、全くの素人出だ。九州田川郡の一寒村の百姓の倅である。それが十何才で大坂に出て斯道へは入つた人にすぎない。土佐太夫にしても同様である。土佐安藝郡安田村元來は農、後、丸新と云ふ料理屋を營んだ人の倅である。明治二十一年東上して、故後藤象次郎伯の書生にさせられた。親は彼を政治家にする積りでゐた。それが好んで大隅太夫の門に入つて斯道に出た。古靱太夫も亦既記の如く淺草の一町人出である。

かうして幕末から明治大正昭和の現今迄、名ある鬼才秀才を調べて見ても、殆ど一様に一介の市井人のみにすぎない。目に一丁字がなくて、後に天下の能筆となつたと云ふ傳說の小野道風同然に、すべて斯道の後年の巨人は、耳と頭とに少しの義太夫的文字はなかつたのである。三味線のテンもツンも辨へぬ野暮天、或は、無智同様の産であつたのである。もし義太夫が好

きと云ふ血液がなかつたら、彼等は湯屋の三助、大工職、鍛冶職、餅屋、百姓、田舎の政治屋で終つた人々である。失禮ながらさう云ふ田夫野人が、不意に飛び出す。ぽつり死ぬ。又、飛び出す。死ぬ。と、これを繰り返して今日に及んでゐるばかりである。そこに何等因果關係はない。悉く他人と他人、情實もなければ、執着もない。全く異つた一つの偉大な個性同志のみが、緣故なく集つて、光つては消え、消えては光つてゐるだけである。屢々、云つた如く誰が何代目と號しても、全部その血と性とは知らぬ同志の他人の連續である。

即ち、舊劇界が、名家の血、相當な後援、父子の恩惠さへあれば、大抵の大根でも遂に一方の將たり得てゐる事實とは正反對である。そしてこの方は親子の愛、門閥、後天的な援助は結局は効をなしてゐない。又、俳優のやうにさう云ふ後天的條件を利用して、一方の將に無理からでも祭り上げた實例はない。きまつて他人の名人から、他人の名人へ移つてゐる。つまり、大體に一人一代のみで終始してゐるのである。かう考へて行くと、義太夫とは男性的な徹底實力主義の藝術と思つて差支ない。一歩進んで眞の才能至上主義の藝術でないかと思はれて來る。

話は變る。明治期の大力士横綱大砲に、その子二世大砲はない。常陸山にその子常陸山はない。荒岩然り、太刀山然りである。これと一緒に論じるのでない。が、文學も亦その方ではあるまいか。廣津柳浪氏父子に、親子相傳の文士があるのみで、尾崎紅葉に二代はない。鷗外然り、漱石然りである。いくら文學が常識的になるとはいへ、禮を欠く言葉のやうであるが、二代目德田秋聲氏、二代目里見弴氏はあらうとは思はれないのである。

かう見て行くと、環境の恵み、後天的人爲で一生を支配出來ぬものが、我等の手近に三つある。義太夫と力士と文士と、こんな結論になる。いづれも實力と才能とで徹底する外ない點に、感激悲壯が尠くない。そして義太夫語りは、文士に似て大抵は親に反き、家を捨てて走つた所謂不孝者の方から、幾多の巨人を輩出してゐる。

但し、外の二つが結論は才力のみで貫き得るのと違つて、義太夫は天才藝術と云ひ條、一應再應凡人の仕事である點を見逃してはならない。尾紅崎葉は二十三才の若年で名作「色懺悔」を書いた。谷崎潤一郎氏は二十四五才で傑作「飈風(ひやう)」を著いた。相撲も亦その年頃で強くなつた人は幾らもある。が、義太夫はそれ等の年齡は殆ど準備時代にすぎない。精々が先輩の代り役を勤めて有望視せられてゐる程度だ。佳作傑作は多く四十

前後迄苦しんだ上の話だ。それ迄の長い修業時代の勞苦は實に凡人的でそして痛烈苛辣を極めてゐる。

五代目春太夫より、二代以前の紋下六代目染太夫（寛政二年生れ、明治二年、七十三才で歿。）は、江戸にゐた修業期に、素語り百段の寒稽古をした話が殘つてゐる。幕末當時、今の丸の内邊へ嚴冬の夜半になると一人で出かける。その原つぱの中に、下駄を尻にしいて北へ向いて坐る。そして夜明け迄每夜素語りで何段となくやる。その寒稽古中百段はさらへたとある。すると、連夜の事で、誰となく聞き傳へて知らぬ人が遠くから彼の傍へ、そつとそばやかゆを運んで報捨してくれるやうになつた。が、かう云ふ努力はこの人のみでない。一種の奇形的天才兒であつた最近の越路太夫と云ふと、づぼらで通つてゐる。が、師團七に仕込まれた若い時は、木の根に縛ばりつけられて攻苦の業を積まされてゐる。又、その頭部には、師團七に無器用なため、撥で烈しく打たれた疵跡が殘つてゐたのは有名な話である。從つて、文人力士のやうに二十才二十五才の非凡な飛躍事はない。全部、一つ一つこつこつと階段を上つて、何十年の年數を經て、一つの天才と云ひ得る仕事を殘してゐるのである。

要するに、非常な凡人の仕事、即ち、疊の目程延びる日足のやうに、一日一日努力で延びて行くのが義太夫であるとしても、根本は天才がなくては飛躍出來ない。凡才は不思議にあるレベル以上は、幾ら努力しても上達しない。この點で義太夫とは實に天才と凡人との極端同志の相合致した仕事である。第一に天才は入る。併し、一方役所の官吏が、年功で鰻登りに課長部長に出世するやうな年期が入るのだ。天才と云へ、春太夫や大隅太夫が、紅葉の三十七才で死んでゐたら、それは何の名聲も殘してゐなかつたであらう。かうしてこの道は、天才と凡人の兩棲動物以外に眞の才能を發揮し得ないのである。

× ×

先きにこの道の名人に二代ないと云つたのは、主としてこの理由からである。この道で苦しんだ人はよくこれを知るかららしい。即ち、親がどんなに庇つても効無きを知るからである。先代の攝津大掾にも男子があつた。が、太夫にしないで堅氣の商人綿布商にした。尤も、それは斯道衰滅を豫期したからでない。逆に大掾全盛時は、その過去明治初期より斯道は榮えた。明治二十年頃は文樂の興行日數が今より短く一と興行十三日立てになつた位衰へた。が、大掾の全盛期は每興行六十日位大入で打續けてゐた。で、前途を悲觀すべき理由はなかつた。が、倅は外の方面へ出した。越路太夫さへ我子を斯道に入れようとしな

かつた。死後その男子を土佐太夫が周圍に進めて今の文樂に出してゐるのみで、話は別である。又、さうして人には進めるが、我が子の場合では、その土佐太夫すら、太夫にはしてゐない。大阪毎日新聞の一社員、南某がその子である。古靱太夫に二人男子があつた。が、この道へ入れたくないと思つて、二人共中學校へ入れた。高等學校へ入れようとしてゐる中、過度の勉強のためか長男が死んだ。次男も十何才で死んだ。叶太夫にも立派な一男があつた。これも外の方面へ出さうとした。これは學問好きの秀才型で、順調に京都の帝大迄進んだ。が、一個に勉強しすぎて二十四才で急死した。古靱叶兩氏が、共通的に私に語つて曰く「壽命ではありませうが、結局、このつらい稼業に入れたくないと思つた一念で殺してしまつたやうな氣がします。」

　これは太夫のみでない。父子相つぎ得る三味線ひきにもそれがある。何十年か前、文樂や堀江座で住太夫や先代源太夫の三味線をひいてゐた故豐澤富助氏は、近年東京にゐた三味線ひきでは稀な故實通であつた。名人團平の門下の人だ。師團平に「忠臣藏」の四段目の三味線を稽古して貰つてゐる中、テテンと云ふ音のみで、七日間通はされた修業をした人だ。即ち、四段目の中程「力彌御意を伺ひ、兼て用意の腹切刀」のかかりで、テテンとひく。それが今日もいけない。明日もいけないと云ふのだ。團平の説は、鹽冶判官一生の大事だ。そのテテンで腹切刀が判官の前に置かれるかかりになるのだ。その一國の大事に、唯、テテンとひくのではしようがないと云つて叱るのだ。つまり、そのテテンに一國一家の憂愁悲愁を打込めと云ふわけである。テテン「歸れ」と云はれる。翌日、テテン又歸れと云はれる。やつと七日目に、富助が苦しんで考へぬいたひき方をして、初めてよしと先きへ進んださうである。さういふ稽古をして來た人のせゐであらうか。富助氏に一男があつた。本人が義太夫を好んだに拘らず、頑として斯道へ入れなかつた。その子は今三十才の若い銀行員にさせられてゐる。

　この道に二代ないのは、誠に當然であつた。三味線でさへこれで、太夫は絕對的に後繼者を作つてゐないからであつた。併し、それに一理はある。天才と凡人との二重人格的あらゆるものを、一人の人間で揃へとは、三百年前の義太夫の祖は、餘りに非人間の仕事を永遠に強てゐたからであらう。しかも、斯道に對して正直と熱愛とを持つ限り、この天才と凡人兩立の教義を守らずにはゐられない。が人間としてこれを守る苦しい苦惱は、恐らくこれは自分だけで終らせてしまいたいの一個の虛無主義に似たものを、生み出してしまふのではなからうか。近代

的な虚無主義者、そんな風な科學的哲學的な思想的背景はあるまい。併し、無智なる者にも人生の快樂があるやうに、その反對の厭世はあり得る。それが毎日息の續く限り、自分の職業でゐて、そのどうにもならぬ苦しさを知る場合、生じるものの嫉後は自分一代でその重荷を捨てたいの望みではなからうか。つまり、一人の人間が一心に努力して割に報はれないのが、詮じつめると斯道になるのではあるまいか。そしてこの結論は、やる方も以上の理由で困難、聞く方も難解、即ち、芝居が目で訴へるに反して、耳で訴へる點に難解があるからだ。すべてが分り易い仕事の性質でない所に、この結論を生むのである。

この故に、この道の名人は二代ないのではなくて、名人と雖も二代を作らうとしないのである。そして單に斯道に執着して現はれる異常な怪物を俟つのみの事實になつてゐる。が、異常な怪物なら論はない。異常ならぬ者が、異常な怪物たらんとして如何に悲慘であるかは、前號の「大序」の人々で分つてゐると思ふ。

尤も、天文學の彗星と同じく、この方の彗星もその中に現はれると云へるか知れない。案外、何年か後に狹くても深い文樂の紋下の礎を作る天才が出ないとは云へない。併し、以上の私の近い過去現在の歷史的事實から歸納すると、例へ、それが幼稚な厭世論者程度にすぎなくても、一身をこの道にさゝげて、全く自分一個で亡んでゐる點は殆ど共通して相似てゐる。そしてそれは却つて快い位である。見事にその後に醜い殘骸を殘してゐないからである。話に聞くのに、近頃の富豪は過去の例の馬鹿息子がその資産を蕩盡するのにこりて、巨大な富を法律的に永久にどうにもならなぬやうに縛つて世を去らうとするさうである。どうせ人間である。一藝に秀でただけの愚かしいと云へば云へる方の義太夫道の人ではある。が、名聲と欲望との念には、さう云ふ子孫の將來迄變へて死ぬ富豪と大差がある筈はない。同じく人間の、同じ欲望煩惱の人である筈だ。かういふ場合、時としてそんなに好きな道に入つてゐるなら、外に何も入るまいと云ふ意見が出る。併し、それは一理ありさうに見える屁理屈のみだ。それは恐らく血の通つてゐる人間なるものを知らぬかなり冷酷な言葉である。で、彼等が烈しくこの道を愛しつつ、道を子孫に殘さうとしないのは、それが餘りにも暗かつたからではなからうか。艱難すぎたからではなからうか。即ち、どうにもならぬ「道」を熱愛して、なまじ名人と唄はれたにして、現世的に報はれる所は尠なすぎた。その寂しさと暗さとから、自然と後に自分の跡を止めずに、一人一代のみで世を去つてゐるのではあるまいか。もう一人の自分を見る氣がしなかつ

たのではあるまいか。

私がこれ等のこの道の巨人秀才の一生の歴史をさぐると、自づとかうした感慨に打たれるのを否み難い。殊に、一寸云つた如く、太夫は割にのんびりした氣質の人が多い。で、煩悶してもこれを愛し、苦しんでも道を愛してゐるのは確實だ。所が、一朝その仕事に對すると、立派に深刻な懷疑主義者になつてしまふのだ。人生不可解と叫んだ人のやうに、暗い苦惱者になつてしまふのだ。それから押して強く云ふと、どこかにニヒリスト同然の、冷々と冴えた心境さへ感じられぬではないのである。但し、この結論のみで全部の達人の一生をはかるのは、餘りにこの道を暗闇にする。姑くそれは未解決に保留したい。併し、如何に平凡に見ても、無邪氣に見ても、名力士の短い一生のやうな、徹底實力主義の一貫の快よさだけは、十分に認めずにゐられないのである。(つゞく。二年十二月廿五日)

誤植訂正

から云ふ記錄的のもの故、前號の誤りを訂正します。

三十八頁、二段の口、三段の中は、いづれも二段目の口、三段目の中の誤植。四十頁、「寺小屋」は「寺子屋」の誤植。四十四頁、御霊文樂時代に向うの客は、大向うの客の誤植。

樂屋の圖の下、中三階とあるは、中二階の誤植。

市來新市長と久原男爵候補者

小汀利得

（一）

市來乙彦が東京市長になつた。去年の五月時の大藏大臣高橋是清の爲めに、日銀總裁の地位を逐はれ、すご〳〵と日本銀行を去つた時の、あの氣の毒な市來の姿は、いまでもハッキリ記憶に殘つて居るが、爾來僅かに八ヶ月再び春は回り來つて麻布の自宅で地理書と傳記に讀み耽つて居た浪人の市來はまたも花やかな舞臺の人となつた。市來はあれで居て隨分運のいゝ部に屬する男だ。

前市長の西久保を遮二無二追ひ出した現政府とその與黨も、西久保の後任が年末に迫つても、一向きまりさうにもないのではと〳〵閉口して居た。何しろあれ丈の騷ぎをしてやつと十二月初めに追ひ出したその市長の椅子が、塞がらないまゝで年越をしたのだから、反對黨側はもちろんのことだが、政府や與黨の内部にも、鳩山はどうした？鈴木は一體健在なのか？と云ふ非難の聲が現はれるし、一方では議會の休會明けを控へて政局ます〳〵多事を加へるのに、折角追ひ出した市長の後釜さへも、きまらないとあつては腕の喜三郎の沽券にかゝはる。

かくて頻りに氣を揉んで居るが、肝腎の市會は何と云つても矢張り民政系が多數だ、小島一派の二八會は西久保を追ひ出す爲めには自ら革新會を追ん出たものゝ、いざ後釜となると革新派と氣脈を通じて政友系の持つて來る者を皆蹴飛ばして仕舞ふ。鈴木の兄分平沼騏一郎の推輓にかゝる秋山定輔——市民は『ヘエあの露探だと云つて日露戰爭當時議會で騷がれたあの秋山さんですかエ、あの人まだ生きて居たんですか』と怪訝な顏をして居た——はもとより、事務所まで開いて運動した正力松

太郎でも兒玉秀雄でも片つ端から難癖つけて、動もすれば革新會の擔ぐ藤山雷太に秋波を送つたりするので、流石の鈴木も兜を脱いで二八、革新兩派に泣きを入れた。その結果各派とも白紙に歸ることゝなりお鉢はつひに市來のところへ廻つて來て、彼れは一文も金を使はず、また政治上終始反對の立場に立つて來た政友系たる中正、正交兩派の大部分からまで投票を得て芽出度東京市長の榮冠を贏ち得たのだ。

もつともこのカラクリの裏に例の三木武吉が、大いに働いて居たことは爭はれない事實で、何のかのと云はれながら、彼れは依然として二八、革進兩派を操るワイヤ・プラーであり、從つて現在の東京市政を動かす大御所である。

さらに面白いことは、鮭成金の堤清六が市來から受けた昔の恩義に酬ゆる爲め、相當犧牲を拂つたことで、之れは堤がまだボロ〳〵の時代、彼れが關係して居た日露實業の社長に市來を擔いだりした時この方の御恩報じの意味であつた。

（二）

かくして我等の市長となつた市來は一體どんな男か？

戸籍を洗つて見ると、鹿兒島縣士族市來平太の三男で、明治五年四月の生れ當年取つて五十七才、鄕黨の先輩田尻稻次郎を賴つて上京、田尻の書生部屋にゴロ〳〵しながら明治廿九年に東京帝大の政治科を出ると、その秋文官高等試驗に通つて、田尻親分の畠である大藏省へ入り、司稅官、稅關事務官、臨時沖繩土地整理事務官、那覇稅務管理局長と、散々貢取りの下廻りを勤め、それから本省の書記官になつたり專賣局へ廻されたりして、日露戰爭後本省の參事官となり主計局長となり、主計局長時代にはいまの民政黨顧問山本達雄が西園寺第一次內閣の大藏大臣として勸銀總裁から轉じて來たのに忠勤を擢ん出て可愛がられ、寺內內閣の中途で勝田主計が次官から大臣に昇格した時、次官に擧げられたが、後高橋是清が大藏大臣になると、浪人した。

この浪人時代のことだ。市來は日露實業會社と云ふボロ會社の社長に擔ぎ上げられた。この會社はいまでも大藏省預金部から、六百萬圓からの不良借りをして、每期欠損を出して居る札つきもので、世界大戰後の不況時代には、苦し紛れに血迷つたか、日露實業と云ふ本來の目的を忘れ、茨城縣の大理石にまで手を出さうとした程の大與太の代物、尤も會社當事者に云はせると立派な計畫のある仕事で、茨城縣の石山を持つて居れば、西比利亞から輸入した木材と、茨城の大理石とを組み合はして賣るから建築材として西比利亞の木材がよく捌けるのださうだ、ま

ことに早や恐れ入つた話で「大風が吹けば桶屋が繁昌する話」程の廻りくどさぢやないか。

かうした大與太會社の社長に收まつた市來は、好きな道とて毎晩のやうに、築地、赤坂、柳橋からさては新宿町あたりまで飲み歩るき、一番鷄の聲を聞かない中は決して家へ歸らなかつた。ところが惡い奴もあつたもので、會社の下役は大抵晩の十二時前後、市來が醉眼朦朧たる頃を見計つて、會社の書類を持つて行き判を捺させたもんだ。市來にして見れば主計局で夜中に判を捺す癖がついて居るから、民間の會社も主計局見たいに夜はおそくなるものと思つて、大事な實印をほうり出して遠慮なく何處へでもベタ〳〵捺さした。その結果はボロ會社の日露は彌が上にもボロとなり、前大藏次官の市來閣下も、あはれや毎日債權者たる朝鮮銀行へ一寸來いを喰ふやうになつた。いまは堤清六の日魯漁業に常任監査役をして居る阿部秀太郎が、當時鮮銀の支配人であつたが、阿部はいゝ氣になつて市來をコヅキ廻して居たもんだ。運のいい市來は、かうして毎日鮮銀へ行つて叱られて居る中に、政友會内閣が潰れ死んだ海軍大將の加藤友三郎が總理となるや、拾はれて大藏大臣となり、あべこべに朝鮮銀行を監督する身となつた。加藤の死んだ後もうまい具合に芋蔓の總帥山本權兵衞が總理大臣になつたので震災のドサクサ紛れに當時大臣[illegible]日銀總裁井上準之助と、地位をすり替へこそ、日本銀行總裁におさまり、憲政會内閣にも特に御用を勤めて地位を維持して來たが、去年の春の大恐慌で政權が政友會に移り、大藏省以來氣の合はない高橋が飛び出し「君と僕とは馬が合はないから止して呉れ」とやつたので、流石の市來も呆氣なく日銀を抛り出されてしまつた。

（三）

市來を世間では無能だと云ふ。特に日銀總裁としての市來は評判が惡かつた。併し冷靜に考へて見ると、市來は必ずしも一部の世評のごとく無能ではなかつた。

それならばどうして市來の日銀總裁はあゝまで評判が惡かつたか？

第一に市來は財政には明るいが、經濟には暗い。それが震災直後のあの非常時に出て來たので、時機が惡かつた、そしてあの時助けた銀行は大抵ボロ銀行ばかりで、之れと云ふ程の大物に手をつけなかつた。しかも遠慮勝ちな市來は、なんでも副總裁の木村清四郎に任せつ切りであつたから、功はむしろ木村に歸して、市來は惡口ばかり云はれる立場に立つた。そこへ行くと

井上準之助などは心得たもので、同じ銀行に恩を被せるにもボロ銀行には鼻も引つ掛けない、何んとか後々に物になりさうなものか、さうでなければ天下の大銀行會社の世話をしてやる。だから井上の悪口を云ふ奴は落伍者たるボロ銀行、會社の重役かなんかで、いくら眞實のことを云つても世間へは何の反響もない。反對に井上に恩を受ける奴は、相當世の中に羽振りを利かして居る連だから、大いに輿論をつくる。

また日本銀行で會ふ客種を見ても、市來は三文雜誌の連中や、右傾團體の連中にも一々義理固く會つて居るから、時間が無くなつて、有力な新聞の記者なんかには反つて會へないやうになる。これが井上になると人間が利口だから會つて有形か無形か得にならん奴は、片つ端から玄關拂ひを喰はしてしまひ、反對に××新聞經濟部長などが來ると肩をたゝいてニコポンをやる。

また市來は大正十四年の春、高田商會が潰れる時に三井銀行の池田に頼まれて、二百八十萬圓の救濟資金を出すことを約束しながら、内部で理事の深井と麻生に純理論を提げて眞向から反對されると、平氣で池田の顔を潰してしまつたが、井上は池田はもとより串田でも佐々木でも、有力な民間銀行家の氣に入らないことは、一つだつてしやしない。それどころか、自分から尻幅に之等有力銀行家を訪問して機嫌を取る。

萬事がかう云ふ遣り口たから、同じ褒められても市來を褒める者の聲は世の中に徹底しないで、悪口は有力な倶樂部から倶樂部、新聞から新聞へと直ぐ廣がつて行くこと井上の場合と全く正反對である。しかも悪いことをしない點では市來と井上は實際大變な違ひだ。

市來のもう一つの長所は金に綺麗な點であらう。彼れが現に住んで居る家は船成金山下市助の建てた家だが、彼は山下の悪趣味を悪口云ひながら、いゝ家を買ふことも出來ないでそこに住んで居る。もとの牛込新小川町の宅などは實に小穢いものであつた。この點また井上が二百萬圓からの金を貯めて居り、一つの會社の周旋をすれば必らずなにがしかの奉納金をさせるのとは大變な相違だ。現に井上は郵船へ東洋汽船を合併すると、次期の考課狀には俄然として三千株の大株主となつて現はれて居るが、市來は恐らく、日本銀行を罷める時貰つた退職手當の二十萬圓も、市會議員に全部撒いてしまふことだらう。要するに市來と云ふ男は擔がれるに最も具合よく出來た點に於いて當然稀れに見る男で、御輿に過ぎない今の東京市長には正しくはまり役と云つて間違ひなからう。

（四）

女のやうなやさしい風貌の持主たる點に於いて久原房之助は市來と好一對である。市來が薩派の寵兒たるに對して、久原は田中肥料首相と切つても切れない深い仲の正眞正銘の長州つ兒であるところが、まことに面白いコントラストであらう。

久原が親任官特遇の特派經濟調査委員と云ふ妙な名前を貰つて、陛下に拜謁仰せつけられると聞いた時、世間は市來が市長に擔がれた以上に事の意外なのに愕いた。

併し山半や木ノ謙で示した田中の時代離れのした人事行政振りを見てはもう今更らに驚く者もないが、それにしても田中と久原の個人關係が餘りに込み入つて居るだけに、任命した田中の露骨さと、それを受けた久原の圖々しさには呆れた、いや呆れると云ふよりは、寧ろ世も昭和となると、あの程度の裝度胸が無ければ、生きては行けないと大いに考へさせるやうになつたかも知れない。田中の台所を永い間見てやつて後顧の憂ひなからしめ、兎に角一黨の總裁となり、遂ひに總理大臣の印綬を帯びるに至るその素地をつくつてやつたのは主として久原で、久原の田中に對する勸め振りは尋常一様のことではない、しかも、啻に財的に田中を助けてやるのみたらず、見識ある人間には一寸出來ない、[illegible]ふから久原は感心？なものだ。

久原はあの優しい、下ぶくれのした、蟲も殺さぬやうな顔つきをして居て、度胸のいゝことでは、神經質な日本人とは人種が違ふんぢやあるまいかと思ふ程掛け離れた男だ。

正金銀行でも、台灣銀行でも乃至は朝鮮銀行でも皆憤慨し切つて居るが、現代資本主義に君臨する金融業者を屁とも思はない點に於いて、久原は傑とするに足る人物である。彼れは大正九年春の財界反動に、久原商事で首も廻らぬ程の借金を背負ひ込んだが、その借金のしつ振りがよかつたので今日まで潰れないと云ふ豪のものである。それはどう云ふことかと云ふに、普通の者なら苦しくなると七圓借り八圓借りをして、どこへも顔向けも出來ないやうになるところだが、久原は逆に數多い借金をばフルパワーで台灣と朝鮮と正金と云ふ政府の特殊銀行へ集中してしまつた、蓋しかうして置けば政府へ運動さへすれば大丈夫だからである。たつた一つやり損つたのが市中の某有力銀行に殘つて居る六十萬圓ばかりの手形で、之れだけは久原が個人保證もして居るので、地道に元利の年賦拂ひをいま實行して居るが、正金、台灣、朝鮮等へは擔保に入つて居る株券の配當をやる以外は錏一文だつて、利拂ひなんかしやしない。しかも

億のつく大借金の主體は資本金一千萬圓の久原商事會社にして置いて、資本金七千五百萬圓の久原鑛業會社には大阪東京の株式市場で買占め買ひ煽り等傍若無人の振舞をさして居り、六甲山麓住吉には三萬坪と云ふ田畑にしたつて十町歩と云へば大したものだが、その廣大な邸宅に大名生活をなし東京の白金今里町の別邸との往復はいつも一等車で大名行列をして居る。

（五）

この變つた人物たる久原の過去を見るに彼れは故藤田傳三郎の兄久原庄三郎の三男で明治二年生れの今年六十、明治廿二年に慶應義塾を出たのだが、學校に居る時は存在さへ知られない平凡な男だつたさうだ。卒業後は一寸森村市左衛門の森村組に入つたが、間もなく叔父の藤田傳三郎の下に行き、藤田の資庫小坂銅山に永い事居て、藤田から五十萬圓貰つて獨立し日立の山を買つた、この頃の久原は神妙なもので、時には鑛夫と一緒に山へ入つて生活もしたので、段々當り出し世界大戰の好況時に手を擴げ過ぎて一時は全く沒落しかけたが、前に云ふやうにうまく借金を特殊銀行へ集中して、危く沒落を免れた。彼れの道樂は研究と人材養成で、好況時代には神戸高商の津村秀松を初め學者や技術家やまた大臣の秘書官の古手などを遠慮會釋なく狩り集めて欣んで居た。そして之等の連中に色々研究させたから、露西亞の利權などは可成り詳しく知つて居つてこの點市來と違つて、會つて見るとなか／＼大風呂敷を擴げて人を煙に捲く。

民政黨あたりでは彼れの特派經濟調査委員任命を冷やかして、田中が久原への恩返しに男爵を奏薦する口實として、大抵出來かけて居る日獨通商協約を彼れの功に歸する爲めにやつた仕事だと云つて居るが、どうせ田中のやることだからその位のことかも知れないけれど、兎に角經濟調査と云ふやうな名前をつけるにはまあ／＼ふさはしい男だと云つてよからう。

そしてこの男の感心なことはあまり女色を漁らないことで、もちろん妾の二人や三人は置いてるだらうが、あの大戰中の好況時代にも折花攀柳に浮名を流さなかつたことだらう。

八ポイント欄

一、この「八ポイント欄」は有名無名を問はず、青年、學生、研究者、讀書家、旅行家のために開放して隠れたる知識と埋れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の匿名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以內にコンデンスして頂きたいことを希望する。

小鳥の物理學

神代種亮

春の風が吹いて來て川柳の枝に青い芽が見られる季節になると、廂の下にしまつてあつた釣竿をおろして魚釣りに出かける。夏が過ぎて柿の實に黄色が差し始める時分になると、鳥黐を新たに買つて小鳥捕りに山へ行く。此れは私の郷里の津和野では、年中行事でもあり、道樂を越した仕事でもあつた。

津和野は、長州界に接した石州西部の小さな町である。鷗外先生が「四萬三千石の龜井樣の御城下で、山の谷あひのやうた處だ。」と書いてゐられる。山の間を川がSの字型に曲がつて流れてゐて、平地と謂つては幾らも無い。田も畑も屋敷も階段のやうに成つてゐる。戸數は昔は三千五百も有つたのだが、明治になつてからは一千內外に減じたこともある。三年ほど前に中里介山さんが西國への旅の途中から私に「津和野は愛すべき町です。」と繪葉書を送つて呉れたことがあつた。をと年の春は、本山松陰翁の口から「津和野はいゝ町だね。」と聞いた。島崎藤村さんも半日の遊覽を一泊されたとか云ふ。私達は子供の時に、「擂鉢の底」だと語り合つてゐた。宮本左門之助の墓は夙くから知つてゐたが、桃井若狹介が昔の殿樣であることを教はつたのは高等二年生の頃であつた。久米平內が同郷の人物だとか、千人塚と呼んでゐたのが切支丹迫害の舊蹟だとか知つたのは十年前のことである。子供の時には、老人達の話などには小鳥や川魚がゐなく成つたのが、何よりも惜しかつた。

山間の町とは謂つても、海へは七里に足りない位であるが、登り降り一里の峠越しに人の肩で運ばれて來る海魚は甚だ貴い物であつた。日清戰爭の次ぎの年、「米が十圓すりやヤツコラヤノヤ、唐米幾錢のウ千代さん。」と云ふ唄が流行つて來た正月のことであつたか、「今日は鰤の切身が三匁といの。なんちふてもまあ錢を食ふやうなもんぢや。」と近所の人達が語り合つてゐたことを私は未だに記憶してゐる。三匁と云ふのは、一錢について三匁のことで、百匁ならば三十三錢三厘である。其の頃は牛肉が百匁五錢であつた。不斷に鯛や鰤を片ひら（半身）買ふとか四箇一（四分一）買ふとか云ふ家庭は一軒も無かつた。婚禮とか祭禮とかには浦（海邊の市場）へ態夫を立てる家も有つた　川魚を釣つたり

小鳥を捕つたりする事が殆んど一般的の習俗と成つたのも、全く自然の必要から生じた訣で、随つて籠に罹つた小鳥の胸部を左右から二本の指で締める事には、誰れも慣れてゐた。小鳥の毛を引いて料理することは、子供でも器用であつた。

私達の小學校時代には、川遊びの次は、栗拾ひと小鳥捕りが、何よりの樂みであつた。男の子であつて、小鳥の名を知らぬ者や、鳴き聲を口笛で眞似の出來ぬ者は、殆んど居なかつた。口笛を吹き〳〵道を歩くと、籠の小鳥が鳴き返す。其れに依つて私達は、此の家の眼白は高音が長いとか、彼の家の山雀は善く鳴くとか言つて、話題に上せてゐた。

子供の手で最も手易く飼はれる擂餌の小鳥は眼白であつた。次が山雀であつた。柄長とか四十雀とかは、荒鳥を餌附けることがむづかしいので、無駄な苦心をさせられるばかりであつた。鶸、花鶏、斑鳩などは蒔餌であるから、飼方はやさしいけれども、高擌で捕ることが子供の力では容易でなかつたし又渡り鳥でもあるので親しみを持つてゐなかつた。

私は十歳前から祖父や父の眞似をして小鳥を飼ひ始めたのであるから、餌附かせる爲に死なせた小鳥の數だけでも夥しいものであつたゞらう。過つて逃がした小鳥の數も、十四五羽までは覺えてゐる。何年か前、菱田春艸の「黒き猫」を遺墨展覽會で始めて觀た時にも、「落葉」よりもいゝと言つた恭さん（恆藤）の言葉を想ひ出したと共に、私が四歳の頃に祖父が飼つてゐた金絲雀を口に銜へて築山の隅へ逃げた黒猫の姿が眼の先に浮んだ。二冬越させて馴れてゐた鶯を青大將に鳥渡の隙に呑まれて了つたので、父が庭先で仇討ちをしたとは今でも時々思ひ出す。

小學校を出てから、遊學時代、流浪時代には、小鳥を飼はうともしなかつたが、東京へ出て來てからは、山の手の庭や公園に四十雀が飛んでゐるのに惑かされて、又々小鳥を飼ひ始めた。隣町の駒込林町にゐた時であるが、小鳥籠が十ばかり縁先に吊つてあるのを見て、戸口調査に來た巡査から、「小鳥を賣るのですか。」と尋ねられたことがあつた。其の後、「古本を賣り買ひしますか。」と巡査から問はれたこともあつたが、其の頃にも二羽か三羽かは飼つてゐた。今は小雀と大瑠璃と相思鳥と三羽飼つてゐる。其の相思鳥は、雪の日の朝、小鳥の鳴聲を尋ねて庭へ來たのを手捕りにしたもので、私の家へ來てから十二年に成る。十二年は小鳥に取つて天壽以上の長命であらうが、嘴の赤い色が少しく黒みがかつただけで、鳴く聲が衰へてゐないのは、弱い餌（米の粉と糠との十分に對して魚の粉を三分の割合）を與へてゐる爲めだらう。小鳥の種類にも依るが、魚の粉を多く入れた強い餌では、手取早く鳴き出すだけに鳴きが止まつて了ふことも亦早い。此の三羽の外に、四十雀と日雀と鶯と三つは飼ひ度いと思つてゐる。中でも四十雀は、祖父が飼つてゐたので、子供の時から最も親しい鳥である。

さて小鳥の擂餌は朝々拵へて遣るのであるが、餌が無く成つてゐる壺には、何の小鳥でも自分の舊い糞を三つも四つも糞盆から運んで入れてゐる。餌が少し殘つてゐる場合にも入れてゐること がある。水を入れる壺

にも、糞を落してゐる。人間から見れば、小鳥と云ふ者は、自分の體は常に身綺ひして綺麗にするが、汚い物を口にすることは平氣なやうに思はれる。

私は子供の時に之を見て、始めは小鳥が餌の足りないのを怒つて報復的手段を弄するのだと考へてゐた。然う獨り極めに極めてゐた。關白は餌が無く成ると自分の糞を拾つて食ふと信じてゐた大人達もあつたが、私は其れを疑つてゐた。其の後、餌を催促するのだらうかとも解してゐた。何にせよ、糞は汚い物だと云ふことを前提として、造作も無く斷定してゐたのである。だから、本年から中學校へ行く男の子が「小雀がうんちを突つ着いてゐるよ。」と笑つた時にも、小人閑居爲不善の意を以て說明する外無かつた。

たまたま十日ばかり前の午後であつた。南神保町の飯島書店へ立ち寄つたところ、主人自ら腰を揉みながら「イソップのこんな物なら有りますが。」と言つて一冊の青い本を出して見せた。銅鐫版や木版の挿繪が這入つてゐる洋本の安物を時々私が買つて行くので、主人は然う言つたのであらう。一見、前世紀の代物である。挿繪を書いてゐるダリゼットとは何んな畫家であるか知らなかつたけれども、小口木版で一頁大の挿繪が何十枚か有り、又卷頭に「林黄之草」と藏書印が有つて、處々に「女之言不可聽」とか「有恩千死不害千生」とか「人面美人。作家路傍三年不腐」とか「富必善良」とか「寧ロ窮スルモ自由ナル」とか無據な評語が書き入れてあるので、一圓は高くないと思つて買つて來た。イギリスでは稀覯書目錄の片端にさへ載せられもしないだらうが、「丸廏善七」の評標が貼つてあるだけでも日本では珍物である。

其の晩、子供等に繪解きをしながら頁を捲けて行くと、一つの挿繪の中程が光つたやうに見えた。上に「鳥と瓶」と題があつて、水瓶にとまつてゐる鴉が丁度小鳥が餌壺にとまつてゐる位の大きさに書いてあるので、不圖小鳥の糞運びに思ひ當つたのである。――思ひ當つて見ると、是れまで「鳥と瓶」のことを讀んだり話したりした際に氣附かなかつたことが自分ながら不可思議であるのだが、恐らくは一つにはイソップ物語を全暗誦したと信じてゐたのと、二つには不知不識自分が小鳥の位置に在つたならばと云ふ氣持で小鳥の心を推測してゐた爲めなのだらうかと考へられる。

そもそもイソップは鳥が瓶に小石を運んで水を飲むのを目擊したのであらうか、或ひは他から聞いたのであらうか。それとも想像に依つて作り出したのであらうか。後のアルキメデスは風呂桶の中で此の鳥を想ひ出しはしなかつたであらうか。又、象の目方を測る話は何時出來たものであらうか。

私にとつては、空つぽの餌壺に糞を運ぶ小鳥の智慧が既に學者の著書中に發表されてあつてもいゝ、なくつてもいゝ。小鳥を飼つてゐる人々が知り悉してゐてもいゝ。小鳥共が何の爲にやつてゐてもいゝ。罐の中に小石を入れて遣つて實行せしめて見る必要も無い。イソップ物語の中に、貴い物が含まれて居ることを自分で始めて知つただけで滿足である。小鳥共に對して可愛さを增したことを自分で感ずるだけで、新らしい悅びであ

る。

此處まで書いて來て、暫らくぶりに小鳥の體格檢査をしようと思つて、一羽づつ手の平に入れて見ると、快い温かみが感ぜられる。小鳥共は始めは藻掻いてゐるが、やつと安心したのか目を細くして日光の中に頸を丸めてゐる。紙袋へ移して目方を測ると、相思鳥が四匁六分、大鶍鶸が四匁一分、小雀が二匁八分であつた。

次手に書き添へると、私の相思鳥は擂鉢の音がすると直ぐ鳴き出す。ごろ〱云ふ音が餌を貰ふ前觸れであることを知つてゐるらしい。又私が籠の方に近寄ると、此方を覗いて聲を立てる。之で見ると私の姿だけは識別してゐるらしい。一つ何の爲か不明なのは、夜廻りの拍子木を聞いて鳴き出す事である。小雀は私の口笛によく答へるだけでなく、「小雀や」と呼ぶと、「チチチ」と答へるのは、私の音聲が解つてゐるのらしい。大鶍鶸だけは新來者なので、人影がない時だけ、物寂びた鳴き聲を續けてゐる。

（2・12・8）

蓄音機道樂

上司小劍

蓄音機道樂の話も、あまり方々へ書いたから、少々氣がさすけれど、ほかのことゝちがつて、自分の大好きなものだけに、頼まれたらいつでも引き受ける。書く材料はいくらでもある。

私も此頃は、だいぶ蓄音機中毒を起したやうで、蓄音機がないと、頭がぼんやりする。朝起きて、顏を洗ひ、食事を濟して、机の前に坐ると、まづ蓄音機だ。喫煙家ならタバコ一服、飲酒家なら、コニヤック一盃、といふところでもあらうか。蓄音機道樂と言つても、私のはレコードの蒐集よりも、機械の愛玩といふ方に多く傾いて來たから、必らずしもレコードをかけて音樂を再生させる必要はないのだ。もちろん、音樂の再生の完全に出來ない機械はいやで、いつも一流の機械を手元に備へておきたいのだが、馬を愛する人が、名馬を飼つてゐるやうなもので、何もそれに跨がつて大道を濶歩する時だけが樂みではないのだ。飲ふ時も、秣を與へる時も、毛並みを撫でてやる時も、いづれか愉快ならざる。……と同樣で、蓄音機だつて、同じ四つ脚の精巧に出來た愛玩品で、たまらないほど美しい生産をするのだもの、艶布巾をかけて、外函を拭いたり、機械を取り出して油をさしたりしてゐるのも樂みだし、電氣モーターならスイッチを引き、ゼンマイならそれを卷いて、廻轉の工合を見てゐるのも嬉しいものだ。しかし、機械といふやつは妙なもので、蓄音機も時計や寫眞機の如く、同じ種類の中に、ひどく出來不出來や、各の癖があつて、半年手がけてゐないと、よく呑み込めない。

私は今三臺の機械を用ゐてゐるが、一ばん上等なのは、ブランスヰック會社のパナトロープで、マドリッド號（スペイン風に言へばマドリイ、私は窓璃姫と呼んでゐる）だ。これは、キヤタログによると、下から五番目、上から三番目といふ機械だが、日本にはま

だこれ一臺しか來てゐない。私も以前はヴイクターを使用して、今も其の九號といふのを持つてゐるが、これはどうも自働車ならフオードといふところで、丈夫一式、いくらぞんざいに取り扱つても、めッたにこわれる心配がなく、子供の多い家なぞに持つて來いだが、其の代り、機械の精緻といふ點に幾分缺けてゐる。しかしヴイクターも最近オルソフオニツク電氣動力の十二枚連續や電氣式の眞空管使用品が出來て、一躍最高級機械の班に入つた。それまではオルソフオニツクでも、價の比較的安いだけに、最高級品とは言へないやうなところがあつた。尤もオルソフオニツク・グレデンザのホーンは確かに優秀である。このホーンに眞空管使用の電磁式を附けたのが近く出來る筈。

私は蓄音機道樂を始めてから、まだ漸く五六年に過ぎないが、機械にはずゐぶん苦勞した。いろく外國の雜誌なぞで調べた揚句、水平振動ではブランスヰツタとエオリアンヴオカリオンとの機械がよいことを知り、(上下振動ではエヂソンとパテエのほか知らず）友人伊庭孝氏の紹介により、ブランスヰツク日本代理店の坂靈事務の好意で、定價千圓の二百十二號といふのを求めたのが、高級機械を所有する最初であつた。（こゝでちよツと言つておく。レコードコンサートもよいが、プログラムに使用機械を明記する必要がある。和製マーヴエルのがたくなんぞでやられてはかなはない。）

『明治節の午後みんなで御自慢の蓄音機拜聽に出かける云々』と、葉がきで、帝國ホテル滯在中の正宗白鳥から前觸れがあり、内島氏夫妻辻村氏夫妻（辻村夫人は、正宗氏の妹乙未さん）女優花柳はるみ氏なんぞで、賑かく來てくれた。この日は私の愛機窈瑠姬が大に働いてモツアルトやベエトホオヴエンから、ドビユツシイやラヴエルまで、私のもつてゐるニユーブロセスのレコードの限りをつくして、いゝ音樂をば、ウツドやシユトコウスキイの指揮によるオーケストラ或はコオルトオ及びグレンジヤー等の彈くピアノによつて再現させたが、音樂の好きな辻村氏夫婦は、殊に窈瑠姬の妙技に感心したやうだつた。そこで私は、「そこの窈瑠姬に感心するやうぢや、姉さんの二の宮女王を聽いたら氣絶しますよ」と戲れつゝ、一同を階上の書齋から、階下の狹くるしい應接室に案内した。そこには窈瑠の姉にあたる同じパナトロープの電磁式第三號が控へてゐるのだ。私はこれを二の宮と呼んでゐる。姉妹ではあるが、窈瑠と二の宮とでは、たゞのお姉さんと女王殿下とほどちがふ。これとても日本ではちよツと代用品の手に入らぬ四個の大眞空管と、一個の小眞空管とにより、電力と磁力とで、普通のレコードから音響を再現させる機械で、ちよツと見たところ、外形だけは蓄音機だが内容は全くちがつてゐる。それで一秒時間十六から二萬一千までの振動を表現するのだからステキだ。從來の舊式蓄音機の發音振動板は一秒時三百五十から三千まで、新式のドユラルミン振動板でも、一秒時百から五千までだから、とても比較にならぬ）

こゝでちよツと説明するが、この電磁式大蓄音機がどうして私の家にあつたかといふに、これは去年の夏私のマドリッドより少し

前に輸入されて、取扱ひのわるかつたため、どこか破損したとみえどうしても音が出なかつたのを、近頃漸く遞信省の好意で、同省附屬の電氣試驗所に於て修繕が成功し、女王殿下は病院御退院の途次、拙宅へお立寄りになつたといふわけだつたのだ。去年の夏頃、ヴイクターにも、これとほゞ同じものが出來て、去年の暮に日本へ二臺輸入されたから、今はもう世界第一、日本唯一とも言へなくなつたが、六ケ月ばかり前までは、この三の宮がまさしく日本唯一だつたのだ。萬一火事でもあつて二千六百圓もするものを灰にしては大變だから、私はこの女王殿下をば、わざと端近に安置し、いざと言へば擔ぎ出されるやうにしてゐた。

偖、話が前へ戻つて。私が大得意で、お客さま一同を電磁式パナトロープの前に導きいざベエトホオヴエンの第五シムフオニイをかけやうとすると、前夜までよく鳴つてゐたのが、どうしても鳴らない。ぶうんと電氣の唸る音ばかり。正宗君は笑つて、『二千六百圓でぶうんを聽くのは贅澤だ。』

結局、妹が一生懸命に妙技をつくしたあとで、食客の姉がそれ以上に腕を揮つてはわるい、といふ妹思ひの姉心で、遠慮したのであらう。そこまで人格的に働くのだから、この機械はえらいものだ。……といふことになつて、其の日は暮れた。さうして明い燈火の下でまた妹窓瑠姫の妙技を聽いたのであつた。

蓄音機もレコードも一昨年以來劃時代的の新發明が完成して、在來のものは殆んど廢物同樣となり、私も折角集めた數百枚のレコードのうち、パツチーやカルウソオの歌なぞ、再びいれることの出來ないものゝほか、大部分を死藏して、ニユープロセスはまだ百枚に足らぬが、それでも半日の鑑賞には十分である。

翌日、會社の技師が來て電磁式大蓄音機の故障を調べたら、何んのことだ、一ばん小さな眞空管の接觸がわるいだけのことで、指先きでちよツと押さへたら、すぐ美音を發するやうになつた。

だいぶ長くなつたから、簡單に私の蓄音機から得た利益を擧げると、西洋のいゝ音樂を自分の書齋で坐つたまゝ聽き得るといふやうなことを別として、こツちから出かけて行かなければならぬ芝居や音樂會にはめツたに足が向かなくなつたこと、旅行をしても蓄音機が氣にかゝるので、すぐ歸つて來ること、それがために旅費やら娛樂費やらを節し得ること、なぞである。蓄音機道樂のために費した金はまだ僅か四千圓ぐらゐのもの。日本で屈指の機械をそれで所有し得たのだから面白い。日本第一の家を建てるのはむづかしいが、日本第一の蓄音機を所有するのはやさしい。ピアノには一萬金を惜しまない富豪も、蓄音機に千圓と言へば、首を傾ける。五千圓の蓄音機があると言つても、信じない人がある。

附記。これは新年號に載る筈だつたが、執筆後ヴイクターの新機械が輸入されたため、それを試聽した上、本號に掲げた。世界第一なぞと言つても、かういふものは、骨董品なぞと違つて、日進月歩だから、今日の大將が明日の一兵卒になるかも知れぬ。ヴイクター新輸入の長時間持續機械

は、先年類似のものがニューヨークの電氣博覽會に出品されたさうだが、むろんそれよりも進步してゐるらしく、電力で自動的に十二枚までレコードをかけて行く仕掛けが面白い。たゞ次ぎのレコードへの接續に五十秒ほどかゝるのと、裏がへすことが出來ないのと、ヴイクター以外のレコードは一枚だけしかかゝらないのとが、缺點と言へば缺點だ。 家庭用にはとにかく、コンサート用には絶好のもの。木材も仕上げも上品で、ブランスホックの壘を摩する。(一臺だけ來たのが、雲上の御用品になつたらしい。) これを眞空管の電氣式にしたのも一臺來たが、音色はさすがにズツとよい。エヂソンにも長時間持續の機械があるがまだ試聽しない。(寫眞はヴイクターの十二つどきの機械と、ブランスホツク・パナトロープ電磁式の内部と、私の愛用機ブランスホツク・パナトロープ・マゼリツド號とです。)

近代人の風を引く話

佐藤功一

近代人とは漠然と今の世の人の總てを指すが、もう少し引締めて近代的生活者、即文化といふ字をごく俗に使つて所謂近代文化の生活をする人を意味するものと見る可きである。從つて其多くは都會人である。

旣冬になつたが、昔しから冬になると風引きが多い。殊に近代人は盛に風を引くやうだ。

風引きが多いといふことは體の弱い人が多い爲めであり、弱い人の多いのは醫術の進んだ爲めに昔なら死んでしまつた筈の人も助かつてひく〳〵生きてゐるからで、結局近代醫術の進步が風引きを多からしめるといふことになるのだ といふやうな言ひ廻しは自分の甚だ好まぬところである。なぜかといふならば、それは人をはぐらかす說話術であるから。

むしろ、或人々にはやかましからうとも、眞に健全な人だけで地上の生活を營ましめやうといふことが優生學といふものであつて、それが吾々人類の理想とす可きものだといふならば、現實の近代文化なるものが中途半端なものである故に、それを難じそれを呪ふ意味に於て、近代醫術は近代人をして風を引かしむるものなりといつても差支はないであらう。

併し、いま私のいはんとするところのものは醫術の話ではない。それは私には專門ちがひのことであるから。……尤も私とて專門以外のことは論じてたらぬといふほど狹い了簡を持つものではないが、此の短かい話にそんなことに係り合つてゐられぬからである。

扨て寒くなると火が欲しくなる。解り切つたことだが體に溫を採りたいからである。これを私は採溫といふ。窓を閉さし服や衣を重ねるのも採溫法に相違ないがそれは消極的のもので、積極的の方法は熱源から熱を得ることである。其の採溫法の最も古いものは焚火であつた。燃え盛つてゐる焚火に對してゐると少し位薄着をしてゐてさへ背中まで溫

かい。これは前面が温められるからそこで温まつた血の流れが體中をめぐる爲めだ。こんなことも精密には醫學者に說明して貰はねばならぬ事で、私のはほんの概念的のいひ廻しである。田舍に於ける風の吹き込む臺所の爐邊の生活も、近頃は殆ど火鉢の生活に改まり、爐を見ることがだんだんと少くなつて來る。反之、都會の極めて贅澤な家では却て座敷の最上の飾りとして爐を設けて、冬になるとどん／＼と燃料をくべる。卽ちあの壁附き煖爐がそれであり、それは歷史的に見ても床の中央で薪を燃した爐の煙を屋外に出すに都合よくするために、それを壁ぎはに寄せて壁に煙筒をつけたに始まり、我國にも此種の爐は古くからある。明治時代の鹿爪らしく漢字を重ねて熟字を作ることの流行が煖爐などといふ字を此西洋から入り込んだ爐に附けたのであり、古く支那で言つた煖爐はこれとは意味が違ふのである。

田舍の生活が爐を閉ざして火鉢を多く用ゐるやうになつたことから、明治末から大正へ掛けては木炭の火鉢の隆盛時代であつたといつてよからう。

本字ではだう書くか、あの神萩の芝居の「けんじやう」館の場に見るやうに、障子をからりと開いて火鉢に手をかざしつゝ庭の雪に對するあの風流は西洋には少ない。尤も伊太利の乞食は陶製の手提火鉢卽ち所謂手爐を手にして路上に立つてゐる。この火鉢や手爐で手先を温めることは、先にも述べたやうに其温められた部分の血液から體中が温まるといふ採温法なのである。

歐米では直接燃料をもやす爐から次第に煖房法への途をとつた間に、日本では爐から木炭火鉢への途をとつた。そして室を煖めるといふ觀念はないでもなかつたが、概して體の一部を熱源に近けて採温するといふ考へ方であつた。火鉢の外に炬燵といふものもあるがこれまた同じ理になるものである。それに在來の日本家屋の構造は空氣の流通が餘りに良く煖房には適しない。

近代技術の進歩は煖房法を容易ならしめ、歐米の採温法は殆ど此式に依ることゝなつた。そして屋内を常時華氏の六十五度とか七十度とかに保たしめやうとするのであるそこで他の文化と同樣に此の採温法がまた日本に於ける近代人の心を動かした。

永々と少し餘計なことを述べすぎたが、私の近代人の風を引く話は實はこれからなのである。

在來の日本風の家では室を一定の温度に保たしめやうとするのは容易なわざではない。それでも近代人は苦心してそれを行はうとする。家全體を同温にすることはあの構造では極めて不經濟であることから、居室か寢室位を六十五度位にして愉快を感じてゐる。そのために便所や玄關やなどの寒いところへ出ると風にかゝり易いわけである。室を温めてその中に居るのは火鉢に手をかざしてゐるのとは違つて、毛孔が全體に開いて居り、鼻や喉には温い空氣が出はいりしてゐるのである。であるからこれが急に寒いところへ出ることに依て、體の方の調節がうまく取れず、結局風を引くことになるのである。

家に煖房法が施してあるならば、其中にあつては差支ない限りの潔齋をして居て、外出

の折には上に適當な外套を着るやうにすべきである。かういふ風に注意せねばならぬところの煖房法を一室だけに採用するのは中途半端である。臺所へ應接室へ出掛けるには外套を着なければならぬわけであるから…。

家全體に煖房法を採用して居るところでは、外出に際しては必ず羽織なり外套なりを適當に上に纏ふやうに家人の總てに敎ふ可きであり、また斯ういふ家に住んで外出の際に外套の注意を怠らぬやうにしてゐても、他家を訪問した其家が同じ式に出來てゐるのでなければ結局風を引いてしまうわけであり、家に居るときに靴のまゝなり上靴を用ゐたりして椅子式の生活を營んでゐる人が、他家を訪問して靴下のまゝで疊の上に通されるのであると風引きは一層容易に行れはる次第である。

これとは逆に朝から夕まで家を離れて仕事をしてゐる其の建物に近代的の煖房が施されてゐて、夕刻歸つて來る自宅がさう行つてゐないのもまた當然同じ結果をもたらす。

此の半分なりかゝつてゐて半分はもとのまゝに置かれてあるといふ中途半端の近代文化が一番困るのだが、過渡期のことゝて何とも致し方がない。殊にそれがどうなつてゐるかと氣遣はれるのは、一般小學生の狀態である。近來、市内の小學校の多くは完全な煖房法の行はれる建物となつた。完全な煖房法誠に結構であるが、自宅がこれと反對な行き方をしてゐるので其結果がどうあるか、何とかして是等の校舍にある學童の風邪の統計が得たいものである。

だうも斯ういふやうな中途半端な社會狀態に於ては、常に冷水浴や鼻からの深呼吸の練習を行つて皮膚や粘膜を強めて、抵抗力を益すより外方法はない。

これまでが近代人の風を引く話であるが、他國の文化のこの中途半端な採用は日本の社會の總ての方面に行亙り、近代人はチョット上はづつた考へから其文化の採用に誇りと歡ひとを感じつゝあるやうだが、實はそれから大きな害を受けつゝあることに氣がつかずにゐるのではあるまいか。然し乍ら過渡期にあつては だうとも致し方のないものに相違なからう。總てはそこに古來の自國文化と外來のそれとの間に調和が成り立つか、或はまた世界の大勢で結局はそれに征服されてしまうか、それはだうあらうと直接當面の問題として、此中途半端な社會層から來る被害を出來得る限り少なくするために抵抗力を各自が養ふ工夫をすることが肝要であらう。

石禪師を解剖して

長與又郎

×

新井石禪師の解剖の結果、その腦が、古來の大政治家大文學者にも比すべき異常の發達を示して居つたといふことに、驚異の目を瞠つてゐる人が多いやうですが、私は寧ろ、その結果よりも、この大宗敎家が進んで學問のためにその遺骸を提供されたといふことに大きな偉さを感じます

歐羅巴でもこの特志解剖といふことがな

かく盛んですが、私は寡聞にして彼地の大忖正大宗教家で特志解剖を受けたのを聞きませぬ。この意味で佛教徒が、耶蘇教徒に一歩を先んじた譯で、自然科學の價値を認めこれを尊重した點、佛教徒の大いに耶蘇教徒に誇り得る所だと思ひます。然も石禪師は、身體を傷ふことを忌む宗教家として、未曾有の解剖を受けるに就て、世に衒ふものとされることを怖れて、秘密にしてくれ、といふことでしたが、段々知れて來たことですから、それに就て簡單にお話する譯です。

死病は胃癌です。これに就ては特に言ふことがないでせう。

それから腦の解剖の結果ですが、その重量は普通人と大した變りがありませぬ。只、腦の廻轉の構造が非常に緻密で複雜なことです。殊に前頭部の構造が複雜を極めてゐました。之は智力の非常に優れてゐる人の明かな證據で、現に、私の所には特志解剖による知名の人の腦をいろいろ保存してありますが、そしてそれぞれ特徴のあるものもありますが、緻密複雜といふ點では、石禪師の腦が、私の先生の三浦守治博士、夏目漱石氏のと共に、最も目立つてゐるもので、宗教家として世界稀に見るものと思ひます。

尙、專門的に申上げればいろいろ特徴を擧げ得るのですが、それは餘りに專門的のものであり、且つ目下研究中ですから、こゝには非常に優れた人格者であり、學者であり、殊に非凡な記憶力を有つてゐた、といふ點だけを擧げて、何れ研究の結果發表することにします。

×

こゝに一つ、石禪師に就て面白い挿話があります。

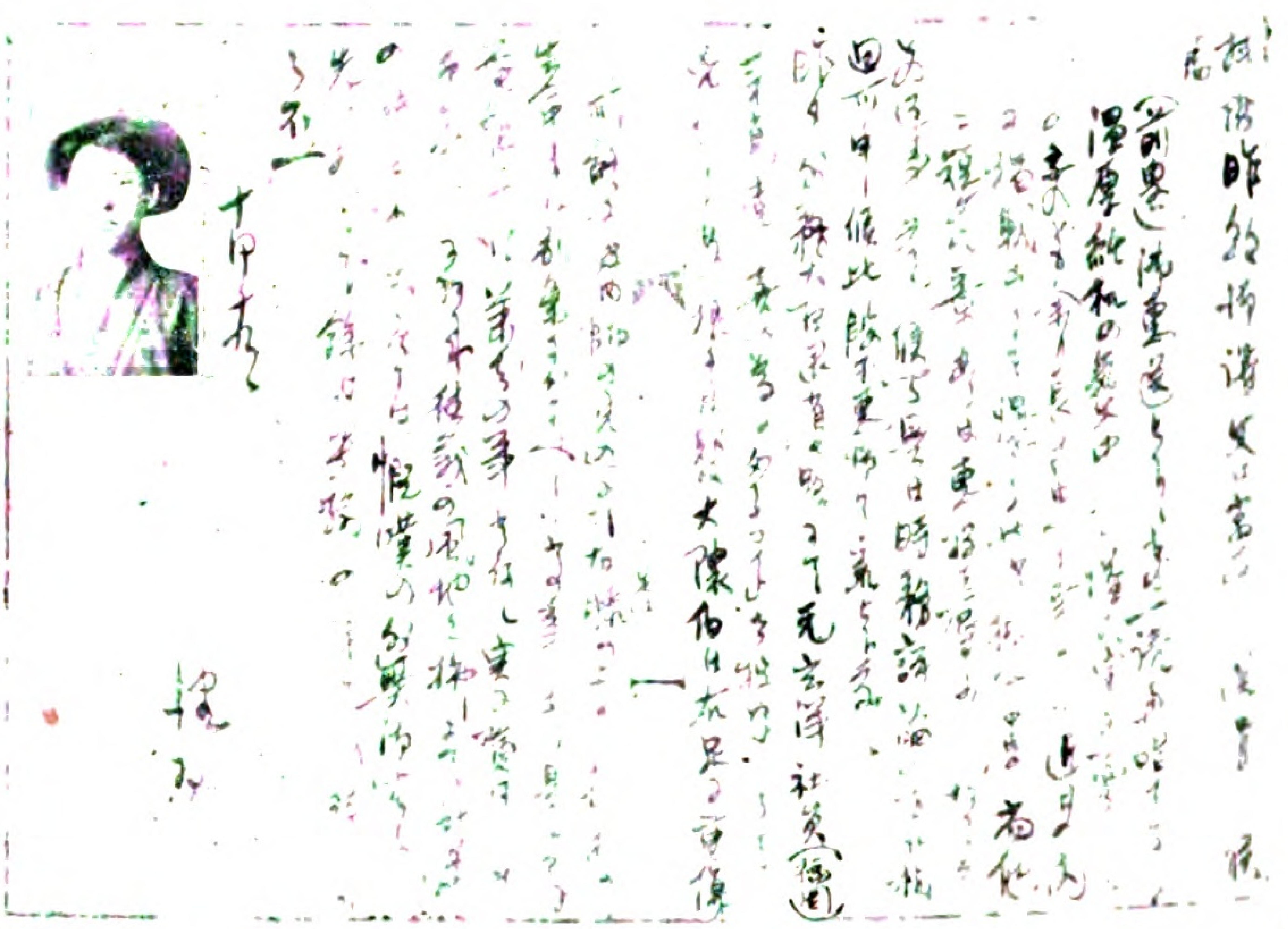
かなり病が進んで、死の約三週間位前のことです。鶴見の總持寺で說教をすることになつてゐたのですが、石禪師は大病をおして行くといひ出したのです。傍についてゐる門弟その他の人々が極力これを止めましたが、どうしても聞きません。結局、主治醫の眞鍋博士にはかる事になつたのです。所が、眞鍋君は石禪師の病症をよく知つて居り、又禪師の志をも察してその說教に行くことを許したのです。

それで大學病院から自動車に寢かされて出掛け、總持寺に着くと擔架に乘せられて壇上の椅子に運ばれたといふ譯です。而もその病軀を提げて一時間餘も滔々と說教して歸つたさうですが、それは實に立派な說教で、その時聞いてゐた人が、後に大學で死なれたといふことを新聞で見て、非常に驚いてゐた位です。

これは是非行からといつた石禪師も宗教家として見上げたものである、また、これを止めた門弟も師弟の情として左もあるべき事です。併しこれを許した眞鍋君の態度には更に感心させられます。若しこれが急病であるとか、傳染病であるとか、或は絕體安靜を必要とする病人ならば格別、既に癌とい痼疾を有つてゐて、前はゞ先の見えてゐる場合、醫師として禪師の生命とする宗教の說法に行くを許したことは偉いことです。醫者としては斯くありたい事で、普通の醫者の仲々出來得ることではない事と思ひます。



(秩父宮殿下のサイベリア丸船室と中央公論)



德富蘆花氏の書簡

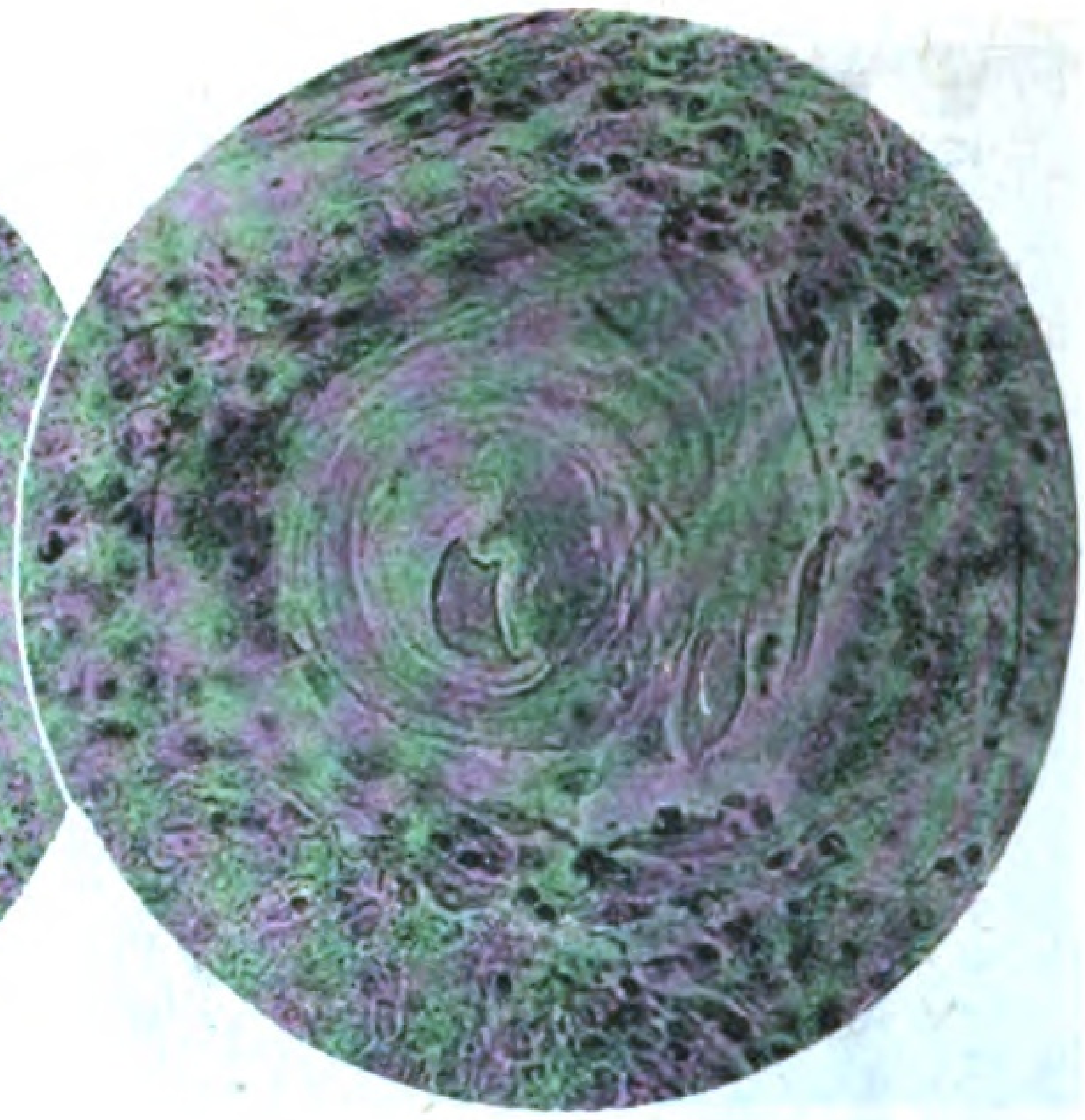


エイゼンシュテインの『十月』

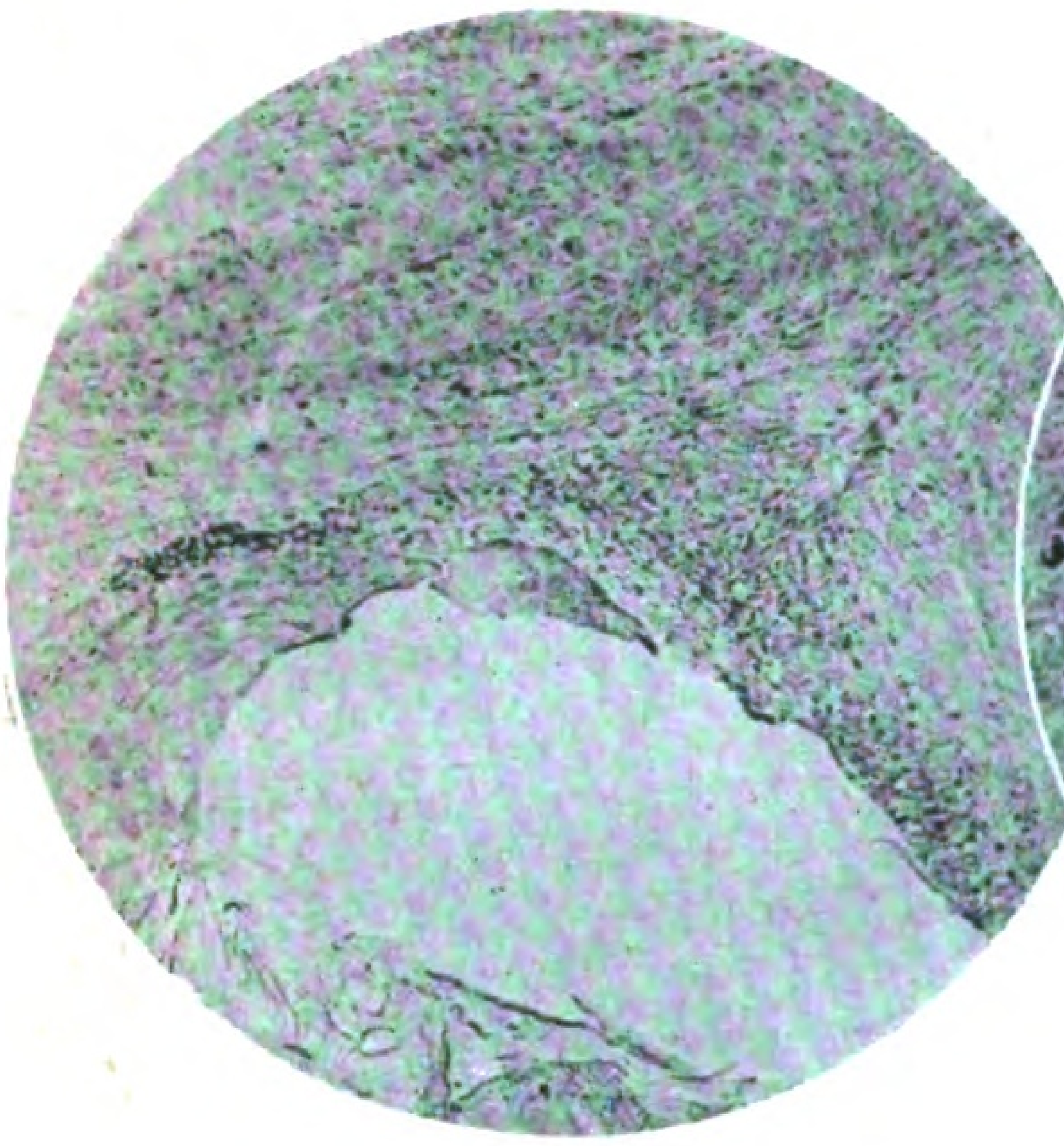
小山内薫

『裝甲艦パチエムキン』で世界的に認められたソヰツトロシヤの映畫監督エス・エイゼンシュテインは革命十年の記念に『十月』と題する歷史的映畫を作りつつある。カメラは例に依つてチツセである。言ふまでもなく十年前の十月を描かうとするのであつて、レエニンのペトログラアド入りから始めて勞農革命の完成までを例の實寫的技巧で見せようとするのであるが、ちと費用が掛り過ぎるので、今まで金を出してゐた政府も一時補助を中止するやうな噂がある。從つて、この繪は完成せずにしまふかも知れない。惜しいことだ。





（第一圖）



（第二圖）

癌の治療（圖解）

川上漸

圖は、癌の治療に關して私等が學會で供覽した十二枚の顯微鏡寫眞の中から、記者のお方が、『一般向き』だといつてお選びになつたものであります。

第一圖は、血清の作用で癌の細胞群が死んで――（中央部の玉葱の切口の樣に見ゆる處）――それを始末する爲めに、種々の細胞が集まつた所であります。暗い點々は、其の細胞の核です。右と左とに澤山の核の集團が見えますが、それ等は巨態細胞といふもの丶核であります。死んだ癌細胞を喰つて居るのであります。

第二圖も、矢張り同じ變化を示して居ります。之れでは、巨態細胞が鯉の樣な形をして、死んだ癌細胞を喰ひ廻つて居る有樣が、誠によく解ります。何も無い處は、癌細胞が始末をせられて出來た空洞です。上の方に、橫に死んで居る圓い物は、弱りかけて居る癌細胞群であります。癌の組織内に巨態細胞が現はれたといふ事は、古今の文献に書いてありませぬ。



世界最古の手術畫

富士川　游

人類の歴史が始まりて最初に行はれたる治療の方法殊に外科手術につきてはこれを證明するの資料が甚だ乏少である。サツカラにて發見せられたる「レリーフ」(浮彫)はこの點から見て、醫學の歴史の上に重要のものである。この「レリーフ」は埃及第六紀の頃、或る王の侍者の墓にあつたもので、その年代は耶蘇紀元前凡そ二千五百年　すなはち今日より、約四千五百年前のものである。圖を見て明かに知らるる通ほりに、二人の手術者が二人の若者に對して包莖截除術を施して居る。第一の方では若者がその顏を手にて覆ひ、手術の血を見ることを避けて居る。第二の方では若者は左手を手術者の頭の上に擧げて居る。「レリーフ」の上部にも尚ほ施術が畫かれて居る。その一は膀胱結石を摘出せるところ、他の一は足に手術を施すところである。



黃柳霜とエレナ・ジユラドウ（上山草人氏「聖林通信」參照）

水煙器

内田魯庵

『目ざまさし草』に見ゆ「ほつか」といふよし。「ほつか」は多分どこかの土語ならんがまだ考へず。タバコ流行の世の中にてタバコやパイプに關する諸家の考證や隨筆が屢々多くの雜誌に見え、單行本として著述されたものもあるが、之だけはマダ何にも見えない。『目ざまし草』を見よ。陶製外部を朱漆で塗る。新嘉坡産、支那人の作らし。

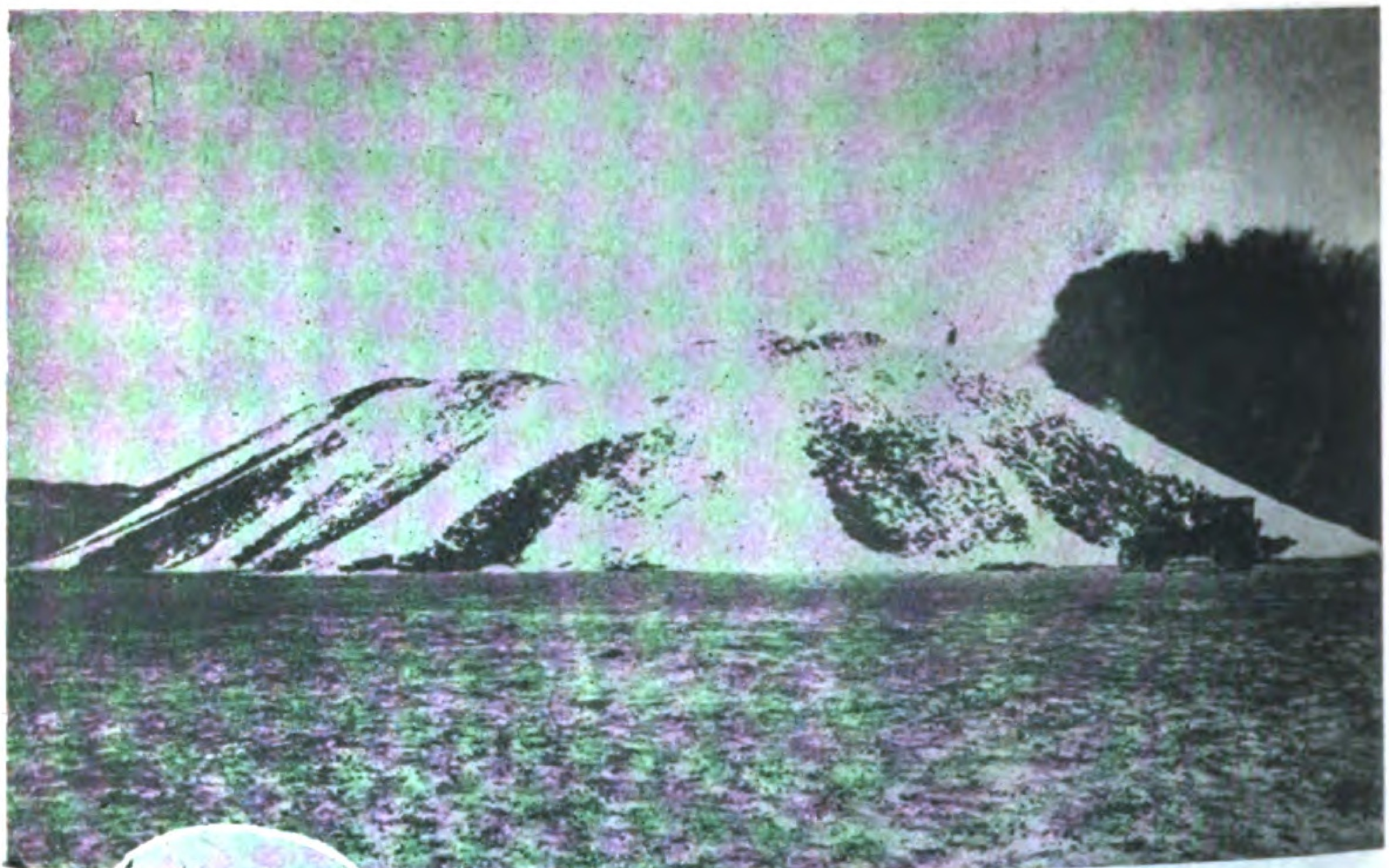






インカ土偶（古秘魯インカ蕃神、出土品、凡そ一千年前の古民族の遺物。

阿非利加人の藝術（ズルウ人木彫、猿屬、多分通稱ケッカイの類ならん）

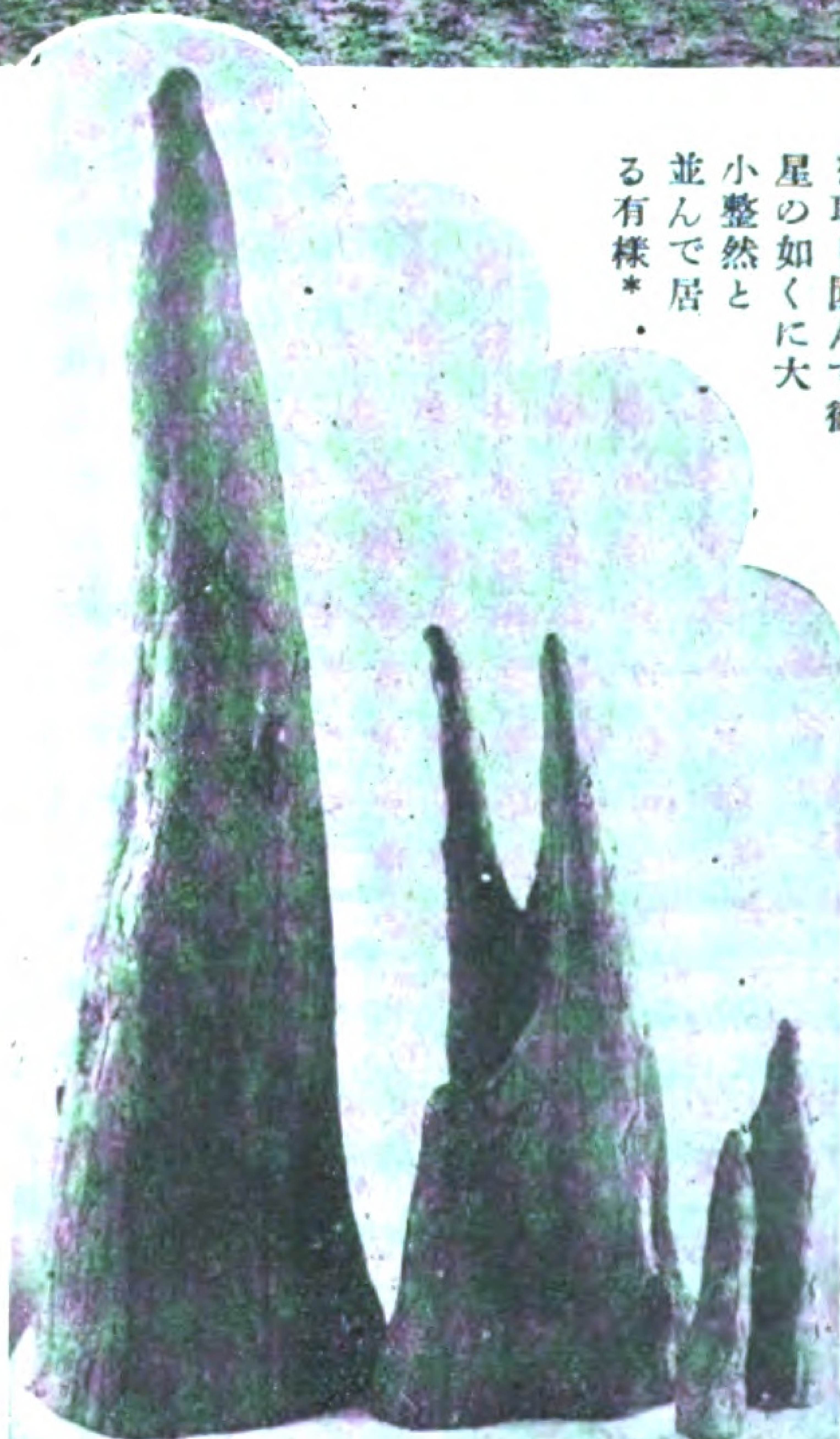


鳴砂丘とサイプレスの膝

上原敬二

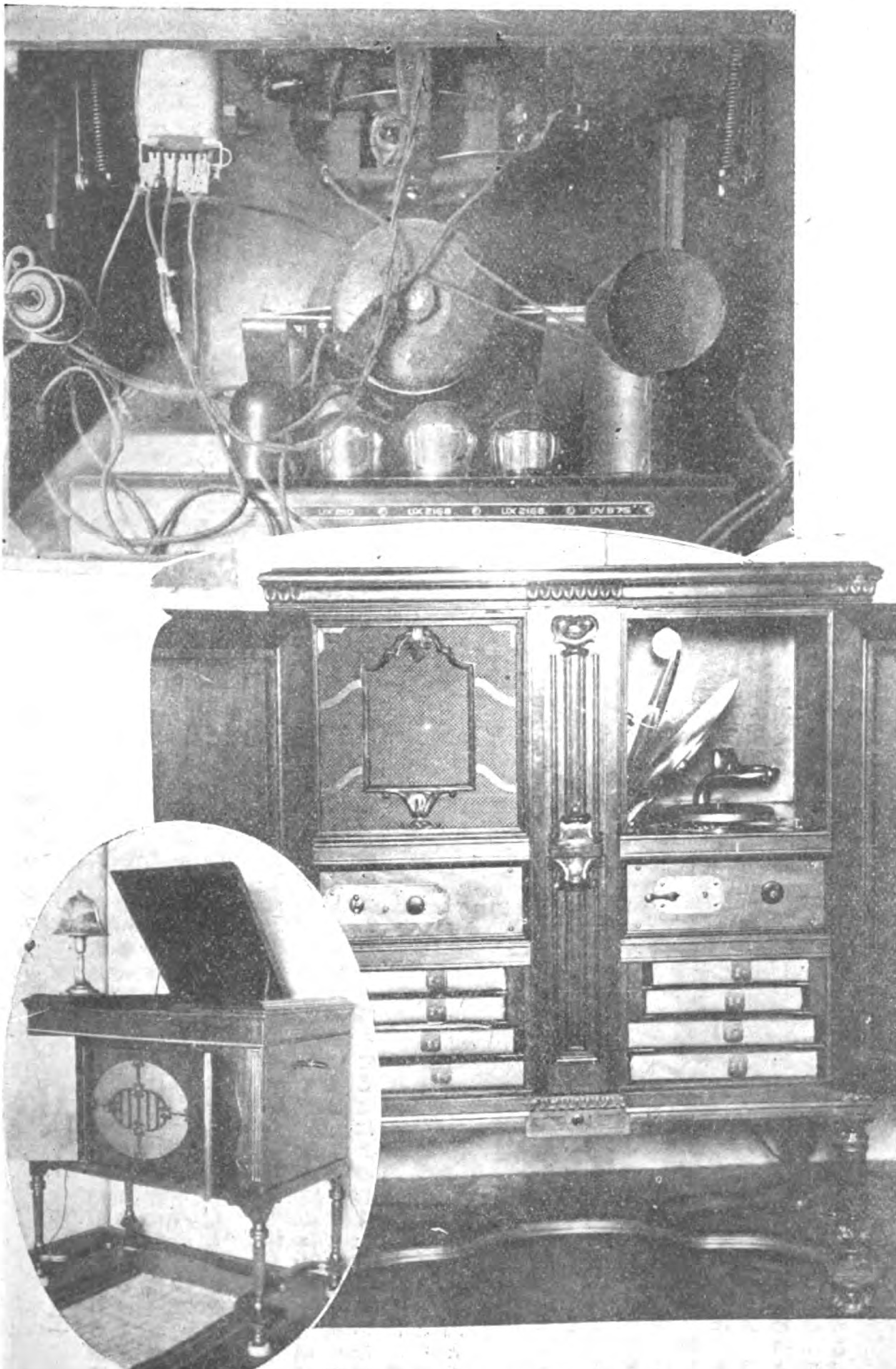
鳴砂丘　ハワイ群島の最北に位する大島カワイ島には植物、地質等の自然景觀にして未だ世に知られて居ないものが多い、ここに示したカワイ島西岸のベーキングサンド卽ち鳴砂丘と唱へられるものはその一つである、海岸に吹き寄せられた貝殼の破片を以て長堤の如き飛砂丘を形成り、僅かにアルガロバの叢林で點々と被はれる許り全丘悉く介の砂山、登れば脚下に微妙なる音して宛も山の鳴くが如き異樣の響する。

サイプレスの膝　ミツシツピー河の下流ルイジアナの沼澤狀原生林を探險した古來の幾多科學者、旅行者が驚異の眼をみはつたものは「サイプレスの膝」と唱ばれたこの落羽松（タキソデウム）の氣根である。陰慘なるスワンプに根を張つて晝尙ほ暗き密林の中を馬を驅つてわけ入る時そこここにこの異樣なる氣根が母樹を取り圍んで衞星の如くに大小整然と並んで居る有樣*



（サイプレスの膝）

*は異樣とも奇態とも名狀し難い感を與へる。そこには亦半熱帶の爬虫類が泥土を懷んで悠々と遊んで居る。



（世界最初の電磁式蓄音機の内部）

（レコード十二枚つゞけてかゝる蓄音機）

（新式の蓄音機）

本文上司小劍氏「蓄音機道樂」參照

漱石さんのロンドンにおけるエピソード

（夏目夫人にまゐらす）

土井晩翠

夏目夫人、――「改造」の正月號を讀んで私が此一文を書かずには居れぬ理由は自然に明かになると信じます、どうぞ終まで虛心坦懷に御讀み下さい。

漱石さんが東京帝國大學英文學の卒業生で私共の先輩であつたことは云ふ迄もありません。『英國詩人の天地山川に對する觀念』などを『哲學雜誌』で田舍書生が驚嘆の目に讀んだのは三十餘年の昔です。そして此渴仰の大家の風貌に初めて接したのは『鹽釜街道に白菊植えて何を聞く聞く、ソリヤ便りきく』の名邑を去る一里餘、あやめが浦の海水浴場地の一ホテルに於てでした『夏目君が……館に來てる、先輩に對する禮としてでも往訪するんだが同伴しないか』と私を誘うて下すつたのは同じく英文科の先輩（目下二高の教頭）玉蟲一郎一さんでした、同鄕の秀才で後同じく英文科に學んだが惜いかな中途で斃れた秀才渡邊芳治君も亦同伴されたと記憶します『天風海濤』と誰やらの書いた額のある室で、初めて受けた印象は寡言で嚴肅な、奧深さうな學者と云ふに過ぎません、何等の委細のお話を承る機會なしに直ぐ其ホテルをお去りになつたからであります。

大學一年級の折、同じく、玉蟲さん（三年級）に誘はれて本鄕の或下宿に參上したことがあります、漱石さんは不在、『すぐお歸りになりませう』と宿の者が云ふので、其室に通つて待つてる間、部屋一面の洋書の堆積に吃驚した田舍書生の自分の姿が今も眼中に浮びます。其後漱石さんは松江と熊本とに前後赴任されて次に英國留學生として出發さるる其送別會（一ツ橋の學士會（?））でに私も列しました。其跡を遂ふたといふ譯でも何でも無いのですが、明治三十四年六月同鄕の志賀潔さん（當時すでに赤痢菌の發見者として學界を驚した大家）が北里研究所からの在歐研究者として出發さるるので、父にせがんで共に常陸丸（後ち日露戰役に擊沈されたもの）の船客として印度洋迪

過で英國に、着いたのは八月中旬、ヴイクトリヤ停車場に漱石さんのお出迎を忝うし、その下宿――クラパム、コンモン附近のとある素人下宿に落ちつきました、純粹の赤ケツトが何かにつけ指導を被つたのは云ふ迄もなく、今の追懷にも感謝せずには居れません。十月の末には都合上ロンドン北西部、翌卅五年三月には其近くのタフネル、パークに轉居し、其後病氣のため英國南岸ブライトン附近に假寓したこともあります。

九月上旬夏目さんをもとの下宿に訪問すると（其訪問は全く偶然であつたが、誰からか病氣と聞いての上であつたか、忘却）驚くべき御樣子――猛烈の神經衰弱、――大體に於て『改造』正月號第二十九ページにあなたが御述べになつてる通の次第でした。

但し同ページに『英文學の研究で留學を命ぜられて彼方へ行つてゐた某氏が落合つて樣子を見ると、ただ事でない……三日ばかり其方が側についてゐて下すつたそうですが、見るほど益怪しい、そこで文部省とかへ（夏目がロンドンで發狂したといふ電報を打たれたといふことです』とありますが、此中の誤は正さねばなりません。私は文部省派遣の留學生では無く前述の如く、父にせがんでの全くの私費生でした、其以前に一年有餘二高の教授となつては居ましたが、當時は依願免官のあとで、文部省とは何等の關係のない一私人一浮浪人でありました。何等の關係のない一私人が文部省に對して『貴省の留學生夏目が發狂した……』云々と打電したなら其こそ本氣の沙汰ではありますまい。文部省にせよ、何省にせよ、省の官命に因て派遣された者の行動に關し消息に關して督學官に非ず監督官にあらぬ一私人が本省に打電するといふことはあり得べきでせうか、常識は之に對して否と答へることは明々白々と信じます。

始めの二日は日通ひでお見舞しましたが下宿のリイル婆さん（老ミスの姉妹二人）が『心配だから一寸でも傍について見てくれ』と曰ひ、漱石さんも『君が居てくれると嬉しい』と曰はれるので、九月九日（重陽だから暗記し易い）朝まづ領事館に行つて住居變更を屆け（翌十日公使館にも同樣）九月十八日迄クラパムのチエーズ八十一に滯在しました、大した御役にも立たず、ろくなお世話も出來なかつたのですが、ともかく十日ばかり同宿したのであります（領事館或は公使館に明治三十五年の日本人住居錄が若し保存されてあるなら以上の日附の誤ないことが證明されませう、どうでもよいことなのですが）

其同宿の折であつたか後であつたか、故芳賀矢一先生が獨乙留學の期が滿ちて歸朝の途中ロンドンに來られました、それで二三の同志が落合つた折、自然話は夏目さんの病氣に及びまし

た。其頃ベルリン留學生の或まじめな方が發狂して下宿屋に放火したといふ一珍事があつたので芳賀先生は『……どうも困つたな、夏目もろくに酒も飲まず、あまりまじめに勉強するから鬱屈して、そうなつたんだろう、もう留學も滿期になる頃だが、それを早めて歸朝をさせたい、歸朝となると多少氣がはれるだろう、文部省の當局に話さうか……』――正確には記憶しませんが以上の意味の言葉があつたやうです、（姉崎正治教授がその席にお出でではなかつたか、どうか、何にしろ二十五六年前のことなので追憶は朦朧たらざるを得ません）

あとに述べる通りそれから一ケ月以内に私は全く英國を去つて仕舞つたので、くわしい其後の消息はわかりませんが、歸朝の期の早まつたことは良好の結果を來した云々とパリで所謂風の便りに聞いたやうです。多分芳賀先生が文部當局と相談なされての上では無かつたでせうか？當時文部省には芳賀先生の親友上田萬年博士が專門局長であられたと記憶します、今日の學習院長福原さん、先頃まで大阪高等學校の野田義夫さんも同省に在官であられたでせう。ともかく此件に關しては漱石さんは感謝さるべきであると信じます。

『夏目と同じ英文學の研究者な所から、夏目が失脚すればその地位（！）が自然自分のところにまわつて來るといふので（！）たいした症状もないのにこんな奸策（！）をめぐらしたのだ（！）彼奴は（！）怪しからん奴だ（！）』などゝ惜德の口調を洩してゐたとがありました』『改造』正月號三十ページの一段は私にとり意外千萬で、今日迄全く思ひもかけなかつた次第であります。

所謂奸策とは『文部省とかへ打電云々』を指してゐるのは言葉の前後から正當に推量されますが、驚き入つた次第です。一私人が文部省に打電云々は前述の如く私自身が發狂せぬ限りにはあり得ません。もし文部省へでは無い、一官人か一私人かに打電したとなら果して誰に對してですか。甚だケチなことを申すやうでお恥しい次第ですが、懷中乏しい當時の一私費生は（眼前フランス行を決定して居つて）當時ロンドンから日本へ『一文部省留學生某が精神病にかゝつた』と發電する餘裕は御座いませんでした。一日も早くと消息を聞きたがつてる父や母や妻にも『フランス着』の電報を發したのではありませんでした。

九月十八日夏目さんの宿を辭した私は十月十一日全く英國を去り、ギクトリヤ停車場から、ニューヘブン、デイプを經て武田五一さん（今日京都大學工學部教授）が親切にもルーアン迄の御出迎を受けて同日夕パリに着き、パンテオン附近、カーテルラタンのスーフロウ館、和田英作さん、中村不折さん、山川孝太郎さんの宿に落ちつきました、そして翌年（三十六年）三

月から南歐の旅に立ち、イタリヤの南端シシリイ島を極として再び北に歸り、瑞西、獨乙に各數月を過し、歸國準備のため、ロンドンに歸つたのは三十七年の秋、日露戰役の闌なりし頃、そして懷しい日東帝國に歸つたのは同年十一月です。

夏目さんの失脚を覗つたなら英國で神妙に英語英文を研究して機會を待つたであらうとは常識にも考へられぬでせうか。

歸國後、父の望なので東京には住せず、仙臺に歸つてブラブラして居ましたが卅八年四月二高の獨語主任青木（昌吉）教授が『獨乙語の教師に欠員があるから手傳はぬか』との好意と周旋とにより、甚だ覺束ない獨乙語教師として二三年つとめ、つづいて職員の都合がついて英語部へ移つて爾來二十餘年、今日も猶ほ其運命を續けて居ります、非材の分止むを得ません。

あなたが誤つて漱石さんのお言葉を傳へたとは到底思ひもよらぬ事ですが、其に因れば漱石さんは二重の誤解をなさいました。

（一）私が『夏目發狂』云々の打電をしたとの無いのに打電したとの誤解。

（二）誰が發電したにせよ、せぬにせよ、發電があつたとすれば前後の事情より察しても分る通り其發電者は好意上よりなりしを惡意よりとの誤解。

外ならぬあなたのお言葉ですから、到底之を否定する事は出來ませんが、實際夏目漱石先生があゝいふ言葉を發せられ、あゝいふ考を抱かれたとは、どうしても信じたくないのであります。

歸朝以來千駄木町のお宅に參上したこともあります、蛟龍池底を出でて淵に躍る前後は度々賞賛と渇仰の言を呈したともあります。漱石全集中の書翰部にある通り、漱石さんの自畫像に懇篤の言を添へられたのを頂戴したともあります。その漱石さんが私を目して『我が失脚に乘ぜんとて奸策を弄したもの』と思はれ、又人に口外されたとは、どうしても論理に合はず、常識の所見にも合はぬ次第です。『怨を匿して友とするは左丘明は耻づ、丘も亦耻づ』と孔夫子が仰せられました。しかし何度申しても外ならぬあなたが『良人がかく曰つた』と公言さるゝ上は全く恐縮の外はありません。

當時御發病の折、ロンドンに私が居りましたと、私が當時十日餘も同宿いたしました事、また英文科卒業生であること、以上が煩をしたので甚だ遺憾に耐へません。

辯明したくも漱石さんは、もはや此世におはさず、せめてあなたになりと此誤解を正したく此一文を草するのであります。

作品に對する辯難攻擊には在來決して答へませんでした、歸

朝忽々ある詩派の一雜誌が黨同伐異の精神からか、蘆花氏の『出廬』を攻擊した其翌月、私のやうなものにも喰つてかゝり、謂れない惡罵を逞うした折も默視して、ただ在京の友へ『買りかねた喧嘩の花も江戸の春』と駄句つた位のものでした。

しかし人格に對しての無實の誣言は斷じて放置するわけには行きません、舊い古人の文句を引くのは憚る處ですが『正當の證據によつてわが不法を證明せよ、上帝は爾と我との間を判ぜん』であります。

此一文は遺言してまでも必ずわが拙い集の中へ是非とも編入させます。

ルーソーの『告白』の序に『此一卷を携へて上帝の前に出で……』云々とありますが私も此一文は死後九天の上九泉の下いづこへなりと示すを憚りません。其ルーソーより聯想されますが、文學上の天才には時として（狂氣的の半面として）甚だしい矯激の發作があります。萬里の異郷の孤館の研學が度を過して多少精神に異狀を來したといふとは、むしろ同情すべき事で決して不名譽とは思ひませんが漱石さんが其事實をあとから否定されんとするのも、或は又歸朝の後にもかゝる發作の折にあゝいふ言を發せられたとするも、是は天才の痛はしい半面と見てただ嘆息すべきでありませう。

今は世に無い御良人に對して辭句或は敬を失したかも知れませんが、漱石さんが深淵の學識と非凡の天才とを兼ねた文豪であり、明治大正に亘りて燦々の光彩を放つた偉大の作家であるといふ事實に對しては、深厚の敬意を拂ひつゝある私であります。そして此一文を書いて冤を濺ぐ機會を偶然にも與へて下すつたあなたには一片感謝の念が無いではありません、決して皮肉にかく申すのではありません。

失戀の友に同情した蘆花氏の書翰

素軒隱仙

人を戀ひしてその戀を失ふは
戀せざりしに優る、いくばくぞ。

テニソン卿

今から三十九年前、隱仙背つて銀杏城下にありし頃、一處女と戀に落ちたことがあつた。青春妙齡の時期には、男女を問はず、皆その胸底に愛の熱火を藏してをる。幼い間に父母にのみ捧げた愛は、今やその方向を轉じて、その對象を家庭以外に求めようとするのだ。同性に向つて燃ゆるときは、これを友情といひ、異性に對して爆發する時は、これを戀愛とよぶ。盲目にして浪漫的であつた予が戀は、傳統、形式、慣習等の籬を飛び越へて（實は無視して）、大膽率直に、遣る瀨ない心を、その處女に告白したのであつた。

Die is cast.
Rubicon past.
Win or wane?
My vision of Rome!

その告白はこれしきの些事をシーザアのローマ侵入に擬へたほどの盲滅法な上掲の如き熱句を以てかき起されたのである。その愚や及ぶべからずとは、眞にこの事であらう。だが向ふ見ずの愚者に眞劍味があつた。陰陽の電波互に感應して、二つの心は雄辯にその戀を語つたのである。婚約將に成らんとして一陣の烈風起り、これを吹き落した。大人の不承諾が即ちそれであつた。事の決著するまでにかれこれ八ケ月を要したが、その間兩人の文通は自由に許され又可なり頻繁であつた。愛人は最終の成功を信じ、又予をしてしか信ぜしめんとしたのである。左れど天候變り易く實務の往來繁く、星光明滅、晴雨判じがたかつた。この際兩者の性格や事情を知悉して深く隱仙に同情の淚をそゝぎ、一喜一憂、肉身の兄弟に對する如く予を慰めてくれた人が、故德富健次郎氏であつた。予が健次郎氏に初めて逢つたのは、明治十九年頃で同志社の校庭に於てゞあつた。その後君は『茶色の目』の所有者と戀仲となり、家族親戚の不承知で失戀の苦杯を嘗めた末、少しく健康を損じたのである。二十一年の春から保養かた〲私立熊本英學校に教鞭を執つて居られた。予も亦同年の暮に同校の教師として赴任し、久方ぶりに同氏と出會ふたのである。朝となく夕となく共に語り共に散歩して舊情を溫め、殆ど『沸騰點を去る百度（？）の處まで押しのぼつた』のである（健氏の語。）二十三年五月十日氏は令兄の招電に應じて東上の途に上つた。その後は雁信に託して交を續けてゐたが、二十三年一月以後予の一身に戀愛問題起り、殊にその事が難關に入るや、氏の同情は幾倍の深さを增したやうに覺える。左に掲げんとするはその頃氏が予に寄せられた書翰である。予が四十年の間これらの書翰を愛藏したのは、偏へに氏の友情に感激した爲めであり、玆にこれを公表するのも亦亡き友

の高誼を謝せんが爲めである。第一信は予が漠然と遠からず婚約の運びに至らんと報せしに對して送られたものである。

第一信（明治二十三年一月三十日）

千秋萬歳!!!

願くは絞りの松の常盤の色の千代に絶へせず、さゞれ石の巖となりて苔のむすまでも清き契りの絶えざらむことを。

次に發するは兄の禁じ玉へるWHO?なり。貴書に據りて推するにK孃にはあらざるが如し、然らばY孃?否是れも然りとは思はれず、素よりS子の君にあらざること勿論なるべければ、此の判じ物、生には一向判斷が付かず、サスピション指して曰はく女學校教師M君にはあらざる乎と。

然れども兄が秘密の匣を開き玉ふ迄は終に知る由なかるべし。一日千秋!併し已に運命の確定したる上は、若しやと思ひ居たる可憐孃の中には失○するも多からむ呵々。

吁兄よ熊城には祥雲の靉靆たるを喜べども、東の空には愁雲漠々一に何ぞ不幸の多きや。一月四日を始めとして、小生の親戚知友の中に眠に就くもの幾何なるを知らず。新島先生を失へるに至つては、是れ邦家の不幸。今年は奈何ぞ斯くの如く凶事の多きや。

書きしるしたき事山程あれども、今一時に記し盡す能はざれば、不日更に詳細なる一書を認めて座右に呈せん。先は御祝儀まで

芽出度かしく

一月三十日　　蝶々居士

T　愛　兄

第二信（明治二十三年四月二十六日）

は縁談進行の形勢やゝ氣づはかしと予が報せしに對して送られたものである。

東台花謝して綠陰鬱蔥たり。終日禽奔獸走して紅塵堆裏に生活を保つ。宜なり腦漿枯涸して日々に俗了せらるゝを感ずることや。懐ふ權現山上芝草甦の如く、龍田峯頭青染むるに似たるを。幸に弟が爲に彼の松に謝して云へ。日夜卿を忘るゝの暇なしと。

兄よ："Course of true love never did run smooth"（眞の戀愛の進み行く道筋の平かにして滑かなるはいと稀なり）とは詩翁の名言。斯くてこそ眞正のラブは顯らはるれ。急ぐなかれ。悶ゆるなかれ。待つ間もまた樂しからずや。兄のサッファリング（懊惱）兄のエクスタジー（狂喜）を親しく兄の面上に見、

親しく兄の口頭より聞かんと欲するの念日々に切なれども、時日の許す迄は是も亦待たざるべからざるものか。

兄よ僕は我ソルクルの内に於て悲惨なる一個の活劇を目撃せり。其事小説よりも奇に、實地よりも妙なり。兄之れを知るや否。吁是に比すれば兄のラヴのスムースなる事よ。

二十三年――生に取つてな左程のインテレトなし。日々政治世界の出來事を見聞すれども、此の狭隘なる脳髄は敢へて此を入るゝの餘地なきなり。兄等は獨り風塵の外にありて擬に靜養をなせども、不幸の小弟等は日々脳を枯らすのみ。然れども心は常に修養の大切なるを忘れず、ひとり暇なきは弟が遺憾に堪へざる處。

小弟誠に愚、才乏しく識淺く、尋常の兵卒たること猶難し。兄の常に鞭韃するなくば或は恐る終に碌々として死せんことを。

吁弟は久しく世に永らふる程ますくわが一粟の値だになきを感ず。人の大膽なるを見る程わが小膽なるを覺ふ。是れ人の常。亂筆御免を乞ふ。餘は次信に附すべし。

四月廿六日朝　　疑はずして愛する

小弟健拜

T大兄

第三信（明治二十三年五月三十日）

貴東只今落掌「本月中旬より」云々。一讀痛心の至りに堪へず。熊本のソルタル内に何か事故の出來して兄を煩はすなる乎。是れ猶可なり。然れども――若しM君の家嚴に異存あるか。T君の家に事變ありて兄の前路を遮るあらば、弟實に泣いて之を帝座の下に訴へざるを得ず。乞ふ速かやに翰を飛して弟がシムパシーの向ふべき方角を知らしめよ。

五月三十日　　劣弟健拜

T愛兄

第四信（明治二十三年八月十九日）

第四信は縁談が不調に終はりし通報を聞いて認められたものである。

朝來貴書を得、驚愕措く所を知らず。一日の業を終へて歸つて晩風星光の間、靜臥して事の次第を想ふ。冷々弟の如きも亦涙墜つるを覺ふ。

初め貴書を見るや、思へらくM大人既に兄を敬愛する如斯。」

M姉の兄にdevoted（獻身的）なる御願くば、大人焉んぞ蹶然諾を容れて五歲の小兒の成長を待ち、其間よし不慮の事ありとも之を兄等に托して其保管をなさしめ、以てM家の跡を嗣がしめざるやと。若し一家興亡の事左程に心を煩さば大人が兄を信じ、わが娘を信ずるの心を以て、萬事を兄等に打任して可なりと。

余は大人に對して平かなる能はざるものありしが、また一考すれば事玆に出づるも蓋し萬々已む能はざるによりて然るならん。若し他に然せずして濟むの道あらば、必ず其道をとられしならんと思ひては、弟も亦斷然意を茲に決するの外あらず。

曾て聞く"Was there ever a tale of human love which was not also the tale of human tears?"（人間の戀愛の物語の中に、人間の涙の物語ならざりし例嘗つてありしや）と實に然り。然れども兄今斷然犧牲とならんとす。弟は滿腔の眞情を以て兄が聖淨の大勇氣、自ら犧牲となるの眞勇を賛す。兄が腸九廻せるか。M姉の心寸斷せるか。M大人が左右の辻に彷徨されたるか。生無情と雖もまた他の深愛に疎からざる者。然れども事全く正に始まりて義に終り、情に發して愛に結ぶ。弟は兄が斷然M姉を手中より放ち去りたるを見て、兄がM姉を愛するの如何ばかり深きかを痛感す。其人の爲めに最大の苦痛を忍ぶは其人を愛するの極なり。弟は今云ふ處を知らず。慰？無益なり。說？無用なり。不同意？否。弟は茲に無我的義務の貴例を見て、欣喜に堪へざる者。焉んぞ賢明を以て逆境を以て、偏拗を以て、濫りに事の衝に當らんや。

弟尙詳細を知るを望む。兄の心地稍平生に歸らば、吾兄が尋常一樣となるは、到底倏々の歲月を以てすべからざるも、願くば倘詳細委曲を知らしめ玉へ。實に世には眞の愛情談にて涙の譚ならざるものなし。此の間にありてこそ男兒清廉の德、婦人貞美の操行はあらはるゝなり。意を安んぜよ。弟は今日に至るまで兄を兄として愛せり。今日より眞個の男兒として敬すべし。弟常に兄を以てプルーデントなりとし、ウェーリーなりとし、ケーアフルなりとせり。兄が昨年下半より今年今日までの所爲は實に弟が信ずる處に背かず。兄が心情は水晶の如く弟が心に映す。東都の人士皆兄に逆ふて立ち、誹言毀語日々に耳に入るも、弟豈に梭を投ぜんや。交流は玆なり。信と愛とは玆なり。前後亂れて筆意明かならず。只願くは弟がシムパシーとアドミレーションとは弟がプレーヤーと共に兄の上M嬢の上將たまたM大人の上にあるを信ぜよ。

八月十九日朝

德富健拜

T　愛兄

第五信

（明治二十五年十一月六日）

予が煩悶絕望に陷つた際、予と共に悲んでくれた健次郎君は、明治二十五年の晩秋予がいよ〳〵T孃と結婚式を舉ぐるやうに決せし事を報じたとき、予と共に最も深く悅んでくれたのであつた。左に揭ぐる第五信は即ちその時の祝詞である。

敬愛する素軒兄よ。遠からぬ新郎足下よ。

突然の一書いかに小生を驚かし、いかに小生を喜ばしめしかは兄が僥かなる想像を以てすると雖も恐らくは描き出し難からん。封皮を見て思へらく疎濶の罪を叱せらるゝならむか――Suspicion haunts the guilty mind――（疑心暗鬼を生ず）ぞ圖らん、Plasantest Disappointment（最も喜ばしき失望）と何を喫せむとは。

生は滿胸の喜を以て此一報を迎ふ。

道遠ふして

平原渺々一千里

何處登レ高望ニ帝京一

の感あり。兄よ生は唯遙かに帝京を望むで、兄等兩位の前程萬里を祝し、淸福雨の如く降らむことを祈るべきのみ。兄よ時恰も淸秋正に闌なるの節、生は遙かに菊の花一枝を折りて兄に捧げむ。新郎足下よ願くは霜に傲れる一枝の菊の如くに淸節を磨き玉へ。新婦足下よ願くは菊花の如くに淸き香をたもち玉へ。而して願くは兄等共に菊の花の壽をたもち玉へ。思ふ東山三十六、秋晴に歷々として笑みて兄等を祝ふならむ。楓葉は紅を帶び錦を裝ひて天は一點の纎翳もなき瑠璃の鏡を磨きて新婚の榮をますらむ。幸福なる新郎新婦の君達よ。

兄よあまり晴天の霹靂なりしゆへ、生は兄の所謂第二のM孃の何と呼ばれ玉ふかをも知らざるなり。つれなき君よいかに心構の急がしきとて、今少し詳かに告げてもよかるべきに、生は唯兄が後信の來るを待つのみ。M君は心ある人、必ず喜びて兄の喜を喜ばれしならむ。兄よ――兄が歡喜の晴空に一點の雲を湧かし來るを許せ――。然れども東都には或は恐る早晩此報を聞いて竊かに一長息をなすの人あらむことを。兄よ此れ何人ぞや。

生も身體壯健、唯朋友の心を明かすべきなきが故に、百萬の人の中にありて猶幾分か寂寥の感なき能はず――但此は決して吾♡に關せるならず――併し父あり母あり、兄あり姉あり、老人あり小兒あり、月あり花あり、書卷あり、寂寥を感ずるは蓋し愚かなる事なるべし。猶兄に告ぐべき事數多あるもあまり長くなる樣なれば先づ擱筆して餘は後に讓らむ。

兄よ此の喜ばしき事によりてまた開けたる雁の道を再び絕た

さらんことを希ふ。健康清福常に兄の上併せて兄が親愛たる君の上にあれ。

日曜の朝　　　　　　　　　　　　　　　　德富健

素軒大兄

隱仙は故健次郎氏の友情を感謝しこれを記念すると同時に、この事件の爲めに仲介斡旋の勞を添ふした古稀を超えて猶ほかくしやくたるE博士とその夫人の厚意を拜謝せさるを得ない。予は第一戀人に捧げた愛を第二戀人なる吾が妻に移して三十七年間幸福な人生を營んで來た。一年上の予が二十七歳で二十一の女性と婚した如く、健次郎氏も同じ年齡で二十一の愛子夫人を娶られたのも奇しき偶合であつた。女性尊重と一夫一婦の天理を信じ、且これを嚴守した點に於ては、健次郎氏も予も同樣であつた。初戀の對象であつたM孃（孃はその後久しく米國に學ばれた某博士の夫人として、又數名の子女の母として健在である。）及び術齡のM大人に向つては、予は好感善意の外に何ものもない。予はテニソン卿が予を欺かざりしことを體驗したのである。（書翰中の原語原文の譯は註者の挿入である）

"'Tis better to have loved and lost
Than never to have loved at all——"
Lord Tennyson in "In Memoriam",

聖林美人禮讃

——ハリーウツド通信(一)——

上山草人

その一　黃柳霜嬢

あめりかのキヤメラ霰のふるなかに
　黃柳霜と立ちすくみつつ
　　　　——よみびと　草人——

黃柳霜はアナ・メー・ウオングと讀みます。純粹の支那娘で、本年二十一才（特選畫報欄參照）映畫の都ハリウドで世界のスターを夢みて機會を狙ふ雲霞の如き東洋系の娘子軍の中にあつて獨りぬきんで、最近俄に賣出したメキシコの美人ドロレス・デルリオ孃と先づ並び讃へられる名花でありそす。新聞雜誌にはよく私の名と並んで揭げられる事が多く、聖林で極東の映畫が製作される際には先づ十中八九は一所に出演する事になつてゐますから、懇意といふよりは自然親類つきあひを致してをり

ます。私の最初の映畫『バグダッドの盗賊』にも女間諜として出演し、殆んど全裸體の肉體美をスクリーンに映出して世界のファンを惱殺したことは多分諸君の記憶の中にも殘つてゐませう。其の他彼女と共に出演した映畫はこゝ三四年の間にかれこれ十二三にものぼりませうか。

パッチリと眼がすゞしいから可憐でもありますが技巧で眼を細めますと東洋人の神秘が漾よひますので、よく女間諜といふやうな敵役にも使はれます。羨ましいのはその完全な肉體の發達でありまして當地に隨分有望な日本の娘さん達もありますが此の點ではアナを凌ぐ事は到底出來ないでせう。彼女は夙くから映畫界に近づいてもう十年以上になり、雪洲君の畫にも小さな役で出演した事があるといつてゐます。私がまだ映畫界に入らない以前『戀の水蓮』とかいふ着色映畫にスターのパートをとつて現はれた事があるさうです。それ以來彼女には大きなチャンスが廻つて來ないので始終こぼしてゐます。

羅府の洗濯やさんの長女で、年頃の妹が二人あります。上のを黄柳英といひ下のを黄柳香と云つていづれも相當美人であるに係はらずまだ迚も姉程に賣込む事が出來ません。中姉は殆んど見込がありませんが末娘は年も若く一種の魅力があり端倪すべからずでせう。彼女の異母兄が早大文科に學んでゐるといふことです。

最近獨逸のウーファアー會社で大きな東洋畫を撮影する計劃があつて彼女と私とを買に來まして今年の秋危く二人で獨逸へ出掛ける所でしたがいろ〳〵の條件でまとまらないでをります。二人を連れに來たのはカール・フエルモア博士といつてラインハルト氏のミラクルの脚色をした人であります。彼女の自動車はスチユードベーカーで自分でドライブしてゐます。交際は中々上手で人をそらしません。アメリカ生れですから英語は流暢で反對に支那本國に對する智識は皆無です。私にくれた寫眞の支那文字もやつと書いた程です。英譯の論語などをセツトに持込んで草人の講義を聽く事であります。拙宅のスキヤキ會などにはよくやつて來て日本食を喜んで食べます。日本風の食物ではざるそば、さしみが一番結構だといつてをります。餘興の順番に當りますと自作の小唄をうたひます。自作といふよりも當地の有名な作者から作つて貰つた小唄でこちらの流行歌曲に合せてうたふのですが

わたしやアナ・メー・ウオング
遠い〳〵ホンコンから來ました。

といふやうな調子でほそ〳〵とすんだ聲で唱つて人の心をひきます。今度全文を書て貰ひました。

I'm Anna May Wong
From old Hong Kong
But now I'm from Hollywood
Folks are kind to me
Sweet as they can be
In Forty Winks and Bagdad
My oriental style
Fill the actors with amusement
I made them smile
China bless her
Couldn't treat me any finer
Then when she sent me over
In a transpacific liner
From China
You like China silks and rice
I hope you think I'm twice as nice
I'm Anna May Wong
From old Hong Kong
I want to stay here right along.

近頃は市岡とし江、山岡アイリス（有名なる政客故山岡音高氏令嬢）といふやうな日本娘やウキニー若林その他の支那娘、エレナ・ジュラドウといふやうなフイリッピンの美人などが綺羅として映畫界に競ひ進んでをります際私は親友としてのアナの一層の進展を祈つて止まないものであります。

揭出の腰折の説明になりますが各スタジオで動いてゐるミッチエルや、ヴエレンドハウエルその他のキヤメラが回轉する音は板屋の霰の如くものすごく、その前に立つ映畫人は矢面に立つ軍人と異らず、まして紅毛の國に深入りして碧眼輔作の國の麗人と只二人相擁する日の多きは感慨無量であります。

随分無沙汰を申し上げました。私も「映畫」と申す現代の寵兒にかゝり合ひましたおかげで故國各方面の新聞雜誌等より寄稿を乞はれ、ありがたくお受けしたものゝ日々の撮影其の他に時をすごしその上〳〵とおたのみが來るので今度はその振合上うつかり筆もとれず、四千哩の遠方を幸何方へも失禮な沈默を續けて參りましたが、御誌は社主麻田氏及び故瀧田先生に恩義ありその上海外電報を以ての御催促にうろたへ、あはてゝ認めます。ひどくつまらないものだがでも此の第一信が正月號に間に合ひますよう……何れ續々美人一人に一首の腰折を添へて御通信いたしますから悪からず。

映畫時評

小山内薫
久米正雄
室生犀星

新春邦畫一評

（マキノ映畫を論じて、一言、劍戟映畫に及ぶ。）

正月の映畫は、何でもニコ／＼ものと定まつて居るやうである。それも大した實質のない、ニコ／＼ものでありさへすれば、どんなものでもお客が來ると、相場を決めて居るやうである。が、お客がキャ／＼と來て居るだけに、さう／＼無責任なものも出せないので、各製作會社とも、新春の封切戰には、相應の苦心をして居るらしい。新春一の替は、日活の「野次喜太郎王の卷」「砲煙彈雨」と、松竹の「鼠小僧次郎吉」「愛の凱歌」と東亞の「阿修羅」と、帝キネの「兒雷也」あたりの戰だつたらしい。それを私は、花々しくも黑々とした、大晦日前後の新聞の廣告面で見た。そして三ケ日の人出が、例年に增して多かつた由を、休刊明けの朝刊で知つた。無事で、多幸な？新春は、この映畫界にも、充分訪れたらしい。

私は、さすがに三ケ日は、恐れをなして近づかなかつた。一つは人混みの中へ入ると、必ず受けて來る風邪が恐ろしかつたからだ。が、正月ももう今日で七草、松が取れる段になつて見ると、邦畫批評を引受けた手前、一日は淺草に赴いて、春の景氣をも見ねばならなかつた。そして赴いた。幸ひ川口松太郎君と言ふ、一騎當千の同行者を得て、勇氣を鼓舞し鼓舞し、一日一夜見廻つた。さうして果して、風邪を引いて、二日寢た。此の文はそのまだ熱の取れぬ床の中で、うつら／＼とその一日の淺草見物を思ひ出し乍ら、書きつけたものだ。風邪の敵を、直ぐ此處で打たう、と思ふ程、私は時代劇のシネリオ・ライターめ

いた氣象は持ち合さない。たゞ、前號で大きく呼號したやうた、所謂「批評」をするためには、たゞ少しうつら〱として居る。批評が印象とダブつて、それがピンボケとなり、更に意味なく溶暗しはせぬかと思ふのだ。……

マキノ映畫の存在

先づ看板を見て、千代田館のマキノ映畫「毒蛇」と言ふのを見る事にする。マキノは、日活や松竹や、又更に帝キネ東亞に比べると、商資會社としては、小さな存在かも知れぬが、その作る所のものは、案外日本の映畫界では、底力があるやうに感ぜられるからだ。もと〱マキノの時代物なるものは、其發生史から云へば、日活系統から、——必然に松之助と源流を共にするものであつて、それが一つは上つて天となり、一つは下つて地となつたもので、時代物では天下を二分するの觀あるのも、御大マキノの經歷から考へて當然であらうが、併し、又それだけに、此處で作る、——寧ろ濫造される時代物の功罪も、考へなければならぬ問題だからだ。

私をして云はしむるならば、日本の時代物なるものは、マキノ松之助の日活に於ける提携破れて以來、——一手にマキノ莊造氏の手に依つて、左右され、清濁されて居るやうに思ふからだ。剣戟映畫に、今日の隆盛あらしめたのも、一は外に於て伯山、澤田正二郎及び大衆文藝家諸氏の功あり、内に又坂東妻三郎、月形龍之助、市川百々之助、等々の名優があつて、此勇敢無双の大時代を形成したとは云へ、その凡ての源流は、溯つて悉く莊造ォン大一人に歸し、其及ぶところ、御室獨特の粗製濫造のフル・キヤパシティーを盡して、津々浦々まで「黑い假面」と、「虎徹」の汎濫を來した。——直木三十五なぞも、威張つては居るが、此の間に於て、決して罪無かつたとは言はせぬ。

評者は、正直のところ、さう云ふ多くの所謂「剣戟映畫」を見ては居ない。が、此の夏、所用あつて北方札幌に赴いた時、一夜常設館の看板を見て歩くや、マキノ上映館の前のスチルを見るに及んで、成程、是ある哉と思つた。其處には、大小十數個の場面が揭げられてある中に、或ひは、白面清秀の浪人が、覆面倨傲の武士が、亂髮花顏の少婦と共に、或は刀を青眼に据へ、切り下ろし、上に構へ、下に長く差し伸べ、妙な、併し一と癖ある形で、亂閃して居るのばかりが、すらりと揭げられて、中には、數十の捕手に十手を差しつけられて、すつくと立ち直つた姿などが、まア、彫刻的と云へば彫刻的に、繪畫的と云へば繪畫的に、——から云ふピクチユア・センスよ、呪ひあれ。——配されたのがあつた。そしてそれらは他の館の、現代に似て

現代でない、何處か橫濱と東京の狂人的一地點にしかなからう所の所謂現代的服裝をした、可笑しな靑年男女が、白くさへありや陰影などの要らぬ白粉だらけの平べつたい顏に、眞面な人工光線を當てて、眞つ白く拔かした繪圖の前よりは、確に行く人の足を留めて居るのを見ると、再び成程と思つた。成程と思ひ序に、餘つ程中へ入つて、いきなり、その二十に近いスチルの場面の、どれかに接したいと思つたが、折角北海道まで來て、こんなに涼しいのにと思つて、斷念した。

が、そのスチルを見ただけで、私を成程と感じさせるものが、確にマキノの時代物にはある。確に或るものが在る。それを今日は見屆けたい。見屆け得られるものならば。――さう思つて千代田館の後方席に立つて居た。立つて、人波に押され乍ら、映畫を見るのも久しぶりだ。から言ふ景氣は決して惡くはない。……

「毒蛇」は丁度初まる所だつた。時間も丁度よかつた。原作は壽々喜多呂九平、監督は二川文太郎、主演は月形龍之助。實を言ふと、みんな私の舊知の名だ。殊に監督と主演者には、頗馴染さへある。私は樂しみにして、是ら諸公が作り出す畫面の展開を待つた。此の原作監督俳優は、いづれもマキノ時代劇部の、俳優のみならぬ花形總出（オール・スター・キャスト）だ。マキノ新春の代表作に違ひはあるまい。

作者壽々木多呂九平

一體私は、同志直木の信ずるやうに、日本映畫界の現狀では、時代物の製作者の方が、たゞ原作脚色者と云ふ方面から見ても、現代劇よりいゝか、どうかは知らない。が、數少なき有能な日本映畫界の原作者の中では、此の壽々喜多呂九平と云ふ妙な名の人が、一頭地を拔いて、或る特色のある、ストーリーを作るのを早くから知つて居た。主人公に、自分の筆名にも似た妙な名をつけるのと、一種の、市井無賴的な「人生哲學」めいたものを持つて居るのが、時々讀む彼の作のシノプシスだけでも窺はれた。原作と云つても、何處かで借りて來たやうな、その人の性格と生活に何の係はりもない、只徒らに筋を拵へると言ふだけの、所謂「原作脚色者」の中で、此人のだけは、何時も壽々喜多式で、壽々喜多臭紛々たるらしいのが、痩せても枯れても此の男だけは、相應に立派な藝術家かも知れぬぞと言ふ、一種の期待と尊敬とを持たされて居た。現下の映畫界の組織の下で、原作に一つの特色を創ると言ふのは、出來さうでなか／＼容易でない。映畫界の人々は、多くは、かの其意味に於ける尊敬すべき萬能選手、島津保次郎君のやうに、實

際、何でも達者にやりこなして、何でもに特色を持つ、――此人に時代ものを作らしたら、なか〱面白いだらうな。――是も實際皮肉でなく、私の他の尊敬する一事ではあるが、――事になり易く、そして何にも特色のない事になり易い。その意味で私は、此の壽々喜多呂九平なる浪人作家を、買つて居た。殊に此の人の世界は、言ふ迄もなく幕末には違ひないが、所謂經國的な尊王とか、佐幕とか、攘夷とか、開國とか、そんな外面的な?ものはさう必要が無いらしい。時は幕末だが、そして腰に劍を挾んで、好んで人と切り結ぶが、それは多くもつと内面的な、せい〲仇を打つとか、意地の爭ひとか、性根の善惡とか、墮落とか、さうした主として「人間性」に立脚して居る事も、面白く思はれた。此の人は謂はゞ浪人の、一つの生活を劍戟で描かうとして居る。とも見れば見られない事はない。だから時代なんぞどうでもいゝ。考證なんぞ必要はない。たゞ彼は舊幕時代と、劍と、浪人とを持つて來て、それらにタップリ墨を含ませて、出鱈目に、顯逃目に似た文字を、黒々とスクリーンの上に書く。その稍々傍若無人さもいゝ。

私は嘗つて、志波西果君の「笑殺」と云ふ時代映畫を、ユニヴァーサル作品の一つとして見せられ、可なり感心した。そしてその志波君と云ひ壽々喜多呂九平君と云ひ、時代劇に此の一分野を切り拓いて、益々かうした作品の完成に努めたならば、或ひは田舍向きとのみ稱さるゝ日本の時代物も、今日の大衆文學以上に、成功を贏ち得ないとも限らない。と、熟々考へてゐた。

毒蛇の筋

さて、「毒蛇」だが、先づ、見ない讀者のために、その筋書を書いて見よう。

或る藩の、或る小身の侍の子息に、由利君劍三郎と云ふのが居る。近くあるべき君前の試合に、上役の息子で、何とか云ふ傲慢柔弱な對手と、試合をする事に決つた。もとより劍道の達人である劍三郎は、是ぞ吾が實力を發揮して、殿の目に留まり、立身すべき道と、愛妹と共に喜ぶ。が、そこを父劍三右衛門より、上役よりの言葉で、勝を讓れと勸められ、反抗して勘當され、家を出る。

が、生活は劍三郎に取つて、夜の波濤の如く、火の球の燃えるやうな――實際それを映して見せる。――幸いものであつた。そして落魄し切つて、とある神社の境内で休んで居ると、喧嘩をする落戸浪同志がある。其一方を救けて、様子を聞くと、共遊び人仲間では、女を取るのでも何でも「實力」だと聞

き、其仲間に入る。入門の日に、親分の前で、一の子分と爭ひ、刀のミネ打を喰はすところが、なか／＼面白い。

ところが其親分の家にあづけられた、お定まりの可憐な娘が居る。これに創三郎が惚れる。娘も憎からず思ふ。が、親分がそれ以上に、惚れて、手籠めにしようとするので、とう／＼創三郎は刀を取つて果し合ひをした、實力で何方か所有權を定めようと云ふ。とゞ果し合の末、親分は仲間の一の子分と共に、逃げ去つて了ふ。

後で、創三郎は自然、親分の位地に上り、さう惡い事はしないが、とう／＼其娘を上みさんにして、まア好からぬ旗本や富豪を强請つて生活するやうになる。

と、或る夜、その出かけた留守に、先の親分が覆面でやつて來て、妻を殺して去つて了ふ。悲嘆に暮れた創三郎は、復仇を誓ふと共に、世の惡に染つて、だん／＼生活的にも荒んで來る。そして敵を探し廻る。

(此の間に、筋書に依ると、創三郎は敵を探し乍ら、或る日、惡漢に捕はれた一人の娘を救つたが、久しく優しい異性を忘れてゐた彼は、救ふた小娘を何となしに抱き締めて、却つて窒息させて了ふ。そしてそれがため、もう益々惡の、毒蛇的存在に身を墮らしめて了ふらしい。が、其處は實際の寫眞では、切られたのか無かつた。――かう云ふ所が、呂九平もの丶特長らしいのだが。)

そして或る日、前に家に殘して來た妹が、上役の息子に戀を迫られたり、又其上役の家に、――不思議なるかな、いつの間にか劍客と名乘つて、客分となつて現はれた親分一味に、捕へられて手籠めに合はうとして、それを救ふべく父が爭つて居るのを知ると、急遽其場へ驅けつけて、父のため妹のため、一緒に敵をとう／＼切り倒して、重い手傷に死に行く父の前で、やうやく最後の親孝行をするにはしたが、彼の心は何か慰まない。……

さうした謂はゞ人間的反抗兒の、何と云ふ事はない浮世の漂浪を、書いたものらしいが、此の原作は作者に取つて、勿論いゝものではないに違ひない。

映畫は。――?

マキノ映畫の特色

全十一卷!? 立つたまゝ、二時間、見來り見終つて、私は吻とした。決して退屈はしなかつたが、併し又、さう感激もしなかつた。前にあれ程期待をかけてゐた壽々喜多呂九平も、一時ナンだ、こんな事かと思へた。そしてなだらかに、且つ叮嚀

な、二川文太郎君の監督も、ハハンと云ふ程度に思はれた。殊に此の監督手法も、所々叮嚀過ぎて、親子喧嘩の場など、少し双方の文句の云ひ合ひが、クド過ぎやしないかと稍々腹を立てた。屢暦的高潮もない同じやうな顔の切り返しがどうウマク行つてゐても、結局、同じ顔の大きくなつたり小さくなつたりだ。

だが、さうは云ふものゝ、私は此の映畫を見て居乍ら、前にも云つたやうに、何かマキノの、──謂ふところの大マキノだか中マキノだか知らぬが、兎に角マキノ映畫の、一つの「或る物」には感じた。

それは何だらう。

一種の小芝居情緒だ。──いゝ意味での、緞帳趣味だ。マキノはさすがに、それをうまく知つて、上下に共意を帶させ、それを漲らして居る。

何となく汚ないが、懐しい小芝居情緒。上品ではないが、其中へ入ると、臭味迄が懐しい緞帳趣味。──少し經驗のある人なら、一と昔前の、宮戸座や深川座や、演伎座や眞砂座あたりで、味つた一種の民衆的情愛を、直ぐ思ひ出すだらう。ところが、それが、今、各所のバラック劇場では失はれて、寧ろ此處に、此のマキノ映畫にあるのだ。

さう云へば、此の映畫の持つ道者さゝへ充分好意が持てるのさ。そして畫面の何となしに汚いが、併し小綺麗さ、さう云ふものさへ同情が持てる。

全く日活の時代ものが、一種活厥じみて、實錄臭味を帶び、寧ろ一番目物めくのに對して、マキノは正しく、一番目の世話がゝつた所さへ、小芝居の立て方を彷彿させる。民衆が、下へ行けば行く程、マキノ映畫に魅力を感ずるのは、常設館その物のせいでなく、一つは確に此の特色の故だ。そして此の特色のある限り、マキノは確に大マキノではなくても、確に小なりとも、マキノ的存在を確保するだらう。

さう云へば、月形龍之助君以下の、俳優諸君の、何となつかしい小芝居情調の所有者なる事よ、此處では決して、坂東妻三郎を必要としない。此の懐しげな月形の微笑と、達者な[illegible]のてたしと、活潑な立ち廻りがあれば、それで却つて親しみ深いのだ。それには丁度月形が手頃だ。──あの懐しい微笑は、私にゆくりなくも、一と頃の又五郎を思ひ出させた。(妻三郎は何か勘彌的な所があつて、小芝居向きではない。勘彌の方揃は此際小芝居大芝居の問題ではない。)さうして殊に、杉狂児と云ふ三枚目役者が、時々の場面を一人で浚つて行く、[illegible]の如き、マキノ映畫に無くてはならぬものに相違あるまい。親分と

子分、後の劍客某の風貌の如き、充分マキノ的、小芝居的の色調を濃くし過ぎるものであらう。

劍戟 ?!

ただ、——大分もう與へられた紙數も增へて、急くが、——もう一つ、玆で是非共云つて置きたいのは、私は此の映畫に於て、充分マキノ情緒を、云へ換へれば右の、好い意味での小芝居趣味を、滿喫して喜びはしたが、此の映畫に現された立ち廻りには、必ずしも前の小芝居で喜んだやうに、感心した譯ではない。總じて日本映畫の立廻りは、たゞ、チャンチャカチャンチャカする許で、少しも面白い感じを與へない。

是は他の映畫に於ても、——邦畫全般に亘つて云ふべきだが、スピードとは、決して撮影のコマを落すことではない。只徒らなる早さは、立廻りに、何の快感も與へない。只徒らなる人の右往左來し、超自然な劍の捌き。チラクラ、網膜を刺擊するだけで、あれで觀客が手を叩く事があるのは、刺擊されて焦立たされた揚句、寧ろ時々騷々しさから脫却し得た喜びからだ。

劍戟は、立ち廻りは、もう少しリズムを考へ、時としてはスロー・モーションを用ふべきでさへある。そこへ行くと、澤田正二郎の滿を持して居る間の靜けさ、徐々さ。そして飛電一閃の鮮さなどは、どうして映畫界の人々の、もつと旋律的に、學ぶ所とならないのだらう。市川猿之助の、小栗栖長兵衞に於ける、舞踊的立廻りの如きが、果して一つでも、リズム本位の映畫界に、在るだらうか。

新年の時事新報は、往復ハガキで、人々に今年も劍戟映畫は續くかどうかを尋ねた。多くの人々は、評者も其一人だが、今年も亦多くの劍戟映畫が出づるであらう事を言つて居た。私は、其間に更に答へて、今年あたり初めて、眞の劍戟映畫が生れるであらう事を言ふた。が、眞の劍戟映畫とは、決して劍を拔く迄が、條理立つて居ると言ふ意味ではない。劍を拔いてからでも、其立廻りの映畫化は條理立つて、充分美化されて居なければならぬ。もつと靜に、もつと迅く、そしてもつと自然に、もつと繪畫的に。……

此の毒蛇の劍戟場面から、私の印象に得たものは、最初の、親分との果し合ひで、左右に構ひ合つた瞬間の、遠い俯瞰場面と、それから最後の所の、月形が敵を追ひかけ乍ら、片手を伸ばして馳ける移動と、——前者の靜と、後者の動、それだけ。後は只チャンチャカチャンチャカ、チラクラチラクラ。……

私は、それにつけても、是ほど流行つた劍戟映畫の、トヽメ

を制すべき代表的傑作を、一つ見たいものだと思ふ。それを作るのは、果して誰か？

ザア・エンド

書いて此處に至り、もう數葉、十五枚を超えた。猶私は、更に富士館に至つて、廣瀬恒美演ずる所の「坂本龍馬」を見て、其史實に確に、タイトルに忠に、洵に「活歷」そのまゝの映畫を見、日活の特色を更によく對比し得たと共に、電氣館に赴いて、林長二郎の辨天小僧を見、又牛原虛彥君の「近代武者修行」を見て、更に〳〵得るところ、言ふべき所の多くを見たのであるが、――殊に此の牛原君の新青春映畫には、言ひ度い多くを持つて居るが、殘念乍ら、他日に讓らう。

深夜、疲れて熱が稍々出て來た。「毒蛇」の祟りが少しく怖ろしい。ザア、エンド！「毒蛇」にちらと見た、同じマキノの「越後獅子」のお後に、タイトル一枚、確にかう書いてあつた。

ザア、エンド！　嬉しいかな借用に及ぶ事然り。……

ファンの感傷主義

（久米正雄）

自分は大正六七年代に既に映畫批評の流行前に「映畫雜觀」を書いて、西洋女優が奈何に美しい肉顏をもつてゐるか、その肉顏は吾々の生活に何故に必要であるか、又彼女らの新派悲劇的要素の中に吾々の悲哀が何故にその相談對手を求めるのか、吾々は映畫見物に行くそもそもの動機は何であるか、セネツト、ガールの白い美しい足並揃えた惡巫山戲や舞踊は、何故に吾々に取つて馬鹿々々しい餘計事では無かつたか？――あらゆる美と感傷の「夢」であるクローズ、アップの肉顏に、吾々は何故に驚歎の溜息をつかなければならなかつたか？――吾々が映畫見物の後、貧弱な家庭に於て何故に屢々滑稽なる不機嫌を敢て經驗しなければならなかつたか、さういふ諸々の下卑た感傷主義はその十年の間に次第に滅び、それらの種々の問題を卒業した僕らは漸く一人前の今日のファンとして立つことができたのである。そして吾々がファンとしての立場には、斯くて無用な末期的感傷主義の虜であることを拒絶することに據つて眞實の評價を爲し得るものであらう。

併乍ら自分の如きは猶夥しいセンチメンタリズムの塵埃棄場を、人生には無用な自分に取つては可能な戀愛の吸收力を、日常親灸し乍ら自身にも覺つかない生活の諸々の面や相を、極言すれば到底人力を以つて濟度することのできない多くの嫌厭すべき新派悲劇的の涎や泪を、曾つて吾々の中から追ひ出した感傷主義の餘儀ない邂逅を經驗することに依つて、吾々ファンのどうにもならない立場があるのだ。吾々ファンの立場に既にかういふ現世的欲求のあることは、同時に吾々の映畫がかういふ空氣外の存在であつてはならぬことを條件とせねばならぬ。吾々の現世的な枯槁された慘めな心神的ボロを、吾々の親切な映畫的人生がつゝましやかにかゞがつてくれゝば、吾々のボロはもう少し溫かく身に着くことになるであらう。さういふ意味に於ける映畫の存在は、吾々映畫的患者に取つてリンゲル液以上の臨床的有効な注射に値せられ、一層讃へらるべきものであらう。

自分は曾つて「新潮」誌上に於て映畫的人生と實人生との距離を說いたことがあり、その必然的な距離をどうにか實人生の壁一重にまで引戻したい願望を縷說したのは、今のところ凡ゆる藝術的表現の可能性を實人生にまで働きかける必然性を有つものは、映畫より外に間近に見當らぬからである。映畫的人生は到底その映畫的表出を脫け出ることができないとしても「救ひを求める人々」以上のもの「救ひを求める人々」がその幼稚な手法によることによつて一笑に附される「時代」を憚れるものである。ヨセフ、フォン、ステルンベルヒの銳鋒なる頭腦と手法との藹然たる感傷主義の純粹さ明適さに打れることは、往年セネツト、ガールの足に隨落した僕を何と根本的に治療してくれることであらう。斯くて僕の映畫的批評なるものの存在も「救ひを求める人々」あたりからスタートを切らるべきものであることを信じてゐる。

自分は通俗的映畫を併し退けるものではないが、もはや映畫の場合には通俗の必要を必要としない時代であり、興行價値の高い成績を擧げ得るものは、それは最早吾々の筆端を煩すことなくフェアバンクス風の輕業であることに依つて、それ自身滅亡すべき運命を持合すべきであらう。吾々はその立場によつて縦横に吾々の好きを高揚するに憚無き槍玉をあげるであらう。

「除夜の悲劇」

「除夜の悲劇」を見て何となく「あるじ」を想起した。「あるじ」の感銘は「除夜の悲劇」よりも溫かく又數段上の方に輝いてゐることを發見した。家庭的悲劇を主題としたもので最近で

は「あるじ」が其現實的表現の上では殆及ぶものが尠いであらう。

「除夜の悲劇」の中に用ひられた大晦日の夜の光景や酒場の場面には、特異な新しい發見もなければ省察も加えられてゐない。殊に幾度となく「水面」を挿入した煩さい小手先は、嘗に古いといふよりも一九二三年と一九二七年との速度が奈何に映畫界に取つて世紀的な轉換期だつたかを思はしめる位である。ルプ・ピックの小手先は寧ろ演劇的効果に於て些か見るに値しても、その締め付けや壓搾的カットの無いことは、自分は腹立しい位齒痒さを感じたくらゐである。老僕と主人夫妻との和合から諍ひになる場面も稍々緊張の匂ひを嗅がないでもなかつたが、結局自分は人目も耻ぢず退屈な「蒼白い欠伸」を續けただけであつた。

輕蔑的感情の進歩

リチャード・バーセルメスの「熱血拳闘手」を見て、彼の淺薄にして狡猾な演技が奈何にアルフレツト・サンテルの愚昧な監督と相飽和してゐるかに感心した。その試寫會におめおめと引きずり出された自分の莫迦々々しさ加減をも徐ろに呪ひたかつた。

聰明にして頭の切きリチャード・デックスの名前を聞いたゞけでも肌に粟を生じる僕は、以後リチャード・バーセルメスに睫毛を立てることは請合である。かういふ亞米利加式映畫には最早ファンの眞實を動かすことは絕對に稀れであらう。吾々の知るファンの輕蔑さへも容易にこれらの上に加へられない程度に迄、輕蔑そのものの感情すら遙かに荘重な歩みを以つて進歩してゐることに氣附く。

「闇の小徑」

久濶りでトーマス・ミーアンの「闇の小徑」を見た。トーマス・ミーアンは面白くもお可笑しくもない平凡に近い役者である。特に勝れた大作もなければ一代の名聲を擧げるといふ側の人でもない。地味な手固い、危氣の無い配役を終始するに相應しい役者である。自分はかういふ人には流行俳優に見られない素直さを見ることが多い。流行俳優の切れ味のいけ圖々しさは見るべくもないが、自分の本物で一杯に打つかつて行く彼の物柔かさには無理がなくて好ましい。ミルトン・シルス、パーシー・マーモントなども彼に近い滋みの勝つた俳優である。

「闇の小徑」は又面白くもお可笑くもない寧ろ古風な作品である。壓搾の無い間伸びのしたところに却つて自分は心安さを

感じた。運命の速度に對する敏感を缺いたフランク・タットルの手法次第で、最つとミーアンの持味を表現できたらうにと思つた程である。自分はミーアンの地味と質素とを愛してゐる。彼のリアリズムの徹底は一層彼の奮勵を望まねばならぬ。グレタ・ニツセンの新妻は、その臆のない藝風が却つて此の「闇の小路」の新妻らしい佛をつたへてゐることに成功してゐる。

　あらゆる映畫は地味なリアリズムの惨透から立たねばならぬことは、映畫それ自身の使命であり「機械」が人生への表現媒介の眞實を促がすものであるからである。吾々の機械は吾々の諸々の痛願への手術的恢復に成切せねばならぬ吾々の實人生を殆そのまゝ動作することに依つて今後の映畫の使命があるのだ。それには稀に或は必然に藝術的誇張が加算されても、それは止むを得ないことであらう。

「ガウチヨウ」

「ガウチヨウ」の試寫が帝劇にあつた日、曾て試寫會に見ない西洋人の姿をも見、正宗白島、片上伸氏なぞの姿をも見た。例外の賑ひは場所が帝劇でもあり大物の宣傳の爲めにも、諸方へ案内狀が出された爲であらう。自分はダグラス・フエアバンクスの人氣がかういふ試寫會の中にも堆肥的に培養され宣傳されてゐることを、寧ろ當然のことに思ふて苦笑した。

「ガウチヨウ」は自分には要なき映畫的無駄書きの類であり、映畫の中に神經や靈魂の生活を慕ふ者に取つては又同様に他山つ石である。かういふ映畫の襲來があつても自分には「笑ひも」「胡魔化されも」しない。又美しさを感じる程甘さをも感じない。自分は此映畫を見て益々地味な緊張された他の映畫を見逃してはならぬことを痛切に感じた。當然女子供を對手にして製作された嘘八百の世界に、少しの眞實をも嗅ぎ出せないことはフエアバンクスの本質に最早吾々と相打つものゝ無いことを證明してゐる。肩の凝らないものとしての「ガウチヨウ」の役目は、その手固い撮影上の努力と相俟つて成功はしてゐるだらうが、その輕いものゝ中に最良の質のよい藝術的高さが全然自分に感じられないのは、彼、ドグラス・フエアバンクスは遂に俳優的素質の缺如された、單なる一興業師たるに過ぎないことを思はせるだけである。

　チヤリイ・チヤツプリンの中にあるところの現世的な「蒼白さ」は、畫面の背後に生活の負ふべき不斷なる條件を約束してゐる故、彼の「蒼白さ」は吾々に接近することに據つて決して絕望的ではない。一輕業師フエアバンクスは遂に鷄卵と石鹼の混血兒ハロルド・ロイドによつて表出される「獨創」をすら有

ち合さないことは、遂に墳墓の如き大道化の標本として永久の笑ひ草になつて殘るであらう。吾々の比較的嚴格な記憶を辿るとしてもフエアバンタスはチアツプリンの仕事の半分をも成就してゐないのは、その質に些しの藝術的分子も絕無だつた所以に源因してゐる。併乍ら女子供のために存在する程度の低さで彼フエアバンタスを見て面白いとするものは、同時に女子供の程度のフアンであらう。

劍劇の内容

自分は劍劇を見て看ない前よりも一層深い感銘を殘した。劍劇は或は逆說的武士道の凋落を取扱ひ乍ら、猶慘酷な武士道的意固地に終始してゐる。それらの内容的註釋には手痛い現世的意識を試みてゐる。曾て芥川龍之介や菊池寛等によつて逆說され掘り返された敵打物も、今は完膚なきまでに劍劇の内容となり縱橫にそれらの註釋を施すに先立ち、先づその劍劇的劍術と手品とを試みることに於て彼らは成功し表現することを得た。

明治年間に於ける新派悲劇の雜劇的演出の流行時には、それらに加へられた階級的爭闘の成果を夢にも人心に寄與するところが無かつたのは、その時代の人心に未だ響を返す力が無かつた爲であらう。併し十年後の今日に至つては單に階級的意識へ

の破壊ではなく、[illegible]ことなき[illegible]へ[illegible]を喝采することに依つて、劍劇[illegible]單なる劍戟的道化に[illegible]たるに止まらず、拍手と喝采とに夢中になる滑稽なる大衆的情熱であるに拘らず、その根を爲すところの階級意識下にある從來勢力への憎惡を募らすことに依つて、斷然たる明治年代より十年後の鮮鋭なる「時代」の人心を形造りつつあるのも、見逃してならぬことであらう。

劍劇の表出的唯一の殺人行爲の喝采は、取りも直さず慘忍に對する陶醉的身慄ひであり、不可抗力に對する可能を愉快とし模倣とするところの動物的闘爭と本能的發作を意味するものに外ならぬ。親はその子供を連れ、夫は妻を語らひながら敢然として此慘忍な劇中裡に讃嘆の溜息をつくのは、何たる奇異の現象であらう。過去の奈何なる時代にも無かつたこれらの殺人意識の好尚が偶然として生れたものでなく、人心の險惡や陰惡の陳感や不可能を可能とする法悅に依つて、研ぎ澄され追ひ詰められてかういふ形を取らねばならなかつたものではなからうか。劍劇が現世的炎をあびてゐることは、劍劇自身がこの時代を摑みながら生れたやうにも考へられないでもない。一代の風流人松尾芭蕉でさへも發句は時代を考ふるべしと言つたが、劍劇も此の時代を考へながら迸び出たものではなからうか。

う、唯、沒落しないことは劍劇がそれ自身擴大され、劍劇に疲勞することなき新しさを發見することにより猶存在するであらう。

併し或意味に於てこれらの劍劇は數年の内に沒落するであらう、唯、沒落しないことは劍劇がそれ自身擴大され、劍劇に疲勞することなき新しさを發見することにより猶存在するであらう。

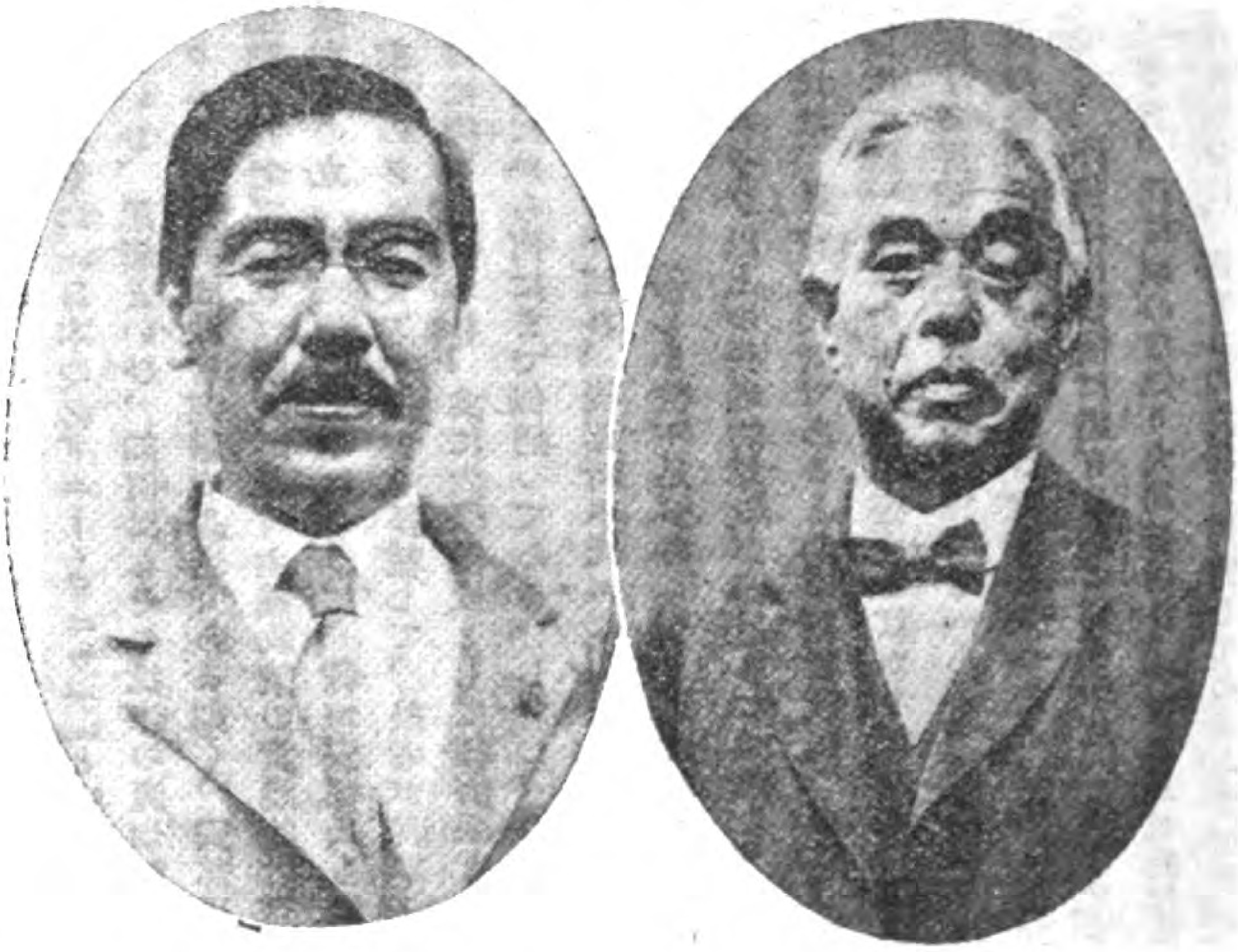
大河内傳次郎氏の形相

或晩劍劇を看て初めて大河内傳次郎の物凄い形相を見て、靜かな閑居にかへつた後にも、彼の形相が記憶力の減退と空想の衰弱した頃に百年の夢魔の如くに絡はり殘つて、安らかな夢さへ結べなかつた。しかも劇中牢舍の中で一武士が退屈の餘りから考へついて、自分の肢體の陰影を操り乍ら犬や狐や狼の形をあらはし乍らゐる有様が、その凄惨な光景が永い間自分を惱ました。

大河内物は其後二度ばかり見て、彼も坂東妻三郎の如く世に出るだけのものは、どういふ意味に於ても持つてゐることに感心した。惡どい峰のやうな形相も模倣や熟練によつて表現されるものではない。彼もまた何百年かの祖先から約束され釀し出され、その昔から殘つてゐた形相を偶然に持ち合してゐるからである。歌舞伎劇なぞのやうな生優しいものではなく、いつも形相の鋭どさが把握する力だけを手頼る劍劇では、僕らに於けるペンを把る右の手よりも大切であらう。此意味に於てロン・チェニイよりもその形相に於ては夥しい創造をもつてゐることを疑へぬ。坂東氏は餘裕を置いてゐるが彼は絶えず一杯に當つてゐるやうである。勘くとも一杯の力で當る程度に見せるといふことが、それ自身形相から來る感じや幅が左う見せる爲かも知れない。

自分は餘り舊劇以外のものは見てゐないが、舊劇による背景の築地や橋梁や往還や土手や白壁や寺院には、ふしぎに百年以上の或光景をおさめ得てゐることは、不思議とすれば稀有のことである。「時代の模倣」はその劇中人物よりも舊劇に取つては、就中肝要なことはその背景の重要なる表出であり、そのものによる時代の古色蒼然を髣髴することに於て、渾然たる成功を得るであらう。

（室生犀星）



人物評論

無産政黨の二大立役者 安部磯雄氏と大山郁夫氏

絕好の取組的興味

高畠素之

○

今度の議會は、解散と非解散が七分と三分の割合で期待されてゐるが、どつちにしたところで、普選第一次の總選擧は東北の雪消けを待つて行はれる筈だ。玄人筋の政憲兩派は素より、取らぬ狸に終りさうな素人無産諸黨も、天晴れ皮算用に抜け目のあるべき道理はなく、戰鬪的統一主義に基づく地盤協定(!)に懸命だと傳へられる。片や社會民衆黨の安部磯雄氏、片や勞働農民黨の大山郁夫氏、いづれも中央執行委員長といふ肩書を提げ、東京と京都から打つて出られるとのこと、代議士たるに不足があつても、代議士たるを不足がられる御人體でないだけ、合併相撲の代表力士に擇ばれたのも時節柄であらう。

安部氏も大山氏も、元を洗へば早大の教授、基督教的紳士として令名があつた人達だけ、何を酔狂に主義者づき合ひぞとは他人の痛痒で、御兩所としては、やむにやまれぬ大和魂の發露があつたものと思はれる。名にし負ふ早稻田學園は、その上の憲政濟美會的運動の發祥地だけあり、佐野、猪股、北澤、五來某、硬軟雜多の無産黨的諸教授を饗

出した。が、現在の立場に於いては、何といつても安部氏と大山氏とが絶好の對照的關係を維持してゐる。かたがた、取組的興味が集中されたのであるかも知れない。

○

安部氏は常に『日本のシドニー・ウエッブ』と呼ばれる。閲歴といひ、人品といひ、思想といひ、如何にもその批評の適切なことを首肯せしめる。ウエッブが英國社會運動の長老である如く、安部氏もまた、我が社會運動の長老である。前者が社會主義政策の實踐的計畫を重視し、常に最穩和派の立場を支持して來たやうに、我が安部氏も同じ道を歩んで來た。前者のフエービアン協會を移植して、後者が日本フエービアン協會の總帥に擔ぎ上げられ、共に大學教授として經濟學と社會政策を擔當する等、何にから何にまで似通つてゐる。しかし、鈴木文治氏が『日本のゴムバーズ』と呼ばれ、後藤新平氏が『和製ルーズヴェルト』と呼ばれたに比較すれば、甚しき役不足があらうと思はれる程度に、安部氏に對してはウエッブ以上の長老的尊敬が拂はれつつある。

安部氏は、社會主義者であると共に基督教徒である。隨つて、いはゆる『齒にて齒』の革命手段を拒否するばかりでなく、對手方の抗議を常に承認する野球部長的態度の持主でさへある。その限りに於いて、氏が最右翼の穩和派を支持し、且つ支持しつつある立場は不變的だが、それが却つて、外部には怯懦に過ぎるかの如き印象を與へる場合も無しとしない。事實、氏は細心な餘り大局を迷ひ、一世の長老的尊敬にも拘らず、昔も今も割合に、惠まれぬ立場を躊躇してゐるのではないかと考へられる。安部氏にして若し、一般の野性を發揮し得ればと、これはまた餘りに野性濫費の高畠ではあるが、餘々つねに遺憾に存じてゐたことを附記して置きたい。

○

安部氏が紳士である如く、大山氏も亦紳士である。といつて、斯く斷定するほど大山氏を知る譯ぢやないが、人品骨柄が如何にも紳士的で、生え拔きの主義者とはおのづから別趣な印象を與へるのも、ウヂといひソダチといひ已むを得まいと思つてゐる。

溫情童心といふ批評は、常に大山氏に關して若い連中から聞かされる。尻馬に乘つて私も衆評を承認する説據は、大山氏にして若し我々同樣のスレツからしなら、五十に手の屆く年輩に拘らず、嘴黄乳臭の連中に伍して、やれコミンテルンだ、フクモトイズムだ、と押しまわす元氣も衍氣もなからうと確信するからに外ならぬ。その點、河上博士と併べて『偉大なる少年』の諧辭を奉りたい。なまじ年輩相當の深謀遠慮がなかつた爲め、生え拔きの主義者一味を蹴落として極左幹部派の先頭も切れたといふもの、人生は何にが仕合はせとなるか判らない。安部氏の場合に對すれば、寧ろ正反的結果といふも妨げないであらう。

だが、溫情童心もさることながら、大山氏最近の思ひ上がり方は、些さか近處迷惑の感なきを得ぬ場合もある。茲では敢て『七ツ下りの雨』などと言はぬが、不惑を越して習ひ覺えた主義的戀情の飛ばツちりは、當の論敵と共に路傍の行人を惱ますこと一再でなく、初めの微笑は次ぎの苦笑に代り、終りの憫笑を以つてさへ酬ゐたくなつてしまふ。紳士に對して失禮だが、實際『これが五十男か』と感心させられたもの、豈に單り私のみではあるまい。

○

大山氏は誰れも知る如く、元來が政治學の畑に育つた人、十餘年前の

『新小說』に批評を書いて居られた時分は、現民政黨院内總務永井柳太郎氏と五十歩百歩の思想的立場であつた。恰かもよし、デモクラシーの流行潮に際會してからは、片や吉野博士の官學に對して私學の代表戰手らしく迎へられ、敎壇と共に誌壇に華々しき活躍を示された。が、當時の最新思想家たりし氏も、理屈をまわす呂律は一向に他愛なく、長鞭の馬腹に及ばざるを遺憾とせねばならなかつた。尤もその段は、今日と雖も決して訂正の必要を見ず、無慮五十頁の論作は有慮五頁に短縮することが、如何に有效なるべきかを想像せしめて餘りある。のみならず、三ツ兒の魂を成長せしめた當今は、搗てて加へて唯物辨證法の洗禮もあり、鞭の長さをいやが上に長からしめたのみでなく、要領の捕捉をいやが上にも困難ならしめた憾みが多い。

單り大山氏のみでなく、モ・ボ共產派の好んで用ふる辨證法的作文ほど有害無益なものはない。マルクス主義の捕捉に於いて、辨證法的理解を重視しろといふなら一應は尤もである。だが、愚にもつかぬ日常茶飯の問題まで、一つ一つ『克服』や『揚棄』や『契機』に結びつけて嬉しがるなどは、煩瑣な文字的遊戲を衒ふ享樂に過ぎない。赤い色の概念を說明する日本語は『赤』の一字で澤山、それを『赤く有つて白く無い』と言はなければ氣が濟まず、自他を辨ぜず煙に卷かれて得意がるのは、野暮も野暮、この上もなき野暮さ加減である。大山氏に於いて、特に斯うした『野暮』が鼻につく。而も何、二十歳に色里の表裏を盡くした相手をつかまへ、今日や昨日に味を覺えた遊蕩哲學を講義するとあつては、無線の見物だつて『助けて呉れ』の悲鳴を擧げたくならうではないか。

○

とはいふものの、流轉は萬物の辨證的理法である。社會主義の看板を揚げし點に於いて、現存者中での最古老たる安部磯雄氏は、今や勞農ブルヂオアの一味からファシストの汚名(？)を冠せられるに至つた。安部氏ばかりか、最近では、當年のアナルコ・サンヂカリスト山川均氏まで、無產諸黨のブロックを提唱した罪科に依り、同じくファシスト扱ひを受けつつある由。それに引き代へ、大山郁夫氏ばかりは全盛を極め、極左幹部派の少年總帥として時めいてゐる。

往時のデモクラット、如何なる轉機で無產者獨裁の極北を指示し出したかは知らぬ。同類意識か共同利害觀念か、今にして思へば、十年前『無名氏』の匿名でなければ執筆を許されなかつた山川均氏との間に、圖らずも斯うした問題で論爭を繰り返へしたことがあつた。感懷や果して如何？學生上りと敎師上りに支持される大山氏だけ、依然として『同類意識說』の訂正を必要としないか知れぬが、さるにても一ト昔しとあれば、斯程まで位置が顚倒するものかと驚ろかされる。

よき二人である

新居　格

彼も、彼も何れもいゝ人達である。通俗の言葉で云ふと、紳士的だと云ふところだが、そんな表現を私はきらふ。何故なら、騎士的と云ふのが中世の封建的な言葉であるやうに、紳士的と云ふ表現はブルジョワヂ！の習俗的な言葉だからである。だから、彼と彼とを紳士的と云ふ代りに、正義的と云はう。そう云へるところの彼等である。

二人とも早稻田の先生だつた――人皆の知る通り――そして今では所謂無產政黨の黨首で共にある。――これまた人皆の知る通り――。

人柄から云つて、年配から云つて、閱歷學問から云つて、彼等は二人とも黨首として十分の貫祿を持つてゐる。けれど、黨首としての貫祿のあることは二人が必ずしも適當な黨首だと云ふことと合致的ではない。私は氏等をより多く無產政治の政治教育家或は政論家として適當だと思ふからだ。と云ふのは二人とも政治家に比しては上品過ぎる。二人とも冷酷な性情を持合してゐない。壓迫的の力を缺く、煽動的でも、爭鬪的でもない。大山氏は爭鬪的であらうと努力してゐる。そうした氣勢を時には示しても見る、だが、附け刄であるかの如く見へる。大山氏は達辯だが、早口であり過ぎて感銘が薄い。學生向きでありえても、勞働階級向ではない。安部さんは雄辯で、平明だが、やつぱり說述的で爭鬪氣勢を缺ぐ。この辯舌が知識階級的であることは、無產階級政治の實踐者として何かしらの不足を感知させる。

大地から屈起し來つた力の人間で、壓倒的なふてぶてしい氣魂と殘忍な熱情を具足したやうな男が無產者の政治動向が要求するのではないか。政治は善良で、氣の弱い、人柄な人間には適しない。だから、安部、大山には適しない、とも云つてみたくもなるのである。

安部さんはシドニイ・ウエブの友人らしい人だ。氏の指目は英國の勞働黨あたりであらう。氏は公正に、合法的手段を通じて社會の改革を企圖するものである。だから溫健に見える。大山氏は共產主義者である。勞農黨は共產黨とは云はないが、その志向その動向から見ると詰り共產黨である。その指標は明白である。この國の無產政黨では左翼的である丈熱がある。爭鬪的な氣勢が強い。その意味から云つて、安部さん達の團體と大山氏を黨首に推戴した政黨とは大分違ふ。大山氏が安部さんより積極的で、力んでも氣負ふ所を示さねばならぬ場合のある所以である。それだけに大山氏は安部さんよりは常に運命の危險率がいろんな局面に多いとも云へる。

大山氏は時潮と共に步趨する明敏をいゝ意味でもそうでない意味にでも持つてゐる。それは彼の書く文章のスタイルの推移を見ても感知しうる。だがそうした適從的滑走は氏の步趨の堅確性に就いて幾分の信頼を割引させるやうだ。氏の文章が力強き簡潔と、氏の辯舌が勞働階級的直截とを示し來たり、氏にふてぶてしい確固さが把握されたとき、ほんとうの無產階級政治家になるであらう。

黨首の大山氏はまだそうはなつて居ない、またなれるかどうか分からない。

彼等は共に學校の先生だつた。詰らない大學教授の多い時代では二人ともいゝ先生であつたに違ひない。だが、峻嚴な標準からすれば、氏等も共に學者であるかどうかと云ふ失禮な疑問も多少湧く。では大のなせる實際政治家か、それも容易くは首肯出來ない。安部さんの說はかなり實際的だがしかし實際的局面に措くと理想的になる。大山氏はすぐれた政治學者だが、しかし、黨首としての評價はまだ定めがたい。

二人とも現在の所ではいゝ黨首であるにちがひない。だがもう少し先きになればいゝ黨首であるかどうかの疑問が殘されぬでもない。

そこに彼等の時代的使命があると私は考へてゐる。

以上の言は私の主義的立場を拔きにして云つた批評である。

私人としての安部さんからは見習つていゝ多くの良習慣を私は見聞してゐる。第一、謹直で、規則正しくつて、時間が正確で、自分には峻嚴

だが他人には寛容で、原稿は活字のやうに綺麗で明瞭で、人の惡口たんか云ひはしない。健康に注意して攝生し運動する安部さんを私は好きだ。氏を窮屈だと云ふ人もあるが、私は却つて自由さを受取つてゐた。氏の前で私は何でも喋べり、氏の前で煙草は勿論お酒ものんだ。(日本フエビアン協會の講演が關西諸都市であつた時のこと、宇治の山本宣治君の家で一緒に宿泊したときの話)

私は人としての安部さんに多大の敬意を拂つてゐる。大山氏を訪れたことはないが、氏にもしば〳〵逢つてゐる。氏から受取つた私の印象も極くいゝ。實際、よき二人である。

私はしかし、氏等とは思想と主義と動向とを異にしてゐる。大山氏が安部さんとそれらのものを異にしてゐる以上に、私は氏等と立場を異にしてゐる。安部さんはソシアリスト、大山氏はコムミユニスト、そして私はアナキスト。だがそれはそれ、人としての二氏にたいする好印象はその事とチヤンポンには出來ない。

兩氏の人物思想

藤森成吉

1

安部磯雄氏を親しく知つたのは、數年前のフエビアン協會設立以來だ。その定期會合の多くは、氏の邸宅で催された。そこの一室は實にフアミリイな、氣の置けない場所だつた。氏その人も闊達な、いいかただつた。かう云ふ人を父親に持つたらどんなに幸福だらう、と、そぞろ氏の子女がたを羨ませた。(實際、氏は家庭のよき父、よき夫と云ふ評判が高い。)

然も、かなりな老齡にも係はらず氏の氣もちは若く生々としてゐる。私達青年と交つて氣もちのギヤツプを示さず、自らもひどく若い者との交際を好んでゐられるらしい。(恐らく、氏の年輩の者では誰も話が合はないからでもあらう)

一口に云へば、氏は自由主義的な、最も代表的な紳士を感じさせる。下等な事や曲つた事は爪の垢ほどでも嫌ひな、と云つて他人に對しては寛大で思ひやりの深い、約束のかたい、信頼するに足る人格と云つた印象だ。かう云ふ人格を知る事は何人に取つても愉快だ。

が、此の敬愛すべき人格と、遂に政治的思想的に離れなければならなかつたのは、何故であるか? 氏のその若い氣もちにも係はらず、どうする事も出來ない私達の時代と年齡の差であるか。はた又、氏の生活的立場から來る意識の相違であるか。

試みに氏の思想的立場を瞥見して見よう。丁度「太陽」新年號に、氏の論文「私共の政治運動は何を基調とするか」がある。此の長くもない一文を讀めば、社會民衆黨々首として、むしろそれと離るべからざる氏の本質としての、現代日本の社會觀乃至政治觀を充分窺へる。氏は日本の政治(乃至政黨)の墮落を慨歎して、「政治家が其責任を負ふべきは無論であるけれども、私共は更に大責任者として金權者の罪を問はなければならぬ。然し一歩を進めて考ふれば、金權者をして今日の如き權力を得せしめたのは、社會全體の不見識に因るとも云へる。」と云つてゐられる。

これは果して正しい認識であるか？　私達は、かかる金權者の「罪」を考へるよりも「必然」を考へる。「社會全體の不見識」を責めるよりも、否、責めずして「資本主義組織の必然性」を認める。かかる唯心的認識方法は氏の本質だ。前文のすぐ次へ氏は云はれる。「私共は、政治の眞精神が奉仕でなくてならぬことを信ずる。即ち取るのでなくて與へるのである。此の點に於て政治も宗教も何の異る所はない。若し宗教によりて利益を得たり名譽を博せんとする者があるならば、彼は確に僞宗教家であらねばならぬ。政治を職業とし、これによりて名利を貪らんとする者が起つて來れば政治は必ず腐敗する。宗教が人類を精神的に救濟することを目的とするが如くに、政治は……云々。」

かくて、氏は「同胞愛の上に立つた」のだ。從つて氏の「目的として居る改革——第二維新」には、「斷じて兵馬の力を借る必要はない。私共には議會があり普通選擧權があるのだから、私共の代表者が議會の多數を占めさへすれば、金權者の特權を奪ひ去ることは極めて容易である。」果して「極めて容易で」あらうか。論文全體を通じて、氏の意見はあくまで常識的で、非革命的で、非マルクス的だ。常識的な爲め、現實的なるが如くして反つて甚だユウトピア的だ。

かくの如き意識的根據の爲め、氏は階級鬪爭についても——失禮を許して頂けば——甚だ曖昧な見解きり持たれない。「有産無産の二階級」の對立を目して、氏は「決してこれを源平の對立と同一視すべきでない。對立を以て反目嫉視と解する人があるならば、私共は飽くまでもこれに反對する。」とされる。私達の見解を以てすれば、かう云ふ見方は根本的に誤つてゐる。「反目嫉妬」なぞとは飛んだ誤解であり、「源平の對立と同一視すべきでない」事は、異つた意味に於いて、即ちそんな一階級内の爭鬪でないと云ふ意味に於いて眞だ。

これは全く數例に過ぎないが、かう云ふ意味に於いて氏と思想的に一致出來ない事を、氏の人となりに愛著を持つだけ深く殘念に感じる。

2

大山郁夫氏には、數年前のデモクラシイ全盛時代、それに應じた主題の早口の（立板に水を流すと云ふ言葉どほりの）講演を神田の青年會館に聞いた時、初めてお目にかかつた。

その頃の氏が、現在の思想的立場に移る其の急速度的（むしろ急角度的）轉換を、私は卒直に深く感服する。普通の意識を持つた思想家には、かくの如き飛躍は到底望み得られないところのものだからだ。かかる行動は、何より充分の眞剣と誠實と勇氣を前提とする。そして私は、氏の人格に此の必然性を感じる。

丁度同じ「太陽」の新年號に、氏の「社會科學と無産政黨運動」と云ふ論文が載つてゐる。それは、傍註の如く「特に勞農諸政黨合同問題を中心として」書かれたもので、べつに卓拔な意見も何もないむしろ平凡至極な一文章だ。が、その平凡のうちに、氏が如何にその信ずるところのマルキシズムに忠實であらうとするかの氣もちが、よく讀める。從つてその認識は、科學的だと同時に現實的だ。

去年、婦人同盟の創立に先だつ「婦人問題講演會」の夜、青年會館の講士控室で久しぶりにお目にかかつた時、氏はやや疲れたやうな陰欝な顏をしてゐられた。私は、氏が充分身體に留意されつつ、その多忙な黨の仕事に堪えて行かれん事をいのつてやまない。

—1928・1—

畏敬する人格者と熱情家

北澤新次郎

一

安部磯雄氏からも大山郁夫氏からも自分は早稻田に於て教鞭を操つて頂いた事がある。安部氏からはスマイルスの「品性論」の譯讀を聞き、大川氏からはイリーの「産業社會の進化」の講義を聞いた。從つて兩氏とも自分の舊師であるから論評する事は甚だ心苦しい事柄である。

一體個人を批評する事は自分に採つては最も困難で且つ從來殆んど左樣した事を試みた事が尠ない。何故かと云ふに個人の思想や行動は單に其れが外部に顯はれた丈けを以て結論を下す事は頗る危險な事で、屢々飛んでもない見當違ひの論斷をする場合がある。だから平素から或個人に接觸して居て、其人の氣持だとか、性格を感知して居れば、其人の正確なる論評が始めて出來得るものである。しかし個人の批評をする者が其の批評せんとする人々の一一に平素から密接なる交渉を持つ事は困難であり、其れは殆んど出來難い事であるが、苟くも他人の行動や思想を論評せんとする者は、單に外部に發動された事象の背後に徹する丈けの深刻なる觀察力はあつて欲しいと思ふのである。

二

安部磯雄氏は主義に最も忠實なる人である。過去數十年の間自己の抱持する主義並びに主張を少しも捨てないで、始終其の思想の現實化に不斷の努力を怠めない點は何人も氏を知る者の敬服する所である。氏は己れを持する事極めて峻嚴で、些事も苟くもしない頗る健實な行動を取る。此頃は知らないが、矢張り左樣だと思ふが自分が學生であつた時分授業の鐘が鳴るとものゝ五分も經過しない内に先生は教室へ來られる。そして徐ろに出席を取る。それから「何々君やつて下さい」と云はれて學生に講譯をさせる。そして學生が講譯が終ると先生は少しの間考へて「今のは何點」と云つて講譯に對する採點を學生に宣告する。好良なる點を宣告された學生は得意だが「今のは五點」なんて採點を學生全體の前で廣告される時は餘り氣持のよいものではない。之れは極めて些細な一事例だが何事にも几帳面な氏の性格を能く顯はしてゐる。今でも左樣だが外の教師は授業開始の鐘が鳴つてから煙草をのんだり、無駄話（本人達は左樣思はないかも知れないが）を十分もしてから、のこ〳〵やつて來るのが普通であるが、安部先生に限つてそんな事は絶對にない。

安部磯雄氏は己れを處する事が、極めて嚴格であると同樣他人をも自己と同樣に峻烈にしようと努力する。同氏が責任當事者として立つ場合は殊に之れを實施しようとされる。これは最も當然の事で、少しも不當の事ではないが、其れが屢々他の人々の反感を招く時がある。自分の考へでは其の場合反感を抱く者の方が誤つて居るのであるが、しかし世の中の事は屢々こうした事情が多く存在する。之れが同氏が早稻田に於て曾つて豫科部長として、又政治經濟學部長として成功しなかつた一つの原因ではなかつたらうか。

自分は同氏の此の何事にも几帳面の性格が矢張り、社會民衆黨の黨首

としても、同樣に發現されて居ると思ふ。又其處に新政黨の黨首として同氏の惱みも可なり多大であらうと推察する。學校と社會とは此の點に於て顯しき相違がある事は自分が云ふ迄もない。勞働者、農民は社會の環境的必然性に迫られて甚だルーズな生活を餘儀なくせられてゐる。從つて几帳面な安部氏は時に可なり不滿な事も尠くないと思ふ。殊に現時の政治界は醜惡の多年蓄積してゐる世界だから、之れを淨化して公正なものに革正するには同氏の如き端正無私の性格の人を最も必要とする事は論を俟たないが、しかし、同氏の理想を現實化するには可なり困難と永い歲月を要する事であらう。

殊に新興勢力を代表する政黨が不必要に分裂して、しかも從ひ最近迄相互に排濟、反感を有し、泥試合さへやつて居る時同氏は之れに關して多大の不滿を感じてゐるであらう。丁度昨秋の午後自分は早稻田の教員室で安部氏と落ち逢つた。話しがたま〳〵府縣會議員の選擧の應援に及んだ時自分は各派の無產政黨の人々が既成政黨の缺陷を指摘し、其の惡點を攻擊するのは當然だが、他の無產政黨の惡口を云つたり、其の幹部のやり口(たとへ幾多の缺點があつても)を一から十迄も排斥し、其の甚しきに於ては他の無產政黨を似而非無產政黨なりと攻擊する事を快事と考へて居るは頗る不愉快で、自分は、曾つて他の無產政黨の惡口や攻擊はした事がないし、又やる氣が出ない。政治運動も此の一點で自分は嫌になつたと話したら、安部氏は自分も全く同感で、此の點丈けは一刻も早く何んとかしたいもんだと答へられた。

尤も一の無產政黨が其の支持力說する思想並びに戰術の實現に熱心なればなる程、其れと異つた思想及び戰術を主張する他の無產政黨に反感を持ち、たとへ其れが無產政黨で、自分達と同じく新興階級の爲めに起つたものであつたとしても、時に依ると既成政黨よりも惡いものであると感情的に考へるのも無理はない。丁度佛敎の一派が基督教を攻擊するよりも(之れも不必要の事であるが)同じく佛敎の他派をより深刻に排斥するのと同樣である。

然しこうした事は冷靜なる立場から見ると甚だ大人氣ない事である。今日各派の無產政黨は、其の眼前に多年政界に蟠居し其の醜惡の限りを盡して居る資本家階級の代表機關である既成政黨なる共同の敵を有しながら、內輪喧嘩に專念して居るのは不幸な事である。しかし最近に至つて各派の無產政黨が相互に步み寄つて協調的步調を揃へようとの氣運が打開されて來た事は實に嬉しい事である。殊に全日本農民組合同盟が全日本農民組合と合同しようとする提案は誠に結構な事で、自分は前者の責任者であつた時分に極力無產階級戰線の統一を希望して居つたのであるが、其れが實現する曙光が顯はれたのは喜悅に堪へない。又其れに關して勞働農民黨が此の二つの組合の合同を喜ぶとの聲明書を出したのは更に其の寬容的態度は立派なものである。こうした近時の傾向に關しては安部磯雄氏も衷心から喜んで居られるに違ひない。何故なれば同氏はフエヤ・プレイーの精神に徹底した人であるから。

三

大山郁夫氏は純眞で且つ熱情に富んだ人である事は氏を知る者の能く感じて居る點である。自分は氏が早稻田に居られた時分には先輩として且つ同僚として常に敬畏を拂つて居つた。大山氏は自分の信じて居る周圍の人々の獻言を殆んど無條件で採用する程の純情家である。其れで或人は能く氏の斯くの如き性格なるが故に「他の人々に祭り上げられる危

陰がある」と云ふ。其れは見る人の誤りで、大山氏にかりに「祭り上げられる」と云ふ言葉（其れは嫌なことばであるが）を使ふ事が許されるならば、氏は其れを意識しない程の迂遠ではない。否其れを明瞭に意識してゐる。其れのみではない氏は社會的に有意義の事であるならば、祭り上げられる事は極めて價値あるものであると考へられて居るらしい。其處に氏の性格の純眞味が現はれる。

極左翼を代表する勞農黨首としての大山郁夫氏は、其の社會大衆の生活を思ふ熱情と、現時の資本主義に對する憎厭は愈々無産戰線に活躍せしむるに違ひない。自分は勞働農民黨の内部に於ける思想的分派があるかないか、或は所謂福本イズムの勢力の多少は知らない。しかし勞農黨の幹部並びに大衆が大山氏の思想と熱情を何處迄も支持して、以て我國に於ける無産階級の解放の爲めに努力せられん事を衷心から希望して止まない。

退歩者と豹變者

荒畑寒村

×

社會民衆黨の黨首たる安部氏は、社會民主黨の創立者として、社會主義協會の會長として、日本の社會主義運動史上、兎も角も記憶せらる可き人である。だが、安部氏は社會主義者であつたかも知らぬが、決して革命家ではなかつた。と云ふ意味は、安部氏は結局、社會民主々義者に過ぎないのだ。

社會民主黨の宣言は安部氏の起草にかゝれる所と聞くが、その「我黨は玆に多數人民の休戚を負ふて生れたり。然れども貧民を庇して富者を敵とするが如き狹量のものに非ず」と云へる如き、又は社會黨の禁止後、社會主義協會の運動を「教育宣傳に限」れる如き、勿論安部氏一個の責任とは云へなからうが、猶且つその運動に對する態度のキイノオトが窺はれる。要するに氏の社會主義運動は、飽までも合法的、進化的、民主主義的、社會政策的であつた。

それ故、平民社の運動がいよ〳〵熾烈を加へ、政府の迫害がます〳〵苛察を極むるに至つて、安部氏は全く運動から離れて早稻田の講壇に隱れてしまつた。私はかつて、初めて早稻田の野球團を率ゐて渡米せんとする安部氏が、惡戰苦闘の最中の平民社を訪れて、『成るべく穩健にやつて下さい』と忠告したのを目擊した。紳士的で、平和的で、穩健好きで諸事きれい事にやらうと云ふ安部氏に取つては、頻々たる新聞の禁止、集會の解散、同志の入獄は、痛ましくも、淺ましくも、恐ろしくも、厭らしくも感ぜられたに違ひない。

かゝる態度はまた、氏の非戰論にも現はれてゐる。平民社一派の非戰論の中で、氏はキリスト教の立場から、絶對的平和主義を主張し、國際戰爭に對する反對運動を、××に轉化せしむる鬪爭の如きは、到底想ひも及ばぬ所であつた。平和主義と神徒主義とは相去る一歩で、氏の主張が階級鬪爭說の否認に導びくのは、固より當然の歸結である。此の階級鬪爭說の否定たる社會主義を安部氏が、大正五年中某雜誌の上で、米國の一サンヂカリストの『今や議會政策は到底戰爭を防遏する事が出來た

いことが分つた以上、吾々は更に……各國に於ける勞働組合を聯合して、國際的に相提携し世界的ゼネラル・ストライキを斷行すべきである』と云へる說を引用して、『今日議會政策が失敗に歸した關係上、今度は此說の實現に着手さるゝであらうと云はれる』と論じたのは、當時大に吾々の興味を惹いたものである。

然し安部氏の先見は、氏自身に依ては遂に實現されなかつた。大正八年の一月、私は所用があつて奈良の一旅宿に安部氏を訪ふたが、其折、氏は『勞働組合運動がかやうに旺盛となり、これで普通選擧が實施されゝば、もう吾々の天下ですよ』と語られた。私は安部氏が、『戰後の日本勞働運動を達觀』したる前記の論文にも拘はらず、依然として勞働組合主義者、議會政策主義者なるを知つて、安部さんの社會主義思想、却つて年々退步するのに驚ろいた。

明治三十七年、僕が初めて社會主義協會に入つた時、僕等新入會員は安部會長から協會員は品行を愼み、苟くも協會の名譽を傷つくるが如き行爲あるべからざる旨を訓示された。そう云ふ點では、安部氏は實に當代稀に見るの君子であらう。然しながら、安部氏が眞に果して社會主義者であるか否か、無產政黨の黨首たるに値するか否かは、單に個人的に君子であるか否かで決せらるゝ問題ではなく、實にその政治的意見で定められなければならぬ。然るに社會民衆黨が、無產階級の戰線統一に對して常に反對してゐる分裂主義的態度は、果して黨首たる安部氏の階級的良心を示すものであらうか。無產階級にとつて戰線分裂の主張者は、ブルジョア階級と同一の敵である。往昔の社會民主黨の創立者、社會主義協會の會長、安部磯雄氏の黨首たる社會民衆黨のかゝる非無產階級的な方針は、私をして氏の政治的意見が、畢竟、ブルジョア階級の見解に過ぎないことを痛感させる。

×

勞働農民黨の黨首たる大山郁夫氏に就ては、私は個人的には何の知る所もない。然しながら、過去一年間に折に觸れ事に當つて、私が讀んだ氏の論說から判斷した所では、大山氏の無產階級政治運動に關する意見は、全く謂ゆる福本イスト一派と一致してゐた。

氏の名に依つて諸雜誌上に散見する諸種の評論は、國家資本主義トラストの進出、他の三エセ無產政黨の指導精神排擊、資本主義の急激なる沒落、絕對專制主義に對する鬪爭、曰く何々と、それからそれへ千變萬化して、恰かも福本イストの唱導する理論に追隨すること遲きを、維れ恐るゝが如き觀があつた。然るに、從來かゝる理論的指導に任じてゐた『無產者新聞』(階級的政治新聞と稱する!)が、突如として急方向轉回を試み、『指導精神にこだはらざる無產政黨の無條件合同』を提唱するや、大山氏及び勞農黨幹部は、また直ちに昨日までの主張を抛つて、『無條件合同』論に早變りをした。

大山氏はこの早變りの僅か一ケ月前、某誌上に例の如きエセ無產政黨の指導精神排擊論を述べ、斷じて無條件では合同せぬと聲明してゐた。而して勞農黨の無條件合同提唱の聲明によれば、此の方針は客觀的情勢が規定せる所であると云ふ。然しながら今日、無產政黨の無條件合同によれる戰線統一を必要ならしむる客觀的情勢は、何もこの二三ケ月間に起つたものではなく、夙に存在せる事實である。すると、大山氏の一ケ月前の主張は、客觀的情勢に盲目であつたか、又は大衆黨と前衞黨とを混同し、且つ分裂と對立とを以て左翼結成の正道となせる福本イストに追

陷したか、孰れかの錯でなければならぬ。

その孰れであつたにせよ、無產階級政黨の最高幹部たる責任と位地とを有する者としては、その不明と誤謬とを黨員大衆及び一般無產階級の前に明白大膽に認め、この誤謬の完全なる淸算の上に新らしき方針を立つるのが當然である。然るに、降つて湧いたやうに客觀的情勢をもち出し、今是昨非の論理的トンボ返りに依て、過去の誤謬を矯正せんとするが如きは、竟に大衆を欺瞞するものに外ならぬ。斯の如く幹部の思想の變る毎に、黨員大衆が右に左に暗雲に曳きまはされては、大衆黨の民主主義的原則は何處に求められよう。

私は大山郁夫氏の人物は全く知らぬが、大山氏が誠實眞摯なる無產階級の運動家であるならば、自ら率先して氏自身及びその黨の、大衆的協同戰線黨としては殆んど致命的な誤謬を勇敢に清算すべきである。これを爲すと否とが、氏の口先だけでない實踐上の左翼主義者か否かを立證する所以であると思ふ。

オノト選手

競技界の數種の選手權を保持する者を**オノト**選手と云ふ。**オノト**がペン先の走り、**インキ**の流出、耐久、型等に於て常に萬年筆界の最高榮譽を獨占する事實より起る

×

オノト萬年筆　七圓五十錢以上

×

アテナ萬年筆　三圓五十錢以上

×

萬年筆用アテナインキ　三十五錢

送料各十八錢（カタログ進呈）



"VALET" AutoStrop Safety Razor

切れること！切れること！

唯一と剃りで斯んなに綺麗になる。成る程斯れなら三分とはかゝるまい。ドンナ髭でも、ドンナ初心者でも

×

一枚の刄が半年の使用に耐へる

×

×

バレー自働研安全剃刀（カタログ進呈）

B型　十三圓五十錢以上　C型　一圓八十錢以上

賣捌店　大百貨店著名洋物雜貨金物店等



東京日本橋通三丁目

丸善株式會社

大阪｜神戸｜京都｜名古屋　横濱｜福岡｜仙臺｜札幌

東京―神田｜芝三田｜早稲田｜丸ビル

白鳥隨筆

正宗白鳥

「天うつ浪」と「大菩薩峠」

今夏輕井澤に避暑してゐた頃、日々新聞に連載されてゐた幸田露伴氏の「華嚴瀑」遊覽記を讀んだ。同新聞はその撰定した新八景の宣傳のために、諸家を煩はして、名勝記を書かせてゐたのであつた。私は、「枕頭山水」以來、久振りで露伴氏の紀行文を讀むことに興味を感じたのであつたが、古典的文章美は相變らず具つてゐるにしても、山水に對する情熱は以前のやうでないのを見過す譯には行かなかつた。しかし、氏が自發的に華嚴の美をさぐりに出掛けたのではなくつて、新聞社の依頼により、お義理で見物に行つて書いたらしいこの紀行文を、私は今事々しく取上げて論じようとするのではない。たゞ、そのうちに、「大事な命を粗末にする馬鹿ものども」と云つたやうな言葉で、華嚴瀑投身者を罵つてゐたのを讀んで、「露伴は昔からかういふ風な人なんだな」と、ちよつといやに感じたのを思出したゝめである。紀行文の何回目かにさういふ文句の出てゐたのは、芥川龍之介自殺後、五六日過ぎたばかりの時だつたので、露伴氏は、龍之介をも間接に罵つたのであるまいかと、私は疑つて、一層いやな思ひをしたのであつた。

しかし、それは私の思過しで、あの紀行文は、脫稿後餘程經つてから新聞に掲載されたので、芥川自殺の是非には關係がなかつたのであらう。投身者罵倒は投身者罵倒に止つてゐるのであらう。

「自殺者は馬鹿だ」とは、世上の誰れでも云ひさうなことで、問題にするに足らぬ譯であるが、露伴氏が簡單にさう云ひ

切つたことは、露伴氏の小説を鑑賞し批判する時の一つの鍵となりさうだと、私はその時、ぐつと自分の記憶に押込んで置いたのである。

同じ時代の人でも、二葉亭四迷はさうは云はなかつた、（これは私が直接に氏から聞いたから確かだ。その時、氏は、四十を過ぎた人にも似合はず、最初の投身者藤村操について、いろ〳〵に心を勞して考へてゐた）國木田獨歩もさうは云はなかつた。森鷗外だつて、華嚴を俯瞰して「命を粗末にする馬鹿ものども」と、一概に云はなかつたに違ひない。

逍鷗紅露とおの〳〵の頭文字が熟語となつて、明治文壇の大家が定まつた時分から、私は露伴氏の作品をも、目に觸れたものは、大抵讀んでゐたのであつたが、氏のものに限つて、殆んど何等の興味をも覺えなかつた。紅葉の作品は何と云つても面白かつた。「紅葉は文章は巧いが内容が乏しい。露伴は想が傑れてゐる」などと、あの頃の文學青年は云つてゐたものだ。露伴の方が非凡らしく云はれてゐた。世評がさうだから、私もさう思はせられてゐたが、その非凡さを自分の頭腦に感得したことはなかつた。あの頃のもろ〳〵な作家のうちで、露伴氏は巨木のやうであり、英雄のやうであり、他に異つたえらさがありさうに思はれてゐたが、しかし、私は何となくさう思つてゐたゞけで、直接に氏の作品によつて感動さゝれたことはなかつた。氏は早くから和漢の文學に造詣深く、文章が六ケしく凝つてはゐたが、しかし、少年時代の私が讀み惱むほど、氏の小説が難解の書であるとは思はれなかつた。「一口劍」や「五重塔」など、文章が雄健で男性的氣魄を含んでゐるらしく云はれて、紅葉一派のおしろいくさい柔弱らしい小説に飽足りない人々に喜ばれてゐたのであつたが、當時、青年の惱みを惱み、時代の空氣に感染してゐた私には、露伴氏の作品は、神經の太い、頭の古い、古武士の書物のやうに思はれてゐた。二葉亭でも、「文學界」の連中でも、民友社の人々も、外來の思潮に動かされて、明治二十年代の若い惱み、若い希望を、心に抱き筆にも現はしてゐた。しかし露伴氏にはさういふ所がなかつた。當時の重立つた作家のうちで、露伴氏が最も保守的で、純東洋的で、清新なところがないやうに、私には思はれてゐた。……日本古來の標準から

云ふと、名文であるのか知らないが、氏の文章の重苦しさ。兜をかぶつて鎧を着て步いてゐるのを見るやうだつた。「風流微塵藏」と總括的題目を附して、遠大な計畫のもとに筆を執られたらしい連續長篇の一部、「さゝ舟」「さくの濱松」などを、私は、神田のいろはといふ貸本屋から借りて來て、努力して讀んだことを、今思出しながら、改造社新刊の露伴集に收められたそれ等の長編大作を讀直した。昔讀みづらかつた如く今度も讀みづらかつた。私の老眼で圓本の細字を讀むことそのことが、すでに惱ましいのであつたが、例の重い鎧を着た上に、魯智深の持つてゐたやうな何十貫もする鐵の棒を引摺つてゐるやうな文章の後をつけて行くのは、樂ではなかつた。今の青年讀者はかういふものはとても讀み切れないだらうと察せられる。

卷末の年譜に照らして見ると、露伴氏が、「微塵藏」中の長篇數卷を世に出したのは、三十歳前後の時であつて、そんな若い時に、よくもかういふ古典的文章を綴り上げたものだと、今日の文壇の有樣に比べて見ると不思議に思はれるが、しかし、內容に於ては驚かされるところはないのだ。一箇所たりとも心を打たれたところはなかつた。たゞ、八犬傳よりももつと古い時代の文章を讀んでゐるやうな感じがした。出て來る人間は、みんな型の如く、自由な生々したところはちつとも見えない。昔から露伴氏の好きな、生悟り(なまさとり)の、悟らんとして悟りかねたやうな人物、僧侶萩松が出たり、また氏の好きな朴訥な老人が出たり、また氏の好きな、精神一到何事か成らざらんといふ意氣のある青年が出たり、善惡兩樣の人物が形を調へて對立したりしてゐるが、私は讀んでゐて、人生の實相に接したやうな感じのしたところはなかつた。少年少女たる新三郎お小夜の親しみが細かに描かれてあつても、そこに「たけくらべ」のやうな詩趣も情味も感ぜられなかつた。いくら美しい言葉を並べ、小說らしい趣向を凝らしてゐても、作爲の跡のみ目について、「たけくらべ」のやうに泉の湧出る趣きはなかつた。

私は、讀みながら、露伴氏の思想の古さを感じた。人生觀察の古さを感じた。かういふ小說が打雁されてゐたのを見ると、自然主義の起つたのも無理はなかつたと、私は事新しく感じた。「文章のための文章」が、一時極端に排斥されたのも無理

はなかつたとも思はれた。「文章のための文章」に浮身を窶した巨頭として、紅葉山人は、自然主義時代に非難の矢を向けられてゐたのであつたが、その實、露伴氏の方が一層多く、「文章のための文章」に苦心してゐたのであつた。紅葉は專ら文章に凝つてゐたにしろ、その筆からは隨所に、浮世の姿が流出てゐる。しかし、露伴氏の作品には、文章にはじまつて文章に終つたものが多い。その所謂「理想」や「思想」は、あまり古臭くて、乾涸びてゐて、私には風馬牛相關せざるものである。「雁坂越」など、言文一致調のものは、露伴氏には不適切な作品である。紅葉は形の上でも新らしくならうとして、言文一致の新文體に苦心して、「多情多恨」に於て見られるほどの妙境に達したのであつたが、露伴氏は、在來の文章體がその本體であつた。

氏にも、文學上の煩悶があつたのか、「出廬」と題する新體の長詩を讀賣新聞に連載したが、當時青年であつた私などの心に觸れるところは少しもなかつた。「あほだら經」のやうに感じてゐた。後藤宙外氏が、「はじめて國詩に接す」と云つて、この長詩の提灯持をしたことを、柳田國男蒲原有明氏等が嘲笑してゐたのを、ある會で私は聞いたことがあつた。

「天うつ浪」は、私が讀賣入社後に紙上に連載されたもので、不惑の齡に達してゐた作者が、大なる抱負をもつて、自己の蘊蓄を傾瀉したのである。十年前の「風流微塵藏」と、これとが、露伴氏半生の二大作品である譯だ。私は、今度、この未完の長篇「天うつ浪」を讀直して、「金色夜叉」が紅葉の代表作であると同樣に、この長篇は露伴氏の代表作としていいものだと思つた。そして、氏の過去の作品から受けてゐた茫漠たる印象を新たに思浮べた。

「釣を垂れては、つく〴〵人間の技（わざ）の小さくして、天運の力の大なる事を知り、棋を試みては、七情の騷げども益なく、一理のたゞ賴むべきをおもふ」（洗心廣錄より）といふ氏の感慨が、「天うつ浪」の上にも漂つてゐるやうである。十年後の氏は十年前の氏ではなかつた。「微塵藏」は、外形は大作であつても、內面はうつろであつた。「天うつ浪」は、技巧のみを弄したものではなくつて、兎に角充實してゐる。作者の胸中にある人生世相がのびやかに現はれて、生命の波を打つて

ゐる。在來の露伴型の人物が都合よく配置されて、小說らしい世界をつくつてゐるのだが、それ等の人物が、をり〳〵面目をそなへてわれ〳〵の前に現はれて來る。私は作者の筆に心を惹かれて、全部を讀終つて、その未完結を惜んだ。作者は「微塵藏」の時と同樣に行詰つたのであるか。小說なんか詰らないと思つて投出す氣になつたのであるか。

この作品は、古い型の道念を底に潜めてゐる。普通の人情を表によく現はしてゐる。この作者が昔紅葉の官能と相對して理想派と云はれた所以が、これを讀めばよく分るのであるが、しかし、この古い型の道念と普通の人情とは、紅葉の作品にも充分含まれてゐたので、兩作家の間にさしたる相違は發見されないのだ。この作者の作品に存在する理想や思想は紅葉の作品にも見つけられないことはない。

お龍お彫などの女性は、以前の氏の作中に現はれてゐた型の女子ではあるが、今度は肉體を具へてそこに現はれた感じがする。ことにお彫には、作者の理想的女性の影を見せようとしたものらしく、なか〳〵手が込んでゐて面白さうなのだが、未完の作品は、彼女をして充分に發展させないで終つてゐる。

この長篇が紙上に揭げられつつあつた間に、舊文學打破の自然主義が次第に勃興したのであつた。露伴氏は、文壇の風潮にいや氣が差して、この長篇を中絕させた譯ではあるまいが、「天うつ浪」は偶然、舊文學最後の大作として、文學史上に跟を止むるものであつた。森鷗外は、新風潮を冷笑したがらも、その感化を受けて、作風に一變化を來したが、露伴氏はさういふ風潮からは全く顏を背けてしまつた。紅葉でも長生してゐたなら、自然主義の感化を受けたであらうと察せられるが、舊大家のうちでも、露伴氏だけは、さういふ感化を受けるべき素質を缺いでゐた。頑强な作家である。「自殺する奴は馬鹿だ」と罵倒するだけあつて、氏の作品には、初期の作品以來懷疑の跟がない。この動搖の激しい時世に生れたがら、氏は疑惑動搖の姿を讀者に見せてゐないのである。兎に角恐ろしくしつかりした人である。……私は、今度氏の舊作を讀返しながら、その點を面白いと思つた。この動搖しないしつかりしたところを押續けた人たればこそ、後年「運命」

などのやうな重味のある大作を創成し得られたのであらう。氏の多くの「作品のうち、私の心魂を搖がしたものはこの一篇であつた。欝勃たる力がそこに湧出てゐた。森鷗外が、彼れの純粋の創作よりも、晩年の考證的史傳に於て、一層よく人生の眞相を描出した如く、露伴氏も、前半生の多數の小説よりも、晩年の史傳に於て、氏の本來の型は飽まで保ちながらも、一層深く人間を描いてゐるのである。

私は、かつて氏の戯曲「名和長年」を帝劇で見た。この勤王劇は、男の見物を泣かせると云はれてゐたが、露伴氏の本領はそこにあつたのである。昔の氏の小説が男性的だと云はれて、ある種類の讀者に喜ばれたのと同じ譯なのだ。作劇の態度も人物の取扱ひ方も、日本傳來の型を追つてゐるだけで、鷗外の戯曲にあるやうな新味は全くなかつた。

私は、今思出したことがある。……私が讀賣在社中、「天うつ浪」が紙上に掲げられて、中絶したあとで、花袋氏の「生」が掲げられたり、藤村氏の「家」が掲げられたりした。自然主義は天下を風靡してゐたのであつた。ところが、そのうち、老社長が死んで、嗣子たる本野一郎氏が社長の位置を襲ふとともに、自然主義を嫌ひ新進の文學者を嫌ひ、私學出身者を嫌つて、老大家を招聘することに熱中した。それで私などはおのづから遠ざけられたのであつたが、その時新社長は、紅葉露伴と並稱された昔を偲んで、露伴氏の小説を渇望したらしく、嚴谷小波氏などを煩はして向島の臥龍を呼起さうとしてゐた。私はひそかにそれを祭して、「露伴は書けまい」と云つてゐた。熱心なる依賴を斥けかねたゝめか、露伴氏もやうやく新聞に寄稿することはしたがそれはたゞ一回(?)だけであつた。在來の氏の作品とは、稍々趣きがちがつて、筆致が世話に砕けたものであつたと記憶してゐる。……氏は何故に一回だけで中止したのであらう。頑强なる氏は、周圍の若輩の自然主義の跋扈くらゐ、雲烟過眼視していゝ譯ではないか。……「天うつ浪」を中途で投げた氏は、創作上の行詰りを感じたのではあるまいか。

兎に角、「天うつ浪」は舊文學の最後の長篇であつた。爾來二十年の歳月が經過してゐる。その間いろ／＼な文學が起つたが、田山氏などを先達とした日本流の自然主義の扶植した勢力はなか／＼衰へなかつた。自然主義の作物と分類される

種類のものは衰へたにしても、田山氏などのはじめた新小說作法は、いつまでも追隨者が多かつた。自然主義に對者でも、頻りに、自己の日常の言行錄や身邊雜記を發表して飽くところを知らぬ有樣ではないか。元來歐洲の自然派作家の作品は、多くは客觀的のもので、自己の言行錄すなはち小說といふやうなことはない譯なのだが、日本では、自然主義、すなはち自己描寫主義となつたから不思議である。

かういふ作風が十年も二十年も流行したために、文壇は單調に陷り沈滯して、變化を求める聲は、長い間、をりに觸れては聞かれた。小說に對する讀者の要求は、つねに滿されない有樣であつた。大衆文藝や通俗長篇が近來歡迎されだしたのも、自然の勢ひなのかも知れない。

それでは、二十年の過去へ返つて、「天うつ浪」や「金色夜叉」の作風を此處に復活させるのであるか。さうも思はれない。

私は、「大菩薩峠」を第一卷だけ通讀した。

文壇の小說、及び婦人向きの通俗小說に飽足りない讀者は、この「大菩薩峠」のやうな小說を、以前から愛讀してゐたらしい。谷崎氏や菊池氏がこの小說を推讚してゐたのを、何かで讀んだことがあつたが、私は、いろ〳〵な知人が、この小說を耽讀してゐるのを知つてゐる。皆んな面白いと云つてゐる。

何だか、「天うつ浪」を打留めにした古風な小說が、自然主義系統の文壇小說跋扈の間に、地底にくぐつて、「大菩薩峠」のやうな形を取つて新たに現はれたやうな氣がする。露伴氏の作品に男性的氣魄があるのなら、中里介山氏の作品にもそれがある。それに、どちらも佛教臭い。佛教臭いところが、また傳統的に日本人に有難がられるのである。第一卷だけを讀んでも、以前の露伴氏の作品の風格に似たものが感ぜられる。

年少の頃、八犬傳を愛讀してゐた時分に、「大菩薩峠」を手にしてゐたなら、私も夜を徹して讀耽つたかも知れないが、今日は私は、奇拔な筋の變化には驚かされなくなつてゐる。たゞ、机龍之助といふ主要人物が、在來の講談的英雄型を脫

してゐるのを面白いと思つた。この人物は、ひどく人情を沒却してゐる。講談的英雄でも、あるひは露伴式豪傑でも、どうかすると涙を濫費して、讀者の感傷癖に媚びるのであるが、龍之助は、飽くまでも冷徹である。それから、金銭といふ男の執念は、描いて眞に迫つたところがあり、第一卷のうち最も精彩を放つてゐる。……まだ大長篇の一部しか讀んでゐないのだから、全體に渡る立入つた批評は差控へることにする。

「洗心廣録」を讀む。小説よりもかういふものによつて、露伴氏の學殖文藻識見が充分に伺はれるのである。氏が徳川時代に生れてゐたなら、一代の大文章家として天下を風靡してゐたかも知れない。今時、かういふ漢文崩しの名文を書きこなす人は他に無さゝうに思はれる。私なども讀みながら、文辭の上に一種の興味を覺えるのであるが、しかし、そこに含まれてゐる思想や處生訓からは、さして深遠な味ひを味ひ得られないのである。

「鏡に對へば忽然としてそこに人の姿あり。身より出でたる像ながら、此の身も滅せず、鏡に添へるものながら、彼の鏡も増さず、不増不滅の彼此の間に、忽生忽滅のすがたありて、眉は横なり、鼻は堅なり、笑む時をかし、これもまことよ。泣く時悲し、それもまことよ。阿字本不生いよよまことよ。たゞ何事も夢のたはむれ」など、面白い感想もあるが、舊幕の道學先生の講釋見たいなことを、六ケしい文字を連ねて云つてゐるところも少くない

露伴氏も、現代の青年に對し新しい文學に對して、をり〳〵老人らしい冷語を洩し、當てこすりをも云つてゐるが、さういふものを見ると、時代を超越したらしい巨人でも、全然周圍を氣に留めないではゐられないことに思及ぶのである。

同じく「雜文」とか「隨筆」とか云はれるものでも、「洗心廣録」を讀んだあとで、新年號のいろ〳〵な雜誌の雜文隨筆を讀むと、表現の方法がかうも違ふものかと驚かれる。同じ處世訓でも威儀を正して說かれると重味があるのだが、今後は、こんな古典的名文を書き得るものは出て來ないだらう。露伴氏には模倣者がない。最後の一人である。

荷風隨筆

永井荷風

カッフエー一夕話

これは銀座の或カッフエーで聞いたはなしである。

銀座にかぎらず都下のカッフエーといへば、まづ其の建築物全體を始めとして、女給仕人の衣裳や髮かたち、出入する客の言語風采人品から、飲食物、奏樂、椅子テーブルの如きものに至るまで、繊巧なる趣味といふものは塵ほどの存在をもここには認め得られない特種の世界である。然しかくの如き周圍の光景は卻て一夜わたくしをして、お蔦といふ女給仕人の身の上ばなしに耳を傾けさせた所以となつた。偶然と意外といふ事情の下には、いかに平凡なはなしにも忽ち溌剌たる興味が添へられるものである。お蔦の語つたその身の上ばなしは、粗野喧囂なるカッフエーに在つて聞くよりも、どこか、も少し靜なところで、しんみりと聞くべきものであるやうに、その場合わたくしには思はれたのであつた。

お蔦といふ女給仕人は見たところ年は二十前後。東京の女だといふことは、その言葉づかひを聞くより先に、顏の色の淺黑いのと、皮膚のあらいのと、目鼻立の整つてゐないのとで、直にそれと知られるであらう。丈は高い方ではないが、撫肩で肉付がしまつてゐるので、荒い竪縞のお召でも着なした後姿は案外形よくすらりとしてゐる。髮はいつも頭巾でも冠つたやうなオールバックに結つてゐるので、圓顏の廣い額が猶更廣く見えるのを、當人は少しも氣にせず、却てそれを

よい事に活動寫眞で最屓にする西洋女優の顏に似せやうと黑目勝の眼の下目緣には墨をさし、兩方の眉根を八の字形に削付け、白粉も玉子色のものをつけ、頰には薄く紅をさしてゐる。されば着物の着こなしも帶は勿論胸高に、帶揚を乳の上あたりで堅く結び、袖は雛妓の振袖の如く、襟は思ふさま深く引合せた上に、半襟には堅いシンを入れて、頤の下で一文字になるやうにしてゐる。白いエプロンの紐を大きく前で蝶結びにした間に、柴山細工の根付をつけたビールの栓拔をはさみ、金鎖のついた高價な鉛筆をぶら下げてゐるのは、銀座邊のカツフエーでのみ見られる風俗であらう。

その晚は恰二百二十日前後のことで、降りつゞいた秋霖に、銀座通りも日が暮れると共に人通もをりをり杜絕えがちになる靜けさ。カツフエーのテーブルは大方あいてゐるので、手持無沙汰の女給達はあちらこちらの壁際に四五人づつ寄集つて、コンパクトの箱を掌にかざし、白粉の上塗りばかりしてゐる最中、夕刊の新聞を見てゐた一人が、突然、「九州の方は大變な大水なんだとさ。」とさも珍しさうに言ふと、他の一人が生あくびを嚙みしめながら「東京は大丈夫なのか知ら。いくら雨が降つても。」ときゝかへした。

「東京は大丈夫よ。河があつても隅田川だけぢやないの。」

すると傍からまた別の女が、「大丈夫な事はないわよ。東京だつて隨分大水の出たことがあつてよ。わたし何でも三つか四つの時分だつたわ。父さんにおぶつて貰つて逃げた時のことをかすかに覺えてゐるわ。」

大水のはなしは忽ち轉々としてわたくしのテーブルの傍に立つてゐる女達のはなしにまで移つて來た。その中にお蔦がまじつてゐて、「向島の家の二階には水の出た痕が隨分後まで壁や柱に殘つてゐたのよ。わたしが貰はれて行つた家なんぞもさうだつたわ。あの邊は地震の時には燒けなかつたから、きつと今でも殘つてゐるだらうと思ふのよ。大水の時は飲まず食はずで幾日も屋根の上にゐたんですつてね。」

お蔦はわたくしに當時の光景を質問でもするやうな調子ではなしかけたので、わたくしは、

「お前、向島の大水に遭つたのか。」ときいて見た。

「いゝえ。大水の時はまだ牛込の家にゐたから知りません。」

「その時分いくつだつた。」

「さうねえ。それを言ふと年がわかつてしまふから止しませう。小さな子供の時分よ。」

「子供は小さいにきまつてゐるよ。大地震の時はやつぱり向島か。」

「いゝえ。もうその時にはほんとの家へ歸つてゐました。貰はれて行つた向島の家は、母さんが新ちやんといふ子供をつれて信州へ逃げて行つちまつたので、父さんもその跡を追掛けて行つたツきり、三月ばかりも音沙汰なしなのよ。そんな事でつまり家の商賣は駄目になつてしまふし、それからまた、いろ／＼ごた／＼した事があつたんで、わたしはほんとの家へ還つて來たんですの。十六のお正月でしたわ。今から考へるとまるで夢のやうよ。一人ぼつちで向島の家にお留守番をしてゐた時の事を思ふと、わたし自分ながらよく淋しくなかつたと思ふわ。何しろ十五の時のことですもの。」

「向島はどの邊にゐたんだ。」

「寺島町よ。」

「寺島のどの邊だ。」

「アノ蓮華寺ツて云ふお寺、御存じ？」

「知つてゐるさ。向島ならどこでも知つてゐる。白鬚さまの後だらう。あのお寺の庭にはむかし有名な松の木が在つた處だよ。門の前の通りにたしか小學校か何かあつたね。」

「えゝ。寺島町の役場もあるわ。わたしのゐた處はそのすぐ傍なのよ。江東軒て云ふ洋食屋をしてゐたのよ。」

「さうか。それじや女給さんはお手の物だな。お父さんはコツクさんかね。」

「ところがさうぢやないの。洋食屋はわたしが貰はれて行つてから、遊んでゐても仕樣がないつて言つて、洋食屋をはじめたのよ。コックは別に雇つたンですけれど、女給は母さんとわたしと二人でやつたんだわ。」

「父さんは何をしてゐたんだ。」

「帳面をつける位で何もしやしないわ。父さんは、わたし能く知らないけれど、むかし神樂坂で唐物屋をしてゐた時分には身代もよかつたんですとさ。ところが母さんが藝者をしてゐた時分に大變深くなつて、父さんは養子に行つてゐた唐物屋の家を飛出すし、母さんは先の旦那の子を連れて父さんと二人で大阪へ行つて、何か商賣をしてゐた事があるんですとさ。それから東京へ歸つて來て向島へ家を持つたのよ。だから隨分仲がよかつたわ。どこへ行くんでもきつと二人一緒なのよ。だけれども今から考へて見ると父さんの方が餘計に惚れてゐたんだわね。新ちやんといふ子供の事でごた〳〵すると、母さんはきつと怒つて田舍へ還るつて言出すのよ。すると父さんはどうする事もできないで默つてしまふのよ。新ちやんといふのは低腦ないやな兒だつたワ。わたしより二ツ年上なのよ。色が眞黑で、お賓頭顱さま見たやうにでぶ〳〵肥つて、手でも足でも大根見たやうなのよ。學校はどうしても高等科に這入れないで尋常四年でよしてしまつたのよ。それだから、母さんの身になると新ちやんの事が一倍不憫でたまらなかつたらしいのねえ、行末はわたしと一緒にでもするつもりだつたかも知れないのよ。だけれど、わたし新ちやんがきらひで〳〵、一緒に御飯をたべるのもいやた事があつたのよ。だから、御飯時分になるとよく外へ遊びに行つて、眞暗になつてから歸るやうにしてゐたのよ。白髯さまの内なんぞで、近所のお友達と遊んでゐると、大きなづうたいをして鼻を垂らしながら、蔦ちやん御飯一緒にたべやうよツて、呼びに來るのよ。すると、みんなが、ソラ蔦ちやんとこの坊やが來たつて囃すんでせう。わたしもう口惜しくなつて、何處へか行つちまはうと思つてさ。雨が降つて來たのもかまはないで、白髯橋を渡つて、淺草公園の中を夜おそくまでぶら〳〵してゐた事があつたわ。それはまだ十一二の時分なのよ。それからお針のお稽古に業平橋のお師匠さんのとこへ通つてる時分、雨

が降ると、よく傘と下駄を持つて見番通で待つてゐるんぢやないの。憎らしいからわざツと土手の方を遠廻りして歸つて來たこともたび〳〵だつたわ。」

「それぢや寢る時はどうしたんだ。兄妹なら一つ座敷に寢たんだらう。」

「いゝえ。わたしは母さんや父さんと三人一緒に寢て、新ちやんだけ男だから一人二階に寢るんだつたわ。洋食屋のお店の方とは家が別になつてゐたのよ。先にはきつと別莊か何かだつたらうと思ふのよ。わたし達のゐた住居の方は三千歲の芝居で見るやうな、蠣殼を載せたしやれた門があつて、飛石が敷いてあつて、お庭もちよいと廣かつたわ。洋食屋の方は貸家だつたのを、わたしが貰はれてから、內を直してお店にしたのよ。だから、夜お店の用をすましてから母さんと一緒に住居の方へ歸つて來て、暑い時分は、お庭で行水をつかつて寢るのよ。お月夜で蟲が鳴いてゐる時分なんぞ、樹の枝へ浴衣を引掛けて、行水をつかふんでせう。まるで田舍の百姓家見たやうだつたわ。」

「お前が裸體になると、新ちやんがのぞきに來なかつたか。」

「えゝ。來たわよ。父さんに目つかつて、イヤツていふほど引ぱたかれてサ。ほんとにあんな好い氣味ツちやなかつたわ。だけれど、母さんが家を出たのも、つまりは父さんが時々新ちやんを邪慳にしたからなのよ。新ちやんはもと〳〵母さんが商賣をしてゐた時分にできた兒でせう。誰の兒だかわからないらしいのよ。それも利口で可愛らしい兒なら、父さんだつて承知の上で母さんと一緒になつたんだから、何とも言やしないんでせうけれど、まア不具者同然なんでせう。だから父さんの言ふのは、母さんの家が信州の何とか言つたわ。小諸からもうすこし先の何とかいふ處で宿屋をしてゐるんですとさ。毎月お金をやるからそこへ預けた方がいゝツて言ふのよ。東京に置いても學校はだめだし、大きくたつてぶらぶらしてゐたつて、自働車にひかれるくらゐが關の山だつて言ふのよ。ところが母さんの身になると、どこまでも自分の側に置いて世話がしたいんだわねえ。わたし夜中に母さんの泣いてゐるのを聞いて目をさましたことが幾度もあつたの

よ。わるいからいつでも其のまゝ寝た振りをしてゐるのよ。母さんはそんなに坊やが邪魔になるんなら、一緒に田舍へ行つてしまふつて言ふと、父さんはお前はおれよりか新太郎の方が大事なんだから仕様がない。今更別れるの何のと言つたつて、それはお前の我儘で、人をこまらせるといふもんだッて、しまひには父さんの方が折れて母さんの機嫌を取るのよ。だけれど、とう〳〵或晩、まだ蚊帳がつッてあつた時分だわ。どういふわけだか其の始りは寝てゐる中だつたから分らなかつたけれど、夜中に父さんが怒つて、母さんの襟髪をつかむでひどい目に會したのよ。いつもなら、わたしが目を覺しやしないかと思つて、父さんは大きな聲を出しさうにしちやア氣がついて遠慮するのを、その晩は母さんが御免なさいつて言つて蚊帳の外へ逃げ出さうとしたのを、後から髪の毛をつかんで引摺り倒して撲つたよ。わたしも夢が夢中で御免なさいッて、泣きながら父さんに抱きついたのよ。母さんはたしか一日置いて其の稽古日だつたわ。父さんがお湯に行つてゐる間に新ちやんをつれて田舍へ行つてしまつたのよ。わたしはお針のお師匠さんのとこへ行つてゐたのよ。歸途に源森橋の處まで來ると、急に雨が降つて來たから、いつもの通を行くと、新ちやんがまた傘と下駄を持つて來るのに出ツくはすだらうと思つて、それがいやだから瓦町のお秋ちやんて云ふお友達の内へ寄つて傘を借りやうとすると、お秋ちやんの内はみんなでもう羽子板の押繪をこさへてゐるのよ。お秋ちやんとこのおぢさんは押繪の名人なのよ。急にお正月が來たやうな氣がしちまつて、つい面白いもんだから看てゐる中に日が暮れちまつたぢやないの。急いでも小梅から寺島までは隨分あつてよ。叱られると思ふから、そつと洋食屋のコック場の方から這入ると、コックの爺やが、蔦ちやんも一緒ぢやないかッて父さんが血眼になつておゐでだよ。早く行つて安心させてお上げッて言ふのよ。父さんはお湯から歸つて來て、母さんの置手紙を見ると、直ぐ上野の停車場へ馳けつけて見たんですとさ。その晩、わたしと父さんと二人ッきりになつちまつて、いつもの處に寝たんだけれど、あんな怖い晩はなかつたわ。夜中になつて、父さんはさうつと起き上つてわたしの寝息を窺つてから、母さんの鏡臺だの用箪笥だの、そこいら中の物をさがしちやア、時々溜息をつくのよ。悲觀して自殺でもするんぢやないかと思つてさ。よつぽど起きてどうかしやうかと思つたのよ。だけれど身體が顫へて聲が出

ないからそのまゝ寢たふりをしてゐたわ。すると父さんも布團の中へはいつたから、まアいゝと思つて、知らず／＼今度はほんとに寢てしまつて、眼を覺すと、父さんはもう内にはゐなかつたのよ。その晩、わたしの名宛で電報が來たの。」

「お前一人、置いてき堀をくつたんだね。」

「さうなのよ。父さんが歸つて來るまで、わたしどうしていゝか分らないから、ぼんやり一人でお留守番をしてゐたのよ。洋食屋の方はコックのぢいやがどうにか遣つて行けない事はないつて言ふから、わたし其時十五だつたけれど、毎日帳面をつけて働いたんだわ。だから此の商賣の事はよくわかつてるわ。食物商賣つてものは案外やつて行けるものなのよ。」

「母さんのはなしはそれから結局どうなつたのだ。」

「父さんだけ家のことが心配になつたと見えて、先に歸つて來たのよ。母さんも後から歸つて來た事は來たけれど、その時には、わたしはもう向島にはゐなかつたのよ。ほんとの家の方で、あんな處へはやつて置けないとか何とか言つたらしいのよ。それで牛込の家へ還つて來たんですけれど、何しろ一度餘所へ貰はれて行つた身體だし、それに兄弟も大勢なんですから、それでとう／＼女給に出るやうになつたのよ。その後向島の父さんはどうしたか知らないわ。母さんには一昨年電車の中で鳥渡見かけたことがあつたわ。知らない男の人と一緒のやうだつたけれど、電車がこんでゐたし、わたしも降りやうとするところだつたから、それなり口もきかないで別れてしまつたのよ。」

お蔦のはなしはこれだけである。わたしは何やら可憐な小説でも讀みきかされてゐるやうな心持がした。そして、若しもわたくしにして、かの「たけくらべ」を作つた一葉女史の如き文才があつたならば、お蔦のはなしを材として、白鬚から業平橋に至る向島一帶の地を背景となし、その處に遊んでゐる群童とその父兄の生活をも併せて描き出す事ができはせまいかと云ふやうな心持もした。然しそれは唯その一刹那さう云ふ心持がしたばかりで、制作の興味はとう／＼集注せらるゝに至らずして歇んだ。わたくしはお蔦のはなしを半微醺の間に聞いてゐた故でもあらう。

編輯者雜記

×

二月號は霜枯れ時だといふが、屠蘇の香が消えないと印刷所の職工の能率も上らない、と同じ樣に編輯者の氣持もダレるからである。その間に在つてこれだけのものを蒐め得たのは以て瞑すべしか。不足の點は三月號で補ふことにする。それればかりか新年號に逸した大物を是非とも今後の雜誌に活躍せしめて大雜誌たるの本領を發揮せねばならない。

×

それにしても評判のいゝのは何よりだ。これで今年は景氣も直つてドン／＼雜誌が賣れるやうになれば新計畫はいくらでも樹てられる。昭和三年は希望に燃える年らしい。

×

議會だ、解散だ、總選擧だ、御大典だ、今年は多事だ。秩父宮の御慶事もあるらしい序ながら特選畫報中の秩父宮殿下の御寫眞はサイベリア丸に於ける殿下の御寢室に、中央公論と野球界とを御覧になつてゐるといふ意味で或特志家が本社に態々寄贈せられた珍物である。平民的な殿下の御起居も伺はれて嬉しい。

○

今月號の創作欄に新人十一谷、片岡、下村三氏の長篇力作を掲載し得たことを喜ぶ。近來油の乘れる三氏が各々特色ある題材に就いて十分に筆を揮はれたことは殊に會心事である。正に沈滯せる文壇に對する好き刺戟でなければならぬ。

○

片上伸氏の「文藝時評」は氏が年末以來の風邪が昂じて〆切間際に至つて終に臥床さるるに至つたゝめ、今月號に間に合はず止むを得ず休載したのは遺憾であつた。その代り來月號には新しい元氣を以て十分に筆を揮つて頂けることと思ふ。

▽

前號の本欄からお斷りして置いた、小山内氏の映畫時評に就て、又々お詫びしなければならぬ事を遺憾に思ひます。氏は新聞の消息にもあつた通り疲勞と風邪のため本月初めから臥床中で、最近は醫師の忠告により、絕體安靜裡に療養中といふ譯で、どうしても本號に御寄稿願はれませんでした。次號からこそは三氏三樣の權威ある時評を掲げ得ることを信じます。

□

私達はいろんな人々に會つて、雜誌の事は勿論、出版界や文壇の事に就いて話す機會が多い。從つて本誌に對しても、從來の高級な風格を失はないやうにとか、又反對に今迄の型を破れとか種々の御意見や御注文を受ける。それ等は我々編輯者に、いろんな意味で暗示ともなり、刺戟ともなることをうれしく思ふ。

□

この意味で、近來編輯室机上に本誌に對する投書の多くなつたのは、それが稱揚であるにせよ、又嘲罵であるにせよ、殊に誠意ある鞭撻の如きは、編輯者も首をかしげる場合が多い。どうせ編輯者とて神樣でないのだから、完璧な事ばかりは出來ない。せい／＼勉强もしたり、時代の動きも觀てゐるつもりだが、一般讀者諸君の御意見もどしどし拜聽したいものだ。



灯と睡

十一谷義三郎

一　隧道の丘

窓の下を頬の紅い學生を滿載した乘合の四輪馬車が通る。黒ずんだ天井裏で翡翠色の草かげろうが憂曇華を產みつけてゐる。鈍い太陽に蔽はれた土曜の午後――

「ふおつくす、君は天才だ。」

窓明りに浮んでる畫布の面を見詰めながら、圖畫の先生が叫んだ。

「うまい！これあもう、上野の展覽會へだしても好いよ！」

先生は、その、若い櫻ん坊の熟つかつた、匂ひの立ちさうな、漲つた女の鷄胸へ、あの畫家特有の夢幻的な、同時に何かしら執拗い眸をぢつと据えたまゝ叫びつづけた。

地圖で見ると長い〳〵中仙道の、間い、呆けた標燈のやうな町の街外れの雜貨屋の二階で、向うに、靜々と竝んだ繭倉の棟の切れ目に、高い常盤木の靑が籠めて、その間に私立中學の教員室の窓が小さく凹んでゐる。先生は其處から歸つた許りでまだ著換へもしてゐない。少し汗ばんだ剃り跡の綺麗な顏、東京の百貨店から取寄せた紫紺色のフランネルの上著の胸に、茶と洋紅がだんだらに出たネクタイをぴら〳〵させてゐる。赴任してまだ幾らも經たず、東京の美裝癖と靑春を持て倦んでる風がよく判る。いや、先生は、道中記式の素枯れた旅人宿の掛行燈などの風に揺れてる此の町が、溜らないのだ。馬鹿見たいに無表情な繭倉と山脈と田畑、蛆も米粒も一緒に消化しさうな胃を持つた人間達、ぢつとしてゐると、その周圍の催眠作用に蝕ばまれて、腦髓も何も死んで終ひさうだ。だから先生は、いつも、宛で雜草の中に紫苑が花を點じたやうな、變に革命的な身裝りをして、邊りの「俗流」に對する憐憫を發散してゐる。

「ねえ、君、ふおつくす、僕は君を知つてゐたよ。然し……」そして先生は、も一度つく〴〵とその六號の半身像を眺めた。

「狐」の吉原五郎は先生の讃辭がむづ痒く、火照つた溜息をついた。眉上弓がかつきりと際だつた額、その下に原始的に澄んだ眸、淺黑い急卵形の顏が、すつかり日本晴れに晴れ上り、愛すべき先生と畫布の女とを、等分に見まもつてゐた。

「此の娘はどうも、」とやがて先生が眉を寄せながら云つた「見たことがあるやうだ。あゝさうだ。彼女だ！」そして彼のの肩を叩いて

「彼女だらう、え？」と云つて微笑んだ。

吉原五郎はひやりとしたが、相手が、あの恩給を目的の饑じい酷薄な劃一主義の先生達でなく、第一、惜氣もなく自分を天才視して呉れる先生なので、中學五年生にしては早熟た心構へで、ぐつと落ちついて、細い首を傾げながら、眼尻で笑

つた。

「さうだらう。あの床屋の評判の彼女が、彼女を君あモデルにした！………僕も、僕も、モデルが欲しい。」

先生は吉原の肩をしつかり掌で掴んで、その顔を覗き込んだが、語尾は獨り言のやうに心細く口の中で消えた。

「先生もお描きんなると好いでせう。」と「狐」が優越感を押し隱して、精一杯内氣に云つた。

「あゝ描くよ。描きたいんだ。だが、僕あ、僕にあ………」

「此女はいかんですか？」

「此女！好いよ、君。こんなのが描かせて呉れるなら………」

「それあ僕がひと言云へば。」そして「狐」は誘惑的とさへ言ひたいほどの微笑を浮べた。

「ほんとうかね、君、それは。」

「ほんとうです。」

「そおか、それなら………だが、」

革命家の先生は其處で心細い内省をした。その内省が憤激になり愚痴になり、やがて言葉に爆發して、前に坐つてる吉原に當つて來た。

「僕があの娘の裸像を描いたことが知れたら、校長が何と云ふだらう——僕あこれでも、Kに、知つてるだらう、ふをつくす、帝展の審査員でもいつち巾の利くKだ、Kに認められた男なんだ。ほんとうは、こんな山ん中などへ來る男ぢやあないんだ。だが、云つとくがね、ふおつくす、先生にはなるな。君は天才だから。好いかね、ふおつくす………」

「狐」は默つて、先生の唾の泡沫を、やつぱり誘惑的な微笑で受けてぢつとしてゐた。小鳥が毛なみを光らせて窓を掠める。先生は、何かしら舌が寂しく、ネクタイを片手の掌に掴んで、怒つた瘋癲者のやうに叫んだ。

「僕も描く。屹度描いて見せる。さうだ、是非、此の娘に紹介して呉れ、ふおつくす！」

日曜の朝——濃い霧の中を、「狐（ふおつくす）」が、白粉壺のやうな蕎麥畑に細い毛脛を突込んで、丘の隧道の方へ歩いてゐた。日の出前で、腰まで來る心臟形の蕎麥の葉の冷たさに、睡氣を悉皆持つて去（い）かれて、何かしら不機嫌な顏をしてゐた。

やつと畑を拔けて、隧道の上へ出る少し闇い坂道へかゝると、彼は、その、路傍に茂つてゐる、藪煙草の貧しい花ならに、爪先きを自暴に擦りつけて、畑土を落したが、足の甲には鷲台の葉を、腰の廻りには蕎麥の花びらを、べと〳〵と食つ附けたまゝで、暫く、その水氣の澱んだ崖下にとぼんと立つてゐた。聲も無く、風も無く、糊を塗り籠めたやうな、殆ど虛無的な朝だつた。その底を、ふと、暗碧色のボタンほどの標燈をともした信越行きの短い列車がずゞ黑く動いて來て、足の下へ潜つた。「ごをツ」と地鳴りがしたが、それつ切りで、音波の出鼻を、何かとても鋭い刃物で裁ち截りでもしたやうに、そのまゝもとの寂然（かん）とした風景だつた。

「あんた、まあ、」と息を殺した女の聲が、その時、坂道の中空の松の葉越しに聽えた。と同時に、他所行きらしい、赤緒の、黑塗りの下駄が、焦れて、蓮葉に、かつ〳〵と鳴つて、土くれが、「狐（ふおつくす）」の足許へ轉げ落ちて來た。

「あんた、何してるのよ。」

「下りて來い。」

「厭あだよ。」

女は踏んだらしく、片脚の、細長いふくらはぎから、紅味を宿した爪先までが、その松葉越しに大膽にこちらへ動くと見ると、また土くれが轉げて來た。

「狐（ふおつくす）」は粘い唾をパツと吐いて、あとはだんまりで、女の傍まで登つていつた。

「まあ濡れて！」さう云つて濃い眉毛を蹙めながら、彼女は、袂から皺になつた手巾をとり出して、劇しく彼の紺股をはたいた。

「ほら、こんなに。」とやがて、彼女は、蕎麥の花びらが點々と滲んだ掌と手巾とを、ちよいと彼の眼の先へ擧げて見せて、それから

「また、今朝も、近道をしたね。」と云つて、うけ口の脣を結んで、意氣の好い眉で、につと睨まえた。

娘にしては、盃形の腮の肉にゆとりがつき過ぎてる。それに、生々とした顏の何處かに隙が見えて、淡い淋しさが漂つてる。

「狐（ふおつくす）」は、此處へ來ると直ぐにもう、先刻（さつき）の不機嫌を忘れて終つて、持ち前の干し杏みたいな味觸の有る眼差しや微笑を湛へて、女の自由になつてゐたが、いま、太陽の無い、白々とした明りに、その彼女の顏をぢつと見ると、ふいに欠伸をして、眠不足の眼を空に向けた。

女は母親のやうに笑つた。

鷄が彼地此地で鳴く。

「眠たいの？あんた。」

女の右手が、聲と一緒に、力強く彼の手首を握り締めて、向うの厚朴の木陰の叢へ引張つていつた……

魂が、輪廓だけを殘して漏つてしまつた人間、まあさう云つた風に、鱗形の皺の寄つた厚朴の幹へ、くたりと脊を凭せて、「狐（ふおつくす）」は、投げ出した自分の足首を眺めてゐた。その邊に落ち散つてる淡紫の厚朴の花や煙紫蘇が、さんざひしやげて土に塗れ、薄い紺絣の地がぺたりと纏ひついた二の腕の邊に、毒々しいきんぽうげの花がふら／＼かゝつてゐた。足の裏

が水浸しの死骸のやうに白い。
女は眼を細め、厚朴を片手に抱いて彼を見下ろしてゐた。
「何を考へてるの？」
「何も考へてやしない。」
「あんた、今日は、逢ふ。」
男は暗紅色の頰を仰向けて弱々しく笑つた。
「もう歸らうかな。」と女が、頭の上の、遠い野の向うの日の出を受けた、羽搏きの聽える梢を見て呟いた。
「圖畫がね、あのハイカラな――圖畫の先生だよ………」
「あゝ。」
「知つてるだらう、男前の好え？」
「知つてるよ、店へよく來るんだもん。襟足の細い、役者みたいな。」
「好きだらう。」
「好かん。」
「君に惚れとる。」
「………」
「こないだのあの繪を見せたら、」
「見せたの、あんなもん？裸ぢやないか。馬鹿！」
「感心したよ。」

「嘘！………」

「天才だと云つた。」

「テンサイ？」

「こんな女は東京にも無いと云つた。」

「誰がこつちのやうなもん！女蕩し！」

「狐」は立ち上つて、艶を帯んだ女の眼を見た。

「ほんとだ。こんな女が僕にも描けたらと云つた。そいぢや、連れて來てあげませうと云つた。」

「誰を？」

「君。」

「好かない！馬鹿。馬鹿。馬鹿。」

「あのハイカラは偉いんだよ。先生が描けば屹度東京の展覧會に出る。そしたら君が第一評判になる。汽車に乘つて君んとこまで散髪に來るお客が出來る。君は町一番の女になる………」

「こないだのあの絵の時も、あんた、そんな串談を云つた。」

「串談ぢやないよ。だから、先生が、天才だと云うた………先生にも描かしてやれ、え？もう僕は約束までしてしまつたんだ。」

「裸絵は厭だよ。此のまんま………」

「どうして？そいぢあ、瓜や徳利や鳥を描くのと一緒だ。そいぢあ詰らん。」

「ぢや、精出して、おかみさんを描けば好い。」

「無いんだよ。有つたつて、君ほど好い女があるもんか。ね、好いだろ。え？」

女は、つい彼の言葉に釣り込まれて、あの、紫苑色のだんだらのネクタイに飾られた、先生の華奢な滑つこい襟足の皮膚を想ひ出しながら、ぼんやりと點頭いた。

「ぢや、今夜でも、一遍、一緒に行つとかうね。」

それにも、彼女は無心に點頭いたが、ふと、男の變に熱つぽい態度と、自分の頭をちらつと掠めた幻に寒氣立つて、千裂れるほど首を振つた。

「厭だ、厭だ、厭だ。誰があんな男に！」

それからその黑鬱金香の花片のやうな眼を壓倒的に男の顏に据ゑて

「あんた、そんなことを云つて、捨てる氣ぢやない？捨てるんなら、捨てられたら、死んでやるから！」さう云ひ切つたが、其處に近々と寄つた男の頬に、「狐」らしい、可憐な、微笑みを認めると、颯つと片手を伸ばして、男の首を抱いて、

「行くよ、一緒に。何處へでも。」と囁いた。

彼等が仄闇い厚朴の木蔭を出ると、もう霧が斑らに切れて、蠟燭の灯りのやうな黃いろい朝日が、隧道の上の斜面に流れてゐた。女はその光に堪へぬ風に身をすくめて別れていつた。

「狐」は下駄を穿いたまゝ女の熱い息の纏ひついたからだを、土と雜草の上へ仰向けに寢轉がつた。赤道の下に氷の家を建てゝ、その中へ這入つてる男、ダリアの花片や薔薇の香に蒸されながら、硝子張りの眼を見開いてる男――眞上に遠く、薄りと覗いてる淺葱の空が、擴大した彼の眸にしんと寫つてゐた。

「狐」は、ふとあの女を捨てゝみたらと思つた。花束か彩毬のやうにぽんと他人の手へ投げて、次の女を求めたらと考へ

た。彼には、人生が、女が、玩具のやうな氣がした。

いや、もつとひどく……………

──男が歩いてゐた。彼は三度唾を吐いた。彼は行つちまつた。唾は殘る。

第一の唾の言葉。俺達は此處にゐるが、あの男はゐない。

第二の唾の言葉。男は行つちまつた。

第三の唾の言葉。男はたゞ、俺達を此處へ吐くだけに來たのさ。つまり俺達が、人間存在の目的なんだ。だから男は行つちまつて、俺達は殘つてる。

太陽が照つた。唾は三つ共、蒸發してしまつた──

──女が這入つて來た。彼女は三つ灯りを燈した。彼女は出ていつた。灯りは殘る。

第一の灯りの言葉。俺達は此處にゐるが、あの女はゐない。

第二の灯りの言葉。女は出ていつた。

第三の灯りの言葉。女はたゞ、俺達を此處へ燈しに來ただけさ。つまり俺達が、人間の存在理由なんだ。だから女は出ていつて、俺達は殘つてる。

風が吹いた。灯りは三つ共、消えてしまつた──

「それから、それから………」と「狐（ふれつくす）」は口の中で言つた。

脊中の下を汽車が通り拔けた。音はすぐに消えて、空の淺緑が擴がつてゆく。「狐（ふれつくす）」は靜に瞼を合せた。露を吸つた絣紺の肌から、そちこち淡い烟が立ち騰つてゐた。

二 黒い窓掛

「狐（ふおつくす）」には兩親も無い。家も無い。特志家に金を出して貰つて、或る旅人宿の離屋（はなれ）を借りて、學校へ通つてゐる。

離屋の端椽の先きの朽ちた透垣に纏はつてる烏瓜の蔓に、白い蕾が載つた頃、彼は、女と、始めての媾曳をした。花が青い實になつて、その實のお尻がそろ〳〵風に朱ばみ始めた現在も、やはり彼は、女に曳き摺られて、寒い媾曳をつゞけてゐた。朝はあの丘の厚朴の木蔭で、夜更けは離室の灯りを消して、窓を叩くやうな狐の鳴き聲を聴きながら。

彼女は顏と姿に隨分魅力のある女で、野良唄や青年團歌に頰を紅潮させてゐる町中の若者の夢が、彼女故に、一つ〳〵あまく蝕ばれて行くほどだつた。然し、また彼女は凄いほど肌の荒れた女で、もしその若者等がそれを知つたら、彼等の心臟は、恐らく片つ端から氷結したに違ひない。男と女の仲が極度に弛んだ雰圍氣に育つた彼女は、子供の時から、此の自分の肉體の持つ兩極に、鋭敏な自負心と警戒心を働かせて來た。

誰も知らなかつたが、そしてそれは又一篇の物語だつたが、女には、吉原五郎以前に、既に男の手が這入つてゐた。男は彼女の床屋（うち）にゐた渡り職人で、彼女に觸れると、いちはやく逃げてしまつた。

「もうもう決して、」と彼女は、店の鏡の面に大きな幌の影を搖つて通る四輪馬車の――ゆふべ、たしかに次の町まで男を運んで行つたと云う馬車の――車輪のひゞきを追ひながらお肚ん中で決めたのだつた。

「あんな、逃げる男は、持つこつちやない！」

その彼女が吉原五郎を捉へたのだ。いや、「狐（ふおつくす）」が彼女を捉へたと云ふ方が好い。あの、生れながらに老成した思慮と、同時に嬰兒的な卒直性（ナイブテ）の不思議に混り輝いた眸、あの變に胸に泌みる微笑。女の彼に對する態度は、逢ふ度に殆ど大膽な熱を加へて來た。彼女はもう太陽を愛するやうに、ダリアを愛するやうに、無雜作に、盲滅法に彼を愛した。

寒い拜見！

皺んだ手巾みたいな烏瓜の花が、山から來る微風にしんと搖れてゐる晩、更けて、忍んで來た女が「狐(よおつくす)」のやさしい懇願的な眼差に動かされて、獨り躁(さわ)ぎながら、初めて浴衣を肩から辷らせた。「狐(よおつくす)」は、貧しい畫架の前に、木炭と食ひ餘しの食麵麭の破片を摑んで立つたまゝ、その安白粉の縺れて粒だつた女の肌に、暫くぼうと眼を注いでゐた。それから、女が、焦れて、苛立つて、涙さへ見せ始めたので、彼は、あの性格的な微笑を湛へながら、手速く、女の持つた美しい線だけを畫布の上に寫したのだつた。そして、その後は、二度と彼女の肌を見ようとはせず、厚みも色調も、すつかり自分の頭で補ひ矯めて、いつぱし永遠の女を描き上げた。彼は、その當時、そんな風に造物者の意志を修正することを、藝術の墮落とも何とも考へなかつた。赤ん坊で孤兒になつた彼は、畑の畦道に畚(さ)へ入れたまま放つて置かれた時分に、もうその頬を撫でる麥の葉の間から青空を見て、乳房の夢を描くことを覺えてゐたのだ。

だが、だんだん、彼は女が物足りなくなつた。女は、女らしい銳さで、彼の心の陰影の隅から隅まで、しつかりと摑まねば、一瞬も、ぢつとして居れないと云つた風に迫つて來た。彼は「死んでも好い。」と思つた。

骨組の細い、薄蠟を塗つたやうなからだが少し痩せて來たが、彼は、紐の切れたままの、木靴のやうな感じのする重い泥靴を穿いて、毎日學校に出た。

學校の彼は、いつもの、快活な敏捷な「狐(よおつくす)」で、體操の時間に、馬の鈴草や麝香草などの花の散つたグラウンドで足揚げをすると、その都度、彼の泥靴が足首を脫けて、太陽のみずみずした中空に弧を描いて、みんなを笑はせた。

グラウンドの隅に、樅の葉蔭を橫切つて、白ペンキを塗つた二間半ほどの高さの梁木があるが、彼は、時々靴のまま其處にぶら下つた樫の棒を傳つてするするとその梁に昇り、その上で逆立ちをやる。そして、楕形に反つた腹を裏向けに否

空の光に輝かせながら、下で半圓を作つて英語讀本の挿繪の銅版畫から思ひついた綽名を、內氣な啞みたいに、ほっくす、ふおっくすと口々に呼んでる皆の前へ落ちて來る。

「狐」は、その、空間を落下する時の感じが溜らなく好きだつた。明るい、茫々とした宇宙の一部分が、ひとりでに崩れて、遠く遠く無際限に剝落してゆく心地、聲にはひゞきが無く、色には光が無く、形には輪廓が無い。心が海月のやうに透明に蕩けて、女も何も、一切無く、たゞもう、太初の匂ひのする甘い陶醉が爪の先まで充滿する。

「死んでも好い。」と彼は考へた。さう思つて、或る日、彼は、落ちては攀ぢ、落ちては攀ぢ、續けざまに三四度、此の輕業をやつた。皆はその度に歡呼した。それからもう一度、彼が樫の棒にとりついたら、急に大地の引力にひつ掴まれて、もう一寸も攀ぢられなくなつた。彼はいつたん手を離して柔い砂の上へ落ち、今度は梁の一方の端へ掛けられた梯子へ行つて、それを昇つた。

「吉原！」と下で見てゐた教師が顏の色を變へて叫んだ。

「やめろ、ふおっくす、やめろ！」と生徒達が聲を合せて呼びかけた。

彼は梯子の中途でちよいと足を止めて、變に白らんだ顏に、あの誘情的な笑ひを浮べて、そしてそのまゝ昇つていつた。だが、梁の眞中へ來て、馬の碁盤乘りのやうに四肢を寄せ、泥靴の爪先でその狹い梁の面を蹴つたが、今度はもう腰が硬く、兩足がそのまゝ後方の空間を下へぶらつと落ちた。

「ばかア！」と叫んだ教師が二三歩前に出て、上向きに折れるほど反つた顏を彼に据ゑた。みんなが、さつと蒼くなつて、內眥が切れるやうに張つた眼で、括り猿の恰好に小ちやく梁にしがみついた彼の姿を凝視した。

彼は樫の棒を傳つてすうつと降りて來た。

圖畫の先生は、あの天井の低い雜貨屋の二階を工房にして、一ケ月ほどかゝつて、やつと床屋の「娘」の半身像を描きあげた。畫布の女は、行商人から買つた一張羅の黒つぽい伊勢崎を著て、コスモスの花の上に、白い頬と、冷い眸を凝らしてゐた。

初め先生は、此の「娘」の裸體像を描くことが出來ると思つて、ふだんの藝術に向つての堅信を一層强めもしたし、また、周圍の俗物に對しての侮蔑感も愈々高まつて、結局、此の繪の爲には、潔く解職處分さへも受けやうと決心したのだつたが、女はむろん、「狐」を通じて、先生の欲求を、殆ど野性的な劇しさで、きつぱりと撥ねつけてしまつた。

先生は可成り失望した。だが、モデルを使つて仕事らしい仕事をするのは、美術學校以來、これが初めてだつたし、それに、一面、厄逃れをした氣持ちも無いではなく、兎も角、すぐに工房を整へた。

部屋の一方の、街道に面した窓は、鬱陶しい鼠壁の角連子窓で、先生は其處へ黒繻子の風呂敷を吊して、光線の混濁を防いだ。もう一方は腰高窓で、午後の日差と野良唄の餘韻が、冴えた秋風に乘つて流れ込んで來る。壁に更紗模樣の机掛けを垂らし、その下へ机を寄せて、女の腰掛けが出來上つた。それから、裏の花畑から、日々草を切つて來て女の掌に握らせ、その胸の黒地に浮かんだ淡紫の花束が萎れぬうちに描き上げやうと思つた。

女は、あの隧道の上の厚朴の木蔭で「狐」と逢つた日の翌る日から、毎日、學校の退けた時分に、此の工房へ姿を現した。女の父の床屋の親爺は、これが、大得意で、客ごとに大つぴらに吹聽したし、場合に依つては、剃刀を持つたまゝ暖簾の外まで出かけて行つて、入墨の村雲が覗いてる太い腕を伸ばして、工房の所在を敎へたりした。

乘合馬車の轍に菊が咲いてる街外れの、雜貨屋の前に、毎日、安しやぼんの曹達に頬をぎらつかせた若者が三四人足をとめて、二階の角連子窓を見上げて騷いだ。

「あすこだ。」

「黒い幕が張つてある。」

「あん中だ。」

「闇いだろ。」

「闇いだろ。」

「熱いだろ。」

笑ひ聲がひゞいた。

先生は眼の先が烝やけるほど眞紅になつて畫筆を震はせた。「娘」も花束も、枠に嵌つたやうに瞬き一つせずにこちらを向いてゐる。それを見ると、先生は、餘計に落ちつきを失つて、そわ〳〵と窓際にゆき、風呂敷を引き捲つて下を睨みながら、「馬鹿ツ」と口の中で云つた。そしても一度畫架の前に戻ると、筆先はもううわの空だつた。

女は、茶にも菓子にも手を出さず、泣き出しさうな先生の微笑に應へもしず、ほんの半時間ほど坐つて、さつさと歸つていつた。

女は、毎日、冷たかつた。

先生はそれを、純朴な處女らしい堅さだと思つて、それをほぐす爲に精一杯無器用な苦勞をした。西洋の版畫や寫眞を持出したり、「帝劇と三越」の「東京」を語つたり、女の店の商賣の、口髭や腮鬚や頬髯のスタイルを品評したり、だが、女はいつも素ツ氣なく、宛で窓も何もなくつてたつた一つ小さな扉が有る切りの建物のやうで、その扉が、「諾」と云つて開き、「否」と云つて閉ぢる、それつ切りだつた。さうして、何故か、その硬ばつた頬にあたつてゐる日脚にだけは不思議なほど敏感で、いつも、半時間ほどすると、定まつて立ちあがつてお辭儀をして歸つてゆくのだつた。だから、繪は思ふやうに進まず、そのうちに季節の脚が移つて、女は襦袢を重ねたし、日々草の花束は、平凡なコスモスのそれに取り換へら

れねばならなかつた。

先生は東京時代に見たモデルの女達を思ひだした。彼女等は、水のやうに自由で明るかつた。あの工房の天井から落ちて來る光線の下に、からだ中の一切合財の筋肉を樂々と伸び縮みさせてる女達！あれを思ふと、此の「娘」の顏は、餘りに苛酷に無表情ではないか。ふと「狐」の描いたあの裸像が眼に浮かぶ。あの繪には手法も無ければ訓練も無い。然し何處かに生きたところが感じられる。女が、一生ひし隱しに隱してゆく夢を、無意識に、明けつ放しに展げて見せたその瞬間を掴んで、それを率直に畫布に再現してるやうな氣がする。何と云ふ違ひだらうと思ふ。

先生は幾度も「娘」の夢を見た。夢の彼女は、肉がほどよくのつて、線がすんなりと伸びて、媚びと羞らひと活力とが縱横無碍に溢れ出してゐた。それを覺えてゐて、翌る日、現實の彼女に向うと、やつぱり鑄型のやうな「娘」だつた。たつた一度、「狐」の裸像のことを何かの序に口にした時、「娘」が不意にコスモスの中へ顏を埋めて、それからも一度擧げた時に、平生とは全然違つた光を認めたが、先生は平凡な解釋と禮儀とから、その後はあの繪には觸れなかつた。先生は飽くまで彼女を生娘と信じてゐた。制作慾がいきり過ぎて、頭の中の藝用解剖學の働きがすつかり鈍つてゐたのだ。

不思議だ、不思議だと思つてるうちに、美しい、冷い、硬強い「娘」の像が出來上つた。

三　烏瓜と馬車

十九世紀のニュー・スタイルの美粧術を髮や髭に凝らした英吉利の紳士連の並んでる、淡暗色の銅版畫が、床屋の鏡の上で、蠅の糞に汚れて、干乾びた異國趣味を發散してゐる、その隣りへ、先生の描いた「娘」の肖像が、金々した額縁に嵌めて吊された。

「凄い嬢さんだ。」と一人の客が云つた。

「鐵砲だあ。」と若者が肘を曲げた。
「小用の洩る顏だあ。」と年寄りが笑つた
「俺あ、やつぱり、生きた方が好え。」
「俺あ、寫眞でも好え。」
すると親父が彫り物のある逞しい腕をぐつとあげて云つた。
「あの金のふちつぺりや、二十倆がとこはするぜ。」
「ふうん。まつたく綺麗だなあ。」――
こなひだの世界大戰に佛蘭西の兵隊は塹壕の中で每朝顏を剃つてゐたと云ふが、まああんな氣持ちで、排他的な先生は、これまでも、週に一回は欠かさず床屋通ひをしてゐた。それが、此の繪が出來てからは、一層頻々と此處へ姿を現し始めた。先生の腮にはもう、一本の無精鬚も殘つてゐなかつたし、髮にはいつも櫛の目が整然とついてゐて、その儘、鏡の上の美粧の獻立表の中へ舞ひ上つても好い位だつた。
「剃刀の刄の音が好きなんで。」
來る度に、そんなことを申譯らしく云つて、お尻の下に馬の毛のもやもや食み出した垢光りのする肘掛椅子に凭れて、ぢつと自分の描いた肖像を見上げる。
先生は此の繪が氣になつて仕方が無いのだ。構圖も色調も、幾度見ても此以上どうなりさうもないし、筆觸も自分としては最上の調子にいつてる氣がする。あの時の「娘」はたしかにかうだつた。面のとり方にも欠けた點は無いやうに思はれる。それでゐて、何かしら不可解な鼠やけ方が感じられる。「娘」の影坊子に目鼻をつけ色づけをして宙に浮かせた、そんな風にも見えて來る。

體積の無い顏！それが近頃、始終先生の頭の何處かに月のやうに浮かんでゐた。「娘」は時折り白キャラコの仕事着を着て店の手傳ひに出てゐたが、やはりあのほぐれぬ、硬い、可憐な「娘」で、先生の姿を見ると、大抵は、いつの間にか、仕切りの腰障子の奥へ消えてしまふ。いち度、偶然に彼女が先生の顏を剃つたことがあつた。柄に篠を巻いた細身の剃刀の刃が、先生の恰好の好い鼻梁の側面を小鼻へ走つた時、彼女は自分の息が、くつきりと潔氣立つた先生の顏の面へ、先刻にから落ちてるのに氣がついた。そして、生え際に靑味の透いてる眉の下の二重瞼が、その自分の息を受けながら、見開かれたまゝで、其處にうわ向きに浮いた眸が、自分の顏に沁みつくほど注がれてるのを知つた。此眼は、彼女の記憶の何處にも無い眼だつた。惡意も色つぽさも無かつたし、冷いんでも執拗いんでもなかつた。こなひだ彼女と向ひ合つて繪を描いてゐたあの時とも又違ふ眼だつた。何か、彼女を目當に若い畫家の魂が細かく分裂してると云つた感じで、それに、微に惱ましさが滲んでる——だがこれはむろん彼女に判る筈もなかつた。

彼女は、隣りの職人に密つと耳打ちをして代つて貰つた。そしてその後はどんな場合にも先生に近づかないことに決めた。

そのうちに、先生は、盛んな制作慾に打ち克たれ、此の繪への不安を少し忘れた。先生は學校から歸るとすぐ野に出て、眞黑な三角粒の蕎麥の實を掌に載せて、夕日に向つてる子供を描いた。それが濟むと、隧道の丘へ三脚を持つていつて、秋風の中に、古びて細長く横たはつてる町を描いた。それからまた、桑の新芽の出る頃までしんと凍れてる滿月の幽倉を描いた。

此の最後の繪は、案外に骨が折れて、いつの間にか寢待ちも過ぎ、晩い月の出に苛だちながら、田圃の寒い裏道を毎晩その場所まで出て、畫材を頭の中へ叩き込んで來ねばならなかつた。

そのひと夜——幽倉の屋根に立つた土の厚い風抜きが、もうそろそろ頭の千裂れ始めた月に、べつとり膚の汗を搔き、

眠たいぼんぼん時計とひめ蟋蟀の聲が風の底に震へてゐた。先生は、見覺えのある百姓家の、木瓜や柏が防風林式に並んだ生垣の蔭に立つて、向うの繭倉に見惚れてゐたが、ふとその鼻の先を、毛糸の球の下がつた肩掛けで首を包んだ女が、前屈みに、ひたひたと藁草履の跫音を立てながら通り過ぎた。女は死ぬほど急いでゐたと見えて、そんなところに、そんな時刻に、たつた一枚の袷の儘に立ち樹のやうに立つてゐる男など、場違ひでもあれば季節外れでもあつて、てんで見向きもしず、また低い、下弦がかつた月の光を眸一杯に溜めて、意氣み切つた氣配を殘しつゝ走つていつた。先生は、何氣なしにその後姿を見送つたが、毛糸の球が揺れてゆく撫で肩と、月に流れるやうな腰の動きが、ふつとあの畫像の「娘」の聯想を呼んで、何かしら熱苦しく、もう窶れた冷い繭倉など放つて置いて、女のあとをふら〳〵と追ひ始めた。

屋根まで荒壁を塗りつ放しにした納屋や牛部屋、萩の影の動く土塀、街道に面した家の灯りのちらつく背戸と茶園、田圃の月がそれらの上へ斜に斑に射してゐた。白い道がその中を縫ふて表通りへ曲らうとする角まで來ると、女の姿は、そのまゝ逆に、そこにある家と家との狹間へ消え込んだ。十間餘り間を置いて尾行けて來た先生が、夢中でその闇い廂間へ潜ると、向うは月明りの野へ行き抜けで、女はもう見えなかつた。

「俺はまあ！………」と先生は、藁屑の食み出た高い二つの壁に挾まつて、ぴたつと鳴きやんだひめこほろぎの餘韻を追ひながら、初めてお肚の中で呟いたのだつた。「でも、でも………」

先生の頭の中には、あの描きたい一心の「娘」の肢體が、その時、彩旗を懸けた灯りのやうな刺激を持つて浮んでゐた。先生は急に跫音を偷んで、その狹間の端れまで行き、前を辿つてる野の縁の小徑を覗いた。恰度、女が、少し先きで、頭巾にして來た肩掛けをとり、背中の月へ疲れた息をふいてるところだつた。

その顏が、やつぱりあの「娘」に違ひなかつたので、先生は胸が重たく、何かしら汗ばんだ掌を握りしめたが、女は、やがて腰を廻して、低い、烏瓜のぶら〳〵してる透垣を跨ぎ、すぐ前の濡椽に片膝をかけ、月に冷えた雨戸に頰を寄せた。

しばあらくさうして、何か小聲で呼んでゐたが、急に啞性らしく肩を搖つて雨戸を押し開け、中の闇へ吸ひ込まれた。

先生は、そこで、そのだゞつ廣い明るみへ出て大きな溜息をついた。空の巾着型の月が、欅の梢で、三つにも四つにも動いた。

先生は、小徑を今女の跨いだ透垣の方向へ歩きだした。譯の判らぬ嫉妬が頭へ來、裾が縺に突く、反射的に軀を丸めたが、ふう〳〵と息を吐くだけで、口笛も鳴らない。無意識に辨慶の鳥打ちを脫いで片手に摑み、瞬きもしないで歩いてゐたら、例の雨戸がすつと開いて、灯りもつけないで立つてゐる「娘」の顏が白くこちらへ見据ゑられた。先生はもう悉皆混亂してゐて、そのまゝ行き過ぎも出來ず、朽ちかゝつた透垣に引つ懸るやうに立ち停つて、油の光る頭を無細工に下げた。

「今晩は。」だが聲がちつとも出ない。

娘も、その刹那、息を詰めて立ち悚んだが、それがふいと軀を痙攣させたと思ふ間に、ぴしやつと雨戸を閉てた。

「僕、僕なんですが……」と少し鼻にかゝる中間な聲で云つたが、內らはそれつ切りしんとしてゐた。

先生は鳥打ちをまた頭に戴せ、膝の前の烏瓜へ眼を落して、暫くそのまゝもぢ〳〵立つてをつた。もう一遍聲をかけるのは、猫みたいな勇氣の要ることだし、それに、脊中の、立ち樹や桑の幹の、黑く骨々しく殘つた武藏野が、縁に迫つて來て溜らない。それでつい手に觸つたお尻の色づいた烏瓜の實を、自棄にぷつりと捩りとつて、頭の凹むほど握り締め、小徑を向うへ、項垂れつゝ立ち去つた——

氣がつくと、先生は、いつの間にか、街道の馬車屋の前へ來てをつた。乘合の車體が、お天氣を見越して、道傍に置き曝しになつて居り、手首の細い男が、その御者臺に乘つかつて、カメリヤの煙を吐いてゐる。あの、腰骨をかくん〳〵と搖つて通る、いつもびつしより汗を搔いた老馬も、またあの、濁酒で鼻の尖邊を赤くした御者も、おテんもう何處にも見

えないで、チョオクのやうに細い男が、たつた一人、此の人通りの絶えた夜更けの町を、さも快速歩で馬車を驅つてると云つた調子に、御者臺で、咽喉佛を月に嚙ぶかせて、すぱ〳〵煙草を喫つてるのだ。

――そもそも人は何の爲に生きてゐるのか？そもそも人は如何にして生きてゆくべきか？そんなことはどうでも好い。たゞもういち圖に夢を描いてゆくんだ！ためらはずに、單的に、夢の世界へ飛込むんだ！かうしてカメリヤの煙を立てながら、馬の無い、御者の無い、馬車に乘つかつて！――

そんな風な樣子で、男は、先生の顏が、自分の胸の邊りへ搖れ〳〵に寄つて來るまで、その動かぬ馬車に乘つて居つた。

「やあ、君は、ふおつくす君！」と先刻から上氣せてゐた先生が叫んだ。

「先生？………あゝやつぱりさうだ。」

「狐」はからだを捩つて、その月を受けたぼうと熱した先生の顏を、何の感興もなく見下ろして、微笑んだ。

「好い晩だね。」

「えゝ………」

「好い晩だ、氣が遠くなるやうな………ほんとに好い晩だ。」と先生は、囈言のやうに、空を仰いで云つた。

「狐」は身輕に御者臺から飛び下りて、粉煙草の煙も火も落ちた吸口を、細かい齒でしがみながら、その邊をうろ〳〵と動いた。

「ふおつくす、君は每晚、何時に床へ這入るの？」

「え、………」と聽いてゐないのか、「狐」は、ちよいと立ち停つて、惱まし氣な上眼を先生に向けた。

「ふおつくす、每晚、君は散歩に出るの？」

「え、毎晩。」と彼は重たく答へた。
「こんなに晩く？」
「こんなに晩く………」と呟くやうに。
「眠れない？」
「眠れんです。」
そして彼はまた、少し離れて動き始める。今夜は、妙に手應への遂々しい「狐」だつた。先生は、烏瓜の帶を掴んで、馬車の胴をほて／＼と叩いたりしてゐたが、今しがたあんな風に見た「娘」が頭へ來て、どうにも口が淋しく、と云つて、此の「狐」を捉へて、戀愛とか藝術とかさう云つた高尚な——と先生は心底さう定めてゐた——問題を談じるのは疑に食ひ足りない氣がするし、此まゝ唇に封蠟を貼つて、雜貨屋の二階の冷い寢床へ歸るのも、あんまり人生に他人行儀だ……
「ふおつくす、ふおつくす。」と先生は叫んだ。
「狐」の吉原はだんまりで傍へ來て、肩を竝べた。
「相變らず締はやつてゐるかね。」
「いゝえ、ちつとも。」
「それはいかん。」と先生は偏執狂的に怒鳴つた。
「どうも悉皆興味がなくなりました。」さう、弱々しく笑ひながら云つて、無心に、先生の手首を眺めたが、だん／＼眸を凝らして、
「烏瓜、あゝ烏瓜！」と呟いた。

「からすうり……」と先生は、吉原の夜露を吸つた肩へ片手をかけて、うつかり云つて、それから、急に火がついたやうに、
「僕は描いてるよ、大いに描いてる。そして、ますます描くつもりだ。だがね、だが、僕は、ほんとうに描きたいと思ふものを、まだ描いてゐない。それを思ふと、淋しい……」
「狐(おつくす)」は、狡れた女のやうな自然さで、先生の拇指と人差指の間から、烏瓜を抜きとつて、ちらつと先生を見て、それを掌でトスしながら
「はあ、描きたいもの？」と氣のない調子で云つた。
「うん、あれだ。つまり君が描いた、裸體畫……」
「あれですか……」
「ふおつくす！」と先生は吉原の耳朶へ熱い息を吹きかけた。
「逢つたよ。今夜、彼女(あれ)に！」
「え？」
先生は吉原の肘を掴んで、ぢいつとその映像のやうに齒痒い顔を覗き込んだ。
「何處で？」と吉原の聲と顔とが一緒に振へる。
「何處だか、僕には判らないんだがね」さう云つて吉原の手へ移つてる烏瓜の實を指差しながら、聲を潜めて
「兎も角、此が其家(そこ)の垣に生つてゐたんだよ……」
「これが……それあいつです、何時頃？」
「つい此處へ來る前だ。」

「先生！」と吉原が、急に萌え出すやうな聲で叫んで、それから、靜な自棄的な笑ひを浮べて
「彼女を尾行けたんですか？」
「尾行けた？いや、違ふ。違ふよ、君。誰か、そんな馬鹿な……」
「いや、そんな意味ぢあ……」
「誤解だよ、それあ。僕はそんな……」
烏瓜が「狐」の手を滑つて二人の足許へ轉げた。「狐」は凍えさうな微笑を裝りながら喘ぐ。先生は眞紅になつて肩を吊りあげる。地上の馬車の幌の影が、ぢり〱とちゞんでゆく。
「先生、」と「狐」がも一度呼びかけて、駒下駄の先で、とぼけた烏瓜を馬車の腹の下へ蹴込んで、その行衛を見守りながら
「あれは僕ん宿のです。」と吐息混りに云つた。
「あゝ、あゝ吉原！ぢあ君や……」
先生は平手で大きく吉原五郎の脊中を叩いて、月明りの細長い家並みの、少し風の動くなかぞらへ眸を瞬つた。それから、そのふいに絡んだ舌を、無理にほぐし〱うつろな聲で
「はやくかへりたまへ、まつてるだらう！……」
だが、「狐」は、その髪の冠さつた窶れた米嚙みを、柔かく振つた。
先生は濕んだ眼を一杯に開けて、此の不思議な男をまじまじと眺めて、そのまゝ立つてゐたが、やがて、兩腕を十字に胸で組んで、ひしと肩を抑へ
「なんだか、急に寒くなつたやうだ。」と呟いた。

すると、吉原が、すぐにそれを受けて

「もうよつぽど更けたです。」と云つて、煙のやうな欠伸びを噛んで、兩手を懷へ終ひ込み

「先生も、このごろは、眠れんですか？」と訊ねた。

先生は少し腹が立つて、ぐつと胸を反らせた。年は、精々自分と三ツか四ツしか違はない。身丈は殆ど一緒で、眼には、白眼の隅にまで、なまなまとした表情が滲んでるし、白い、細い掌には、もう、あの「娘」の五體を、飴のやうに伸び縮みさせるコツが沁みついてるんだ。それに、薄く、擽ぐつたい曲線を持つて締つてる唇は、乾度、溫室のやうな溫さで「娘」の神經を痺らすに違ひない。だが、いつとう不安で、憎いのは、此の男の爪の先まで行きわたつてる輕敏な魂だ。いま分裂作用をやつてるかと思へば、次の瞬間には、もう回歸的に働いてる。年少だ、生徒だと見下してると、いつの間にか敏捷しこく、こちらの隙を衝いて來る。

「歸つて寢給へ、ふおつくす！」と先生は駒下駄を踏ん張つて、霙へ聲を吐き出した。

その先生の氣配を、「狐」は、素直に、鷄卵形の笑顏でうけて

「夜露を干して歸りますよ、先生。」

さう女性的に弱々しく云つて、彼はまたその、ひつそりとした馬車の踏み臺へ飛び乘つてお辭儀をした。

寢給へ！と云つた言葉が、振子のやうに跳ね返つて來て、先生の胸をうつた。先生は「狐」の前でずんずん縮小して行く自分が忌々しくなつた。

「僕もね、ふおつくす、」と先生は、馬車に寄り添つて、訴えるやうに彼を見上げながら云つた「今夜は眠れないんだ。」……

…………

やがて先生は、吉原のあとについて、そのチラチラと月の洩れる幌の下へ這入つて、臭い、藁布團の座席に、鼻をつき

合せて坐つた。何處か都合のレストランの、居心地の好い隅つこにこゞまつて、女の噂でもしながら、夜明しをするやうに。

「………ルウベンズと云ふ白耳義の畫家を知つてるかね。綿のやうな女の肩を描いた。彼の畫架の前には、皇后陛下だつて素裸になつて立つたんだよ。だから、ふおつくす………」

そんなことを先生は、息を喘ませて喋べつた。

「女つて、先生、」と「狐(ふおつくす)」が、舌の先の煙草の粉をぺつ／＼と吐きながら答へた「そんなに綺麗ぢやありませんや。」

カメリヤの煙みたいな魂を持つた此男達を乘せて、古ぼけた馬車は、冷淡に道傍に靜もつてゐた――

二三日經つて、先生の工房の連子窓が、またあの黒い綾子の風呂敷で嚴重に被はれた。

四　蜃氣樓

「娘」は此頃、不安な豫感に責められて、苛々してゐた。店に出てゐても、剃刀に瑕が箍つて、時々客の腮に血を滲ませたり、うつかりして、片方の眉を剃り落して、肥料臭い女好き(ドンファン)に、精一杯痩我慢を張らせたりする。食事の時、空になつた瀬戸茶碗の縁を噛んでぢつとしてることもある。ふいに店を飛び出して、學校の圍ひをお百度石のやうにぐる／＼廻つて歸つて來ることもある。最初の男を逃がして、神經の殺氣立つて來た彼女の視線は、そんな、遠くの小倉服の群の中から、忽ちに吉原を選り出して、その表情を感じることが出來た。彼が嫌曳を凌ぎに馬車へ逃げたことを白状すると、翌る晩からは、一遍は馬車を見にゆくことを忘れなかつた。夕方、裏の鷄舍を覗いて齒ぎしりしたがら

「鷄になれ！　鷄になれ！」

そんな風に、お肚の中で「狐」へ呼びかける彼女だつた。

少し影の澱んだ擴大した眼の緣へ、白粉を厚く塗つて、彼女は雜貨屋の二階の工房へやつて來た。

先生は、例の厚つぼたい壁の連子窓を黑幕で蓋をし、野に面した腰高窓の障子も閉め切り、その密閉した六疊で、炭火をカンカン炎いて、熱く茹だつてゐた。あの、彼女を尾行けた晩のことを思うと、でなくてさへ陽氣には凩い炭火が、かつと頰に來て蒸せかへりさうなのを、ぢつと硬く蹲まつてをつた。

でも、今日の彼女は、全く別で、こちらを見る眼差は、何かリスリンの這入つた化粧水みたいに滑かで、その廿つたるい表情の浮いた下膨から受け口へ、ふつふつと微笑が湧きこぼれ、こちらが一言云へば、倍にも答へる氣構へが見え、始終、宛で、ずうつと年上の女にいたはられてゐる氣がするのだつた。であの晩のことを云ひだす際もなく、そのうちに、彼女の方から促すやうに立ちあがつて、部屋の隅へゆき、こちらへ脊を向けてする〳〵と寢夜帶を解いた。さうして肌脫ぎになつて、あの更紗模樣の机掛けを垂らした壁の前の机に腰をおろして

「今日は、花は持たないんでございますか?」と、階下へ聽こえぬやうに、然し狎れ〳〵しく聲をかけた。

先生は、地上に絵を描くやうに屈んで、彼女の支度の濟むまで、首をあげずに、用も無い畫架の脚やブラシなどを弄つてゐたが、そのまゝ

「え。今日は。」と小聲で答へて、小娘のやうに、彼女の氣配に耳を澄ました。

「では、あのう、これで……」

くつ〳〵と笑ひ聲が鼻に詰り、しんとなつたので、先生は、首筋まで紅くなつて、木炭を撮んで立ちあがつた

午後の外光の滲んだ腰高窓の障子が、ぼうと先生の耳の傍で火照り、彼女の膝の片わきには、黑い窓掛けの前に、炭火の陽炎がめら〳〵と立つてゐる。

彼女は兩手を倒三角形に、硬く膝の上で組み、束ね髪にした頭を垂れて、その二の腕へ盛り上つた彩脊の爪先のやうにしやくれた乳房を見凝めてゐた。

「顔をあげて、手は兩側へ……」と先生は何處か天井を見ながら云つた。

部屋の温氣で、白粉を塗つた彼女の顔も肌も、朱欒の果肉のやうな色をしてゐたが、それが、素直に、髮が背景に融るほど上體を伸ばして、濡れ／＼とした眼を先生に注いだ。

先生はそこで初めて彼女の肌を見た。そして思はず畫布の上の手首を握り締めた。木炭がその汗ばんだ掌の中で、ポキりと折れた。

「寒くないでせうか。」と先生は、粘い唾を噛みながら訊ねた。

「いゝえ、」と云つて、首を傾げて笑ふ。

寒疣が立つたので無いとすれば、何かひどい皮膚病の痕であらう。胸にも二の腕にも、いちめんに細かい汚點が入り、その一つ／＼に血が淡紫に淀み、ところどころ白粉が鱗だつて、不快に涙線を刺激する。ぢつと見てると、眩暈ひさへしさうにするのを耐えながら、先生は木炭で提縮けた線を引いた。首筋から上と、前腕から手首へかけてとは、並外れに美しく、なまじその魅力が、却つて鮫膚を際立たせ、何かしら魔性の籠つた力で、そちらへ眸を惹きつけるのだつた。

先生は悪感を覚え、蒼ざめ、鼻のわきへ肪汗を滲ませた。それが、すぐに彼女にもひゞいて、今まで水々しかつた表情がすうつと乾き、息苦しい沈黙のうちに、さら／＼と畫布に擦れる木炭の音だけがしばらく聴えた。

どうにか輪廓がとれると、先生は、徹夜の仕事が終つたやうに、大きな吐息をついて

「あとは、あしたに、」と云つて、くるりと彼女に脊を向け、腰高窓の障子を細めに明けて、收穫の濟みかけた野と、遠景の山に見入り、清冽な外氣を肺の張ち切れるほど吸ひ込んだ。

彼女はその間に手早く肌を入れ、メリンスの帶を締め直して、それから、此の前のやうに、そのまゝ素ツ氣なく歸らうとはしずに、むしろ可憐らしい媚びさへ裝りながら、先生の傍へ來た。先生は、彼女のために、窓の小障子を密つと押しやり、すぐにおず／＼と身を引いて、その、銘仙に包まれた胸が、西日を眞向ひに受けて、香料の匂ひを漂はせながら膨らむのを、茫と眺めた。かうして見る彼女は、指の貝爪の先にまで艶の溢れた彼女だが、と先生は、夢見心地に考へるのだつた――

窓際でしばらく風に頰を冷して、彼女は歸つていつた。

翌る日の彼女は、もつと砕け、もつとお喋べりで、ふとした腰つきにも先生の吐息を誘ひ出すほどだつた。その翌る日は、もつともつと大膽で、歸りがけに、何かを云ふ時に、

「先生、あんた……」と呼びかけて、無意識に片手を先生の肘にかけた。それから次の日には、もう先生の眼の先きで、面と向き合つて嬌態をしながら帶を解いて肌脱ぎになつた。

先生は少し苦しくなつて、その翌る日は、頭痛がすると云つて、階下の主婦さんに彼女を斷らせた。さうして窓を明け放して、畳の上に寝轉がつてゐたが、あの彼女の、とろとろと纏ひつきさうな媚笑と、何か毒草の苗床とでも云つた感じの肌とが、眼の網膜や、鼻の粘膜にまで痕を殘してゐるやうで、厭あな胸苦しさを覺え、その癖、その實體の無いのが妙に淋しく、つい起きあがつて、畫布の蔽ひをとり、闇くなるまで、繪筆の尖で顏を弄つて暮した。

あくどい複雜な刺激を伴ふ亢奮は、それが去つた後で、何となく寂しい魅力を感ぜさせるものだが、先生もそんな本能に驅られて、此の繪に引懸つてをつた。

ある日の放課後、教員室の窓際に立つて、ぼんやり黄ばんだ太陽を浴びてゐたら、運動場の黒い柵に沿ふて、雜草の上を獨りぶら／＼動いてる「狐」の姿が先生の眼にとまつた。別に用がある譯ではなかつたが、近頃では「秘密」の相棒の

やうに思へてる「狐」で、姿を見ると、急に暫く二人切りでゐたくなり、やがてもう彼女が工房へ來る時間ではあつたが、そちらへ出かけて行つた。

二人とも睡眠不足で、青味の籠つた白眼に血脈が滲んで居り、それが、互の視線をよけながら、退屈な學科の話などをした。先生は時々、光を孕んだ空を抱くやうに、兩手を伸ばしたり、足踏みをしたりして「狐」について歩いた。

ふと「狐」が叢へ踏んだので先生も立ち停つて遠くを眺めた。居殘つて球を投げてる生徒達や木馬などが白く小さく光り、枯草を燒く匂ひが香ばしく漂つてゐる。雪の影があちこちに動いて、栗搖れの音が微に傳はつて來る。耳も澄み、眼も澄み、ひろ〴〵とした淨らかさが胸に泌みた。今日ほど先生が外光を美しく思つたことは無い。

「何の爲に、」と先生はつく〴〵考へた「あんな繪を描いてるんだ！」

それを云はふとしたら吉原が立ちあがつて何か獨り言を言つた。顔を寄せて覗くと、薄い皺んだ掌底に、季節に弱つたきりぎりすが、拇指で首を抑へられ、長い後脚を踏ん張つて、紫の滲んだ脂切つた胴をぴく〴〵させてゐた。

「雌だな、こいつあ。」さう云つて吉原はその後脚をぷつりと引つこ拔いた。それから樺色をした前翅を剝ぎとり、うすものゝやうな透明なあと翅に蔽はれた胴を抑へて、尻尾の節の間から細い産卵管を曳きだして、その端を撮んで、白々とした軀を宙に倒さに吊した。きりぎりすは口から黑汁を吐き、觸角と短い四本の脚で悶掻いたが、そのまゝ産卵管が切れて叢へ落ちた。「狐」は大きな泥靴で、その叢をとん〴〵と踏んで、宛でアルカリ液で絲素を拔いた栗のやうに沒表情な痩せた笑顔を、先生の鼻の先へあげた。

百舌鳥が赤い腹を反して頭の上を飛ぶ。

先生はつい唇が重たくなつて、「娘」のことも繪のことも云へずに、別れて工房へ戻つた——

その日、いつもよりはひどく憂鬱な工房で、「娘」を凝視しながら、苛々と脂汗をかいてゐたら、だしぬけに、彼女の父

の床屋の親爺が上つて來た。「娘」は不意をうたれてすつかり怯え、足もとにだらしなくとぐろを卷いてゐるめりんすの泣夜帶の端を胸に當てゝ、ちつとでも暗い隅つ子へ飛んでゆき、其處の壁にぶら下がつた先生のずぼんに額を押しつけて喘いだ。かつきりと際立つた帶の赤地が、ほそ腰を廻つて斜線にうしろの疊の上へ引き摺り、それが「娘」の一呼吸(ひといき)ごとに震へて、先生の混亂を煽つた。ふだんなら、先生は、藝術一心の氣ツ柱で押し切る筈が、今日は足場が心細く、拙い畏縮けた笑ひを反射的に浮かべて、父と娘の間に悚んでゐた。

だが親爺は場違ひなほど上機嫌で、部屋の樣子に眼を細め、それから其處へ坐つて、音便の混つた律儀な挨拶を一圖に述べたてた。さうして酒に燒けた大きな胸を屈めて畫布を覗いたり、甘い眼で娘を笑つたりなどして、恐縮しながら歸つていつた。

娘の仰山な怯え方が、先生には滑稽だつた。自分が一も二もなくへろへろに碎けたのも口惜しかつた。たつた一つ、然し、氣にすることがあつた。叮嚀な口をきゝながら、ごりごりした手織りの片袖を捲しあげて、腕の入墨を撫でる親爺だつた。さう云へば、あの茜色のがつしりとした胸廓は、話すよりも吼えることに馴れてゐはしまいか。それにあの笑ふ時に覗く銀の義齒は、變に性格的な氣がするではないか。

娘もふつつり考へ込んで、碌に返事もしなかつた――

翌る晩――

低い月が金の環のやうに削げて、暗い野面に風の音が立つてゐた。

娘は、寢着のまゝ濡椽までついて出た「狐(ふおつくす)」の首を抱えて、

「きつとだよ。」と云つた。それから烏瓜の透垣を跨いで、も一度乘り出して男の手首を握り締め

「きつと。三時二十三分。三時……もし來なかつたら――そんな、そんな薄情なことはしないで、ね。」さう繰り返して、風の中を歸つていつた。

「狐(ふおくす)」は靜に雨戸を閉ぢて、灯りを燈した。

煎餅布團が亂れ、枕あてに涙の痕が滲み、けば〳〵した塗櫛が、古風な小說臭く、その傍に落ちてゐる。今日、彼女は、父に鉈豆煙管で打たれた。父が先生へ嫁けと云つたのを、あんまり酷く拒んだのだ。彼女はわざ〳〵灯りをつけて、その二の腕の皮下出血をしてる箇所を、彼の鼻の先へ突つけた。鮫膚の上へ更に醜く印された此の毛蟲型の痣が、彼女の誓文でもあれば、また請求書でもあるやうに。さうして、涙を一杯に溜めて、こんな意味のことを云つた。父がもし此の話を切り出して、先生が體良く撥ねつけて呉れたら、屹度父は、得心のいくまで、先生の工房や、學校の校長室へ通つて、あの村雲の入墨に口をきかせるだらう。そのどたん場へ來て、もし先生が二人のことをぶちまけたら――さう云つて彼女は、劇しく彼の軀を搖すつて、彼の意味と分別とを搾り探らうとし、ふとまた、手を止めて、探るやうに、殺氣ばんだ視線を彼の眸へ凝らすのだつた。もう彼女は、明日の午後隣り町を出る信越線の發車時間まで調べて來てゐたのだ……

彼は少し頭痛のする額を抑へながら、片手でその塗櫛を拾ひあげて、机の上に開いたまゝになつてる「春の目ざめ」の頁の上へ載せた。

――君をんなの子を見たことがあるだらう？

――あるよ！

――でも全部だぜ?!

――すつかりさ！

――あるんだ！　――ぢや挿畫は入らないや。

それから

――まあ靴は水がいつぱいだわよ！

――まあ頬に風があたるわよ！

――まあ胸がどきどきしてるわよ！

――野上氏譯――

梢の下の兩方の頁で、男の子や女の子が、そんなことを云ひ合つてる。「狐」もつい二三ケ月前までは、こんな氣持ちでゐた。運動場の麝香草の叢で、級友達と一緒に、「挿繪」を見たり、娯樂雜誌の廣告の切拔きを讀んだりして、みんなで宛で、耳のうしろへ電氣の放熱器を脊負つてるように上氣せ合つたものだ。からだ中が浮標みたいに浮いて、眸はひとりでに空を見てるし、足はいつの間にか輕いリズムを踏んでる、そ云つた時代だつた。それが、ほんの二三ケ月前にあの「娘」の「全部」を見て以來、遠い實に遠い、殆ど現在の彼とは連鎖の切れたほどに遠い影像になつてしまつた。それ許りでなく、彼女に迫られて執拗く逢つてるうちに、人間としての一切の經驗をすつかり盡した、とそんな氣が、いやむしろ、それを輕蔑するやうな恐ろしい氣持ちさえ、だんだんと彼の内に湧いて來た。人生の密度がたゞ譯もなく急速に薄れてゆき、希望とか期待とかは人間の手の屆かぬ夢の世界にしかないと、さう決めた氣持ちだつた。だから彼はもう、死も恐くはない。あんまり若く、あんまり正直に、あの「娘」を抱擁した爲に、瞬くうちにこんな彼になつた。

彼は蟲に親しんだ。みんなが麝香草を褥に呼吸の喘む話をやつてる間に、彼は獨り、毛蟲を探し、それを持つて歸つて寒冷紗の蓋のある洋燈のホヤに抛り込んで、毎日暇があると、その中を覗いた。やがて毛蟲が死んで、その脊中の米粒ほどの卵から、可憐な寄生蜂が、宛で天へ昇るやうに勢よく飛び立つのを、すぐにとつて毒壺へ入れて標本にしてしまふのだ。又彼は夜なかによくあの隧道の丘へ出かけて行つて、厚朴の幹へ攀ぢ登つた。勿論そんな處へ「娘」を牽きつけて、

危い接吻をする譯はない。樹の膚へ砂糖を溶かした酒を塗り、罐詰の罐に蠟燭を燈したカンテラを、その邊の枝へ吊して降りて來る。そして樹の下に暫く待つてると、やがて頭の上で、蛾達の死の前の亂舞が始まるのだ。それをみんな毒壺へ投げ込んで戻つて來る。「娘」が、彼の此の夜の遂出を履き違へて、時々彼を追ふて來たが、彼が判ると、急にすつかり燥やいで、彼の手にある採集網の竿を、一緒に握つて、そのカンテラの薄ら灯りの落ちた樹の廻りを氣違ひのやうに動きまわつた。さうして、宿に歸つて來て、彼が、毒壺から一匹づつその蛾をとり出して、蓚酸液に浸したペン尖を彼等の胸へぷすぷすと突き刺すのを見て、兩手で眼を蔽ふた。

部屋の壁に、汚い絽張りの蟲籠がぶら下つてるが、其處には、草雲雀や閻魔蟋蟀が這入つてゐた。だがむろん彼は、彼等の韻律を愛したのではない。彼等の唄はひと晩經つとすぐにそのまゝアルコホル漬になつた。柱の歪んだ垢光りのする床の間には、繪の道具の傍に、蚊帳の古手で作つた採集網が、威勢の惡い標旗のやうに萎れて居り、その下の採集瓶に、夜、烏瓜の花へ來た蛾がナフタリンの香に包まれて、翅を畳んで死んでゐる。その隣りには、底に、黒鵞絨の代りに墨を塗つたゴールデン・バットのボール箱が、硝子板の蓋をして置いてある。蟷螂の雌の標本箱で、彼女が雄を惱殺する大々とした腹も、彼女が、自分をしつかりと抱擁してる彼を喰つてしまふ口も、彼女の武器も、二對の翅も、首筋も、何もかもバラバラに解體して、乾燥液に乾き、黒地の上にクッキリと糊づけになつてゐる………

「狐」は「春の目ざめ」を彼女の栞ごと閉ぢて、傍のノートの上へ載せた。ノートの表紙には、「娘」が今先き、拙い手で大きく書いていつたインキ文字が殘つてる――三時二十三分！

彼は灯りを消して床へ這入つた。風の音だけが、いつまでも聽える晩だつた――――

翌朝、彼は、いつもの泥靴を穿き、雁來紅に太陽のみづみづと映えた内庭を拔けて、學校へ出た。そして立體幾何とか物理とか時間割通りに講義を聽き、お晝の休みに、梁木の上で、一回鮮かな逆立ちをやつた。

「ほつくす!」「ふおつくす!」とみんなが、その逆向けに廻轉して落ちて來たひよろ長い彼の、血の薄れた、眉上弓の尖つた、今日もあの先天的に諂媚的な微笑みの浮んだ顔を仰いで、いつせいに歡呼した。

彼は最後の軍事教練の時間だけを殘して宿へ歸つた。さうして包みを机の上に載せ、宿への拂ひの金をむきだしにその抽斗に藏ひ、著換へもしないで、此の貧しい小部屋を、いつさいあるがまゝに、晩秋の午後の日差と風とに委ねて、乘合馬車の乘り場へ急いだ。

隣り町の停車場へ着くと、待合室の隅に、眼の縁だけへ紅味の凝つた彼女が、人目を避けて、石のやうにこごんでゐた。

一時間半ばかりして、二人は、風の吹く桑畑の中に闇い灯のかたまつた溫泉町へ、手を繋いで降りた。明日、未明に妙義へ行く人達が、幾組か二人と一緒に吐き出されたが、みんな賑かに談笑しながら、足拵へをした脛を揃えて、湯宿の方へ下りて行く。その人達をやり過ごして、「狐」は葉の無い櫻の梢に白けた空明りを見て歩いた。

「寒くないの、あんた?」と彼女が熱い眼を寄せて來て囁いた。

「狐」は首を振つた。「狐」は、汽車の中で、娘が何度も何度も、彼の來たことを悅んで、その度に白粉紙を出して貝爪の紅い指先で瞼を抑へたことを考へた。

少し行くと、道が崖下の揭示板に衝き當り、其處に赤インキで筆太に、こんな文句が「狐」を待つてゐた。

――懸賞付蜃氣樓發見――

妙義山ノ蜃氣樓ヲ見ツケテ、當驛驛長マタハ木曾部館主ニ申シ出ラレタ第一番ノ方ニ

金五圓

右ヲ差シ上ゲマス

「狐」は抱かれるやうにくつついて、何遍も此の掲示を讀んだ。

「五圓！ 五圓？ 何て勘定だ、詰んねえ！」でも彼は愉快さうに、小倉服のポケットからカメリヤを一本とりだして口に唾へた。

「行かうよ、行かうよ。」

離れて闇いところに待つてゐた彼女が、寄つて來て彼の手をぐいと牽いた。

急な坂道の曲り角で、下は湯煙に茫と烟つてゐた——

五 「狐」抄

1

然し——此の二字は活字が大きいと作者は云ふ——「狐」は死なゝかつた。彼女も死ななかつた。

彼女はさんざ宿に迷つた揚句、崖の中段の、最も灯の尠い一軒へ彼を連れて這入つた。そしてその壁の隙間から松風が沁みて來さうな部屋で、湯殿へ行つた彼を待つてゐたら、客に餓ゑてる女中が、細い桟道式の廊下を渡つてお喋べりに來た。

その時、聴いた話が、がんと彼女の胸にひゞいた。

——十日許り前、妙義へゆくと云つて、向ひの宿へ荷物を置いて出た若い夫婦があつたが、それがその日も翌る日も歸つて來ず、三日めに、突然、夫婦の身寄りの者が宿を訪ねて來て、大騒ぎとなり、物々しい捜査隊が自轉車や乘合自動車で此の町を出た。よく岩陰などに眠り薬を呑んだまゝ死んでるのがある。そのつもりでみんなが地上を探してゐたら、一

日一杯經つても知れなかつた。やつと二日めの暮方に、消防組の一人が、白雲山の天邊で、ふと眼をあげると、深い谿に臨んだ松の枝に、夕日を受けて細長く、二人がぶら下がつてゐた。みんなが寄つて、棒の先でその扱帶と兵古帶とを引き寄せやうとしたら、どつちも半分腐つてゐたのがぷすりと裂れて、女も男も、足の下の紅葉の中へすつと落ちてしまつた。それからまたその險しい谿の膚を探すのに二日かゝつて、やつと一週間めの夜に、糜爛した夫婦が擔架で、町へ戻つて來た――

彼女は火鉢の炭火を見つめながら、一心にその話を聽いた。さうして膳が來ても箸もとらずに考へ込んだ。

ほんの二三時間ゐたきりで、彼女はまた「狐（よおつくす）」を促して、家への夜汽車に間に合ふやうに、その朽葉臭い湯宿を出た。

「狐」は、も一度、あの蟷螂の雌の標本などの置いてある自分の部屋へ歸つた――

2

「狐（よおつくす）」は退校處分を受けて東京へ出た。彼女も家を出されて、ついて來た。二人は叩き大工や巡査や蟲賣りなどの住む裏長屋の一間を借りて住んだ。

「狐（よおつくす）」は通ひのペンキ職人になつた。彼は、同じペンキ仕事でも、店の土間で看板の圖案を描いたりすることが嫌ひで、一日中そんな仕事をやつてると、實に退屈な、憂鬱な顏をして、能率もあがらず、さんざ親方のカスを食つた。然しそれが、出仕事、たとへば、博覽會の高い廣告塔とか、幾層もある建物の膚を塗る仕事などになると、宛で生れ變つたやうな彼で、ハラハラする足代を傳つて、驚くほど敏活にブラシを運ぶのだつた。もし誰か傍にゐて、そんな時の彼の眼を見たら、其處に不思議な生氣が溢れてゐることを認めたらう。

彼女は、枯々になつた軒端のしのぶを時々仰いだりしながら、せつせと封筒を貼つてゐた。

冬が人よりこたえる夫婦で、「狐」は、それまで飲めなかつた酒に親しみ始めた。布團も寒く、家も寒く、彼女は、あんな肌で…………

彼は毎晩、近所の床店風の酒場へ通ひ、泥醉して戻つた。その酒場の常連の一人に、寄席藝人の奇術師があつたが、彼は高座とは反對に、不機嫌な、横柄な、酒の酸つぱくなる男で、みんなの嫌はれ者だつた。

ある夜、ほかに客は無く、「狐」が獨り、床几の眞中で好い加減醉つてゐたら、彼がマントの襟を立てゝ悠々と這入つて來て、「狐」の隣りへ肘を張つて掛けた。

「おい、手品師君。」と「狐」が例の笑顏を浮かべて、盃を差さうとすると、その出來を、彼はぴしやつとはたいた。

「名前を呼びねえ。手品師、手品師つて、てめえに手品の一つも出來るけえ！」

「出來るよ。」

「出來る？　やつて見ねえ！」

酒場の親爺が仲へ這入つた。

「さあ、やれ！　此處で、今、すぐやれ！」と奇術師が、壓しかゝつて叫んだ。

そこで「狐」の手品が、その不安らしく瞬きをしてる親爺を助手にして演じられた。

「狐」は、小さな湯沸しの瓦斯焜爐の前へ行つて坐つた。焜爐には、生卵を一個落したアルミニユームのフライパンがかゝつてゐる。彼はその焜爐に繋いであるゴム管の首を片手の掌にしつかりと握つて、あの誘惑的な笑ひを湛へながら「東西！」と氣難かしい奇術師に云つて、大きく、長く、肺を搾つて息を吐き出した。

それからその、根もとの栓を加減して瓦斯の流れを細くしたゴム管の口を、焜爐から離して、靜に自分の口に含み、二

十秒余り、瓦斯を吸ひ込むと、手をあげて親爺に合圖をした。親爺が、瓦斯を止め、ゴム管の向うの端を焜爐へ繋いで、燐寸を擦る。フライパンの下に、ちろちろ、ちろちろと青い火が燃える。「狐」は卵を凝視しながら肺を搾りつゞける。白い大きな花片のやうなものが、うつすりと卵の下に滲み始めた！　七秒八秒九秒十秒…………

「狐」は眸を動かした。

——手品師が陰々とした顔をしてこちらを見てゐる。まるで運命みたいな顔だ。何故、鍋の中を見ないんだ！　何故、あちら向かないんだ！　俺は手品ぢやねえ！　馬鹿！　まだこちらを…………

そんなことを、そこまで、彼が考へた時、青い焔がフライパンの下にぽつとひらめいて、ゴム管は、ひとりでに、その冷汗の浮いた、硬ばつた手首から落ちた。

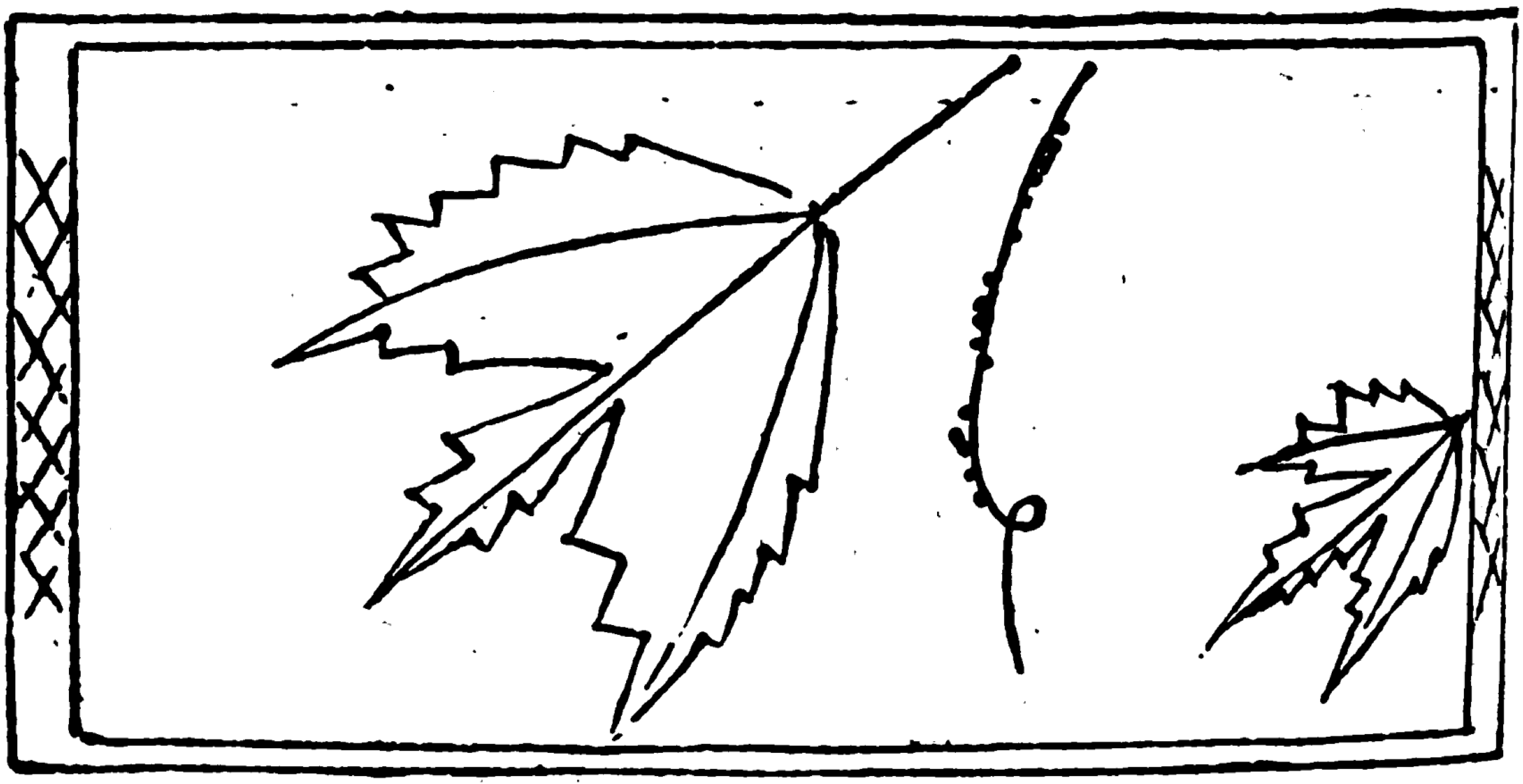
數分後——

「狐」が丸裸で、仰向けに酒場の床几の上に載つてゐる。奇術師のマントを枕の恰好に丸めたのを腰の下に敷いて全身がへの字なりに折れ曲り、その膚に、そちこち暗紅色の斑が浮かんでる。醤油樽の呑口を噛んだ細かい歯の間から、紫色の舌の尖が出て、それを親爺が、手拭を持ち添へた指先で抑へて、收縮を防いでゐる。

「大丈夫でせうか、旦那？」と親爺が息を切つて訊く。

奇術師は、その假死體に馬乘りに跨がり、指輪の金々した指を揃へて、人工呼吸をやりながら、「狐」の顔へ、痰のやうな言葉を吐いた。

「手品ぢや死ねねえ！」



藝術の貧困

片岡鐵兵

路ばたに落ちてゐる玩具を拾ふやうに、私は彼女を拾つて來た。だが、路ばたに玩具は決して落ちてゐない、彼女は生き物であつた。もし生き物である事が最初から分つてゐたら、私は決して彼女を拾つては來なかつたであらう。

私は生き物を「所有する」疲勞に堪えない。

濁つた空の下は埃で一層濁つてゐた。其所を流れる堀割は最も濁つてゐた。私は橋を渡りながら、金の工面に街を歩くことが如何に人間の頭腦を疲らせる物であるかを考へてゐた。私は働かないで金を拵へる方法ばかり講じてゐたのだ。

「これは働いてるのだらうか、それとも働かないで金を得ようとしてるのだらう

か」

橋の袂の女乞食を見ながら、私はさう考へた。もし私が働くことの好きな男だつたら、ポケツトに手を突込んで銅貨を取出す位のことは、私には何でもなかつたらう。

「だが、この女は橋の袂に坐つたまゝで生活費を取つてゐる。私は金を工面するために濁つた街を埃まみれになつて歩いてゐるのだ。私ほど、彼女は疲れないだらう」

女乞食の前を通りすぎようとして、私は彼女の顔を見た。彼女は私の顔を見て笑つた。

縦横に通る電車と自動車の騒音で、彼女の笑ひは音を消された。音を消された笑ひだから、一層音の感じられる笑ひだつた。私はこの音のする笑ひに惹付けられて立止つた。

「何が可笑しいんだ?」

「だつて可笑しいもの」

「俺を見ると可笑しくなるか?」

「貧乏な人を見ると何時も」

私はそのまゝ通りすぎた。

私は半分だけ金策が出來た。歸りは自動車に乘つてあの橋の袂を通つてやらうと思つた。だが、よしんば自動車の上の私を見たつて彼女はもう笑はないだらう。私は矢張り歩いて橋の袂に來た。

「今度は可笑しくないだらう」と私は云つた。

「好いわね、お金持ちになつて」

「俺が遣つてやらうか」

「五十錢頂戴」

五十錢やると、私は用事がなくなつたのを感じて其所を去つて行つた。

私の狹い部屋は、急にうそ冷めたく感じられ出した。私は女が欲しいと思ひ出した。

私は彼女を忘れなかつた。木綿縞の着物は、年月の泥と垢とに濕つて、時々赤い裏地をこぼしてゐたが、白い肥つた身體には妙な魅力があつた。何か、彼女を知りたいと云ふ慾望が、私の空想を驅り立てた。生活が、私よりも疲れてゐない彼女であることが、私をして憬れのやうな氣持ちをさへ持たせた。

私は毎日のやうに橋の袂に出掛けて行つた。私は一言のセンチメンタルな表情をもせずに、彼女を拾ひ取ることが出來た。

私の小さな汚い部屋に、初て寢る時、彼女は云つた、

「こんな所へ寢るのは、とても變だわ」

「今までは何所で寢てたのだ」

「船の中で」

「船頭と寢てたのか」

「五十錢呉れてよ」

私は、あの橋の下に、いつも幾艘かもやひしてゐる船を思ひ浮べた。何所から來て、何所へ去つて行く船か知らない。どういふ荷主が、あれらの船を利用してゐるのか知らない。誰にも氣附かれずに、この都會に古風な風景を流して行くのだ。

「夜は船頭と寢て、晝は乞食してゐたのだな。儲けた金は何に費つたんだ?」

「何に費つたか、いつの間にか無くなつてしまふわ」

彼女が云つたことは正しい。金はいつのまにか無くなつてしまふのだ。彼女はそれを知つてゐる。私は安心して、私の貧乏を彼女に任せることが出來ると思つた。

「お前は好い。俺の女房はお前でなくてはならぬ。俺はお前と夫婦にならう」

「そしたら、着物を拵へて」

「宜しい。それから、肩掛も」

私は小説を書いて、彼女の着物を拵へた。それから肩掛を買つた。

「妾には阿父さんがあつたの。妾と阿父さんとは、毎晩一時頃から商賣に出掛けたの。誰も通つてない銀座を、日本橋の方へ、二人で歩いて行くの。阿父さんは右側を、妾は左側を、そして路に落つこちてゐるものを片つ端から拾つて歩くの、須田町から萬世橋を渡つて、お成門街道を上野までいくと、いつも籠が一杯になつたわ」

「どんな物が落つこちてゐた？」

「大概紙屑ね。それからハンカチ、風呂敷包み、片方の手袋、財布――でもめつたに無いことだけど」

「それは儲るだらう」

「三圓も入つてゐる事はないわ。心配しなくても好いの」

「阿父さんはどうしたのだ？」

「死んちやつたわ。それから深川の木賃宿に居られなくなつたの。それから……」

「もう好い」

私は彼女の歴史を聽くのが苦痛になつた。私は彼女に歴史のあることを知つて彼女が生き物であることを感じさせられ

た。それ以上、私は苦しませられる義務はない。

彼女から苦痛を受けたのは、それが最初だつた。彼女にも生活の歴史があつたといふ、この分り切つた事實を、今更のやうに知つたその瞬間から、私は彼女を無邪氣に見ることが出來なくなつた。

彼女は玩具ではなかつた。彼女は生き物であつた……

私はそれまで玩具を持たない小説家であつた。そして、私は玩具を買ふ餘裕さへなかつた。

私は小説を書くことが好きであつた。人生の喜びは、小説を書くことに極るとさへ思つてゐた。もし私にそんな才能がなかつたら、生きることがどんなに詰らなかつたらう。私は書きたい時に書き、書きたくない時には寢ころんでゐた。小説を書くといふ樂しみで、生活費は十分に得られた。現代のジヤアナリズムは、月に十五枚書く小説家を決して飢えさせなかつた。その十五枚も書けない月には、私は方々の雜誌社に金を借りて歩いた。そこで私にあつては、生活と喜びとは相伴つて行つた。小説を書くことによつて生活費を得て行つた私には、藝術の喜びと生活とが兩立し得たのだ。

けれども、私の生活は一變した。私は生き物を所有したのだ。それから來る複雜な興味は、小説を書く喜びに數倍するのを私は知つた。

「美、指輪が欲しいわ」

彼女がさう云つた。そこで私は小説を書かねばならなくなつた。

書きたくないのに書く、この初めての經驗は愉快だつた。私は彼女の指にはめる燦然たる黄金と寶石とを想像するだけで、潑溂としてペンを走らせることが出來た。

「お前はどんな帶が欲しい？」

「三越にあるのを買つて頂戴」

「お前はいつ三越へ行つたのだ？」
「子供の時、木賃宿のおかみさんと一緒に行つたことがあるの」
それから彼女はコートが欲しいと云ひ出した。伊達卷を締めないから、こんなに着物が着くづれるのだと訴へた。
「もつと廣い家に住みませうよ」
「角砂糖を噛んでみたい」
「手携げが欲しい」
彼女がさう云ふと、私は又小説を書かねばならなかつた。そして私は自動車賃を稼いだ。活動寫眞代を稼いだ。
二年の後には、彼女は見事に文化的な夫人になつてゐた。そして私は、もはや小説を書くのが何の喜びでもなくなつてゐた。私は只家賃と自動車賃と着物とのためにのみ、小説を生産する職工であつた。
私は生き物を所有する疲勞にだん〱堪えられなくなつて來た。然し、この世の中の道徳に從へば、生き甲斐とは、斯る疲勞の感得に他ならない。私は決してこの疲勞を私の不幸とは感じなかつた。彼女の欲望の發達に、私の不幸が附隨して行かうとは、考へたくなかつた。果して、私は幸福であるか。
「お前はもう角砂糖を噛りたいなどとは云はなくなつた。袷の裏地が絹では冷めたいとも思はなくなつた。そしてお前は歩くのも電車も厭で、自動車にばかり乘つてゐる。お前はラグビイを、をとなしく見てゐる。お前はチョコレエトでいつも胃をこはしてゐる。お前は紅を頬にさす技術をおぼえた。お前は香水の名をスラ〱と云ふ。お前は斷髮した。寒い日にお前はわざとコートを捨てゝ歩く。お前は只、字が讀めないだけだ。こゝまで進歩して來たのは、だれのおかげだと思

ふ？」

「あなたのおかげだと云はせたいのでせう。ところが、妾はさうは云はないの。あなたはこんな大きな家に住むやうになつた。あなたは、お汁を一口すゝつて醤油を品評する。あなたは、自動車の名でギアとスプリングの批評が出來る。あなたは眠る前に藥を飲みだした。あなたは船頭たちよりも、女を悦ばせる術が下手なだけよ。こゝまで進歩したのは妾のおかげでせう。妾があなたに小説を書かせたのではないの？妾があなたにお金を儲けさせたのではない？」

「だが、七五枚書けば一ヶ月寢ころんで居られた幸福を俺から奪つたのは誰だ？」と私は反問した。

「妾は貧乏が幸福だとは思はない」

「然し、俺は金持ちにはなつてゐない」

「その代り色々なものを買つたり、面白いことを澤山したぢやないの？」

「それをするのには、ちつとも樂ではなかつた」

「樂をして貧乏してたあなたから、苦しんで樂しみをするあなたにまで、妾が進歩させて上げたんだわ」

彼女が私を驅り立てゝ、商業主義の渦卷きの中へ突進させた。その事に就いて彼女は云つてるのだ。私は急所を衝かれて口が利けなくなつた。

「ふむ。俺は墮落したんだ。俺は藝術家だつた。だが、生き物を所有した瞬間から、俺は單なる商人にまで成り下つたんだ」

私はそれつきり默つてしまつた。

或る日ぐれ、彼女は一寸買物に行つて來るといふ口實で外出したまゝ、いつまでたつても歸つて來なかつた。夜が十一時すぎると私は腹が立つた。そして女中に玄關をしめさせ戸に鍵を掛けさせた。私はわざと自分で寢床を敷いた。布團の中にもぐり込みながら、たとひ今彼女が歸つて來て戸を叩いても、入れてやるものかと思つた。さう思ひながら、一生懸命に、戸を叩く音を待つた。

その一夜で、私は身も心も憔悴した。明け方、窓の隅にほんのり青白い光が染つた時、私は彼女を殺すことばかり考へてゐた。

翌日、正午頃になつても、彼女が歸つて來ないので、私はぢつとして居られなくなつた。私は自動車を走らせて、彼女とはじめて逢つた橋の袂にまで來た。

自動車を降りて、私は人目につかぬやう、橋の袂を幾度もさまよつた。街の騷音で、一睡もしない身體は、齒に噛まれるほうづきのやうに潰れさうだつた。

「あなた」

橋のなかほどに、彼女が呆然と立ち止つて私を呼び止めた。

「ふむ。矢張りさうだつたんだな」

私は彼女を睨み据えた。が、その瞬間に、私は得も云はれぬ新鮮な魅力を彼女に感じた。海水浴から今上つて來たばかりの女のやうに、彼女の總身が、新しい性慾に濡れてゐた。それが乾かぬ間に、私は彼女を家につれて歸らねばならぬ。

「歸らう」

私は無言で歩き出した。彼女も默つてついて來た。ふと私は振返つて、

「昔馴染の船頭が見つかつたんだな」

彼女は默つてうつむいた。

「俺は、船頭よりも、女を悦ばせる術を知らない」

私はタクシーを呼び止めて、彼女と乗つた。すこし離れて席を取りながら、私は彼女の肩を見詰めてゐた。自動車の動搖で、その肩が私の腕を押した。私はその刹那に感じた肉體を、妻の肉體であるとは信じられなかつた。

自動車は走つて行つた。私はひとりで、泣けて來た。彼女の眼からも、とめどもなく涙がこぼれてゐた。

家に歸ると、私は云つた、

「どうして泣いてるんだ？」

「あなたはもう妾を追ひ出すでせう。そしたら、妾はどうする事も出來ない。妾はまた、橋と船とに歸つて行かなければならないもの。それが厭で、厭で、堪らないの」

「俺よりも船頭の方が好ければ、それがお前の幸福ぢやないか？」

「どうして？」と彼女はおどろいたやうに云つた「妾はもうチヨコレートや珈琲が買へなくなる。自動車に乘れなくなる。妾の着物は一枚きりしか無くなる。その着物はすぐ汚れる。汚すまいとしても泥がつく。船頭が穢くちやにする。妾はもう乞食をするのは厭、厭！」

「何故、それぢや昨夜船に泊つたりなんかしたのだ」

「だつて、船頭さんが醉つぱらつてゝ、どうしても妾を歸して呉れないんだもの。夜明け頃まで、眠らせないんだもの。疲れちやつて、眼が醒めた時には、もうお晝だつたの。妾、船頭さんが寢てるまに、外へ出たの。そしたら、あなたが怖

い顏して妾に突き當らうとするんですもの、橋の上で」
「最初から、俺の女房であるのを忘れて、船頭の所へ行くのがわるい」
「だつて……」
彼女はふと眼をあげたが、すぐ又その眼を伏せて顏赧らめた。
「お前は實に素晴らしい奴だ！」
私は彼女の肩を立つたまゝ抱きしめた。
「あゝ妾は、追ひ出されるかと思つて、ほんとに悲しかつたわ」彼女は晴々とした顏になつて叫んだ「妾その代り、今年のショオルは去年ので我慢するわ、それで好いでしよ」
昨夜のまゝ寢床が其所に敷つ放しになつてゐる中へもぐり込んで、彼女は昏々と眠つて行つた。

私は性慾に就いて知つてゐる。私は嫉妬に就いて知つてゐる。それらの知識は、私に無數の小說を書かせた。私は人間生活の苦勞を書いた。そして、その苦勞を性慾に還元させる事によつて、創作の知的動機を認められた。私は又、嫉妬を動因とする人生の苦痛を書いた。批評家は、私の小說が人生に深く根をおいてゐる事を指摘した。さういふ小說は、私にとつて朝飯前の仕事だつた。又さういふ小說は、誰でも知つてゐる「人生」を繰返へすだけで、人を滿足させる事が出來た。誰も知らない事を書くと、誰も嘘だと云つて馬鹿々々しがつた。
もし私が、平氣で他所に泊つて來た妻を、平氣で抱いたと云つたつて、誰が信用しよう。その女は、罪を發見されても、その後悔については何物をも表現しなかつた。その女は泣いた。だがそれは困難な生活に對する怖れから泣いたの

だ、生活の享楽から見放されるかも知れないといふ豫感で泣いたのだ。その事を彼女は率直に告白した。

だが、それこそ本當の女の姿だと云つたつて誰が信用しよう。

彼女は私を愛してはゐないのだ。私を愛する値打ちのない男であることを、彼女はよく知つてゐるのだ。彼女は船頭と私とを知つてゐる。そして、船頭の方が愛する値打ちのある事を知つてゐる。彼女は知つてゐる通りを行つたのに過ぎない。けれども浮世の享樂への執着は、彼女に鎖をつけてゐる。この鎖が私と彼女の間を結んでゐる。彼女は進歩した女だ。彼女は頰紅をつけてゐる。彼女は斷髮してゐる。彼女はラグビーとチヨコレートが好きだ。彼女は自動車でなければ外に出ない。この進歩！人間はこの進歩から一歩も退歩する事は出來ない。この進歩が、戀愛を束縛する鎖だ！

「おい、起きろ。起きろ！」

私は彼女をゆり起した。

「もつと寢かせて」

「不可い、起きろ！今年のショオルは今年買つてやる。だからお前は俺の物だ。起きろと云つたら、起きろ！」

彼女は眼を醒した。

「俺はH博士の所へ行つて藥を買つて來よう」

彼女を再び船頭の所へ行かせぬために、私はあらゆる手段を採らねばならぬと考へた。

「何考へてるの、駄目よ！」

今はハツキリ眼ざめた彼女が、情慾に燃え上つた眼を私の鼻の下に爛々と輝かせながら、私の理性を叱つた。

私は怠屈すると銀座に出掛けて行つた。私は其所で、生きた人間を眺めた。かの日本民族を何千年か支配した觀念論的厭世思想にも拘らず、彼らに銀座で生活を樂しむ習慣を持たせずに措かなかつた力は何であるか。文化の花が、人々に生活を煽動する。その街に動いてゐるものは、人間の慾望であつた。これは生命の動きだ。その動きの中に私も入つて居るのを感じる。私がもしその動きの外にゐるのだつたら、私は死んだも同じではないか。

私はまた、彼女を誘つてよくダンス・ホールに通つた。音樂の影響による鼓動の變化は、私の足を輕快に踊らせた。これは只、官能の喜びである。これほど頭を疲らせぬ快樂を、私は知らなかつた。そして私は、頭を疲らせぬ快樂をいつも排斥する人々を輕蔑した。

「ダンスが不可いと云ふ人があるんだよ」

踊りながら、私は彼女に云つた。

「まア、どうして？」

「どうしてか。その人は不具なんだらう」

「不具には分らないの？」

「睾丸のない不具にはね」

「睾丸のないつて云ふのは、女々しい人のことぢやないの？」

「なに、ないやうな顔がしたいだけさ」

「何故？」

「そんな顔しなくちや、ぢつとして居られないんだよ」

「種馬ぢやあるまいし」

「だが、種馬だけが本當のことを知つてゐる。あとの奴は、あはうだ」
そのあとで、彼女は云つた、
「妾、他の人と踊るわ」
「誰と？」
彼女は、室の隅のテーブルに腰かけて茶を飲んでゐる、若い逞しい男を頤で指した。
この男は、太いセルロイドで縁どつた眼鏡をかけ、黑いシャツを着てゐた。嚴丈な腕が、洋服の袖から覗いて、手の甲まで毛がもぢや〳〵生えてゐた。色は淺黑いが、顏の形は整つて精悍だつた。
「僕は踊りません」
彼女がそばに行くと、その男はぶつきら棒に云つた。彼女は私の所へ歸つて來て、
「踊らないのなら、何しに來たんでせう」
「見物だらう」と私は笑つた。
「でも、手の甲をごらんなさい。あんなに黑い毛が生えてゐる」
「强さうだな」
彼女は遠くから、しげ〳〵と男を見詰めて動かなかつた。
小說ばかりでは、私の生活費は足りなかつた。私は次第に感想のやうな物まで書き出した。感想を書くにしても、私は書物を讀む暇を持たなかつたから、いつも頭の動くまゝに、直感的な物の云ひ方をする他はなかつた。その頃、文壇には、無產派文學の文學論が漸く旗じるしを掲げ初めてゐた。私は貧乏が嫌ひであつた。私は社會の分配が不公平である事には憤りを感じてゐたが、そして、この世の中にはいくら働いても搾取されるばかりで動物のやうな生活を送らなければなら

ぬ位置にある階級があるのを知つてゐたが、私は自らそのやうな位置に身を投じて行くことが怖しかつた。私は生活の花の下で生々と顔を輝かせて居りたかつた。私も無産階級だ！だが、私は動物のやうな生活をしないでもすむ。搾取されても、ダンスを樂しんだり、自動車を走らせたりする事が出來る。大多數よりは、少しばかりよい境遇にある。この位置を、自ら壞すことは不可能だつた。私はブウルジョアの僅かの餘澤でも感謝して好いだけは、彼らと利害關係を一つにしてゐる。それだのに、彼らの敵となつて、今までの利益を放棄する氣にはなれなかつた。況して、ブウルジョアの敵となつて、勝てさうもないのに闘つて、留置場で拷問されたり、刑務所で血を吐いたりする事は怖ろしかつた。私は彼女を愛してゐる。刑務所に行つてゐる間に、彼女はどうなるだらう。いや、私が貧乏したら、彼女はどうなるだらう……

けれども、私は小説家だつた。私は生れながらに、人類平等の思想を持つてゐる。もし小説家が正義の立場に立たなかつたなら、と云ふのはその行藏の根據に哲學がなかつたなら、彼はどうするのだ？

私は自分の無學を知りながら、自分の直感に信頼した。そして、私は大多數の貧乏を見ぬ振りして、私の哲學を一生懸命に築いて行つた。そして、自分の現狀維持に辯解を與へた。我々が贅澤するのは我々の宿命だ。文化が今日にまで進化したのは、大昔からの人類の共同責任である。我々一人その責任を脊負つてその破壞を急ぐ必要はない。我々はやがて沒落するだらう。我々の周圍を見よ。沒落過程の表現たらぬ物があらうか。我々はもはや健全なる精神の發現を、この世の中のあらゆる物から見失つた。只、物質が物質として殘つてゐる。今日の文化に於て、機械は人の生命を摺り減らしてゐる。機械は生産すると共に殺人的効果を發揮する。然も、人は機械によつて需要を滿され、機械によつて賃銀を得、機械によつて距離と時間の經濟を得てゐる。もし殺人的な機械がなかつたら、現代人は生活を失ふだらう。且つ、我々の知識はなほ一層多くの機械を生んで行く。そして又、我々の知識は一方に産兒制限の理論を認め、その方法を知つてゐる。戀愛は子孫繁殖の目的を忘れて徐々興味のためにのみ行はれるであらう。これらは、我々が滅亡の道程にある證據である。

然し、今日のこの文化は、今日突然招來されたものではない。何千年か昔から、人類は一歩々々、こゝに來る道程を踏んで來た。人類のあらゆる歴史的事件、あらゆる逸話的事件が、斯る文化の段階に迪らせる力だつたのだ。必然性が築き上げた文化なのだ。そしたら、没落への過程は自然の意志である。自然の指す方へ渡ることこそ、眞理の道だ。我々は現代といふ階段を飛び越へて次の時代へ渡ることは出來ない。現在與へられたる今日を、我々は豐富に生きよう。現在を物質的に豐富に生きることのみが、よりよき次の時代へ渡る力である……

私はそんな事を書いて滿足した。これで當分、自分の生活を守つて行くことが出來ると思つた。そして私は、現代を物質的に豐富に生きることが出來ないのを悲しみながら、現代の物質文明を讃美するやうな小說を書いた。私はたゞ讃美するだけだつた。何故なら、私は豐富な生活をする事が出來なかつたから、豐富な生活の內容を作品で示す力を持たなかつたのである。

やがて年末が迫つて來た。

私は年內に二百枚書かなければ年が越せぬと云ふ考へに每日憂鬱だつた。私は年を越すと云ふことが、何を意味するかを考へて苦笑した。天地の運行に區劃整理を行つて一年十二ケ月を規定した人間は、その第十二月の終りを、經濟的關係の整理時期とする約束と習慣を生んだのだ。私はこの習慣を無視したつて好い。何物にも恥づる所なく、私は借金を荷負つて大晦日を越して好いのだ。それだのに、私は每日憂鬱だ。私は每日、年を越せさうもなく夜が明けて行くので苛々とした。

「もう寢ようか」

或夜私は仕事を考へるだけで頭が疲れて云つた。
「厭よ。そんなに怠けて！お正月をどするの？」
「怠けたら、何故お正月が來ないのだ？」
「年末だから、お金が要るぢやないの？」
「お前もいつの間にかそんな事をおぼえたのだな」

この女は三年前までは放浪してゐた。彼女には大晦日の習慣はなかつた。その彼女を約束と習慣の世界につれて來たのは私だ。彼女は貞操の習慣をおぼえぬ間に、世間の經濟關係の約束には既に縛られてゐる

そして、私の愛欲は、さうした約束に縛られた生き物を所有する所から、一層重量を増すのである事も私は知らればならない。

私の所に、或る娛樂雜誌から百枚の長編小說の註文が來てゐた。どうしても年內に仕上げて吳れと云ふ催促が隔日位に來た。この需要と私の必要とは一致する。私も是非それを年內に書かなければ困るのだ。私は百枚の原稿を幾日で書くかを計算した。だが、私は何を書かうかと云ふことは少しも考へなかつた。私には書くことが無いのだ。私はもう書けることはみんな書いてしまつたのだ。だから何を書かうかと考へるのは無駄だつた。それよりも、これが何日で書けるかを計算する方が、私にとつて遙かに生活的だつたのだ。十二月三十一日までの日數を、書かなければならぬ原稿枚數で割りあてゝ見る事は、毎日の愛欲を計算で慰める唯一の方法だつた。

遂に、これ以上計算しても慰められぬ日が來た。もし今日から百枚を連日四日で書かなかつたら、あとの百枚が三十一日までに書けないと云ふ日であつた。私は筋の計畫も人物の性格も考へない娛樂小說を書き始めた。

四日に百枚書けば好いのだ。私は原稿用紙を文字で埋めれば好いのだ。それが商品だ。私にはもはや藝術品を作る昂奮

はなかつた。私には私の生産力に對する信頼があつた。

二日目に、私は五十枚だけ揃へて編輯所に送つた。あと五十枚は二日のちに持參すると書き添えておいた。

「ぐんぐん書けるから豪いものだよ。お正月には、どつか暖い温泉にでも行かうか」

私は上機嫌で彼女に云つた。

「行つても好いけど、どつちでも好い」

「どうして?馬鹿に氣のない返辭だな」

「妾、すこし心配だわ」

「云つてごらん、何が心配なの?」

「云はない。云つたら、あなたきつと泣くわ」

「ふむ、分つた。お前は又船頭の所へ行つたんだな」

「今度はさうぢやないの」

「今度は誰だ?」

「あのダンスの見物に來てた人なの。眼鏡をかけた」

私は彼女が、度々ひとりでダンス・ホールへ行くのを知つてゐた。私が豫期してゐたやうに、彼女は矢張りあの逞しい若者に惹付けられてゐたのだ。

「今度は船頭より好いね。」と私は机の上で原稿を書きながら云つた「それが、どうして心配なの?」

「だつて、あの人は、あなたん所へ談判に來ると云ふんだもの」

「何を談判に來るのだ?」

「妾を呉れと云つて」

「誰がやるものか」

けれども私は原稿を書くことは止めなかつた。私はどんな怖れが今突然のしかゝつて來ようとも、ペンの速力をゆるめる事が出來なかつた。私はその日のうちに、幾十枚か書いてしまはなければ、あとの仕事に差し閊へるのだつたから。私は機械のやうに、ペンを動かせなければ、浮世の約束によつて飢ゑさせられるかも知れぬと脅されてゐるのだ。この脅しは、妾を失はなければならぬかも知れぬ怖れよりも、暴力的な効果を持つてゐる。斯る暴力から逃れるためには、私は賣るべき物を拵へる事より他に何の手段をも持たないのだ。

「然し、お前はあの男の所へ行きたいのか？」

「行きたいのだけど、妾は行けないわ」

「あの男が貧乏だからだらう」

「さうなの」

俺も貧乏だ。だが、俺は賣れる物を拵へる事が出來る。私はさう考へた。世間が私に商品を作らせて呉れる。世間は私に彼女を繋いでおく鎖を保證して呉れてるのだ。私は煩はされずに、ペンを走らせなければならない。

翌日、私は五十枚を書き上げた。前に渡しておいた五十枚を併せて、私は百枚分の原稿料を貰ふ權利を持つて、編輯所を訪れた。

「主幹のAさんに。こちらは××です」

社の受付の小僧に、私は取次をたのんだ。小僧は社内電話の受話器を取上げた。

「Aさんに、××さんが御面會です

しばらく小僧は受話器を耳にあてたまゝぢつとしてゐた。やがて私の方へ向つて云つた。

「Aさんは、社用で御旅行です」

私は直覺的に嘘だと思つた。

「Bさんはゐますか。Bさんでも宜しい」

小僧は又電話にかゝつて、Bを呼んだ。

「Bさんは、今朝から出て居ります」

これも嘘だと直覺した。

私は自分の商品に自信がなかつた。私の原稿が拒絶されるかも知れないと云ふ蟲の知らせを持つてゐた。

「では、誰でも宜しい。社員の方にお目に掛りたい」

私は怒つたやうに云つた。しばらくして、私は應接室に通された。

出て來た社員に私は云つた。

「長編が全部出來上りましたから、持つて來ました」

「それは、どうも御苦勞をかけました」

「此間のと合せて、百枚です。稿料を今頂きたいのですが」

「さア、それは、どうも……」

「どうしてゞすか」

「主幹が居ませんと、困るんです」

「では、何時、頂けるんです」

「何しろ年末で、會計が矢釜しいものですから……」

「一體、それは何事ですか。年内に全部書いて呉れといふお賴みに從つて、僕は徹夜しながら書いたのです。年末に一文も支拂はないで人を働せるつて法がありますか」

「主幹さへ居れば、分るんですが……」と社員は恐縮さうに云つた。

然し、主幹が居留守を使つてゐるのは明かだ。だから矢張り、原稿は拒絕するつもりに違ひない。三十一日は目睫に迫つてゐる。巨大な足が私を蹂躙しようとするのに、私は何の抵抗物をも準備する事が出來なくなつた。巨大な足が頭上に來るのは事實である。今から何日何時間の後にやつて來るかも分つてゐる。だが、私に金が出來るといふことは、今日突然不確實となつた。

私は激怒のやうな物を感じた。私は約束によつて書いたのだ。先方のためのみによつて書いたのだ。何故先方がたのんだかと云へば、私が藝術家であるからだ。たのまれて書いた。然るに先方は急に拂はぬ態度を採り始めたのだ。私には權利がある。彼に拂はせる權利がある。私の經濟的事情にかけても、又私の誇りにかけても、私は拂ひを受けなければならない。

だが、次の瞬間に、私は藝術家ではなかつた事を思ひ出した。私は商取引きをしてゐるのに過ぎないのを忘れてゐた事に氣がついた。私の商品は粗惡なのだ。納入した商品が突返へされた、そんな事は今日の商業主義の世界に珍しいことであらうか。私はその小說を書く時に、商品を拵へる自覺を持つてゐた。然るに、私はその取引きの場合に至つて始めて自分の藝術家であることを主張してゐる。私の憤りはこの錯誤から來てゐるのだ。私は次第に冷靜になつて來た。すると、あんなに憤つた自分がひどく滑稽に思はれた。私は晴れ晴れと笑つた。

「僕の原稿が厭になつたのなら、ハッキリと云つて貰ひたいですな」

「いや、そんな事は決してありません」

社員は恐縮したやうに云つた。

私はこの上此所にゐたつて何の用事も捗らないのを感じた。私は藝術家らしい尊大さを以て挨拶すると、その應接室を出て行つた。

埃つぽい往來を、電車に乗る氣もしないで歩きながら、惨めな私を考へた。

「昔俺は藝術家だつた。社會環境の何物も俺を汚すことは出來なかつた。俺は象牙の塔の中に、自己を守つてゐたのだ。然るに、俺は、俺の藝術家氣質から、路ばたから一人の女を拾つて來た。一個の生き物を俺は所有したのだ。その瞬間から、俺は社會の中に生存する意識を持ち出した。環境は俺を汚し始めた。俺は次第に藝術家ではなくなつて來た」

この反省は、私を殆ど泣かしめるものだつた。私は現世に生々と生きることで、次第に私の藝術を失つて行つたのだ。原稿の註文が重なつて、それを片つ端から片附けて行くことに生き甲斐を感じてゐるうちに、いつか私の精力はしぼり取られてしまつてゐたのだ。私は浮世の快樂を、彼女と共に味つて行くことに、生存の道徳價値を認めた。そして私は、その道徳的實踐のうちに、私の藝術を次第に貧困へ導いたのであつた。

私はもはや藝術家ではない。私は一個の商人だ。日々肉體を衰微させて行きながら、なるべく多量の商品を生産させて行くことを念じてゐる商人だ——私の一生は、頽廢と快樂との漸次高音（クレセンドオ）だ！

私は呆然として巷を歩いてゐた。何か、非常に愉快な夢を見てゐるやうな氣持ちだつた。この氣持（センセーション）ちは何所から來るのか？私はそれを見究めるだけの努力もなし得なかつた。私の心はあまりに疲れてゐたのだ。私は只、その氣持ちに身體を任せて歩いて行つた。

が、やがて私は氣がついた。私は一團の群衆の中に交つて、その人波にもまれながら歩いてゐるのだ。彼らの顏つき

は、痩せて頑丈な線を緊張させ、眼は爛々と輝いてゐた。どの顔も、どの顔も！　これは、この群衆に一つの希望のあることを物語つてゐた。如何なる希望であるか？私には分らない。然しながら、彼らは一つの目標に各個の心を集中させて歩いてゐるのだ。この事が、群衆の中にゐる私の氣持ちに通つて來るのに違ひない。私も、いつの間にか彼らと共に昂奮しながら、默々として歩いて行つた。

私たちは、やがて一つの建物の前まで來た。その時、私には一切が分つた。私が共にあるこの群衆は、一つの組織の中にある勞働者たちだ。私は、今朝の新聞で、この建物で今日彼らの支持する或る政黨の大會のある事を知つてゐた。

私は小說を書くといふ職業を持つてゐる。斯ういふ大會を見聞しておくのも、無駄ではなかつた。此所で私は材料を得るだらうし、でなくとも、勞働黨大會を情景に描く時の參考になるだらう。私は群衆にまぎれて、入口を入つて行つた。誰も私を咎める者はなかつた。

が、入つて行つて私は多少後悔した。何といふ光景であらう。場内にギッシリ詰つた群衆の中に、物々しく身を固めた多數の警官が、鋭い眼を配りながら立つてゐる。私は身を縮めて、彼らの眼光を避けた。殺氣を感じる中に在ることは、神經に堪えられない事だつた。

すると、又新しい不安が湧いて來た。この種の大會がある毎に、何所からともなく多數の壯士が、拔刀をかざして會場に躍り込んで來ることを、私は新聞で知つてゐた。それらの壯士が、今日も斬り込んで來はしまいかと私は怖れた。私は血を見ることを本能的に嫌惡する。況して、私自身が、兇刄にふれて血に染らないとも保障出來ないではないか？

私は怖る怖る眼をあげた。私の周圍はみな逞しい勞働者で一杯だつた。彼らの眼は矢張り輝いてゐる！　あの、希望と鬪志に溢れた眼だ！私は一瞬間前までの不安を自分自身に恥ぢた。そして、今度は大膽に、ベンチの上に身を伸し、眼をあげて正面を見た。

と、その時、強い、力ある拍手の響きが滿場から起つた。いつの間にか、正面の演壇で開會の辭が述べられ、それが濟んだのだ。つゞいて

「議長！」と叫んで群衆の中から一人の若い勞働者が立上つた。

「本大會にも、壯士の斬込みがあるだらうと思ふが、それに對する準備は奈何？」

やゝ肥つた身體に、粗末な黒の背廣を着た議長は、この質問を受けて、その短い口髭をコツと捩りながら微笑した。

「それに對しては、豫てより防備隊を組織してあります。今、防備隊の一人の方から、御挨拶があります」

拍手のうちに、一人の中年の、背の高い、色の淺黒い勞働者が、演壇に進み出て云つた、

「暴力團に對しては、わしらが命がけで護るから、お前さん方は、安心して討議を進めなさい」

彼はしづかに、ニコ〳〵しながら、これらの言葉を吐いた。その素朴な、何の飾りもない言葉が、底力に溢れて群衆の胸を撫でるやうに流れ渡ると、再び、場の隅々から燃え上るやうな拍手が起つた。

私も拍手した。今は完全に、私自身が大きな統一體の中に溶け込んでゐた。巨大に波打つ鬪志の中に抱き込まれたがら、私も手を拍いてゐた。そして、私は幾年ぶりかで、溫度のある涙を私の頰に感じた。

「おいらをしぼつてしぼつてしぼりぬく
奴等を叩き伏せろ」

日常鬪爭と共に、
全面的に、尙一層政治的自由獲得の戰線を展開せよ。

戰線統一のために、今や大衆はあらゆる無産政黨の合同を要求する！

これらの觀念が、討議の進行につれて、私の心の中に積み重なつて行つた。それは、私にとつて新鮮な感動であつた。同時に、知識の驚異だつた。私は藝術家であつた昔から、商人となり下つた今に至るまで、私の生きてゐる世の中で、斯くの如く歴史が進展してゐたとは夢にも知らなかつた。私が眠つてゐた間に、眼ざめる人たちの手によつて、鬪ひは斯く鬪はれてゐたのだ。今、私は彼らの中にゐる。歴史の波の上に眼ざめた。そして私は、鋭い悲しみを感じた。私は、その歴史に參加する勇氣を持たないであらう。私は單なる傍觀者として、明日からは殘るであらう。今日、鬪ひを盟ふ彼らの拍手に和したこの手で、明日私は軍國主義讃美の劍劇のシナリオを書くだらう――さう考へて、私は鋭い悲しみを感じた。そして、何が斯く私を分裂させるのであるかを見究めようとした。

が、その時であつた。突然、會場の入口の方に當つて、物凄い喧騷が起つた。私は思はず背ろを振返つた。群衆の肩越しに、數條の白刃が入り亂れて光つた。が、場内の群衆は身動きもしないで、今演壇に立つてゐる辯士に耳を傾けてゐた。背ろを振返つたのは私一人だつた。私一人が、防備隊を信頼してなかつた證據だ。さう思ふと、ひとりでに顔が赧くなつて、私は眼を伏せた。

「今や、政治的自由獲得のための戰線統一の必要を自覺する勞働大衆は、必然、あらゆる勞働政黨の合同を要望するに至つてゐるのである。從つて我が黨は――」

入口の喧騷にも拘らず、壇上の辯士の言葉はしづかに流れつゞけた。それを聽いてゐる群衆も、入口の方には一切無關心でゐるらしく見えた。彼らは彼らの背ろにどんな暴力が迫つてゐようとも、怖れないのだ。彼らは強く、自分たちの仲

闘である防衛隊に信頼してゐるのだ。その勝利を信じてゐるのに相違ない。入口の喧騒はやがて鎮まつた。闘士も壇を下つた。

「異議なし、異議なし」

合同提唱の議案が通過した。白刃の威嚇を前にして、敵を打つための組織が、冷然として成育の一歩を踏んだ。

その夜、私は昂奮して銀座を歩いてゐた。私は、今日、突然、銀座が斯くも貧困に陥つてゐようとは思はなかつた。歳末賣出しの街は、紙と電燈とで飾られてゐた。夥しい群衆は、飢えた眼を白々しい電燈の下にさらしながら、歩道をもみ合つてゐた。

これらの群衆の中には、私が先刻會場で見たやうな、希望と勇氣に輝いた眼は一つもなかつた。こゝにうごめいてゐる者たちは、みな僅かな自由を「幸福」だと信じ込んでゐる奴隷ばかりだ。彼らは奴隷のやうに青白め、奴隷のやうにうろうろしてゐる。そして奴隷のやうに、決して自分たちの物とはなり得ない寶石やステツキや毛皮を、飾窓のガラスの彼方に眺めながら讃美してゐる。彼らはそのガラスが薄いと思つてゐる。いつかはそのガラスの向ふにある物に手の届くことがあるだらうと夢見ながら、餡パン店や佃煮屋へ殺倒して行つた。

彼らの中にあるうちに、私は次第に憂鬱になつて行つた。それは頭腦が鈍く下痢するやうな感じだつた。それゆゑ私は一層青白めて行く私の全身を感じた。私は次第に幽靈と化し去る自分自身を感じた。彼らと共にある限り、それが私の運命であると考へた。銀座といふこの現代の地獄は、あらゆる人間を呼喚する亡者と化せしめずには措かないだらう。

夜おそく、私は金も持たずに家に歸つて來た。妻はゐなかつた。

「奥さんは、どうした？」

私は女中に訊いた。

「お正午すぎに、お客様がゐらして、御一緒にお出掛けでございました」

「どんなお客様だ？」

女中はしばらく考へを纏めるやうに首をかしげてゐたが、

「眼鏡を掛けて、髪の毛を長くした……」

「男だな」

「はい」

「分つた。黒いシヤツを着てゐたらう」

いつか、ダンス・ホオルで見た男のことがチラと私の頭をよぎつた。

然し、私にとつて案外それは苦痛にならなかつた。嫉妬も、焦燥も、憤怒も起らなかつた。愛慾に就いての悩みなどといふものは、一種のロマンチシズムに過ぎない。人生にさういふ眞實があるやうに幻影するものは、本氣で嫉妬したり人殺しゝたりしてゐる。けれども、私にはもはや愛慾については何のロマンチシズムもないのだ。戀愛は性交以外の何物でもない。其所には神もなければ魂で説明をごまかし去らねばならぬやうな有難い秘密もない。現代では、其所には只性交のみがある。取引のみがある。

今日の感激は、一切の個人的な問題に對する興味を私から剝奪してしまつたやうに見える。私の妻に姦通問題が起つたつて、私にとつてそれが何であらう。虚勢でもなく、誇張でもなしに、私は冷やかにそれらの問題を默殺し得るのだ。私には、もつと、もつと重大な仕事があるやうな氣がし始めてゐる。それは何であるか？何であるかはハッキリ云ひ切れな

い。だが、今、私の心一杯に擴つてゐるものは、今日私が目のあたりに見た新鮮なる力への憬れだつた。その力は、私が眠つてゐた昔から今日へかけて、そして未來へかけて進行してゐるのだ。その力は、やがて全地球の被壓迫層を糾合して、暴逆なる「彼奴ら」を締め殺すまで成長するであらう。「彼奴ら」は既に白刃を振りかざしてゐる。だが、この力はまだ冷然として合理的な運動過程を進んでゐる。この力が白刃を採るのは最後の瞬間だ。まだこの力は合理的な運動過程で、最後の飛躍への必然性を蓄積して行つてゐるのだ。それ故に、この力の最後の飛躍にこそ、我々は美しい信頼を置いて好いのである。

強力な最後の飛躍！

必然性の蓄積が其所へ行かぬまに、早くも暴力を表現する者は、歴史から沒落するのだ。

私は潑溂と成長して行く彼らの力を感じて、この世の中には、まだほんとにムキになつて爲すべき仕事のあることを知つたのかも知れない。そして、私は新しい朝に眼ざめたやうに、すが〱しい幸福を感じた。私の妻は私を愛してゐない。それにも拘らず、私の身の内には、颯爽たる幸福感が流れて盡きなかつた。

それつきり、妻は私の家に戻つて來なかつた。

「あゝ、それが彼奴らの云ふ神様の思召しといふ奴なのだらう」

私は思つた。物事を神の思召しに還元するのも、私にとつてはこれが最後だと考へて苦笑した。この際、妻が自分から私を捨て去つたことは、神様の思召しに歸したつて私の損にはならない。全く、偶然、好い境遇に惠まれたと云つても好いのだ。

幾日かは淋しい讀書のうちにすぎた。

或日、私は黑シャツを着た男の訪問を受けた。

「僕は君を毆りに來たのです」と彼は落ちついて云つた。

「君はファシストですか」と私は訊いた。

「いや、僕は單なる個人主義者です。どうして好いか、全く分らないのです

「何が分らないのです？」

「生活態度の採り方がね。現代で、それが分つてる奴はないでせう」

「それで、僕を毆りたいと云ふ理由は？」

「君の細君は今僕の所へ來てゐます」

「ぢや、僕の細君ぢやない。君の細君ぢやないですか」

「いや、彼女は誰の細君でもない彼女は只、女であるだけです」

「その通り」

「彼女を、君はどう思ひますか？」

「御說に贊成してるぢやありませんか、彼女は只の女であると云ふ……」

「彼女は素晴しいでせう」

「豐富なる對象です」

「僕は彼女を感覺のメルティング・ポットだと思ふのです」と彼は次第に昂奮して、雄辯に語り始めた「最初、僕は盲目的に彼女を愛しました。殆ど熱愛しました。彼女が身を反らせると若い弓のやうになるのです。彼女の全身から生溫い

芳香が發散するのです。ところが——僕にはすぐ分りました。彼女のあらゆる性格と技巧とに、君の生理的な影響のあることを」

「それは仕方がないでせう。同棲二年に亘るのですから。性格や技巧ばかりでなく僕の行爲は彼女の internal secretion にさへ何らかの變化を與へたかも知れません」

「それです。だから僕は耐らないのです。苦しいのです。彼女の素晴しさが、却つて僕に焦燥を與へるのです。そこで僕は、一生懸命に彼女を征服しようとしたのです。又、現にさうしつゝあるのです。だが、どんなに努力しても、彼女のあらゆる部分から、君の亡靈を追ひ出すことは出來ない。僕は、彼女の肉體を戰場として、君の亡靈と永遠の戰ひを鬪つてゐるやうなものだ、決して負けない代りに、決して勝てない鬪ひを——それで、僕はこの通り青白め、痩せて行くのです。いくら鬪つても、僕の得るものは、只、身體の衰弱だけだ、そして、君の亡靈は……」

「ちよつと待つて下さい。亡靈はひどいですよ。僕はこの通り生きてゐる」

「兎も角、僕はもう堪えられないのだ。亡靈と鬪つてるといふ感じから拔けられないのです。そこで、君を毆りたくなつた。君を毆つたら、僕は征服感を獲得するだらうと考へたのです。君をひどい目に合はせに、今日來たのだ」

私はこの男——神秘主義者か、それとも愛慾の深刻な受難者か知らないが、この個人的な悩みを必死になつて悩んでゐる眞面目な男が、かあひさうでならなくなつた。斯うしていつまでも悩んで悩みぬいて、結局この男の人生はどうなるのだらう？　深刻な悩みの報酬として、やがて靜かな諦めの境地に到達して、彼岸の寂光土を見るやうになるか、それとも、偉大なるニヒリストとなつて欠伸を連發し出すか、どつちにしても、「この男の人生は怠屈を以つて妙諦とするに至るに違ひない。私は笑つて云つた。

「君は僕ばかり目の敵にしてゐるやうですが、それは間違つてゐますよ。彼女は僕の前には無數の船頭を知つてゐる。貴

春婦だつたのです。だから、君は僕の亡靈と鬪つてゐるばかりではない。無數の亡靈を——船頭の亡靈を先づ征服しなくちやならないんですよ」

「船頭の？」

見る見るうちに、彼の顏が何とも云へぬ憂欝に曇つて來た。

「その船頭の數も何人だか分らないのだから、征服しやうにも、ちよつと整理がつき兼ねるでせう」と私は云つた。

「ふむ。何といふ汚い」

彼は私を毆らうとして立上つてゐた腰を、力なく椅子の上に戻すと、頭を兩手で支へながらテーブルの上にうつむいてしまつた。

「船頭が、何故汚いのです？」

「だつて、汚い。感じが汚い」

「僕だつて船頭だつて、同じぢやないですか？」

「君の亡靈なら鬪ひ甲斐があると思つたのに……船頭までやつて來るのなら——あゝ、もう、つくづく厭だ！」

彼は歎息するやうに云つたが、その聲は厭味な調子にならずに濟んだ。何故なら彼の本來の聲が太い、底を匍ふやうなバスだつたのだから、いくら叫んだつて黃色つぽい聲になりやう筈がないのだつた。私は今更ら彼のずんぐりした背格好や、色素を持つた皮膚や、袖口から覗いた手くびに密生する毛など見てゐるうちに、この男を慰める言葉を發見した。

「君の肉體的性格は、十分に彼女を惹き付ける資格を持つてゐる。だから、彼女は今に君に征服されるでせう。彼女が、僕を捨てゝ、君の所に行つてしまつたのも、要するに彼女が本能的に君の性格を諒解したからなんだ」

「そんな事は、今の僕にはどうでも好いのです。僕はもう、君を毆る興味も失つてしまつた」

彼女は泣き出しさうな顔になつた。

「ぢや、彼女を捨てゝしまつたらどうです？」と私は云つた。

「君は何といふ人だ！」俄かに彼は昂奮して聲を荒らげた「彼女は僕に捨てられたら、何所へ行く事も出來ないのです。可哀想な女！僕が捨てたら、益々墮落するでせう。彼女を救ふのは、僕の義務です。僕は必ず、彼女を救つて見せます。君のやうな非道徳家は、彼女に肉慾的な教育しか施し得なかつた。それでは、彼女を救ひ得る筈がない、僕は……」

彼はハラ〳〵と涙をこぼした。恐らく、可哀想な彼女を救はうといふ感慨で、胸がふくれ上つたのであらう。

それまでは、私も彼をそんなに輕蔑しなかつた。彼は私の所へ來て、いきなり「君を毆りに來た」と云つた。つゞいて「君の細君が僕の所へ來てゐる」と云つた。この非凡な言葉――人の女房を盜んでおいて、當の亭主の所へ平然と名乘つて來た非凡な行爲から、私は彼に多少の尊敬さへ拂ひかねない氣持ちを抱いてゐた。だが、今、彼が急に人道主義者に變身したのを見て、私はホッとしたのだ。私はもうこの男を尊敬する負債から解放されたと考へたのである。

この男は結局、彼女の魅力に執着を持つのだ。その女に興味を失はない限り、彼は彼女を捨て去らないだらう、それは只、「興味」の問題だ。然るに彼ら人道主義者たちは、その「興味」を何らかの精神的意義にこぢつけないでは氣が濟まないのだ。斯うして彼らはいくらでも淫奔な眞似をして、彼の崇高な人道と矛盾しないで居られる。妻と別れたり、第二、第三の妻、愛人、等々を同棲したりして、涙つぽい思想を舁ぎ出して來る。興味の追及をやつてる自分に氣がつかないで大眞面目に自分の「精神的」なる物を主張してゐる。彼らには恰も「精神的」なる物のみが存在してゐるかのやうに――いや、彼らは誠心誠意さう信じてゐるのだ。何故であるか？阿呆だからだ。

灰色の中の希望こそ眞の希望だ。

私は今、灰色の中にゐる。批評家は、あらゆる機會に、私の藝術の墮落を罵倒した。又實際、私の書くものは次第に技巧を失ひ、ガサツな物となつてしまつた。私が今までの藝術修業で獲得してゐた技巧は、個人の問題を取扱つて書く時にのみ有効だつたのだ。それだのに、私はもはや個人の問題には殆ど興味を持たなくなつた。私は今まで持つてゐた技巧を放棄せざるを得ない。此の意味でも、私の藝術は窮乏に陷つたのである。

私は今、灰色の中にゐる。私が今まで持つてゐた道徳的基礎の一切が、私自身の內に呼び掛ける力を失つてゐる。批評家は、地獄に陷ちた私を辛辣に指摘した。それだのに、私の意識は、まだ十分に新しい基礎の中にしつかり根をおろし得てゐない。

習慣から、私は朝おそく眼を覺した。その日は、××街で或る示威行列が行はれる有名な記念日だつた。私は急いで起き上ると、顏も洗はないで家を出掛けた。

私が××の大通りに辿り着いた時は、群衆が混亂の極に達した最中だつた。電車路に溢れた群衆が、列を崩して散亂し始めてゐた。その間を、無數の警官や私服が、漫畫のやうに四肢を動かせながら喚いてゐた。

誰かゞ、うしろから、私の肩をムッと摑んだ。

「何するんだ？」

「來るんだ」

「俺は見物人だ」

「此奴！」

「往來を歩くのは俺の自由だ」

さう云ひかけて、私は苦いものを感じた。私は愚かなことを云つたのだ。今日は往來を歩く自由さへ我らから剝奪したつて、彼らにとつては何の不合理でもないのだ。

私は警察署の中にゐた。數十名の男女が、私と同じやうに引張つて來られて留置場を埋めてゐた。やがて、私は疊敷の上に引張り出された。一人が私の前脚を拂つた。私は前に轉んだ。續いて蹴られた。他の××が太い綱で私を結へつけ、天井に吊し上げた、と思ふと、ドスンと疊の上に私を落とした。その時、私は隣室で、女の悲鳴を聽いた。私と同じ事をやられてゐるんだなと思つた。私は幾度か、天井に吊し上げられては、下に墜落させられた。間斷なき痛みが脊髓を走り私は次第に意識を喪つて行つた・・・

私は灰色の中にゐる。

けれども、留置場から出て來た時、私はその灰色の内容がひどく變化してゐるのを發見して獨り瞠目した。

私は怡りを私の肉體に體驗したのだ。

電車にゆられながら、うと〳〵と睡氣を催しながら、私はその疲勞の底で幸福だつた。………

「俺は決して墮落しない」

——一九二八・一・一六——

漂泊人

下村千秋

一

その姓を木川といひ、自分が北海道を流浪してゐる間に知つた男で、自分はこの男と、札幌の場末の荒物屋の二階に唐紙一重を隔てゝ、秋の末凡そ一ト月半ほど一緒に暮した。口大きく、額禿げ上り、ちらりとこつちを見る眼に冷たい光が潜み、可なり親しみ難かつたが、見知らぬ土地での流浪の身で、路傍の人にもすがりたいほどの孤獨だつたので、自分は秋の北風に向ふやうな氣持でよくこの男と話し合つた。

彼は十日に一度ぐらゐ、夜遲く部屋を出て、翌る朝早く、ぼんやりした顏で歸つて來た。ふところには日頃耽讀してゐる俳書が入つてゐる。遊女買ひと俳書は妙な對照と思はれたが、さういふ時の彼の顏にはぼんやりした中に深い靜かな色が浮

び、自分は何か心の充たされるやうな親しみを感じた。

ある夜自分は彼に案内されて、ポプラの並木で圍まれた暗い通りの廓の中へ入つて行つた。が、間もなく二人はそこを出て來てしまつた。といふのは、彼の馴染の女が、その二日前急性腹膜炎で入院し、ゆうべ遲くそのまゝ死んでしまつた、といふことだつたからであつた。彼は珍らしく少し昂奮してゐた。そして自分達の部屋へかへり、火鉢を圍んで坐ると、その遊女の身の上を話し始めた。それが緒口となり、彼はその夜始めて、自身の半生を告白した。

彼は先づ言つた。

「君も可なりの放浪者のやうだが、僕などはそれと較べたならお話にならない漂泊者だ。この漂泊生活のために僕は一時――一年半ほど氣が狂つてゐたことがある。僕がさうなつた深く遠い原因は、漂泊者として押し出されるまでの生ひ立ち――沒落しつゝある百姓村での慘めな生活にあるやうに思はれ、近く直接の動機は、しばらく同棲したことのある女が、ある時突然發狂し、その子を絞殺した事件にある。この事件も所謂男女間の色つぽい戀愛、愛慾から生れたのならまだ浮ばれるが、この漂泊生活そのものだけから必然的に生れたやうに思はれ、漂泊人の間でなければ起らなかつたものゝやうに感ずるだけ、考へると堪らなくなる。敢て僕は言ふ、この悲劇を惹き起した罪も、僕やその女自身にあつたのではなく、僕やその女のやうな『漂泊者の生活』そのものにあつたのだと。」

それから彼はかう話し出した。

二

――頭の狂つてゐた一年半ほどの時日が、靄のやうに眼の前を鎖し、その向う側に起つたさまざまの事件が凡て夢のやうに見えることがある。が、どうかするといつの間にかその靄を突き拔けて行つて、向う側の自分になり切つてゐること

がある。今夜の自分は、この方の自分になつてゐるやうな氣がするので、だからそれだけ明確に話せると思ふが、それだけ不愉快でもあり、變に恐ろしくもある。しかし、聞き手の君が眼の前にゐるのだから、安心して、また餘裕ある氣持で話せると思ふ。厭になつたら途中で止す。また話してゐるうちに語調にでも少し變た所が出來て來たら注意してくれたまへ。

その女――時子は、發狂し自分の子を殺してから半年ほどして、ある避病舍の座敷牢の中で死んでしまつたが、發狂中の樣子は實にひどかつたさうだ。僕の頭も狂つてゐたのだから、さういふ時子の記憶は一つも殘つてゐないが、何でも時子は、男さへ見れば、齒をむき出して飛びかゝらうとし、そして泣き、わめき、叫んで、全く手がつけられなかつたさうである。頭髮をぼう〳〵に振り亂し、暗く陷ちこんだ眼を生白く光らしながら荒れ狂つてゐる姿は、猩々か何かを見るやうだつたと人が言つてゐた。

けれど、子供を見ると、まるであべこべに、もう消え入りさうに泣き悲しみ、見てゐる間に息が絕へやしないかと思はれるほど痛々しい姿になつたといふ。で、座敷牢の中にはいつも座布團で造つた赤ん坊がゐて、眼覺めてさへゐれば、それにおつぱいをやつたり、添寢をしたり、子守唄を唄ひながら狹い暗い中をぐる〳〵廻り歩いたりしてゐたさうだ。時子は、自分の手で自分の子を殺したことなどは、全く知らなかつたのだらう。

時子のに較べると、僕の狂ひ方はまだよかつた。かうして生き永らへてゐる自分から言へば少しもよくないが、よそ眼にはそれほど悲慘ではなかつたさうだ。往來を裸足で、兩手を空の方にあげ、大空に向つて何かを呼びかけるやうにしながらすい〳〵と泳ぐやうにして歩いてゐたさうである。一體これは何のつもりなのか。僕自身にもさつぱり解らないが、子供の時分これに似たやうなことをしたのを僕は覺えてゐる。夕陽が丘の彼方に沈むころ、一人野良道を歩きながら兩手を西の空に向つてあげ、何かを呼びかけようとして は涙ぐんだことを覺えてゐる。これは少年の一つの憧憬、アスピレーションな

のだらうが、單にそのためばかりではなかつた。僕の親爺は實にひどい酒飲みで、三日にあげず一晩中暴れ狂ひ、手當り次第のものを投げつけ、僕は眼がまわるほどどやされ、母の身體には生傷が絶えなかつた。僕は子供ながらに親爺をしんから憎み呪ひ、自分の家をしんから嫌ひ怖れた。日が暮れかけると、僕はもう家の中にゐたゝまらなくなつた。そこで野良道へ出て行く。野良には夕陽が靜かに美しく沈みかけてゐる。僕は堪らなくなつて、兩手をあげて何かを呼びかけようとしたのであつた。頭の狂つた僕がさういふ姿をして往來を歩いたといふのも、少年時のこの氣持に似たものではないかと自分では思つてゐる。なぜなれば、頭の調子の直つた現在でも、一方にさういふ氣持があり、それは事情境遇こそ變つてをれ、少年時のそれとよく似てゐるからである。

僕の漂泊癖も、この氣持の具體化したものなのだ。そしてそれは少年時のさういふ氣持から育つて來たものなのだ。實際僕は十二三の時分から、家を飛び出さう、郷里を離れようとそればかりを考へてゐたのだから。そして二十一の年、徴兵檢査の濟んだ後、つひに僕はそれを實行したのだ。けれどこの時は、單に自身の漂泊癖にそゝのかされ、それを滿足させるためにではなく、もつと實際上の事、現實生活の上に大きな動機があつた。順序としてこれを一通り話さねばならぬ。

僕の郷里は、常陸の南の方、利根川から三四里入つた所の、人戸四十に足らない小さな百姓村だ。小さな村の割りに田畑、山林が豐富で、それを獨占する大地主もなかつたから、僕の少年時の村人の生活は相應豐かであつた。四十戸のうち三十戸までは百姓らしい百姓をし、幾分でも殘つて行く自作農であつた。けれどそれから十年するうち、それがぢり〳〵と逆行し始めた。自分達の手で造る米、麥、豆、薪炭の値段はいつまでも元のまゝであるのに、自分達の手では造れない、金を出して買はねばならぬ肥料、農具、着物、石油、砂糖、酒、煙草、などの値段は二倍三倍と上つて行く。村の教育費に納める金などは、七年間に四倍にふえて來た。田畑、山林の方から言へば、その價値が年々、二分の一、三分の一、四分の一に減つて來たことになる。これを埋め合せるものは副業の養蠶であるが、田畑を精一ぱい作つてゐる上での養蠶は

無理であつた。春から夏まで專念田畑の手入れをすべき時期に、それを殆んど棄てゝ、養蠶の方に人手が奪はれゝば、田も畑も荒れ放題に荒れる。そして秋の收穫が三割四割と減る。これで結局は、蠶を飼つたことが何の役にも立たないことになつた。かうして生活はます／＼逼迫して來るばかりで、作物に何より大事な肥料も買へず、稅金すら納めかね、自分達の食糧に取つてある米を賣つてその義務を果すやうになつた。僕の家などでもこれをしよつちうやり、自分が米を作りながら、毎年夏に入る頃からその米を買つて食はねばならなかつた。

窮餘の窮策として、岡稻の代りにトマトを植ゑた。粟や豆の代りに煙草を作つた。トマトはソースとして壜詰にして賣り出し、最初一二年は相應の利益があつたが、どこの村でも爭つて作るやうになると、つまり生產多過で、つひには壜代に足らないほどの値に下つてしまつた。僕の南隣りの家では、最初の年五千本ほどを作り、一本當り十八錢ほどに賣り、蠶より割りがいゝと言つて喜んでゐたが、二年目に一萬本ほど作り、それが十三錢にしか賣れず、手間を引いたら損になると言つてゐた。ところで三年目には一かばちかで、自分の畑地全部と、更らに五反歩の畑を他から借りて、三萬本あまりのトマトソースを造つた。するとその年はいつもの仲買人がやつて來なかつた。こつちから催促に行くと、一本二錢當りなら引き取つてもいゝと言はれた。一本の壜代が二錢二厘ほどに當つてゐたのである。その家はそれで破產してしまつた。かういふ目に會つたものが僕の村にも三四軒あり、外の村にも可なりあつたといふのだ。

煙草は政府が買ひ上げるのだから、さういふ心配はなかつたが、こゝに一つ惡いことがあつた。それは煙草畑に施す肥料の金を專賣局が前貸しすることであつた。一反につき三十圓、五反歩作れば百五十圓の金が、何の勞作もなく百姓の手に入る。これは飢ゑと寒さで瀕死の狀態にある者に向つて、これ／＼の旅用をやるから江戶見物をして來い、といふやうなものであつた。こちらに取つてはそんな所ではない。先づそれで飢ゑを醫さねばならない。寒さを防がねばならない。僕の家でも、三反歩の煙草を作り、九十圓の金を借りたが、先づそれで三年前から督促され通した繩なひ機と、稻こき機の

代價を拂はねばならなかつた。それから去年の肥料代を拂はねばならなかつた。更らに借金の利子を拂ひ、石油を買ひ、砂糖を買ひ、鹽を買ひ、醤油を買ひ、最後に親爺の酒代を支拂はうとした時に、その金はきれいに無くなつてゐた。

植ゑつけた煙草は、碌な肥料もなくて、ひよろ／＼に育つた。かういふ時にはまた蟲がよくつくもので、取つても取つても蟲は蕃殖して葉を食ひ減らす。葉は何萬何千何百何十何枚と役人が來て正確に調べて行き、賣る段になつて一枚でも不足すると罰金だ。（また煙草の木はひどい毒を發散し、その周圍の畑の作物を非常に害し、その畑もその後二年ばかりは何を作つても碌なものが出來ない）さうしてその葉を丹精して摘み取り、かげ乾しにし、四晩も五晩も徹夜するやうにして十枚づゝを一束とし、やつとのこと町の專賣局出張所へ持つて行つた。ところがどうだ。役人は一目見たゞけで、こりや駄目、使用にならん、商品にならん、といつて、見てゐる前で火をつけて全部燃してしまつた。僕は泣けもしなかつた。しかも前に借りた九十圓の金は、いつの何日まで支拂へ、とぴちんと命令された。どうすればいゝのだ！

その年、僕と同じやうな目に會つたものが村の中にも四五人あつた。葉を燒かれないまでも、借りた金を差し引いたら不足だつた。又はやつと一ぱいだつたといふ連中ばかりだつた。この時僕の家では、それまで辛うじて殘つてゐた一反歩の畑の半分を賣り拂つて、專賣局の方の支拂ひを濟した。

百姓はもう何をすることも出來ない。只年々、月々、ぢり／＼と追ひ詰められて行く。最後の手段として、山林を持つものは山林、畑を持つものは畑、田を持つものは田、家屋敷しか持たないものはその家屋敷を賣り拂つて、一時をしのいで行かねばならなかつた。さうして四十戸のうち三十戸までは小作農になつてしまつた。それでも、土地の買ひ手のある間はまだ助かる。買ひ手は地方の大地主だが、一分足らずの利廻りしかない土地を買ふより、これで銀行の利を見るか、株を買ふか、何かの事業に投資する方の利益が幾倍であるかを知つてゐる。何を醉興に田地を買ふや、である。それでも何卒と平身低頭で頼むと、まるで只やるやうにして取られてしまふ。土地の値打ちは最早失くなつてしまつたのだ。値打

ちのない土地へ、しかも小作農の百姓を置いとくことは、いはゞ戰爭のない國へ軍人を持ち込み、假想敵に對して實戰をさせるやうなものだ。只自分の方が疲れ衰へて行くばかりだ。これで百姓はどうなるのだ？　しかしこの問題に就ての議論は今晩は止さう。

兎に角このやうにして、百姓が百姓では生きて行けなくなつた。こんな馬鹿な話はないが、事實さうなつてしまつたのだ。そしていつか僕の村では、四十戸のうち三十五戸までは字義通りの水呑百姓になつてしまつた。曾つて東京で、水道の故障のため斷水した折り、或る都會文明の禮讃者が、吾々は水も飲めなくなつた、これでも世界の東京か、などと何處かで言つてゐたのを聞いた時、僕はそれに對して同感する前に、何だか、それは自業自得ぢやないかと言つてやりたくて困つた。（僕のやうな漂泊人の悉くは、何かの意味で都會文明の否定者だ）けれど、水を呑んでやつと生きつゞけてゐる百姓に向つて、誰が何を言ひ得る？

僕の子供の頃には、百姓は土地を持ち、それを勤勉に耕作してさへゐればみんな豐かに暮せた。が今は、金がなければ土地があつても耕作し得なくなつてしまつた。金もなく土地もなければ、それはどうなるのか？　君を相手に一一から反問した所で始まらないから止すが、要するに百姓の頭も、一にも金、二にも金、三にも金と、金ばかりを考へ、金に依つてのみ生きて行かうとするやうになつてしまつた。けれど、百姓をして金を得ようとするのは、稲や麥に金をならせようとするのと同前だ。

こゝで若い者は、その金の取れる場所へある者は無斷で、ある者は家族が承知で、村を後に飛び出し始めたのだ。僕の村には當時二十人ほどの青年があつたが、そのうち十四五人までさうして村を出てしまつた。そして僕もその仲間だつたのだ。

都會にゐて、當時農村問題を云々した者の多くは、地方青年の都會集中の原因が、主に都會生活の憧憬に在るやうに言

つてゐたが、少なくとも僕の郷里の青年には、そんな甘い香氣な動機に動かされて東京へ出て來たやうなものは一人もなかつた。これは斷言してもいゝ。さういふ意味での都會生活はどんなものか碌に知らないものばかりだつた。變な話だが、旅立つ時、汚れた褌をしめて行くなと昔の人から敎へられてゐた青年が、かけ代へがなく、汚れた奴を物置きの藁の中へ棄てゝ、ふりで家出をしたといふ話もあつた。その心中の寒さは、所謂農村論者などには想像もつかなかつたことだらう。

僕は三年ほど前、小樽の港で、實に偶然に郷里の男に出つくわした。それは全く奇蹟的の邂逅で、その男は話してゐるうちに泣いてしまつたが、その時のその男の話に依ると、近頃家出をするものは、若い者ばかりではなく、一家の主人で、妻もあり子もあり老父母もあるといふ者が、その妻子老父母を人手に渡つた家の中に殘して、一人突然行衛をくらます者が出來て來た。さういふものが最近二年間に五人あつた、といふのであつた。これで俺等の村も滅びて行くのだ、あと十年もたつたら一軒殘らず無くなり、人つ子一人棲まぬ野良になつてしまふだらうとその男は言つた。そしてその男もその中の一人で、もう北海道の十月だといふのに、袷の上に裾の切れたモヂリを着ただけで、これから船で天鹽の方へ渡るのだといつてゐた。僕は、僕にもそれ一枚しかないセーターを脱いでその男に着せてやつた。

三

僕が郷里を飛び出した近い動機は、僕を非常に可愛がつてゐた祖母が、その春、裏の竹藪の中の古井戸へ落ちて死んでしまつたことだつた。祖母がそんな所へ落ちたのは、二三年から少し耄碌し、何のわけもなくそこらをうろ〳〵する癖があつたからで、それは單なる過失の災難ではあつたが、それから受けた僕の心の打擊は非常なものであつた。これで自分の家は沒落したのだ、といふ氣がした。するとそれから半年して、母が腦溢血でぱたりと死んでしまつた。殘るものは家

屋敷まで飲み潰さうとしてゐる親爺きりだ。この時僕は家を棄てることを決心したのだ。

しかしいよ〳〵家を棄てゝ出るとなると、古い作の貝のやうにがさ〳〵になつた暗い家の中へ、親爺一人を置いてきぼりにはさすがに出來かねた。親爺は家と屋敷を飲み潰した揚句、餓死するに違ひないと思はれたからだ。が、僕が踏み止つてゐた所で、つまりは同じ運命を見るとしか思はれなかつた。第一、祖母を失ひ母を失つた僕は、この家の中で働かうといふ氣を全く失つてゐたのだから。

そこで僕は決心を親爺に打ち明けた。東京で働き、月々金を仕送るから、とも約束した。親爺は頭を垂れてゐたが、「仕方がない」とそれだけを言つた。そして三里あまりの道を停車場まで送つて來てくれた。親爺は、埒につかまり、菅篠頭巾をかぶつた頭を延び上げて、汽車の後を見送つてゐた。それが親爺の見納めであつた。それから二年半して、親爺は一人ぽつくりと死んでしまつた。その朝、隣りの老婆が土間を入つて行くと、親爺は土間の釜場の前へ松葉を焚きつけ、その傍にころりと倒れて死んでゐたといふ。その家はそれから直ぐ人手に渡り、今は、何處から渡つて來たものか、桶屋の夫婦が住んでゐると、天鹽の方へ行つた男が話した。

かうして僕は完全に一人ぽつちになつてしまつた。これがまた僕の漂泊癖を更らに深めたのである。しかし僕も男である以上、東京へ出た當座は、相應の向上心を持ち、所謂錦を着て故郷へかへる、といふ夢も抱いた。老父を喜ばしたいといふ孝行心もあつた。これは僕一人ばかりではなかつたらうと思ふ。同じやうにして郷里を出た者はみなさうだつたらうと思ふ。

けれど、都會人の中に立ち混り、人並の生活をして行く上に何より大事な處世術、世間學、人間操縱術をまるで知らず、その上教育はなく、手職を持たない百姓が、あの東京へ入つて行つて何が出來るか。結局は百姓をしてゐた間に得た唯一の技能——筋肉勞働に依る生活に入つてしまふのだ。郷里の村を出た十四五人の男のうち、四五人の成り行きをその

後人づてに知つたが、時計屋の番頭に住み込んだのが最もよく、あとは、メリヤス工場の職工、千住構内の貨物機關車の火夫、撒水夫、洋食屋の出前持ち、さういふ風であつた。他の者も押して知るべしである。みんなはいつの間にか立派な漂泊人になつてゐたのだ。錦を着て故郷へかへることなどは凡て夢となつた。

ところで、漂泊人といふものは、どういふ場合が來ても決して故郷へ歸らうとはしないものだ。これは漂泊人の悲しい本能だ。それでゐて、漂泊人ほど故郷を懷ひ、戀ひ、慕ふものはまたとあるまい。大ざつぱな言ひ方だが、陽が照るにつけ、風が吹くにつけ、雨が降るにつけ、一一故郷の照る陽、吹く風、降る雨を、意識無意識のうちに憶ひ出してゐるのだ。

小樽から天鹽の方へ渡つて行つた男もそれだつた。二人が出つくわしたのは正午頃だつた。その男の乘る船の出るまではまだ五時間あまりあつたので、二人はとあるめし屋で晝食を食べ、それから海岸通りを西の方へ當てもなく歩いて行き、手宮といふ所へ出て、そこから港を見下す丘の上の林の中へ入つて行つた。二人はそこで腰を下して話した。が凡て話は郷里のことばかりだつた。そこには落葉が一ぱい落ち重つてゐた。二人はそれを掻き集めて焚火をした。落葉の燒ける匂ひが漂ふ。二人はその火で、しみじみと煙草を吸つた。火が消えかゝると、どつちかしら立つて落葉を集めて來た。その時だつた。その男は兩手に一ぱい落葉を抱へて來たが、ふと「今頃、國では稻刈りだなア……」と言つた。そしてそのまゝボロ〳〵と涙をこぼし始めた。それを見て、といふよりそれを想つて、僕の胸にも熱いものがこみ上げて來た。

漂泊人のこのやうな故郷を懷ふ心の切なさは、漂泊人以外のものには決して解りやしない。君の今の放浪もそれは所謂ノスタルヂヤとでもいふのか、正直のところ僕から見れば、甘くつていゝ氣なものだ。このやうな僕達の涙を、頭では感じられても心臟では感じ得られやしない、と僕は言ひたい。

芭蕉は一生涯放浪し、そしてその悲痛な孤獨感を多くの句に托してゐる。だから僕はいつも芭蕉を耽讀してゐるのだ

が、今の僕たちから見れば、その芭蕉ですら贅澤極まる旅人としか思へない。芭蕉ですらあれほどの句を詠んだのだから、若し僕にさういふ才能を與へるならば、あの幾倍の深さの句を詠んで見せる、などと思ふことがある。托せば托せる所のあつた世の中に、この身を托すべき地はなしと自ら觀じ、さうして生涯を放浪した彼の心事と、托したくも托す所なく、また托さうとしても托すべき心を失つてしまつた吾々漂泊人の心事とを、一つ較べて貰ひたいものだ、と言ひたくもなる。だが、彼と我とを並べて比較するのがそも〳〵間違つてゐるのだ。所詮は、在來の文學藝術の關する所にあらず、と思つて見てゐれば、芭蕉の句も一つの慰めとはなるので、あゝして讀んでゐる譯だ。そこへ行くと、井月といふ男は、何もさううまくないし、最後は乞食のやうになり、田甫の畔の中に孤にくるまつて野たれ死んでゐたといふから、これは或ひは僕のやうな男かも知れない。何だか漂泊人持ち前のひがみが少し出て來たやうだが。

まアそれはそれでいゝ。僕も東京へ出たばかりは、これほどに漂白された心を持つてはゐなかつた。（身が漂泊することは、心が漂白されることだ）さつきも話したやうに身分相應の向上心も理想も持つてゐた。で僕は、實に苦心慘澹を重ね、檢定試驗で中學卒業の資格を得、その後或る私立大學の夜學部へ入學した。が、とてもやり切れず、一年しないうちそこを退學して、今度は職を得るに一番手つ取り早いと思はれた短期の電信學校へ入り、そして現在勤めてゐる郵便局での通信員の資格を取つた。この頃から僕には、學問をし教育を受けることが、偉い人間（社會的の）を造り、金を儲ける資本とは決してならないのだ、といふ考へが一方に生れて來た。いかに最高の學府を出、いかに頭腦が明晰でも、空手空腹では何物にもなり得ない世の中だ、といふ風に思はれて來た。學校教育を受けなくても駄目だが、受けても駄目だ。それなら何を苦しんで受けるのだ、と思ふやうになつた。

僕は子供の時からこの反對のことばかりを教へこまれて來ただけに、かう考へることは辛かつたが、それは如何することも出來なかつた。逆境に押し込まれた者のひがみ、ひねくれとも思つたが、さういふ頭でゐるせいか、一々が事實となり

實體となつて眼に映るので困つた。僕のやうに物心がつくとから、どうして喰つて行かうかといふことばかりに惱まされ脅やかされて來た人間に取つては、この事實――僕に取つては一つのこの發見は、なか〳〵の大きな力となつて僕の頭を支配した。田舍での百姓生活も成り立たず、都會へ來ての成功も覺束ないとなると、社會的の僕の前途には、光りらしいものが見えなくなつたやうな氣がした。

といつても當時はまだ、人間及び人間の生活、つまり本質的のものに對してまで絕望してはゐなかつたが、それから三年ほどするうちに、僕の頭もいつか虛無的な暗影に囚はれてゐたのだ。

四

僕は、電信學校を出ると直ぐ、大阪の海に近い街の郵便局に勤め口があり、そこへ行つて勤めてゐたが、上役の者とある事から激論し、そこを出されてしまつた。それから神戶へ移り、ある大きな貿易商店へ勤めた。が、そこも半年ほどで、今度は北九州まで渡り、ある船着き場の荷上げ人夫となり、ある停車場の貨物人夫となり、ある役所の門衞となり、さうして三つの町を轉々した。この間によく僕は、あの海の底を堀り拔いてゐるといふ炭坑の中へ入らずに濟んだと思ふ。兎に角さうして四年目に再び東京へ戾つて來た頃には僕は立派な漂泊人になり切つてゐた。それから凡そ七八ヶ月深川の方に暮してゐたが、この間の生活は全くお話にならない。つひに僕は思ひ切つて、この北海道を過ぎ樺太の大泊まで渡つて行つた。

この時のことだ。颱風期に入る頃で、船が稚內の港を離れる時から海は荒れ模樣だつたが、夜に入り、大泊の街の灯が見え出した頃には、船は怒濤の中に木の葉のやうに飜弄されてゐた。灰色の濤が、怪物の手のやうになつて甲板に乘り上り、飛び越えて、思ふさま船をゆすぶる。僕は船室の階段の所から首を出してそれを見てゐたが、いきなり、

「馬鹿、さらはれても知らんぞ！」と呶鳴られた。でも僕は便所へ行きたかつたので、そのまゝ甲板へ出て便所へ入ると、船員が來て外からぴしんと鍵を掛けてしまつた。僕は中から力一ぱい戸を叩きながら叫んだ。と、また船員が來て、外から、

「こゝを開けたら船が危險だ、そこでぢつとしとれ！」と呶鳴つて行つてしまつた。それから一晩一日、翌る日の夕方まで僕はその便所へ押し込まれたまゝでゐたのだ。後で知つたが、船が港へ近づければまた〱危險なので、その一晩一日、暴風雨の止むまで、港の外を何十廻となく廻航しつゞけてゐたのだといふ。

僕は便所の汚ない所へべつたりと坐り、死を覺悟した。翌日の夕方、船が港へ着いてやつと戸が開いた時、僕はそこで殆んど昏倒しかけてゐた。死ななかつたのが不思議だ、と今でも思ふ。

港へ上つた時にはまた灯がついてゐた。僕は人々の後から街の方へ歩いて行つたが、大地が上下に波打ち、ぐる〱廻り、半丁と歩かないうちに道端へ倒れてしまつた。それを無理に起き上り歩き出したが、また倒れてしまつた。彈丸に打たれたものが無意識に歩いてゐるやうなものであつた。これから僕はどういふ風に歩いたか、夜中に氣がついて見ると、港の材木置場の材木の中に入つて寢てゐた。腰から下が氷のやうになり感觸を失つてゐた。脚を動かさうとしたが動かなかつた。僕はその脚を撫でながら、こん度こそ、このまゝ死んで行くのだらうと思つた。所々を流浪して町の場末などに出ると、墓場があり、そこに「姓名不詳、年齡不詳」と記された行路病死者の碑を見ることがあつた。そしてその度に、かういふ人こそほんとうに救はれざる漂泊人だと思つたことがあつたが、今茲で自分が死ねば、同じくさういふ墓を立てられて、この北國の土に埋められるばかりだと思ふと、實際僕は眼も開いてゐられないほどだつた。

これからこの地で僕はどうなつたか、それは後で話すとして、この時から僕の頭は一種の虛無的な暗影に包まれたやうな氣がする。（今もさうだとは言はない）そしてそれが、僕の知らぬ間に絕へず僕の行爲を支配して、つひにあの女――時

子をもあゝいふ悲劇の中へ陥らしめてしまひ、自分自身をもあんな風に狂はしてしまつたのだ、といふ氣がする。

五

時子を知つたのは、これより三月ほど前、小樽市の東の方の場末、下宿兼商人宿の二階に寝起きしてゐた時のことだ。彼女はこの宿の女中だつたのだ。顔と髪だけはいつも綺麗にしてゐる女で、安つぽい金歯をむしろ汚ないほど入れ、場末のカフエーの女給か、料理屋の女中、そんなものの上りのやうな感じの女だつた。言葉は東京辯であつた。

彼女は、朝起きて井戸端で顔を洗ふと、朝陽のさして來る所へ行つて、からだに朝の陽を一ぱい浴びながら、太陽に向ひしばらく合掌する習慣があつた。このことが僕の心を惹いた。僕の祖母が死ぬまでそれをやつてゐたので、さういふ聯想があつたからでもあつたが、それがなくても、さういふことをしてゐる時子を見ると、僕は譯もなく好きになつた。何かしら僕のやうな漂泊者の心に觸れるものがあるやうに感じたのであつた。

この頃僕は港で仲勞働の仕事にありつき、僅かの賃銀を取つてゐたが、ある夕方、いつもより早く仕事を切り上げて宿へかへり、風呂へ入り夕飯を食べるとぶらりと外へ出た。七月始めで陽氣はよく、僕はふと、例のカラン〳〵と鈴を鳴らして走る馬車に乘つて見たくなり、それに乘つて、街から十丁あまり南の、山ふところにある遊廓の方を廻つて歸つて來た。いつになく靜かな氣持で海岸通りを歩いて來ると、女が一人向うから急ぎ足でこつちへ來る。近づいたのを見ると時子で、彼女は泣きながら下を向いてぐん〳〵と歩いて來る。すれ違つても僕を知らない。

「おい、おときさん」と僕は聲をかけた。彼女はびつくりしたやうに振り向いたが、またそのまゝぐん〳〵歩いて行く。

かういふ場合普通人の感情だと、追ひすがつて、どうしたのだと、しんみりとなる所だが、僕のやうに永い間漂泊し、外部のどういふものに對しても積極的に心を働かさうとしなかつた者には、それが本能的にまでなり、自分でも不思議なほ

ど冷淡になる。その夜もそれで僕は自分の部屋へかへつて寝てしまつた。
次の夜であつた。夕食を運んで來た時子に向つて、輕い氣持で、
「ゆうべはどうしたんだ？」と訊いて見た。
「……えゝ」と彼女は顏を伏せた。
「何か辛いことがあるなら、相談に乘るぜ」といふと、彼女は一寸默つてから、
「どうせ眞面目に聞いて貰へやしないもの、言ふだけ損だわ」と、いつにも似ず怒つたやうにいふ。
「ぢや、眞面目に聞かう」
そこで彼女の話したことに依ると、彼女はゆふべ死なうと思ひ――かういふ女の常套的な言ひ方だと思つた――海の方へ行くと、後から茂吉さんが追ひかけて來て引戻され、ぶたれたり蹴られたり、殺されるやうな目に會はされた、といふのだつた。
「こんなに」と彼女は、左の耳の上の紫色に腫れ上つたのを、髮を掻き上げて見せた。
茂吉さんといふのは、宿の主人の弟だと言ひ、三十五六のいかにも意地〳〵した顏の、からだの小さな男であつた。港の石炭問屋へつとめ、一晩置きに宿へ歸つて來た。その男がどうして彼女をさういふ目にあはせたか、それは訊かずにも解るやうな氣がしたが、
「あの男にいぢめられる譯があるんだらう？」と訊いて見ると、彼女は頭をこゞめながらうしろを向き、顏にエプロンを當てて部屋を出てしまつた。
一日置いた次の夜の夕食の時――その夜も茂吉は店の方へ泊る夜で――時子は尻を落ちつけて、つゞきの話となり、
「あゝいふ男の自由になつたのが間違ひなんだ、お前さんが馬鹿なんだ」と言つてやると、彼女はむきになつてそれを打

ち消し、
「そんなことぢやないんです。あの人は私を函館の女郎屋へ賣らうとしたんです。あんまり人を馬鹿にしてゐるから……
……」
「さういふ事か。だがそんなら餘計變ぢやないか。赤の他人が人のからだを賣らうとするなんて、おまけに打つたり蹴つたりするなんて………正直なことを言へよ、何を言つても驚きやしない」
「私、ほんとに何んでもないんですわ。只あの人は私を喰ひ物にしようとしてゐるのです。土方あがりで、人を一人や二人殺すことを何とも思つてない人なんですもの」
「ぢやこの家を出てしまへばいゝのだらう。何だつてグヅ／＼してゐるんだ」
「だつて行く所がないもの」
「俺が連れて出してやらうか」
「ほんとに連れ出して下さる？」
「何處へでもついて來るかえ？」
「えゝ、えゝ」
　これが原因となり、次の夜遲く階下で、茂吉の聲で罵る聲、物を投げつける音、時子の泣き叫ぶ聲がするので、下りて行つて見ると、時子は髮をぐしや／＼に振り亂し、土間の隅に打ち倒れてゐた。それを見たのが最後の動機となり、それだけで僕はつひにその翌日の夜、茂吉の留守を幸ひ、時子を連れ出してしまつたのだ。
　連れ出したのはこの札幌である。公園の横手の或るしもたやの家の一間を借り、僕は始めて女との世帶を持つたのだ。仕事は、今はないが當時かなり勢力を張つてゐた××心靈術本部といふ所の宣傳係兼小使の職にありつき、辛うじて二

人が食へるだけの日給を貰ふことになつた。夜具や世帶道具は時子が持つてゐた金で求めた。

連れ出した原因動機でも解る通り、僕は時子を心から愛してさういふ生活に入つたのではなかつた。時子の方も、溺れる者藁でも掴むといふ氣持だけで、さうして僕に身を托したに過ぎなかつたのだ。詳しくは知らなかつたが、時子は横濱に生れ、東京で育ち、それから轉々として幾つかの町を何の身寄りもなく移り歩いて來てゐるので、かういふことは平氣らしかつた。永い間漂泊生活をしてゐると、變化を變化と思はなくなる。しかも今度の變化は僕に取つては重大な變化であつたが、當時僕はそれほどには感じなかつたのだ。兎に角二人は始めての世帶生活で、第一に肉體的にぴつたりした生活をしてゐたので、僕は今までになく落ちついた氣持になつた。

僕は仕事の暇をぬすんで、或ひは使ひ走りの序でに、よくこの郊外を歩いた。丸山公園の方へもよく行つた。時には月寒まで出かけて行つた。ポプラの並木、林檎畑、玉蜀黍畑、限りなくつゞく燕麥の畑、さういふ中を歩いてゐると僕は地べたへ腹ばりたいやうな氣持になることがあつた。元の百姓生活が犇々と全身に感じて來るのだ。大海の中を幾日も幾日も航海しつゞけて來た者が上陸すると、大地に接吻したくなるといふその氣持であつた。

僕は林檎畑を借り、やがては北海道の百姓になることを空想した。が、郷里での曾ての百姓生活を思ひ返すと、その空想はすぐに空ろな淋しい影に包まれて來た。で、僕は空想することを止した。

時子は、朝、食事を濟すと、食ひ放しでその場にごろりと寢ころぶやうな生活を始めた。することいふことに何の情味もなかつた。そして金さへ持てば、それで身につけるものを買ふこと、食物店へ入ること、活動を見ることなどばかりをしようとした。勿論それ等の一つも碌に滿足し得なかつたが、頭の中はいつもそれ等の滿足を考へることばかりだつた。

これは、僕の生き方とはまるで逆であつた。同じやうな漂泊人でありながら、僕のやうに、米を造り麥を造り、豚を飼ひ樹木を育てゝ、それをしなければ人間は生きて行けないものだ、といふ風にして育て上げられ來た人間には、それが本

能ときまでたつてゐるだけに、さういふ時子を眼の前に見ると、その本能が承知しなかつた。生活の材料を積み上げることばかりを考へて育つて來た人間の本能と、これを切り崩すことだけしか考へることの出來ない人間の本能とが、毎日の生活態度の上で衝突した。（僕はこの本能のために、現在はます／＼、さういふ人間の存在、さういふ人間のための世の中の道具立てが、實に恐ろしいものとして眼に映つて來る）

僕はよく口汚なく時子を罵つた。そして寢そべつてゐる時子の横腹を蹴飛ばしたりした。時子は白い眼でこちらを睨めて、ぷすんとしてゐた。僕は掴み所のない憎惡を感じた。

六

しかしかういふ生活本能の相違が、直ちに二人の生活を破壊する動機とはならなかつた。時子のさういふ本能も、時子自身の罪でもなく、また時子の知つたことでもないからだ。またこれがぢかに時子の人間の良し惡しを定めるものではないからだ。この點で、神は人間を面白く造つて置く。

二人の生活を破壊した動機は外にあつた。この札幌へ來てから三月ほどたつた或る夜であつた。仕事から歸り着物を着かへようとすると、時子はうしろから寢卷を着せかけながら、僕の耳元へ

「私ね、姙娠したらしいのよ」と言つた。

僕は默つてゐた。そして胸の中で、來たな、と思つた。といふのは、僕は時子と同棲した當初から、今この生活で二人の間に子供が生れては堪らぬと思ひ、子供のできない方法を取つてゐたのだ。時子はそれを非常に嫌がつてゐたが僕は承知しなかつた。と一ト月ほど前から時子のからだは變つて來た。僕にもそれがはつきり解つた。僕は憎惡の眼を以てそれを睨んでゐた。そしてぢり／＼しながら時子からそれを言ひ出すのを待つてゐたのだ。

僕は食卓の前へ坐りながら、ぎろりと時子を見詰めて、
「それこそ、俺の知つたことぢやあないよ」と言つた。
「まア……」と時子は言つたが、それきり眼を伏せてしまつた。僕は默つて飯を食べ終つた。その間中時子は顔を伏せてゐるので、泣いてゐるのかと思つてゐたが、やがて頭をあげてこつちを見たその顔は、急に人相が變つたのかと思はれるほどの冷酷な色になつてゐた。白い眼をして眼尻を引き釣らせてゐた。時子はショールを首に卷きつけると、そのまま台所口から外へ出てしまつた

この場合若し時子が、涙を流して凡てを告白すれば、僕はそれを許し時子の姙娠に就ても責任を持つ氣になつたかも知れぬ。後でその姙娠はやつぱり僕のでないことが解つたが、その時は半信半疑でゐたのだから。また僕自身から言へば、さういふ時子を柔かく大きく包むやうにして、凡てを告白させるやうにすればいゝのだが、それは僕に殆んど出來ない仕事だつた。僕にしても時子にしても、半生を漂泊生活に送つた人間は、何か危險の尖端にぶつかると、それを圓滿に繼ぎ合せようとは努力できず、その前に兩者はぱんと二つに離れて一人一人の姿に立ちかへつてしまふのだ。これは漂泊人の第二の本能ともいふべきもので、一方から言へば漂泊人の最も大事な安全瓣なのだ。この點で眞の漂泊人は、いゝ意味でも惡い意味でも眞のエゴイストだ。

一人寢てゐると、夜更けてから時子は歸つて來た。一組しかない布團だが、時子はそれへ入つて寢ようとせず、座布團や着物を寄せ集めて、僕の足元の方へ寢たやうであつた。

それから一日置いた日の夕方、僕は仕事先の心靈術本部で部屋の後片つけをしてゐると、飯炊きの老婆が來て、爭ひたい人が來てゐるといふ。出て行つて見ると、門の柳の木の下に印絆纏に靴をはいた一人の男が立つてゐた。近づいて見ると、小樽の宿の茂吉だつたのである。

僕は先づ、はゝんと思つた。それから驚いた。僅か二日の間に事が茲まで運ぶとは全く思ひ及ばなかつたからである。

「君の用件は大てい解つた。すぐ歸るから時子の所へ行つてゐてくれ給へ」と僕は先手に出て行つた。
「君に解るやうな用件で來たんぢやない。逃げを張らずに一緒に出て貰えてえ」と茂吉は小さな顔に意地惡い笑みを浮べた。

やがて二人は、例の狸小路の小料理屋の二階で、小卓を狹んで差し向つた。茂吉は始めの二本を一人で立て續けに飲んでから、
「よく言つて置くが、俺は自分がすき好んでこんな所まで出張つて來たんぢやないよ。おときが一生のお願ひだからと賴んで來たんで、まアやつて來てやつたんだ。そこをかん違えねえで貰えてえ」
「そんなことアどうでもいゝ」
「それぢや事ア早い方がいゝ。外の話ぢやねえが、又何を言はねえで百兩ばかり茲へ出して貰えてえ」
貰えてえがこの男の癖らしい。このすかんぴんを相手に何かの芝居のゆすりの場を地で行つて見ようといふつもりなのか、何だか一寸可笑しかつたが、僕は茂吉の眼を眺めながら、
「俺にそんな金を出す譯がない」と言つてやつた。すると茂吉は、ヘツへと鼻で笑つて、「しやも（アイヌ語の旦那）しつかりしろえ」と顎をしやくつた。「てめえは何のつもりであの女を引つ張り出したんだえ。そいつを言つて見ろ」
「…………」
「女一人を救つてやるなどと、神様にでもなつたつもりでかえ。そいつア當節はやりのセンチメンタル何とかてえんだらうが、北海道ぢやそんなものア通用しねえよ。おい、そんなものア茲ぢや通用しねえよ。……おい！　面をもつとこつちへ出せ！」
茂吉は延び上つてぢり〳〵と僕の方へ寄つて來たが、いきなり眼の前の德利を取るや、この腦天へパーンと來た。酒と德利の破片があたりに散らばつた。僕は立ち上つた。額からぬるまつこいものが流れて來た。かつとなつた僕は茂吉へ組

みついて行かうとした。と見ると、茂吉の右手には冷たく光るものがあつた。

それからのことは言ひたくない。兎に角それ以上の怪我をせずに濟み、その夜僕は勿論家へは歸らず、遊廓へ寢てしまつた。若し僕が幾分でも時子に愛着を感じてゐたなら、この場合これでは決して濟まなかつたに違ひない。妙たものが自分を救つたものだ、と自分は苦笑せずにはゐられなかつた。

翌る日一日遊廓にゐつゞけして、夜になつてから家へ歸つて見た。果して時子はゐなくなつてゐた。家主の主婦が出て來て、息を彈ませながら、これ／＼だと、茂吉が時子を連れ出して行つたいきさつを話したが、僕は只、

「御心配をかけて濟みません」とだけ答へたきりであつた。

それから三日の後には、僕は樺太へ渡つてゐたのである。この家を發つ時、旅費の足しにと思ひ、僅かばかりの家具や夜具を家主の主婦に買つて貰つたところ、主婦は涙を流さぬばかりに僕に同情し、こつちが賴んだ値段の倍に買つてくれた。それで樺太へ渡ることも出來たのであつた。樺太を目指したのは、小樽から天鹽の方へ渡つて行つた郷里の男が、當時大泊に働いてゐることを手紙で知つてゐたからであつた。しかし行つて見るとその男は行衛知れずになつてゐた。

樺太へ渡る途中の船の中での遭難、上陸してから海岸の材木置場で野宿した時の氣持は既に話した通りだが、その時から僕の頭は虛無的な暗影に包まれた、と言つたことが、今の話でもつとはつきり解つて貰へると思ふ。

これから僕はやつぱりこの海岸で材木を積み出す人足となり、その年一ぱいを暮し、更らに北へ進み、鐵道の終點からも少し先のオホーツク海に面した內淵（ナイブチ）まで行き、蟹の罐詰工場へ入り、翌年の五月末までそこに働いてゐたが、この間中僕はこの暗影につき纏はれ、幾度か死の影に誘惑されたか知れなかつた。山奥に住む老夫婦が幾月かに渡る雪で食糧を絕たれ、つひに餓死した。後で行つて見ると、二人の死骸の傍に燒鹽の塊があり、それを甞めた跡があつた、といふ話を生きようとするものの最も悲慘な話として曾つて聞いたことがあつたが、僕はこの話を何故かしよつちう思ひ出してゐたのである。僕は一方で死の影に誘惑されながらも他方の動物的の本能で、最後までどんなにしてでも生きようとしてゐたに

違ひないのである。僕はもう自殺することも出來なくなつてゐたのだ。只自分でも知らぬ間に、つまり不意に魔がさして、あつと思ふ間に自分を殺しやしないか、といふ變な恐怖心には實に度々襲はれた。そしてその度に僕は全身でぞつとした。さうしてこの脅迫觀念と鬪ふ力も弱つて來た頃、僕の頭は少し調子が狂つて來たやうに思ふ。はつきりは覺えてゐないが、鑵詰の工場を出された理由はそれだつたに違ひない。そしてその後僕の頭がほんとうに狂つたのも、この時からきざしてゐたのかも知れない。

僕は亡者のやうな姿で再びこの札幌へ歸つて來た。實は人から、網走で築港工事が始まり、馬鹿にいゝ賃銀が取れると聞かされたので、そこへ稼ぎに行くつもりだつたのだが、途中汽車の中で、築港工事につきものの監獄部屋の話を人から聞き、慄然として思ひ止つたのだつた。さうしてこの地へ來は來たが、元より他に知人はなし、自分では不愉快だつたが、この前畤子と世帶を持つた家の主婦の親切を思ひ出し、そこへ行つてまた世話になることにした。そして仕事も元の心靈術本部へ行つて賴み、前と同じやうに勤めさせて貰ふことにした。時は六月始めで、この郊外の新綠は素敵だつた。關東逖の晩春は實に惱ましいものだが、北海道のこの季節には何處か淸澄な氣が流れ、すつきりとした暖かさが溢れて、僕の頭もどうやら健康にかへつたやうに思はれた。

と、これから一ト月した後のこと。

七

夕方仕事から歸つて來ると、途中で宿の主婦に出會つた。主婦は、

「丁度よかつた。あなたに家へ歸つて來られるとね、工合の惡いとが持ち上つたので、その話に來たところですよ」と言ふ。

「何が持ち上つたんです？」

「まアね、あのおときさんがひよつこり歸つて來たんですよ」

それを聞くと、僕は何故かからだ中が寒くなつた。

「あれからずつとあなたが家にゐるつもりで、それで元の家へ戻つて來たつもりらしいんですよ。そりや全く現在あなたは家にゐますけどもねえ………うまくかち合つたものですねえ」

「…………」

「それでね、あの人は何でもあの小樽の男に棄てられてしまつたらしいんですよ。それからおなかの子供も遂に産んでね、人に呉れちまつたらしい。あれからまだ九ケ月ばかりしかならないんだから、あの子はやつぱりあなたのぢやなかつたんですね」

「…………」

「それで、あなたはどうしますね？そりやみすぼらしいなりで、ほんとに氣の毒は氣の毒なんですよ」

「僕は御免だ。絶對に御免だ。思つただけでも胸がむかむかして來る。濟まないがそのまゝ追ひかへしてくれませんか」

「でも行く所はありやしませんよ」

「そんなことこつちの知つたことぢやないです。あの女が出て行つてしまはないうちは、僕は家へは歸りません」と僕は言ひ切つて、通りへ立ち止つてしまつた。それから主婦はまだ何かを言つたが、結局時子を追ひかへすことにして先に歸つた。僕は活動へ入つたりして夜を更かして部屋へ歸ると、心配したほどでもなく時子は素直に出て行つた、といふことだつた。

それから一二週間、また時子が戻つて來やしないかと憂欝な氣持でゐたが、それもなく、さうしてまた三月ほど經つた。するとある夜主婦が僕の部屋へ來て、複雜した表情を浮べながらから話した。

「あのおときさんのことですがね、實はあの時、あんまり可哀相だからね、私が保證してやつて西九丁目のある大きな下駄屋さんの女中にお世話して上げたんですよ。するとどうでせう、ゆうべ、夜逃げをしちまつたんですつて。何でも毎朝來た牛乳配達と仲がよかつたさうで、今朝から、その配達も來なくなつたといふから、他分それと一緒だらうといふんです

よ。やつぱりやくざ女は駄目なもんですねえ。」

僕はこの話を赤の他人の出來事のやうにして聞いてゐられた。

さてそれからまる一年した翌年の十月のこと、この時子がもう一度僕の世界へ飛び込んで來たのだ。そしてそれが時子の最後となつた。

當時僕は親切な主婦の家を出て、心靈術本部の下男部屋へ寢泊りをしてゐたが、ある夜主婦が慌しく訪ねて來て、「木川さん聞いて下さい」と眼を見張つて言ひ出した。「またおときさんが來たんですよ。今度は赤ん坊をおぶつて來たんですよ。まるで呆けたやうになつてね。でも今度は先と譯が違ふんですから、一つしんみになつて聞いて下さいよ」

もう一年經つてゐるし、さう言はれても僕はこの前のやうにからだが寒くなるやうなことはなかつたが、しかし決していゝ氣持ではなかつた。

「それはね、おとつひのことですよ。この前奉公をしてゐたあの下駄屋さんの所へね、ひよつこり入つて來ると、いきなり泣き出しちやつたんですつて。そしてどんな事でもするから置いて下さいといふんですつて。下駄屋さんでも、赤ん坊を連れた女中は使へない、といふんで、まあ私の所へ廻してよこしたんですよ。子をおぶつて大きな風呂敷包みを抱へ、傘を持つて、ぼう〳〵髮で入つて來たのを見た時、私にも誰だか解らなかつた。よく見るとおときさんでせう。私、びつくりしてねえ。それからまあ家へ上げて、いろ〳〵譯を訊いて見たんですが、あのこは何一つ言はないんですよ。私も少し腹が立つて來たから默つてゐたんです。するとあのこは私の顏をこわ〳〵見上げて、木川さんは私に會つては下さらないでせうね、つて言ふと、私の前へばたりと突つ伏してワアーツと泣き出してしまつた。これを見ると私もまた急に可哀相になつてねえ！……やつぱりあのこはあなたを一番頼りにしてゐるんですよ！」

主婦はこれを僕の心をゆすぶるやうに言つた。が僕は、むしろ反抗的に、煙草をふかしながら平然としてゐた。

「でもねえ、あなたがあのこをどう思つてゐるか私はよく知つてゐるし、第一、誰の子か知れないやうな赤ん坊を連れ

てゐちや話にも何んにもならないからね、まア私の一存で何とか處分をつけてやらうと思つてね、昨日は一日心當りの家を探してやつたんですよ。でも、赤ん坊がついてゐるといふんで何處でも駄目。それを聞くとあのこはまた、この子さへゐなければ、この子さへゐなければ、と口惜し泣きに泣きながら、今にも赤ん坊をひねり潰しでもしかねないやうな有様でせう。ゆふべなんぞもあのこは、間違つたやうにして乳房でゝも赤ん坊の息の根を止めやしないかと、私は氣が氣でなかつた。よくあることですからねえ」

この邊から主婦の語調はだんだんと沈み、初老の女によくある愚痴のこもつた感傷的な調子となつた。

「すると、今日になつてね、あのこは人が變つたやうになり、赤ん坊を抱いて座敷の隅でしく／＼泣いてばかりゐるのですよ。私も見かねて、まア腫れものにさわるやうにしていろ／＼話したり聞いたりしますとね。あのこはポロ／＼涙を流しながら身の上を話したんですよ。これを聞いてゐるうちに私はすつかりあのこの身方になつてしまつたのですよ。ひどい身の上ですものねえ。あれぢや誰だつてあゝなりますよ。あのこは生みの親をまるで知らないんですからね。そして育ての親がまたとても惡いんです。それから世の中の男が惡いんですよ。あのこに罪は一つだつてありませんよ。私にだつて覺えがないこともないですが、惡い男にかかつたら、女なんてほんとにどうすることも出來ないもんですからね。みんなが寄つてたかつて、あのこをあんなにしてしまつたんですよ」

この話を聞いてゐるうちに僕は、この主婦の背後に當の時子が坐つてゐるやうな氣がして來た。そして僕の氣持はもう反抗的に平然とすることもなく、その場にぴつたりとして來た。僕は、時子に向つて言ひかけるやうにかう言つた。

「みんなが寄つてたかつてあゝしたのでもあらうが、あの女から言へば男の見さかひなしに身を任せるのが馬鹿なのです」

「だつてそりや無理な話ですよ。この世の中に自分をしんから可愛がつてくれる人が一人もないと解ると、女は誰だつてあゝなりますよ。女に罪があるもんですか。男が食ふに困ればどんな仕事にでも手を出すと同じですよ」

僕はこれにはまゐつた。そして默つてしまつた。

「とにかくあのこは、今はもうどうして生きて行つたらいゝのかさつぱり解らなくなつてしまつたのですよ。目茶苦茶なんですよ。あのまゝで置いといたら、いつどうなるか、いつ何をするか解りやしません。それを思ふと私はぢつとしてゐられなくなつたんですよ。今あのこを助けてやれるのはあなたしかないんですからね、今度は何にも言はないで引き取つてやつて下さい」

「さう聞かされると、僕も何んにも言へなくなります。おばさんの話は一一もつともなのですから。けれど今度は僕といふ人間のことですが、おばさんも大ていは御察しの通り、僕ももう十年近く流浪生活をして來て、今はあの女と少しも變らない人間になつてゐるのです。やつぱりどうして生きていゝか見當を見失つてゐる人間なんです。樺太へ渡る前、あの女を小樽から連れ出した時分はまだ何かに見當をつけてゐましたが、あゝして樺太へ行つてからはまるで暗闇の中を手探りで歩いてゐるやうになつてしまつたのですから。樺太へ渡つてゐた間中も、そんなことから頭が少し變になり、そして何度も〳〵死神に引きずり込まれさうになつたのです。僕も今は溺れかけてゐる人間なんです。食ふことだけはどうやら食つてゐますが、僕の心は餓死しようとしてゐる有様なんです。その僕があの女を救はうといふのは、溺れる者が溺れる者を救はうとし、餓死しかけてゐる者が餓死しかけてゐる者を救はうといふのと同じで、全く出來ない相談です。それを無理に救はうとすれば、二人は二人の溺死を、二人の餓死を早めるだけです。それが解つてゐてさうするのは無茶です。しかしこの僕が、あの女を心から可愛いゝと思へば、話はまた別になります。こんなになつた僕でも、何とでもしてあの女を救はうといふ氣になります。けれどこの一番大事なものが僕にはまるでないのですから、仕様がないのです。僕も永い間の食ふや食はずの漂泊生活で、人を愛するなんといふ心を何處かへ落して來てしまつたのですよ。ほんとうを言つて、僕はあの女と三月あまり一緒に暮す間に一度だつて愛情らしい愛情を感じたことはなかつたのですから。あの女も——

——あの女は、もつとひどいものです。女らしい愛情なんといふものは、生れる時からなかつたやうな氣がしました。今、おばさんからあの女の身の上を聞いて、なるほどとうなづかれましたが、男の僕ですらかうなるのですから、女があゝなつ

たのは無理もないことではあります。とにかくさういふ女と、かういふ男とが一緒になつてどうなるか、それは今から解り切つてゐます。せめて片方だけなら、片方の深い暖かい愛情で暖めて、その冷え切つた胸を暖め生かすことも出來るでせうが、冷え切つた同志が一緒になつて熱が出て來よう筈がありません。どつちもぼろ〳〵に冷え切つてゐるのですから……」

「それは言葉で實際は、人間てそんなものぢやありませんよ。生きてゐる以上はねえ」

「僕なぞは、生きてゐるとは言へませんもの」

「それほどあなたは、何もかも見切つてゐるのですか?」

「……さう言はれては言葉がありませんが。しかし僕にもあの女をあゝまでしたことに一部の責任がありますから、出來ることなら、おばさんの言ふ通りになり、あの女も救ひ、自分も救はれたいのは山々です。ですが、どう考へて見てもさうすることは出來ません。冷酷な仕打かも知れませんが、この事をあの女にはつきり言つて貰ひたいです。そして蟲がいゝ話かも知れませんが、あの女は、僕のやうな流浪人でない、全く違つた境遇にゐる人、おばさんのやうな人に救つて貰ふより仕方がないのです。濟みませんが、何卒おばさんの手で何とか世話をしてやつて下さいませんか。さうして一人でも救つて貰へれば、僕達流浪人の世界がそれだけ明るくなつた譯ですから」

「でも、私にどうにかなることなら、あなたの所へ持つて來やしませんよ。この前のやうに女中に世話しても、すぐあんなことになつてしまふし、たとへ私の娘として私の家に置いといたつて、ぢきに誰かしら引つ張り出してしまふに違ひないし、世の中の男は、あのこを何かの道具か何ぞのやうに見てしまふんですからね。ですから一番いゝ方法は、あのこを妻として明け暮れ傍に守つてゐてくれるやうな男に頼むことなんですよ。それがあなたに出來ないとなれば、もうどうしやうもないんです。私に出來るだけのお世話はして見るつもりですが……でもねえ、あなたはあのこをそんな風に思つてゐても、あのこの方ぢや内心で、あなたをどんなに頼りにしてゐるか知れないんですよ。さつき茲へ來る時も、おばさん、頼みます、と言つてボロ〳〵泣いてゐましたものね」

「それぢや、僕からもあの女へ手紙を書きませう。そしておばさんからもよく納得の行くやうに言つて下さい」さう言つて、僕は半紙を取り出し、筆で大きくかう書いた。

「お前のやうな流浪人が、俺のやうな漂泊人に救ひを求めることは全く見當違ひだ。全く出來ない相談だ。お前を救ひ得るものは、お前や俺とは全然違つた世界に住む人だ。だが考へて見ると、この世にこのやうに漂泊人がある以上、またこの世がこのやうに漂泊人を造つて置き放してある以上、漂泊人は永久にこの漂泊人の仲間から脱け出すことは出來ない。これは今までの俺自身の經驗から解りすぎるほど解つてゐる。お前自身のこれ迄の成り來りを考へて見てもよく解るだろう。この仲間から脱けきれずに、俺達のやうに漂白しつくされた人間が、常人の世界に入つた所で、常人はそれをどうすることも出來ない。結局、このやうな漂泊人は自分で自分を救はない以上、誰からも救はれる時がないのだ。もう最後の手段だ。お前は自分で自分を救へ。俺は自分で自分を救ふ。これが出來なければ凡ておしまひだ……」

書いてゐるうちに僕ははつと思ひ、讀み返して見て自分で驚いた。こんな文句を時子に言ひ送つても解りやしない。若し解れば殘酷すぎる言ひ方だ。何のつもりでこんな事を書いたのだらう？ さういふ自分を不愉快に思ひながら、僕はその半紙を引き破つて圓めてしまつた。そして、

「やつぱりおかみさんから、穩やかにうまく言つて貰ふより外はありません」と言つた。

八

この翌々日、僕はこの札幌を引き上げて一人、小樽からずつと西の海岸、美國といふ所へ來てしまつたのだ。心靈術の飯炊き老婆が——息子の一人がこの美國で、可なり手廣く林檎畑を經營してゐる。今丁度林檎の取り入れ時で、お前ほどの男なら何人行つてもおいそれと使つてくれる、と話したからであつた。これは僕の百姓本能から、殊にこの頃、この土についた生活に入ることを、乾くものが水を求めるやうに求めてゐたので、もう前後の考へもなく來る氣になつてしまつたのだ。

さう言つて實は時子から逃げたのだらうと人は思ふかも知れぬが、僕はさういふことは意識的には少しも考へてゐなかつた。事實考へる必要もなかつたのだ。しかし只漠然と、だんだんと暗くなつて來た周圍の闇から脫け出さうといふ本能が、無意識のうちに働いてゐたとは思ふ。（漂泊人が動き出す內的の動機は大ていこれだ）それだけのことだ。

美國は、余市の驛で下車し、そこから陸路六里ほどあつたが、折よく便船があつたのでそれに乘つた。海岸には、ぎざ／＼に削られた岩石が屹立して並んでゐた。それへ、北海の十月の眞黑な潮がぶつかつて白く碎けてゐた。それは實に荒れ痩せた、何かの殘骸を思はせるやうな風景であつた。壯大といふ感じよりは痛々しい感じであつた。かう感ずるのが既に、流浪に疲れ衰へた自分を證明してゐるやうにも思はれ、何にしても今の自分には餘り不適當な場所へ來たと後悔した。

僕は島流しに會つたやうな氣持で、その美國といふ小さな町へ上陸した。そして目指す家を訪ねて見ると、案外にも見すぼらしい世帶で、林檎畑も僅か一反歩ほどしかなく、夫婦と二人の子供がやつと暮してゐるに過ぎない狀態だつた。けれどその主人は好人物で、さういふ僕をむげに斷らうとしなかつた。僕はそれをいゝ事にして「食はしていたゞけばそれで十分ですから、當分働かして下さい」と賴み込んだのである。

貝殼を伏せたやうな、平べつたいがら／＼した家がひつそりと並んだ町の端れ、そこの家の一間に第一夜を寢た時、僕は自分の墓へ來て寢たやうな氣がした。

所で、それから三日した朝のこと、僕は林檎畑へ出かけようとして野良着に着かへてゐると、その家の男の子が、「氣違ひが來る、氣違ひが來る」と叫びながら家の庭へ驅け込んで來た。僕は何の氣なし通りへ出て見た。その瞬間だ。僕はぎつくりして、一時自分を見失つてしまつた。その氣違ひは時子だつたのだ。

赤ん坊を背ひ、髮を藻のやうに振り亂し、素裸足を大きく跨ぎ、兩手を力一ぱい振り廻し、何かの動物の啼き聲のやうな奇怪な叫び聲を出しながら、時子はこつちへやつて來たのだ。それからのことは言ふに堪へない。（それは後で解つたことだが、この時背中の赤ん坊は死んでゐたのだ。それから更らに後で知つたことだが、その赤ん坊は時子の手に依つて絞

殺されたのであつた。朝のうちにこの町へ船が着くことはなかつたので、時子は夜通し六里の山道を余市の方から歩いて來たのに違ひなかつた。さうして闇の中を歩いてゐるうちに發狂し、同時に赤ん坊を殺したに違ひなかつた)

奇怪な叫び聲の中に「木川さん、木川さん」といふ言葉だけを僕ははつきりと聞いた。僕は耳を塞いでその場を無茶苦茶に走り出した。そしてどの位走つたか知らない。息が切れさうになつて倒れた所は、よく陽の當つてゐる山裾であつた。そこに僕は倒れたまゝでゐた。氣がついて見ると、あたりは暗くなつてゐた。僕はまた走り出した。その時はもう、狂つた時子そのものを恐れて走るといふよりは、何か自分を包み殺さうとする狂つた影――それは樺太からついて來たあの虚無的な暗影にも見え――それを恐れて走る氣持であつた。

さうしてまた何里の道を走つたか知らない。眞暗な山道で、樹木の間からすけて見える星空を見上げながら、そしてその方へ兩手を差し延べながら走つた。村へ出た。一軒、土間の半障子へ暖かさうに灯を映してゐるのが眼についた。僕はその前へずるりとのめりながら、力一ぱいの聲で、

「水をくれ、水をくれ!」と叫んだ。――それ迄のことしか覺えてゐない。

次の朝、余市の町端れを、兩手を高くあげ、空に向つて何かを呼びかけるやうにしながら、泳ぐやうに歩いてゐた男があつた。それが僕だつたといふ。

疲れた。これで止さう。幾日かの後僕は心靈術本部へ引き取られて恢復するまで世話になつた。その後そこでは、心靈術は斯くの如く狂人をも治療し得ると大きく廣告してゐた。時子は美國町の避病舎の座敷牢へ入れられ、そこでつひに死んでしまつたのだ。

今、かうしてそれ等凡てを振りかへつて見ると、青水の「木枯のはてはありけり海の音」といふ氣持になる。しかしこの「海の音」はいつ止むのだらう。僕は今、これにぢつと耳を傾けてゐる。そして何かを聞き取らうとしてゐる。

(完)

定價	送料
一冊 八十錢	參錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年一月十八日印刷

昭和三年二月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　高木鳥三

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區

中央公論社

電話丸ノ内二〇六番

振替東京三四番

同　長野三二〇五番

CHUO KORON (*The Central Review.*)
y THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Mon
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* in
postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail

